秋田県文化財調査報告書第230集

一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

―― 鴨子台遺跡・八幡台遺跡 ――

１９９２・11

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

―― 鴨子台（かものこだい）遺跡・八幡台（はちまんだい）遺跡 ――

１９９２・11

秋田県教育委員会

鴨子台遺跡出土ナイフ形石器

鴨子台遺跡出土掻器・錐器

鴨子台遺跡出土彫器

序

一般国道７号琴丘能代道路は秋田県沿岸北部を貫く基幹道路として計画され、秋田県教育委員会はその事業計画にそって昭和61年度から路線上の埋蔵文化財の事前発掘調査を実施してまいりました。調査は能代市側より開始され、既に平成２年度までの間に縄文時代、平安時代の遺跡など６遺跡の発掘調査が終了し、その成果は昭和62年度、平成元年度に２冊の報告書として刊行しております。

平成２年度に実施した発掘調査は、八竜町萱刈沢地区が主な対象区域となり、インターチェンジ部分にかかる２遺跡が調査されました。八幡台遺跡では縄文時代の陥穴２基が検出され、遺跡が縄文時代の狩猟の場であったことが判明致しました。また、鴨子台遺跡では八幡台遺跡と同様に縄文時代の陥穴が検出されたほか、旧石器時代の石器集中地点５箇所と、旧石器時代から縄文時代への移行期に特徴的な神子柴型石斧が出土し、東北日本の旧石器時代から縄文時代の初めにかけての貴重な資料として注目されています。

本書はこれら２遺跡の発掘調査成果をまとめたものでありますが、本書が今後の学術研究ならびに埋蔵文化財保護に役立つよう願ってやみません。

最後に本書を刊行するにあたり、調査から報告書作成に至るまでご便宜いただいた東北建設局能代工事事務所をはじめとする関係諸機関、各位に深く感謝の意を表する次第です。

平成４年11月１日

秋田県教育委員会

教育長　橋　本　顕　信

例　　言

1．本報告書は一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る鴨子台遺跡、八幡台遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は秋田県文化財調査報告書第167集『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』、および秋田県文化財調査報告書第178集『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』に続くものである。

3．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

小山内透…「はじめに」「立地と環境」「発掘調査の方法」「鴨子台遺跡―第１章第１節」

榮　一郎…「鴨子台遺跡－第1章第2節」

小林　克…「鴨子台遺跡－第1章第3節、第2章第1節、第3章」

なお、「鴨子台遺跡－第2章第2節・第3節」については小山内、榮、小林で分担執筆し、文末に氏名を記した。

庄内昭男…「八幡台遺跡－第１章第１節・第２節」

斎藤典芳…「八幡台遺跡－第２章・第３章」

4．本報告書作成にあたり以下の方々からご助言、ご指導を頂いた。記して謝意を表する。

安斎正人、安蒜政雄、稲野彰子、大竹幸恵、岡村道雄、岡本東三、織笠昭子、加藤　稔、菊池徹夫、佐藤宏之、関野哲夫、高橋龍三郎、武田耕平、堤　隆、戸沢充則、長崎潤一、新田浩三、林　謙作、比田井民子、藤原妃敏、柳田俊雄、山田しょう、吉田雅勇（五十音順）

5．別編「自然科学的分析」のうち、「第１章 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書」は学習院大学年代測定室に、「第２章　鴨子台遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」は（株）ズコーシャに、「第３章　鴨子台遺跡発掘調査珪藻分析等業務委託報告」は（株）パリノ・サーヴェイに委託した結果報告である。また、「第４章　鴨子台遺跡の古地磁気・岩石磁気調査」は秋田大学鉱山学部、西谷忠師助教授に調査・分析いただいた。

6．土層註記中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』によった。

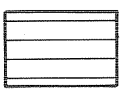
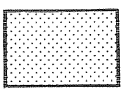
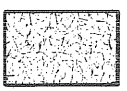
凡　　例

1．旧石器時代の石器集中地点は「ブロック」と呼称し、縄文時代以降の遺構については以下の略号を使用している。

SI；竪穴住居跡　SKT；陥穴　SK；土坑　SR；土器埋設遺構　SN；焼土遺構　SD；溝跡

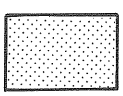
2．縄文時代以降の遺構図については焼土遺構、陥穴等を1／40の縮尺で、土器埋設遺構を1／20の縮尺で掲載した。

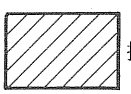
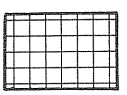
3．遺構図に使用したスクリーン・トーンの凡例は以下のとおりである。


地山

焼土

木炭

4．縄文時代以降の遺物実測図、拓影について、土器および剥片石器は縮尺1／2で、大形の礫石器は1／3で掲載した。なお、鴨子台遺跡刃部磨製石斧は2／3で掲載した。

5．石器実測図に使用したスクリーン・トーンの凡例は以下のとおりである。


擦面

被熱痕

損傷部

接合資料断面の隙間

6．石器表面の顕微鏡写真は金属顕微鏡Nikon OPIHOTおよび顕微鏡写真撮影装置Nikon MICROFLEX UFX-IIを使用して撮影した。

※『鴨子台遺跡』報文中、第Ⅰ群および第Ⅱ群石器について

7．石器実測図に付した番号はその遺物固有の番号であり、剥離作業の流れ図、ならびに各計測表、一覧表および接合関係図中の遺物番号に対応する。

8．実測図によって示された石器の帰属するブロックは、石器実測図の遺物番号の末尾に付したⒶⒷⒸⒹおよび㋜の記号によって表される。

9．石器実測図に示した　｛は、5のスクリーン・トーンとともに出土後に残された損傷部を示す。

10. 実測図中、断面あるいは上下面に付した、↑もしくは↓の記号は折断の方向を表す。

11. 折断面で接合する石器に付された△あるいは▽の記号は、折断面の作図された石器を表し、前者は上位、後者は下位の石器の折断面が示されていることを表す。

12. 個体別接合資料の記述中に挿入された剥離作業の流れ図では、その前後関係が直接である場合を実線の矢印で、間接である場合を破線の矢印で結んでいる。また、接合が折断面あるいは節離面等でなされる場合には実線のみで結んでいる。

13. 剥離作業の流れ図には接合が単一のブロックで完結する資料を除き、ブロック間の接合流れ図を添えている。

14. 個体別接合資料の接合関係図中、矢印あるいは実線で結ばれた関係は、剥離作業の流れ図と対応する。

15. 石器一覧表中、大きさの単位は㎜である。

16. 個体別資料の分布図におとした記号の凡例は以下のとおりである。

■ナイフ形石器（先端）　□ナイフ形石器（基部）

△彫器（先端）　▲彫器（基部）

◆削片

＊石核

☆掻器

☆削器

☆錐器

●剥片・チップ

目　　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

はじめに …… 1
調査に至るまでの経緯 …… 1
調査の組織と構成 …… 2
立地と環境 …… 3
遺跡の位置と周辺地形 …… 3
八郎潟北岸の地形と地質 …… 5
周辺の遺跡 …… 7
発掘調査の方法 …… 13
調査区の設定 …… 13
遺構精査およびその記録 …… 13

鴨子台遺跡
第１章　発掘調査の概要 …… 16
第１節　遺跡の概観 …… 16
第２節　遺跡の基本層序 …… 16
第３節　調査の経過 …… 22
第２章　調査の記録 …… 24
第１節　旧石器時代の遺構と遺物 … 24
（１）第Ⅰ群石器 …… 24
（２）第Ⅱ群石器 …… 31
第２節　縄文時代の遺構と遺物 ……201
（１）竪穴住居跡 ……201
（２）土器埋設遺構 ……203
（３）陥穴 ……203
（４）縄文時代の遺構外出土遺物 …210
第３節　時期不詳の遺構 ……230
（１）焼土遺構 ……230
（２）溝跡 ……237
（３）遺構外の遺物 ……239
第３章　まとめ ……240
第１節　旧石器時代の遺物群について …240
第２節　縄文時代の遺物について …246

（刃部磨製石斧）
八幡台遺跡
第１章　発掘調査の概要 ……253
第１節　遺跡の概観 ……253
第２節　調査の経過 ……253
第２章　調査の記録 ……255
第１節　Ａ地区の地形と層位 ……255
第２節　Ａ地区の検出遺構 ……255
第３節　A地区における遺構外の出土遺物 ……259
第４節　Ｂ地区の地形と層位 ……260
第５節　Ｂ地区の検出遺構 ……260
第６節　B地区における遺構外の出土遺物 …261
第３章　まとめ ……267

別編　自然科学的分析
第１章　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 …304
第２章　鴨子台遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析 …305
第３章　鴨子台遺跡発掘調査珪藻分析等業務委託報告 ……312
第４章　鴨子台遺跡の古地磁気・岩石磁気調査 ……319

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　遺跡の位置と周辺地形…… 4
第３図　能代平野の地形分類図…… 6
第４図　周辺遺跡図…… 8
鴨子台遺跡
第１図　周辺地形…… 17
第２図　基本土層図（柱状図および深掘区土層図）… 19
第３図　基本土層図（SP.A－SP.B　その1）…… 20
第４図　基本土層図（SP.A－SP.B　その2）…… 21
第５図　遺構配置図 …… 25・26
第６図　第Ⅰ群石器出土地点…… 27
第７図　第Ⅰ群石器…… 28
第８図　第Ⅰ群石器および類似剥片…… 29
第９図　第Ⅱ群石器Ａ～Ｄブロック垂直分布図…… 32
第10図　Ａブロック…… 33
第11図　Ｂブロック…… 34
第12図　Ｃブロック…… 35
第13図　Ｄブロック…… 36
第14図　ナイフ形石器計測部位…… 37
第15図　ナイフ形石器…… 38
第16図　彫器計測部位…… 41
第17図　彫器（1）…… 43
第18図　彫器（2）…… 45
第19図　彫器削片…… 47
第20図　掻器計測部位…… 49
第21図　掻器および錐器…… 50
第22図　削器…… 52
第23図　剥片長度数分布…… 53
第24図　折断剥片折断角度数分布…… 54
第25図　環状石製品…… 55
第26図　剥片剥離工程図…… 57
第27図　個体1分布図 …… 61
第28図　個体1－1接合関係図…… 62
第29図　個体1－1接合図…… 63
第30図　個体1－1石器（1）…… 64
第31図　個体1－1石器（2）…… 65
第32図　個体1－2接合関係図…… 66
第33図　個体1－2接合図…… 67
第34図　個体1－2石器（1）…… 68
第35図　個体1－2石器（2）…… 69
第36図　個体1－3接合図・石器（1）…… 70
第37図　個体1－3石器（2）…… 71
第38図　個体1－4接合図…… 72
第39図　個体1－4石器・個体1－5接合図…… 73
第40図　個体1－5石器・個体1－6接合図…… 74
第41図　個体1－6石器・個体1－7接合図…… 75
第42図　個体1－8～1－12接合図・石器 …… 76
第43図　個体1－13～1－15接合図・石器、
　　個体1単独資料（1）…… 77
第44図　個体1単独資料（2）…… 78
第45図　個体1単独資料（3）…… 79
第46図　個体2分布図…… 81・82
第47図　個体2－2接合図…… 83
第48図　個体2－2a接合図・石器 …… 84
第49図　個体2－2b接合図・石器（1）…… 85
第50図　個体2－2b石器（2）…… 86
第51図　個体2－3接合関係図…… 87
第52図　個体2－3接合図…… 88
第53図　個体2－3石器…… 89
第54図　個体2－4接合関係図…… 90
第55図　個体2－4接合図…… 91
第56図　個体2－4石器…… 92
第57図　個体2－5接合関係図…… 93
第58図　個体2－5接合図…… 94
第59図　個体2－5石器…… 95
第60図　個体2－7・2－8接合図・石器…… 96
第61図　個体2－9接合図・石器…… 97
第62図　個体2－11・2－12接合図・石器…… 98
第63図　個体2－13・2－14・2－16接合図・石器 …… 99
第64図　個体2－15・2－18接合図・石器……100
第65図　個体2－21～2－25・2－6接合図・石器……101
第66図　個体2単独資料（1）ナイフ形石器・彫器……102
第67図　個体2単独資料（2）彫器・削片……103
第68図　個体2単独資料（3）……104
第69図　個体2単独資料（4）……105
第70図　個体2単独資料（5）……106
第71図　個体2単独資料（6）……107
第72図　個体2単独資料（7）……108
第73図　個体2単独資料（8）……109
第74図　個体3分布図 ……109
第75図　個体3－1石器……110
第76図　個体3－1接合図……111・112
第77図　個体3－2接合図・石器、 個体3単独資料……113
第78図　個体4分布図 ……115
第79図　個体4－1接合関係図……116
第80図　個体4－1接合図……117・118
第81図　個体4－1石器（1）……119
第82図　個体4－1石器（2）……120
第83図　個体4－1石器（3）……121
第84図　個体4－2接合関係図……122
第85図　個体4－2接合図……123・124
第86図　個体4－2石器（1）……125
第87図　個体4－2石器（2）……126
第88図　個体4単独資料 ……127
第89図　個体5分布図 ……129
第90図　個体5－1接合図・石器（1）……130
第91図　個体5－1石器（2）……131
第92図　個体5－2接合図・石器、 個体5単独資料……132
第93図　個体6分布図 ……133
第94図　個体6－1、個体6単独資料（1）……134
第95図　個体6単独資料（2）……135
第96図　個体7－1接合図・石器……136
第97図　個体8－1接合図・石器……137
第98図　個体8－2・8－3、個体8単独資料 ……138

第99図　個体9分布図……140
第100図　個体9－1接合図・石器……141
第101図　個体9－2接合関係図……142
第102図　個体9－2・9－3接合図……143
第103図　個体9－4接合図、個体9単独資料（1）……144
第104図　個体9単独資料（2）……145
第105図　個体10分布図……147
第106図　個体10－1接合図、個体10単独資料（1）……148
第107図　個体10単独資料（2）……149
第108図　個体11－1接合図、個体11単独資料……150
第109図　個体12分布図……151・152
第110図　個体12－1接合関係図……153
第111図　個体12－1接合図（1）……154
第112図　個体12－1接合図（2）……155
第113図　個体12－1石器（1）……156
第114図　個体12－1石器（2）……157
第115図　個体12－2・12－3・12－4接合図・石器……158
第116図　個体12－8接合図・石器（1）……159
第117図　個体12－8石器（2）、個体12－5～12－7……160
第118図　個体12単独資料（1）……161
第119図　個体12単独資料（2）……162
第120図　個体12単独資料（3）……163
第121図　個体13分布図……164
第122図　個体13単独資料（1）……165
第123図　個体13単独資料（2）……166
第124図　個体13単独資料（3）……167
第125図　個体14－1接合関係図……168
第126図　個体14－1接合図・石器……169
第127図　個体15、個体16……170
第128図　個体17分布図……171
第129図　個体17－1接合関係図……172
第130図　個体17－1接合図……173・174
第131図　個体17－1石器（1）……175
第132図　個体17－1石器（2）……176
第133図　個体17－1石器（3）……177
第134図　個体17単独資料……178
第135図　個体18～個体21……179
第136図　個体22～個体26……180
第137図　ブロック別石器組成……182
第138図　ブロック毎の個体別資料割合……183
第139図　個体別資料石器構成比……184
第140図　剥片剥離作業にみるブロック間関係……185
第141図　ＳＩ52竪穴住居跡……201
第142図　ＳＲ04、ＳＲ69土器埋設遺構……204
第143図　ＳＫＴ36、ＳＫＴ42陥穴……206
第144図　ＳＫＴ67、ＳＫＴ58、ＳＫＴ71陥穴……208
第145図　ＳＫＴ76陥穴……209
第146図　刃部磨製石斧……211
第147図　縄文土器（1）……217
第148図　縄文土器（2）……218
第149図　縄文土器（3）……219
第150図　縄文時代の石器（1）石鏃・石匙……220
第151図　縄文時代の石器（2）石匙……221
第152図　縄文時代の石器（3）石匙・篦状石器……222
第153図　縄文時代の石器（4）篦状石器……223
第154図　縄文時代の石器（5）削器……224
第155図　縄文時代の石器（6）削器……225
第156図　縄文時代の石器（7）磨製石斧・礫刃器・偏平打製石器……226
第157図　縄文時代の石器（8）磨石……227
第158図　縄文時代の石器（9）石錘……228
第159図　縄文時代の石器（10）石錘・凹石・砥石……229
第160図　ＳＮ01・02・03・06・08焼土遺構……231
第161図　ＳＮ21・22・28・29・31・34・38・51焼土遺構……233
第162図　ＳＮ48・49・50・62・53・54・63・75・79焼土遺構……234
第163図　ＳＮ59・60・61・78焼土遺構……236
第164図　ＳＤ44・65溝跡断面および出土須恵器片……237
第165図　時期不詳の遺物－砥石・浮子……239
第166図　ナイフ形石器の長幅……242
八幡台遺跡
第１図　遺跡地形とグリッド配置図……252
第２図　Ａ地区・Ｂ地区遺構配置図……254
第３図　Ａ地区基本層位……255
第４図　Ａ地区ＳＫＴ01陥穴……256
第５図　Ａ地区焼土遺構……258
第６図　Ａ地区遺構外出土遺物……259
第７図　Ｂ地区基本層位……260
第８図　Ｂ地区ＳＫＴ05陥穴……262
第９図　Ｂ地区ＳＤ04溝跡……263
第10図　Ｂ地区遺構外出土遺物（1）……264
第11図　Ｂ地区遺構外出土遺物（2）……265
第12図　県内検出縄文時代陥穴の長さ・深さの分布……268

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表（1）……9
第２表　周辺遺跡一覧表（2）……10
第３表　周辺遺跡一覧表（3）……11
鴨子台遺跡
第１表　第Ｉ群石器一覧表……30
第２表　ナイフ形石器計測表……37
第３表　彫器計測表……41
第４表　削片計測表……48
第５表　掻器計測表……49
第６表　削器計測表……51
第７表　ブロック別石器組成……182
第８表　ブロック毎の個体別資料保有数……183
第９表　個体別資料石器組成……184
第10表　第Ⅱ群石器一覧表（1）……186
第11表　第Ⅱ群石器一覧表（2）……187
第12表　第Ⅱ群石器一覧表（3）……188

第13表　第Ⅱ群石器一覧表（4）……189
第14表　第Ⅱ群石器一覧表（5）……190
第15表　第Ⅱ群石器一覧表（6）……191
第16表　第Ⅱ群石器一覧表（7）……192
第17表　第Ⅱ群石器一覧表（8）……193
第18表　第Ⅱ群石器一覧表（9）……194
第19表　第Ⅱ群石器一覧表（10）……195
第20表　第Ⅱ群石器一覧表（11）……196
第21表　第Ⅱ群石器一覧表（12）……197
第22表　第Ⅱ群石器一覧表（13）……198
第23表　第Ⅱ群石器一覧表（14）……199
第24表　第Ⅱ群石器一覧表（15）……200
八幡台遺跡
第１表　陷穴の規模 ……267

図　版　目　次

鴨子台遺跡
図版１　１　調査前状況（南→北）
　　２　調査区全景（南→北）
　　３　調査後全景（南西→北東）
図版２　１　調査区冠水状況（南西→北東）
　　２　遺跡基本土層
　　（MR•MS17•18グリッド；南西→北東）
　　３　基本土層(ML20•21グリッド；西→東)
図版３　１　Ａブロック第Ⅱ群石器出土状況1（西→東）
　　２　Ａブロック、ナイフ形石器、
　　彫器出土状況（西→東）
　　３　Ａブロック、環状石製品出土状況（南→北）
図版４　１　Ａブロック第Ⅱ群石器出土状況2（西→東）
　　２　Ａブロック完掘状況（西→東）
　　３　Ａブロック、Ｂブロック完掘状況
　　（南東→北西）
図版５　１　Ｂブロック第Ⅱ群石器出土状況（南→北）
　　２　Ｂブロック、剝片出土状況（南→北）
　　３　Ｄブロック第Ⅱ群石器出土状況（西→東）
図版６　１　Ｃブロック第Ⅱ群石器出土状況（西→東）
　　２　Ｃブロック、剝片出土状況（北西→南東）
　　３　Ｃブロック、ナイフ形石器出土状況
　　（北西→南東）
図版７　１　ナイフ形石器出土状況
　　（MM35グリッド；東→西）
　　２　第I群石器出土状況
　　（MQ•MR20グリッド；東→西）
　　３　刃部磨製石斧出土状況
　　（MI53グリッド；東→西）
図版８　１　ＳＩ５２竪穴住居跡（東→西）
　　２　ＳＲ０４土器埋設遺構（北→南）
　　３　ＳＲ６９土器埋設遺構（南→北）
　　４　ＳＫＴ６７陷穴完掘状況（南西→北東）
図版９　１　ＳＫＴ３６、ＳＫＴ４２陷穴検出状況
　　（南→北）
　　２　ＳＫＴ３６、ＳＫＴ４２陷穴完掘状況
　　（西→東）
図版10　１　ＳＫＴ４２覆土断面（北西→南東）
　　２　ＳＫＴ３６覆土断面（北西→南東）
　　３　ＳＫＴ７６覆土断面（西→東）
　　４　ＳＫＴ７６完掘状況（西→東）
図版11　刃部磨製石斧、第Ⅰ群石器
　　（両面調整石器削片、周縁加工掻器）
図版12　第Ⅱ群石器
　　（上段；ナイフ形石器、下段；掻器・錐器）
図版13　第Ⅱ群石器（彫器）
図版14　第Ⅱ群石器（上段；彫器・削片接合例、
　　中段；削器、下段；環状石製品）
図版15　第Ⅱ群石器
　　（掻器547裏面のポリッシュ金属顕微鏡写真）
図版16　第Ⅱ群石器接合資料
　　（上段；個体1-1　下段；個体1-2）
図版17　第Ⅱ群石器接合資料
　　（上段；個体1-3　下段；個体2-2）
図版18　第Ⅱ群石器接合資料
　　（上段；個体2－3　下段；個体2－4）
図版19　第Ⅱ群石器接合資料
　　（上段；個体2-5　下段；個体17-1）
図版20　第Ⅱ群石器接合資料
　　（上段；個体12－1　下段；個体14－1）
図版21　第Ⅱ群石器接合資料
　　（個体4－1）
図版22　第Ⅱ群石器接合資料
　　（個体4－2）
八幡台遺跡
図版１　Ａ地区調査前全景（北→南）
　　Ａ地区調査後全景（北→南）
図版２　Ａ地区作業風景（南→北）
　　Ａ地区調査後全景（東→西）
図版３　Ａ地区65ラインの基本土層（北→南）
　　Ａ地区ＳＫＴ01陷穴
図版４　Ｂ地区調査前全景（南東→北西）
　　Ｂ地区調査後全景（東→西）
図版５　Ｂ地区ＳＫＴ05陷穴
　　Ｂ地区ＳＫＴ05陷穴断面
図版６　Ｂ地区ＳＤ01溝跡（南東→北西）
　　Ｂ地区ＳＤ01溝跡断面（南→北）
　　Ｂ地区馬墓
図版７　出土遺物（土器）
図版８　出土遺物（石器）

はじめに

調査に至るまでの経緯

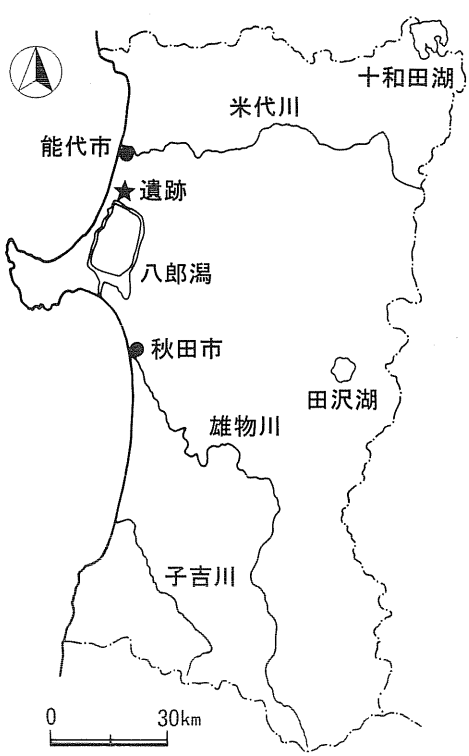
一般国道７号琴丘能代道路は、昭和58年度より事業化された一般国道７号八竜能代道路（延長７㎞、幅員22m）を、平成元年に計画変更し、琴丘町まで延伸したものである。県北日本海沿岸の輸送幹線道路としては従来からの一般国道７号があるが、現在工事中のこの道路には、将来、県都市秋田と県北主要都市の連絡のみならず、県外まで延びる高速交通体系網の一部を担う高規格の道路として、その機能を拡大・強化することが期待されている。公表されている計画概要に従えば、山本郡琴丘町鹿渡地内を起点とし、能代市浅内地内とを結ぶ延長17㎞、幅員23.5mの自動車専用道路[註1]である。

路線予定区域は、計画変更以前の当初からいくつかの埋蔵文化財包蔵地内にかかることが予想されていた。そこで、計画路線が示された時点で、県教育委員会と工事実施者である建設省東北建設局能代工事事務所は協議を行い、路線上の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、現状保存をはかることの不可能な遺跡については、範囲確認調査を行った上で発掘調査を実施し記録保存をはかることとした。

八竜能代間の路線上の遺跡分布調査は昭和60年度に行われ、能代開拓事業に先立つ昭和57年度の範囲確認調査により遺跡範囲の確定していた寒川遺跡等[註2]の周知の遺跡も含め、南側から館ノ上、萱刈沢Ⅰ・Ⅱ、福田、石丁、十二林、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡の８遺跡[註3]の存在が確認された。

発掘調査は用地買収の完了した能代市側から着手され、昭和61年度には寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡[註4]の調査を行い、あわせて十二林、石丁、福田遺跡[註5]について路線内の範囲確認調査も実施した。その結果、十二林遺跡と石丁遺跡の間の沢地に蟹子沢遺跡[註5]が新たに確認され、翌昭和62年度にはこの蟹子沢遺跡を加え、福田、石丁、十二林遺跡[註6]の４遺跡の調査が行われている。

つづいて、平成元年度には、５月中に萱刈沢Ⅰ・Ⅱ遺跡[註7]の範囲確認調査が実施された。その結果、



第１図　遺跡位置図

県教育委員会と能代工事事務所の間で、萱刈沢Ⅰ遺跡については翌年度調査することが、また、萱刈沢Ⅱ遺跡については盛土工法がとられるために、掘削により削平される工事用道路部分と橋脚部分のみの調査を行うことが確認され、萱刈沢Ⅱ遺跡については同年10月2日～11月30日までの期間に調査が実施された。

また、この平成元年度中に計画変更により新たにその必要が生じたインターチェンジ部分と取り付け道路部分の分布・範囲確認調査も実施され、その結果、インターチェンジのループ部分で鴨子台遺跡、取り付け道路部分で八幡台遺跡の2遺跡が新たに確認された。これを受けて県教育委員会と能代工事事務所は再度協議を行い、翌年度に取り付け道路未買収部分の範囲確認調査を行った上でこの2遺跡の調査を行うこととし、萱刈沢Ⅰ遺跡の調査の実施は平成3年度へ変更された。

なお、八幡台遺跡については、未確認範囲を含む取り付け道路部分は1遺跡として扱うこととしたが、平成2年度6月中の範囲確認調査[註8]の結果、2つの地点に分かれることが判明したため、便宜上、東側の範囲をA地区、西側範囲をB地区として扱っている。

註

(1)建設省東北地方建設局能代工事事務所『一般国道7号琴丘能代道路』パンフレット 1989(平成元年)

(2)秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1983(昭和57年)

(3)秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1986(昭和61年)

(4)秋田県教育委員会「寒川Ⅰ・寒川Ⅱ遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1988(昭和63年)

(5)秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1987(昭和62年)

(6)秋田県教育委員会「福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989(平成元年)

(7)秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1990(平成2年)

(8)秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1991(平成3年)

調査の組織と構成

1.遺跡所在地	鴨子台遺跡	秋田県山本郡八竜町鵜川字鴨子台9外
	八幡台遺跡A地区	秋田県山本郡八竜町鵜川字八幡台80－1外
	B地区	秋田県山本郡八竜町鵜川字八幡台49－3外
2.調査期間	鴨子台遺跡	平成2年7月2日～11月22日

八幡台遺跡　　平成２年８月20日～10月31日

３.調査面積　　鴨子台遺跡　　11,450㎡

八幡台遺跡Ａ地区　1,500㎡

Ｂ地区　2,000㎡

４.調査主体者　　秋田県教育委員会

５.調査担当者　　庄内　昭男(秋田県埋蔵文化財センター文化財主査)

榮　一郎、谷地　薫(以上秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

小林　克(秋田県埋蔵文化財センター文化財主事)

小山内　透、斎藤　典芳、石川　恵美子

(以上秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

６.調査事務担当者　佐田　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査）

佐々木　真（秋田県埋蔵文化財センター主任）

高橋　忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）

７.調査協力機関　　建設省東北建設局能代工事事務所

八竜町教育委員会

立　地　と　環　境

遺跡の位置と周辺地形

鴨子台遺跡、八幡台遺跡は、県北日本海沿岸地域の台地群のうち最も西側に位置する台地上、南寄りに位置している。遺跡は県北部を東から西へ貫流して日本海に注ぐ米代川の河口から南に11.2～11.9㎞、八郎潟北岸からは北に約2.6～3.7㎞程の地点に位置し、西側日本海汀線までは直線距離で3.2～3.6㎞程である。

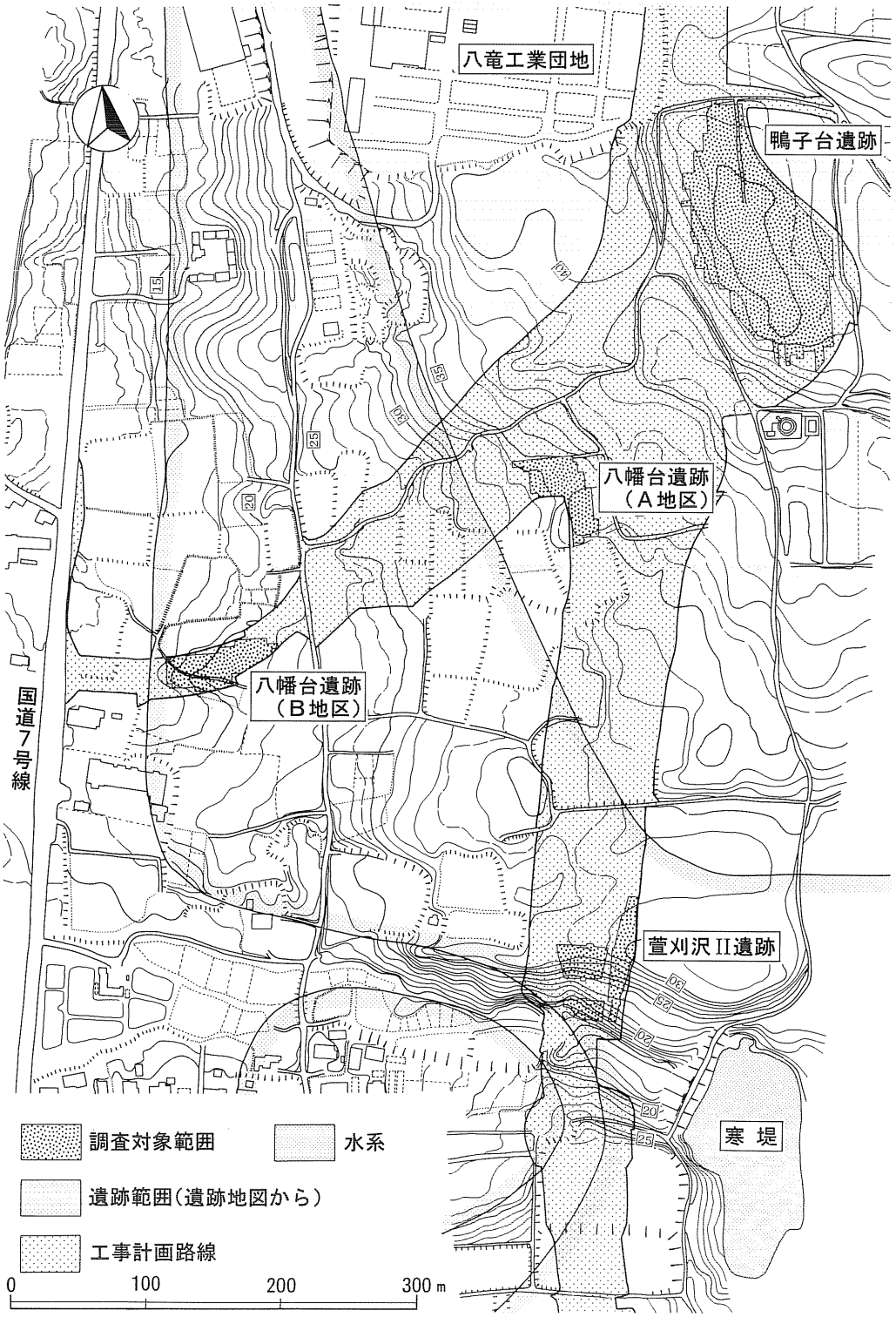
各遺跡の経緯度は以下のとおりである。

鴨子台遺跡　……北緯40°7′3″　　東経140°0′55″

八幡台遺跡Ａ地区……北緯40°6′53″　　東経140°0′46″

八幡台遺跡Ｂ地区……北緯40°6′53″　　東経140°0′38″

鴨子台、八幡台の２遺跡が立地する台地は、成合台地と呼ばれる標高20～35ｍ前後の海成段丘である。この成合台地は西側の浅内低地と東側の鵜川川によって形成された鵜川低地に挟まれる幅約2.3㎞、成合台地の北側につながる浅内台地を含め八竜町大曲から能代市浅内までの



第2図　遺跡の位置と周辺地形

延長約8kmにわたる帯状の南北に長い台地である。その長軸方向は日本海汀線及び東側の丘陵地に平行するN－15°－Eである。

この成合台地の東西両側縁は、侵食谷によってそれぞれ開析されているが、その状況は対照的である。西縁は直線的であり、縄文海進のピーク時の日本海汀線と推定され(註1)、縄文海進後に開析され当時は直接海に達していたと思われる5つの大きな谷が1～1.5km間隔で台地縁を区切っている。これに対し、東側は、海退後に成合台地とその東側の台地の境に沿って開析した鵜川川形成後に侵食が始まったより新しい時期の地形であり、櫛歯状に小開析谷が細かく入り組んでいる。

遺跡は、成合台地の西縁を開析する谷が区切る6ブロックのうち、南から2番目のブロック上、西側緩斜面に立地する。なお、鴨子台、八幡台遺跡の同じ台地の南縁には萱刈沢Ⅰ遺跡が、また、谷を隔てたさらに南側には萱刈沢Ⅱ遺跡が位置している。

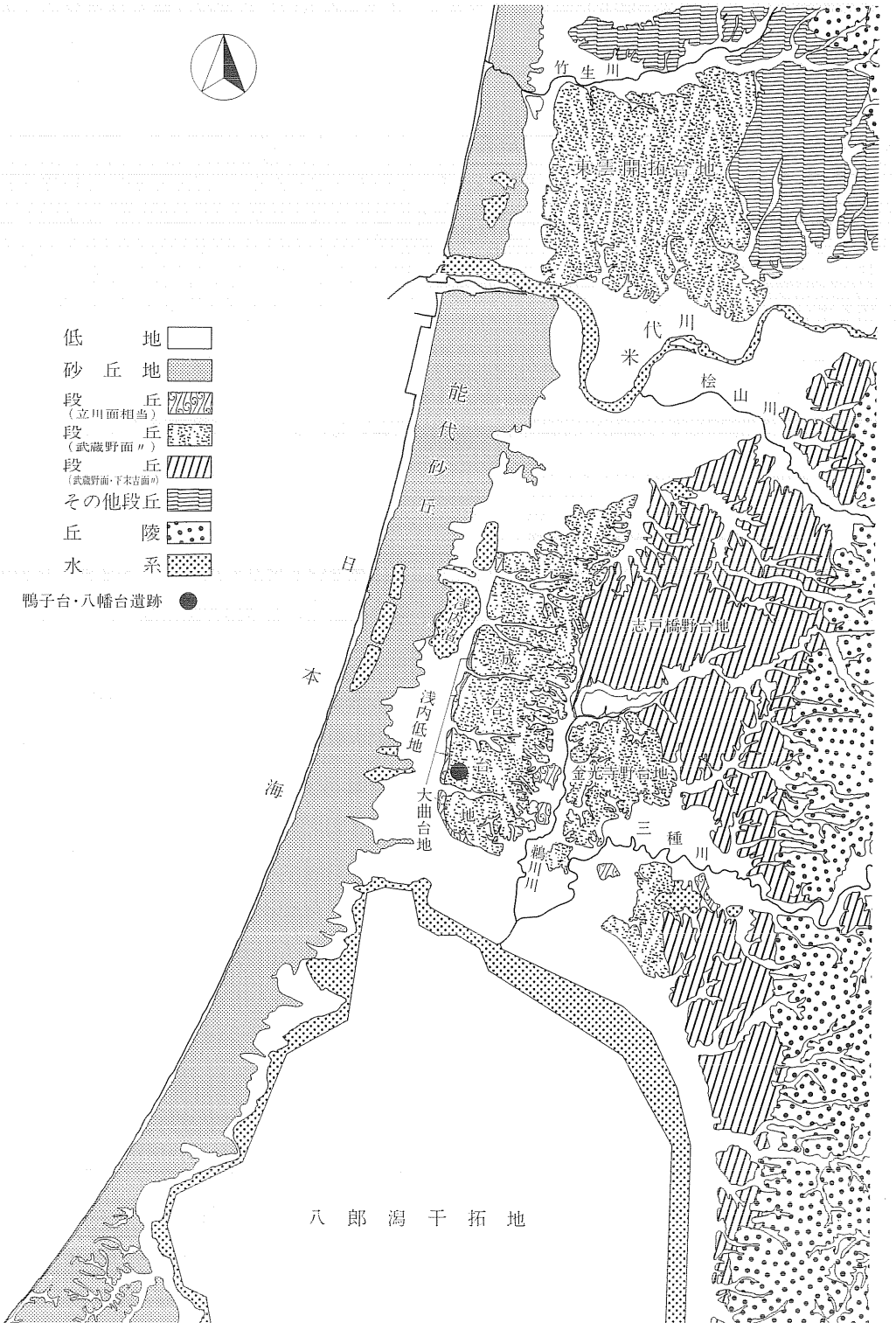
八郎潟北岸の地形と地質

県北日本海沿岸地域は位置的・地形的には、出羽丘陵地の北寄りに位置し、東は奥羽脊梁山脈より分岐する太平山山地に連なる七座山山地－房住山山地、北は白神山山地によって限られ、南は八郎潟北部までを含む地域を指し示す(第3図)。

当該地域は、県北部を東から西に貫流し、日本海に至る米代川により2地域に分割されている。このうち遺跡の位置する米代川左岸側では、奥羽脊梁山脈の発達方向や、日本海汀線に対応して、南北の帯状に、東から西へ山地、丘陵地、台地(段丘)・低地と高低三段の地形配列をなす。こうした地形配列は、発達方向が相違するほかは米代川の右岸側でも同様である。

八郎潟北岸の米代川左岸地域では、同地域の東縁を限る房住山山地－七座山山地と雁行状に配列される山地群は、南から房住山(標高404m)、房中山(標高334m)、長鞍山(標高344m)、七座山(標高287m)と海抜高度が南高北低で連なり、おおむね山頂部で起伏量300～400mの中(大)起伏山地、山腹および北部が起伏量200m未満の小起伏山地とに分かれる。これら一連の山系は西の米代川下流の能代平野と東は米代川中流、鷹巣盆地の二つの相対的に下降する地形面の境壁をなしている背斜隆起山地である。地質的には、南寄りでは女川層、中部では船川層下部層、さらに北部では船川層上部層と南に古く、北へ若い。また、北部のグリーン・タフ地域の西端に位置する七座山山地では、上部七座凝灰岩と下位の船川層黒色泥岩で構成される。

これらの山地群と西側の台地・低地とに挟まれた丘陵地は、東西の幅はおよそ10km前後に達している。北部羽立丘陵地、中央部谷地の沢丘陵地の東部、南部西又沢丘陵地と、北、南、東部の三部分で起伏量値100～200mと大きく、西部で40～60mと小起伏丘陵地となっている。これらを構成する地質は、新第三紀中新世中期・西黒沢層、同後期・女川層・天徳寺層及び第四



第3図　能代平野の地形分類図

紀更新統から成り立っている。

台地(段丘地)は、米代川左右両岸の地域で一対をなして存在し、台地の発達の連続性は至って良好で6段から構成されている。第一台地面は2面から構成され東側に位置する丘陵地の西縁に破線状に点在し、北高南低の傾向にある。第二及び第三台地面は、面的に最も広く海抜高度は北東寄りで60m、南寄りで20mと第一面の北高南低の傾向に調和し、かつ東高西低である。第四台地面は主として三種川の河谷低地と南部、西側の台地の西縁部に僅かに分布している。以上の構成台地は、米代川左岸地域、三種川以北では、北側から一部海成段丘である下末吉面相当面及び陸成の武蔵野面相当面の複合である志戸橋野台地、下末吉面相当面の豊岡台地、武蔵野面相当面である金光寺野台地、西側に砂がち堆積物からなる武蔵野面相当面の浅内台地と成合台地、成合台地の縁辺をリング状に取り囲む立川面相当面のうち西縁に位置するその代表的な大曲台地などがある。これらの台地群は地質的には潟西層からなり、成合台地、大曲台地の砂丘堆積物も潟西層最上部の風成砂として捉えられているものである。今日的にはこの潟西層＝下末吉面相当面の見解が固まりつつある。(註2)

低地は、その形成作用から大きく3ブロックに分かれる。北部は米代川による氾濫・沖積低地、横断面形でセット関係の最も正しい中央部は、東に成合台地、西は日本海岸砂丘(能代砂丘)(註3)によって挟まれている巾僅か1.1～1.5kmの海岸低地である浅内低地、そして、遺跡の立地する成合台地の南側では、三種川、鵜川川と八郎潟湖により形成された低地である。また、米代川河口から若美町玉の池付近まで延長25kmにおよぶ日本海岸砂丘は、その形成時期で5つに区分されており、考古学的にも重要な砂丘である。(註4)(註5)(註6)

註

(1) 能代山本地方史研究会「古環境の復元－能代山本地方を中心として－」『能代山本地方史研究』4号 1987(昭和62年)

(2) 潟西層団体研究グループ「男鹿半島北東部潟西地域における潟西層」『地球科』 学第37巻2号 1983(昭和58年)

(3) 能代山本地方史研究会「能代沖積平野の地史」『能代山本地方史研究』4号 1987(昭和62年)

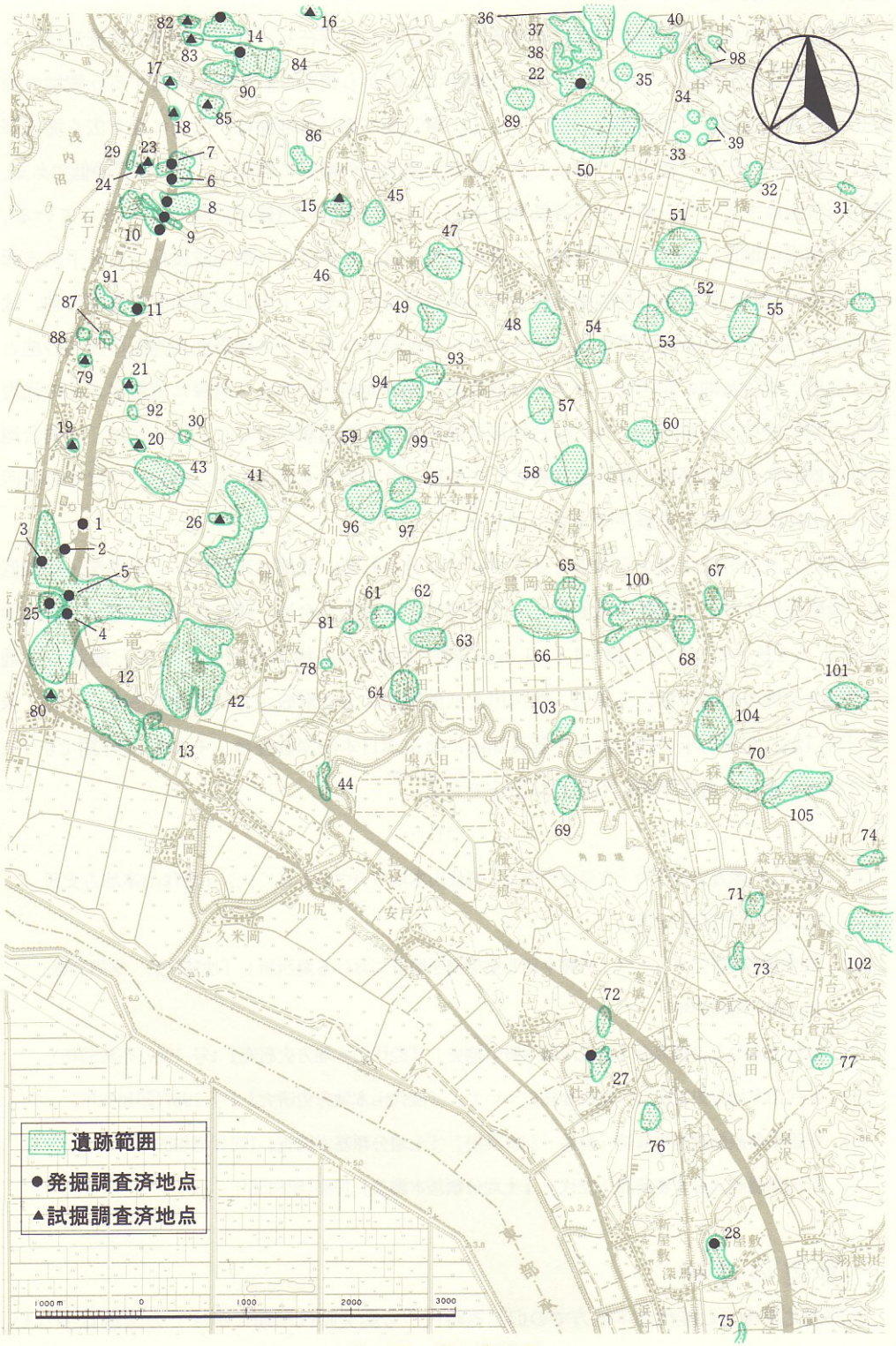
(4) 能代山本地方史研究会「能代砂丘について」『能代山本地方史研究』4号 1987(昭和62年)

(5) 秋田県農政部農地整備課「森岳・羽後浜田」『土地分類基本調査』1984(昭和59年)

(6) 秋田県農政部農地整備課「能代」『土地分類基本調査』1983(昭和58年)

周辺の遺跡

八郎潟北岸を含む能代山本地方での旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡は少ない。旧石器時代の遺跡では、本報告による鴨子台遺跡の他は、浅内台地上の此掛沢Ⅱ遺跡(14)、



第４図　周辺遺跡図

第1表　周辺遺跡一覧表（1）

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	文献
1	鴨子台	八竜町鵜川字鴨子台	旧・縄・古	竪穴住居跡、陥穴、埋設土器、溝、縄文土器（早・前・中期）、旧石器、局部磨製石斧、石器	
2	八幡台A	八竜町鵜川字八幡台	縄	陥穴、縄文土器（後期）、石器（石鏃・石篦）	
3	八幡台B	八竜町鵜川字八幡台	縄	陥穴、縄文土器（後期）、石器（石鏃・石匙）	
4	萱刈沢Ⅰ	八竜町鵜川字萱刈沢	縄		
5	萱刈沢Ⅱ	八竜町鵜川字萱刈沢	縄・古	竪穴住居跡（縄・古）、フラスコ状ピット、土坑溝、縄文土器（早・前・中・後期）、土師器、石器	
6	寒川Ⅰ	能代市浅内字寒川家上	縄・古	竪穴住居跡（縄・古）、土坑、土壙墓、埋設土器土器捨場、溝、縄文土器、土師器、須恵器、石器	⑯
7	寒川Ⅱ	能代市浅内字寒川家上	縄・続縄・古	竪穴住居跡（縄・古）、フラスコ状ピット、土坑埋設土器、土壙墓（続縄文）、製鉄炉、縄文土器続縄文土器、土師器、須恵器、石器	⑯
8	十二林	能代市浅内字十二林	縄・古	フラスコ状ピット、陥穴、竪穴住居跡・掘立柱建物跡、須恵器窯跡、土器焼成遺構、縄文土器、土師器、須恵器、石器	⑰
9	蟹子沢	能代市浅内字蟹子沢	縄	縄文土器、石器	⑰
10	石丁	能代市浅内字石丁	縄	土坑、陥穴、縄文土器（前・後期）、石器	⑰
11	福田	能代市浅内字福田上野	縄・古	陥穴、土坑、竪穴住居跡・掘立柱建物跡（古）溝、縄文土器、土師器、須恵器、鉄製品、陶磁器石器（トランシェ様石器・石鏃・磨製石斧）	⑰
12	館の上	八竜町鵜川字館の上	縄・古	縄文土器、土師器片、鉄滓	⑲
13	館の上館	八竜町鵜川字館の上	中	空堀、段築、土師器、須恵器、青磁、白磁片	⑲
14	此掛沢Ⅱ	能代市浅内字此掛沢	旧・縄・古	フラスコ状ピット、竪穴住居跡・掘立柱建物（古）、縄文土器、土師器、須恵器、旧石器、石器	⑪
15	逆川	山本町外岡字渡道	旧・縄	縄文土器片、土師器片、須恵器片、旧石器	⑦
16	此掛沢Ⅲ	能代市浅内字此掛沢	縄・古	縄文土器（前期）、石器（石槍・磨石）、土師器	⑮
17	横長根B	能代市浅内字横長根	縄	土坑、溝、縄文土器（後期）	⑨
18	清水上	能代市浅内字清水上	縄	縄文土器片	⑨
19	成合A	能代市浅内字沢辺	縄	石器（石鏃）	⑨
20	成合B	能代市浅内字沢辺	縄	縄文土器片（後期）、石器（石匙）	⑨
21	成合C	能代市浅内字成合	縄	石器	⑨
22	蟻の台Ⅳ	能代市中沢字蟻の台	縄	埋設土器、縄文土器片（後期）	⑩
23	寒川家上B	能代市浅内字寒川家上	縄・古	縄文土器（前・中・後・晩期）、土師器	⑨
24	寒川家上C	能代市浅内字寒川家上	縄・古	縄文土器（前・中・後・晩期）、土師器	⑨
25	萱刈沢貝塚	八竜町鵜川字萱刈沢	縄	竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器（前中期）、貝類、骨（人・獣・魚・犬）釣針、石器	①②③⑤
26	舞台沢Ⅰ	八竜町鵜川字舞台沢	縄	縄文土器片（中・後期）	⑱
27	古館堤頭	山本町森岳字古館堤頭	縄	竪穴状遺構、フラスコ状ピット、縄文土器、土偶、石器（石鏃・石錘・石匙）	④
28	宝竜前	琴丘町鹿渡字宝竜前	縄	住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、石器	⑱
29	寒川家下	能代市浅内字寒川家下	縄	フラスコ状ピット	⑱
30	成合E	能代市浅内字成合	縄	縄文土器片	⑱
31	大森大台野	能代市大森字大台野	縄	縄文土器片、石器	⑱
32	中沢大台野	能代市中沢字大台野	縄	縄文土器片、石器	⑱
33	蟻の台Ⅰ	能代市中沢字蟻の台	縄	縄文土器片、石器	⑱
34	蟻の台Ⅱ	能代市中沢字蟻の台	縄	縄文土器片、石器	⑱

第2表　周辺遺跡一覧表（2）

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	文献
35	蟻の台Ⅲ	能代市中沢字蟻の台	縄	縄文土器片、石器(石匙)	⑱
36	蟻の台Ⅴ	能代市中沢字蟻の台	縄	縄文土器片、石器(石匙)	⑱
37	蟻の台Ⅵ	能代市中沢字蟻の台	縄	石器	⑱
38	蟻の台Ⅶ	能代市中沢字蟻の台	縄	縄文土器片、石器	⑱
39	蟻の台Ⅷ	能代市中沢字蟻の台	縄	縄文土器片、石器	⑱
40	梯能台	能代市中沢字梯ノ台	縄	縄文土器片、石器(石匙・大型石斧)	⑱
41	舞台沢Ⅱ	八竜町鵜川字舞台沢	縄	縄文土器片(後期)	⑱
42	苗代沢台	八竜町鵜川字苗代沢台	縄	縄文土器片	⑱
43	雛沢	八竜町鵜川字雛沢	縄	縄文土器片	⑱
44	扇田谷地	八竜町鵜川字扇田谷地	縄	縄文土器片	⑱
45	五本松	山本町外岡字渡道	縄	縄文土器片、石器	⑱
46	渡道	山本町外岡字渡道	縄	縄文土器片、石器	⑱
47	中嶋	山本町外岡字中嶋	縄	縄文土器片、石器	⑱
48	志戸橋境	山本町外岡字志戸橋境	縄	縄文土器片、石器	⑱
49	黒瀬	山本町外岡字根岸道下	縄	縄文土器片	⑱
50	割道	山本町志戸橋字割道	縄	縄文土器片、石器	⑱
51	大下Ⅰ	山本町志戸橋字大下	縄・古	縄文土器片、土師器(壺)	⑱
52	大下Ⅱ	山本町志戸橋字大下	縄	縄文土器片	⑱
53	霜谷地	山本町志戸橋字霜谷地	縄	縄文土器片、石器(石鏃・石匙)	⑱
54	大首崎	山本町外岡字大首崎	縄	縄文土器片	⑱
55	高田	山本町志戸橋字高田	縄	縄文土器片、土偶、石器(石錘)	⑱
56	志戸橋	山本町志戸橋字久根添	縄	縄文土器片、石器	⑱
57	長峰台	山本町外岡字長峰台	縄	縄文土器片、石器	⑱
58	乗越	山本町外岡字乗越	縄	縄文土器片、石器	⑱
59	館城	山本町豊岡金田字保竜	縄	縄文土器片、石器	⑱
60	相染	山本町豊岡金田字石持	縄	縄文土器片、石器(石匙)	⑱
61	和田Ⅰ	山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄	縄文土器片、石器	⑱
62	和田Ⅱ	山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄	縄文土器片、石器	⑱
63	和田Ⅲ	山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄	縄文土器片	⑱
64	和田部落	山本町豊岡金田字和田	縄	縄文土器片、石器(石槍・石匙)	⑱
65	根岸Ⅰ	山本町豊岡金田字根岸	縄	縄文土器片	⑱
66	根岸Ⅱ	山本町豊岡金田字根岸	縄・古	土師器、石器(石錘)	⑱
67	田の沢	山本町豊岡金田字田の沢	縄	縄文土器片、石器	⑱
68	豊岡	山本町豊岡金田字田倉館	縄・古	土師器片、石器(石鏃・石匙)	⑱
69	鳥矢場	山本町森岳字鳥矢場	縄	縄文土器(晩期)、石器(石棒)	⑱
70	関の台	山本町森岳字関の台	縄	縄文土器(壺)、石器(石鏃)	⑱
71	木戸沢	山本町森岳字木戸沢	縄	縄文土器片、石器	⑱
72	古館堤	山本町森岳字古館堤頭	縄	縄文土器、石器(石匙・石鏃)	⑱
73	東堤沢	山本町森岳字東堤沢	縄	縄文土器片、石器(石匙・石鏃)	⑱
74	塚の岱	山本町森岳字牛沢	縄	縄文土器片、石器	⑱
75	鬼沢口	琴丘町鹿渡字鬼沢口	縄	縄文土器片、石器	⑱
76	地蔵長根	琴丘町鹿渡字地蔵長根	縄	フラスコ状ピット	⑱
77	長信田	琴丘町鹿渡字長信田家後	縄	石器	⑱
78	放龍	八竜町鵜川字放龍	続縄	続縄文土器片	⑱
79	向山	能代市浅内字向山	弥	弥生式土器	⑨
80	大曲家の上	八竜町鵜川字家の上	縄・弥・古	縄文土器(後期)、弥生式土器	⑫
81	上大沢	八竜町鵜川字上大沢	弥	弥生式土器片	⑱

第３表　周辺遺跡一覧表（3）

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	文献
82	此掛沢Ⅰ	能代市浅内字此掛沢	古	竪穴住居跡(古)、土坑、溝、土師器	⑦
83	上の山Ⅰ	能代市浅内字上の山	縄・古	縄文土器片、土師器片	⑦
84	上の山Ⅱ	能代市浅内字上の山	古	竪穴住居跡・掘立柱建物跡(古)、土坑、縄土文器(前・後・晩期)、土師器、須恵器、陶器、石器	⑪⑭
85	横長根A	能代市浅内字横長根	縄・古	竪穴住居跡(古)、土坑、縄文土器、土師器	⑨
86	大館南沢	能代市浅内大館南沢	古	須恵器片	⑧
87	頭無上ⅰ	能代市浅内字頭無上	古	土師器片、須恵器片	⑧
88	頭無上Ⅱ	能代市浅内字頭無上	古	土師器片、須恵器片	⑱
89	九郎エ衛門台	能代市浅内字九郎左エ門台	古	土師器片	⑱
90	ムサ台	能代市浅内字ムサ台	古	土師器、須恵器、羽口、紡錘車、鉄滓	⑱
91	福田上野	能代市浅内字福田上野	古	土師器片、須恵器片	⑱
92	成合D	能代市浅内字成合、字沢辺	古	土師器片、須恵器片	⑱
93	外岡	山本町外岡字長者屋敷	古	土師器片、鉄滓、石器	⑱
94	窪ノ沢	山本町外岡字窪ノ沢	古	土師器片	⑱
95	保竜Ⅰ	山本町豊岡金田字保竜	古	土師器片	⑱
96	保竜Ⅱ	山本町豊岡金田字保竜	古	土師器片	⑱
97	保竜Ⅲ	山本町豊岡金田字保竜	古	土師器片	⑱
98	古館	能代市中沢字蟻古館	中	空堀、段築、土師器片、須恵器片、珠洲系陶器	⑥
99	保竜館	山本町豊岡金田字保竜	中	土師器片、石器	⑥
100	田倉館	山本町豊岡金田字田倉館	中	空堀	⑥
101	ケゴ館	山本町森岳字上中沢	中	縄文土器片、石器	⑥
102	木戸沢館	山本町森岳字木戸沢	中	段築	⑥
103	小狭間館	山本町森岳字小狭間	中	空堀、段築、土師器、須恵器、鉄滓	
104	東飛塚館	山本町森岳字東飛塚	縄・中	土塁、古井戸	
105	藤巻館	山本町森岳字館の沢	中	空堀	

文献

①八竜町教育委員会『山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査略報』1972(昭和47年)

②八竜町教育委員会『第２次概報萱刈沢貝塚』1973(昭和48年)

③八竜町教育委員会『第３・４次概報萱刈沢貝塚』1974(昭和49年)

④山本町教育委員会『古館堤頭遺跡発掘調査報告書』1977(昭和52年)

⑤八竜町教育委員会『萱刈沢貝塚－山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査報告書』1979(昭和54年)

⑥秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981(昭和55年)

⑦秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1982(昭和56年)

⑧能代山本地方史研究会『能代山本地方史研究』２号　1983(昭和57年)

⑨秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1983(昭和57年)

⑩秋田県教育委員会『真壁地遺跡・蟻の台遺跡発掘調査報告書』1983(昭和57年)

⑪秋田県教育委員会『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』1984(昭和58年)

⑫秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』3 1985(昭和60年)

⑬秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1986(昭和61年)

⑭秋田県教育委員会『国営能代開拓建設事業埋蔵文化財発掘調査－上の山Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』1986(昭和61年)

⑮秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1987(昭和62年)

⑯秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ・寒川Ⅱ遺跡－』1988(昭和63年)

⑰秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』1989(平成元年)

⑱秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(中央版)』1990(平成2年)

成合台地上の逆川遺跡(15)、および米代川右岸台地上の館下Ⅰ遺跡の3遺跡が調査されているに留まる。此掛沢Ⅱ遺跡では仙北郡協和町米ヶ森遺跡[註1]を標式とする米ヶ森型台形石器や、ナイフ形石器を含む旧石器時代のブロックが検出され、逆川遺跡では昭和56年度に行われた分布調査時に石刃、石核等が出土している。館下Ⅰ遺跡[註2]では杉久保型ナイフ形石器2点が出土している。縄文時代草創期・早期・前期初頭の遺跡では、成合台地の北側に立地し、竪穴住居跡7軒、円筒形の陥穴3基を検出した早期末葉から前期初頭の寒川Ⅰ遺跡(6)が調査されている。

縄文時代前期中葉以降になると遺跡数、遺物量とも増加する。縄文時代前期中葉から後期前葉の遺跡では、萱刈沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、県指定史跡萱刈沢貝塚(25)、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡(7)、八郎潟北東の寒城台地上の古館堤頭遺跡(27)などが調査されている。このうち竪穴住居跡16軒、フラスコ状土坑14基等を検出した縄文時代前期末から中期中葉の集落跡である萱刈沢貝塚と、萱刈沢Ⅰ・Ⅱ遺跡の3遺跡は、鴨子台、八幡台遺跡の南側に隣接し、相互に関連する遺跡であることが知られる。また、米代川右岸側では、縄文時代前期の大型住居跡が検出された杉沢台遺跡[註3]と、竪穴住居跡34軒、フラスコ状土坑14基を検出した中期前葉から中葉の集落跡である館下Ⅰ遺跡がある。

縄文時代後・晩期の遺跡では、成合台地の北側にあって1段低位の浅内台地上に位置する柏子所貝塚[註4]が著名であり、他に志戸橋野台地上の蟻の台Ⅳ遺跡(22)、八郎潟東岸、鹿渡台地上の高石野遺跡[註5]などがある。また、縄文時代と判断されているものの、遺物が伴わず時期の特定のできない陥穴の検出された遺跡には、成合台地上の十二林遺跡(8)、石丁遺跡(10)、福田遺跡(11)などがある。

能代山本地方においては、弥生時代以降奈良時代までに特定される遺跡はほとんど確認されておらず、寒川Ⅱ遺跡で続縄文文化期の土壙墓6基が検出されているほかは、成合台地上の向山遺跡(79)、大曲家の上遺跡(80)、浅内台地上の真壁地遺跡[註6]で少量の遺物が出土している程度である。

平安時代の遺跡としては、成合台地上の福田遺跡、寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡、十二林遺跡、浅内台地上の上の山Ⅱ遺跡(84)などで調査が行われている。福田遺跡では竪穴住居跡16軒、十二林遺跡では竪穴住居跡12軒、掘立て柱建物跡5棟、地下式の須恵器窯跡1基などを検出している。上ノ山Ⅱ遺跡では昭和58・60年度の2次にわたる調査で竪穴住居跡39軒、掘立て柱建物跡13棟が検出されている。また、米代川と檜山川の間にある幟山丘陵地西縁の段丘上には、『能代営』擬定地である大館遺跡が[註7]位置する。

中世の遺跡としては、檜山安東氏の居城で県指定史跡の檜山城、金山館跡[註8]、館の上館跡(13)などが調査されている。

註

(1)協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』1977(昭和52年)

(2)秋田県教育委員会『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』1979(昭和54年)

(3秋田県教育委員会『杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告書』1981(昭和56年)

(4)能代市教育委員会『柏子所貝塚発掘調査報告書』1972(昭和47年)

(5)琴丘町教育委員会『高石野遺跡発掘調査概報』1983(昭和58年)

(6)秋田県教育委員会『真壁地遺跡発掘調査報告書』1983(昭和58年)

(7)能代市教育委員会『大館遺跡発掘調査報告書』1978(昭和53年)

(8) 能代市教育委員会『金山館遺跡発掘調査報告書』1986(昭和61年)

発掘調査の方法

調査区の設定

調査は調査区全域にかかるように4mの碁盤状の格子を組むグリッド方式によった。すなわち、調査区内に定めた基準点（鴨子台遺跡；路線中心杭NO.135、八幡台遺跡；同NO.120）から座標北方向に設定された基準線と、それに直交する東西方向の基準線を二次元の座標軸のそれぞれとして両軸に4m毎に刻みを設け、その刻みを通る直線の交点に打設した杭によって4m四方の区画を設定した。東西、南北両基準線に設けられる刻みには、西から東に向かってＬＲ・ＬＳ・ＬＴ・MA・MB…→MT・ＮＡ・ＮＢ…→ＮＥと2文字のアルファベットと、南から北に向かって07→59と昇順する2桁の数字を振り当てて、グリッド四隅の交点にあてられるこのアルファベットと算用数字の組み合わせのうち、南東隅のものを各グリッドの呼称名とした。

粗掘り作業はこのグリッド毎に行ったが、鴨子台遺跡では表土の厚い部分が多いためグリッド杭打設および人力を投入しての粗掘り以前に、地表下の遺構・遺物に影響が及ばない範囲で重機による表土除去を行った。また、排土場所の確保が困難なため調査前半期間には一時的な捨て場所を設けて随時搬出処理することとし、後半は調査終了区域を排土場所とした。実際の調査にあたっては1グリッド(4m)おきに南北方向のグリッド列の掘り下げを行い、必要に応じて両脇のグリッドを拡張した。残ったラインについては両サイドの精査終了グリッドを捨て場とした。八幡台遺跡では全ての作業を人力によって行ったが、調査はＡ地区からＢ地区への順で進められた。

遺構精査およびその記録

遺構は検出順に通し番号を付し、遺構種別を表すアルファベットとの組み合わせで呼称している。これらの中には、精査の進行に従い性格が変わり、その名称を変更したものもあり、ま

た、遺構ではないことが判明し番号を抹消したものもある。

検出した遺構は、基本的には2分法による覆土の観察を行ったが、面的に広がりをもつ竪穴住居跡などは適宜4分法を用いた。また、溝および溝状の陥穴の土層観察は横断面で行い、溝（ＳＤ44・65・70）はほぼ2グリッドおきにベルトを設定した。さらに必要のある場合には、適宜ベルトを設定して掘り下げを行った。

遺構の記録は主に実測図作成と写真撮影によった。

図面は、遺構の平面形、焼土、炭化物範囲を記録した平面図、および、断面形、覆土の堆積状態を記録した断面図を作成し、陥穴については縦断面形のエレベーション図も作成した。作図は方眼杭を用いた簡易遣り方測量により、精査途中で必要に応じて複数回行った。その縮尺は原則的に１／20とし、鴨子台遺跡の土器埋設遺構（ＳＲ04•69）のみ１／10で作成した。

写真は、遺構検出時の確認状況、断面形の覆土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に撮影を行い、旧石器時代のブロックの遺物出土状況についても複数回撮影を行った。フィルムは基本的に35㎜のモノクロとリバーサルフィルムを用い、随時ネガカラーフィルムでの撮影も加えた。また、遺跡近景の撮影にはブローニー版フィルムも用いている。

遺物は、遺構内外出土遺物の全点の出土位置を簡易遣り方測量で計測することとし、取り上げ順の通し番号で遺物取り上げ台帳に記録した。記載項目は1.遺物番号、2.出土グリッド、3.出土層位（出土遺構）、4.Ｘ座標、5.Ｙ座標、6.Ｚ座標、7.種別、8.取り上げ月日、9.備考の9項目であり、うち、Ｘ座標はグリッド名を示す南東隅の座標から西への距離、Ｙ座標は同じく北への距離、Ｚ座標は標高を指す。また、遺物の取り上げに際しては、遺跡略号、遺物番号、出土グリッド（出土遺構）、出土層位、取り上げ年月日をラベルに記入した。なお、室内作業における遺物台帳の整理、および、鴨子台遺跡での遺物平面分布、垂直分布図作成にはパーソナル・コンピューターを使用した。(註1)

註

(1)吉田　真「遺物管理プログラムの作成」『研究紀要』第5号　秋田県埋蔵文化財センター　1990（平成2年）

鴨子台遺跡
（かものこだい）

（3KNKD）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

鴨子台遺跡は山本郡八竜町鵜川字鴨子台に所在する。遺跡は成合台地と呼ばれる南北の延長約８㎞、標高20～30ｍの海成段丘上に立地するが、この台地は、西に向かって開析する谷が幾筋か入り込んでいて大きく６つのブロックに区切られる。遺跡が位置するのは萱刈沢Ⅰ遺跡と萱刈沢Ⅱ遺跡の間を開く谷と、八竜工業団地の北側を開く谷とに挟まれた南から２番目のブロックである。遺跡はこの区域のほぼ中央西寄りに位置し、南北に長い窪地を呈する。遺跡最低位部の標高は34ｍ程である。

遺跡の四周は窪地から連続する高台が最低位部を中心に取り囲む景観を呈する。

調査区最低位部から北東170ｍ程の地点と、北西120ｍ程の地点、および、南側から南西にかけての80～90ｍ程の間隔で弓なりに連なる地点は、標高41.5ｍ前後の遺跡周辺では最高位を示す箇所である。北東高位部から南に向かっては低くなるものの調査区低位部からみて東側90ｍ程の地点では38ｍ前後と再び幾分高くなる。この南側、調査区から南東では東側に向かって開析していたと思われる埋没谷とおぼしき状況が認められる。南西、および北西高位部は高低差約1ｍ前後で連なる尾根状の地形である。また、西側高台の北端は一部八竜工業団地の造成で削平され、北側は緩い上り傾斜で開けた地形である。調査区低位部に連続する傾斜は、西から南にかけては勾配がきつく南西が最も急である。ほかは概ね緩やかである。

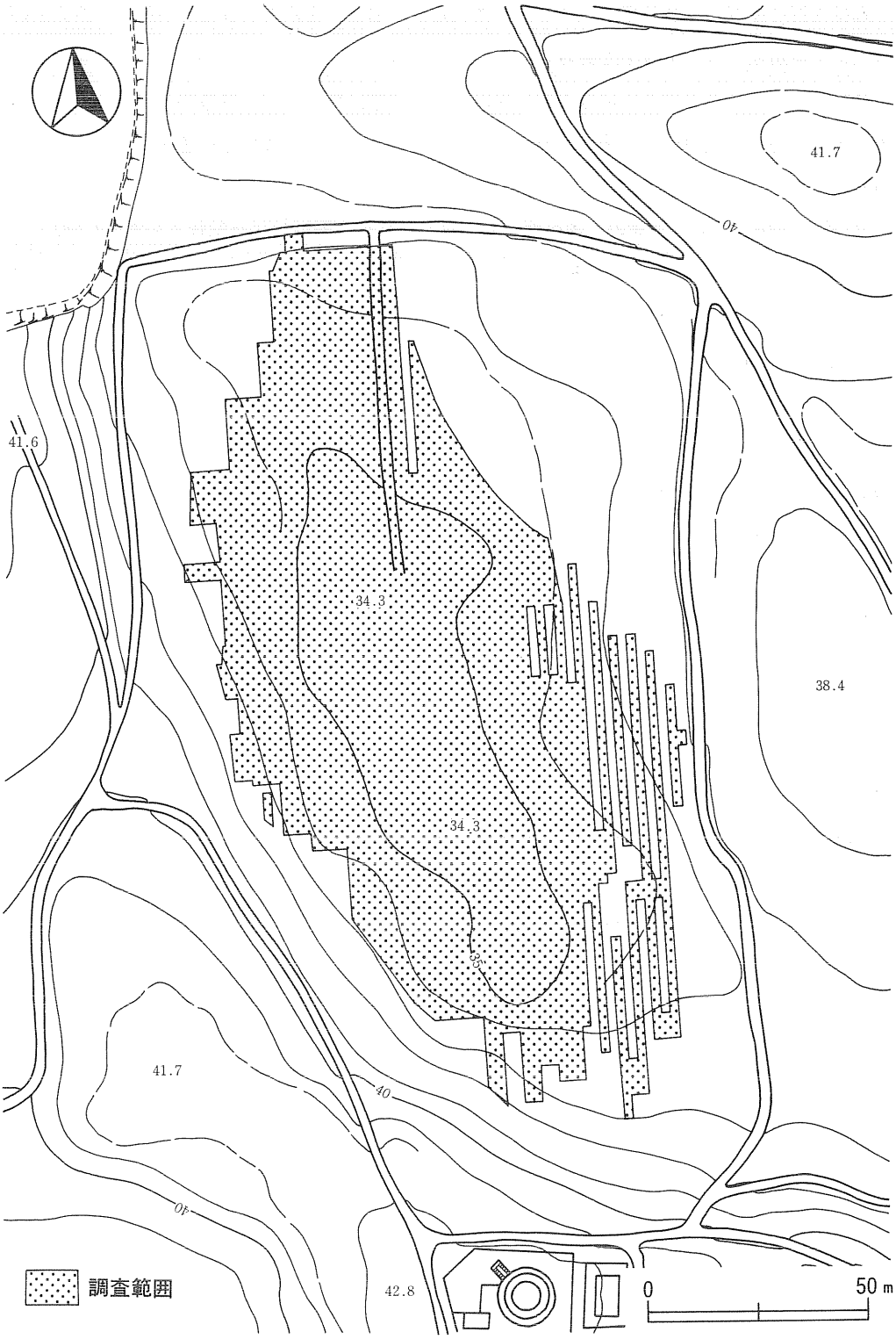
調査区西側の尾根状高位部のさらに西側に広がる緩斜面には、鴨子台遺跡よりＳ－30°－Ｗの方向約150ｍの地点に八幡台遺跡（Ａ地区）が位置している。

調査前の現況は、西部が畑地で他は杉の植林地であった。しかし、植林地中であっても畑の畝の痕跡を確認することができ、調査区を含む周辺区域に畑地から山林への土地利用上の変化があったことが窺われる。

第２節　遺跡の基本層序（第２図～第４図）

今回の調査区は窪地状の地形をなし、最低位の中央部と西側の斜面、および東・北側とでは層序は一様ではない。調査においては、大きくはⅠ～Ⅴ層を識別した。Ⅰ・Ⅱ層は完新世堆積物、Ⅲ層以下は更新世堆積物とみられる。ただし、Ⅲ層上部の堆積時期は必ずしも明確ではない。調査では調査区中央部の旧石器時代遺物の出土地点周辺はⅢ層下部まで掘り下げ、その他の地域はⅢ層上部まで掘り下げを行った。

Ⅰ層は表土・耕作土もしくは造成土である。土地利用の現況に対応し、調査区中央部および



第１図　周辺地形

北端は大形の樹根および草根が混在し、比較的腐植に富む。東側と北側は畑耕作土、西側斜面は主に町道造成に伴う造成土である。

Ⅱ層はいわゆるクロボク土に基本的に対応する。調査区周辺部では層厚20cm前後と薄く、最低位の中央部では層厚40cm前後と相対的に厚い。さらに、中央部では主に色調からａ・ｂに細分し得る。

Ⅱa層は黒味が強く、腐植の沈着が著しく、粘性に富む。層厚は10cm前後と相対的に薄い。

Ⅱb層は褐色を呈し、粘性に富み、よくしまる。Ⅱa層との境界は凹凸があるものの、調査区中央部では比較的明瞭である。両層は周辺部でその境界はしだいに不明瞭となり、その色調は褐色に漸移的に変化する。

Ⅱ層とⅢa層との境界は漸移的である。

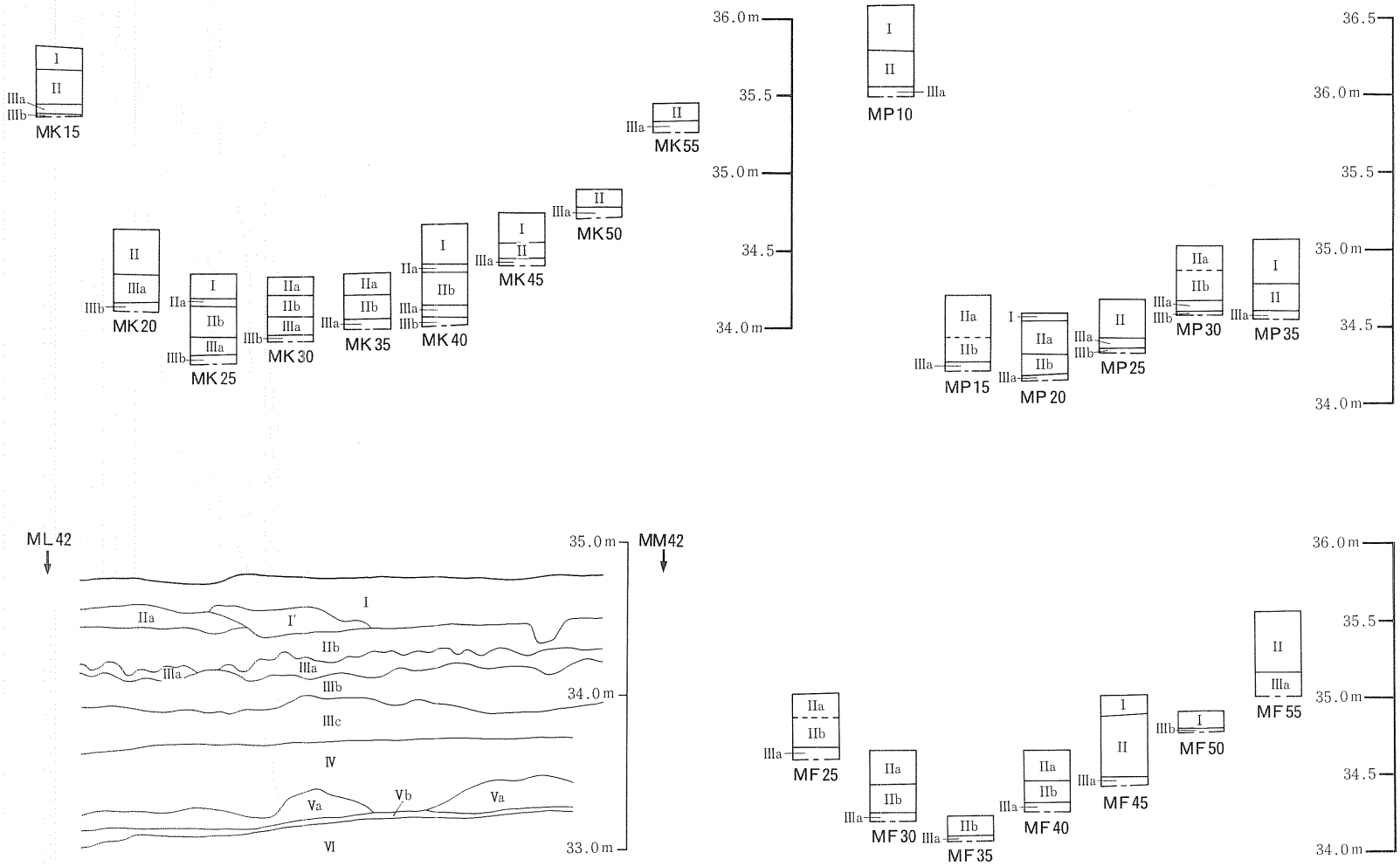
ここで細分したⅡa・Ⅱb層の境界は調査区の周辺で漸移的に消失し、その境界は層理面とは認めることができない。したがって、ここでの細分層は堆積層位ではなく、土壌層位に相当するものと考えられる。Ⅱa層は土壌層位Ａ層、Ⅱb層は土壌層位Ｂ層に対比される。(註1) このＡ層およびＢ層の発達からは、調査区中央部において現表土であるⅠ層堆積以前に草原状植生が形成されていたものと予想される。周辺部ではＡ・Ｂ層の分化が認められず、腐植の沈着が相対的に弱くなることは、中央部とはⅡ層堆積時の植生が異なっていたことによる可能性があろう。

本層での遺物・遺構の検出状況をみると、調査区中央部においてはⅡb層から縄文時代早期～中期の遺物が出土し、一部の地点では本来の出土層準ではないとみられるが、旧石器時代の遺物も確認される。Ⅱa層からの出土が確実な遺物は認められない。また、古代の溝（ＳＤ65）がⅡb層上面で確認されるが、土層断面の観察ではⅡa層上面からの掘り込みと認められる。また、一部の焼土遺構はⅡa層中で検出される。一方、調査区周辺部では縄文時代中期の遺物がⅡ層中位～下位で出土している。焼土確認面はⅡ層上位から下位に及んでいる。

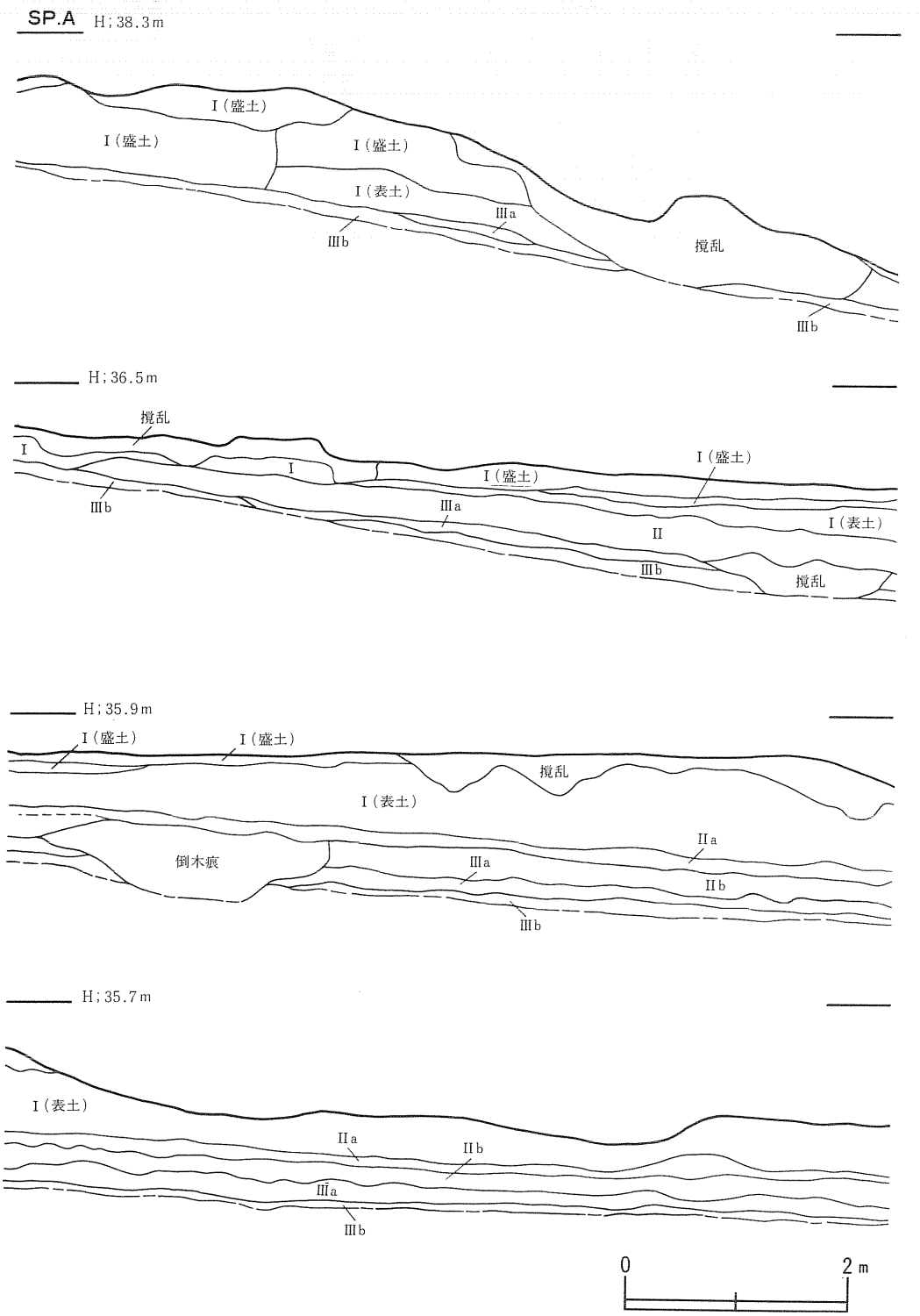
これらの遺物・遺構の確認状況から、中央部におけるⅡb層は縄文時代早期～中期の遺物包含層に近似的に対比でき、Ⅱ層の堆積およびⅡa・Ⅱb層の生成は、古代を下限とすると考えられる。

Ⅲ層以下は更新世堆積層と考えられる。

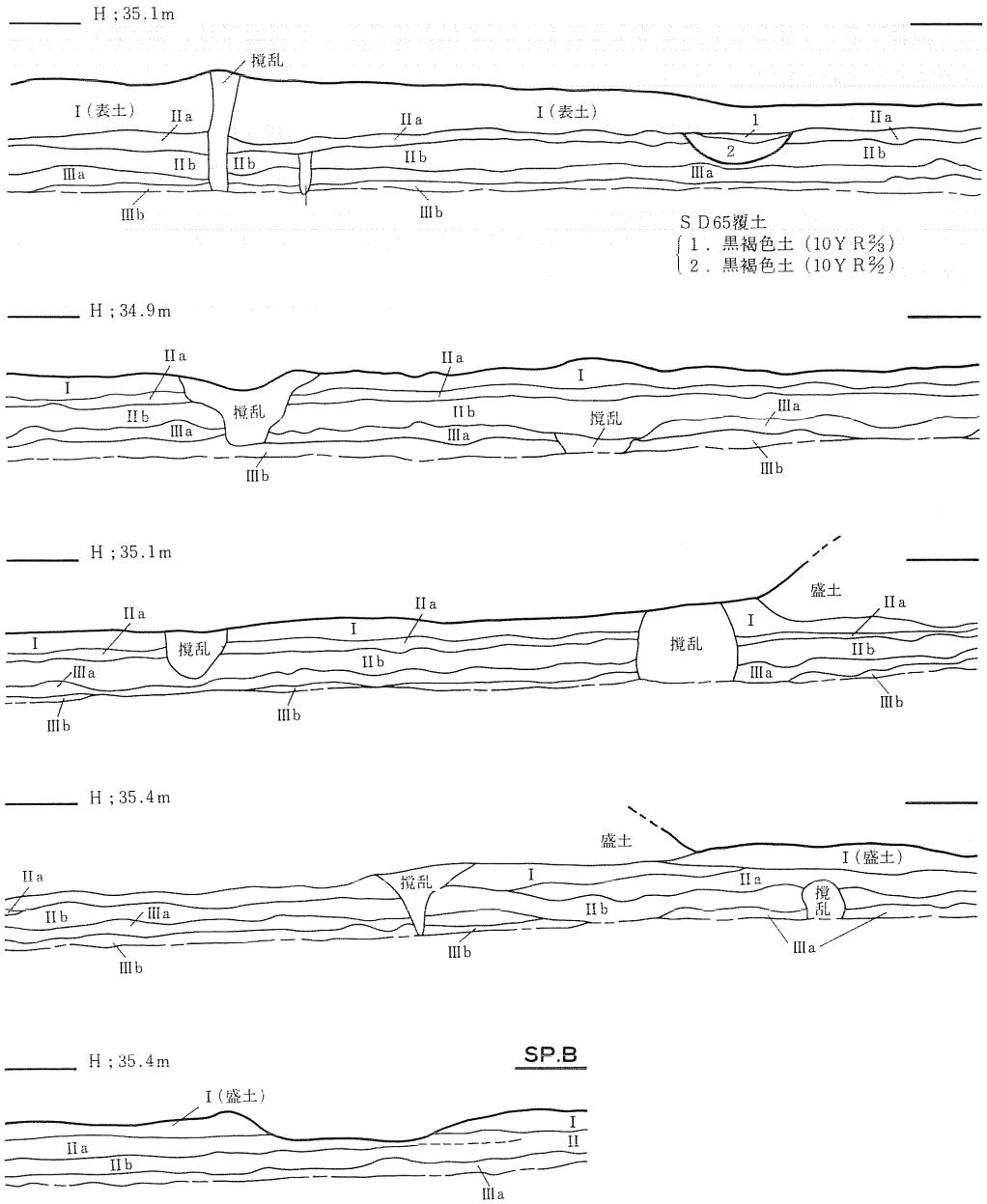
Ⅲ層は基本的によくしまる粘質土である。Ⅲa層はいわゆる漸移層で、層厚10cm前後を測る。標高34.2～34.4m前後の調査区中央部では、旧石器時代の遺物を包含する。上下層との境界は漸移的である。Ⅲb・c層は極めてよくしまる粘質土で、下位のⅣ層とは整合に接する。両層の色調は明瞭に異なり、その境界は凹凸が著しいが、土性は酷似している。調査区の西隣の標高40m前後の相対的に高位部の土層断面の観察では、潟西層最上層とみられる風成砂層の直上に



第２図　基本土層図（柱状図および深掘区土層図）



第3図　基本土層図（SP.A－SP.B　その1）



I　黒褐色土（10YR2/2）　もしくは盛土
II　黒褐色土（10YR2/3）
　IIa黒色土（10YR2/1）
　IIb黒褐色土（10YR2/3）
IIIa　褐色土（10YR1/4）
IIIb　黄褐色土（10YR5/6）

0　2m

第4図　基本土層図（SP.A－SP.B　その2）

Ⅲb層相当層が堆積しており、Ⅲc層は認められない。これらのことから、Ⅲc層はⅢb層が地下水の影響でグライ化したものと考えられる。MM・MN40グリッド周辺では、Ⅲb層からも旧石器時代の遺物が出土している。

Ⅳ層は若干砂質をおびた粘質土である。層厚40cm前後を測る。基質の色調は浅橙色を呈し、Ⅲc層と同様のグライ層と考えられる。本層中には酸化鉄の暈管状斑文が発達しており、この特徴から、調査区中央部は本層堆積時はアシ等の湿地植物が繁茂した沼沢地的環境であったと想定される。下位のⅤ層とは整合に接する。

Ⅴ層は流水の影響を強く受けた堆積環境で生成したとみられる砂質粘土層もしくは砂層である。土層断面では東から西に向かって若干傾斜している。

Ⅴa層は砂質粘土層である。上面は凹凸が著しく、層厚5～20cm前後を測る。Ⅴb層は粗砂～細砂層で、層厚2～10cm前後である。Ⅵ層とは不整合に接する。

Ⅵ層はⅣ層と類似した土性の粘質土で、同じく沼沢地的環境下での堆積とみられる。

以上の層序から、調査区最低位の中央部周辺は少なくともⅣ層堆積時までは沼沢地もしくは流水の影響を強く受ける環境であり、人類の拠点的な活動の場としては不適当な環境であったと推定される。Ⅲ層堆積時にはグライ層の存在から地下水位の高位期も存在したとみられるが、総体として乾燥化し、人類の本格的な活動が可能となったものと思われる。

註

(1) Ⅱa・b層生成以前の倒木痕には、倒れた根とともに当時の地表付近まで持ち上げられたⅢc層が、暗褐色を呈し、Ⅱb層に土壌化している例が認められる（図版2－3）。

第3節　調査の経過

発掘調査は、平成2年7月2日から11月22日まで行った。

作業に先立ち、7月3日から7月19日まで重機による表土除去を行い、その間の7月9日から人力での粗堀作業を開始した。

8月17日には、MR11・MN16・ME25グリッドで焼土の広がりを数箇所（SN01・03・06・08・53・54）確認し、7月30日には、MR20グリッドのⅢa層中からⅢb層にかけて、両面調整石器削片、周縁加工の掻器等、石器数点と、MR17グリッドのⅢa層上面で貝殻文土器片1点を含む縄文土器片10数点が出土した。また、8月6日にはMM16グリッドで正立の土器埋設遺構（SR04）を検出した。

8月27日には、MP25・26グリッドで石核・剥片がⅡb層下部から集中して出土しはじめ、旧石器の存在が確認された。この区域での出土石器は9月13日の間までに50数点に達している。

8月28日には、MQ31グリッドを中心とする地区のⅡ層中で先に見つかっていたのと同様の

焼土遺構数基（ＳＮ21･22･28･29･31）を確認し、同31日には、ＭＴ22グリッドで陥穴（ＳＫＴ36）を確認した。９月４日には溝跡（ＳＤ44）を、９月５日にはＳＫＴ36の北側約2ｍに平行して陥穴（ＳＫＴ42）を検出した。

９月下旬には台風19号の影響等天候の悪化により、調査区中央を中心とした広範囲が冠水したため、調査は冠水を免れた調査区北側に場所を移して進められた。９月25日には北部ＭＨ・ＭＧ56グリッドでこれまで確認されたよりもやや下位で焼土遺構（ＳＮ52）を検出した。９月26日、水没区域が復旧し、この区域での作業が再開され、27日には、ＬＴ･ＭＡ34グリッドで焼土遺構群（ＳＮ59･60･61）が検出された。10月３日には先に検出していたＳＮ52の周囲に落ち込みを検出し、本遺構が竪穴住居址であることを確認した。

10月11日、ＳＤ44の精査時にＭＭ40グリッドでⅡb層中から石器･剥片が10数点出土したため周囲のグリッドの拡張した結果、10月19日にはナイフ形石器が検出され、ＭＰ25･26グリッド同様の旧石器ブロックであることが確認された。次いで、10月23日、ＭＯ34グリッドいおいてもナイフ形石器が出土した。さらに10月30日には、上記のグリッドを中心とする旧石器ブロックの中間地点、ＭＯ37グリッド周辺においても旧石器と思われる石器が多数出土し始めた。

一方、10月15日、ＳＮ59下で土坑（ＳＫ68）プランを確認した。土層観察の結果、掘り込み面は焼土遺構直下であることが判明した。また10月16日、ＭＬ39グリッドの漸移層よりやや上位で正立位の土器を検出し、土器埋設遺構ＳＲ69としてベルトを設定し掘り下げを行った。10月17日、東西28ラインの基本土層断面図の作成を始める。10月19日には、調査区中央部で検出されていたＳＤ65溝と重複する土坑（ＳＫ67）の底面中央にピットを１基確認し、円筒形陥穴であることが判明した。

11月１日、調査面積のほぼ３割約3,500㎡を残し、調査前半の終了完掘写真撮影を行った。これ以後、ＭＭ40、ＭＯ37、ＭＯ34グリッドを中心とした旧石器ブロック３箇所の精査と残った面積の調査を引き続き行い、11月13日、ＭＭ40グリッドの旧石器ブロックの北側で深堀りをした箇所の土層断面図作成を行い、土壌サンプルを採集した。11月14日には、ＭＩ53グリッドⅢa層上面で大形の刃部磨製石斧が出土した。11月19日から機材の整理を始め、11月22日には、機材を撤収し、発掘調査の現場作業を完了した。

11月26日には、調査終了後ではあったが秋田大学鉱山学部助教授西谷忠師氏に来跡願い、熱残留磁気測定の試料を採取していただいた。

第２章　調査の記録

本遺跡の調査では旧石器時代から縄文時代にかけての遺構の他、古代以降に残されたか、あるいは時期不詳の遺構も検出されている。旧石器時代の遺構としては石器の集中する５つのブロックがあり、縄文時代の遺構としては竪穴住居址１軒、土器埋設遺構２基、陥穴６基がある。また、古代以降あるいは時期不詳の遺構としては、焼土遺構26基、溝跡２条がある。これらの遺構の配置は、第５図に示した通りである。以下に時期を追って記述する。

第１節　旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の５箇所のブロックは便宜上新旧に分けて捉えた。前者を第Ⅰ群石器、後者を第Ⅱ群石器とする。

（１）　第Ⅰ群石器

（１）―１　出土層位と平面分布

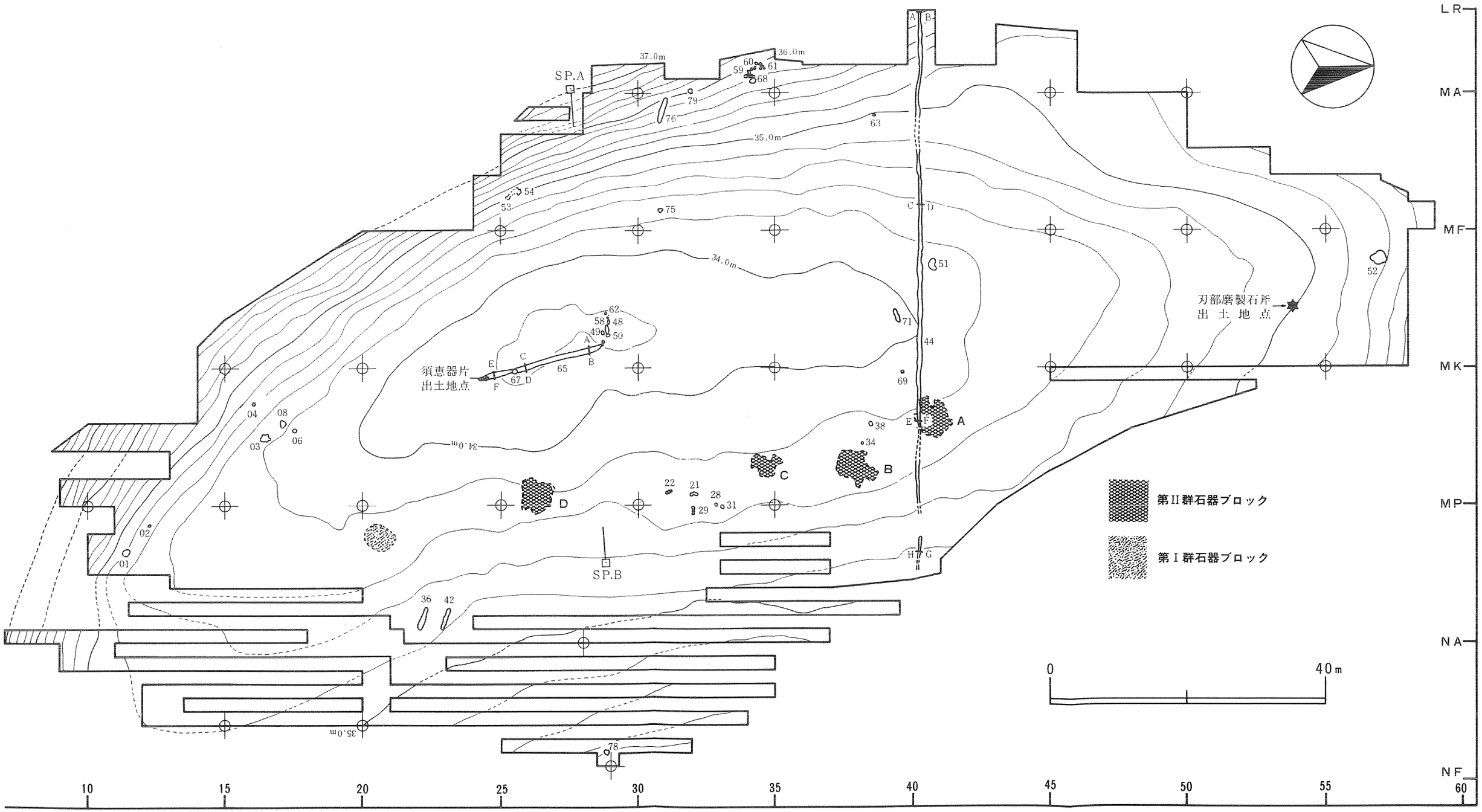
調査区の南東隅に近いＭＲ20、ＭＲ19、ＭＲ20、ＭＱ20グリッドを中心に検出された一群の石器である。これらの区域からは両面調整石器の削片１点と、周縁加工の掻器２点、二次加工ある剥片１点および剥片８点が出土し、ＭＲ20、ＭＱ20グリッドにまたがる径４ｍほどの範囲内に削片、掻器を含むブロックが認められた。出土地点付近は遺跡内にあって中央最低位部分が南東側に開く箇所にあたり、表土以下の堆積土も比較的厚く、安定した堆積状況を示す箇所である。出土層準はⅢa層が中心であるが、一部下位のⅢb層中や上位のⅡb層との界面近くで出土した資料もある。

（１）―２　石器

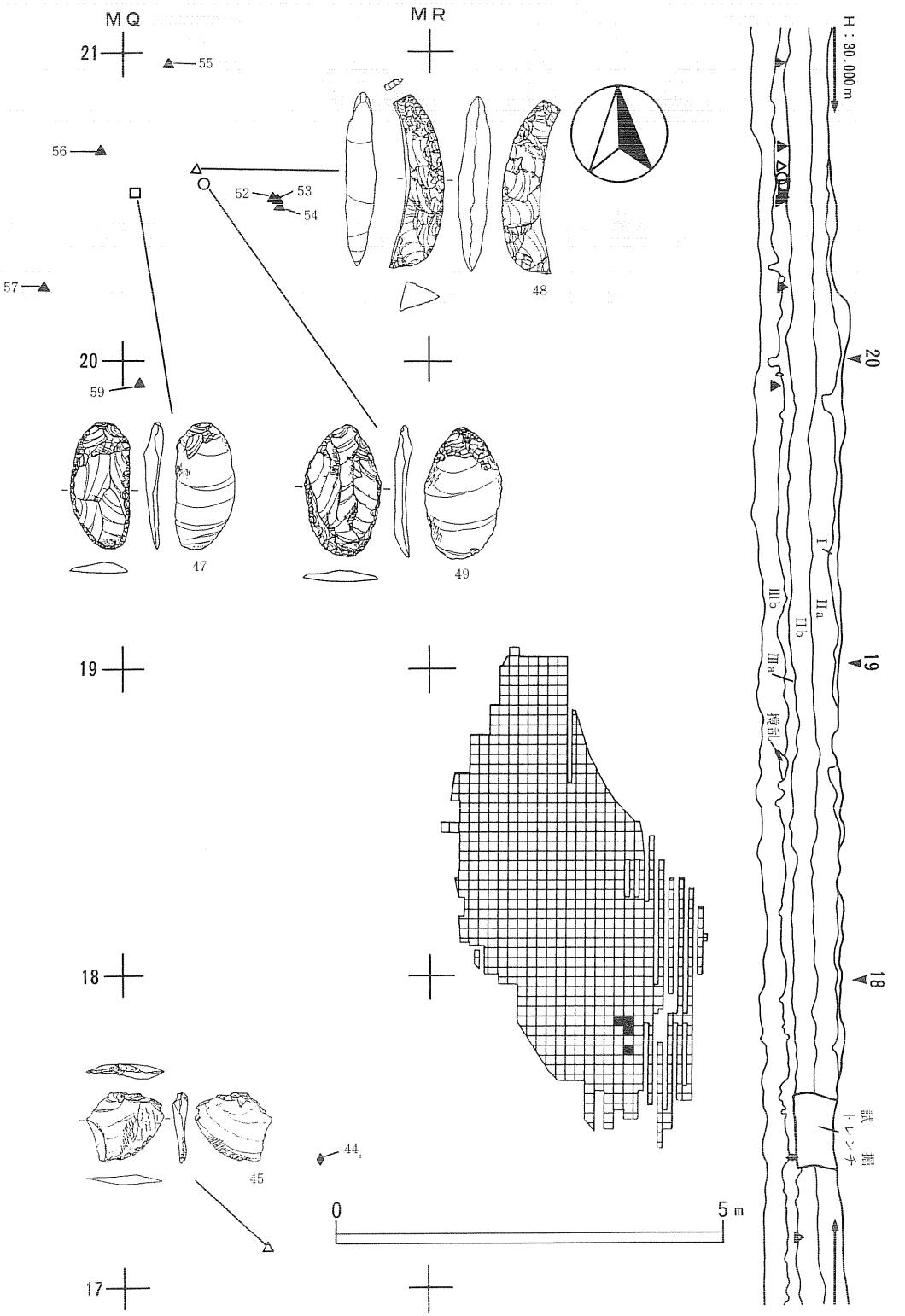
出土した12点の石器は総て頁岩製である。

第７図に示した９点の石器は、相互の接合関係は認められなかったものの、その石質の特徴から同一母岩から得られた可能性ある資料と判断した。素材はにぶい褐色を呈する珪質頁岩である。削片１点および二次加工ある剥片１点、剥片７点が含まれる。剥片には被熱しにぶい赤褐色を呈する資料もある。これらの９点の資料のうち８点は、ＭＱ20、ＭＲ20にまたがるブロック内に含まれ、45の資料のみがおよそ13.5m南に離れたＭＲ17グリッドで出土した。

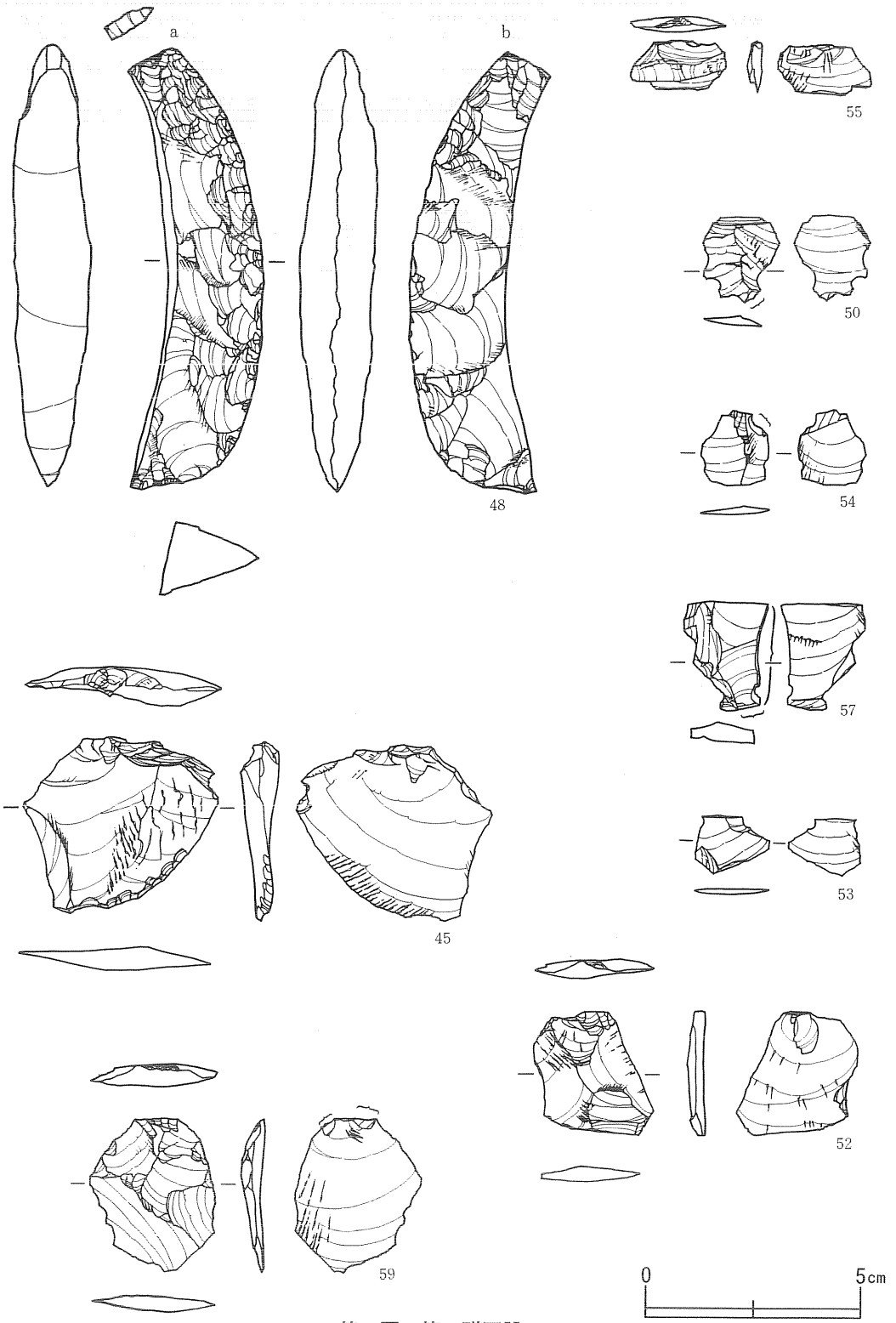
48の両面調整石器の削片は、b面に施された平坦剥離面を打面としてa面にも連続した平坦剥離を加えた後、一端からの加撃によって打割されている。打割後、甲板面とは逆方向からの樋状剥離が削片の打面側に加えられている。さらにこの樋状剥離面を打面として甲板面に平行する剥離がa、b両面に加えられている。あるいはこの打割後の再加工は、削片自体が使用さ


SP.A
SP.B
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
須恵器片
出土地点
刃部磨製石斧
出土地点
第Ⅱ群石器ブロック
第Ⅰ群石器ブロック
0
40m
LR
MA
MF
MK
MP
NA
NF
10
15
20
25
30
35
40
45
50
55
60

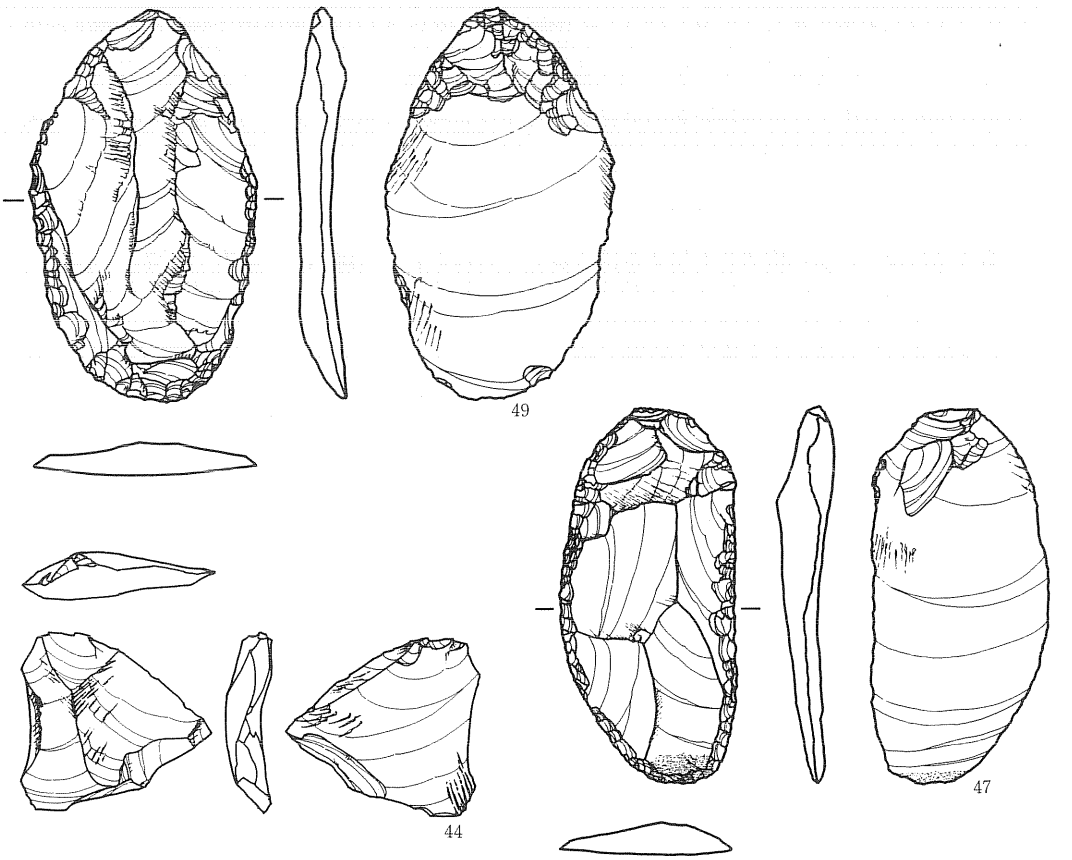
第５図　遺構配置図

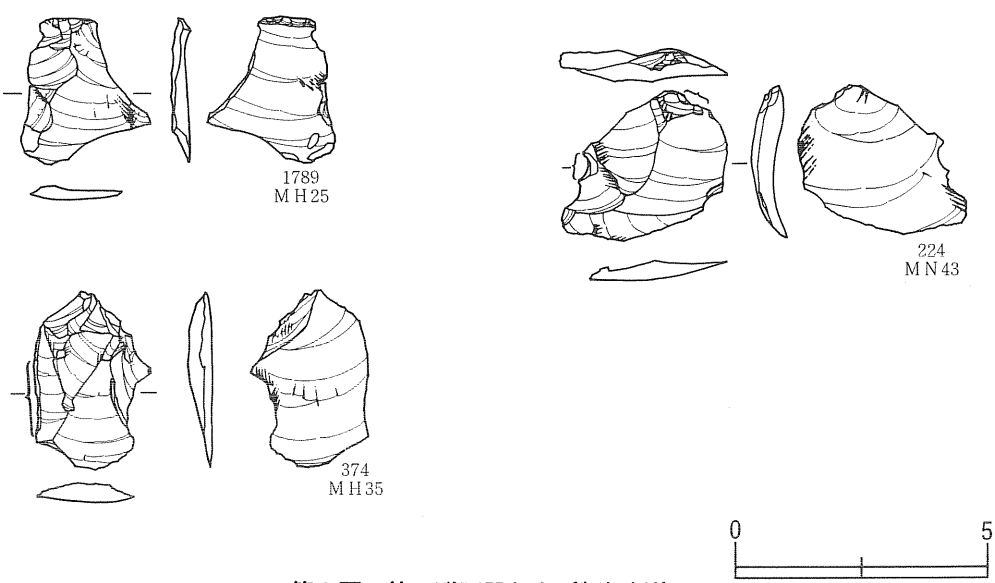


第６図　第Ⅰ群石器出土地点



第７図　第Ⅰ群石器





第８図　第Ｉ群石器および類似剥片

れた可能性を示唆するものかもしれない。45の二次加工ある剥片は礫皮面に近い扇形剥片を用い、緩い弧を描く末端にやや平坦な細部加工を連続的に施している。打面に残る剥離痕並びに背面の構成を考慮すれば両面調整石器から剥離された剥片を素材とした可能性がある。55、56、54、57、53、52、59の剥片は背面に3方向以上の交錯する先行剥離面を残し腹面が湾曲する特徴を備えており、これらも同種の剥片と推定される。

第8図49は、にぶい黄橙色を呈する珪質頁岩を素材とした周縁加工の掻器である。MQ20、MR20にまたがるブロック内からの出土である。背面には3方向からの先行剥離面が残される。基部は腹面側に平坦加工を施して打瘤を除去し尖鋭に仕上げられている。これに連なって、背面の両側縁および末端には平坦加工が施され刃部を形成している。末端の刃角は側縁側のそれよりも急斜度である。

47は灰白色の縞状を呈する珪質頁岩製の周縁加工掻器である。49同様、MQ20、MR20のブロックからの出土である。背面には大きく5面の先行剥離面が残され、ほかに打面近くには3面の頭部調整面が認められる。打面付近を除いた両側縁および末端に、連続した平坦加工を施して刃部を作出している。末端の加工より両側縁のそれが顕著である。

44は第7図45の資料とともにMR17グリッドから出土した剥片である。灰黄褐色の珪質頁岩を素材とする。背面には大きく5面の先行剥離面が残され、腹面は大きく湾曲する。両面調整石器から得られた剥片の可能性がある。

以上が調査区南東隅の石器集中範囲から出土した石器群である。剥片は異方向からの複数の先行剥離面が背面に残され腹面が湾曲する特徴をもつが、これと類する資料は他の区域からも得られている。第8図1789はMH25グリッド出土の頁岩製剥片であるが、直線的な打面には両面調整石器の側縁が残され、腹面も大きく湾曲する。224、374はそれぞれMN43、MH35出土の頁岩製剥片である。いずれも背面に交錯する方向の先行剥離面が残り、腹面が湾曲する。

第1表　第Ⅰ群石器一覧表

番　号	個体別番号	グリッド	E>W	S>N	標　高	器 種	長 さ	幅	厚 さ	被 熱
48	40	MR20	300	247	34.295	Sp	102.9	32.3	17.45	
45	40	MR17	216	40	34.378	RF	40.3	45.0	6.4	
59	40	MR19	372	369	34.253	F	35.4	29.6	4.5	
55	40	MR20	336	385	34.303	F	11.25	21.7	3.8	有り
56	40	MQ20	32	271	34.31	F	19.45	17.5	2.3	有り
54	40	MR20	201	199	34.297	F	17.5	15.58	1.8	有り
57	40	MQ20	103	95	34.252	F	25.3	19.5	4.8	有り
53	40	MR20	202	200	34.294	F	13.5	17.35	1.25	
52	40	MR20	206	205	34.295	F	30.8	26.9	3.7	
49	41	MR20	295	230	34.294	S	77.7	44.9	9.4	
47	42	MR20	383	218	34.357	S	74.85	35.0	10.15	
44	43	MR17	150	162	34.306	F	34.9	37.25	7.95	
1789	43	MH25	2	268	34.002	F	28.8	24.8	3.8	有り
224	45	MN43	69	196	35.166	F	30.2	34.7	6.05	
374	44	MH35	144	117	34.07	F	35.3	23.35	4.7	

器種凡例　Sp；削片，RF；二次加工ある剥片，F；剥片，S；掻器

（２）　第Ⅱ群石器

調査区の東側に沿って４箇所の旧石器ブロックが検出された。これらのブロック間では相互に接合関係が認められ、共通した時間幅の中で遺跡内に形成されたことが知られたため、これらブロックの出土石器、および、接合作業等の個体識別の作業を経てブロック内出土石器と同じと判断された周辺の出土石器を第Ⅱ群石器と一括して扱うこととする。

第Ⅱ群石器の総点数は965点である。（２）－５で詳述するが、これらの石器は計28（うち個体27は接合して完形となった石製品、個体30は個体識別が不可能な程被熱した資料、個体28、29は欠番）の母岩別個体に分けられた（第８表）。

（２）－１　ブロック配置と石器の出土層位

検出された４箇所のブロックは、調査区最低位部を中心として巡る34.2mの等高線の東側に位置する。MM・MN40・41グリッドを中心とした箇所のものをＡブロック、MO37・38グリッドを中心とするものをＢブロック、MO34・35グリッドを中心とするものをＣブロック、MP25・26グリッドを中心とするものをＤブロックとした。最も北に位置するＡブロックとその南東に位置するＢブロックとの距離は14m、Ｂブロックとさらにその南に位置するＣブロックとの距離は13m、Ｃブロックと最も南に位置するＤブロックとの距離は33.5mである。

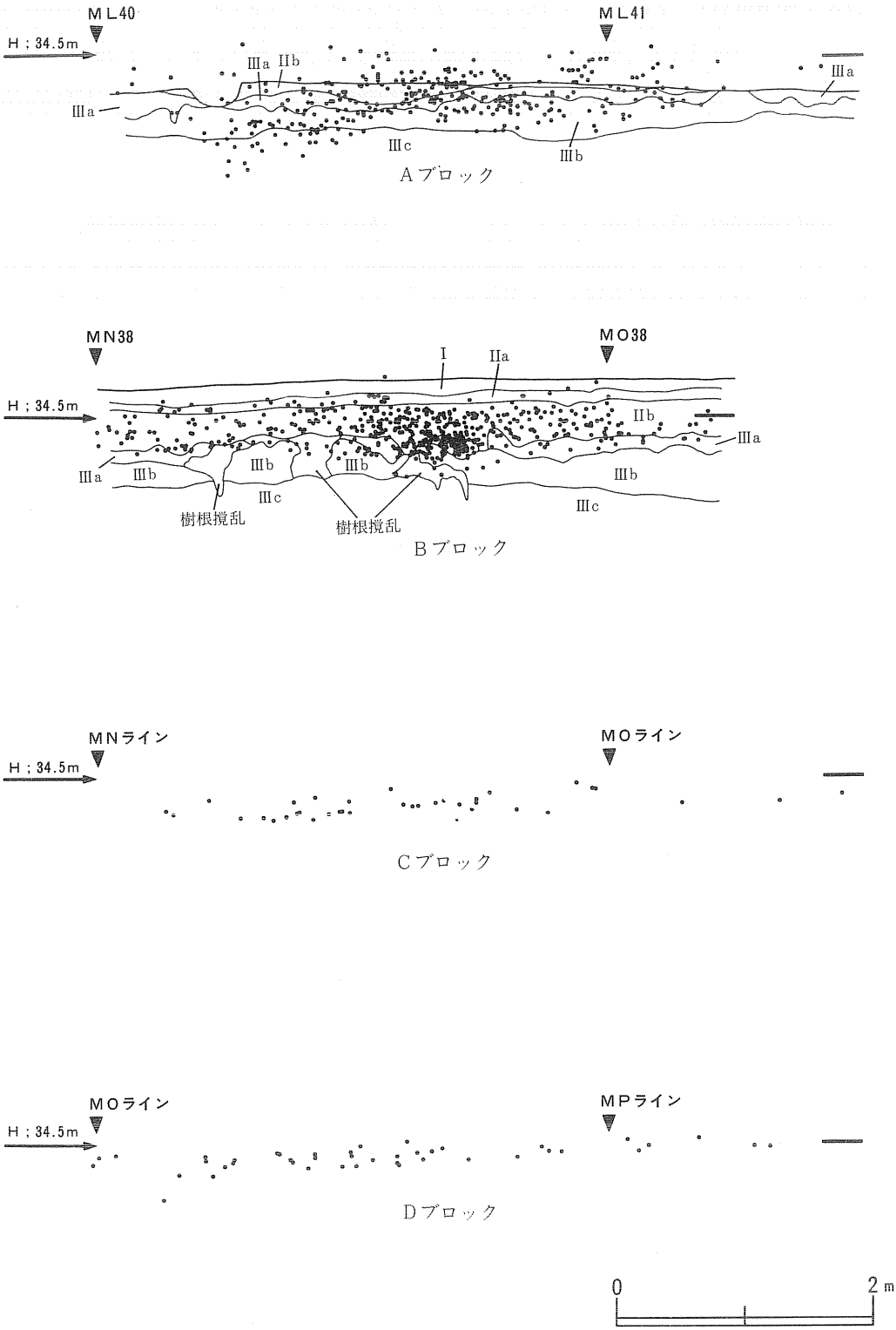
石器の出土はⅡb層下部～Ⅲb層上部に及び、平面的な広がりを確認すればⅢa層での密集の度合いが強いのであるが、ブロック間の微妙な違いもある。ＡブロックではⅡb層下部からⅢb層上部まで石器が出土し、Ｂブロックでは主にⅡb層に分布の中心がある。Ｃ、ＤブロックではⅢa層にほぼ限定される。Ｂブロックでの石器出土層準が他に比べて上位にあるのは、ブロック付近の古時期の樹痕攪乱がⅢa層を押し上げ、土壌化を進ませた結果と判断される。

４つのブロックが位置するグリッド、および周辺から出土した石器数のブロック別の内訳（ブロックの位置するグリッド出土数）をみると、Ａブロックが341点、Ｂブロックが521点、Ｃブロックが40点、Ｄブロックが45点、ブロック外が18点である。Ａブロック及びＢブロックとＣブロック、Ｄブロックの間では石器保有数に極端な差があり、また、次に述べるようにその集中度においても違いがある。

（２）－２　各ブロックの規模・内容

Ａブロック

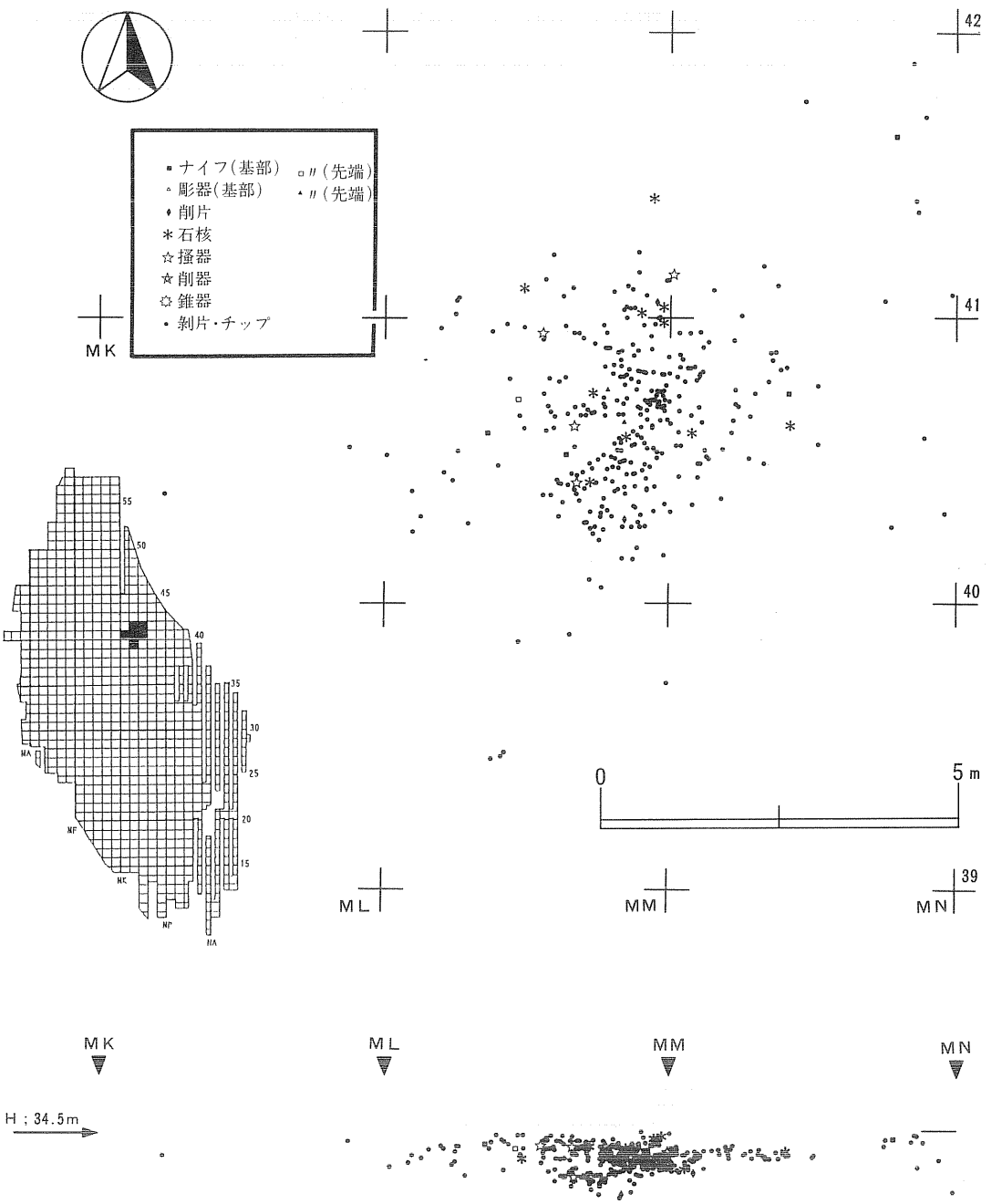
MM40を含めた周囲６つのグリッドで341点の石器が出土している（第10図）。分布の中心はMM40全域（一部ＭＬ40東縁を含む）、ＭＮ40北西隅、MM41南東隅、ＭＮ41南西隅にあり、その外縁に位置する石器出土地点で囲まれる範囲の面積は約23㎡である。範囲内に含まれる石器数は327点であり、100㎡あたりに換算した石器出土数は0.142である。垂直分布を見ると、最も高位のもので34.591m、最も低位のもので33.582mを測り、その差はほぼ１ｍである。６



第9図　第Ⅱ群石器A～Dブロック垂直分布図

つのグリッド内で出土した342点の標高値平均は34.153mであり、標準偏差は0.1723と４ブロック中最も大きい。このように分散の度合いが大きいのは、石器の中心的な出土層位であるⅢa層が本ブロック内では大きな起伏を見せていることにもよる。ことにⅢb層を超えてⅢc層中まで沈み込む部分がMM40内の南側にあるが、こうした現象は他のブロック内では認められていない。

ブロック内から出土した石器には、ナイフ形石器４点（うち１点は破片２点の接合）、彫器３点、



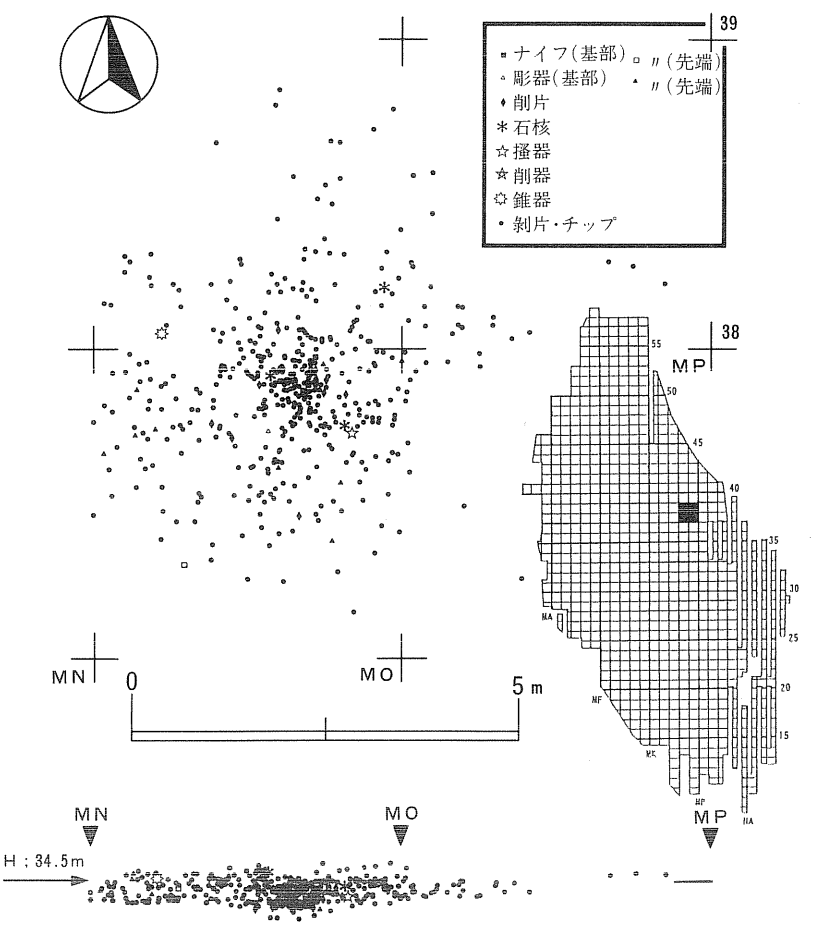
第10図　Aブロック

掻器４点があり、ほかに石製品１点（破片３点の接合）、彫器の削片２点、石核11点、剥片288点、チップ25点も含まれる。４つのブロック中においては全掻器の８割、石核の７割近くが集中する。Ｂブロックとの比較では、ナイフ形石器の数はほぼ同数であるが、彫器では削片の比較も含めその１／５程しかない（第７表）。個体別資料が含まれる割合では個体２の97点が最も多く、これに個体12の86点、個体17の46点、個体５の34点、個体９の28点が続く。他のブロックと比べ、個体５、個体９、個体12、個体17などの集中する割合が高く、個体５では92％、個体９では80％、個体12では70％、個体17では97％が本ブロックから出土している（第８表）。

Ｂブロック

ＭＯ37を含めた周囲４つのグリッドで521点の石器が出土している（第11図）。分布の中心はＭＯ37北半、ＭＯ38南東半、ＭＰ37北西隅、ＭＰ38南西隅にあり、その外縁に位置する石器出土地点で囲まれる範囲の面積は約27.3㎡である。範囲内に含まれる石器数は517点であり、100㎠あたりに換算した石器出土数は0.189と４ブロック中最も多く集中度も高い。垂直分布を見ると、最も高位のもので35.229m、最も低位のもので34.029mを測り、その差は1.2mである。４つのグリッド内で出土した521点の標高値平均は34.397mであり、標準偏差は0.1372とやはり大きい。前述のように古時期のⅢa層の攪乱に起因してのことでもあろう。

ブロック内から出土した石器には、ナイフ形石器３点（うち１点は破片２点の接合）、彫器11点（うち３点は破片２点の接合）、掻器１

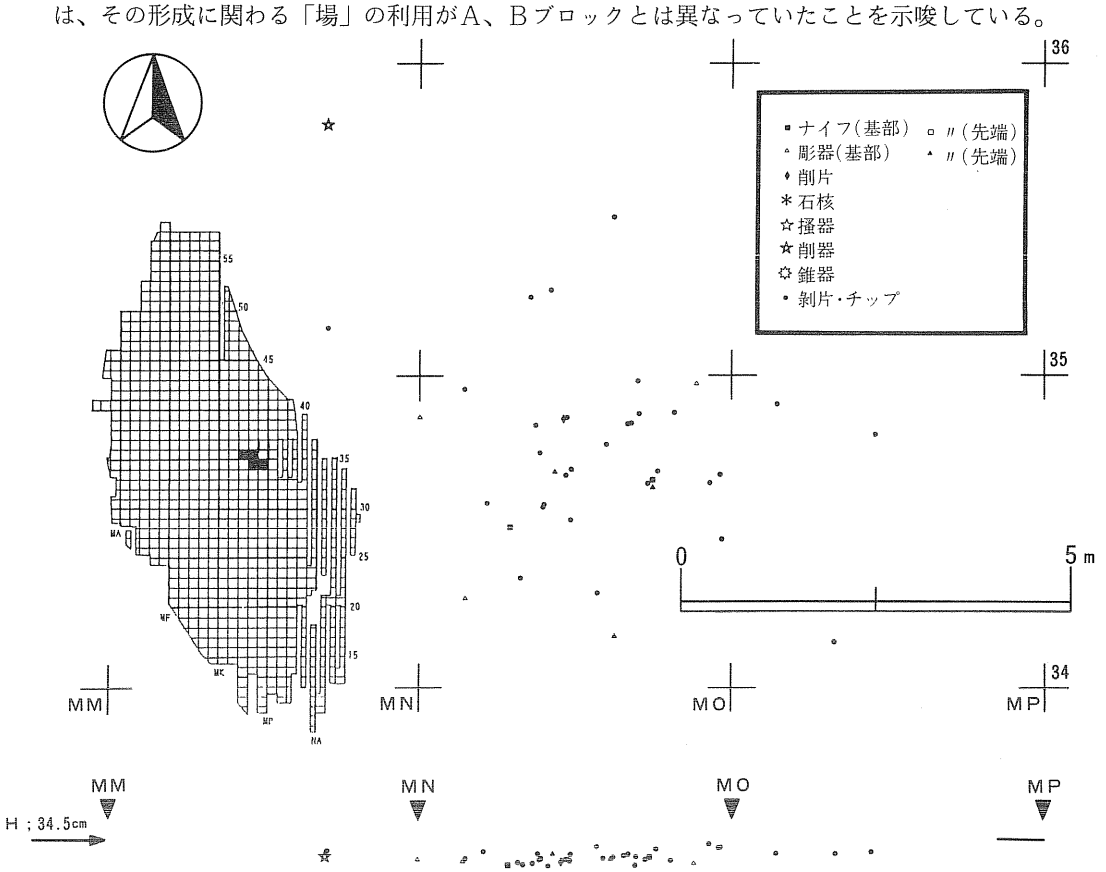


第11図　Ｂブロック

点、錐器１点があり、ほかに、彫器の削片13点、石核４点、剥片466点、チップ19点も含まれる。他のブロックと比べ、彫器の多さが注目され全数の60%、削片についても75%が本ブロックの出土である（第７表）。個体別資料が含まれる数量では、個体２の179点が最も多く、次いで個体１の171点、以下、個体３の69点、個体12の28点、個体４の20点、個体８の15点などが続く。個体１、個体３、個体８などの集中する割合が高く、それぞれ、92%、98%、94%が本ブロックからの出土である。

Ｃブロック

ＭＯ34を含めた周囲４つのグリッドで40点の石器が出土している（第12図）。分布の中心はＭＯ34全域、ＭＯ35南半、ＭＰ37北西隅、ＭＰ34北西隅にあり、その外縁に位置する石器出土地点で囲まれる範囲の面積は約15.3㎡である。範囲内に含まれる石器数は36点であり、100㎡あたりに換算した石器出土数は0.023と、集中度は低い。垂直分布を見ると、最も高位のもので34.436ｍ、最も低位のもので34.166ｍを測り、その差は0.27ｍである。４つのグリッド内で出土した40点の標高値平均は34.272ｍであり、標準偏差は0.0681と４ブロック中最も小さい。ほとんど単一の面からの出土として捉えられるが、本ブロックおよび次のＤブロックについては、その形成に関わる「場」の利用がＡ、Ｂブロックとは異なっていたことを示唆している。



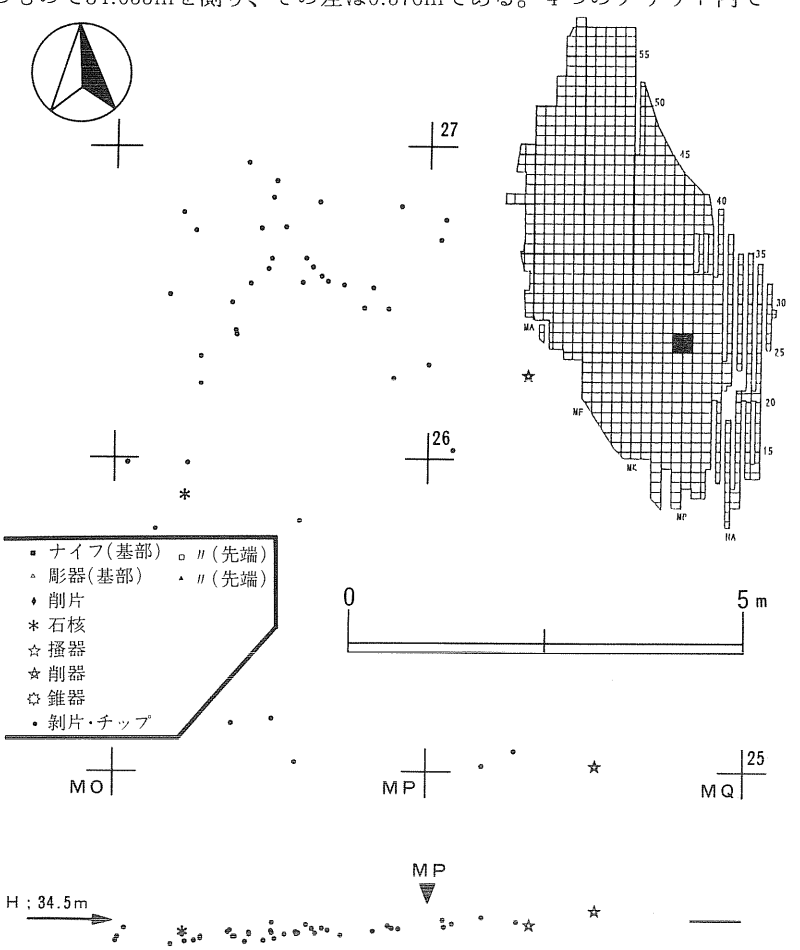
第12図　Ｃブロック

ブロック内から出土した石器には、ナイフ形石器２点、彫器４点、削器１点があり、他に彫器削片１点、剥片28点、チップ２点も含まれる。他のブロックと比較し、石核が出土していないこと、また出土総数に占める加工された石器の割合が高いことが特徴である。個体別資料の含まれる数量では個体２の15点を筆頭に、個体12の８点、個体６、個体９の４点が続く。しかし、個体６を除いては、いずれも低い割合でしか含まれておらず、個体２では５％、個体12では6.5％、個体９では11％にとどまる。

Ｄブロック

ＭＰ26を含めた周囲４つのグリッドで45点の石器が出土している（第13図）。分布の中心はＭＰ26全域、ＭＰ25北縁、ＭＱ26西縁にあり、その外縁に位置する石器出土地点で囲まれる範囲の面積は約16.5㎡である。範囲内に含まれる石器数は39点であり、100㎡あたりに換算した石器出土数は0.023とＣブロックと同様、集中度は低い。垂直分布を見ると、最も高位のもので34.631m、最も低位のもので34.055mを測り、その差は0.576mである。４つのグリッド内で出土した45点の標高値平均は34.354mであり、標準偏差は0.1002とＣブロックに次いで小さい。Ｃブロック同様、Ａ、Ｂブロックとの形成過程の差が現れたものと言えよう。

ブロック内から出土した石器には、削器２点と石核１点があるにとどまり、他のブロックと比較して加工された石器の数は極端に低い。また、個体別資料の含まれる数量においては個体４の38点が84％を占めている。



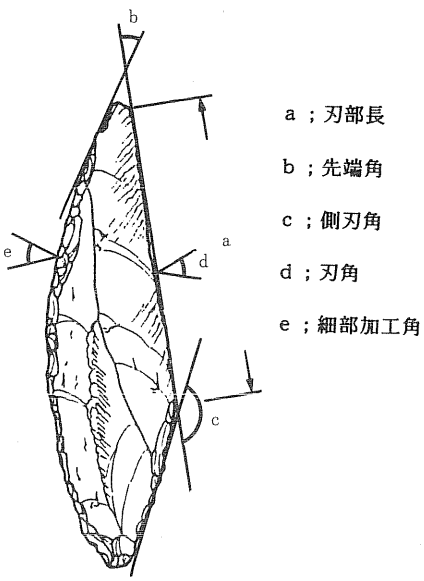
第13図　Ｄブロック

（２）－３　出土石器

ａ．ナイフ形石器（第15図、図版12）

ナイフ形石器は10点出土している。いずれも縦長剥片を素材とし、二側縁に細部加工を施して先端、基部ともに尖った形状に仕上げる点で共通する。長さ９㎝以上の大形のもの（530）と６㎝前後の中形のもの（554＋556，1748，650）、４㎝前後の小形のもの（1359）の３種がある。また、一側縁の加工がその全部にわたるものと、基部と先端部に限定されるものとに分けられ、前者は素材の剥離軸と石器長軸とにズレがあるために急斜度加工を施して一側縁を断ち切るように整形するが、後者は全体的にほぼその素材形状を保持している。基部における細部加工は腹面から背面に施される急斜度加工という点ではすべてに共通するが、腹面側にも平坦加工を施すものがある。いずれも腹面の加工は背面側の加工後に行われている。

554＋556：末端にかけてやや肥厚する縦長剥片を素材とし、末端側を基部とする。背面には素材と同じ方向で剥ぎ取られた先行剥離面が４面残されている。細部加工は右側縁上半と、両側縁基部および左側縁中央部分に施され、右側縁下半と左側縁の大半は素材の縁辺がそのままに残される。右側縁上半の細部加工は比較的急斜度であるが、左側縁基部での加工は浅い角度で施されている。基部は背面側に両側縁から浅い角度の剥離を施した後、腹面側へ同じく両側縁から平坦加工を施している。先端は被熱して弾け、欠損する。全体として素材形状の修正は少なく、右側縁上部の加工が素材の打面左側の縁を幾分減じている程度である。

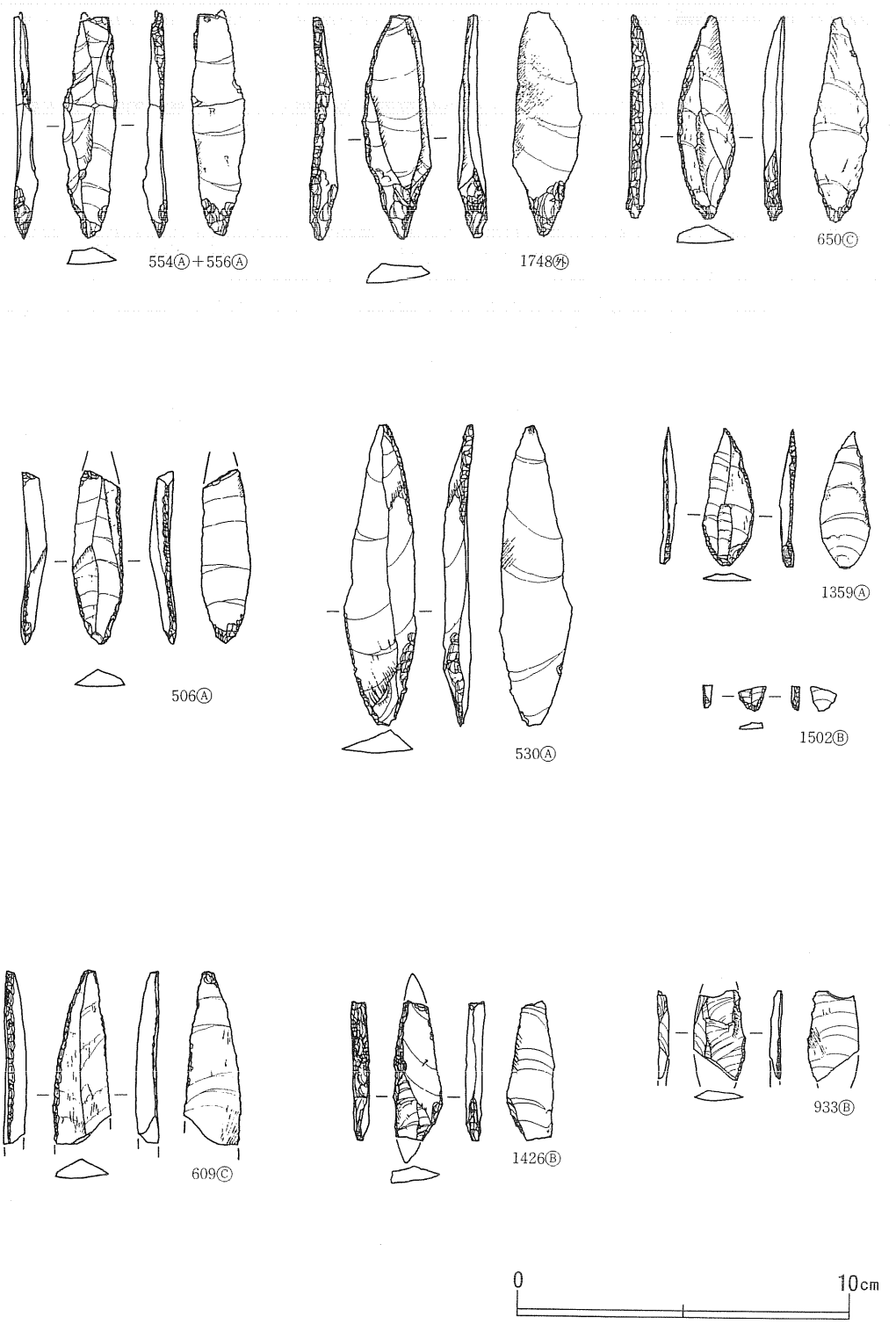


第14図　ナイフ形石器計測部位

1748：末端側が肥厚する縦長剥片を素材とし、素材の末端側を基部とする。背面には素材と同じ方向では

第２表　ナイフ形石器計測表

番　号	長さ	幅	厚	刃部長	先端角	側刃角	刃角	細部加工角	個体別番号	ブロック	グリッド
554＋556	67.75	15.75	6.45	52		155	45	75	2	A	MM40
1748	66.8	19.65	7.65	46	35	145	45	75	6	外	MM35
650	61.95	17.1	5.7	41	80	150	35	80	6	C	MO34
506	52.0	15.05	5.75			173	40	50	21	A	MN41
530	91.2	21.4	6.6	57	25	160	45	75	6	A	MM40
1359	40.5	14.5	3.3	30	45	155	25	40	2	A	MM40
1502	6.35	8.1	2.1					70	2	B	MO37
609	52.35	16.85	6.1	44	21		75	75	6	C	MO34
1426	41.3	15.1	5.2	27		145	35	60	2	B	MO37
933	27.2	15.5	2.5	17		162	20	75	2	B	MO37



第15図　ナイフ形石器

ぎ取られた先行剥離面が2面残されている。細部加工は右側縁基部および左側縁全辺にわたって施され、基部は抉りをもって作り出されている。左側縁の細部加工は平均75°前後であるが、上部ではさらに10°ほど急斜度に施され、基部右側でも85°程の急斜度加工が施される。基部は背面側への加工後、左側縁から平坦加工を腹面に施しており、さらに背面稜に対しても2回の剥離が加えられている。先端は被熱し、欠損する。素材中央に残された先行剥離面および素材腹面のリングから復元される剥離軸と石器の長軸とは10°前後の差があり、素材の形状修正は素材打面の右側、末端左側で比較的大きく行われている。

650：縦長剥片を素材とし、打面側を基部とする。背面には素材とほぼ同じ方向から剥ぎ取られた先行剥離面が3面残されている。細部加工は左側縁の全辺と右側縁基部に施される。基部は背面側への加工の後、腹面にも左側縁から平坦加工を施している。先端部は被熱する。素材の剥離軸と石器長軸とは10°前後の差があり、左側縁上部および右側縁基部側の剥離も90°に近く施され、素材形状の修正は大きく、斜めに断ち切るように加工されている。

506：中央部に最大厚のある縦長剥片を素材とし、打面側を基部とする。先端を欠損する。背面には4面の先行剥離面が残るが、うち一面は素材の剥離とは逆方向からの剥離痕を示す。細部加工は右側縁の全辺に行われ、左側縁は基部に僅かに施されているが、いずれもその角度は浅い。石器長軸と素材剥離軸とはほぼ一致し、基部作出に伴う打面の除去以外、素材形状はほぼ保持されている。

530：幅広の柳葉形の縦長剥片を素材とし、末端側を基部とする。背面には素材と同じ方向からの先行剥離面が4面残る。細部加工は基部両側縁と右側縁上部に施されるが、右側縁上部が65°前後とやや急斜度であるほかは平均60°前後である。石器長軸と素材剥離軸もほぼ一致し、素材形状は打面の左側を除いてほぼ保持されている。

1359：縦長剥片を素材とし、打面側を基部とする。背面には素材と同じ方向で剥離された2面の先行剥離面と、1面の頭部調整面が残る。基部両側縁及び右側縁に細部加工を施すが、基部両側縁での加工角度は浅い。接合資料からは、右側縁の細部加工が剥片右先端を大きく折りとった後に施されていることが観察される。石器長は素材剥片長と等しく、素材の左側縁はほぼそのままに残されている（第52図参照）。基部には素材の打面が残る。

1502：縦長剥片を素材としその打面側に作られた石器基部片。背面には素材と同じ方向での先行剥離面が2面残される。細部加工は右側縁から基部にかけてが顕著である。

609：縦長剥片を素材とし、打面側を基部とする。下半部を欠損する。背面には素材と同じ方向で剥離された先行剥離面が残る。残存部分での細部加工は左側縁のみに施されているが、平均75°前後の細部加工角は基部に近い側では浅く、先端部でより急斜度である。また、先端腹面にも平坦加工が施されている。左側縁の加工が先端部で急であり、且つ大きく行われている

ことから、素材末端での形状修正が比較的大きかったものと判断される。

1426：縦長剥片の打面側を基部とし、末端側を先端とするが両端とも欠損している。背面には3面の先行剥離面が残るが、右上部側縁側の広い面は素材とは逆方向の剥離面である。細部加工は左側縁と基部右側縁とに行われている。左側縁は、石核調整において、稜形成のための剥離が石器背面より連続して行われているが、細部加工はこれと錯向して腹面より施されている。基部右側縁は斜めの折断後に腹面より細部加工が施されているが、これは再生の可能性もある。

933：縦長剥片を素材とし、打面側を基部とする。先端、基部ともに欠損する。背面には素材と同じ方向で4面、素材剥離と直交する方向で1面の、計5面の先行剥離面が残る。側縁の細部加工は右側縁下部に認められ、その角度は75°と比較的急である。

b.彫器（第17図、第18図、図版13）

彫器は18点出土している。基本的に縦長剥片を素材とするが、ナイフ形石器に比較し素材は多様で、礫皮面、節離面を残す剥片や、作業面調整剥片も利用される。刃部はその末端側か打面側かの一方に彫刀面を作出して製作されている。彫刀面の作出にかかる特徴から大きく2つに分けられる。

1類…石器の一端に施した細部加工面を打面として樋状剥離を加え、彫刀面を素材剥片長軸に対して斜位に作り出すもの。彫刀面の作り方は基本的に共通するが、素材の加工は刃部に限られるものと、刃部作出以前に整形するものとがある。後者はその加工部位によって2種が認められる。

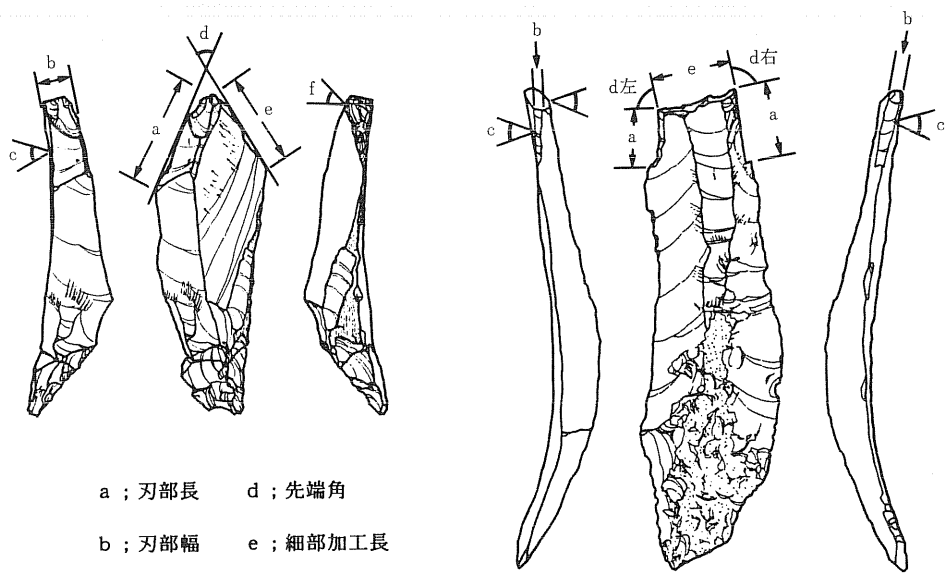
a種…彫刀面を作り出すための樋状剥離およびその打面作出のための細部加工以外、素材に加工を施さないもの。彫刀面打面作出の細部加工は、素材背面側から腹面側にむかって素材長軸に対して斜位に施される（624＋689，1165，1201，1161＋1682，823，1404，607＋623＋652，1681，808，621，806，665）。

b種…彫刀面の作出にかかる加工はa種と同じだが、彫刀面を作出する側の側縁に、樋状剥離以前の連続剥離を施すもの（1176＋796）。

c種…彫刀面を作出する側と反対側の側縁全辺に急斜度加工を密に施すもの。彫刀面は、側縁急斜度加工と連続する刃部端の剥離面を打面として、左肩に樋状剥離を加えて作る。素材はナイフ形石器のそれに近く背面稜の揃った縦長剥片が選択される。急斜度加工が施される側と反対側の側縁には素材の鋭い縁辺が残る（526　821＋1191）。

2類…彫刀面作出の樋状剥離の打面を、素材剥片の長軸に対しほぼ直角に設けるもので、彫刀面打面を細部加工によって作り出すものと、折断により作出するもの、あるいは素材打面をそのまま用いるものがある（575，1558，539）。

以上のうち、もっとも多いのは１類a種であるが、それらは彫刀面の作出においてきわめて規格的に製作されている。すなわち、刃部となる素材の一端に背面から腹面に向かい65°～85°の鋭角に細部加工の剥離を重ね、その加工面を打面として刃部左肩に彫刀面作出の樋状剥離を加えている。細部加工、樋状剥離とも素材剥片の長軸に対し斜位に施されるため、刃部先端は鋭角に尖るものが多い。１類ａ種12点の彫器の、細部加工面と樋状剥離面とがなす刃部先端角は、最大100°、最小55°、平均約74°である。また、樋状剥離面も背面側を向くものが多く、素材腹面との間の刃角も鋭角となる。その最大は90°、最小は30°、平均は約55°である。彫刀面



ａ；刃部長　　ｄ；先端角

ｂ；刃部幅　　ｅ；細部加工長

ｃ；刃角　　ｆ；細部加工角

第16図　彫器計測部位

第３表　彫器計測表

番　号	分類	長さ	幅	厚	刃部長	刃部幅	刃角	先端角	細部加工長	細部加工角	個体別番号	ブロック	グリッド
624＋689	1a	70.75	18.45	8.2	11.0	2.8	45	80	8.0	85	2	C	MN34
1165	1a	67.7	22.75	10.5	9.0	10.05	40	78	23.0	80	10	B	MO37
1201	1a	64.55	27.8	9.35	24.0	5.7	65	65	11.0	50	10	B	MO37
1161＋1682	1a	59.0	20.4	11.75	19.0	9.0	60	55	18.0	70	2	B	MO37
823	1a	57.35	39.35	13.3	41.0	4.2	70	80	24.0	70	6	B	MO37
1404	1a	54.75	15.4	6.6	12.0	8.15	30	70	12.0	60	2	B	MO37
607＋623＋652	1a	49.3	11.85	7.0	7.5	4.15	65	60	7.0	65	2	C	MO34
1681	1a	41.2	29.05	6.85	10.0	3.35	50	70	21.5	75	2	B	MO38
808	1a	38.0	17.2	5.35	7.0	5.75	65	100	5.0	75	2	B	MO37
621	1a	34.8	14.15	3.55	10.0	4.95	50	90	11.5	75	2	C	MO34
806	1a	29.8	23.2	5.25	12.0	2.0	35	65	16.0	70	1	B	MO37
665	1a	12.05	15.4	3.85	11.5	6.13	90	74	14.7	100	9	A	MM40
1176＋796	1b	77.25	23.1	10.75	9.0	2.6	60	70	13.0	55	1	B	MO37
526	1c	74.15	21.5	8.55	15.0	7.85	55	95	16.0	90	2	A	MM40
821＋1191	1c	49.4	14.4	3.8	14.0	12.2	55	83	9.9	75	2	B	MO37
575（右）	2a	87.85	21.55	8.4	14.0	3.25	95	88	15.0	75	1	C	MO34
（左）					12.0	1.75	40	115					
1558（右）	2b	43.0	12.7	3.75	27.0	2.8	65				2	B	MO37
（左）					30.1	2.1	100						
539	2c	42.3	19.15	4.05	14.8	4.8	80				2	A	MM40

は再生されるが、それにともなって右肩の細部加工も随時追加されたものらしい。823はその極端に進んだ例であり、彫刀面も再生の結果、他に比べかなり長くなっている。彫刀面が再生にしたがってその長さを増す過程は、後述する削片1類a種と2類（1402）の背面状態や、彫器本体と複数の削片の接合例（彫器1201、削片1431, 1498, 1564）に顕著に示されている。

624＋689：縦長剥片の打面側624を彫器に、末端側689を掻器とした石器。彫刀面は素材の打面部に背面から腹面側にいれたごく短い剥離面を打面として、左肩3条の樋状剥離を加えて作出する。打面は彫刀面の作出にともなって完全に失われている。

1165：背面稜に石核側方調整の横位連続剥離痕を残す縦長剥片を素材とし、打面側に刃部を作り出している。彫刀面は背面側から腹面側に向かっていれた細部加工面を打面として左肩に加えた樋状剥離で作られているが、他と異なり樋状剥離が素材側縁を切ることはせず、剥離は背面側で終わっている。

1161＋1682：下端部に節離面除去および稜形成のための横位錯向剥離を有する縦長の石核作業面調整剥片を素材とし、打面側に刃部を作出する。彫刀面は背面から打面側右肩に施した細部加工面を打面としての4条の樋状剥離として残るが、背面稜の延長に筋状に残る最も旧い彫刀面にはポリッシュが認められる。

823：石核作業面調整の幅広の剥片を素材とし、末端に彫刀面を作出する。基部には石核の調整打面を大きく残す。彫刀面は末端右肩に背面より施した細部加工面を打面とし、左肩に樋状剥離を入れて作り出すが、樋状剥離打点部分は小さく欠損する。細部加工面は他に比べ広く剥離の回数も多い。なお、本資料には削片649が接合する（第19図、第94図参照）。

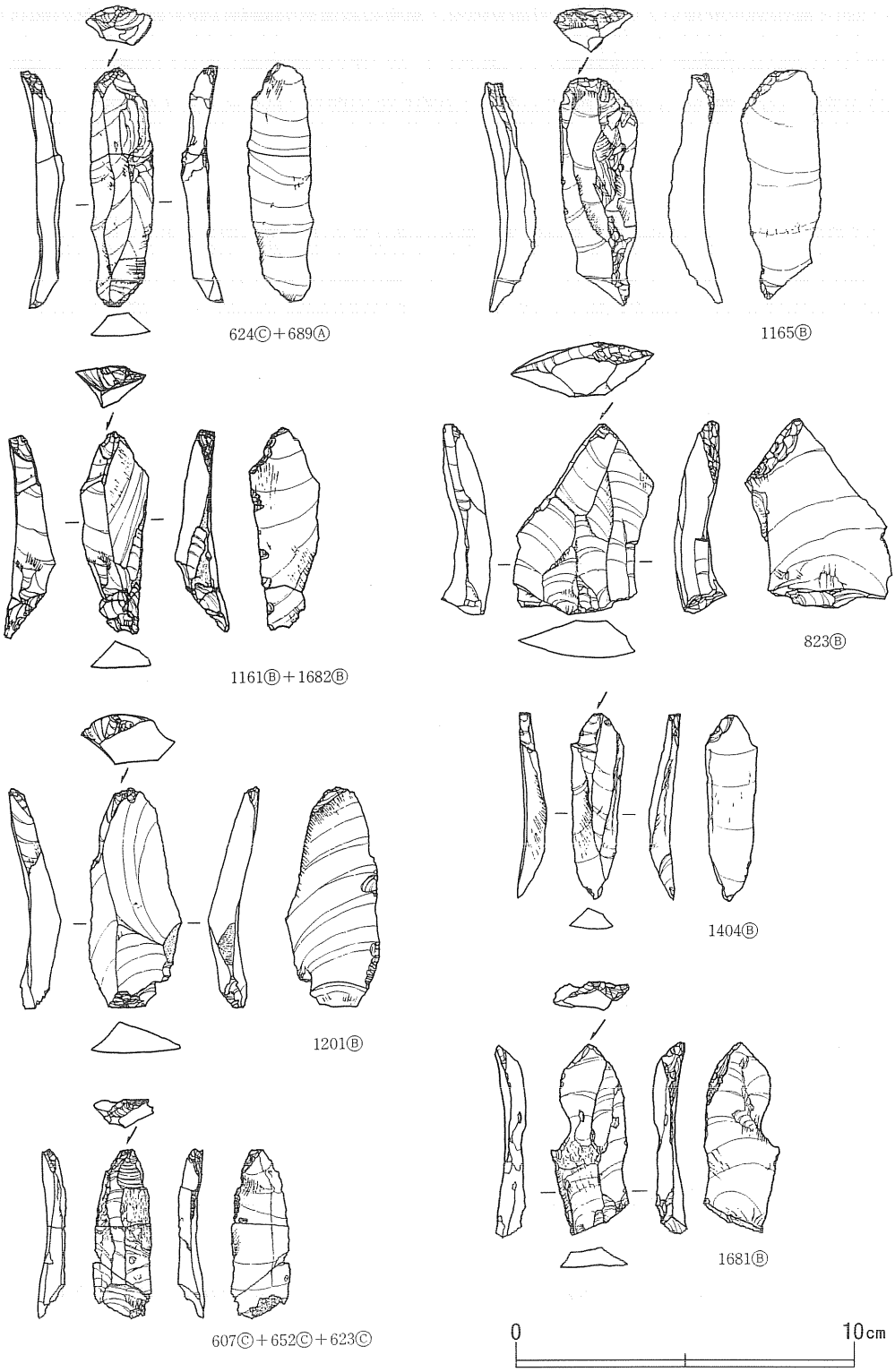
1201：左側方からの広い剥離痕を残す縦長剥片の末端に彫刀面を作出している。基部には打面を残す。彫刀面は刃部右肩に背面より施した細部加工面を打面として、左肩に樋状剥離を入れて作出している。彫刀面上には3点の削片（1431, 1498, 1564）が接合するが、その頂部は1201の細部加工面と一線に揃っており、彫刀面作出のための打面再生は行われていない。

1404：縦長剥片の打面側に刃部を作る。彫刀面は刃部右肩に背面より施した細部加工面を打面として、2条の樋状剥離を施して作出する。

607＋652＋623：節離面を残す縦長剥片の打面側に刃部を作る。彫刀面は先端右肩に施した細部加工面を打面として、3条の樋条剥離を施して作出する。基部側は被熱し赤変している。

1681：節離面を残す縦長剥片を用い末端側に刃部を作る。基部には素材の打面が残る。彫刀面は刃部右肩に背面より施した細部加工面を打面として、左肩に2条の樋状剥離を施して作出する。

808：縦長剥片を用い、末端側に刃部を作る。基部は素材の点状の打面が残る。彫刀面は右側縁上部に背面より施した細部加工面を打面として、末端を断ち切るような樋状剥離を施して作出し、その後に同じく細部加工面を打面としての小剥離を彫刀面の下に施している。



第17図　彫器（1）

621：縦長剥片を用い、末端側に刃部を作る。基部には素材の調整打面を残す。彫刀面は先端右肩に施した細部加工面を打面として左肩に1条の樋条剥離を施して作出するが、彫刀面の作出後、同じく細部加工面を打面としての小剥離が彫刀面の下に加えられている。

806：縦長剥片を用い、その打面側に刃部を作る。基部側は背面側から力を加えられて折損している。彫刀面は先端右肩に背面より入れた細部加工面を打面とし左肩に樋状剥離を1条施して作出するが、彫刀面の下にも細部加工面を打面とする小剥離が加えられている。

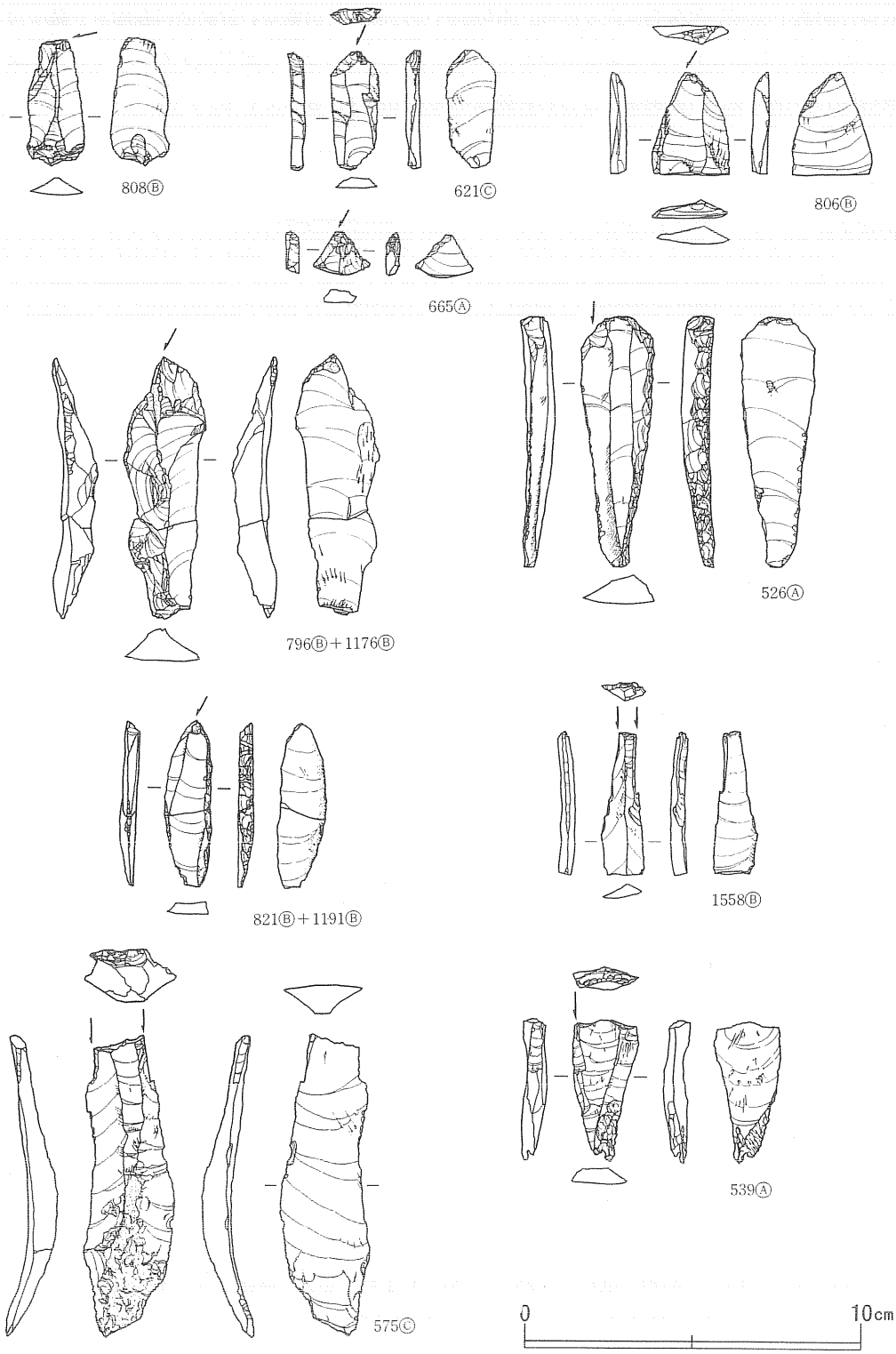
665：素材打面側に作られた彫器の刃部先端片。彫刀面は先端右側に背面側から腹面側に向かって入れた細部加工面を打面として、左肩に3条の樋状剥離を施している。幅1㎜程に残る最も旧い彫刀面は腹面とほぼ直角をなす。彫刀面の作出後同じ細部加工面を打面とした剥離が数回右肩背面側に加えられるが、そのうち最も下に位置する剥離は細部加工面自体を除く程に大きく抉り込むように施されている。

796＋1176：背面稜左側に横位連続剥離痕の残る縦長剥片を素材とし、末端側に刃部を作る。基部となる素材の打面部は折断されている。彫刀面は先端の背面側から右肩に数回の細部加工を施した上で、左肩にかけて3条の樋状剥離を入れて作り出しているが、彫刀面の作出に先だって左側縁上部には腹面側からの連続小剥離による細部加工が施されている。また、彫刀面作出後、彫刀面の右側に右肩の細部加工面を打面としての扇状小剥離が背面側に施されている。先端は被熱して赤変し弾けている。

526：末端にかけて肥厚する縦長剥片を素材とし、末端側に刃部を作る。右側縁には素材の剥離軸に対して、10°近くの傾きをもった断ち切るような急斜度の細部加工が施される。細部加工は下1／3程は背面から腹面側へ、それ以上は腹面側から背面側にへ向かう連続小剥離を施して行われているが、前者の加工が後者を切って行われている。下端は背面側から力を加えて切断している。彫刀面は右側縁の加工後にそれと連続して施された上端背面側からの剥離面を打面とし、左肩に2条の樋状剥離をいれて作出している。樋状剥離は彫器側縁を僅かに切るが、他に比較し幅広で短い。左側縁は素材の鋭い縁辺が残されるが、刃こぼれと判断される連続微細剥離痕が観察される。石器全体は被熱し黒変している。

821＋1191：縦長剥片を素材とし、打面側に刃部を作る。右側縁には素材の剥離軸に対して20°近い傾きをもった腹面側からの急斜度の細部加工が施される。また、左側縁中央にも僅かに加工が施されている。彫刀面は右側縁の加工後に、それと連続して側縁上端に背面より施された剥離面を打面とし、左肩に樋状剥離を施して作出している。樋状剥離は左側縁に沿って湾曲する。彫刀面の作出後、同じ右側縁上端の加工面を打面としての小剥離が彫刀面の右側に加えられている。基部は被熱し赤変している。

575：礫皮面を大きく残す末端部が腹面側に向かって湾曲する縦長剥片を素材とする。彫刀



第18図　彫器（2）

面は打面側、基部は末端側に作られる。素材剥片の打面側を折断し、折断面に腹面より施した細部加工面を打面として垂直の樋状剥離を両肩に入れ、左右２つの彫刀面を作出する。左側縁側の彫刀面作出後、打面再生が行われ右側縁の彫刀面が作出されている。

1558：縦長剥片の打面側に刃部を作る。素材の打面側を腹面側から加えた力で折断し、その折断面を打面として左右両側に垂直に彫刀面を作出している。末端側も背面側から加えた力で折断されている。

539：調整打面を残す縦長剥片を素材とし、その調整打面の左肩に垂直に樋状剥離を加えて彫刀面を作出する。彫刀面作出の樋状剥離以外に素材の加工はない。基部側は被熱して赤変し、弾けている。

c．彫器削片（第19図）

彫器の削片と判断された小剥片は16点あるが、それらのうち、彫器と接合する資料が４点含まれる。1431、1498、1564は彫器1201と接合し、649は彫器823と接合する。また、個体18の１点（923）は遺跡内で唯一黒曜石を石材とする資料である。

削片はその形状から大きく３つに分類される。

１類…彫器１類a種に対応する削片であり、削片の剥離が彫器の縁辺にかかるものをa種、背面側で終わるものをb種とする。

a種…一側縁に彫器本体の腹面を残し、背面には先行する樋状剥離面が残される。したがって断面形は平行四辺形に近くなる（802，803，1216，1684，1279，1567，1431，1564，1315）。

b種…樋状剥離が彫器側縁を切らず、したがって削片には彫器本体の腹面が残らない。断面形は台形を呈する（1498，649，1315，1674）。

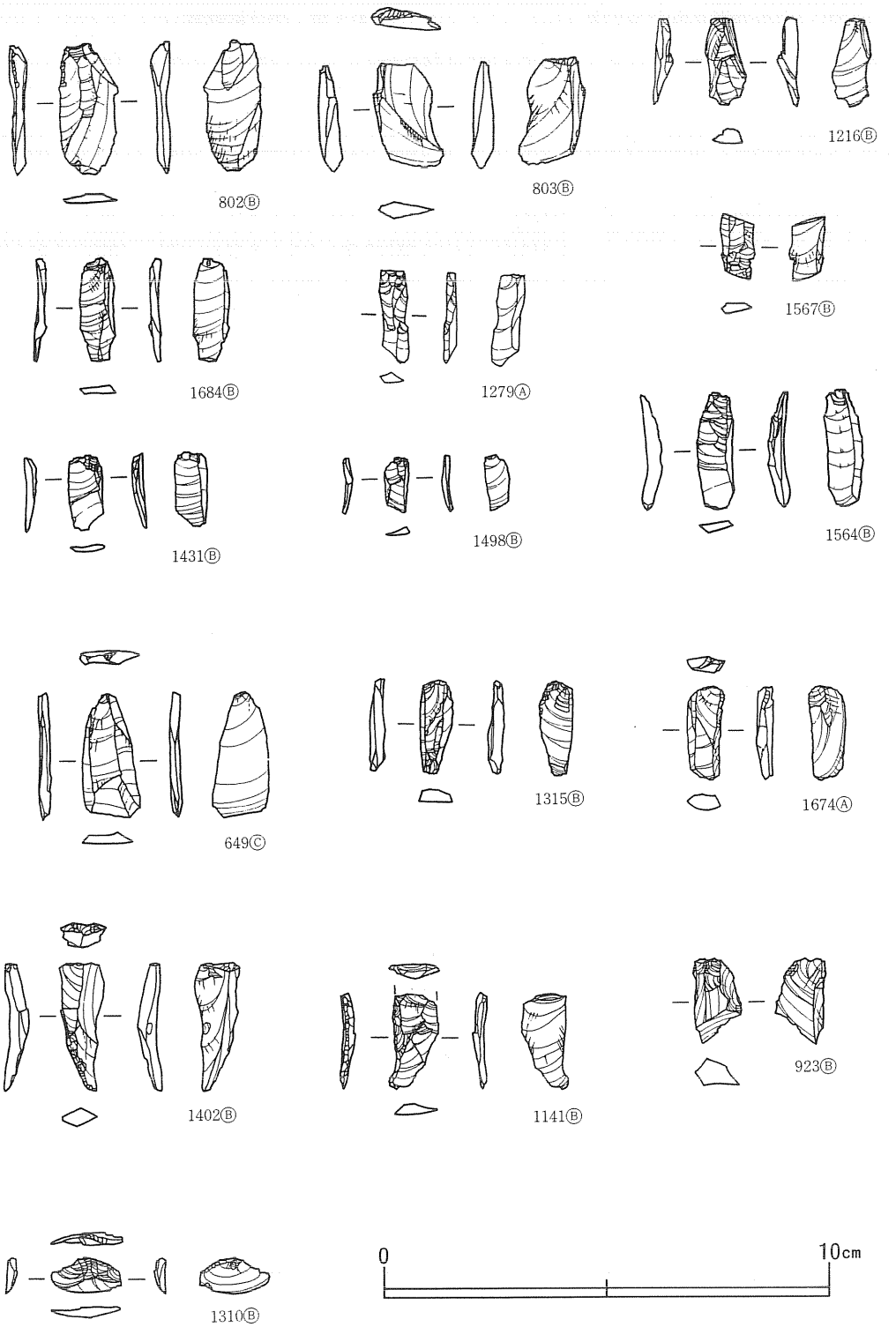
２類…彫器１類b種と対応し、削片の剥離以前に側縁に細部加工が施されるもの（1402，1141，923）。

３類…彫器背面側で取られた扇形の削片（1310）。

なお、削片計測表中１類a種および２類の1402については、削片腹面と残存する彫器腹面とのなす角度を計測し、その値を180°から減じて復元される彫器本体の刃角を記してある。また、同じく削片腹面の幅を計測し彫器の刃部幅として記してある。

802：左側縁腹面側に残る彫器本体の腹面の状態から、素材の打面側を彫器刃部としその左肩に彫刀面を作出した彫器の削片と判断される。先行する樋状剥離面３面が残る。

803：素材の打面側を彫器刃部とし、その左肩に彫刀面を作出した彫器の削片。彫器の右肩に加えられた細部加工面が打面に残る。背面には先行する樋状剥離面２面が残る。


802Ⓑ
803Ⓑ
1216Ⓑ
1684Ⓑ
1279Ⓐ
1567Ⓑ
1431Ⓑ
1498Ⓑ
1564Ⓑ
649Ⓒ
1315Ⓑ
1674Ⓐ
1402Ⓑ
1141Ⓑ
923Ⓑ
1310Ⓑ
0
10cm

第19図　彫器削片

1216：彫器刃部左肩から剥ぎ取られた削片。左側縁腹面側に残された彫器腹面の状態からは素材剥離方向と、彫器の刃部方向との関係は不明。背面には先行する樋状剥離面が１面残る。

1684：彫器刃部左肩から剥ぎ取られた削片。彫器腹面残存部の状態からは素材剥離方向と、彫器の刃部方向との関係は不明。先行する樋状剥離面１面が背面に残される。

第４表　削片計測表

番号	分類	長さ	幅	厚	刃部幅	刃角	個体別番号	ブロック	グリッド
802	1a	28.95	12.7	3.9	12.2	30	1	B	MO37
803	1a	23.9	14.85	3.8	12.35	80	6	B	MO37
1216	1a	19.45	7.25	3.65	7.0	75	1	B	MO37
1684	1a	22.6	7.55	1.65	6.95	55	1	B	MO38
1279	1a	20.55	6.6	2.35	5.15	55	2	A	MM41
1567	1a	12.35	7.4	1.6	6.2	80	1	B	MO37
1431	1a	16.75	6.95	3.05	6.2	55	10	B	MO37
1498	1b	11.6	5.2	1.3			10	B	MO37
1564	1a	25.95	7.95	3.5	5.55	50	10	B	MO37
1315	1a	20.15	8.15	2.15			2	B	MO37
649	1b	27.6	11.45	2.6			6	C	MO34
1674	1b	20.25	9.65	3.35			2	A	MN40
1402	2	29.0	9.0	3.65	7.5	60	2	B	MO37
1141	2	21.7	9.65	2.15			2	B	MO38
923	2	15.55	11.6	5.75			18	B	MO38
1310	3	8.1	15.5	2.95			2	B	MO37

1279：素材の打面側を彫器刃部とし、その左肩に彫刀面を作出した彫器削片。末端はヒンジフラクチュアとなって終わる。先行する樋状剥離面２面が残されている。

1567：素材打面側を彫器刃部とし、その左肩から剥離された削片。打面側および末端を折損する。先行する樋状剥離面１面が左側縁側に残されている。

1431：彫器1201の刃部左肩から剥ぎ取られた削片。背面には本削片の１／２程の長さに先行する樋状剥離面が１面残る。本削片が剥離された後、1498、1564の順で剥離されている。

1498：1431の後剥離された削片。剥離は彫器側縁を切らず、背面側で終わっている。

1564：1498の後剥離された削片。先行して剥離された削片1431に比較しその長さは1.5倍強に増している。末端はヒンジフラクチュアで終わる。

649：彫器823の左肩から剥離された削片。打面には823の右肩細部加工面の一部が残る。末端はヒンジフラクチュアとなって終わる。823の背面に接合し、彫刀面の幅を調節するために剥離されたものと思われる。

1315：彫器刃部左肩から剥ぎ取られた削片。左側縁下端に彫器の腹面がごく僅かに残されている。素材剥離方向と彫器の刃部方向との関係は不明。左側縁側と正面に先行する樋状剥離面２面が残されている。

1674：打点の左側に打面が残ることから、彫器刃部の左肩近くで剥離された削片と判断される。剥離は彫器側縁を切らず、背面側で終わるが、先行する樋状剥離面１面が残されている。

1402：素材の打面側を刃部とする彫器の刃部左肩から剥離された削片。１類a種同様、左側縁側に彫器腹面の一部が残る。背面上部には先行して施された樋状剥離面２面、下部には彫器腹面から施された細部加工が認められる。打面には彫器先端背面側から施された細部加工面が残る。

1141：打面側を折損する。剥離は彫器側縁を切らず背面側で終わっている。左側縁に削片剥

離以前に彫器左側縁に施された細部加工が残る。

923：末端側および左側縁側を折損する。樋状剥離以前に腹面から施された細部加工が右側縁に残されている。

1310：彫器先端正面で剥離された扇形の削片。右肩に背面側から施された細部加工面が残る。

d．掻器（第21図、図版12）

掻器は５点が出土している。いずれも縦長剥片を素材とし、その末端に刃部が作出されるが、刃部形状から２つに分類される。

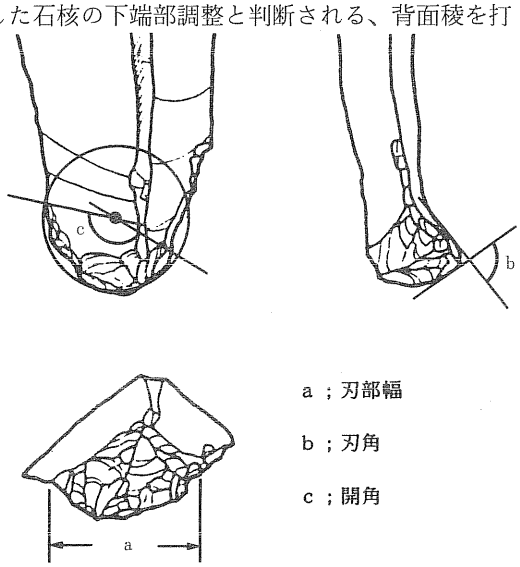
１類…刃部は小さく凸刃に作られる。背面稜の揃った細身の縦長剥片を素材とする（547，624＋689，1528）。

２類…刃部は１類よりも直刃的となるもの。縦長剥片ではあるが、形状の不整な石核作業面調整剥片を素材として利用する（561，1438）。

１類、２類ともに内湾する素材末端の腹面から剥離を加え刃部を作出するが、その剥離はごく小さい。１類の刃部では、素材剥片を取得した石核の下端部調整と判断される、背面稜を打点とした剥離や素材剥離とは逆方向の剥離痕がそのままに残されている。刃部の剥離は幅の狭い樋状の剥離を連ねるもので、素材末端の一部分を整形して小さな凸刃を作る。こうした点で、幅広の縦長剥片を素材としその一端を大きく加工して円刃に仕上げる形態とは異る共通性を持つタイプである。

１類、２類とも素材の厚さは７㎜前後から９㎜までと他の石器、とくにナイフ形石器と比較して厚いものが選ばれている。

547：末端が腹面側に向かって湾曲する縦長剥片を素材とし、末端側に刃部を作出



第20図　掻器計測部位

第５表　掻器計測表

番　号	分　類	長　さ	幅	厚	刃部幅	刃　角	開　角	個体別番号	ブロック	グリッド
547	1	95.45	20.45	9.0	14.45	85	160	2	A	MM40
624＋689	1	52.6	19.1	8.0	8.15	50	104	2	A	MN41
1528	1	85.8	19.9	8.5	13.0	75	155	2	A	MM40
561	2	43.0	18.0	6.8	18.0	60	95	2	A	MM40
1438	2	53.15	25.1	7.95	11.0	105		1	B	MO37

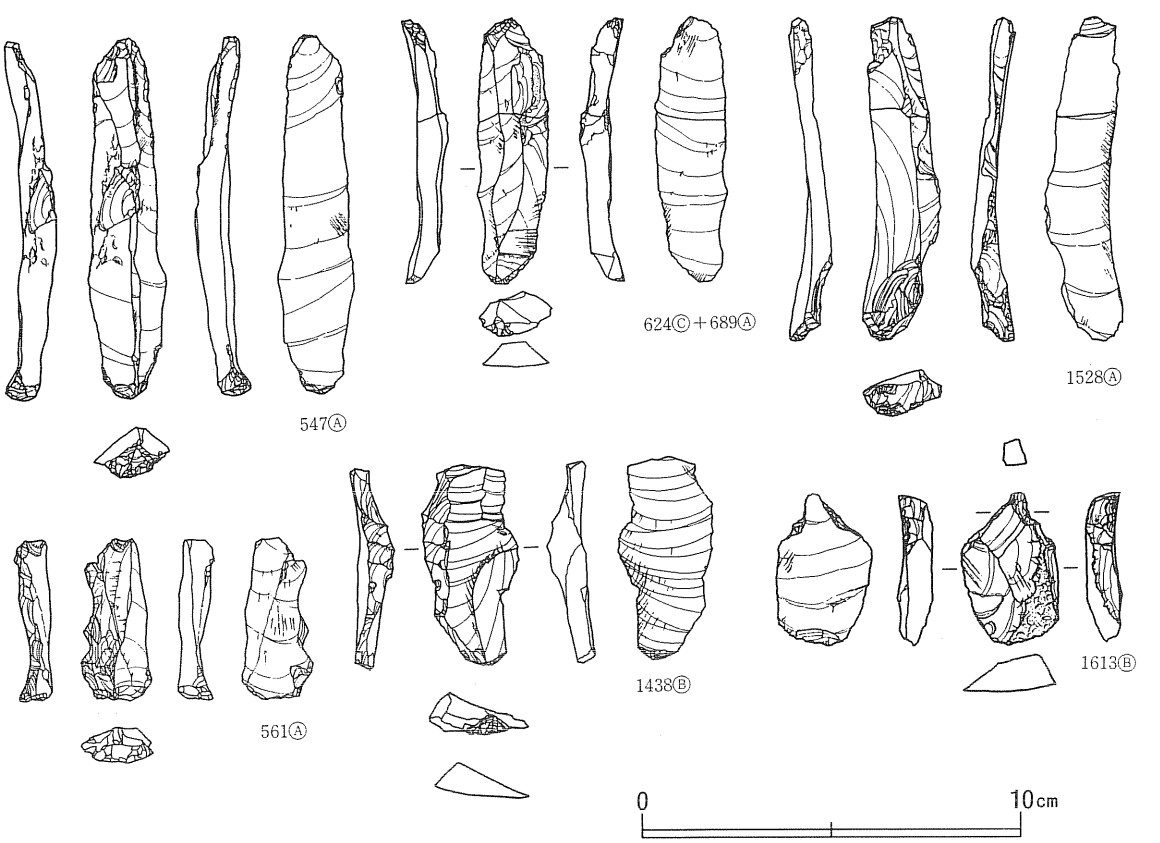
している。基部に素材の調整打面を残す。刃部作出のための剥離は90°に近い急角度の樋状の剥離が施される。背面中央には石核稜形成の横位の剥離痕をとどめ、1496はその剥片である（第55図参照）。腹面中央には斜位に、また基部の打面にもポリッシュが残る（図版15参照）。

624＋689：縦長剥片の打面側624を彫器に、末端側689を掻器とした石器。掻器刃部は素材の末端部中央のごく狭い部位に細い樋状の剥離を加えて作出している。

1528：縦長剥片の打面側を基部とし、末端側に刃部を作出する。右側縁より末端にかけて石核稜形成の横位錯向剥離が残り、末端に作出される刃部の剥離はその錯向剥離面上に施される。刃部は両側をやや抉り込むようにした上でその間に樋状の剥離を連ね凸刃に仕上げている。

561：加撃方向に対し左にねじれ、末端が腹面側に向かって大きく湾曲する作業面調整剥片を素材とし、左側縁には石核稜形成の横位錯向剥離痕をとどめる。末端側に刃部を作出するが加工は粗く急角度に行われ、鋸歯状刃縁を形成する。基部となる素材の打面側は被熱し、折断されている。

1438：背面左側に稜形成のための横位連続剥離痕をとどめる作業面調整の縦長剥片を素材とし、その末端側に刃部を作出する。刃部は幅１㎜程の樋状の剥離を直線的に連続して加え作出する。基部は腹面から加えた力によって折断されている。



第21図　掻器および錐器

e．錐器（第21図、図版12）

1613：末端に礫皮面を残す厚手の剥片を用い、打面側に錐部を作り出している。錐部は、素材の両肩部分を抉るように、腹面側からの数回の剥離で90°に近い急斜度加工を施した後、尖端部に同じく腹面側から幅１㎜程の細長い剥離を４条施して作出している。長さ38.4㎜、幅24.1㎜、厚さ7.95㎜、尖端の剥離部分の幅3.9㎜、厚さ6.7㎜、尖端部が腹面となす角度は60°である。

f．削器（第22図、図版14）

いずれも分厚い剥片を素材とし、周縁あるいは一側縁に細部加工を施して刃部を作出する。

283：礫皮面を残す板状の石核から得られた幅広で厚い剥片を素材とし、打面側を除いた周縁に刃部を作出する。打面は礫皮面がそのままに残される。刃部の加工は両側縁では背面のみに行われ、素材末端では背面、腹面の両面に施される。側縁の加工角度は浅いが、末端では80°程の角度をもつ。

287：礫皮面を残す板状石核から得られた幅広の剥片を素材とする。打面、左側縁、末端には礫皮面が残される。唯一の鋭角の縁辺である右側縁下部に長さ25㎜にわたって細部加工を施し、刃部を作出している。刃部加工の角度は浅い。礫面上で90°打面を変えて剥ぎ取られた他の剥片（284）と接合する。

230：縦長剥片を剥ぎ取った柱状石核から得られた剥片を用いて作られる。素材は石核の下設打面側から剥ぎ取られた分厚い作業面調整剥片であり、下部には上設打面側の広い調整面が残る。製作にあたっては右側縁下部に刃部作出のための連続した剥離を加え、その後素材を剥ぎ取った打面側からも細い剥離を一回加えている。そして複数回の階段状剥離によって打面側を切断し、切断面を打面としての小剥離を最終的に施している。

第６表　削器計測表

番号	長さ	幅	厚	刃部長	刃角	個体別番号	ブロック	グリッド
230	66.45	40.35	19.05	32.3	70	12	C	MN35
283	58.45	52.1	16.1	123.8	62	13	D	MQ25
287	50.55	51.5	13.75	24.3	40	11	D	MQ26

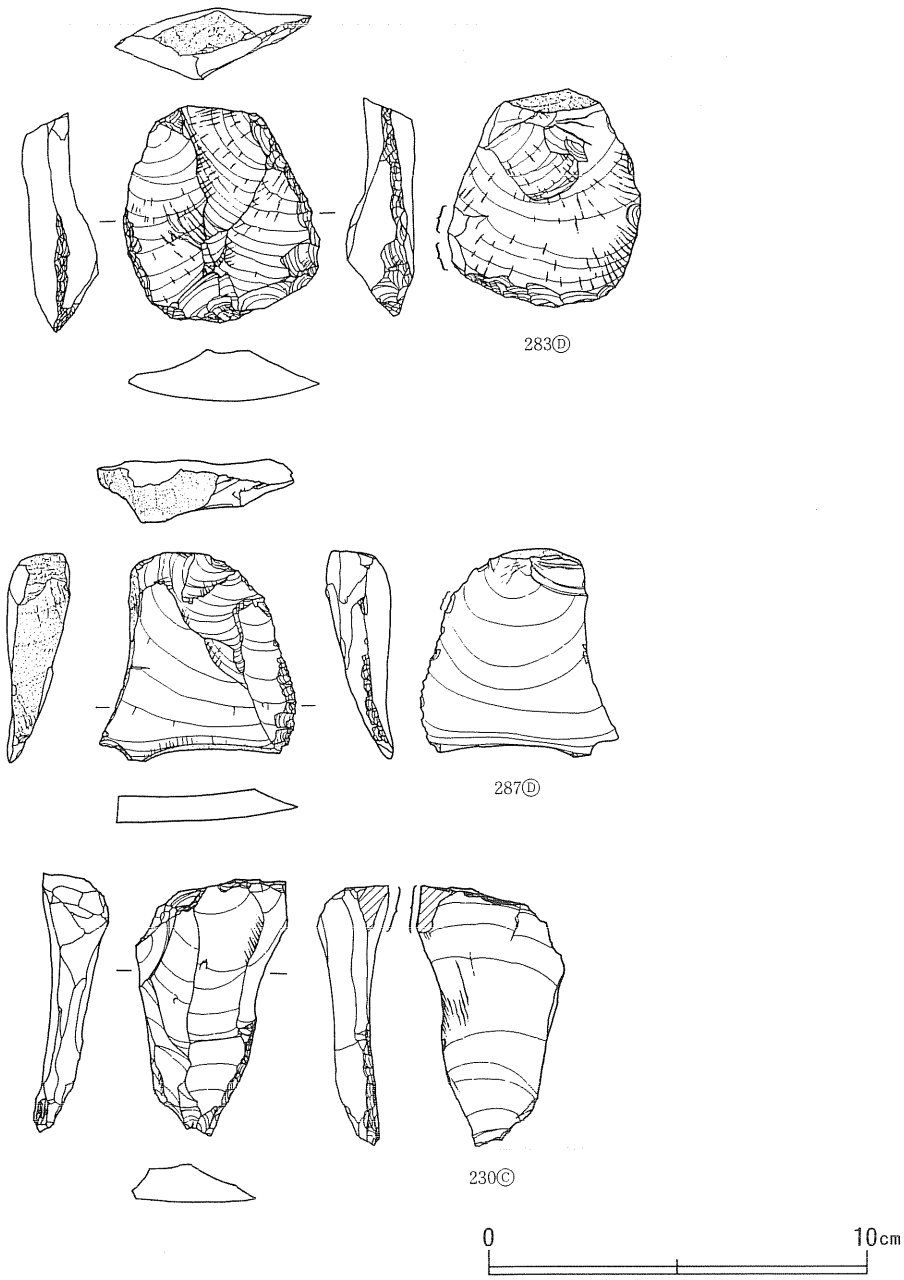
g．剥片

A、B、C、Dの各ブロックから出土した石器のおよそ93％までが、定形的な狭義の石器に加工されない剥片、チップの類である。

剥片、チップの別は、便宜的に10㎜を境として区別している。剥片の中には、礫皮面を残すものと、ほとんどこれを残さないものとがある。全剥片840点中礫皮面を残すものは21％、175

点であり、礫皮面の背面に占める割合が50%を越えるものが175点中、57点存在する。剥片自体の数量の多さに加え、礫皮面を残す石器割合が多いことは、総体的傾向として、本遺跡のブロックが石器製作に関わる性格を帯びたものであることを示しているといえるだろう。

全剥片の長さの度数分布をとってみたものが第23図である。全形の残っていないものを含めた剥片総数および完存の剥片とも、その長さの分布は10㎜以上15㎜未満に最多があり、長さが増すにしたがって50㎜前後の間までに漸減する傾向が示される。しかし、全体的な漸減傾向の

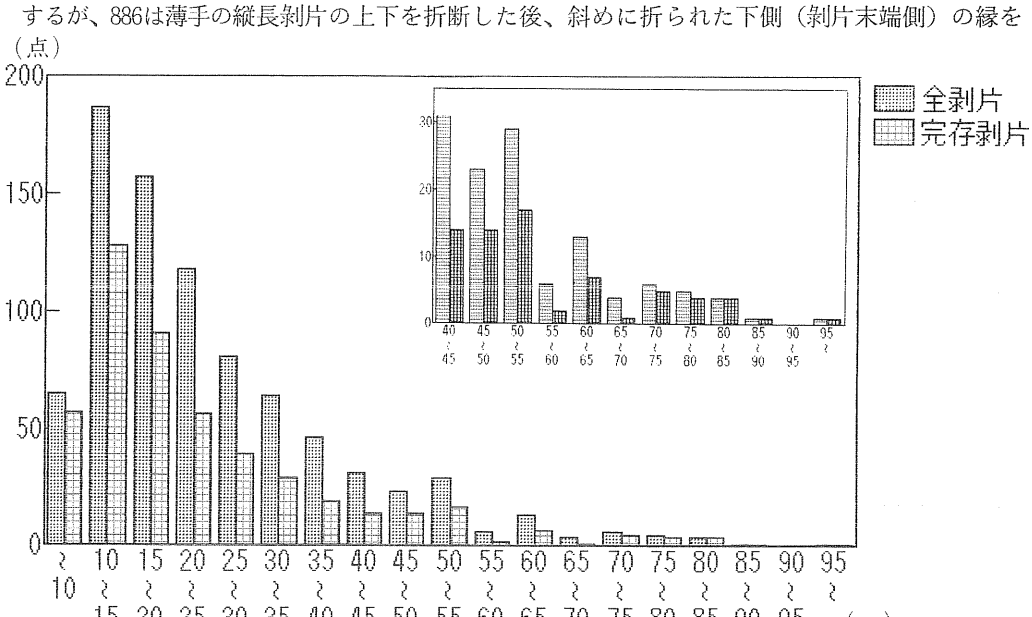


第22図　削器

中でも子細にみると僅かな変化が認められる。剥片総数では45㎜から50㎜の間、完存の剥片でも45㎜から50㎜の間でに谷があり、また、両者とも50㎜から55㎜、60㎜から65㎜、70㎜から85㎜の間に山を作っている。剥片長の漸減傾向が緩やかになる40㎜以上をみた場合、50㎜から55㎜を中心とする山と70㎜から85㎜の間にみられる高原状態は比較的明瞭に現れているといえるだろう。

このような剥片長が長さを増すに従い漸減する変化は、石核高との関連で見たときも合致する傾向である。第Ⅱ群石器に関わる石核は最高82.25㎜、最低35.95㎜の範囲で、平均54㎜の値をとって18点存在するが、うち高さ７㎝未満の石核が16点を占めている。さらに、後述する第Ⅱ群石器の剥片剥離技術との関連でも、幅広の不定形の剥片が生産される個体別資料４や、初期の礫皮面除去作業を行った後石核が遺跡外へ移動したと判断される個体別資料１などを除いては、ほとんどの資料が、小形縦長剥片を取得する最終工程まで作業が行われている。また、45㎜以上の剥片の長さの分布いくつかの偏りがあることは、例えば、ナイフ形石器に大形、中形、小形の３種があることとも対応する。すなわちこれら剥片は、その剥離作業は連続的にその最終段階まで行われたものの、工程には石核高を調節するような打面再生、下端部調整、分割などの作業がある程度体系づけられて組み入れられた中で、得られたものであることが示唆される。

剥片の中には、二次的な加工を部分的に施しているものがある。個体１の886、1155、個体２の726、1189、1550、個体４の1420、個体５の725がそれである。このうち、1155、1420はあるいはナイフ形石器の一部ともとられ、また、1550はその加工が縦長剥片末端の腹面側に斜位に施されることから彫器未製品であると判断される。他の４点は定形的な石器との関わりは薄いと判断するが、886は薄手の縦長剥片の上下を折断した後、斜めに折られた下側（剥片末端側）の縁を

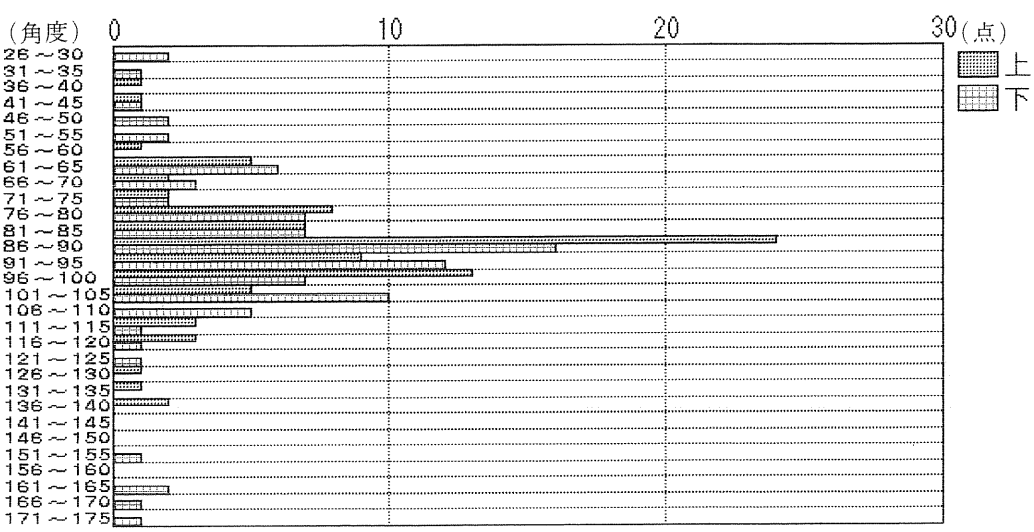


第23図　剥片長度数分布

整えるように、背面から腹面へ向かって微細な加工を連続して施しており、こうした折断を剝片の加工技術に加えた例が存在することは注意を要するものと思われる。

第Ⅱ群石器の剝片中折断された剝片は、その一端を加撃するか、あるいは両端への負荷によって折取られたか、いずれかの方法によっている。前者の方法による場合には、打点に対応する折断面に打裂痕が僅かながら観察される場合が多く、後者では負荷による割裂の際の微細裂痕が、その支点とは逆側に列となって観察される。折断面のリングは前者の打裂痕、後者の微細裂痕に対向する弧をなす。一覧表中ではリングの方向に応じて「背腹」、「腹背」のように記載している。

第24図は折断を受けた剝片の折断角計測値の度数分布図である。折断角は剝片の剝離軸に対しての角度を左回りで計測した値である。折断部位の別でみると、総じて下側（末端側）よりも上側（打面側）を折断した剝片が多いが、両方とも明らかに85～90°を中心とした前後10°ずつの範囲に集中している。折断角の計測はその対象となった剝片の形状に関わりなく全例について行ったもので、したがって、素材選択を前提とする目的的作業として行われたもの以外も多く含まれている。しかし、それにも拘らず、この度数分布に示される90°前後を中心とした集中は、その作業が多くの有意のものを含んでいることを示すといえよう。ちなみに、折断を受けた剝片総数は338点でありその大きさには様々なものが含まれるが、その長さ、幅、厚さの平均はそれぞれ、26mm（最長76.35mm、最短5.35mm）、20mm（最大59.7mm、最小2.95mm）、5.0mm（最大22.1mm、最小1.4mm）である。厚さの平均値未満のものは全体の61％の206点あり、それらでみた場合の長さ、幅の平均値はそれぞれ、21.4mm、16.3mmである。先の886も比較的この値に近いものであり、ほぼこの値の前後にあるものに意図的に製作された可能性をみることができるのではないだろうか。

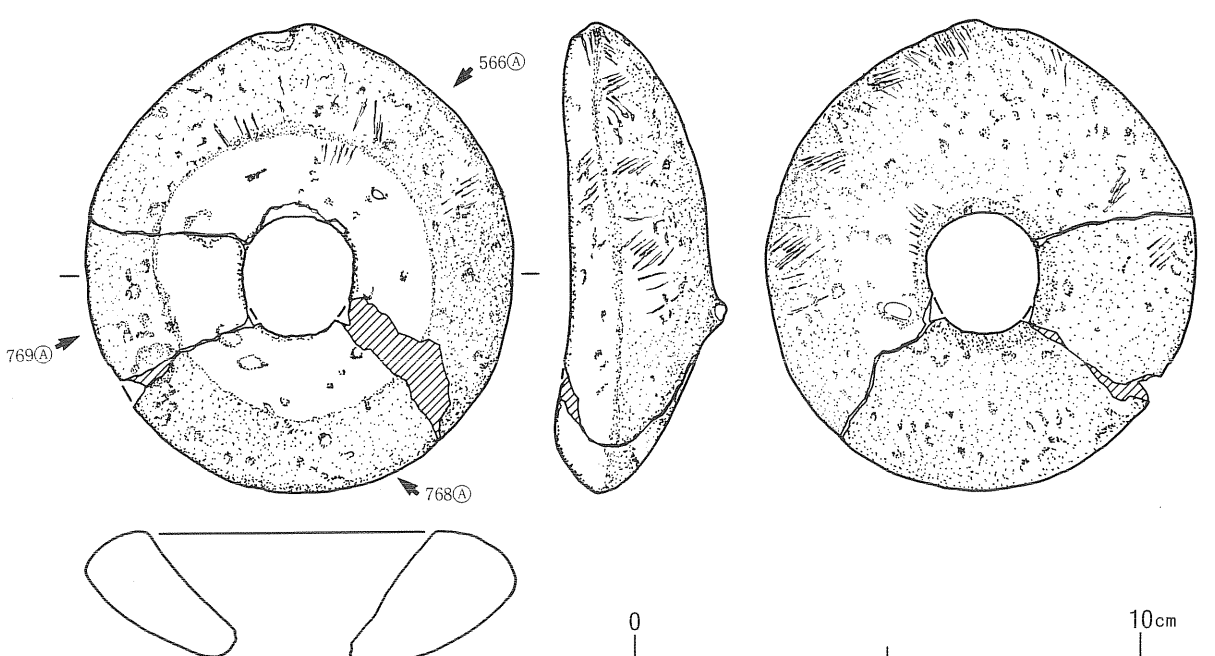


第24図　折断剝片折断角度数分布

厚さがその平均値を下回る206点についてその帰属するブロックをみると、Ａブロック72点、Ｂブロック123点、Ｃブロック５点、Ｄブロック３点、ブロック外３点である。石器総数の保有する割合にほぼ応じた比率で分布し、Ｂブロックでの出土が圧倒的に他を抜いている。定形的石器には各ブロックに偏りがあるが、Ｂブロックで注目される石器には11点（接合する破片も含む）出土した彫器がある。彫器を一般的に想定されている「溝切り具」としてみた場合、このＢブロックでの折断剥片の多さは、彫器の多さに対応して捉えられないであろうか。すなわち、一次的な生産具である彫器（「溝切り具」）と対になった、二次的生産具（「組み合わせ石器」）としての可能性である。以上のようにみて、本遺跡での剥片加工における折断という技術を、ある程度積極的に評価しうるのではないかと考える。

ｈ　環状石製品（第25図、図版14）

Ａブロックで出土した。Ⅱｂ層下部で出土した566とⅢａ層下部で出土した768、769とがほぼ完形に接合した。赤褐色の礫岩を素材とし、外面を擦り上げて環状に作り上げた石器である。外周径92.3×84.6㎜、厚さ27.2㎜、表面側に現れた窪部径54.8×54.1㎜、穿孔部径24.25×22.25㎜である。表面側中央は自然面のすり鉢状の窪みであり、その底が裏面側から円形に穿孔され、穿孔部の縁断面は裏面側から擦られ丸みを帯びる。裏面周縁には整形時の長さ５～８㎜ほどの擦痕が４～７条単位で外周に対して斜位方向に残されている。表面側での擦痕は図の上部に顕著であり、放射状に残されている。外周縁右下部には製作に伴う明瞭な稜が残る。図上部と裏面に素材に含まれた礫が擦りきれずに残されている。



第25図　環状石製品

（2）－4　剥片剥離技術と個体別資料

a.剥片剥離技術

A、B、C、Dの各ブロックから出土した石器群は、28の個体別資料に分けられると同時に、個体別資料中でいくつかの接合資料にまとまる。それら接合資料からは本遺跡の剥片生産の技術的特徴を抽出することができるが、その特徴は以下の技術的類型に要約され、作業の段階を追跡することができる。

類型1…縦長剥片を目的としての剥離作業が行われる。本類に属する接合資料は多く、剥離された剥片の長さにも長短それぞれがあり、それら剥片の剥離される可能性は以下の3種に細別して理解される。

1a…直方体に近い原礫の長軸両端を側方から加撃・除去して平坦面を作出し、それを打面とし縦長剥片を剥ぎ取り、礫皮側面全周の除去を行うもの。礫皮面除去作業において打面は180°転位される。礫皮面の除去が終了した石核は、打面再生、打面調整、稜形成などを繰り返しながら縦長剥片を剥ぎ取ってゆくが、剥離作業が進展した段階でより小さな石核に分割されより小形の縦長剥片が剥ぎ取られるようである。

個体1ではこの一連の剥離作業のうち、おもに初期の礫皮面除去の作業が行われている。個体1－1は礫端面の除去と礫皮側面の除去作業にかかる剥片が接合している。個体1－2は礫皮側面の除去から一部中段階の縦長剥片剥離作業も行われている。その他、個体1－4、1－6は礫端面除去にかかる接合資料であり、1－7は礫皮側面の除去作業にかかる接合資料である。個体1で礫皮面除去後に縦長剥片を剥離した資料は1－3に示され、この段階で彫器や掻器の素材が得られている。個体2も590のような礫皮面の残る縦長剥片が存在することから、この技術類型に従って剥離作業を進行させたものであろう。ただし、礫皮面除去の初期段階の作業にかかる資料はきわめて少なく、大半は中段階以後に属するものである。またこの中段階の石核はいくつかの小石核に分割されていることが、個体2－3、2－2および単独資料である1278のような残核の存在によって知られる。分割後の石核からは、1類c種と同様、節離面を背にし作業面を後退させる方法で小形の縦長剥片が生産され、一部は1359のような小形のナイフ形石器、1558のような彫器に加工されている。他に、個体8および個体12も本類型の剥離工程中に位置づけることができる。ただし、個体12については個体12－1以前に石核の分割が行われたかどうか不明であり、あるいは次の1類b種の技術によって剥離作業が進行した可能性もある。

1b…原礫の加工は縦長剥片を取得するための礫端面の除去と一側面の礫皮面除去に限られ、その後は打面再生、打面調整、作業面調整、下端部調整をまじえて縦長剥片が剥離される。石核の一面に原礫の礫皮面が残されて作業が進行する点で1類c種と共通する。個体17－1が本類型に属するが、復元される原礫は1類a種の剥離工程をとるほどに充分な大きさおよび形状をもっ

類型	個体	剥片剥離工程			製作される石器
		初期段階	中段階	終段階	
1a	1	礫端面除去→礫側面除去→縦長剥片剥離→小形縦長剥片剥離			彫器 掻器 折断剥片
		1-1 1-4　1-2	1-3		
	2	(590)	2-4 2-5	2-3 ? 2-2 (1278)	彫器 掻器 ナイフ形石器 折断剥片
	8	8-1			折断剥片
	12	12-8	12-1 12-2	12-5	削器 折断剥片
1b	17	礫端面除去→礫側面除去―――→縦長剥片剥離			
			17-1		
1c	3	礫分割――――――→小形縦長剥片剥離			
		3-1			
	5		5-1 5-2		
	9		9-2	9-1	彫器 錐器
	14			14-1	
2	4	礫分割――→打面作出――――→幅広剥片剥離			
			4-1 4-2		
	11		11-1		削器

第26図　剥片剥離工程図

ていない。このことが１類a種と１類c種の中間的な剥離工程をとらせた主な要因であろう。

１c…原礫は初めに小形縦長剥片を取得するのに適当な大きさまで分割され、その後は分割面のうち一面を打面としての縦長剥片の剥離がおこなわれる。縦長剥片の剥離は原礫分割の際残った礫皮面を背にして打面調整、下端部調整を加えながら作業面を後退させて進行する。

個体３は原礫を半割後、いくつかの小石核に分割した資料であが、分割後の小石核からの剥片剥離はおこなわれていない。個体５の個体５－１、５－２は分割後の小石核から縦長剥片が剥離されているが、打面調整、下端部調整が加えられ、特に５－１では剥離の進行に伴って打面の180°転位もおこなわれている。個体９および個体14も本類型で作業の進行した資料である。個体９の個体９－１では打面調整がおこなわれるが、個体14－１の打面は平坦打面である。また個体９には519＋670のような比較的大形の縦長剥片も含まれることから、個体９－１、９－２とは別のの石核が存在した可能性があり、その場合、１類a種と関係も否定できない。

以上の１類の工程から生産された縦長剥片は、本遺跡の主要な石器の全て、ナイフ形石器、彫器、掻器、錐器、削器、折断剥片に加工されており、１類の剥離工程は本遺跡での主体的な剥片剥離技術といえる。

類型２…幅広の剥片を目的として剥離作業がおこなわれる。礫皮面の除去作業が体系的に原礫からの剥離工程中に組み入れられず、縦長剥片を取得可能とする石核整形は施されていない。したがって、取得された剥片には礫面を残したままのものも多く含まれる。

個体４の個体４－１、４－２がその典型であるが、ほかに個体11および個体13も本類型に属する。類型２によって剥離された剥片はその素材の肉厚な特性を生かし、287や283のような削器に加工されている。

b．個体別資料

①　個体別資料１（第27図～第45図）

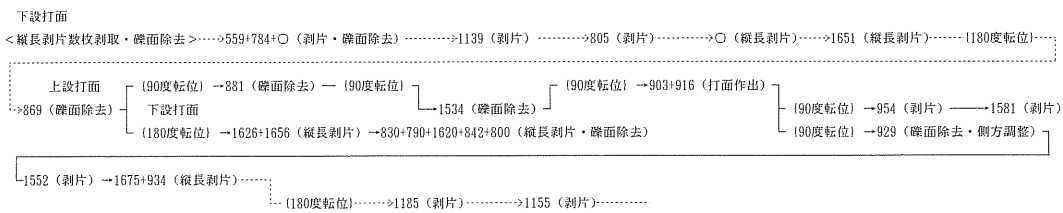
礫皮面および礫皮面に近い部分ではにぶい黄橙色、より芯に近い部分では灰黄褐色～暗灰黄色を呈する。礫皮面は皺状を呈する。細かな白色の縞が入り、ごく僅かに黒色粒子を混じえる珪質頁岩である。総数185点である。個体１－１、１－２から原礫形状は８×７×14㎝程度の柱状を呈するものと思われる。遺跡内には原礫のままで持ち込まれ、縦長剥片を目的とした初期段階の剥片剥離作業が行われているが、遺跡内に石核は残されていない。剥離された縦長剥片からは彫器、掻器が製作され、ほかに折断剥片も存在する。

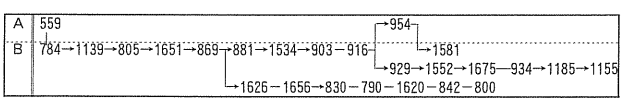
個体１の資料は、Ａ、Ｂ、Ｃの３ブロックにわたって分布するが、分布の中心はＢブロックにある。彫器２点、掻器１点、削片４点がこのＢブロックからの出土である。ほかにＣブロックからも彫器１点が出土しているが、Ａブロックでは加工された石器は出土していない。

ブロック間をまたぐ接合関係は個体１－１、および１－２に認められるが、いずれも剥離作業はＢブロックで進行したと判断される。個体１－１では礫皮面除去後の折断を受けた剥片559、954がＡブロックへ搬出され、個体１－２でも同様に礫皮面除去後の折断を受けた剥片984、332がＡブロックへ、彫器575がＣブロックへ搬出されている。その他の接合資料は全てＢブロック内で完結しているが、Ａブロック内には礫皮面除去後に折断を受けた縦長剥片のいくつかが単独で存在する（524）。

■個体１－１

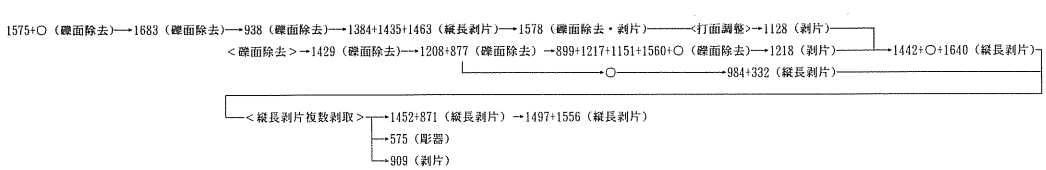
剥片25点からなる資料。礫皮面除去と打面作出が作業の大半である。作業は下設打面側において礫皮面除去を行った後、縦長剥片を数枚剥ぎ取り、1651が剥ぎ取られた段階で逆側に打面を作出している。縦長剥片は概して薄い。下設打面側から得られた830には調整打面が残されている。また、縦長剥片の総てが折断されているが、それら折断剥片には折断前に一側縁に細部加工を施した資料1155も含まれている。

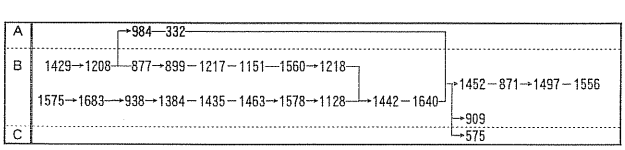




■個体１－２

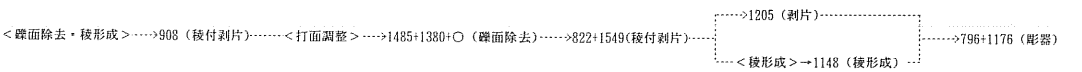
剥片25点、彫器１点からなる石核初期段階の接合資料。礫皮面の除去作業と縦長剥片の剥ぎ取作業が行われている。直方体に近い原礫の角への加撃を最初に行い、その後上設打面側から縦長剥片を剥ぎ取っている。1128、1442、1556の打面は調整打面である。575を剥ぎ取った後の残核は遺跡内には残されていない。





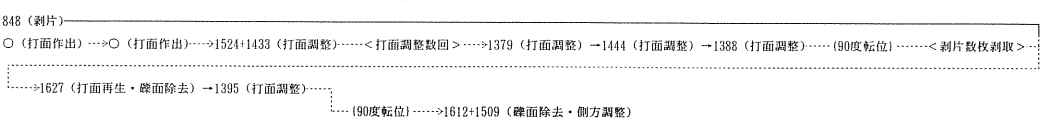
■個体１－３

剥片８点、彫器１点からなる接合資料。1549および1380、1485には礫皮面が残っており、表面にごく近い資料である。礫皮面の除去と稜形成を側方から行い下設打面側から剥片を剥ぎ取った後、上設打面の打面調整が行われている。822の打面は調整打面である。さらに822を含め数枚の縦長剥片を上設打面から剥離し、再度側方からの稜形成を行った後、796＋1176を剥ぎ取っている。稜形成と縦長剥片剥離を交互に頻繁に行っている資料である。



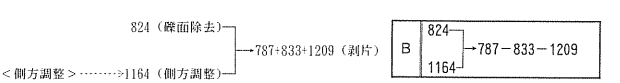
■個体１－４

剥片10点からなる石核初期段階の接合資料。礫皮面を除去して打面作出のための剥離を加えた後、打面調整を行い、剥片を剥ぎ取っている。打面再生のためにはがされた1627の打面側には縦長剥片の剥離痕が残されている。



■個体１－５

礫皮面除去の作業にかかる剥片５点の接合資料。1164は石核の側方調整を行った剥片であるが、その前段階でも同じ作業が行われている。



■個体１－６

剥片８点からなる資料。礫皮面除去が主な作業である。唯一礫皮面をもたない935＋1188は作業面調整のための剥片と思われる。935＋1188に打面調整は施されていない。

1483+○（礫面除去）----->1421（礫面除去）----->1390+1396+1488（剥片）----->1215（剥片）----->935+1188（剥片）

■個体１－７

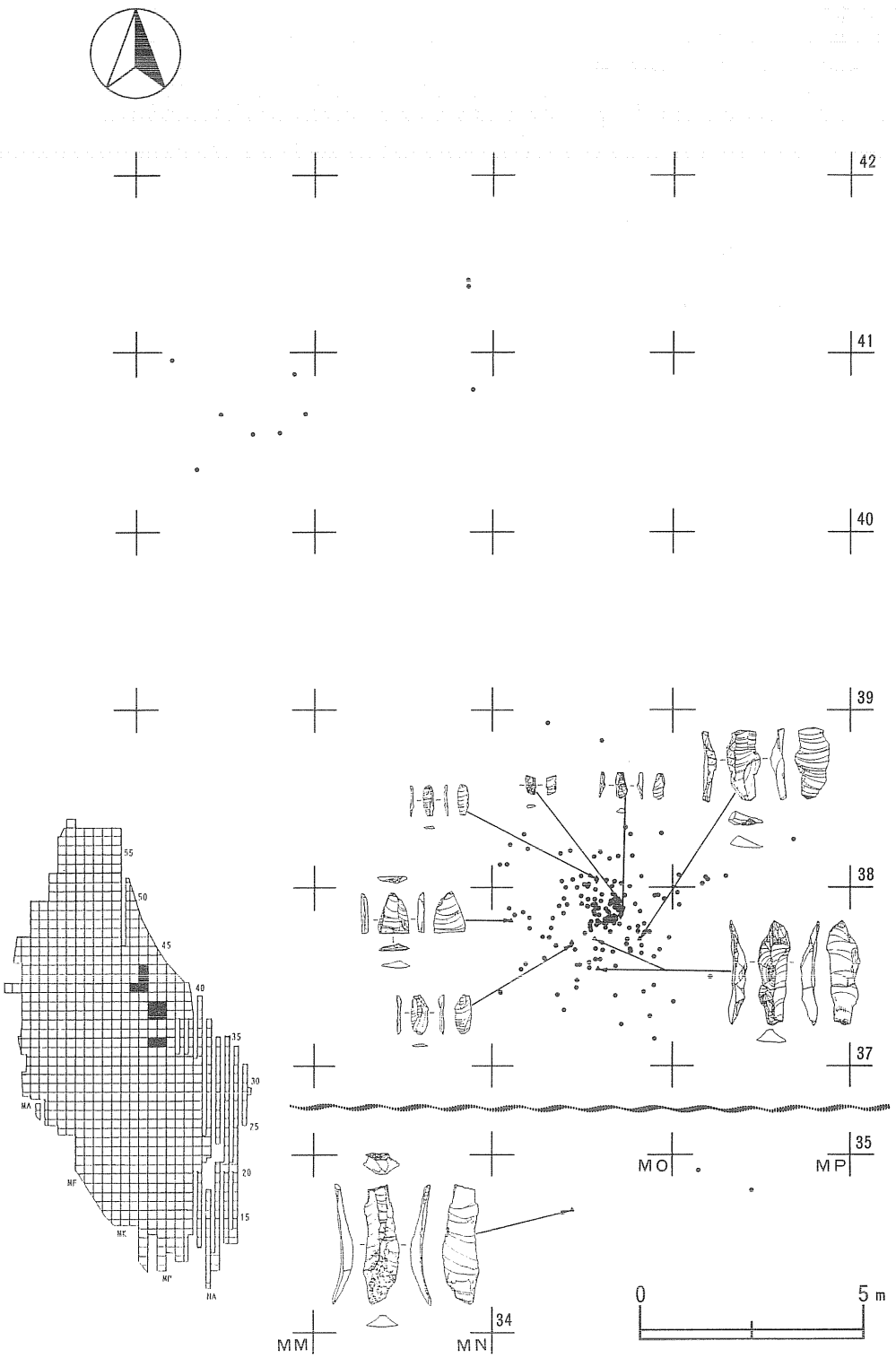
剥片５点からなる接合資料。礫皮面除去が主な作業である。1428＋1588は剥離後に折断されている。また、礫皮面を伴う817＋879も剥離後礫皮部分の817と879下部が折断されている。

■個体１－８

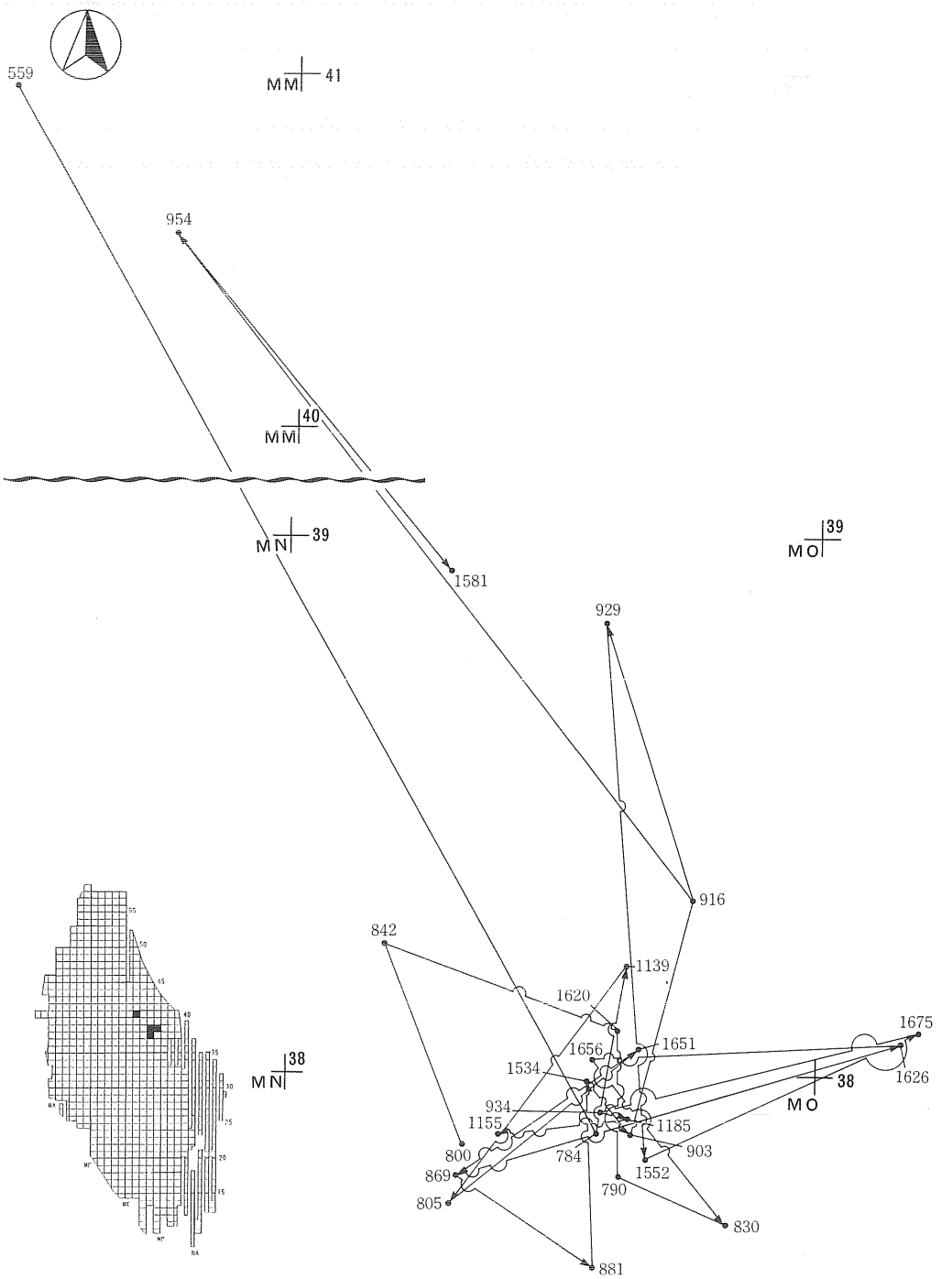
剥片３点からなる資料。いずれも縦長剥片であり、1611と1166は剥離後折断されている。1611、1161に残る打面は調整が施されている。

■個体１－９

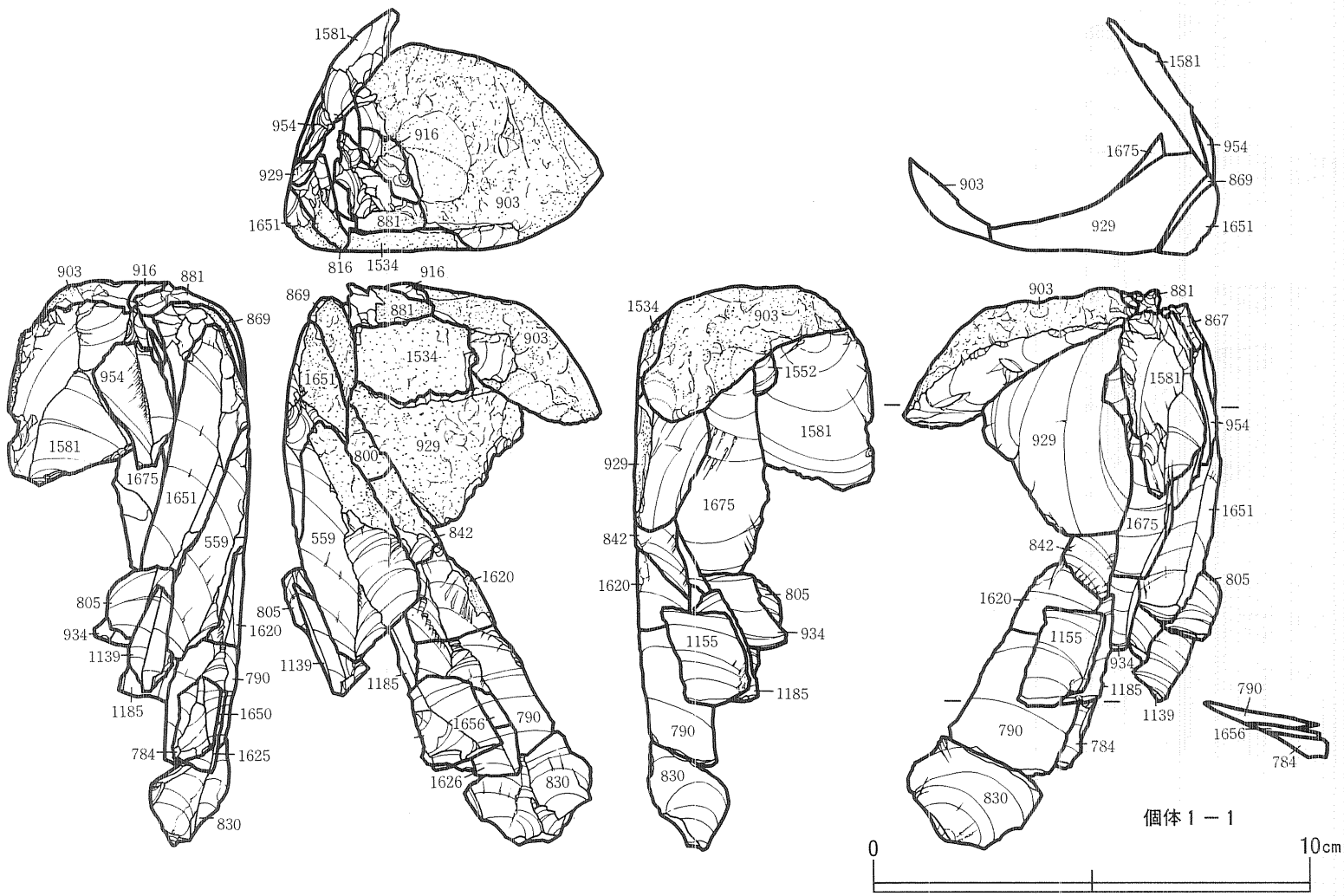
剥片４点の接合資料。礫面除去後、剥片1300が取られているが、この1300および829は火熱を


42
41
40
39
38
37
35
34
MO
MP
MM
MN
0
5 m
55
50
45
40
35
30
25
20
15
MA
MF
MK
MI
NA

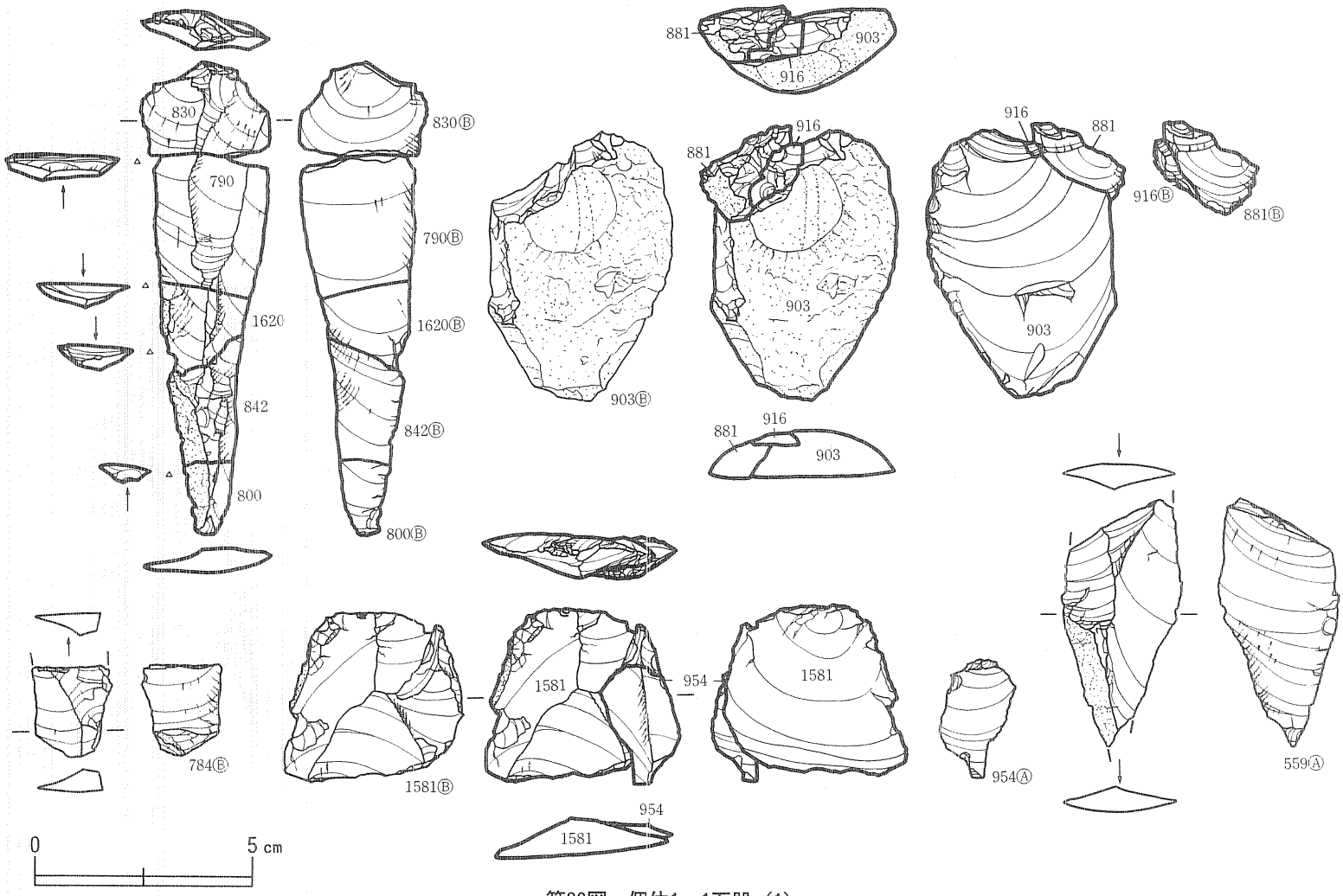
第27図　個体1分布図



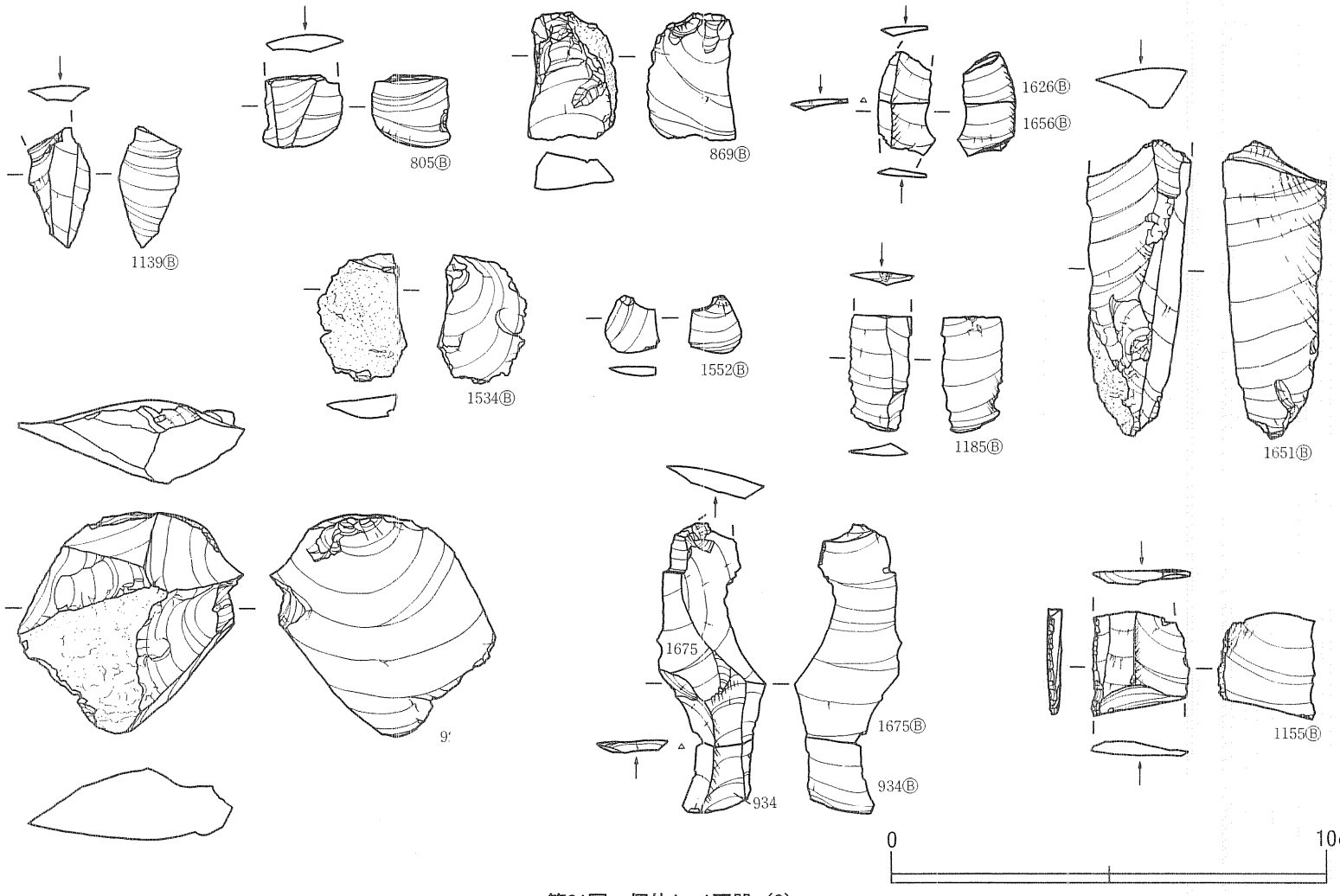
第28図　個体1－1接合関係図



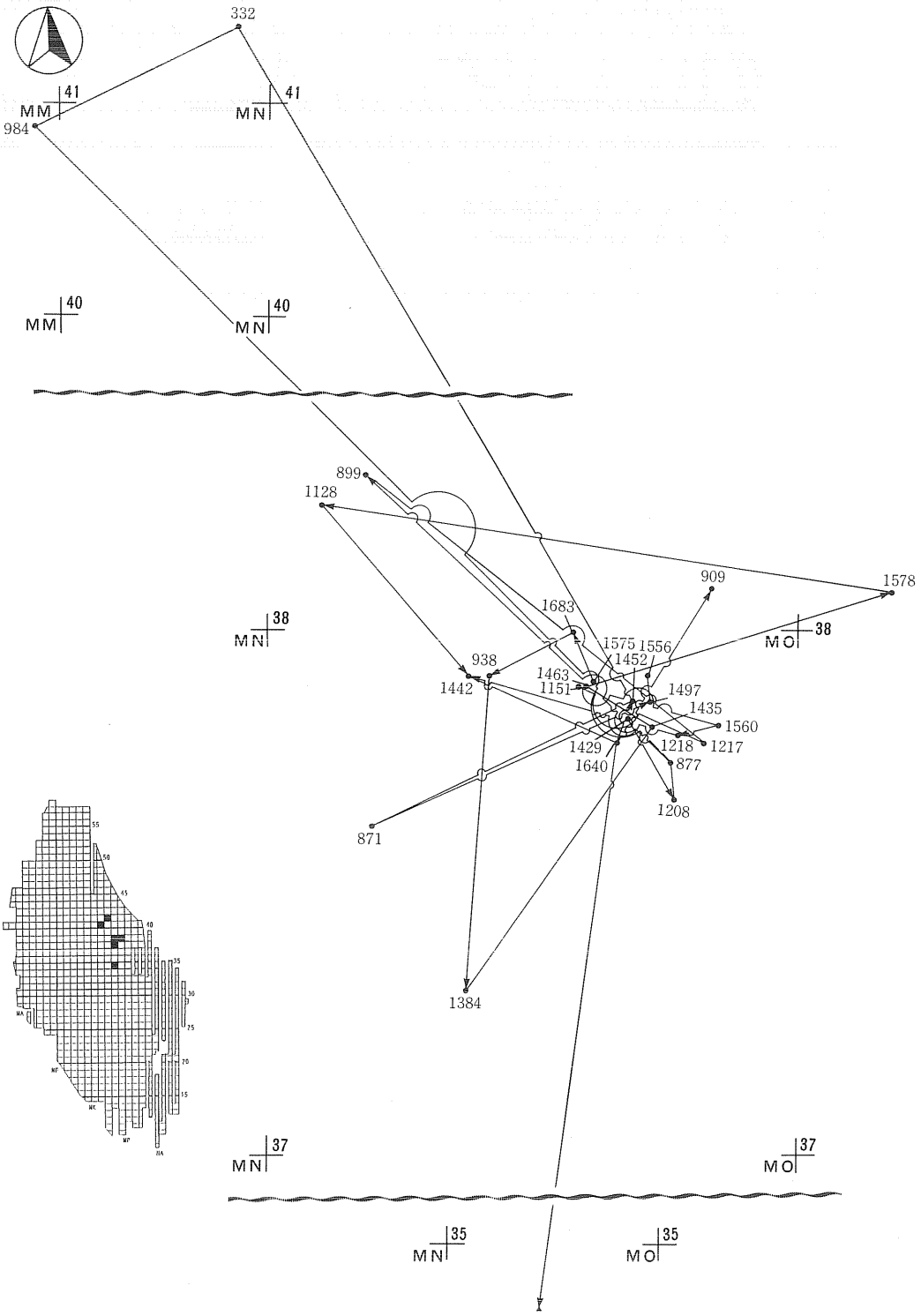
第29図　個体1－1接合図



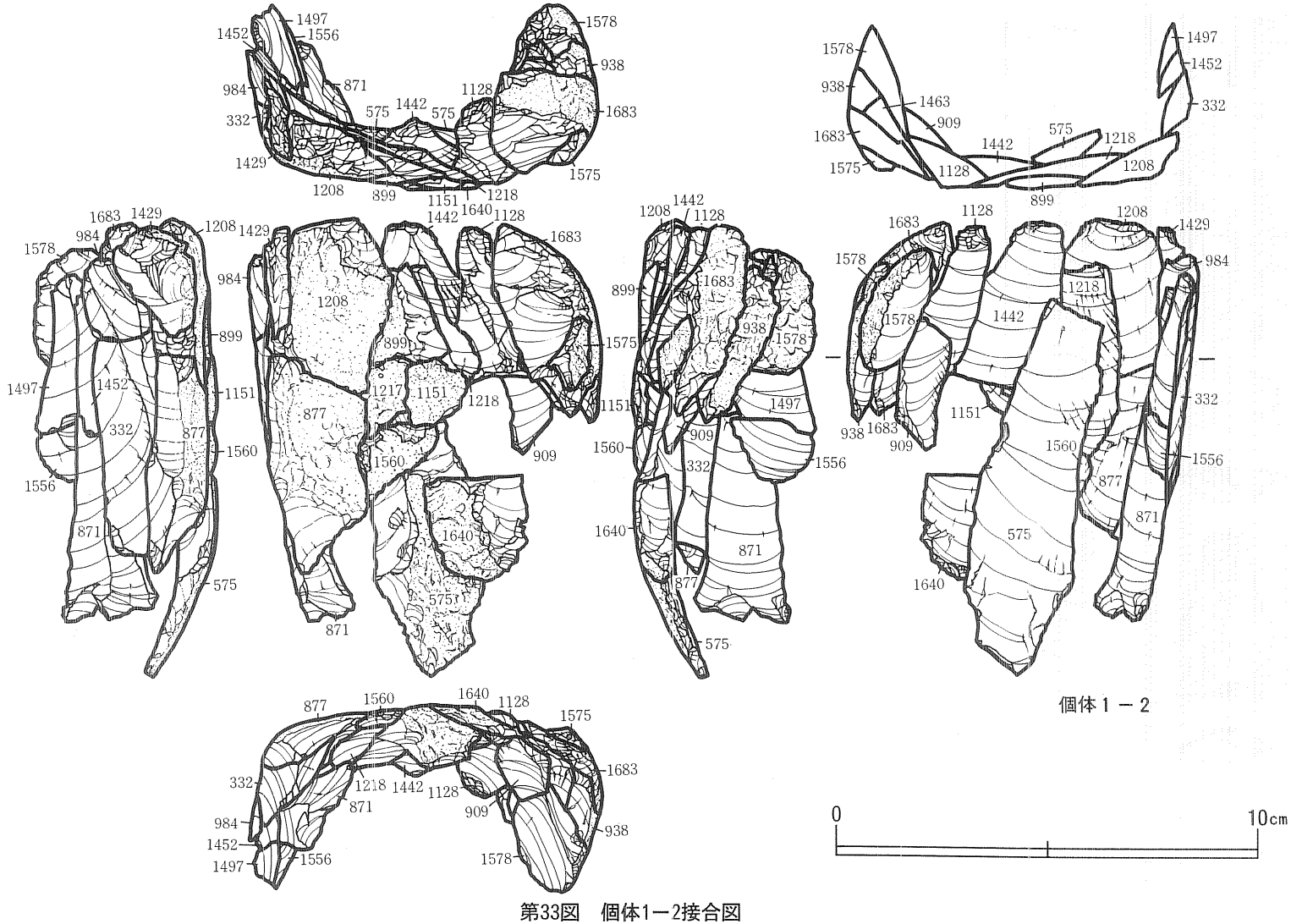
第30図　個体1―1石器（1）



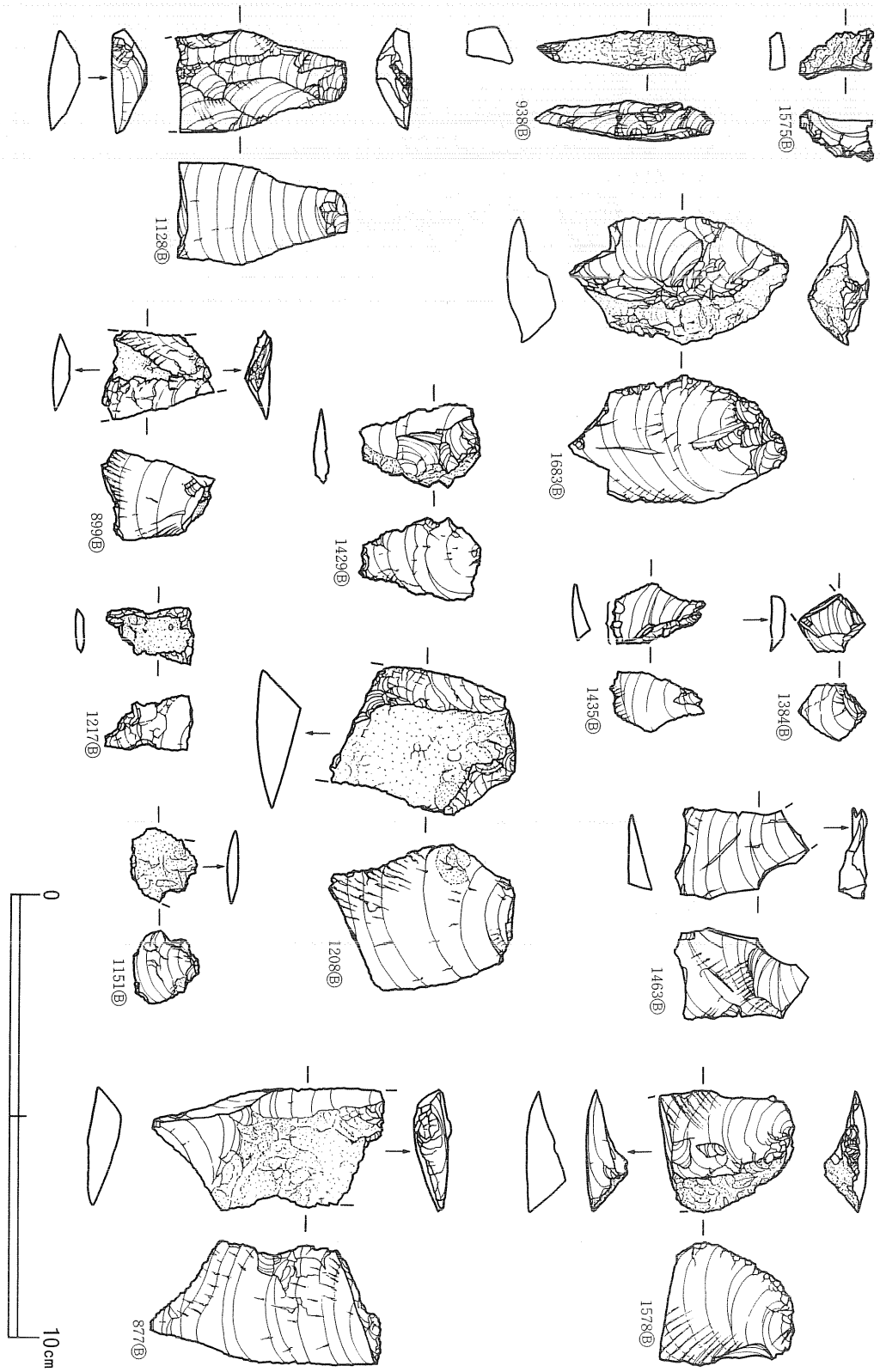
第31図　個体1ー1石器（2）



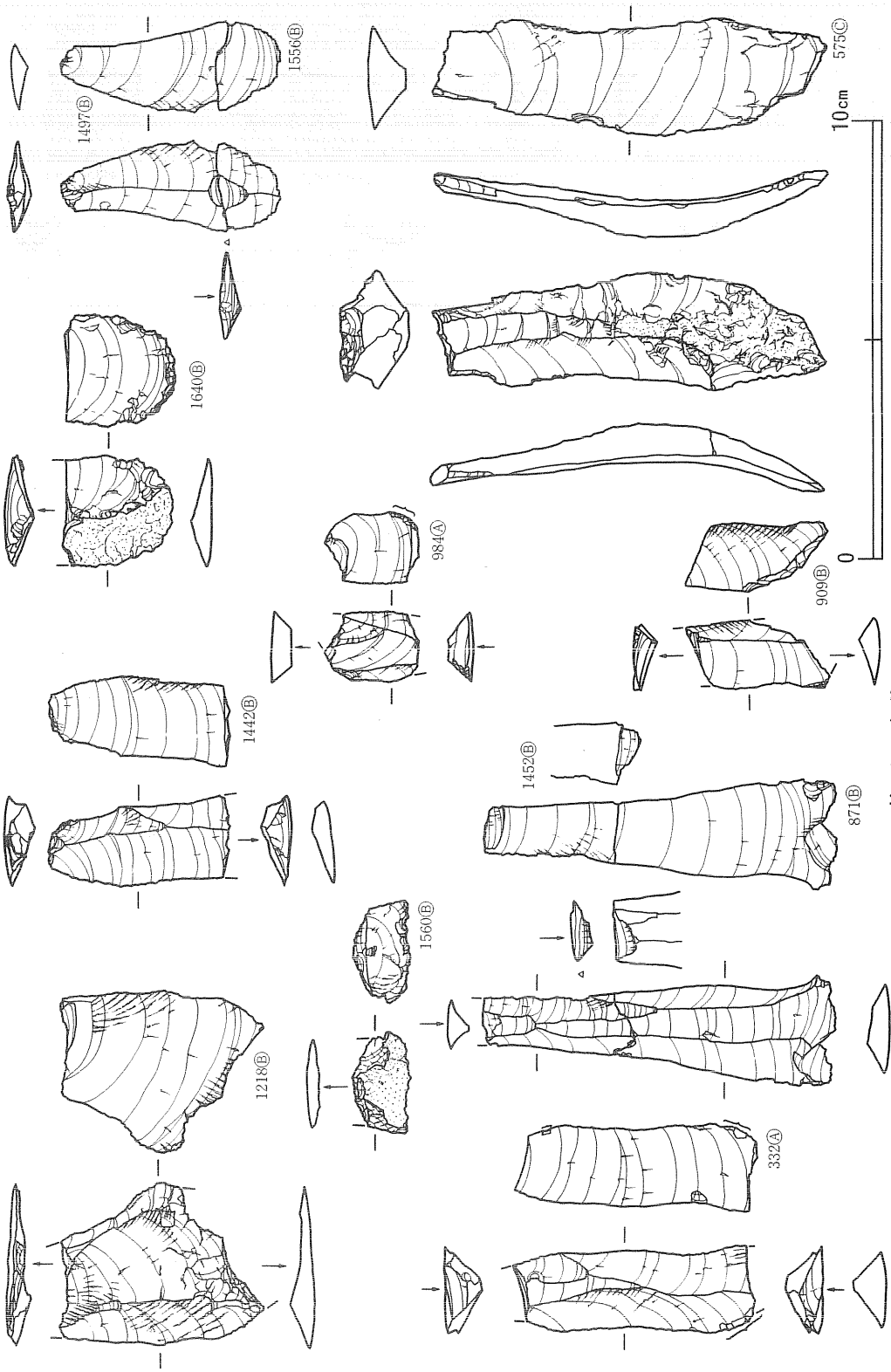
第32図　個体1－2接合関係図



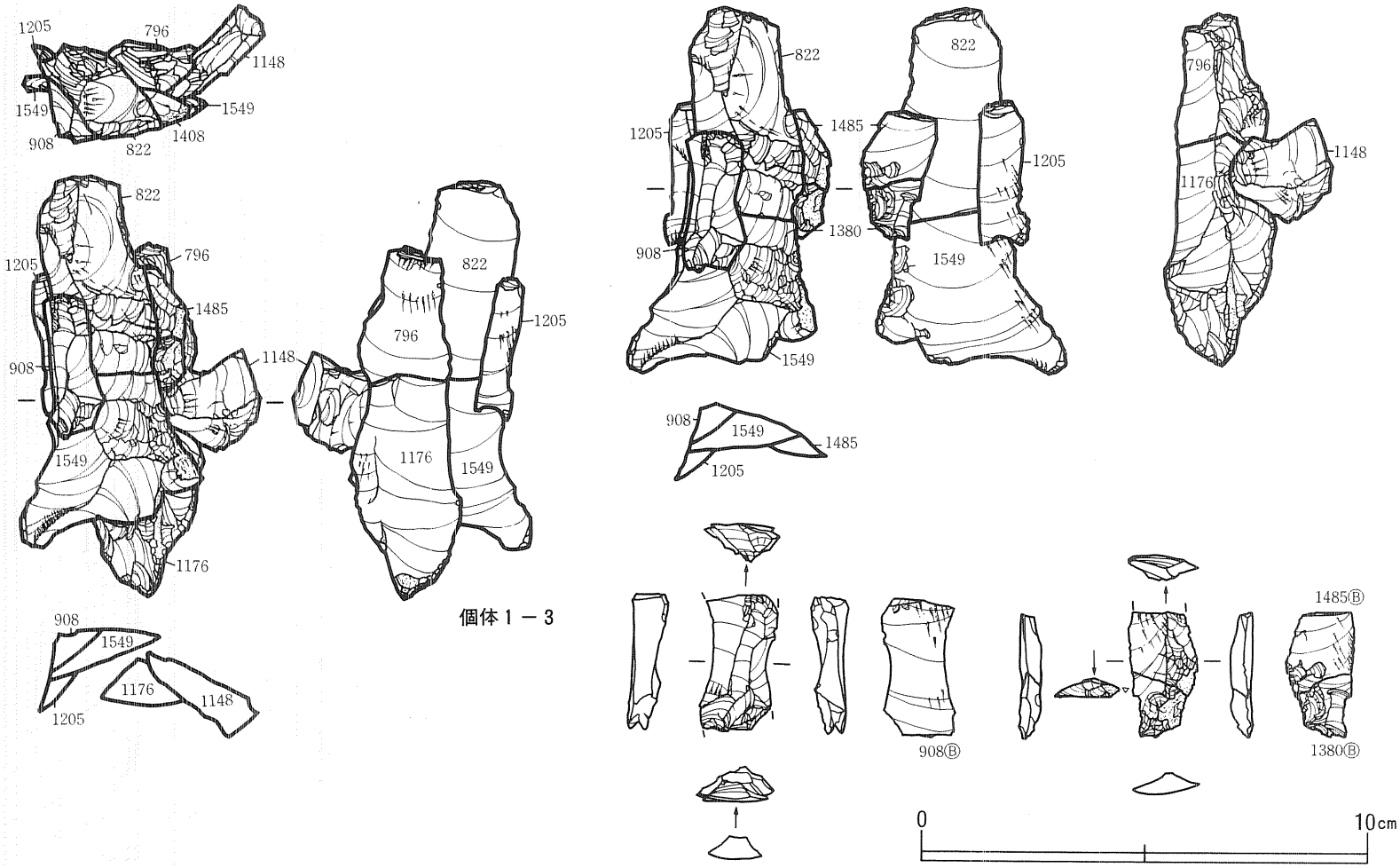
第33図　個体1－2接合図



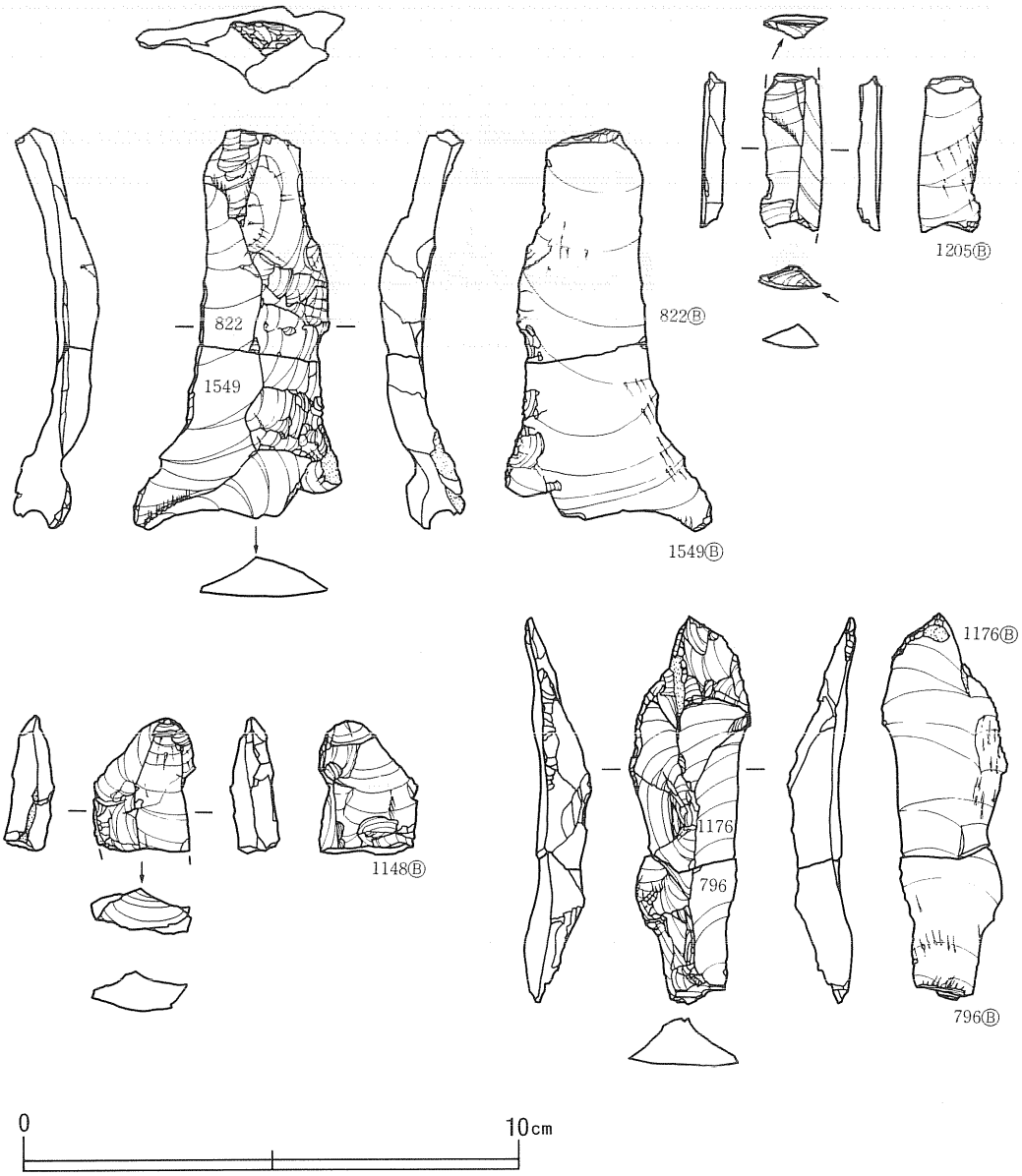
第34図　個体1－2石器（1）



第35図　個体1－2石器（2）



第36図　個体1－3接合図・石器（1）



第37図　個体1－3石器（2）

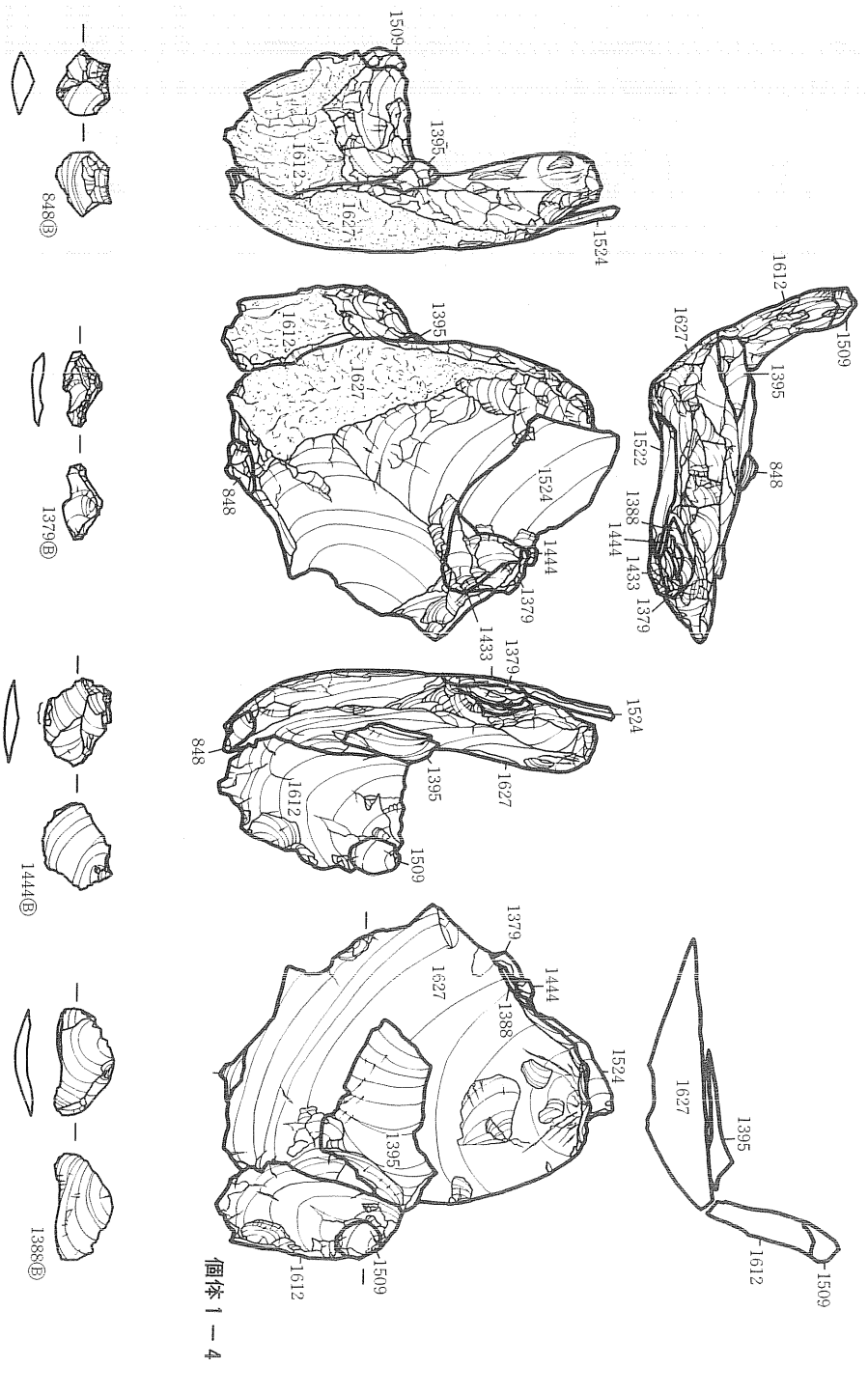
受け、赤化している。

■個体１－10

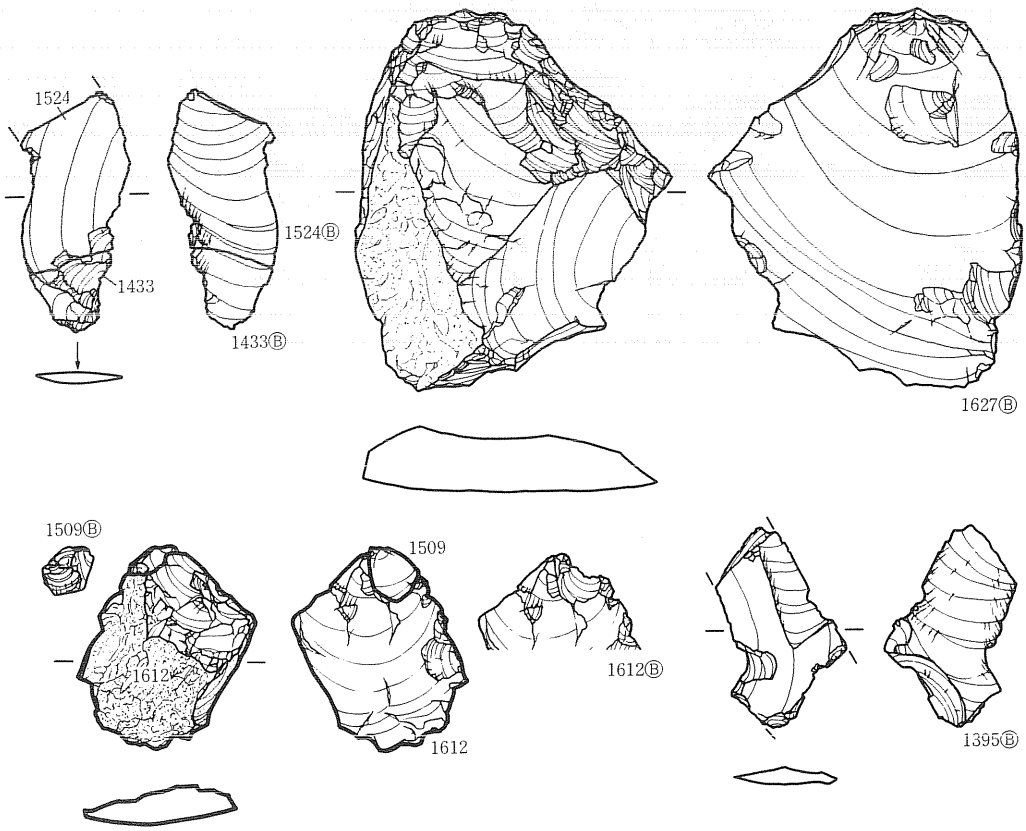
礫皮面除去にかかる剥片２点。剥離の際に割れたもの。

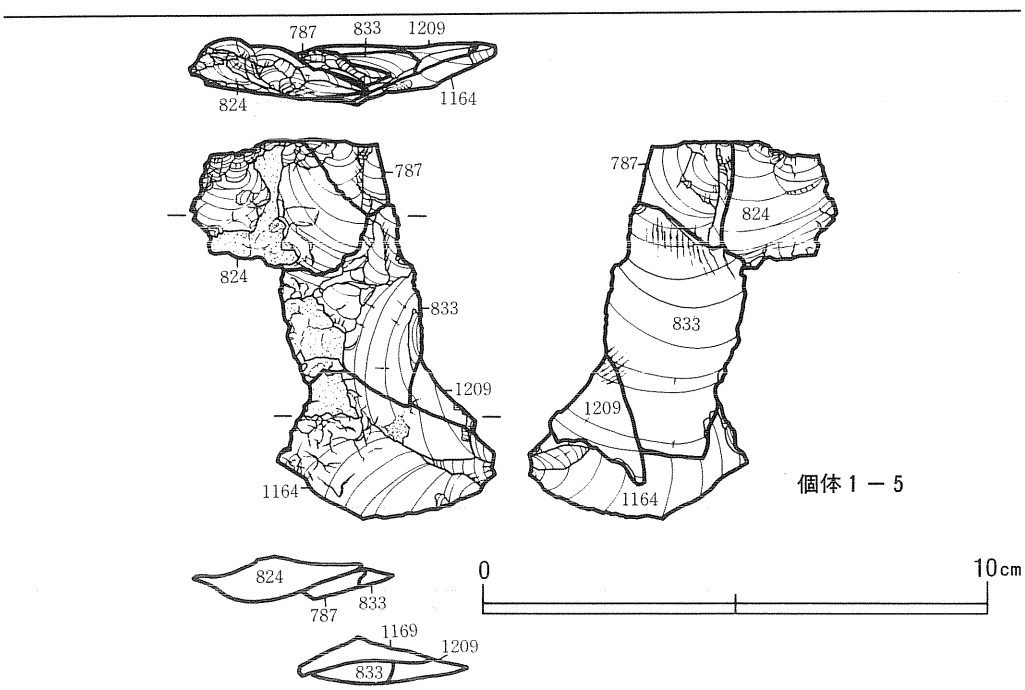
■個体１－11

剥離の際に分割された剥片２点。調整打面をもち、1169は剥離後火熱を受け、末端が赤化している。

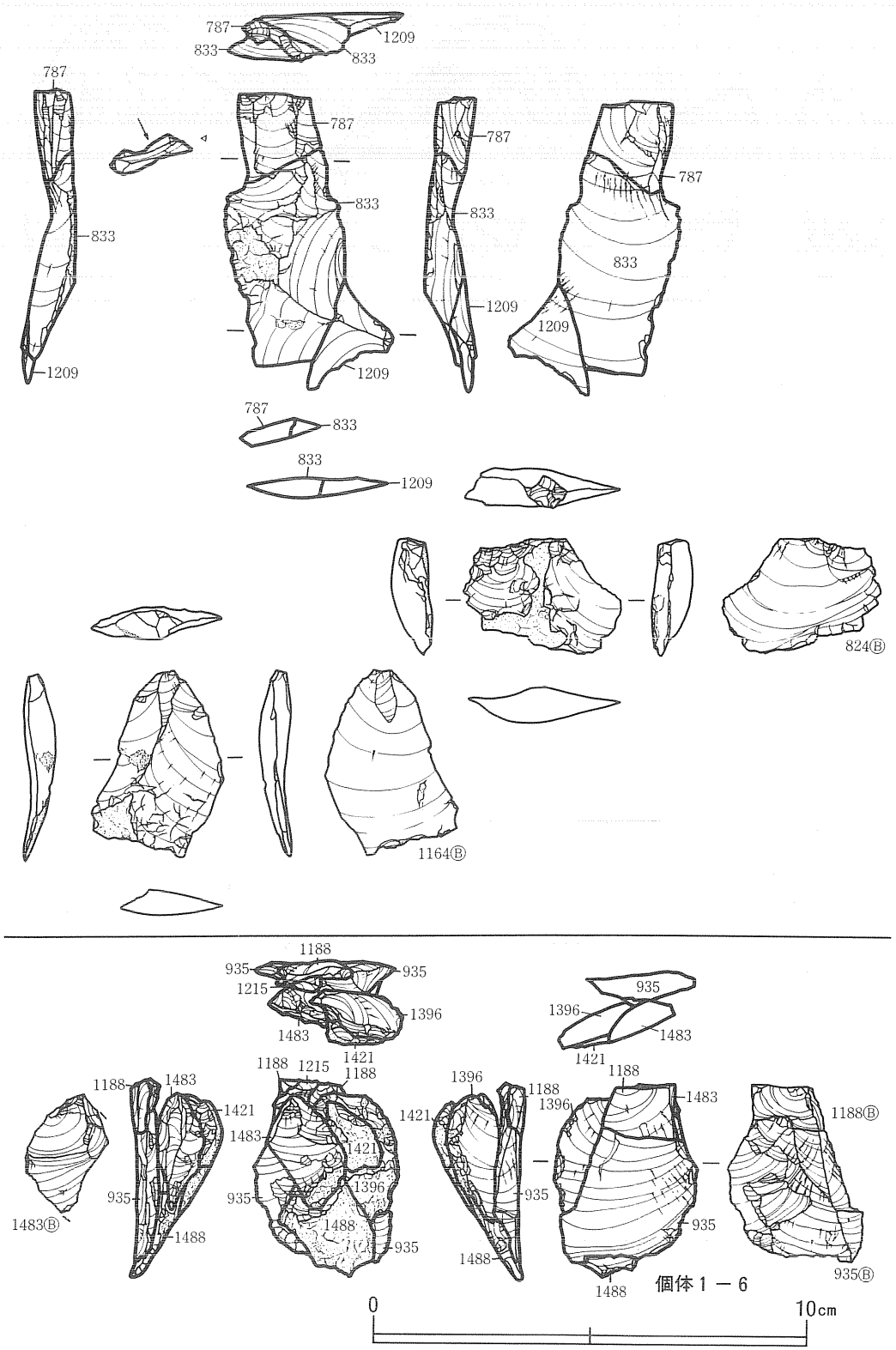


第38図　個体1－4接合図

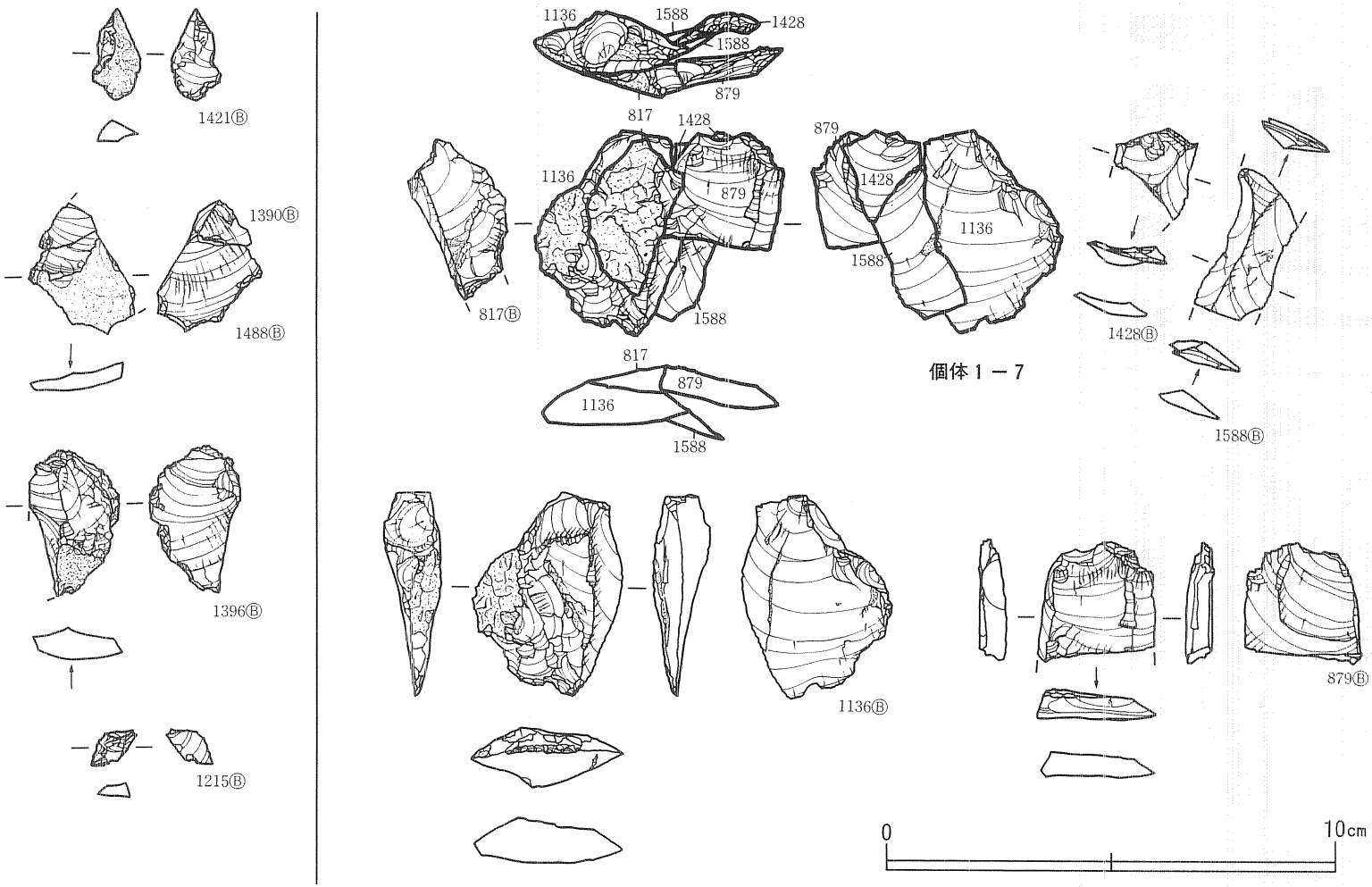




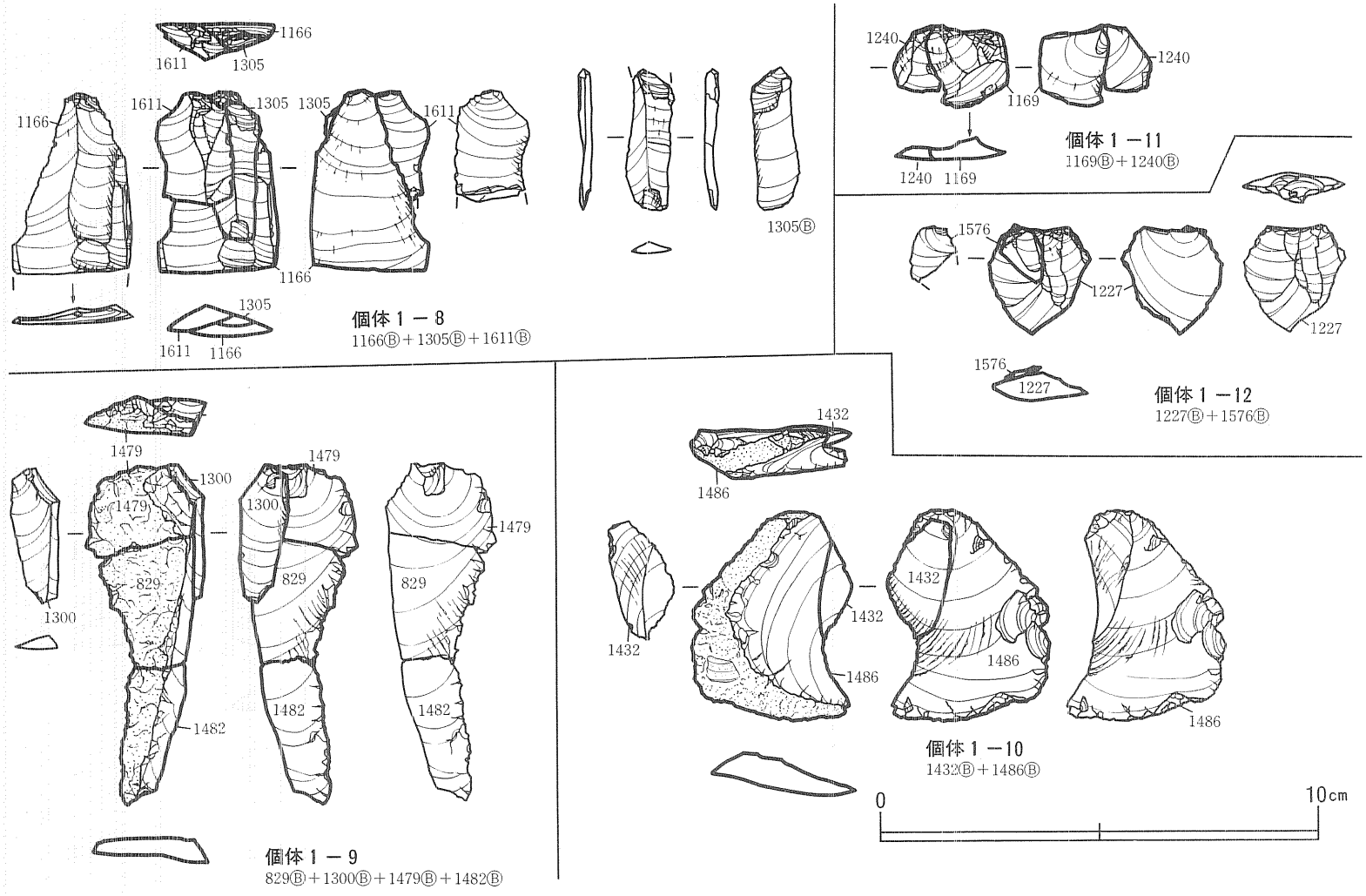
第39図　個体1－4石器・個体1－5接合図



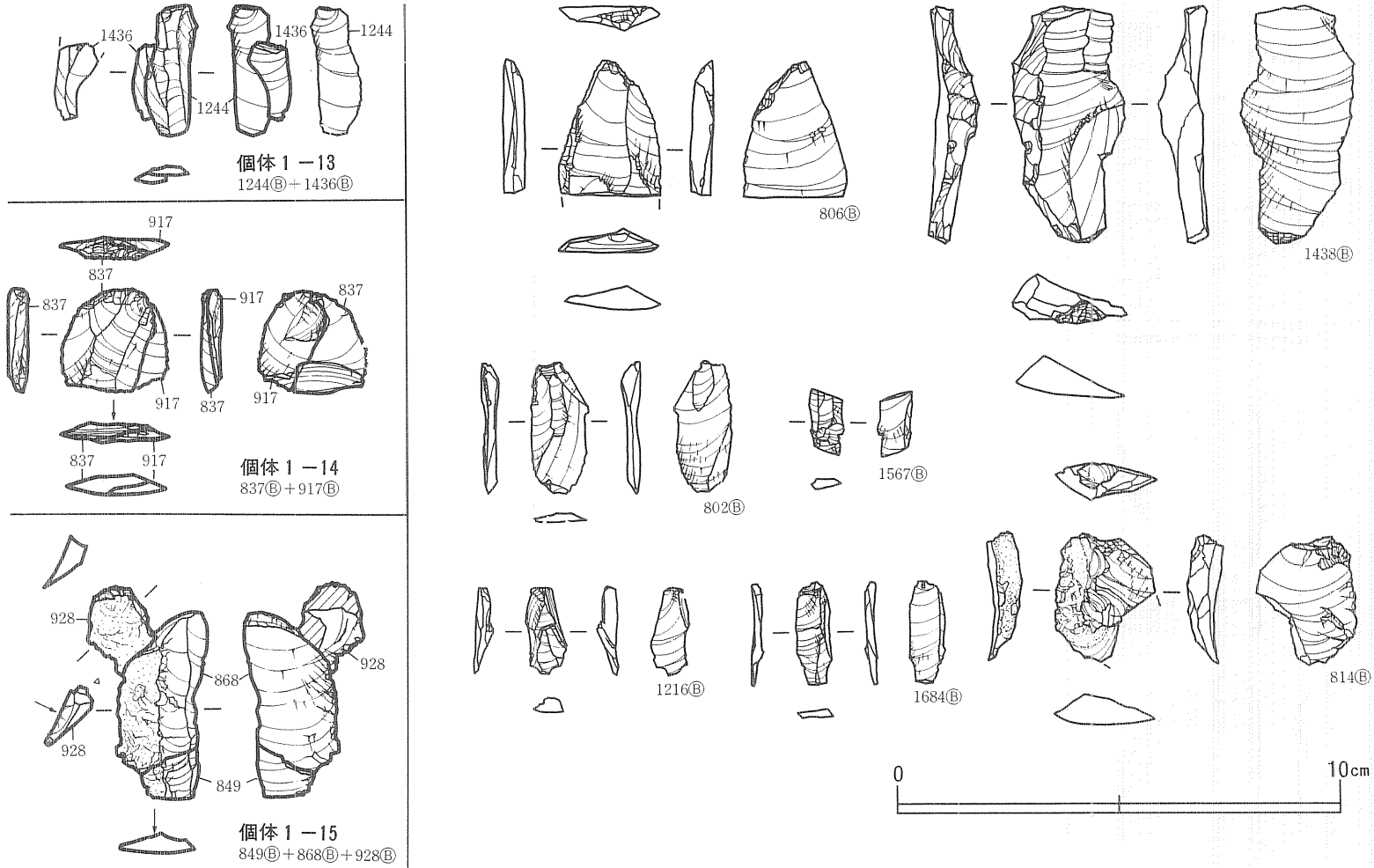
第40図　個体1－5石器・個体1－6接合図



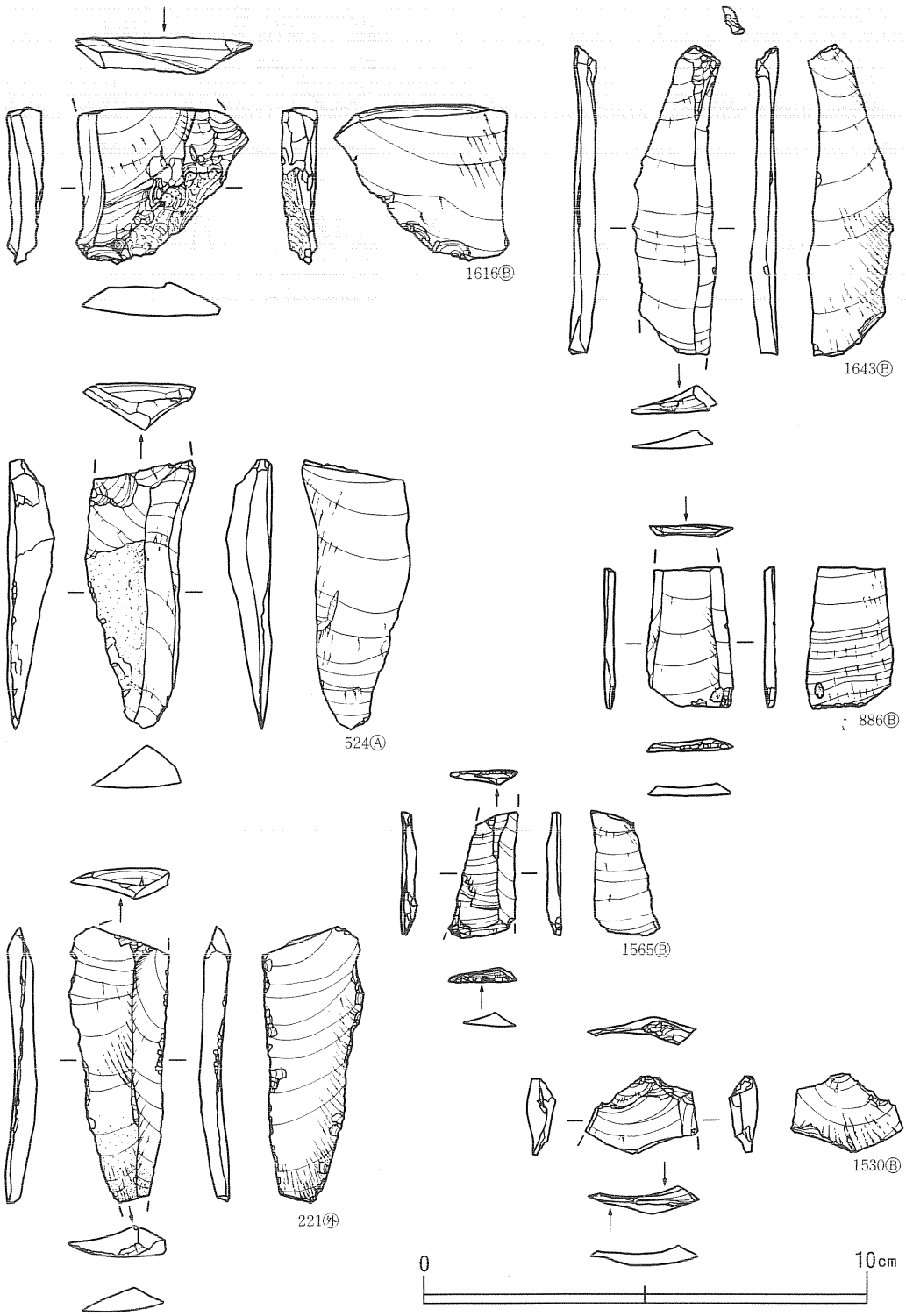
第41図　個体1－6石器・個体1－7接合図



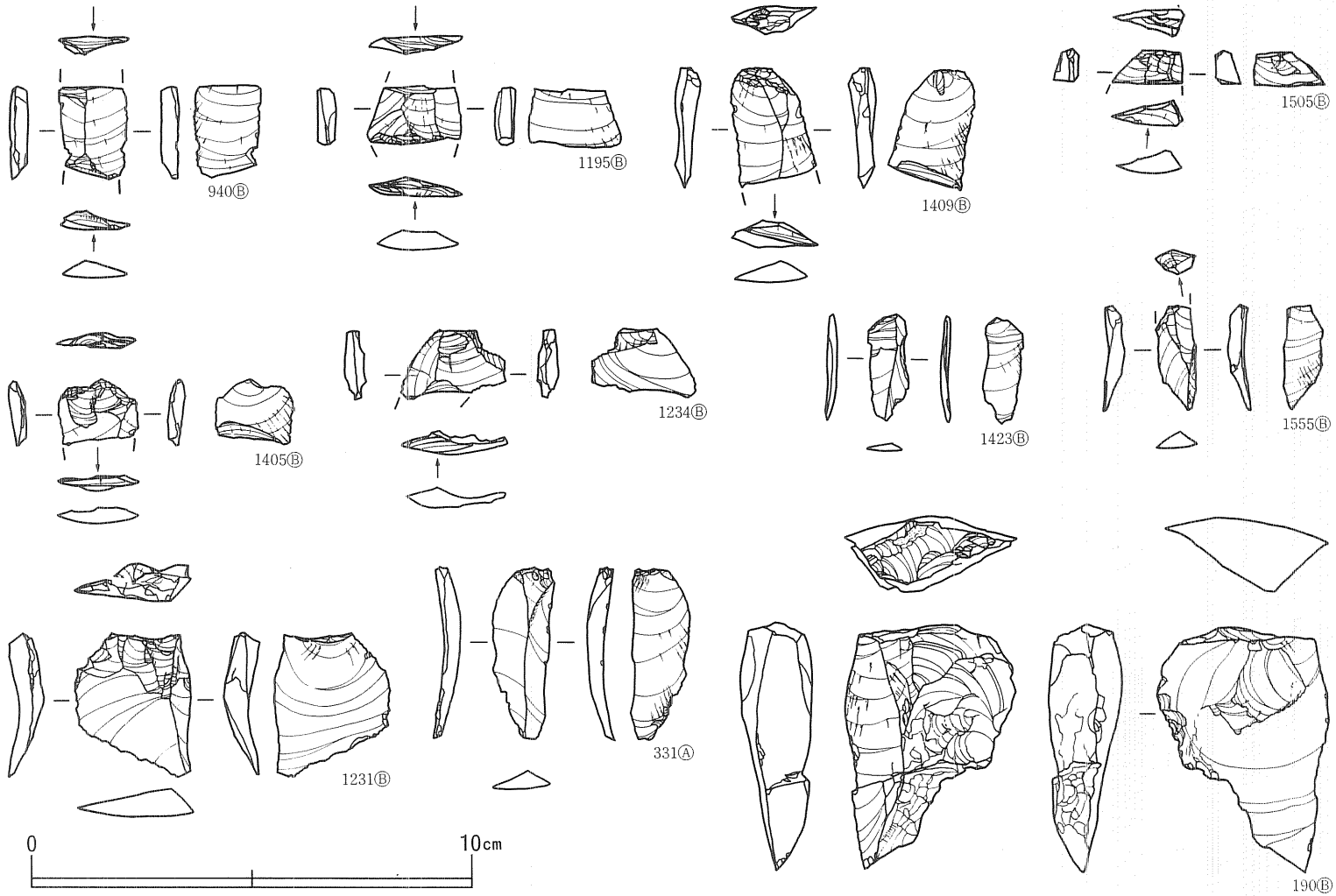
第42図　個体1－8～1－12接合図・石器



第43図　個体1－13～1－15接合図・石器、個体1単独資料（1）



第44図　個体1単独資料（2）



第45図　個体1単独資料（3）

■個体１－12

砕片および剥片からなる資料。1227は調整打面が残るが、剥離後切断され火熱を受けて末端が赤化している。

■個体１－13

剥片２点の接合資料。1244に残る打面は調整打面であり、剥離後火熱を受け末端が赤化している。1436は剥離後折断されている。

■個体１－14

剥離の際、分割された剥片。下部の折断面も剥離時の衝撃でできたものと思われる。837、917とも剥離後火熱を受け赤化している。

■個体１－15

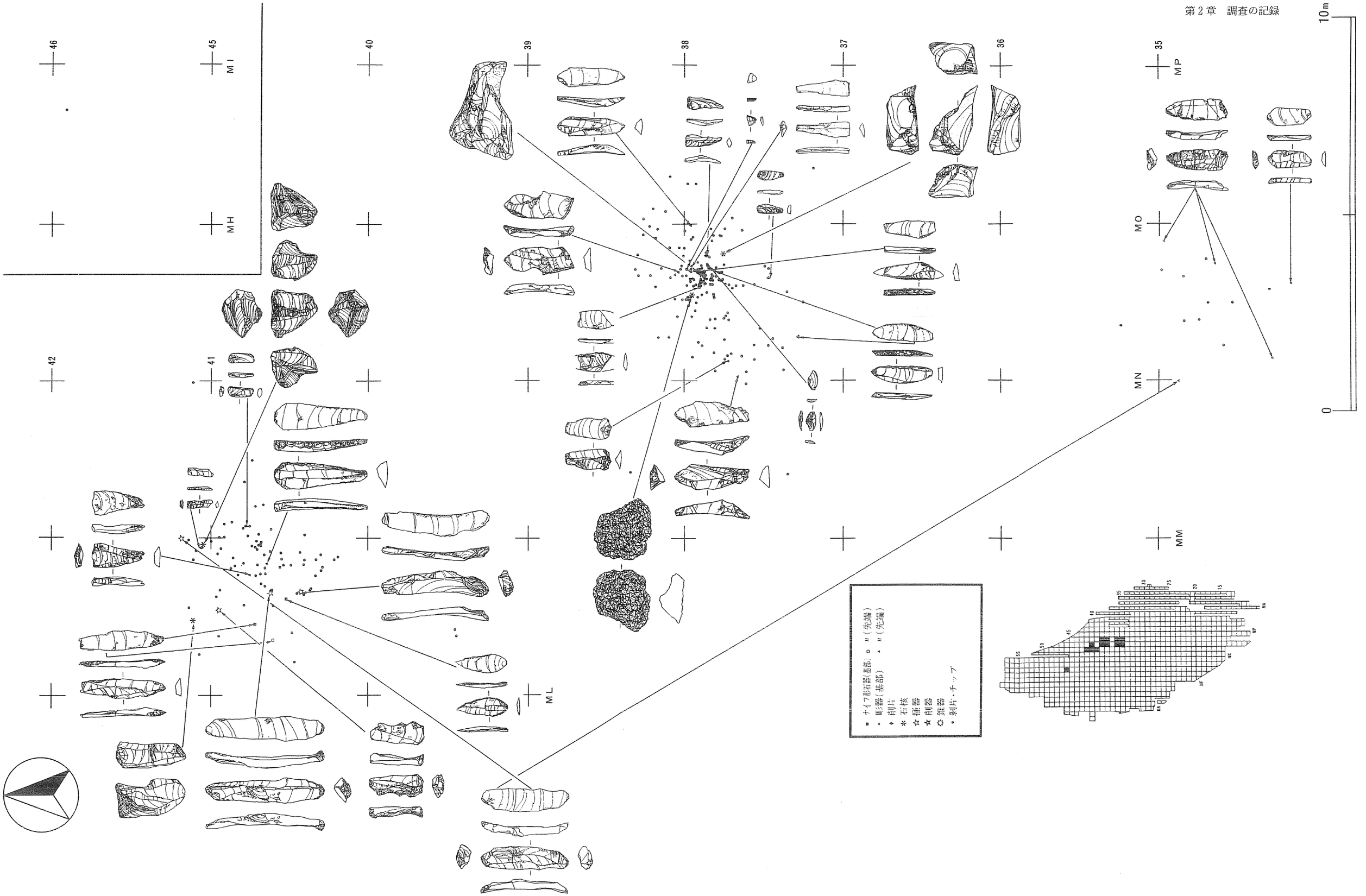
礫皮面を伴う剥片。剥離後火熱を受けて赤化しているが、３片の分割はこの火熱を受けた際になされたもの。

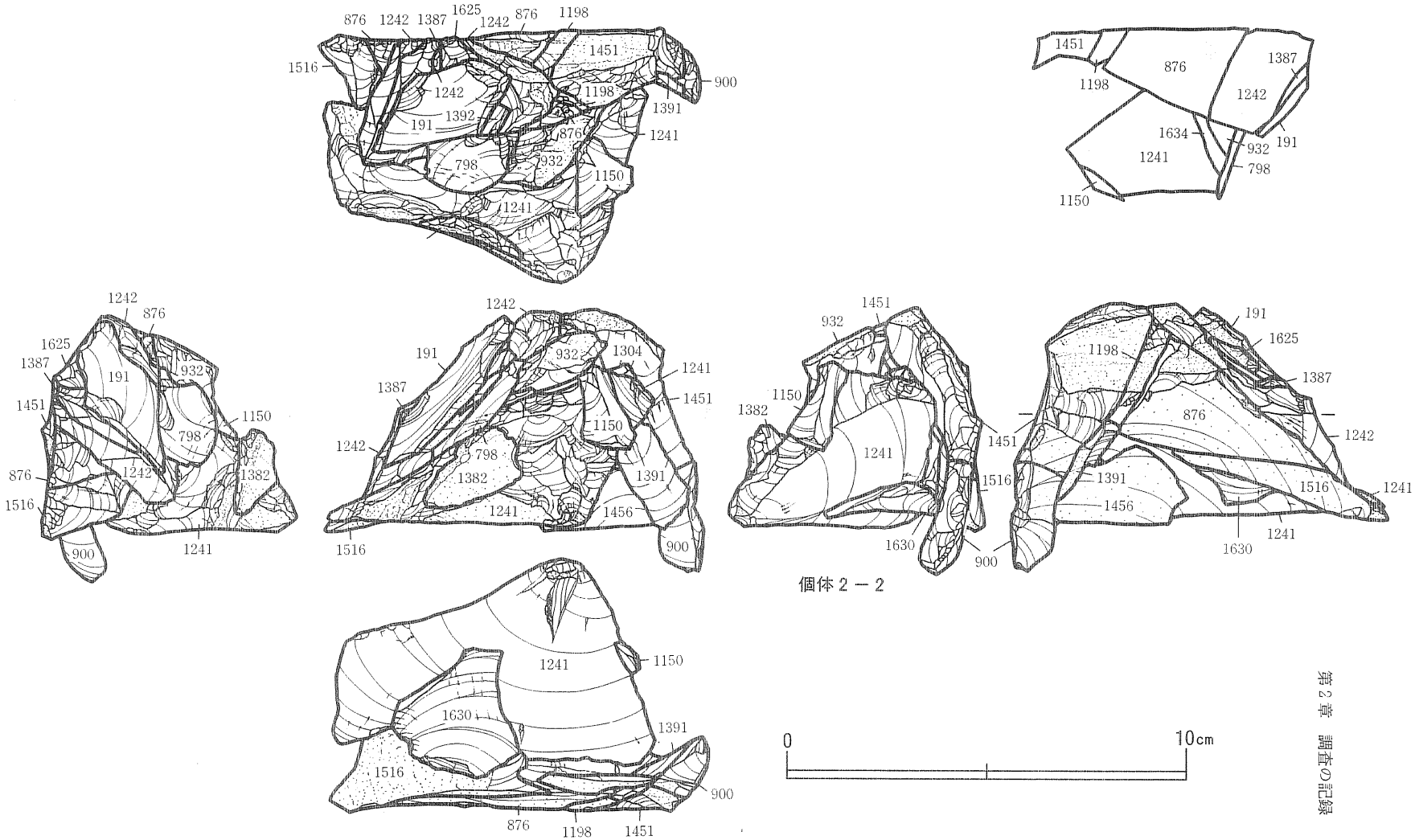
②　個体別資料２（第46図～第73図）

礫皮面平坦部は滑沢面を、稜は皺状を呈する暗褐色の珪質頁岩である。総数292点の資料がある。わずかに褐灰色から黒褐色の斑文とごく微量の白色粒を含む外は不純物がなく、きわめて均質でかつ光沢をもつが、石英の微細粒を含む節離がはいっており、剥片剥離の作業は部分的にこの節離に制約される。遺跡内には原礫のままか、分割された状態で数個が持ち込まれ、細身の縦長剥片を目的として剥片剥離作業が行われている。得られた縦長剥片はナイフ形石器、彫器、掻器および折断剥片に加工されているが、本遺跡出土資料中、製作された石器の最も多い個体である。複数の石核の大部分が遺跡内で消費され、残核としては個体２－２a中の1241、２－２b中の876、２－３中の743および単独の資料である1278、被熱し剥離痕の不明な資料であるが783ような最終段階のものが残されている。

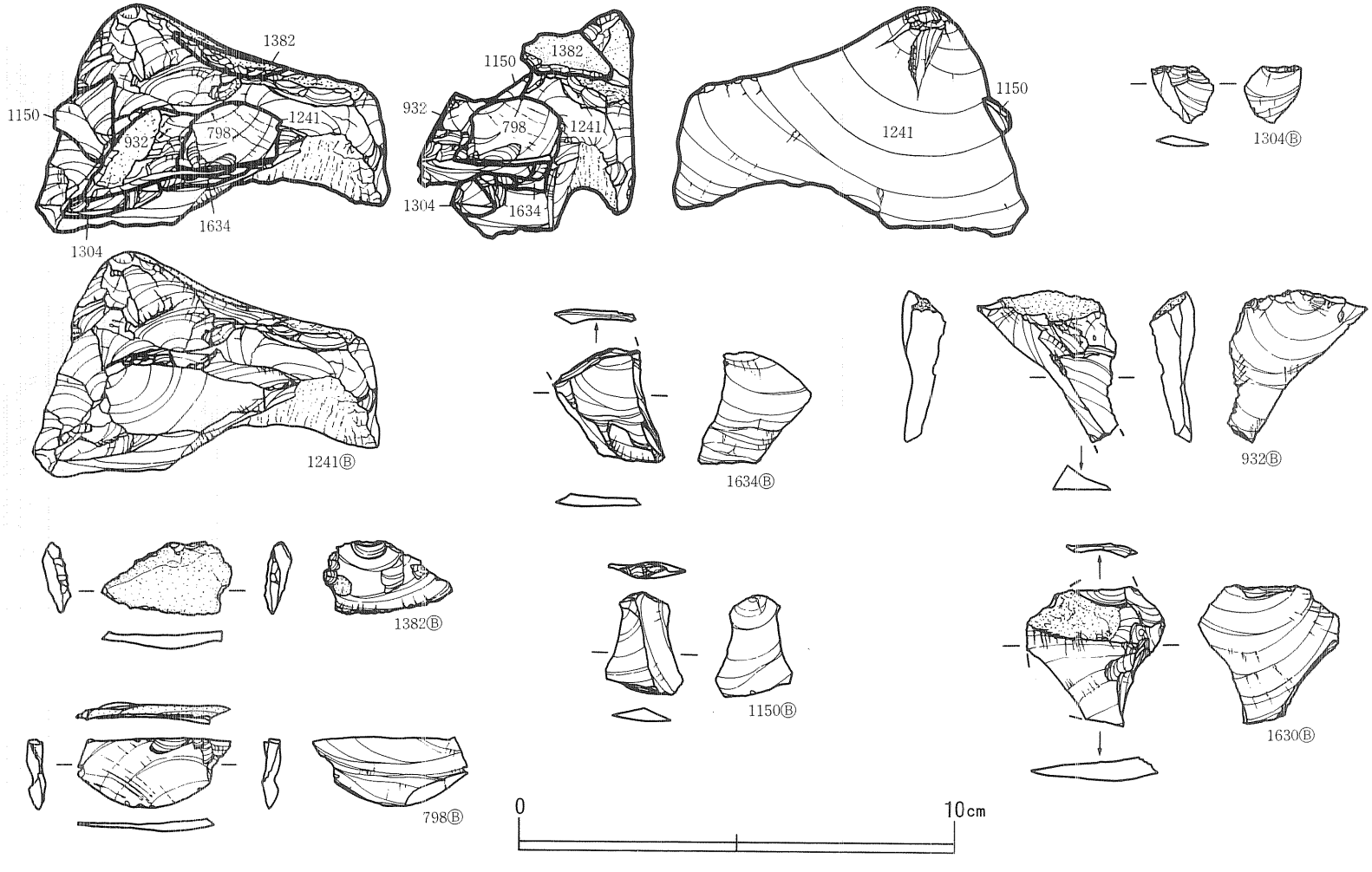
個体２の資料も、A、B、Cの３ブロックにわたって分布する。Aブロックにはナイフ形石器２点、掻器４点、彫器２点、彫器削片２点、残核２点が、Bブロックにはナイフ形石器３点、彫器６点、彫器削片３点、残核３点が、Cブロックでは彫器３点が含まれている。

ブロック間をまたぐ接合関係は、個体２－３、２－４、２－５、２－７、２－23で認められる。個体２－３では節離面で分割される以前の剥片613、および遺跡内には残されていない分割後の石核から得られた剥片619がBブロックに存在し、分割後の石核734は掻器561とともにAブロックへ搬出され、Aブロック内での剥離作業によってナイフ形石器1359が得られている。個体２－４では節離面での石核分割を含む剥離作業の中心はBブロック内でおこなわれているが、掻器547、689および縦長剥片541はAブロックへ、さらに掻器689とは同一の縦長剥片の反対側の端を加工した彫器624は

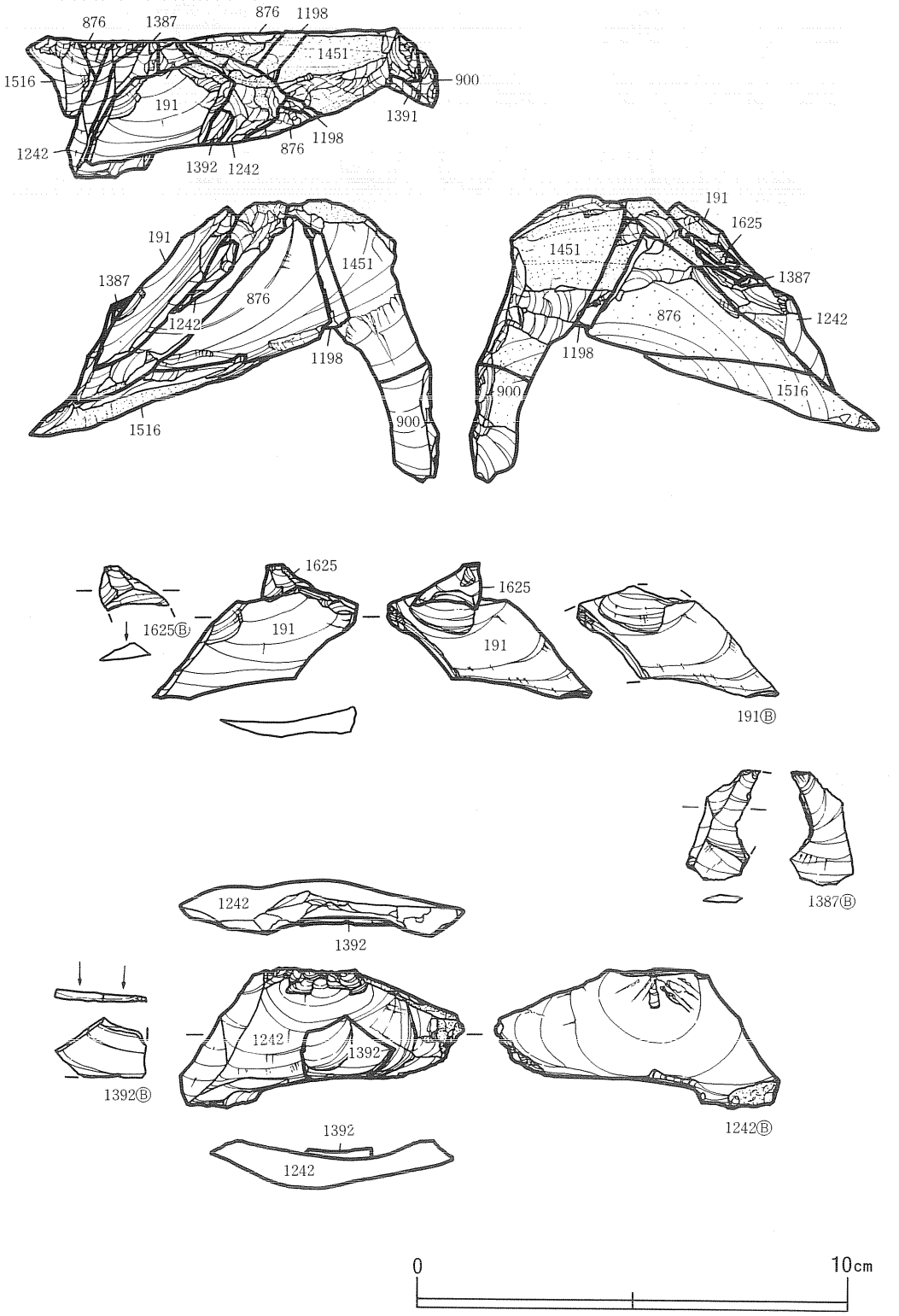

46
45
40
39
38
37
36
35
MI
MH
MP
MO
MN
42
41
ML
MM
10m
0
▫ ナイフ形石器(基部) ▫ 〃(先端)
▵ 彫器(基部) ▲ 〃(先端)
◆ 削片
＊ 石核
☆ 掻器
★ 削器
✡ 錐器
• 剥片・チップ



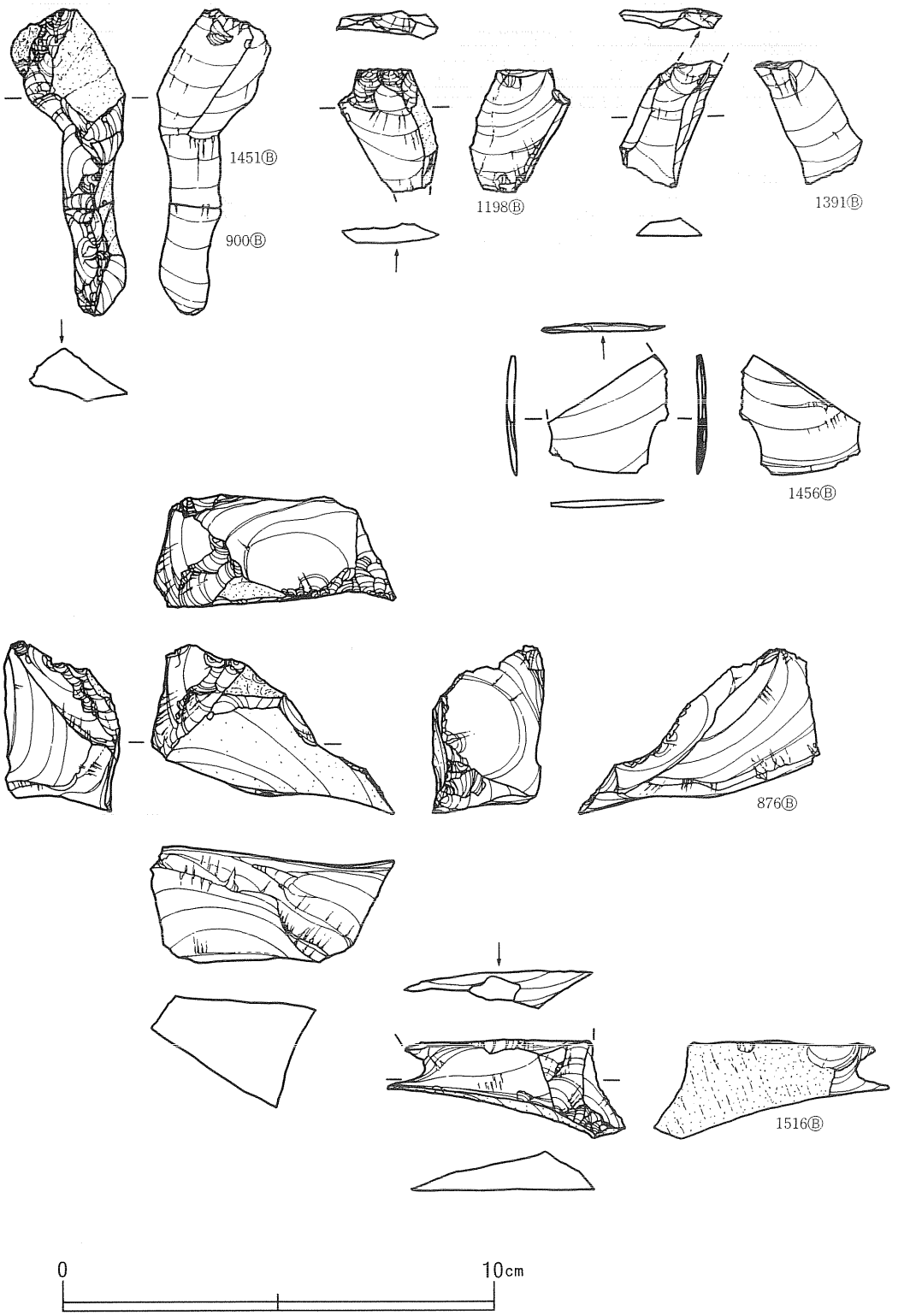
第47図　個体2－2接合図



第48図　個体2ー2a接合図・石器



第49図　個体2ー2b接合図・石器（1）

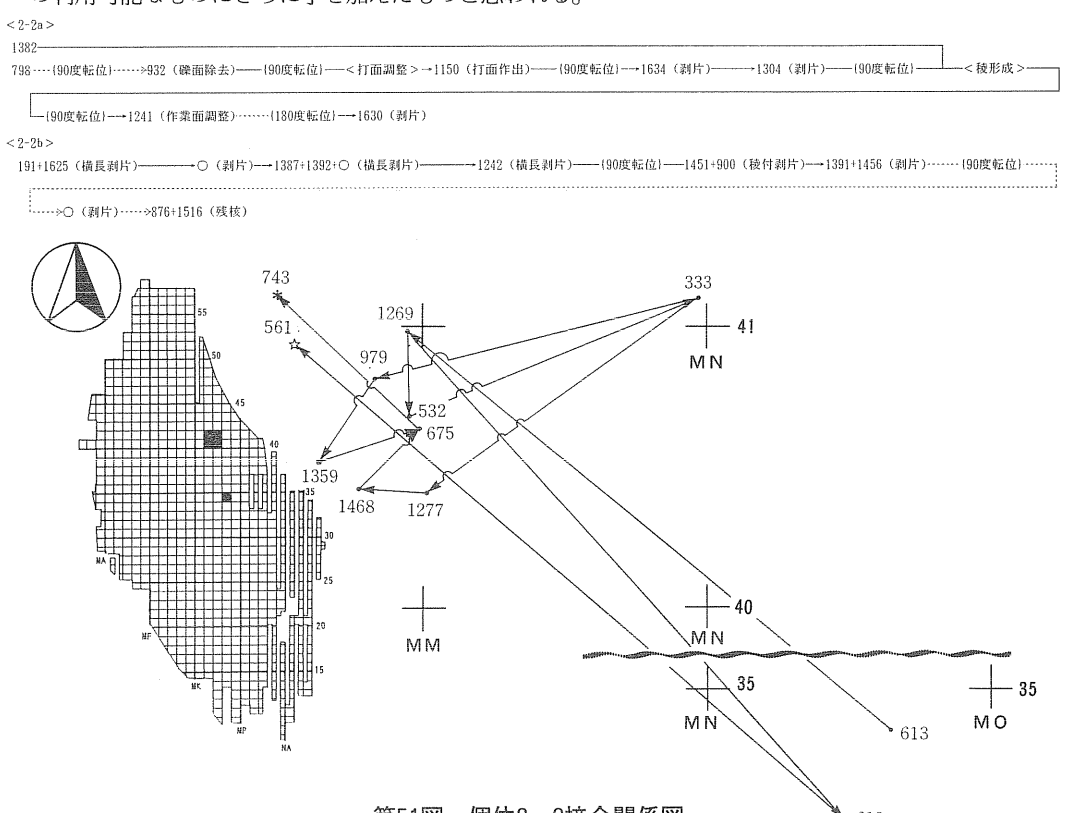


第50図　個体2－2b石器（2）

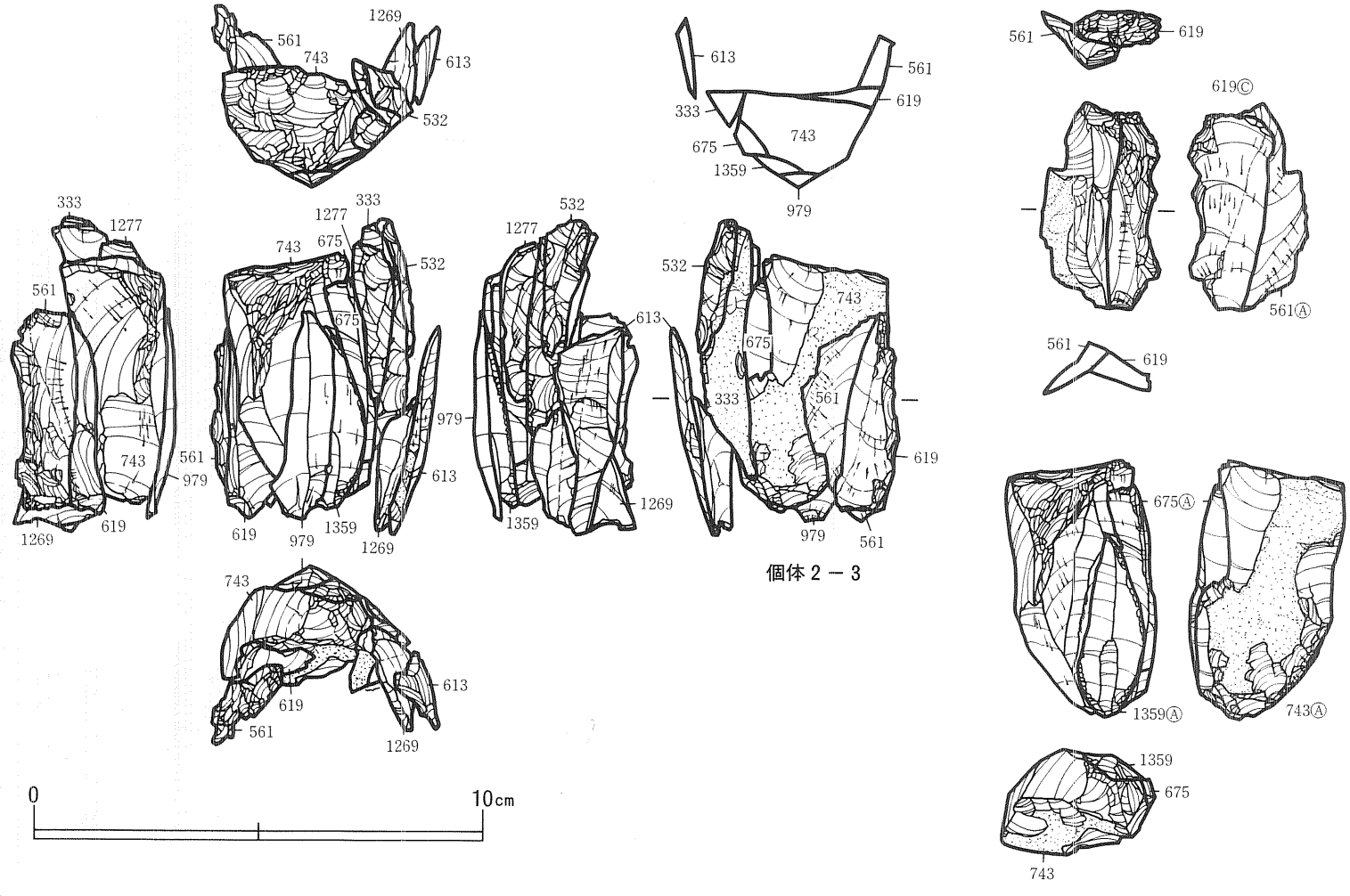
Ｃブロックへ搬出されている。また個体２－５においても剥離作業の中心はＢブロック内でおこなわれナイフ形石器1426などが得られているが、掻器1538はＡブロックへ、節離面除去・石核下端部調整の剥片574はＣブロックへ搬出されている。個体２－７においては折断を受けた縦長剥片576がＣブロックへ搬出され、彫器808と剥片576と対になる205はＢブロックに残されている。２－23ではＡブロックの二次加工の施された剥片726とＢブロックの折断を受けた縦長剥片882が接合する。そのほかの接合資料では２－２、２－８、２－12、２－13、２－14、２－15、２－16、２－21、２－25、２－22、２－６がＢブロック内で、２－９、２－11、２－18、２－24がＡブロック内で接合する。

■個体２－２

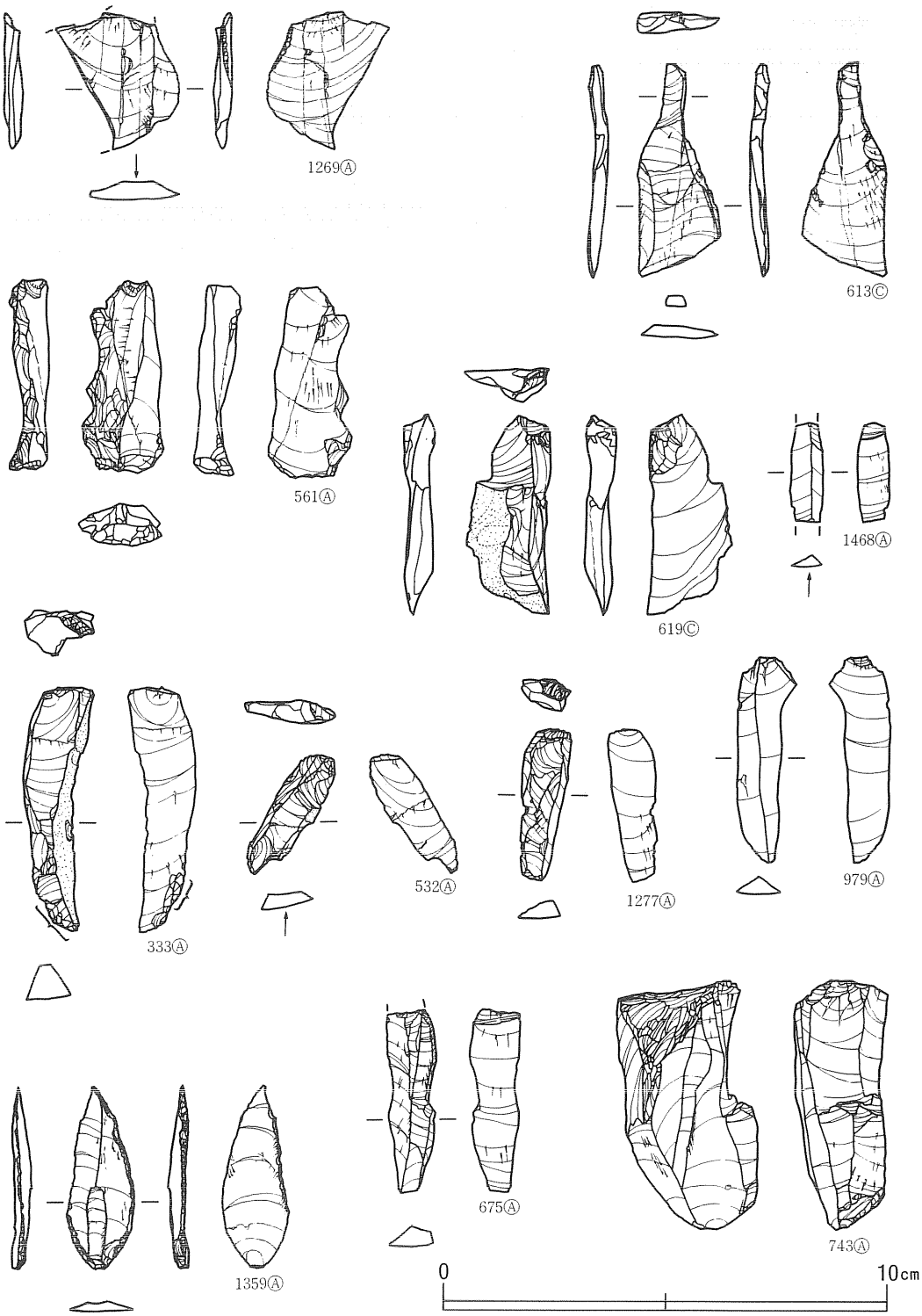
剥片18点、残核１点からなる資料である。この資料はまず節離面において２分割されており、これを２ａ、２ｂとする。２ａは打面を90度転位しながらおもに礫皮面の除去を行っている。そのうち1634は薄い縦長剥片で、剥離後、折断されている。1241を剥離して平坦な作業面を作出しているが、その後1630に続く部分は残されていない。２ｂは、石核の上面と下面に広い平坦面をもち、後退しながら横長剥片を剥離している。横長剥片の末端部には石核の底面部分を有している。剥離された薄手の横長剥片は折断されている。この資料は、礫皮面、節離面が多く、1451＋900が稜付剥片であることから、石核の初期工程である石核整形の際に生じた剥片の接合資料といえよう。２ｂはその中の利用可能なものにさらに手を加えたものと思われる。



第51図　個体2－3接合関係図



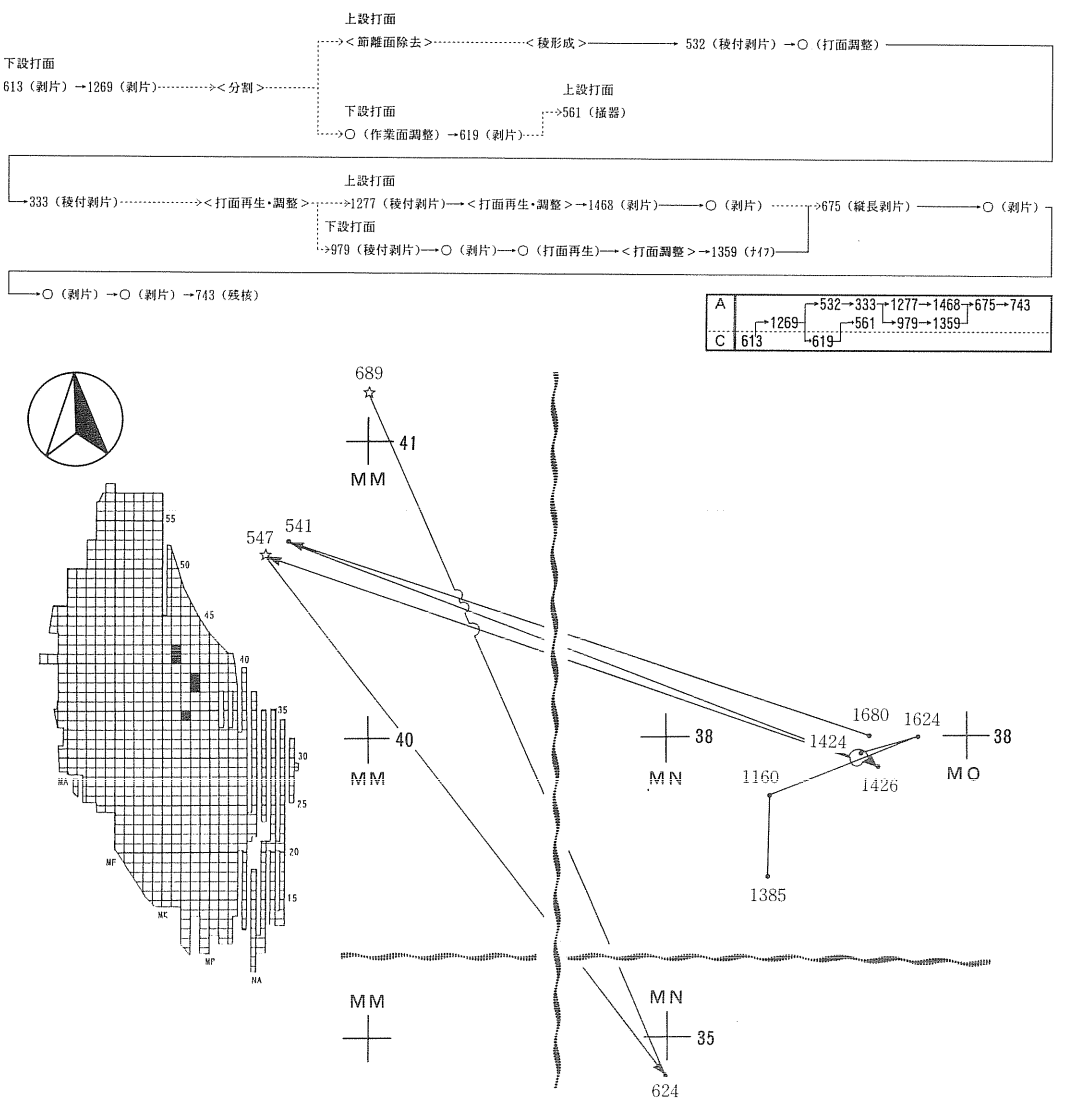
第52図　個体2ー3接合図



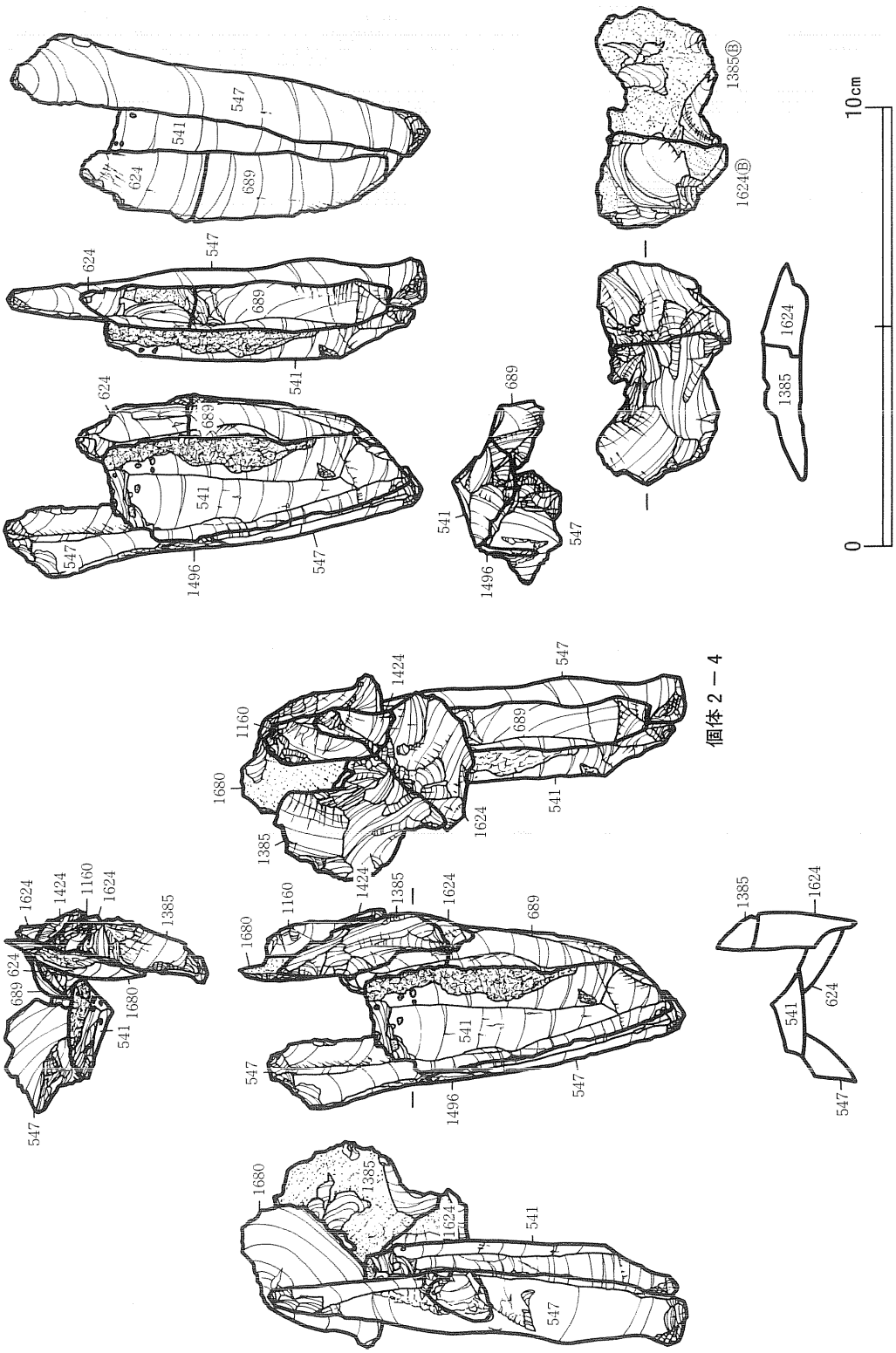
第53図　個体2－3石器

■個体２－３

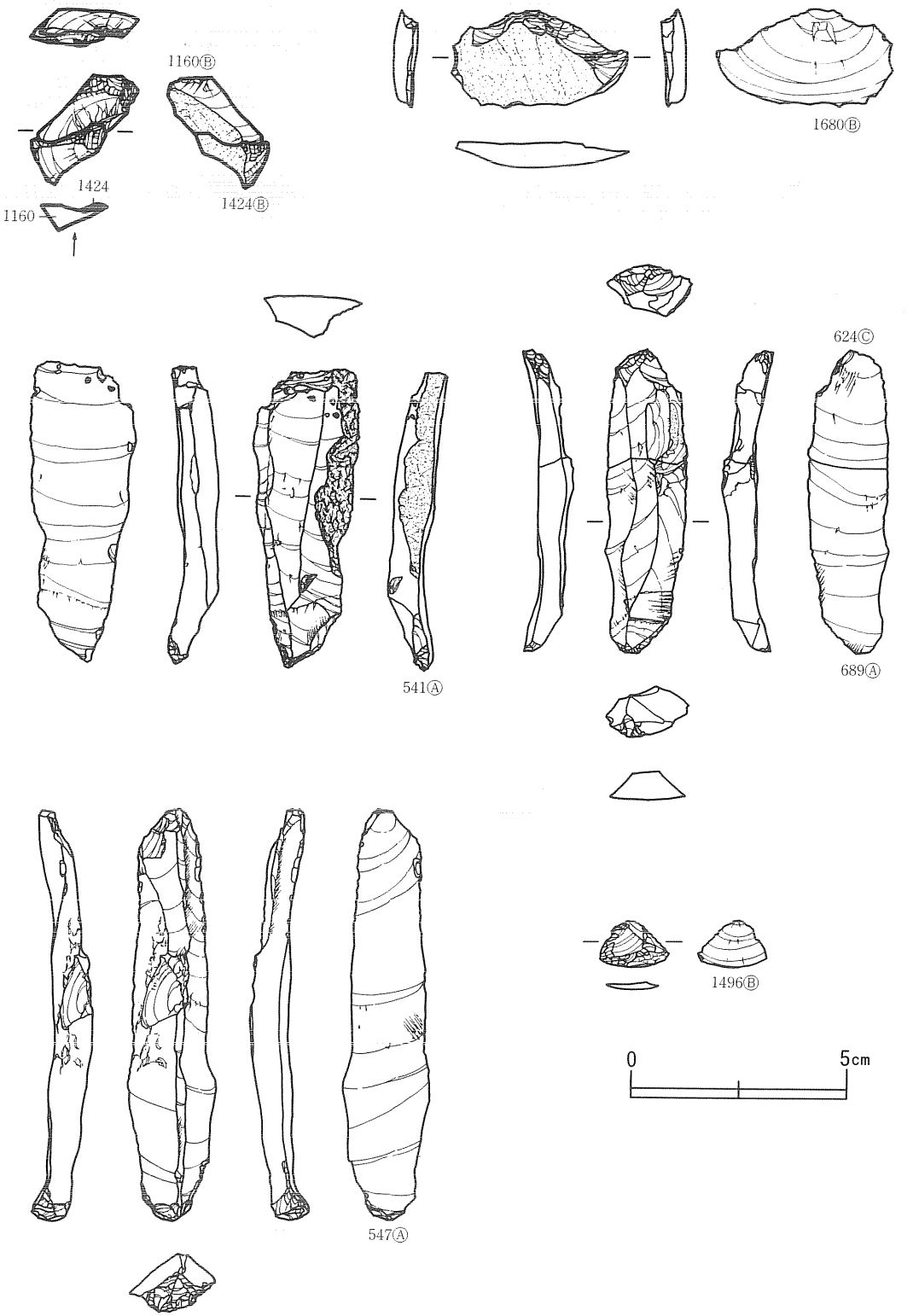
節離面を残す残核743とそれに接合する９点の剥片、およびナイフ形石器、掻器各１点からなる資料。残核の高さは低く縦長剥片を剥ぎ取った最終段階に近い石核である。節離面は613、1269の剥片を剥ぎ取った後、分割された際の面である。分割後残核743と対になる側の石核からは掻器561が得られているものの、石核それ自体は残されていない。縦長剥片は基本的には上設打面から剥ぎ取られている。石核の調整は打面再生、調整の作業のほか、横位の錯向剥離を作業面調整として行い、縦長剥片を剥ぎ取るための稜形成を行っている。石核下端部の調整も行われているが、979縦長剥片および1359ナイフ形石器はこの下端部調整面を打面（下設打面）として剥ぎ取られたものである。



第54図　個体2ー4接合関係図



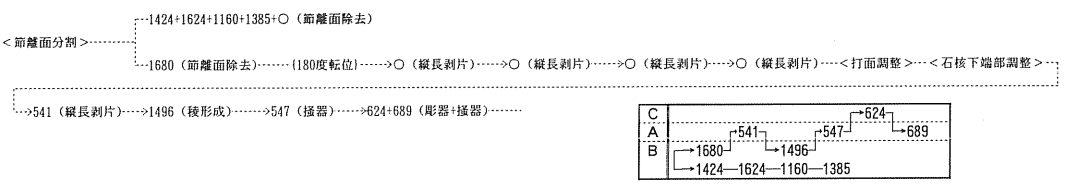
第55図　個体2－4接合図



第56図　個体2ー4石器

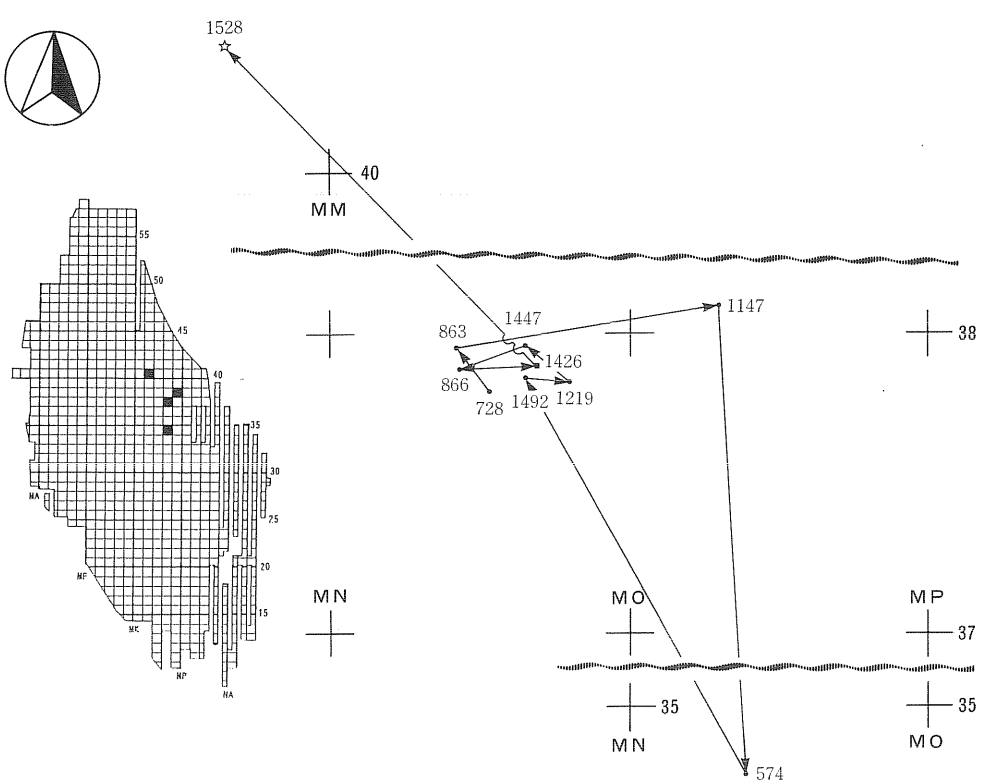
■個体２－４

掻器１点、彫器＋掻器１点および剥片７点からなる接合資料。彫器＋掻器（624＋689）は同一の縦長剥片の両端のそれぞれを彫刀面、刃部に加工した石器の折断資料である。節離面での石核分割後、彫器、掻器の接合する側は縦長剥片を目的として剥ぎ取っているが、他方は節離面除去の剥片しか残されていない。縦長剥片は基本的に上設打面からの剥離によって取られているが、掻器547および彫器＋掻器（624＋689）の背面側には側方からの広い剥離痕が残されている。下端部調整は背面稜上から、右方向に向かって行われており、掻器547および彫器＋掻器624＋689の刃部にその剥離痕が残されている。

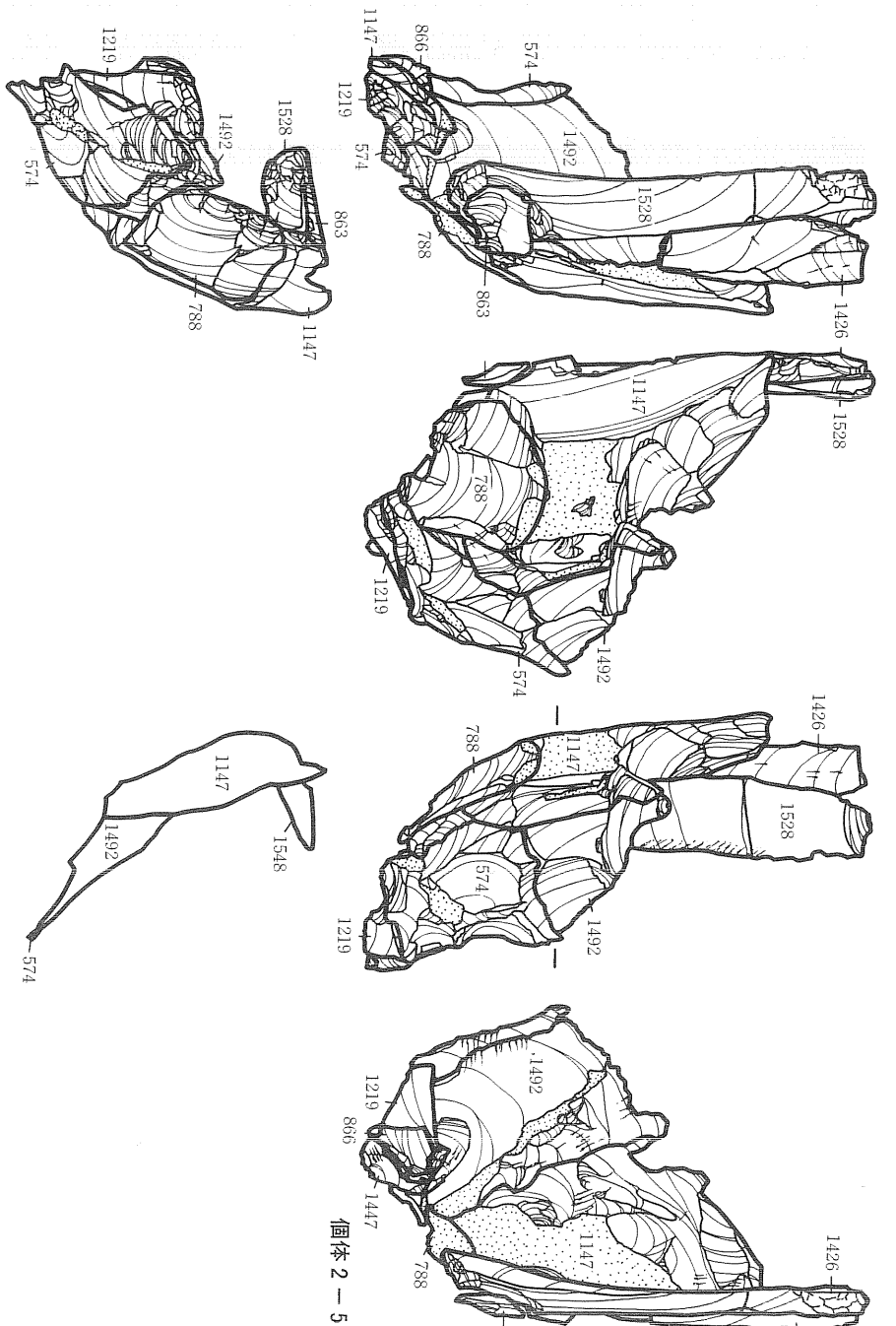


■個体２－５

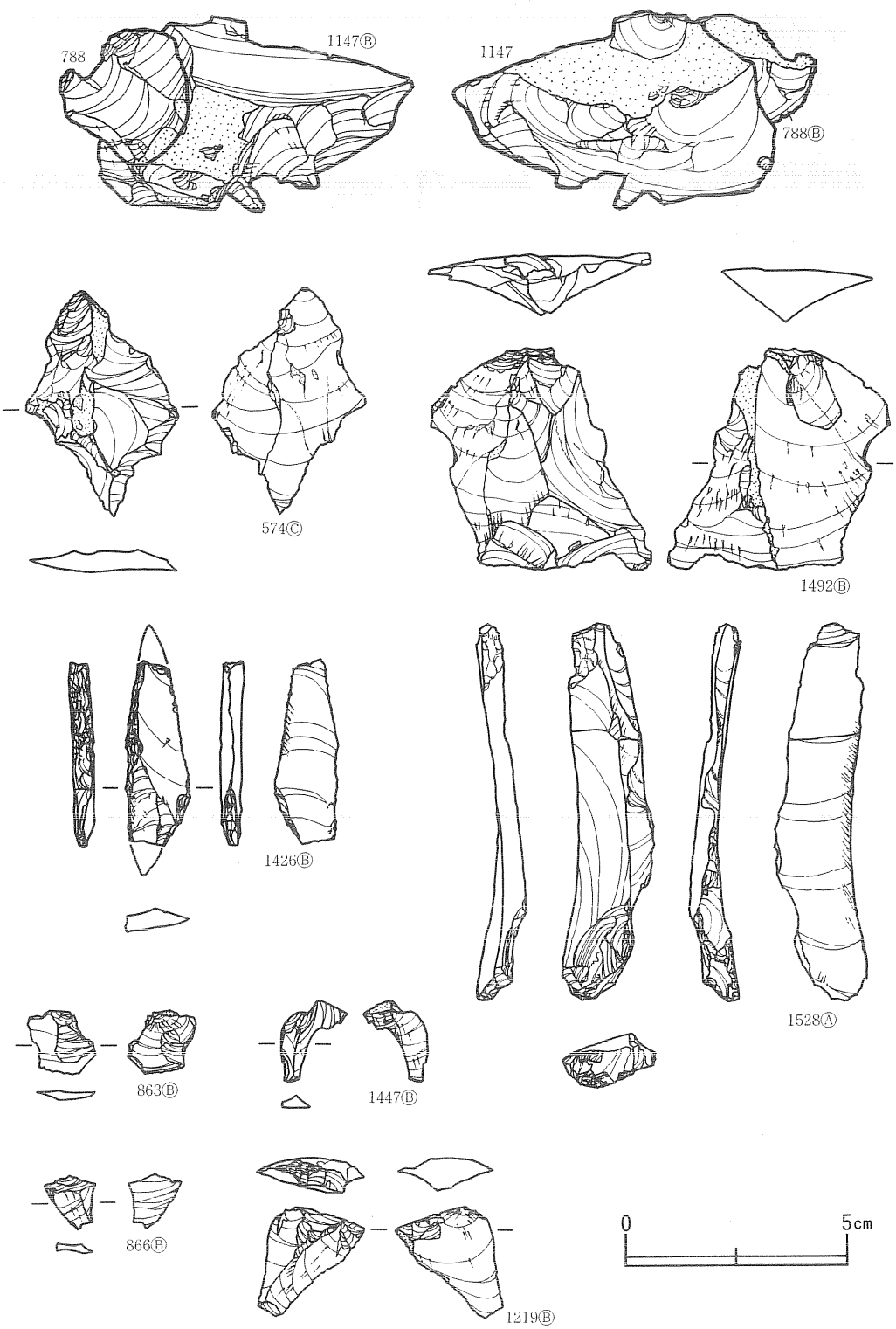
掻器１点、ナイフ形石器１点、および剥片８点からなる資料。石核下部にある節離除去のため、下端部を中心として石核調整剥離を繰り返した後、縦長剥片を剥ぎ取った資料である。接合す



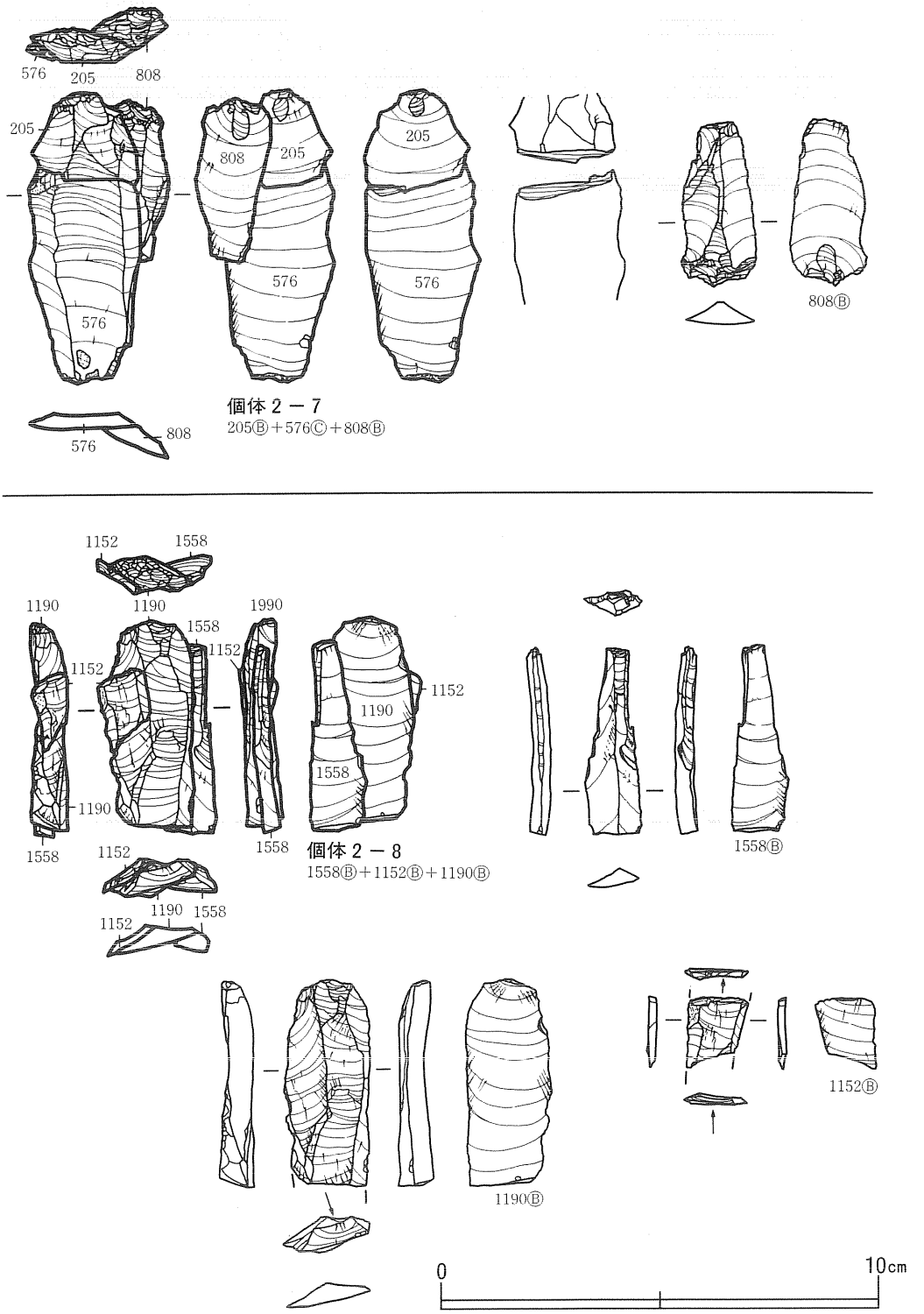
第57図　個体2－5接合関係図



第58図　個体2－5接合図



第59図　個体2ー5石器



第60図　個体2ー7・2ー8接合図・石器

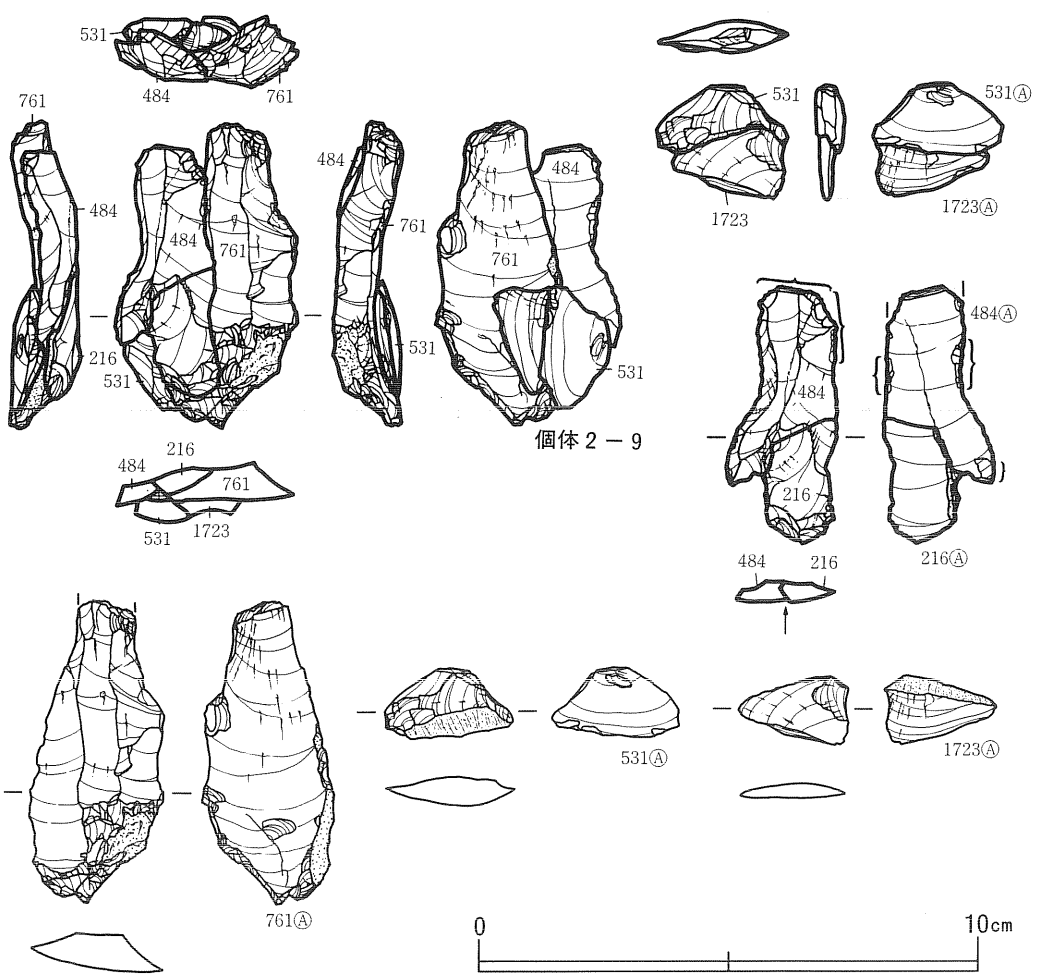
る縦長剥片は２点ともそれぞれ掻器、ナイフ形石器に加工されているが、これらを剥ぎ取った石核は遺跡には残されていない。

788（節離除去）→863（1147のための打面作出）→1147（節離除去）→○（節離除去）→574（節離除去）→1492（節離除去）→1219（下端部調整）→1447（下端部調整）→866（下端部調整）→{90度転位}→<稜形成節離面除去>→{90度転位}→1426（ナイフ形石器）→○（剥片）→1528（掻器）

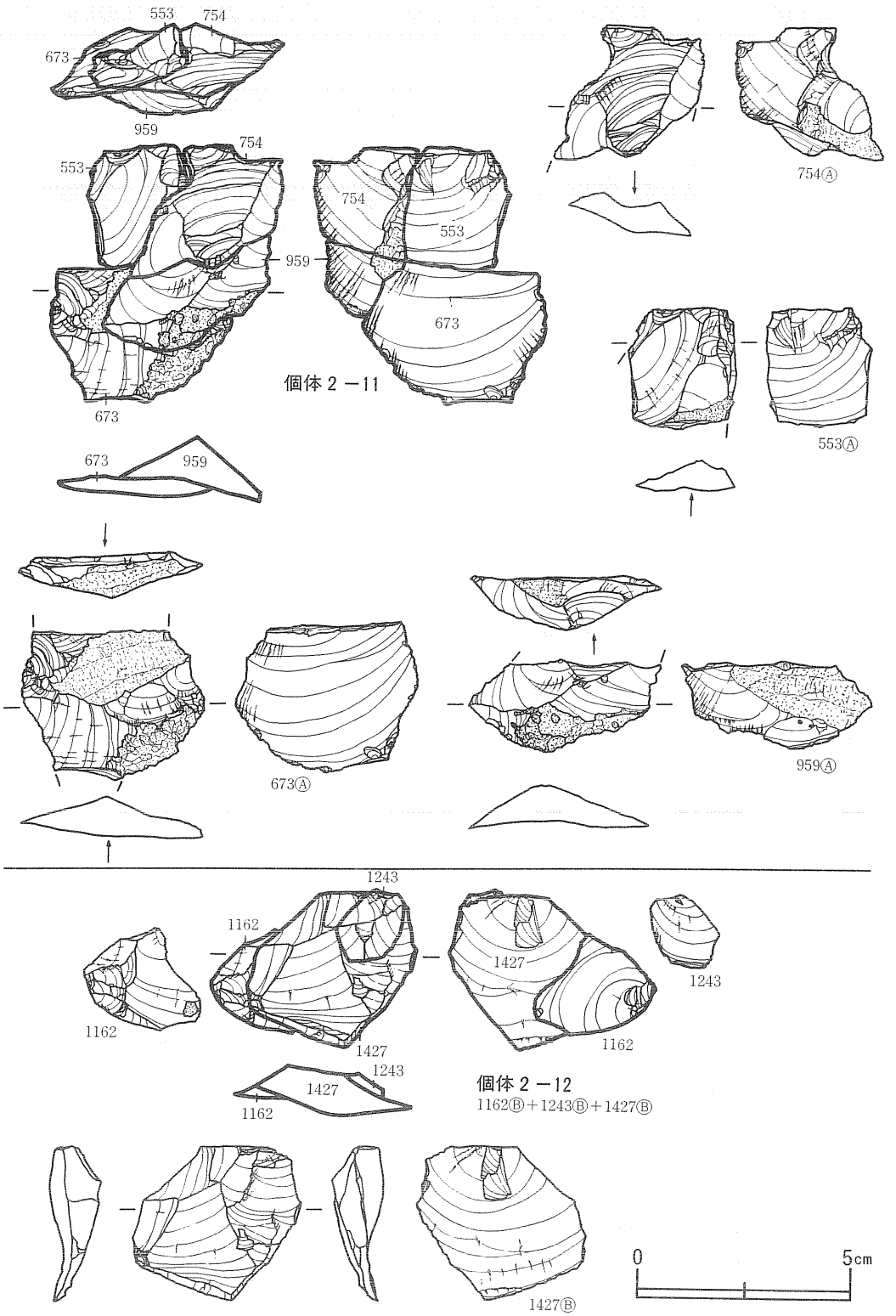
A	→1528
B	788→863→1147→1492→1219→1447→866→1426
C	→574

■個体２－６

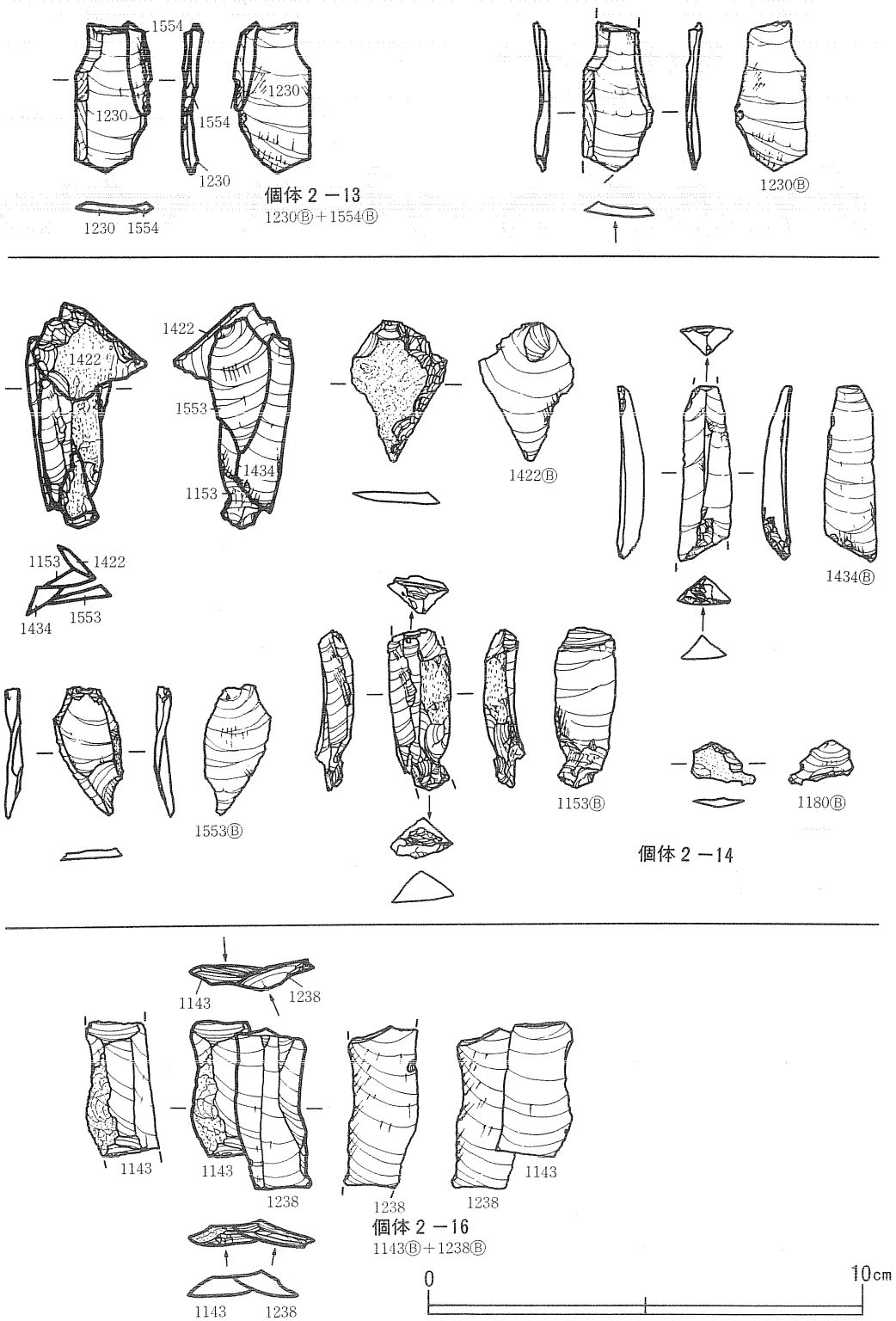
剥片３点の接合資料。加撃によって剥離されたものではなく、被熱により焼け弾けたものである。



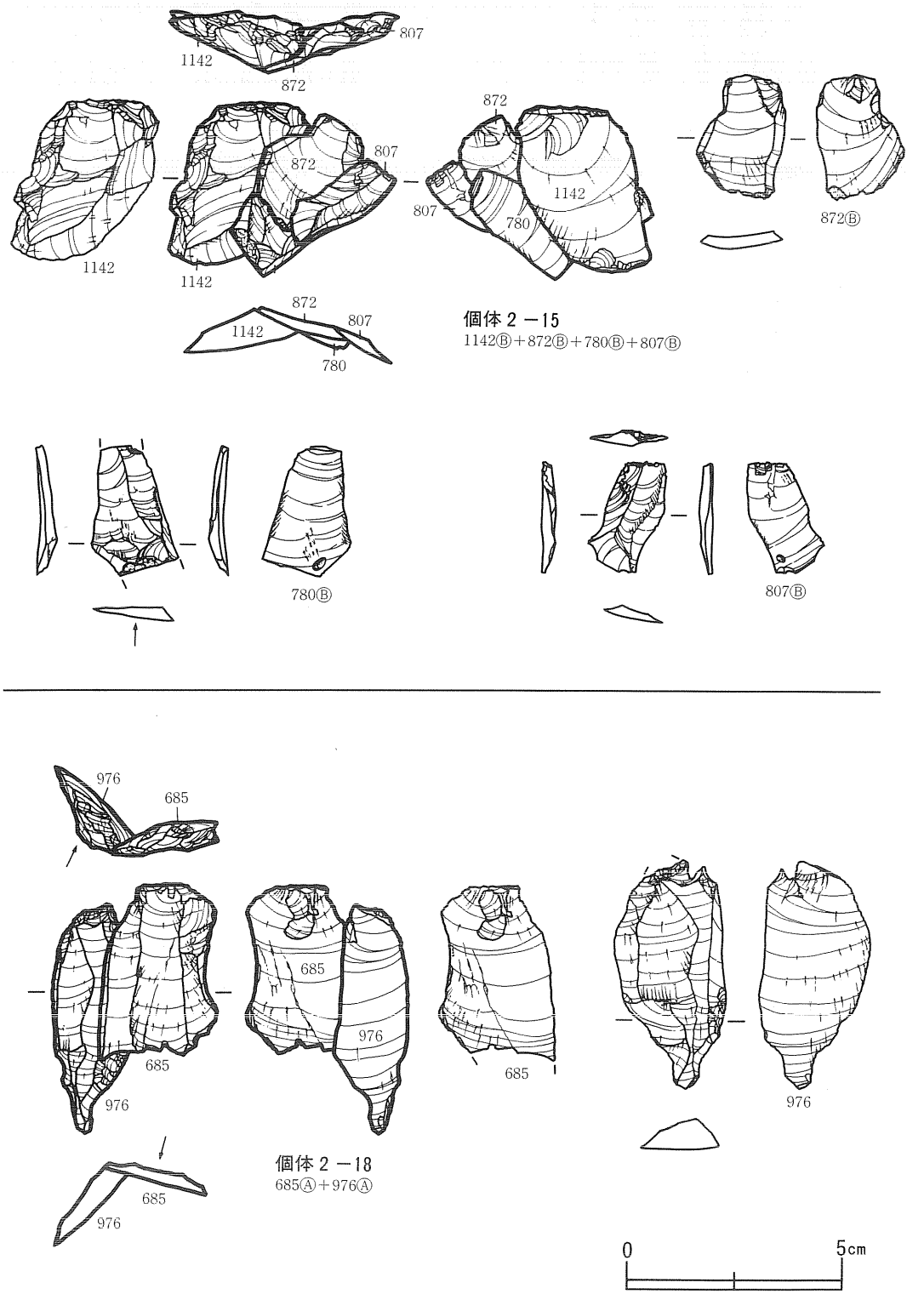
第61図　個体2－9接合図・石器



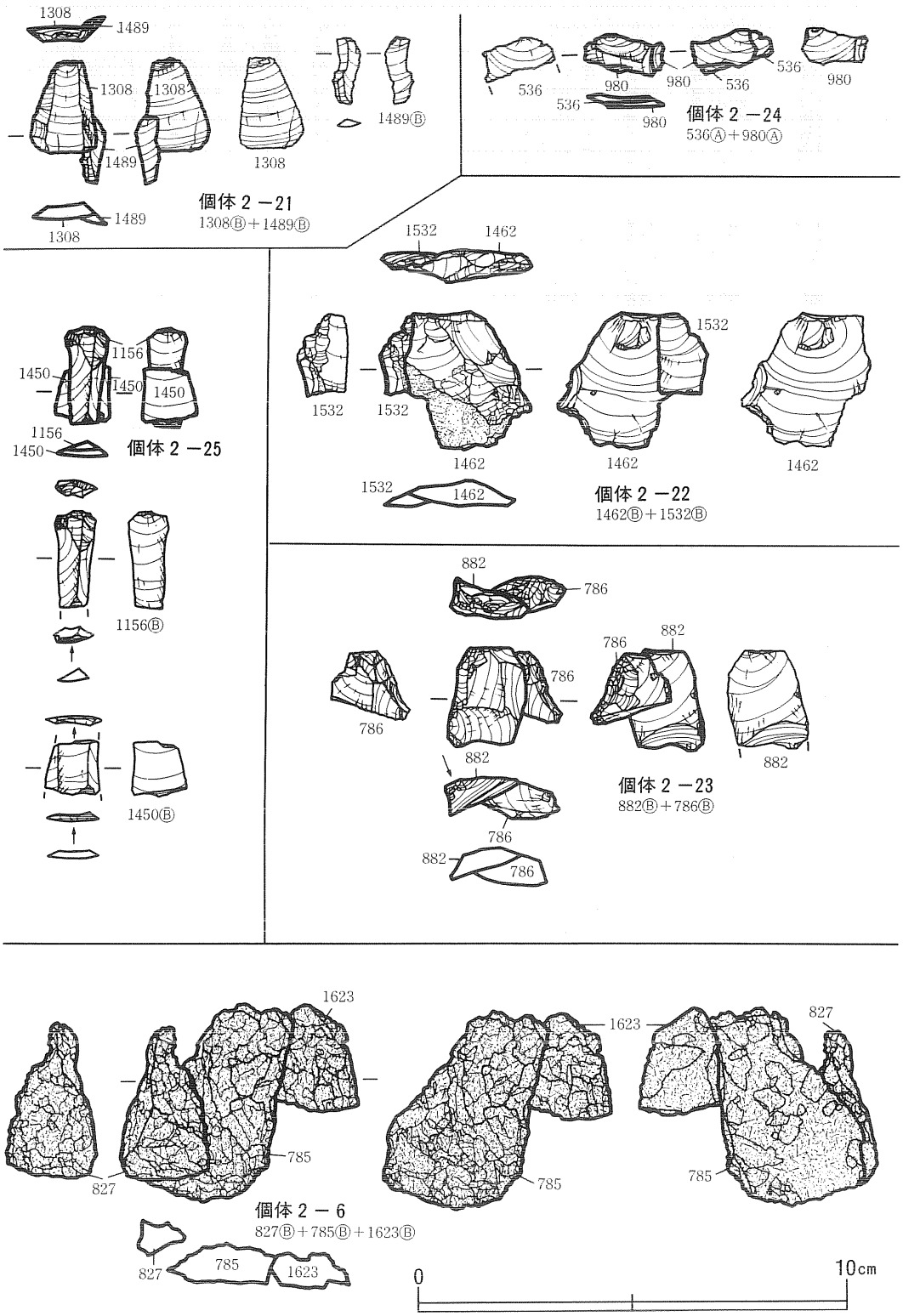
第62図　個体2－11・2－12接合図・石器



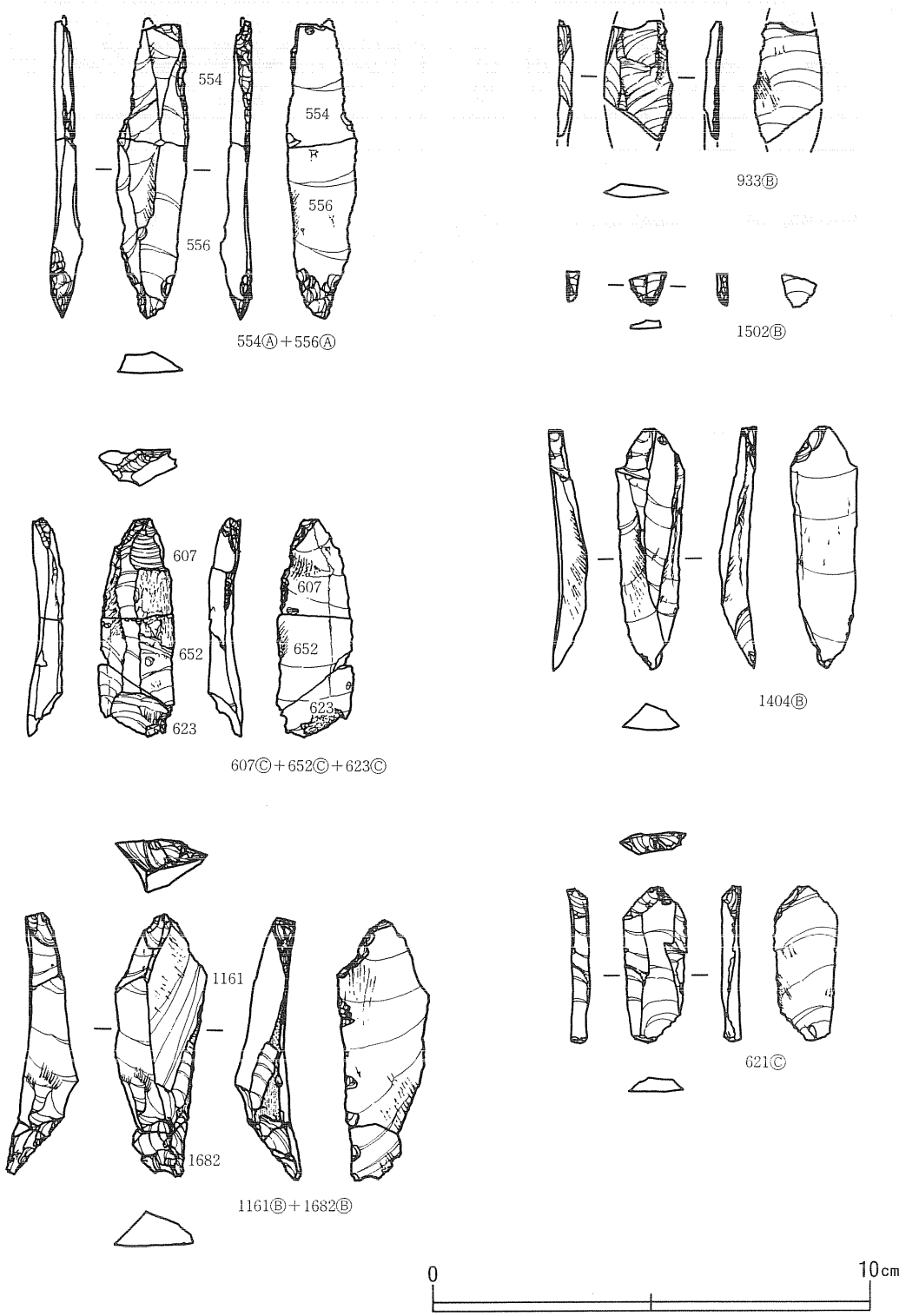
第63図　個体2－13・2－14・2－16接合図・石器



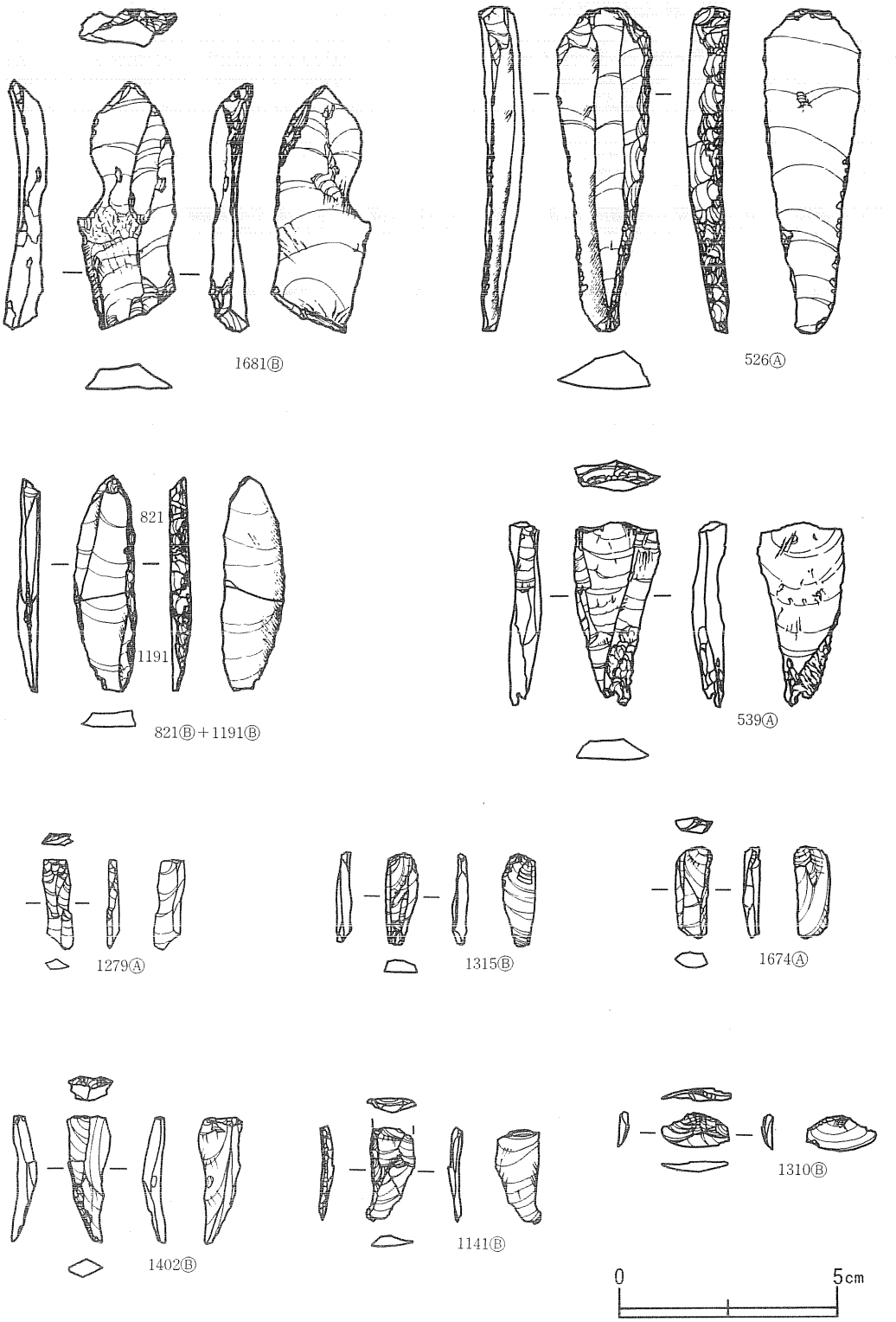
第64図　個体2－15・2－18接合図・石器



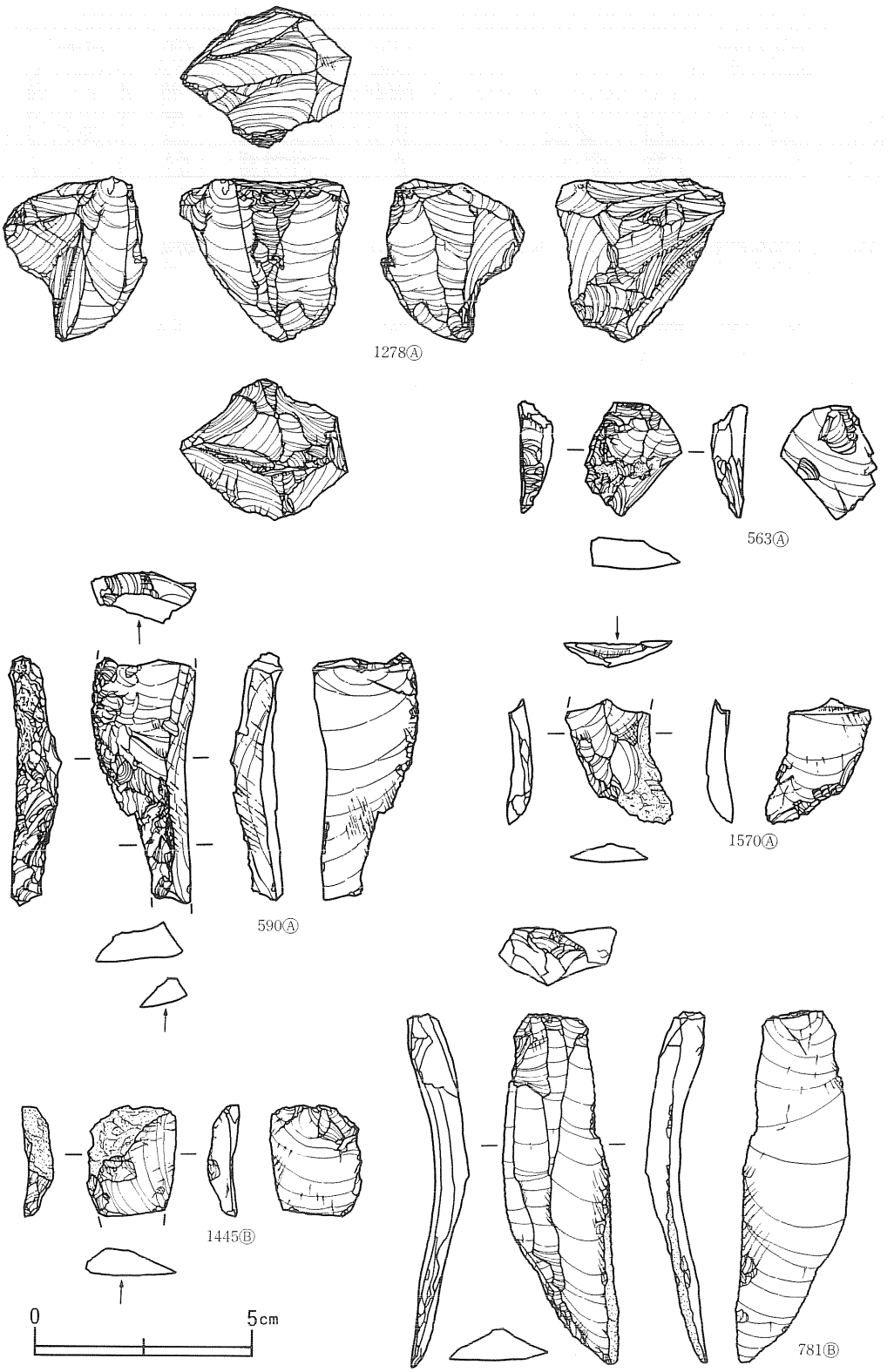
第65図　個体2－21～2－25・2－6接合図・石器



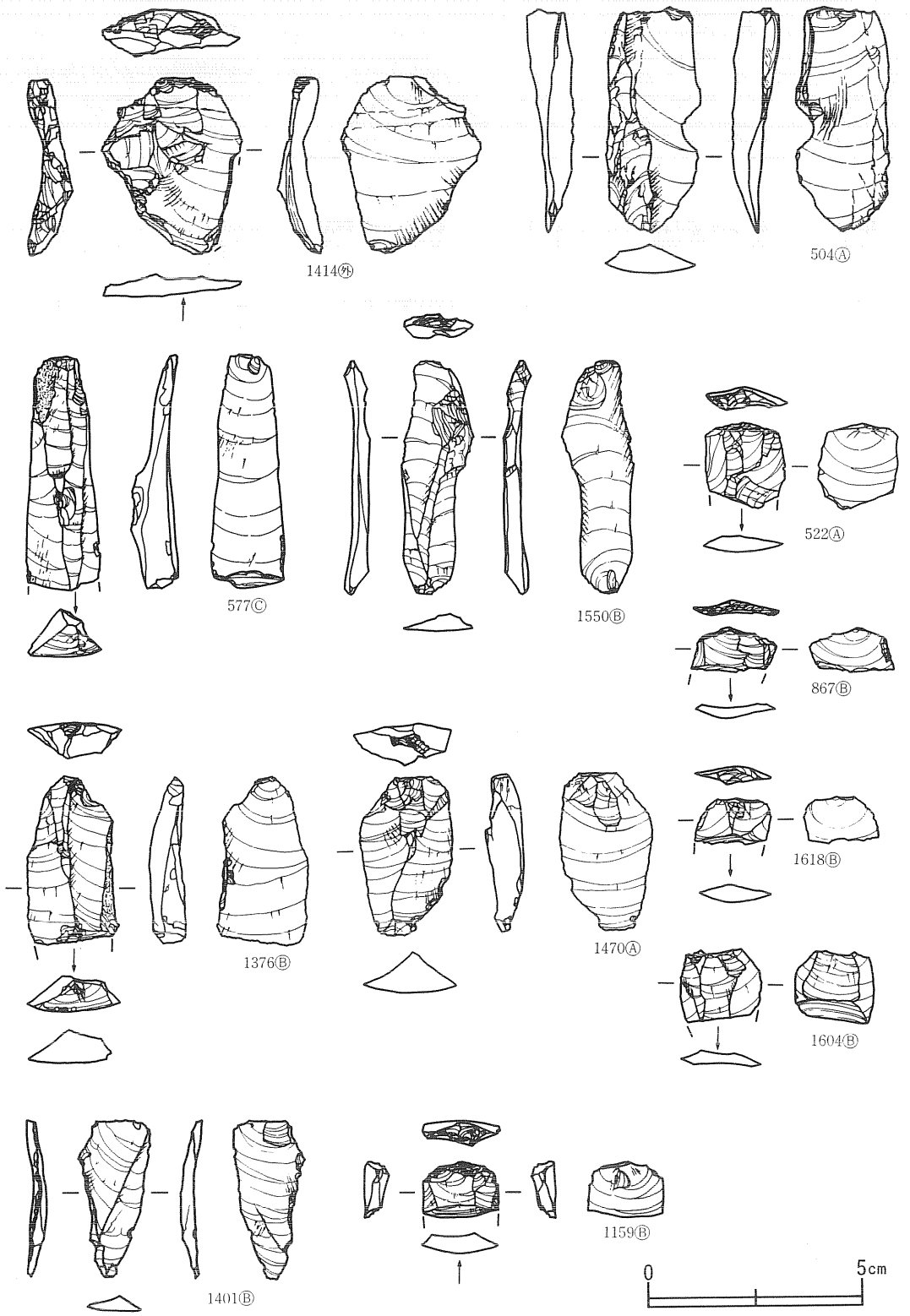
第66図　個体2単独資料（1）ナイフ形石器・彫器



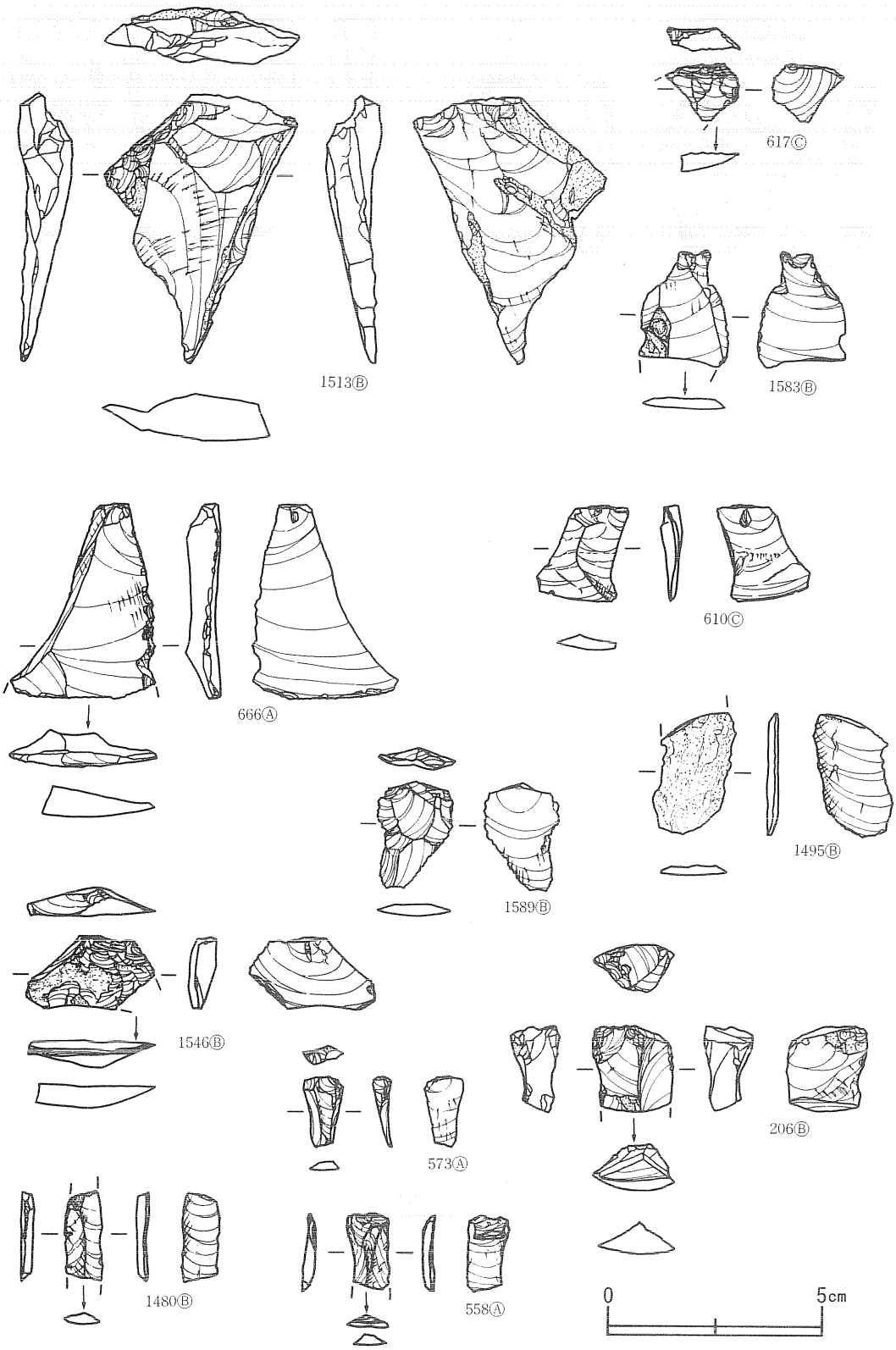
第67図　個体2単独資料（2）彫器・削片



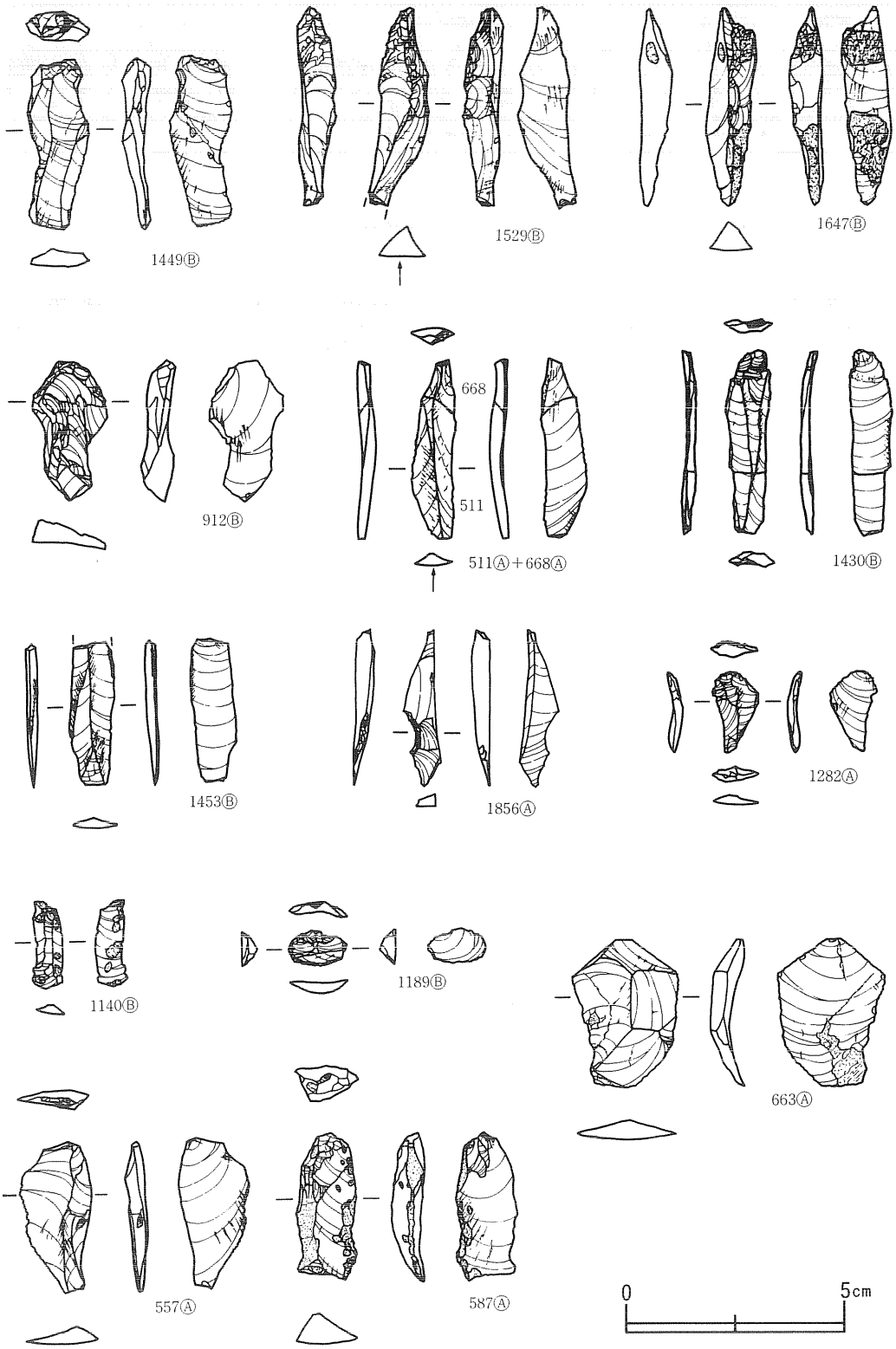
第68図　個体2単独資料（3）



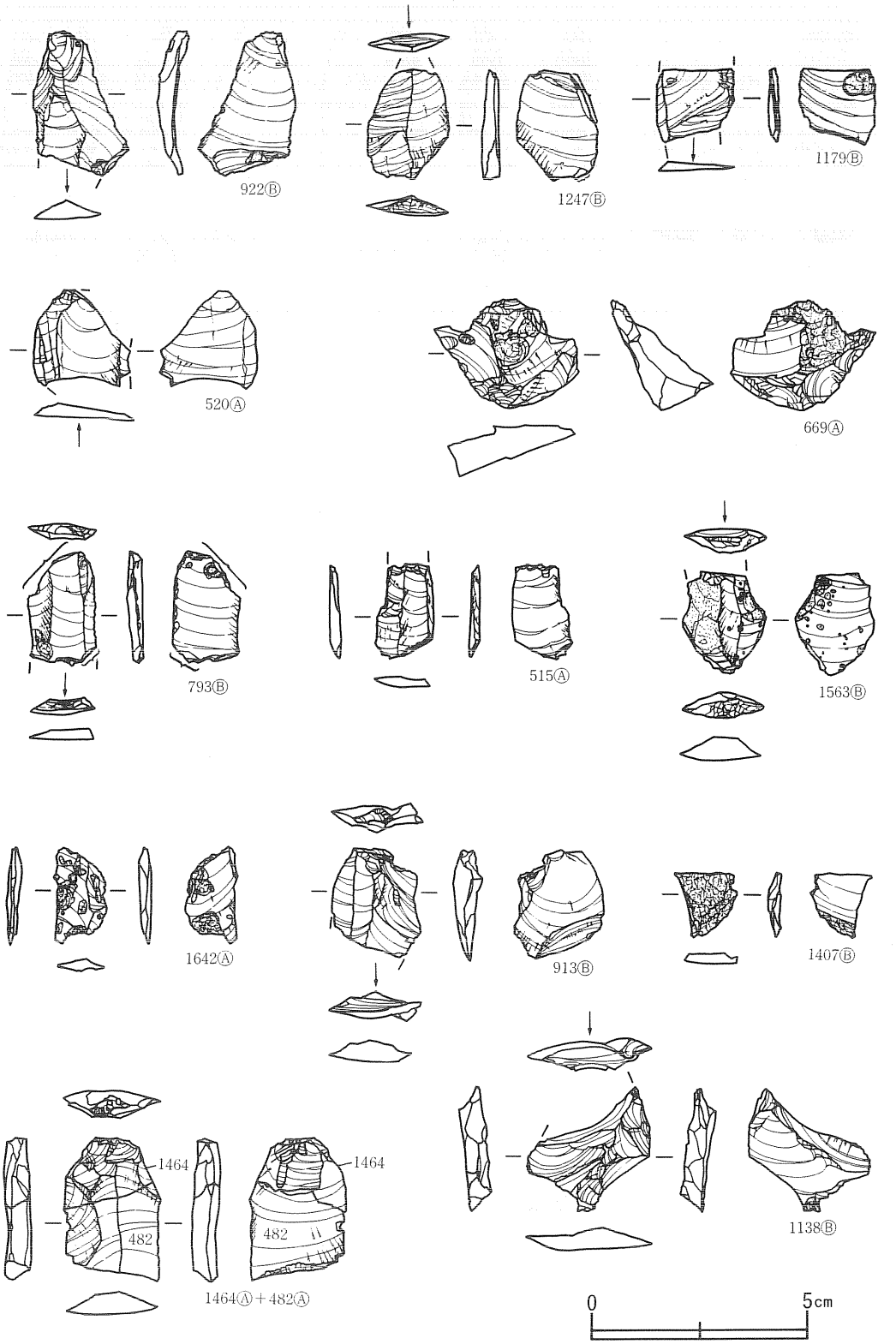
第69図　個体2単独資料（4）



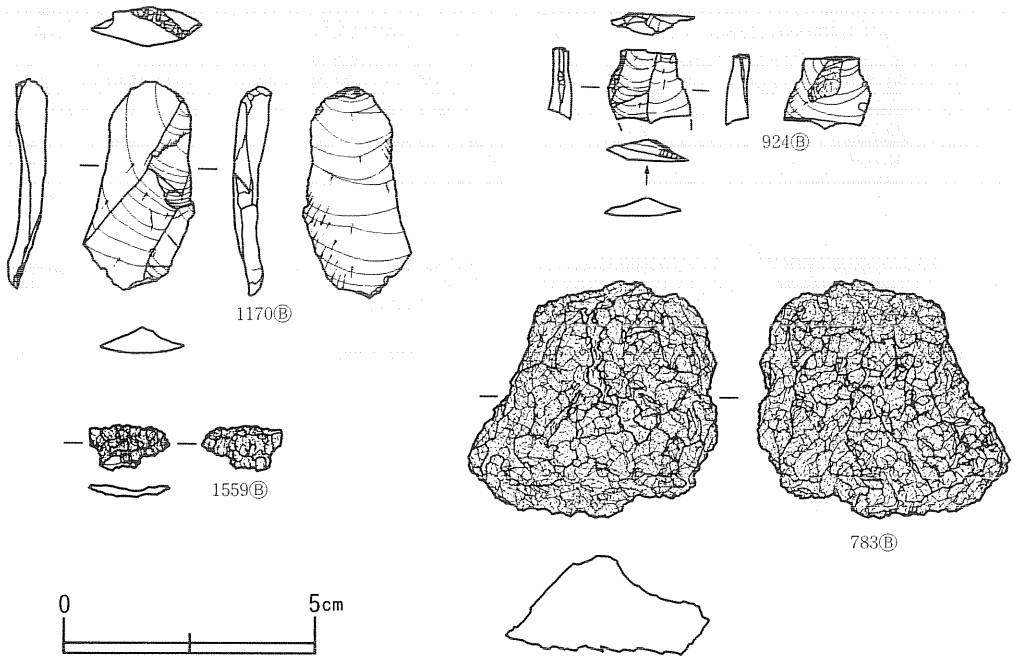
第70図　個体2単独資料（5）



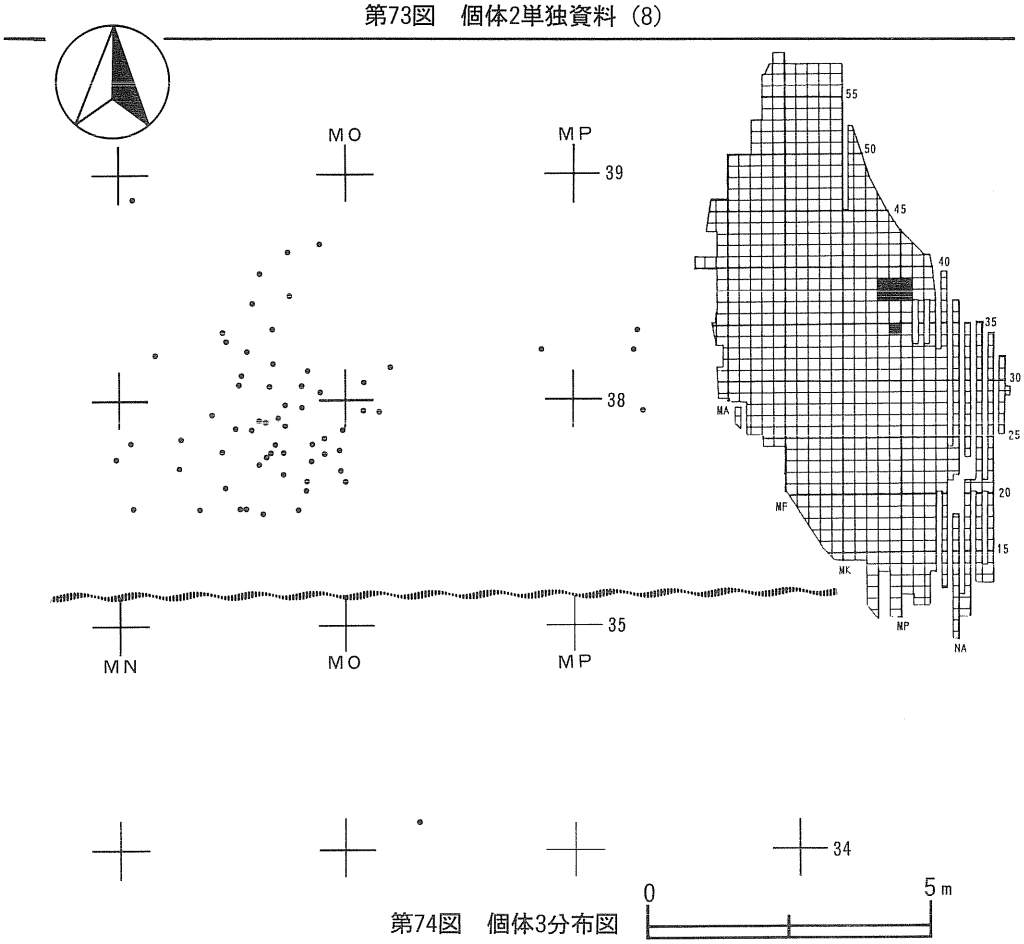
第71図　個体2単独資料（6）



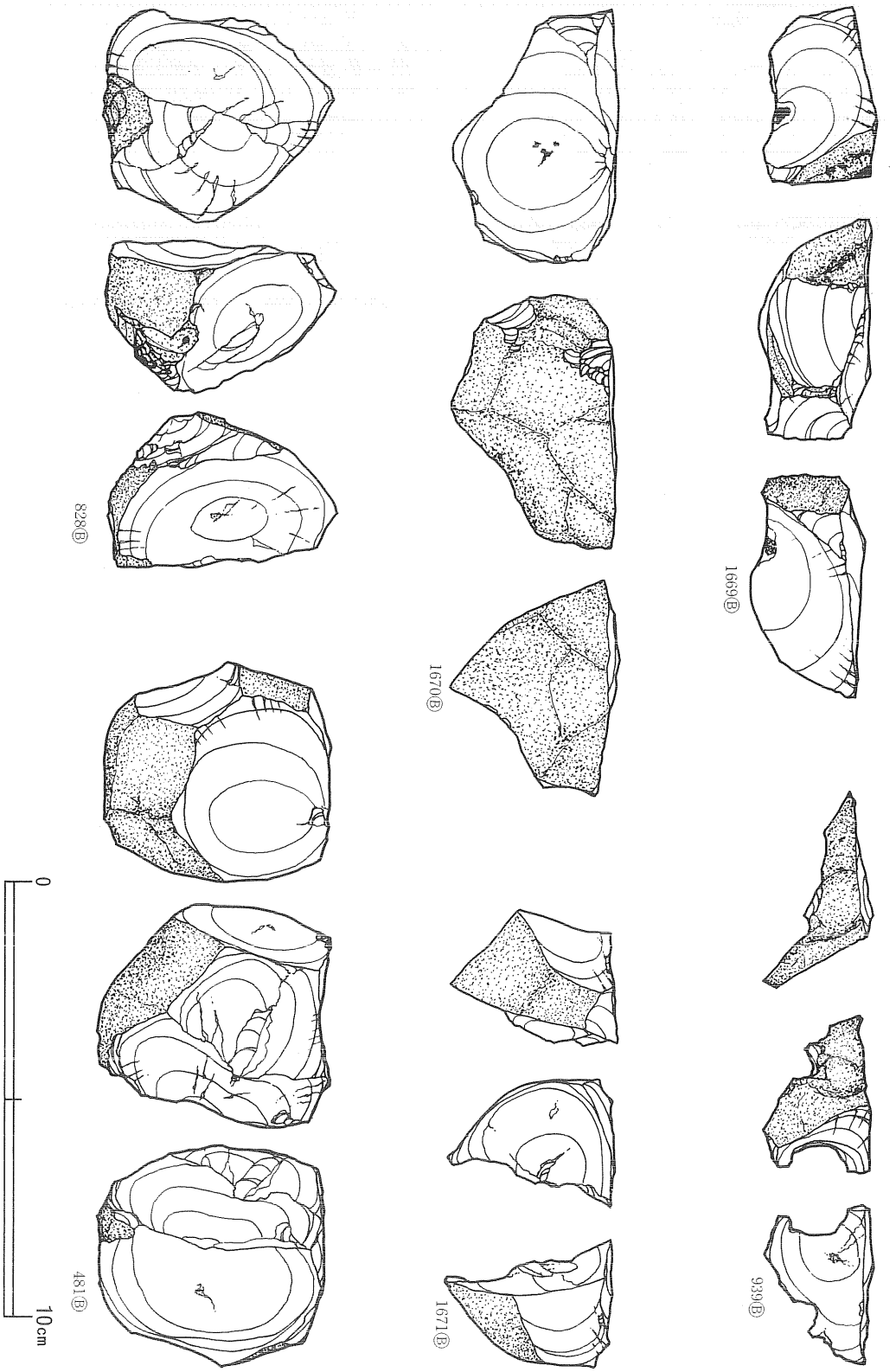
第72図　個体2単独資料（7）



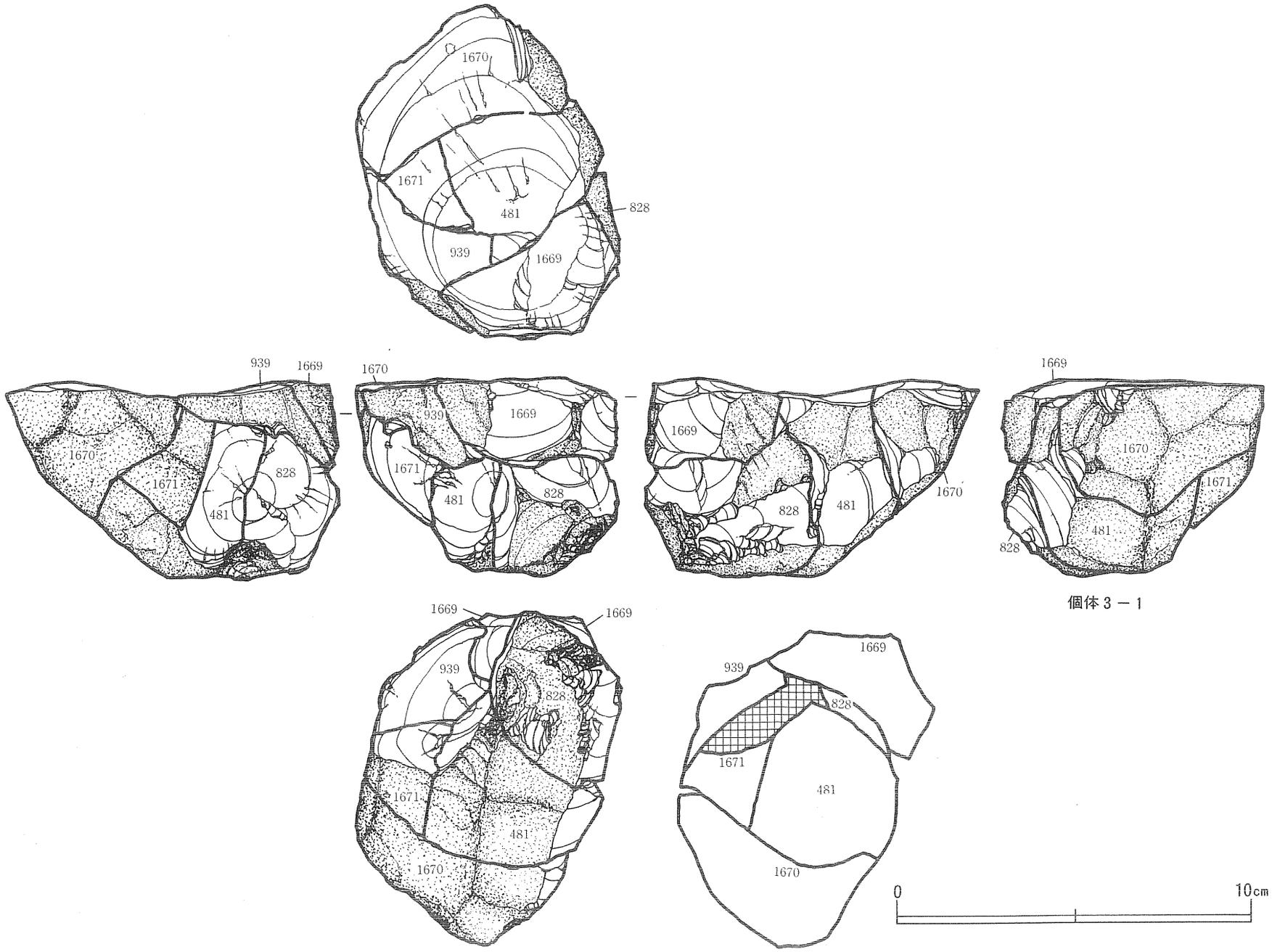
第73図　個体2単独資料（8）



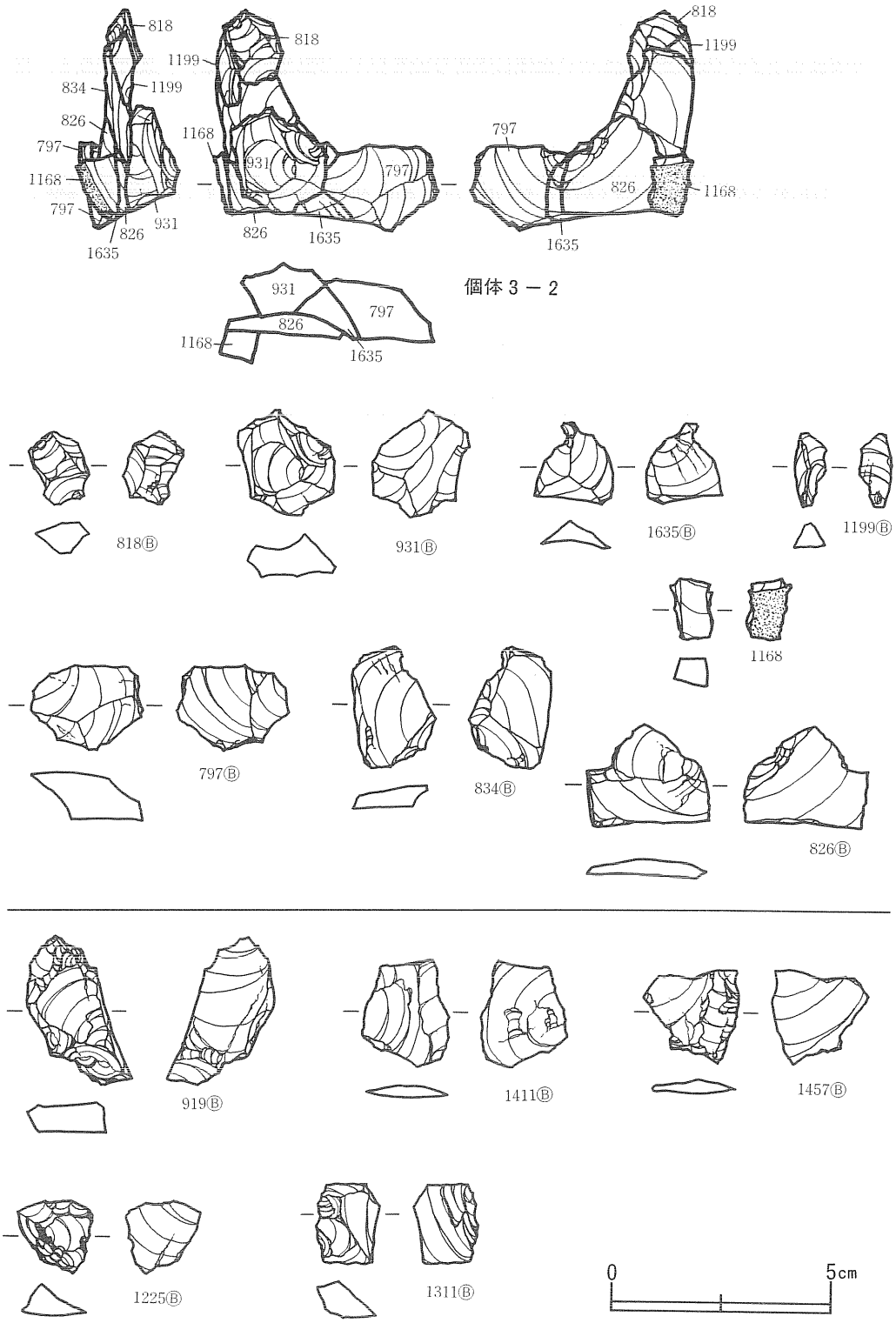
第74図　個体3分布図



第75図　個体3－1石器



第76図　個体3－1接合図



第77図　個体3－2接合図・石器、個体3単独資料

③　個体別資料３（第74図～第77図）

礫皮面は多少の凹凸があるものの全体に平滑な面を呈し、鈍い黄色を呈する頁岩である。総数70点の資料がある。細かな黒色粒子が含まれ、またきわめて微細な孔が剥離面上に確認される。全体にキメが粗く、均質さを欠く。遺跡内には原礫のままで持ち込まれ、半割された後、個体３－１とそれ以外の剥片が生成されている。石器に加工されたものはない。個体３－１と対になる側の石核は、被熱によって破砕され、個体３－２および単独資料のような剥片に分かれている。

個体３の資料は剥片１点がＣブロックから出土しているほかは、全てＢブロックに存在する。

■個体３－１

残核１点と剥片５点からなる接合資料。原礫を水平に断ち割りその分割面を打面として剥片を剥離している。原礫が不均質であり、不純物も多く混じるため、その剥離面も歪が大きい。828を除いては、火熱を受けて赤化している。

■個体３－２

剥片８点からなる接合資料。加撃による剥片ではなく、被熱により弾けたもので赤化している。

④　個体別資料４（第78図～第88図）

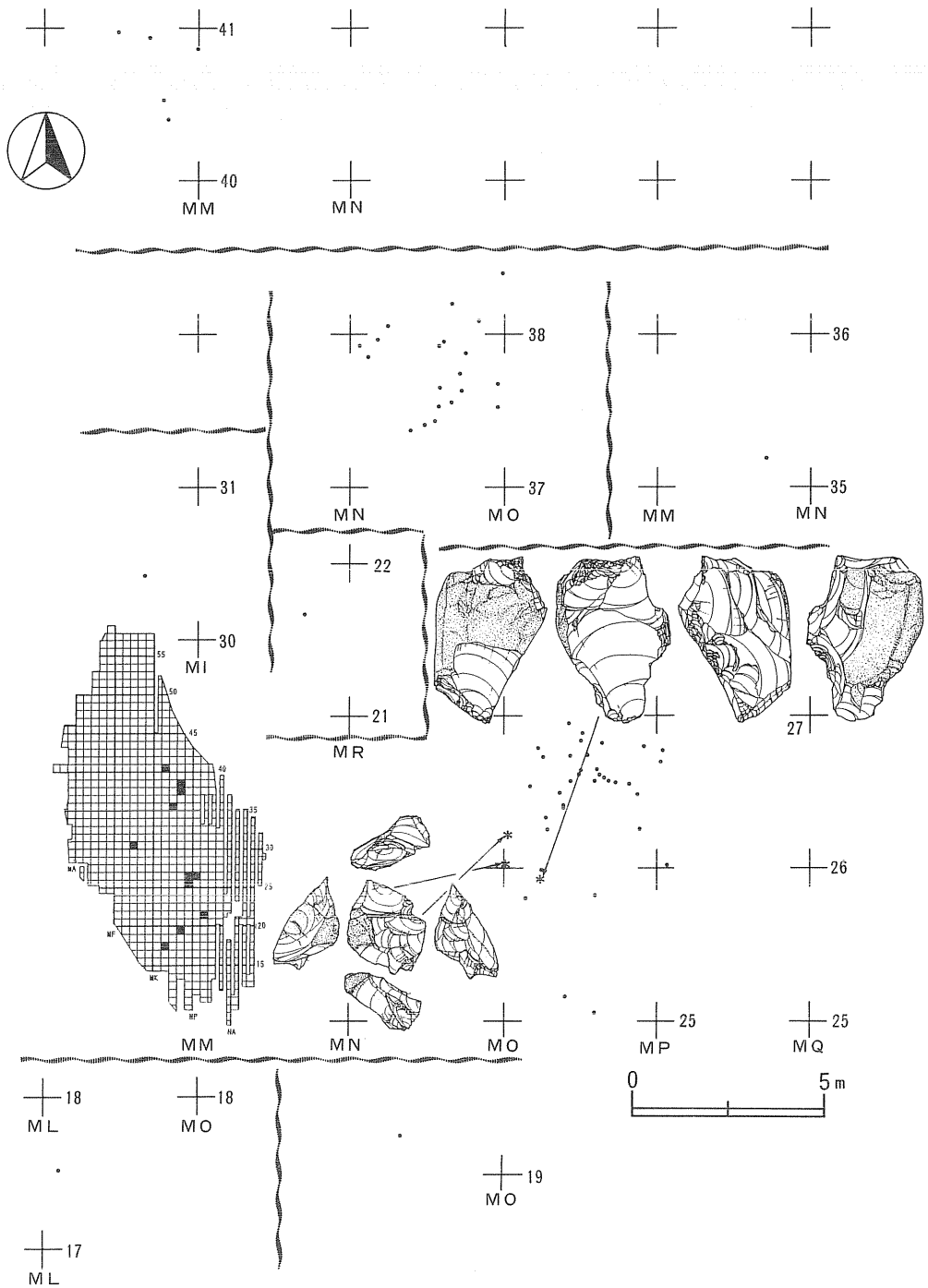
礫皮面は細かな凹凸があり褐色を呈し、芯に近くはにぶい褐色～黄褐色を呈する珪質頁岩である。総数68点の資料がある。僅かに筋状の褐灰色斑文が認められ、また微細な白色粒子を含むが全体に均質で滑沢な剥離面を呈する。個体４－１、４－２から推定される原礫の形状は、およそ12㎝×12㎝×７㎝の板状の亜角礫で、遺跡内には原礫のままで持ち込まれ、石核整形をすることなく礫皮面を大きく残した石核から幅広の剥片を得ている。石器に加工された剥片はない。剥片剥離作業の早い段階、おそらく原礫状態で石核の分割が行われ個体４－１、４－２に分かれている。しかし、それらからおよその原礫形状を復元できることから、分割された石核はほぼ遺跡内で消費されたものと推定される。

個体４の資料は、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄの各ブロックおよびブロック外の４箇所の地点（ＭＭ17、ＭＯ19、ＭＲ21、ＭＩ30）に分布する。４ブロックのうちでは、Ｂブロック、Ｄブロックでの出土数が比較的多く、Ａブロックでは５点、Ｃブロックでは１点と少ない。

ブロック間あるいはブロック内資料とブロック外資料の接合関係は、個体４－１、４－２に共に認められる。４－１、４－２とも剥片剥離作業の中心はＤブロックにあるが、４－１では1419、95の２点が、また４－２では196、1821がＣブロックあるいはブロック外の地点に搬出されている。また、接合しない資料ではあるが、おそらくは４－２から剥ぎ取られた思われる礫皮面を残さない剥片はＢブロックやＡブロックへも搬出されている。

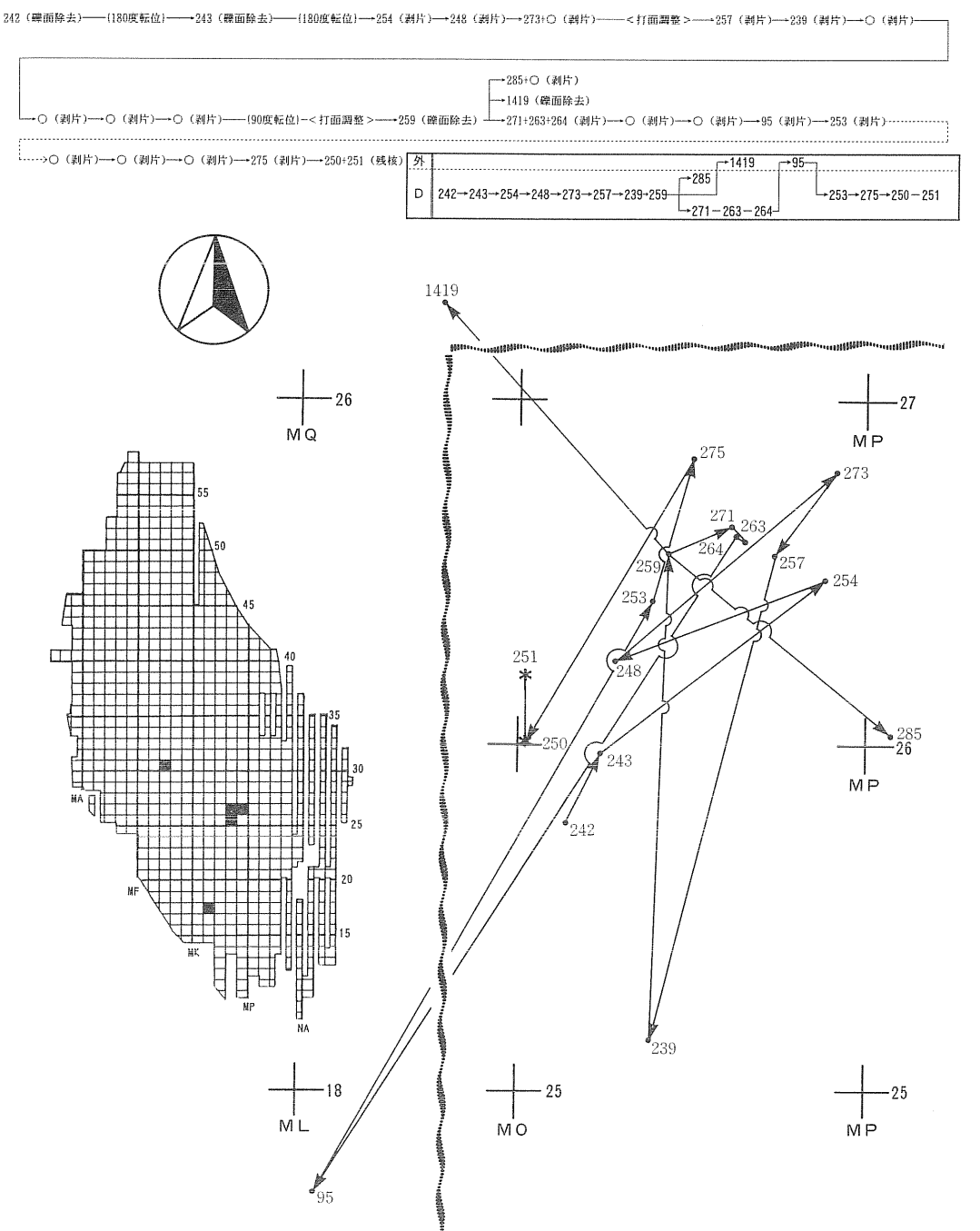
■個体４－１

剥片16点と節離面で接合する残核１点からなる資料。板状礫の下端隅を除去した後、原礫の分

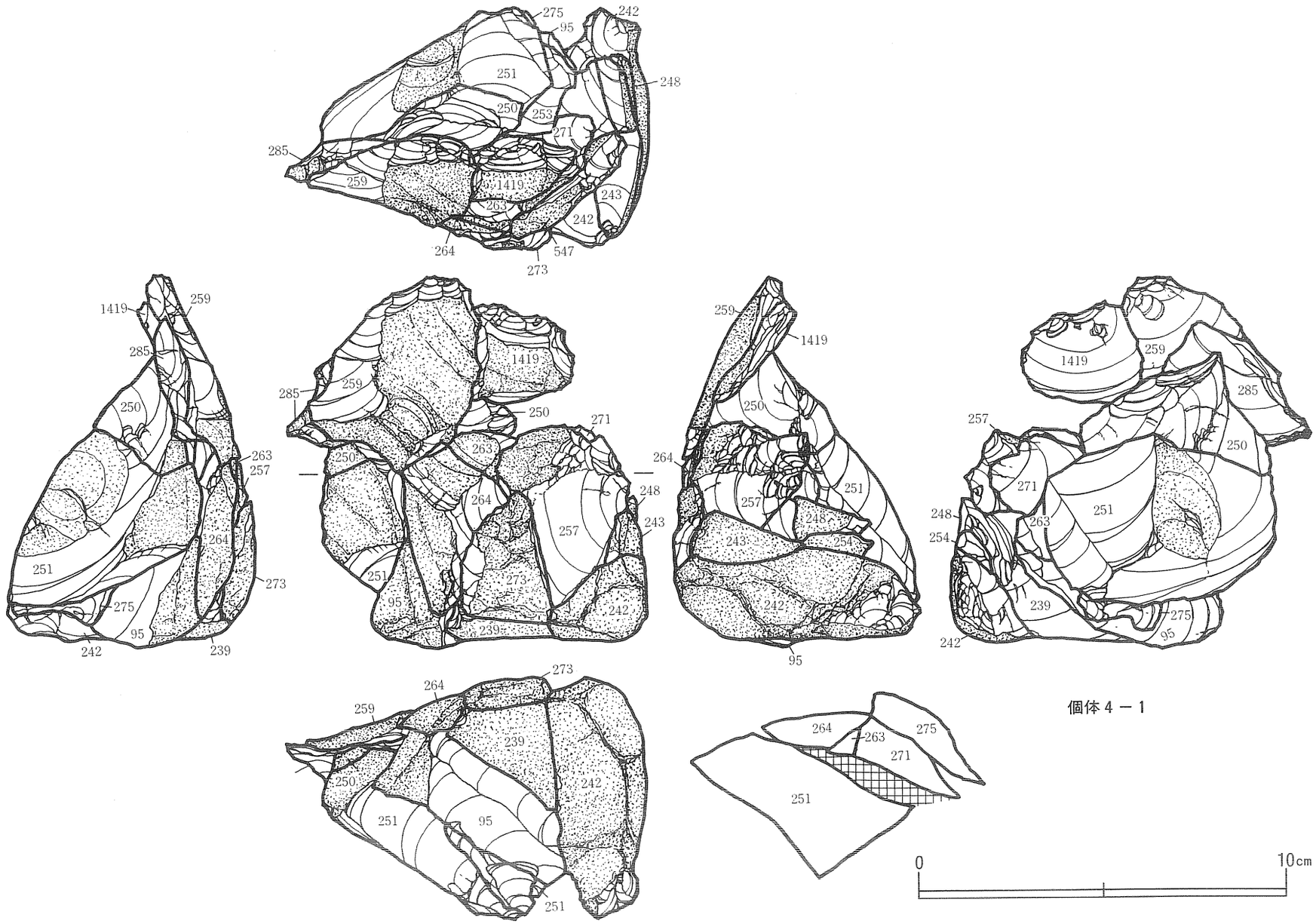


第78図　個体4分布図

割面を打面として幅広・肉厚の剥片を剥ぎ取っている。分割面には随時打面調整が加えられており、257、259、1419の剥片には調整打面が残され、また、残核250の打面にも4枚の小剥離面が残されている。

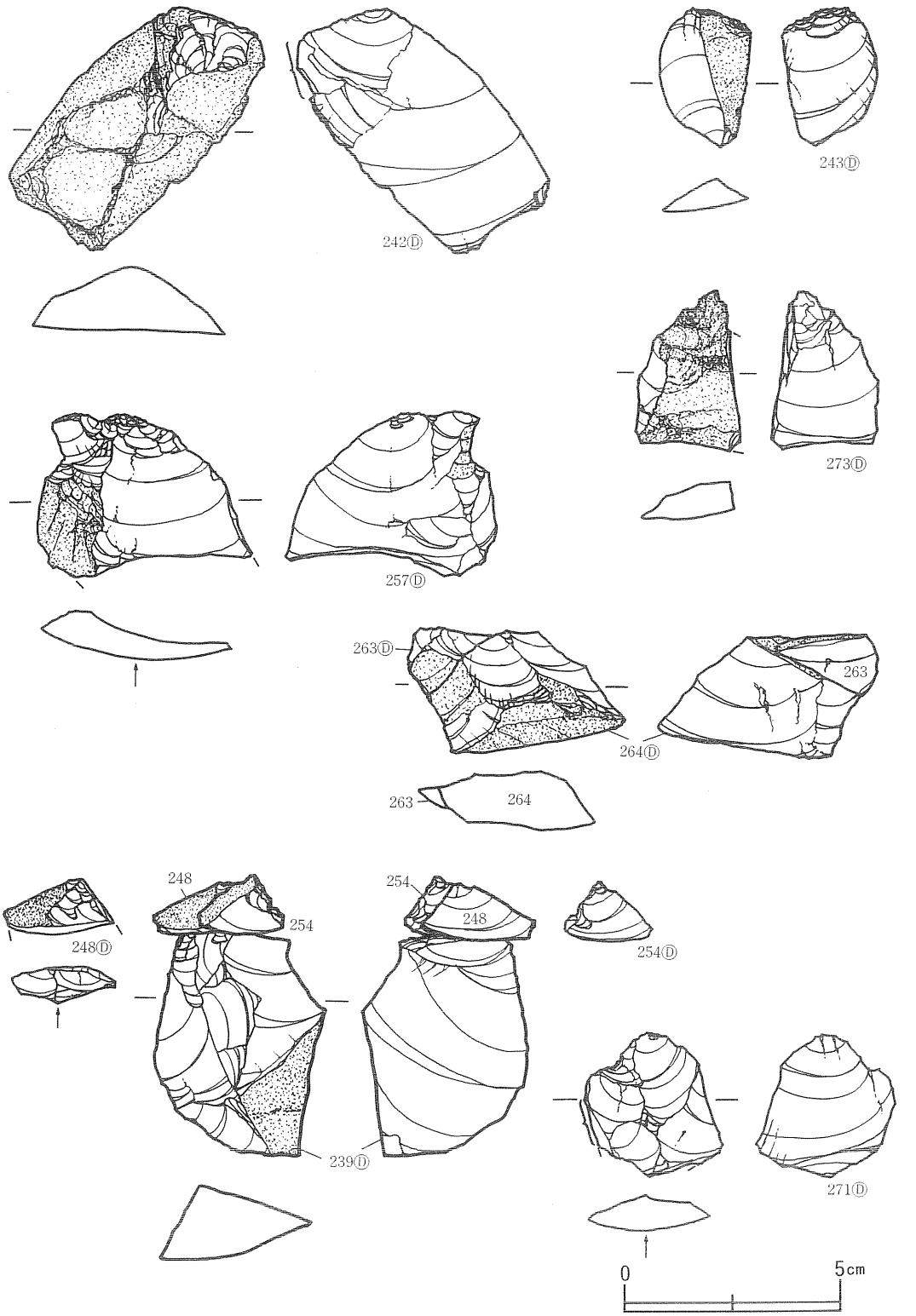


第79図　個体4－1接合関係図

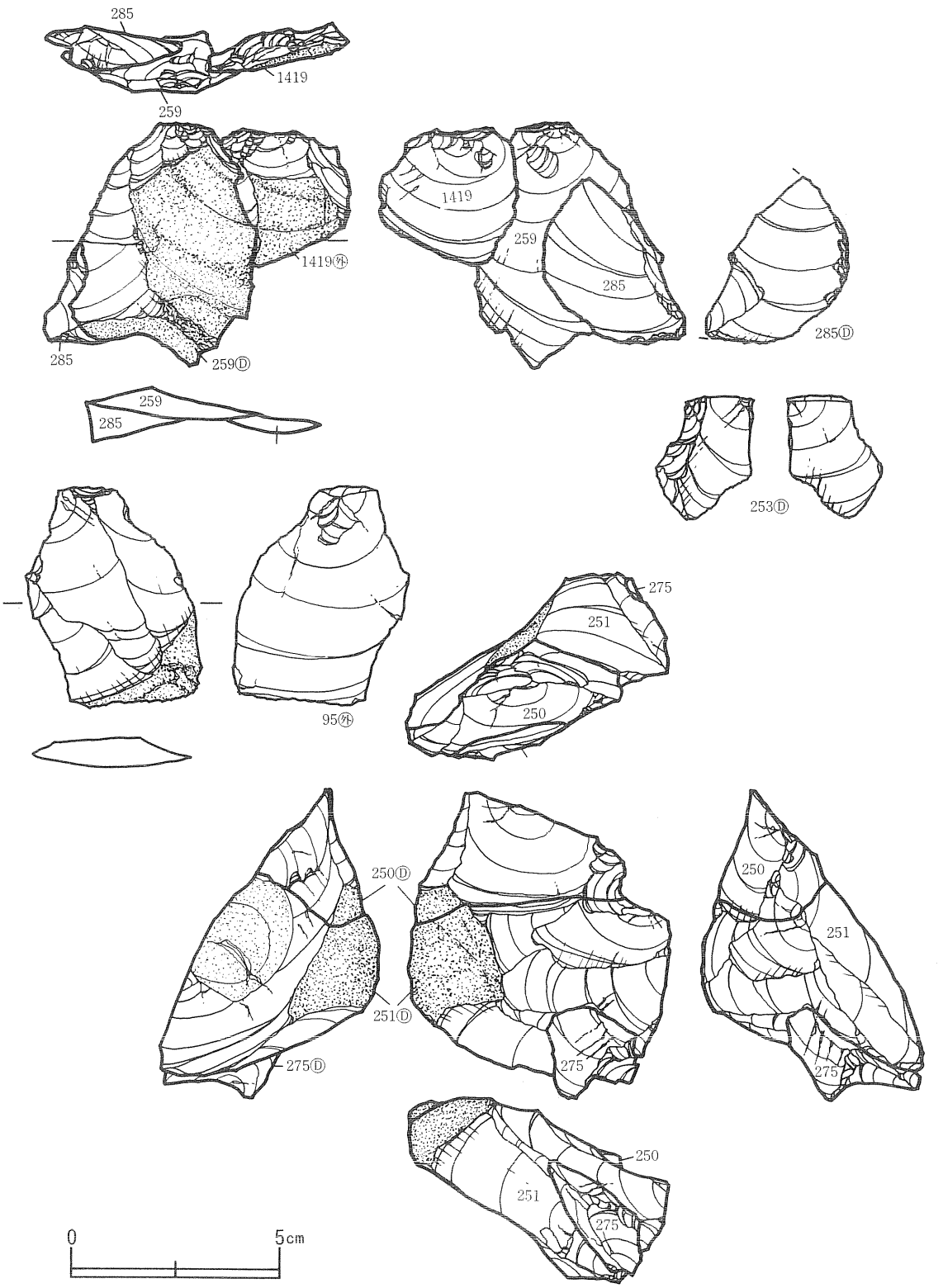


個体４－１

第80図　個体4－1接合図



第81図　個体4－1石器（1）

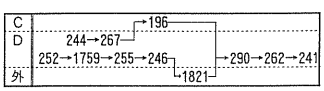


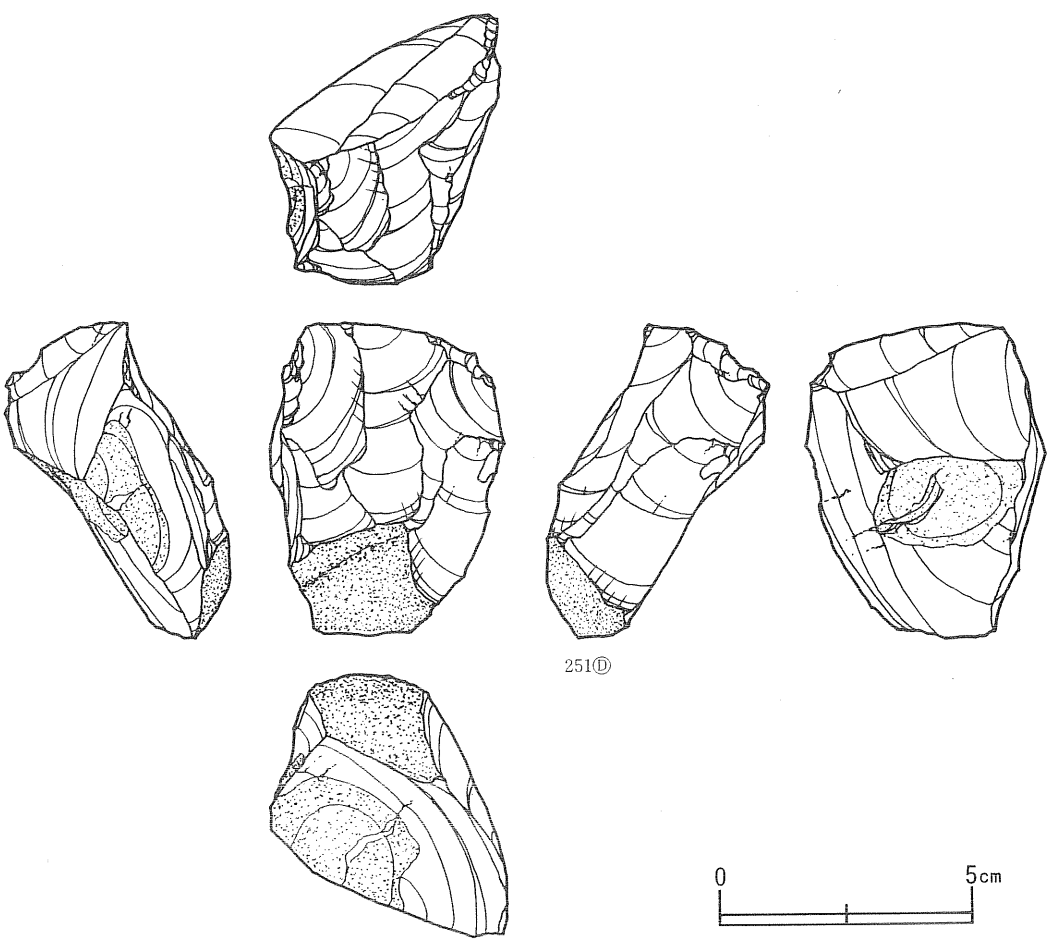
第82図　個体4ー1石器（2）

■個体４－２

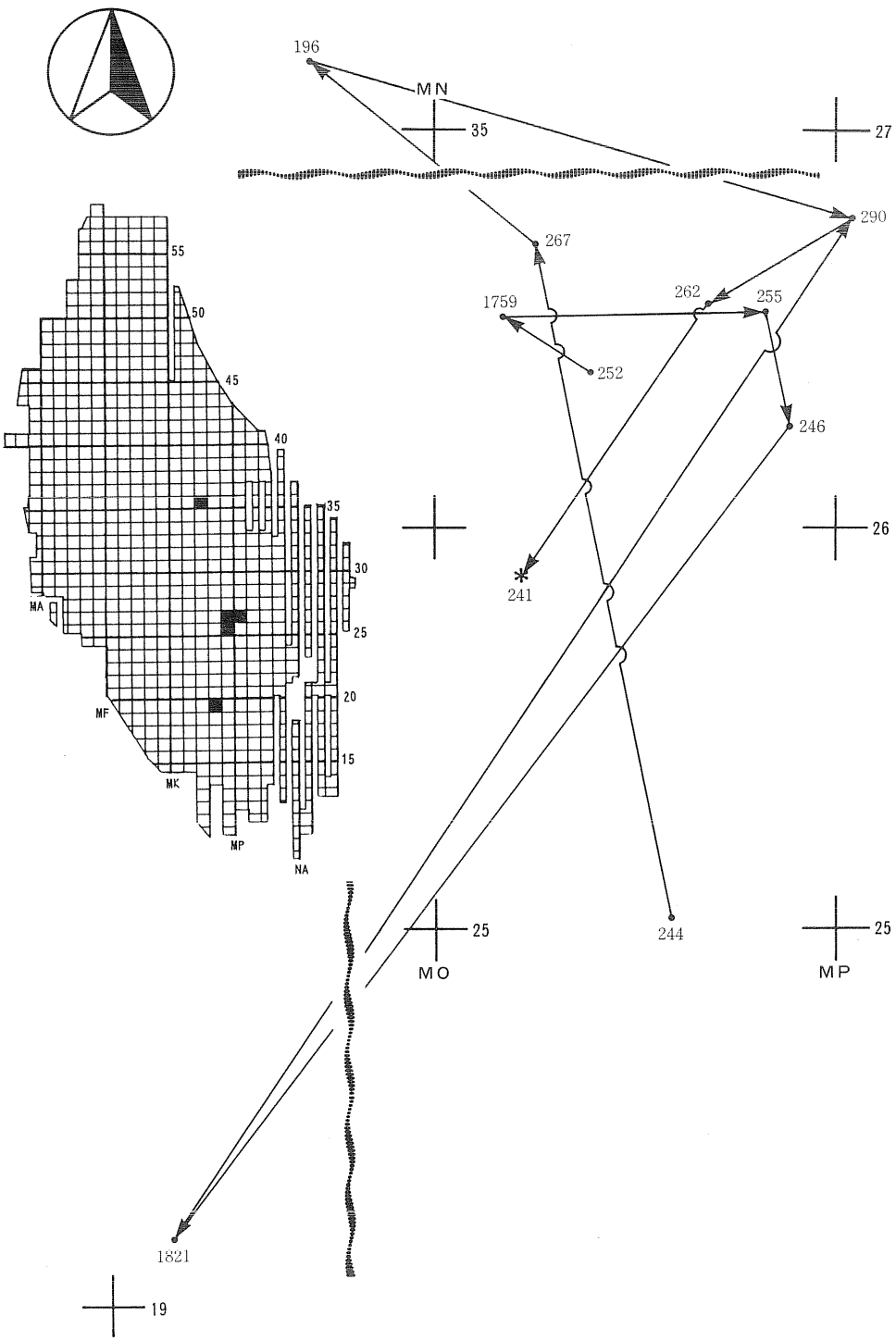
剥片10点、残核１点からなる資料。板状礫の一面を除去しながら、おもにその除去面を打面として幅広の剥片を剥ぎ取っている。本資料では、244、267、196など、図の上側から礫皮面除去を行った後石核を分割し、その後の礫皮の除去面を打面としての剥片剥離作業が行われている。したがって、個体４－１に比べ礫皮面を残した剥片が生産された割合は少ないが、残核に残された剥離痕からはやはり幅広剥片が得られたことがわかる。290を剥ぎ取った後剥片を剥ぎ取るにあたっては、部分的ながら打面調整が施される。

252（礫面除去）→○（礫面除去）→1759（礫面除去）→{90度転位}→255+○（打面作出）……{90度転位}……→246（剥片）→○（剥片）→1821（礫面除去）……→290（打面作出）→
244（礫面除去）→267（礫面除去）→196（礫面除去・打面作出）→＜石核分割＞……{90度転位}……→○（剥片）……
→{90度転位}→○（剥片）→○（剥片）→{90度転位}→262（打面作出）→○（剥片）→○（剥片）→○（剥片）→241（残核）

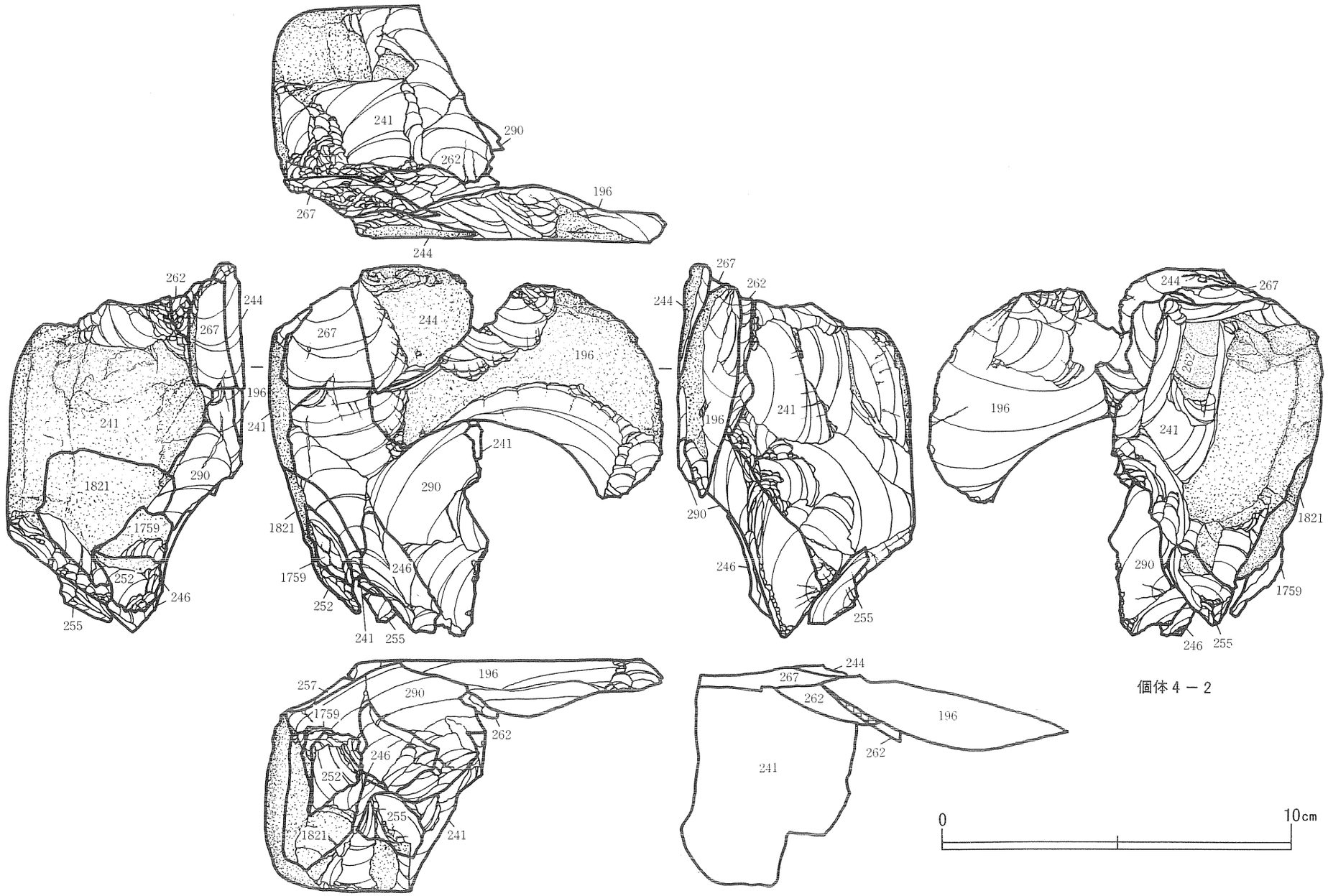




第83図　個体4－1石器（3）

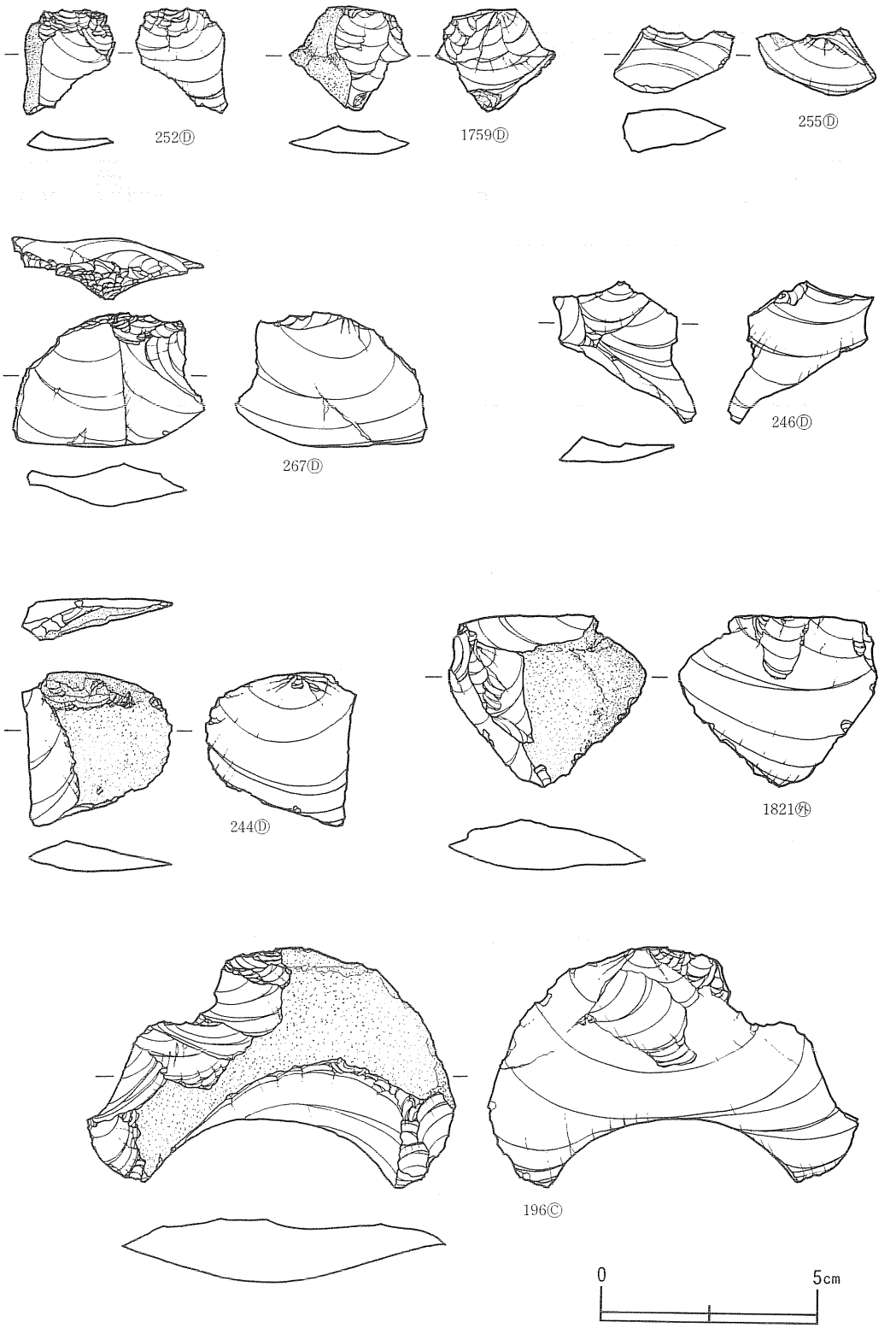


第84図　個体4－2接合関係図

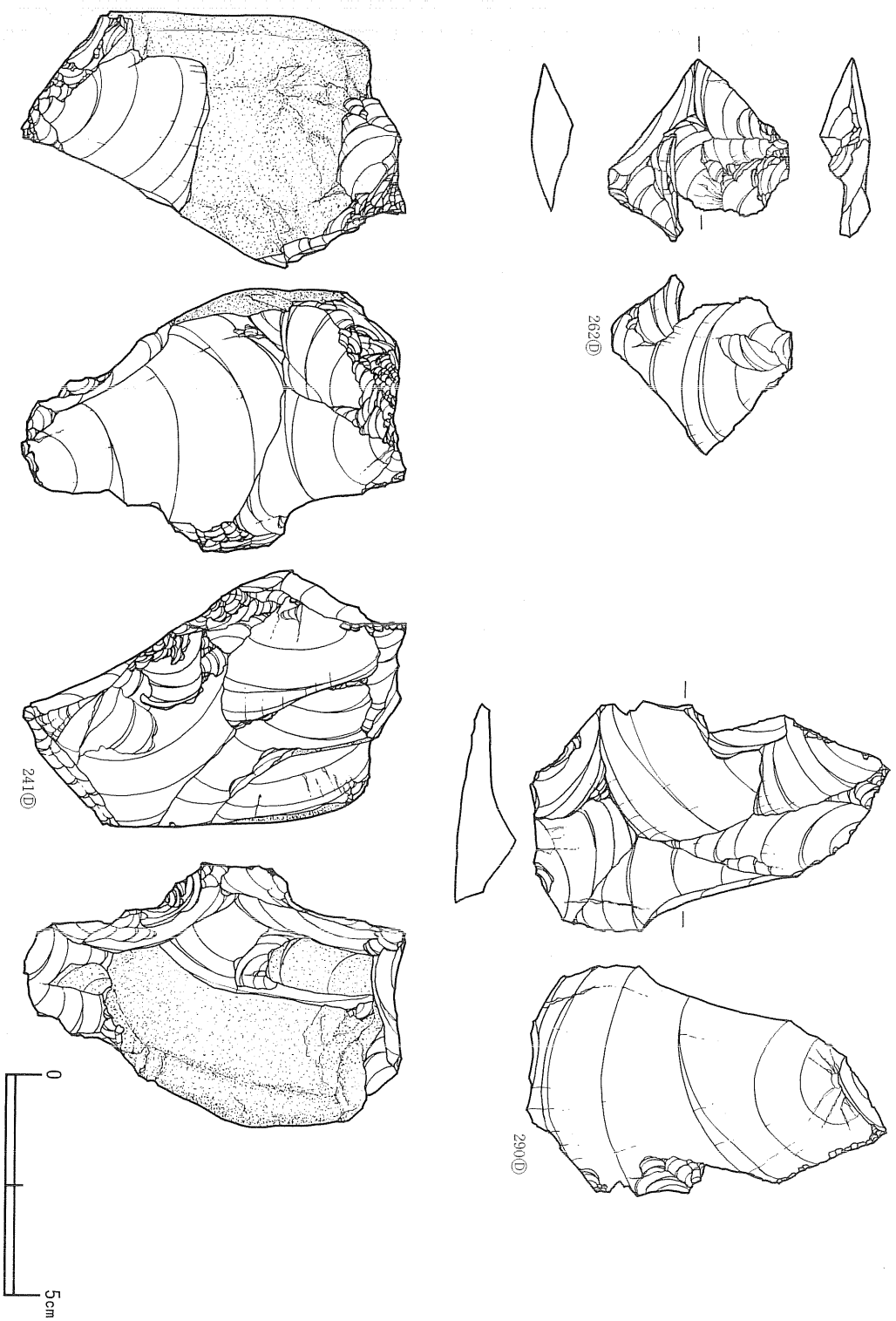


個体４－２

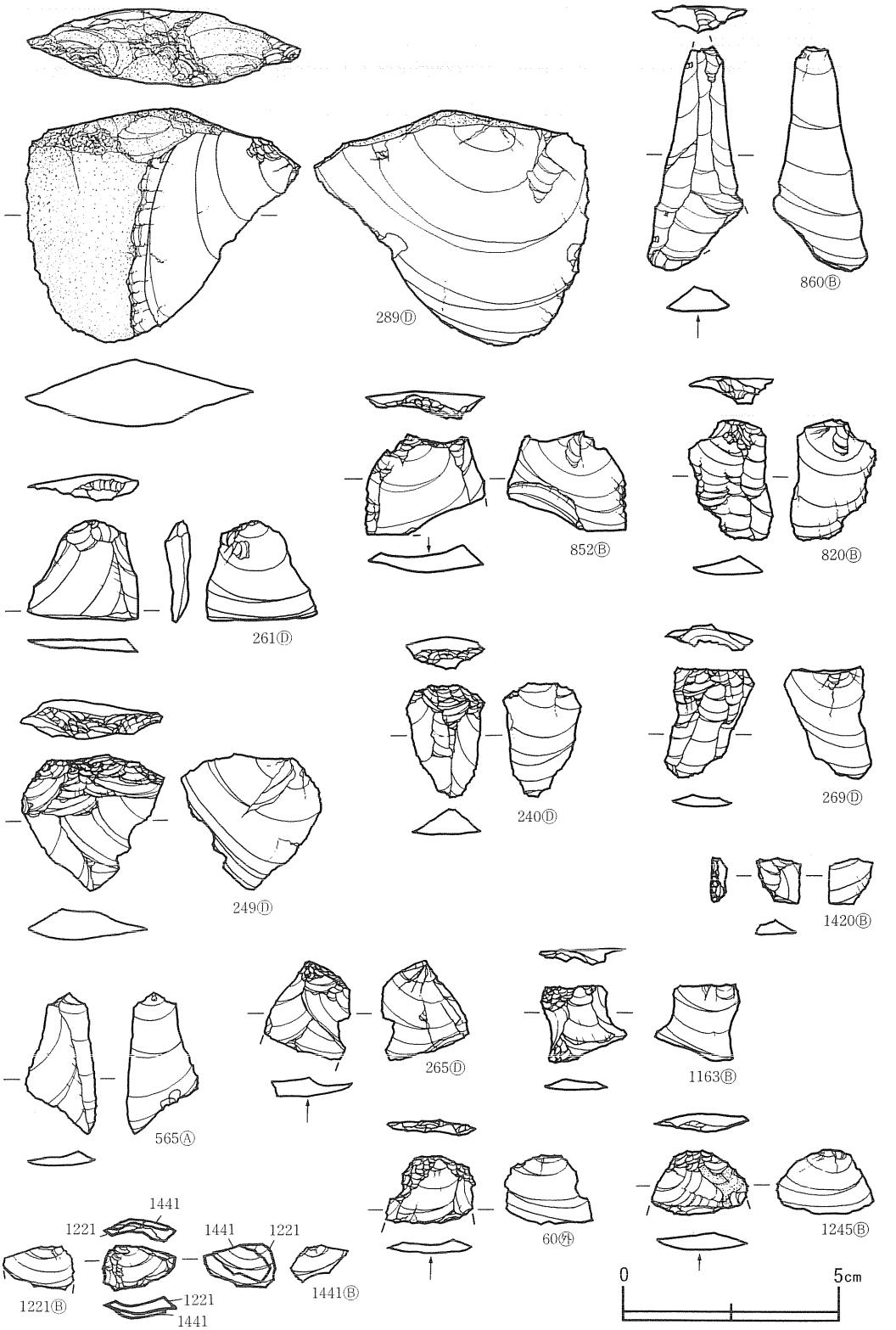
第85図　個体4－2接合図



第86図　個体4－2石器（1）



第87図　個体4－2石器（2）



第88図　個体4単独資料

⑤　個体別資料５（第89図～第92図）

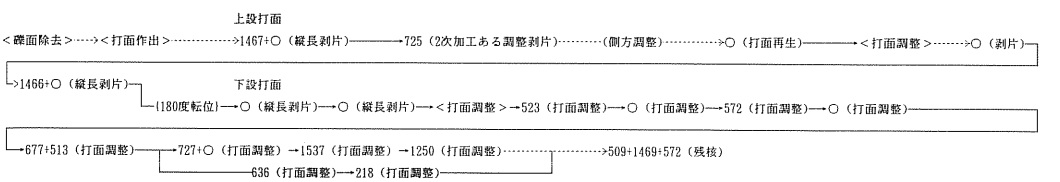
礫皮面はにぶい黄橙色から浅黄橙色、その内側は灰オリーブ色を呈し、芯に近くは灰色から灰白色を呈する頁岩である。総数37点の資料がある。全体にキメ粗く、微細な黒色粒子を含む。遺跡内には分割され、ある程度の縦長剥片が剥ぎ取られた後の資料が持ち込まれているが、遺跡内での剥離作業はさほど行われておらず、加工された石器も折断剥片以外は残されていない。

個体５の分布はＡブロックに中心があり、ほかにＢブロックで２点、Ｃブロックに１点がある。

ブロック間をまたぐ接合関係はない。個体５－１、５－２共にその接合関係はＡブロック内で完結する。

■個体５－１

剥片12点、残核１点（３点が接合）からなる、基本的に縦長剥片を取得した接合資料。縦長剥片の取得は基本的に上設打面側から行われている。下設打面側から取られた縦長剥片は個体中にはないが、523以下の下設打面の打面調整剥片には下設打面側からの縦長剥片剥離痕が残る。



■個体５－２

剥片３点、残核１点からなる接合資料。礫皮面を背にして縦長剥片を剥ぎ取っている。本資料にかかる作業に先だって、側方からの石核整形あるいは分割が行われ、縦長剥片の剥ぎ取りはそれと直交する面を作業面として行われている。石核下部には下端部調整の剥離痕が残されるが、これは縦長剥片剥ぎ取りの作業過程の中で行われている。本資料は縦長剥片剥取にかかる最終段階の資料として遺跡内に残置されたものであろう。

＜縦長剥片剥取＞→748（剥片）→○（打面調整）→1262（剥片）→1857+○（剥片）→1001（残核）

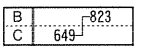
⑥　個体別資料６（第93図～第95図）

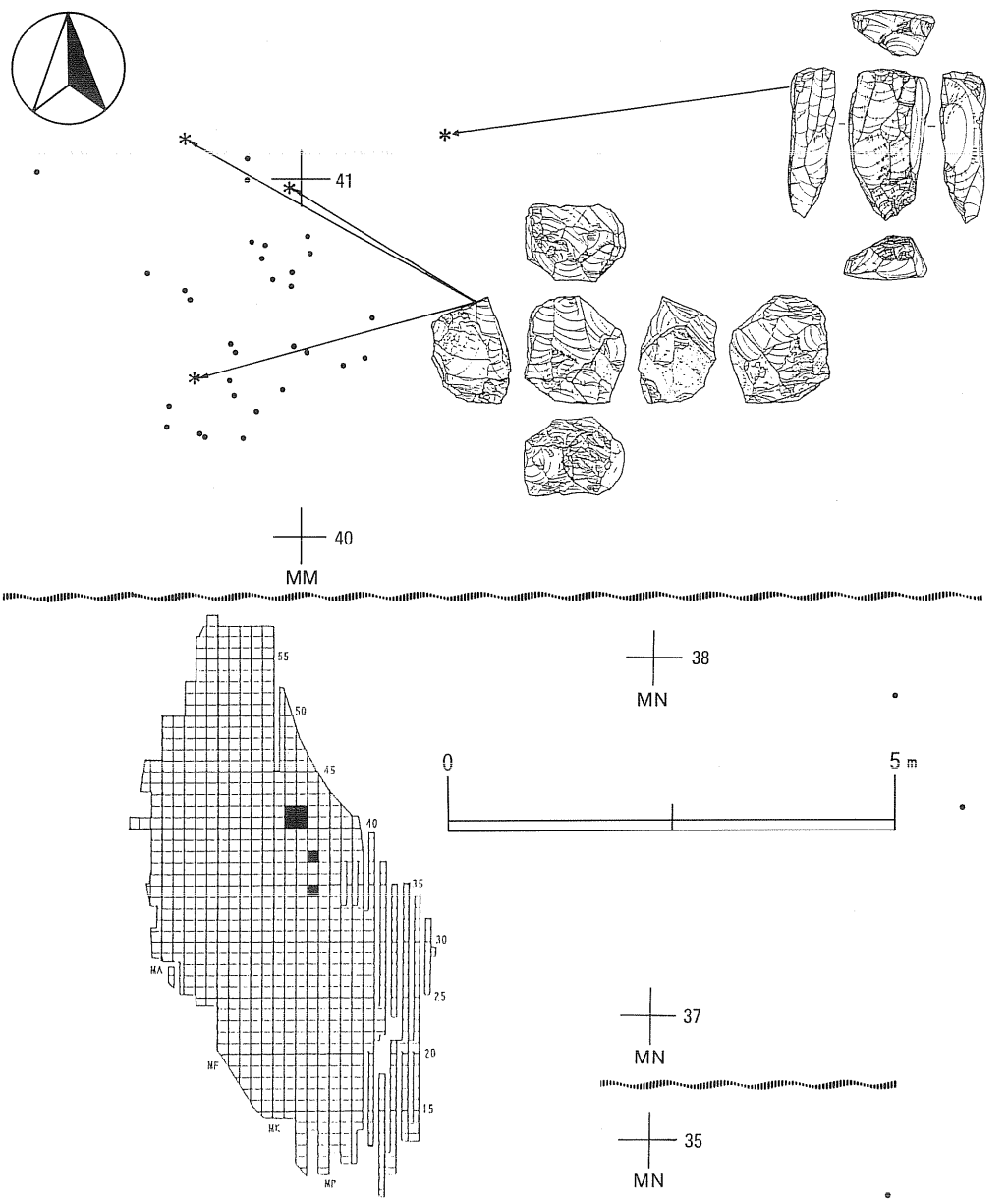
にぶい黄褐色を呈する珪質頁岩。1194に残された礫皮面は皺状を呈する。総数13点の資料である。微細な黒色粒子を含むが、石質は硬質・堅緻である。遺跡内には主に加工された石器として持ち込まれており、ナイフ形石器４点、彫器１点、彫器削片２点が含まれる。ナイフ形石器、および彫器に加工された石核作業面調整剥片823の背面に残る剥離痕から、主として縦長剥片を生産した個体と判断される。

個体６の資料はＡ、Ｂ、Ｃの各ブロックおよびブロック外（MM35）に分布する。Ａブロックではナイフ形石器１点、Ｂブロックでは彫器１点、削片１点、Ｃブロックではナイフ形石器２点、削片１点、MM35グリッドではナイフ形石器１点が出土している。

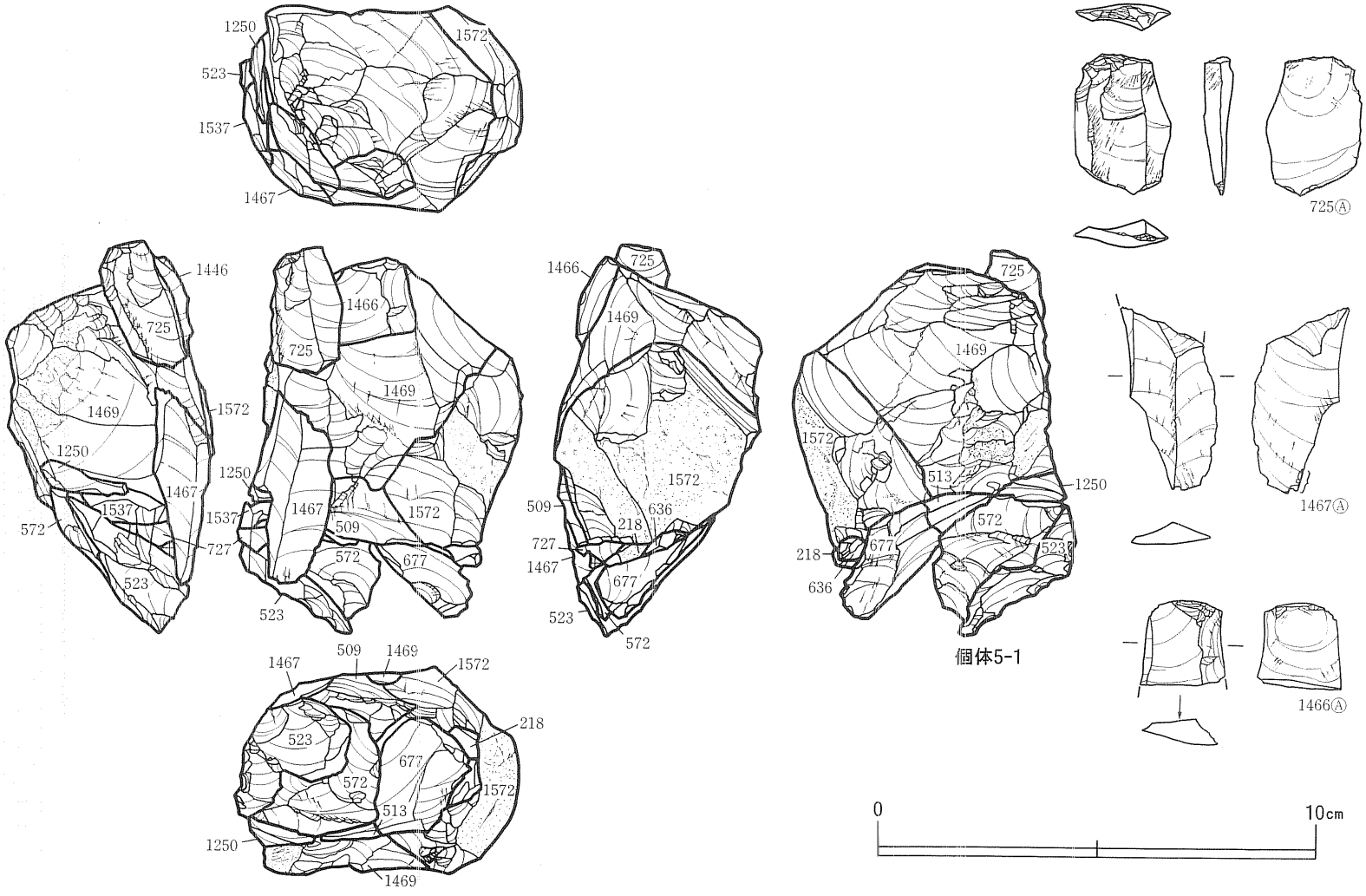
ブロック間をまたぐ接合関係はＢブロックの彫器823とＣブロックの削片649の間で認められ、彫器823のＣブロックからＢブロックへの移動があったことが示されている。

823（彫器）+649（削片）

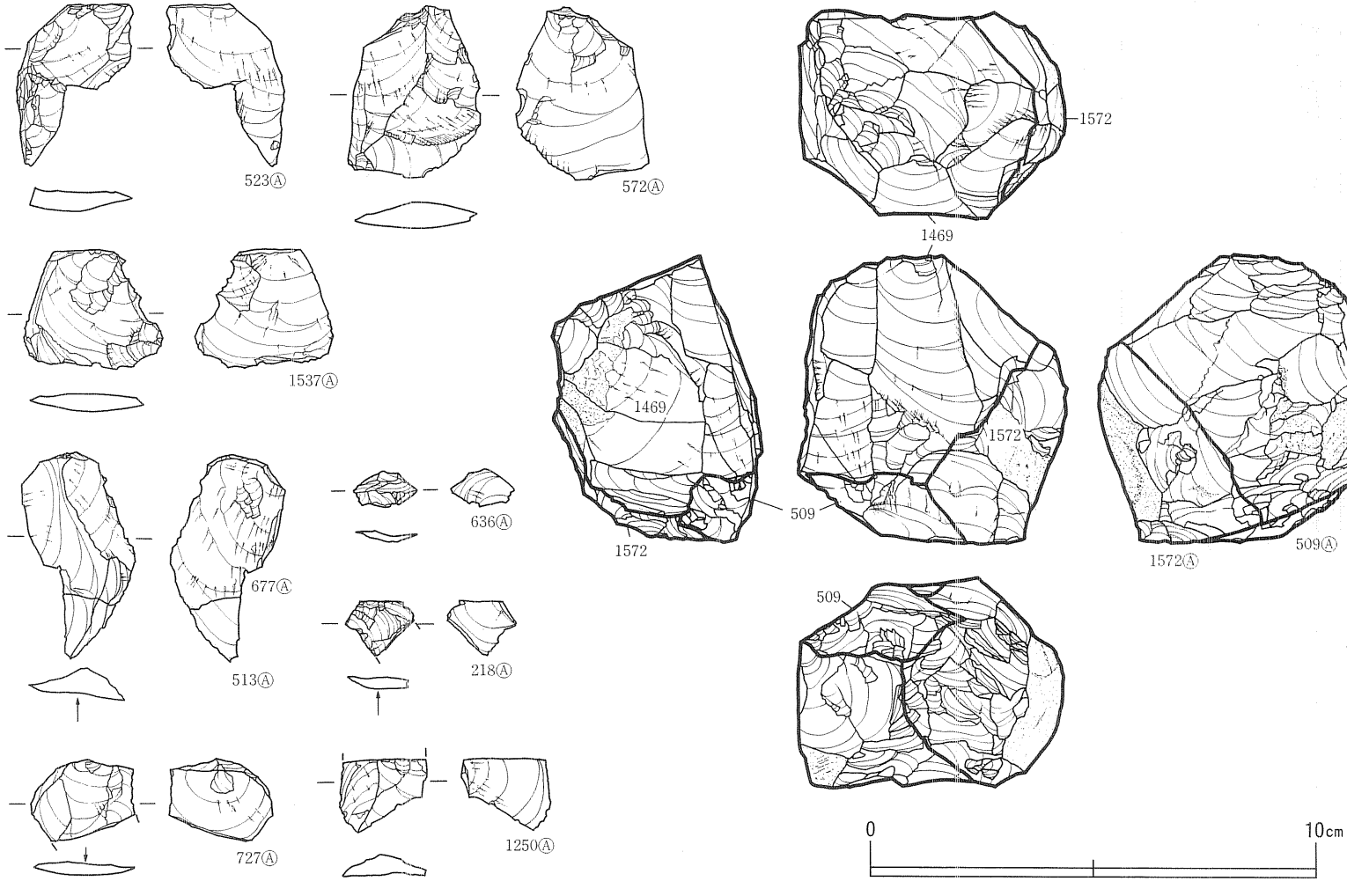




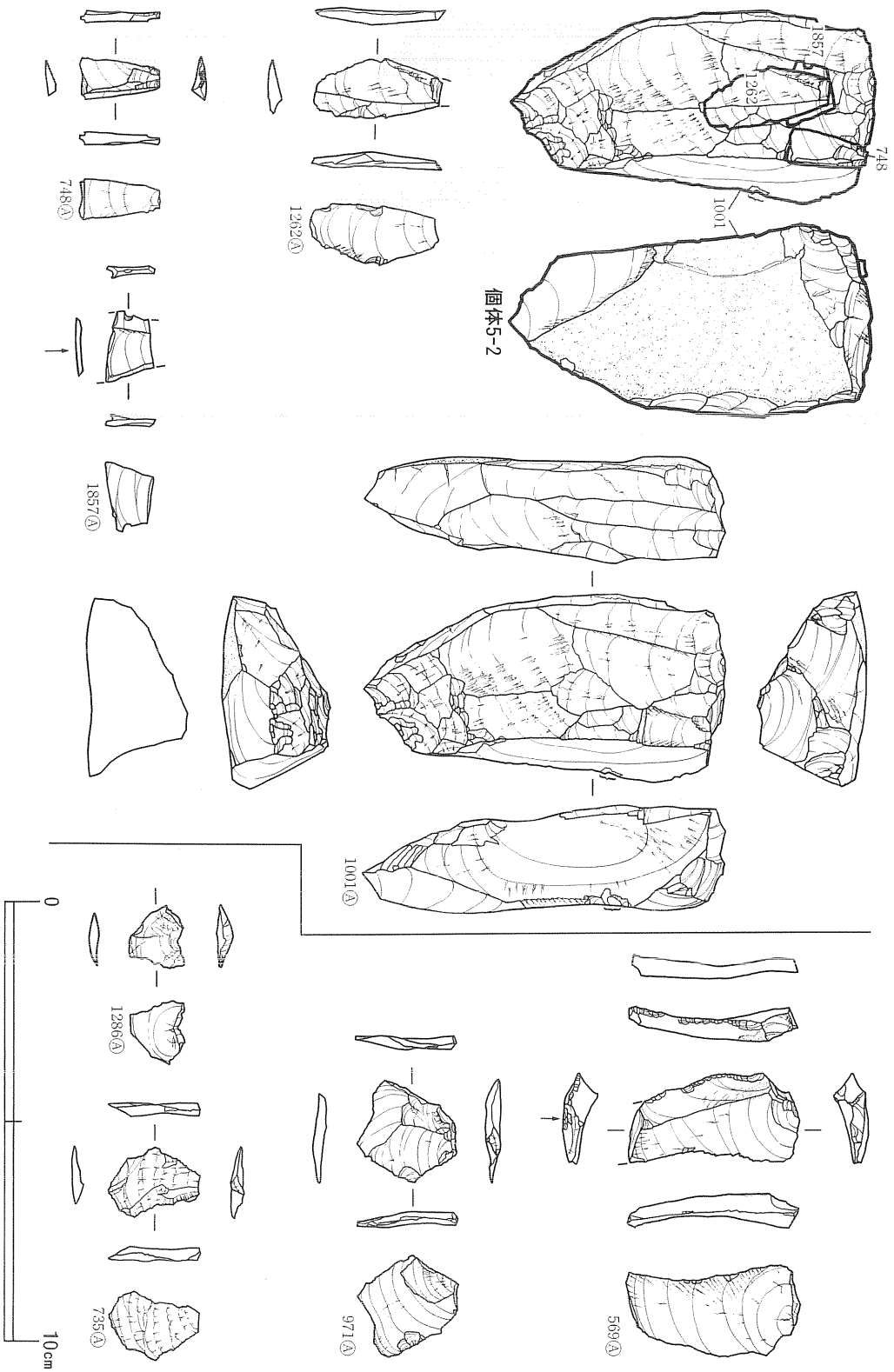
第89図　個体5分布図



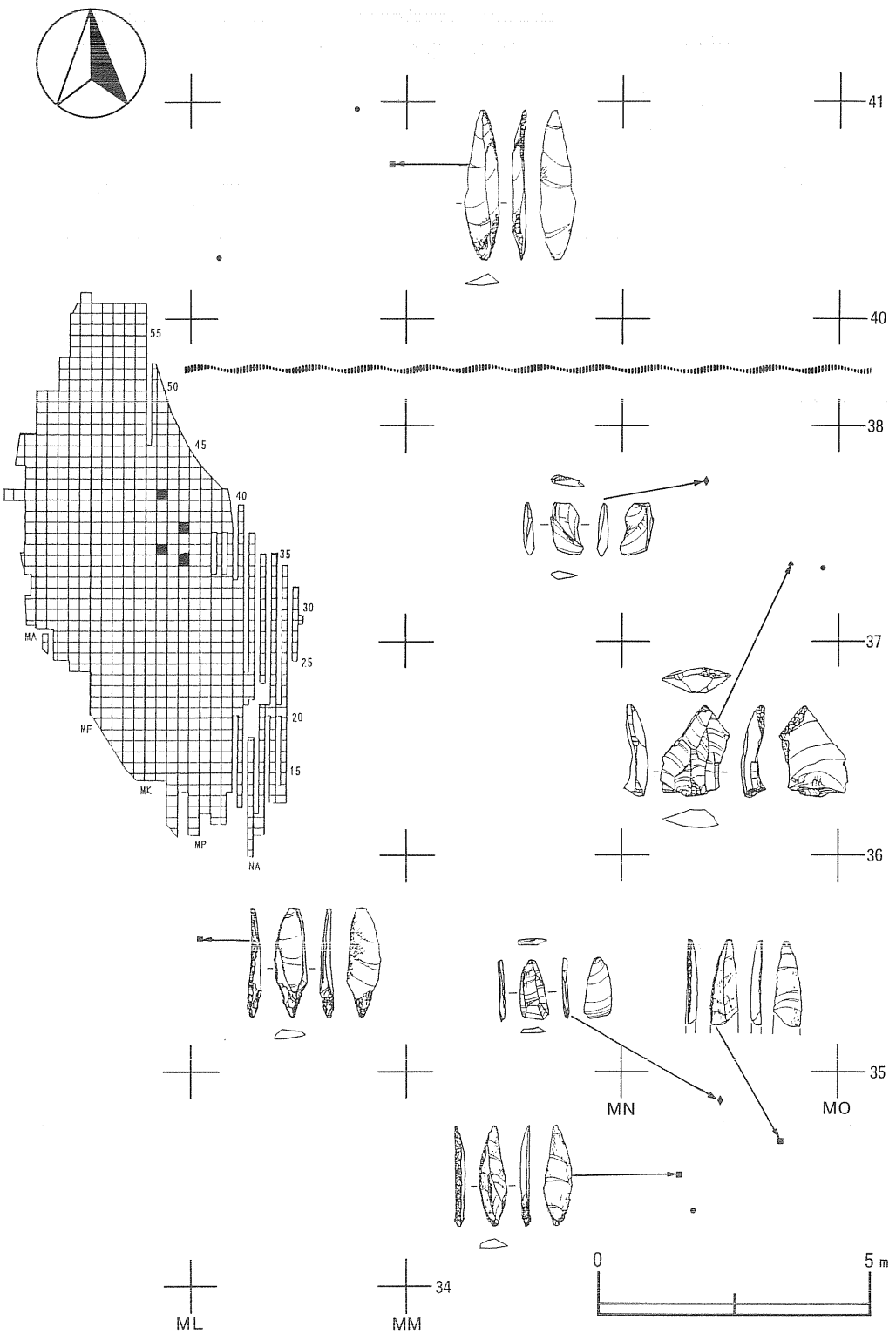
第90図　個体5ー1接合図・石器（1）



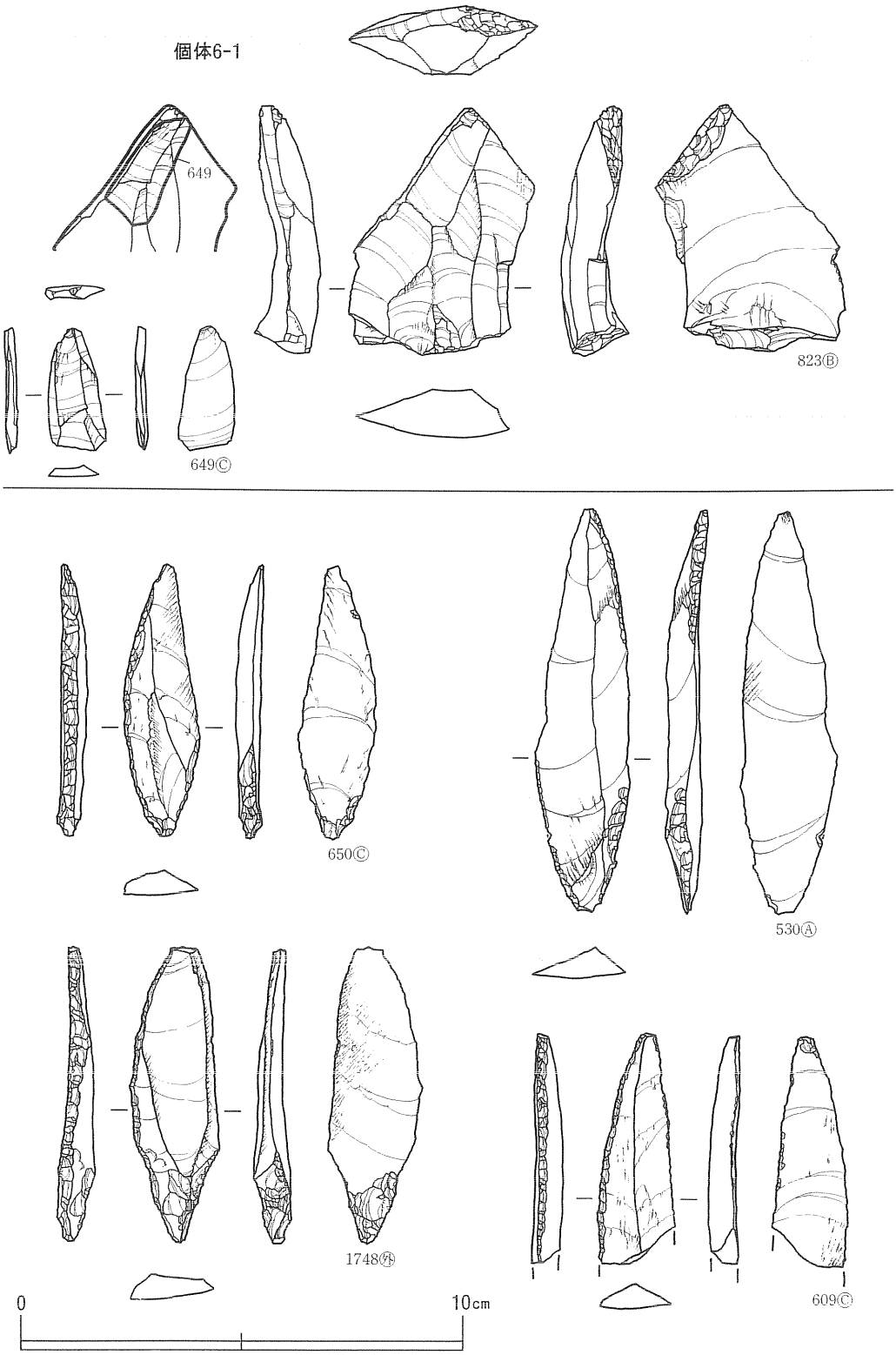
第91図　個体5－1石器（2）



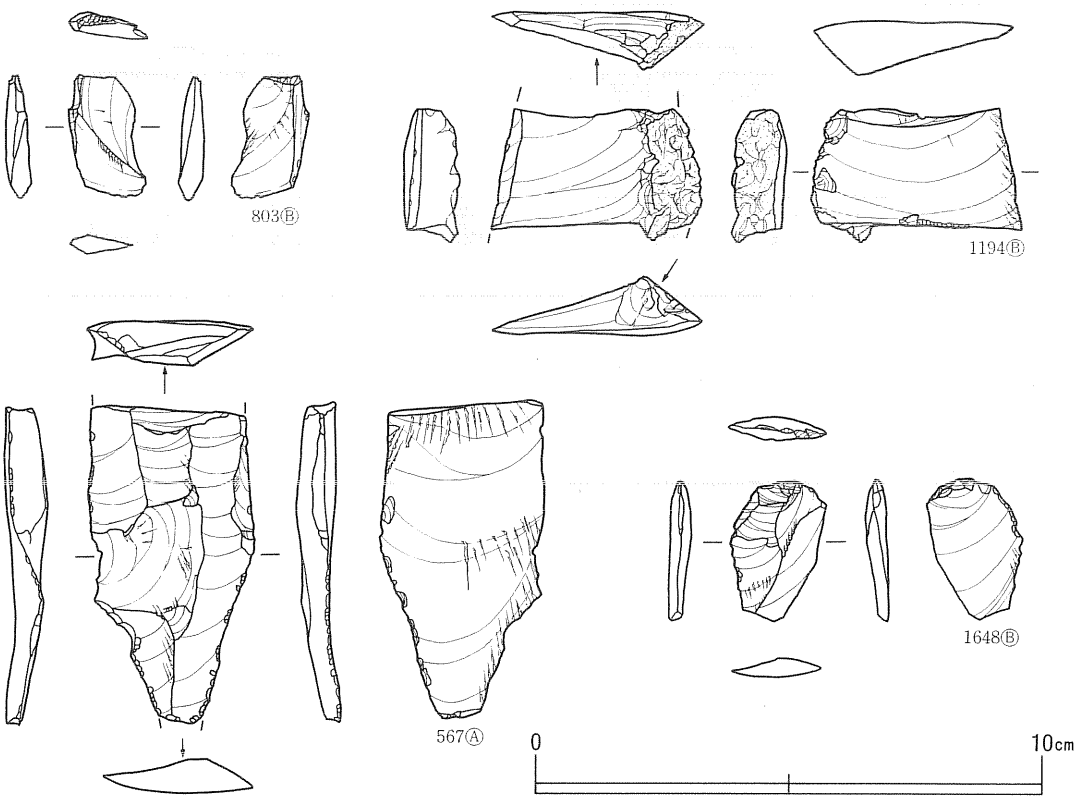
第92図　個体5－2接合図・石器、個体5単独資料


41
40
38
37
36
35
34
55
50
45
40
35
30
25
20
15
MA
MF
MK
MP
NA
MN
MO
ML
MM
0
5 m

第93図　個体6分布図



第94図　個体6－1、個体6単独資料（1）



第95図　個体6単独資料（2）

⑦　個体別資料７（第96図）

にぶい黄褐色～褐色を呈する珪質頁岩であり、縞の入ることが特徴である。総数７点の資料があり総て接合するが、加工された石器はない。遺跡内には剥片剥離作業の進んだ石核として持ち込まれ、石核調整作業を行った後、再び遺跡外へ持ち出されたものと思われる。

個体７－１の接合関係はＢブロック内で完結する。

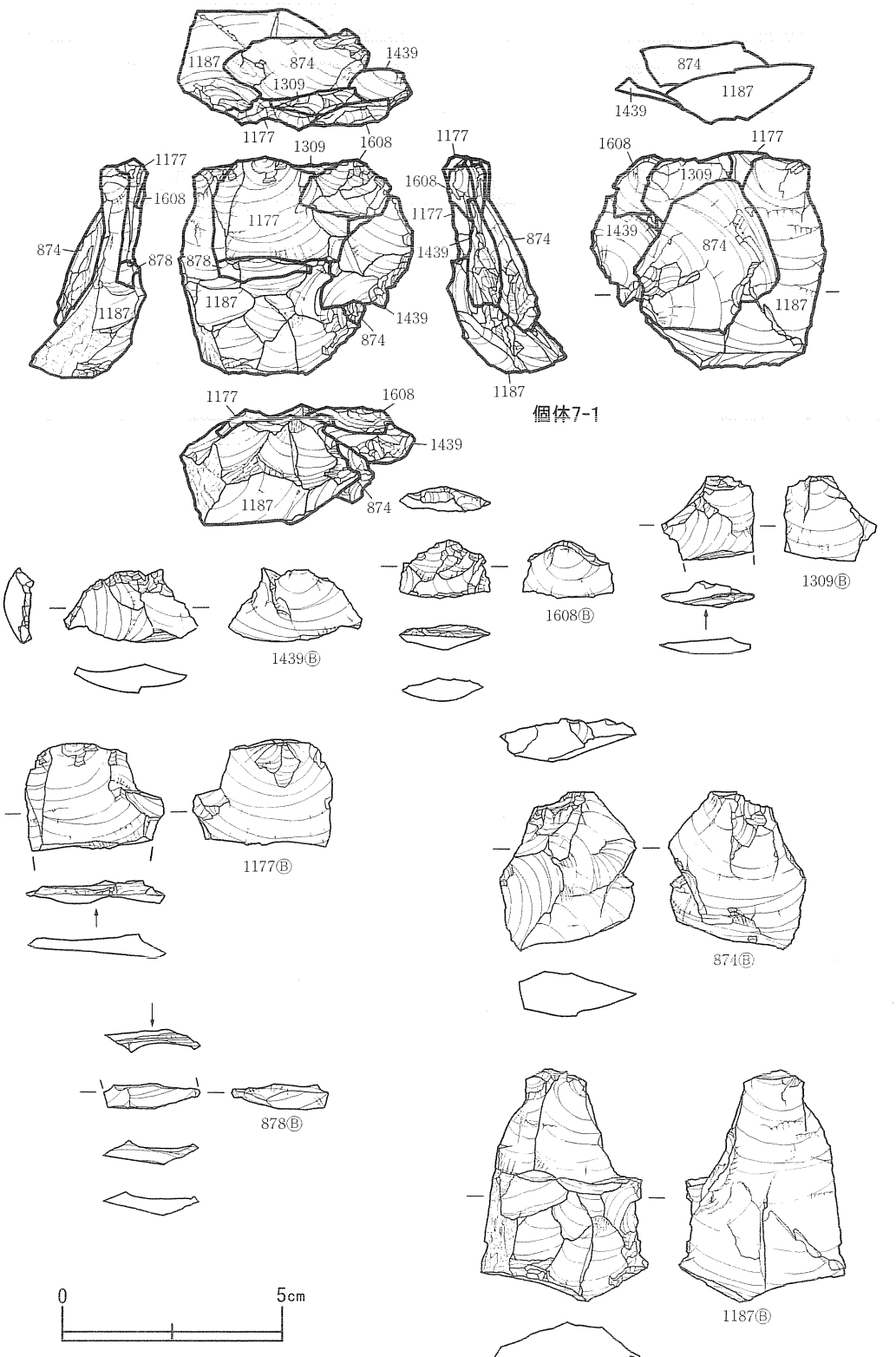
▤個体７－１

剥片７点からなる接合資料。いずれも石核にできた隆起を除去するための調整剥片である。石核の上面及び左側方からの剥離を繰り返すが、1187の石核下端部まで及ぶ剥離によって隆起の除去が果たされている。1309には打面調整の剥離痕が残されている。

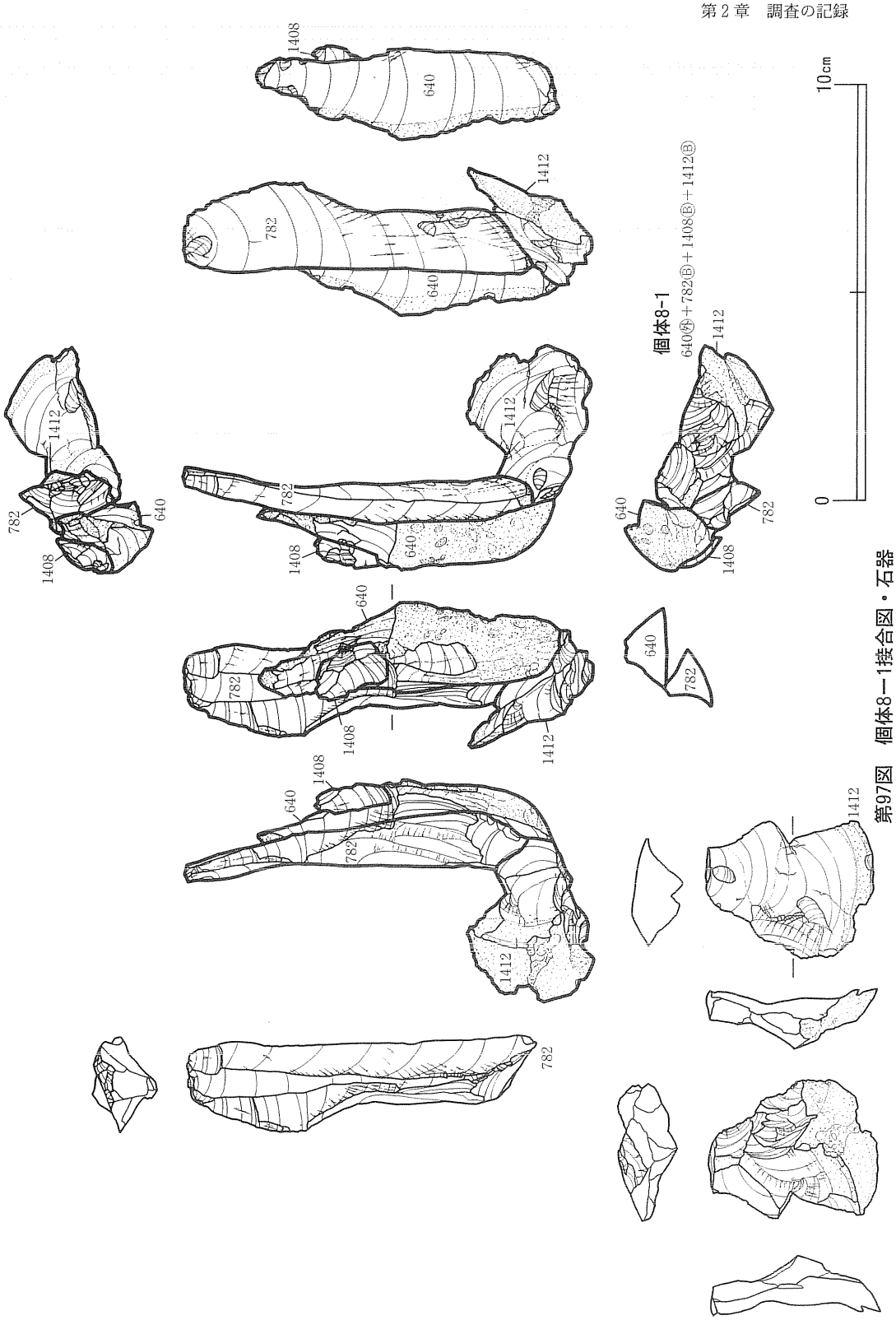
1439（側方調整）⟶1608（作業面調整）⟶1177+878（剥片）⟶1309（作業面調整）⟶1187（作業面調整）⟶874（側方調整）

⑧　個体別資料８（第97図～第98図）

礫皮面はにぶい橙色～灰褐色、内側は黄褐色を呈する珪質頁岩。総数16点の資料からなる。礫皮面には径１～２㎜の小孔が多く認められる。小形の偏平礫を利用して縦長剥片を目的としてのおもに初期の剥離作業が行われている。石核は遺跡内には残されていない。



第96図　個体7―1接合図・石器

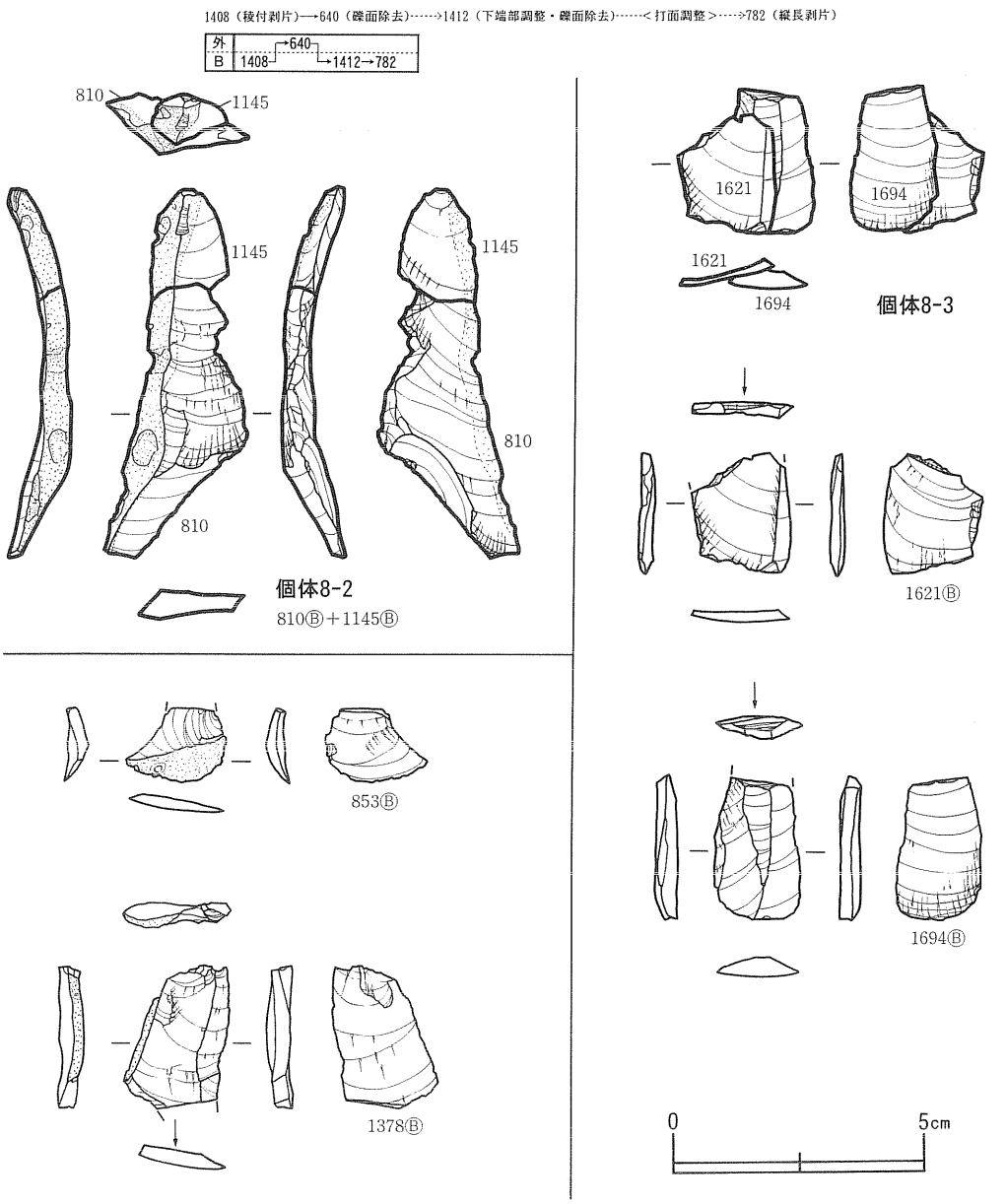


第97図　個体8－1接合図・石器

個体８の資料は640が唯一ブロック外のＭＰ39で出土しているほかは、全てＢブロックからの出土である。

■個体８－１

剥片４点からなる接合資料。縦長剥片を剥ぎ取った石核の初期作業の資料。縦長剥片を剥ぎ取るため稜形成、礫皮面除去、下端部調整が行われ、782の縦長剥片を得ている。782には調整打面が残されている。640、1412、782は剥離後火熱を受け、一部が赤化している。本資料剥離後の石核は遺跡に残されていない。



第98図　個体8ー2・8ー3、個体8単独資料

■個体８－２

縦長剥片を剥ぎ取った石核初期の資料、礫面除去にともなう剥片であり、剥離後折断されている。810は折断後火熱を受けて赤化している。

■個体８－３

縦長剥片を剥ぎ取った石核の剥片剥離工程上の資料。1621、1694とも剥離後折断されている。

⑨　個体別資料９（第99図～第104図）

灰白色から暗灰黄色を呈する珪質頁岩。石英粒、白色長石粒を含む節離が多く貫入する。わずかに残る礫皮面は皺状を呈する。彫器１点、錐器１点、残核１点を含む総数35点の資料からなる。剥片1287などが残ることから遺跡内には大形の石核として持ち込まれ消費されたと考えられる。

個体９の資料はＡ、Ｂ、Ｃの各ブロックに分布する。Ａブロックでは彫器１点、Ｂブロックでは錐器１点が含まれる。

ブロック間をまたぐ接合関係は個体９－２に認められる。９－２では剥片剥離作業をＡブロックで中心的に行うが、そのうち作業面調整剥片618がＢブロックへ搬出されている。ほかに個体９－１の接合関係はＡブロック内で完結し、縦長剥片が折断された９－３はＡブロック、節離面で折れた作業面調整剥片９－４はＣブロック内で接合する。

■個体９－１

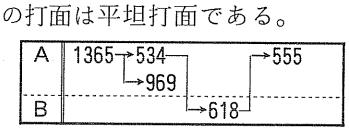
残核１点、剥片６点からなる角錐状の石核資料。左側面に礫皮面を、右側面に節離面を残す。打面調整を交えて短い剥片が剥ぎ取られている。礫皮面の右下方部は石核整形のためと判断される節離面を打面としての小剥離が連続して施されている。1000＋999は剥離後折断されている。

552（剥片）→684
552（剥片）⇢1251（剥片）⇢1249（打面調整）→1000+999（剥片）→○（剥片）→215（残核）

■個体９－２

剥片５点からなる接合資料。石核の作業面調整剥片である555に上、横、下の各方向から取られた剥片が接合する。555自体は、左下部を剥片末端を打面としての剥離によって失っているが、左肩にはそれによって切られた細部調整がわずかに残されている。555の打面は平坦打面である。

1365+○（剥片）→534+○（剥片）⇢618（作業面調整）⇢555（作業面調整）
1365+○（剥片）⇢969（側方調整）

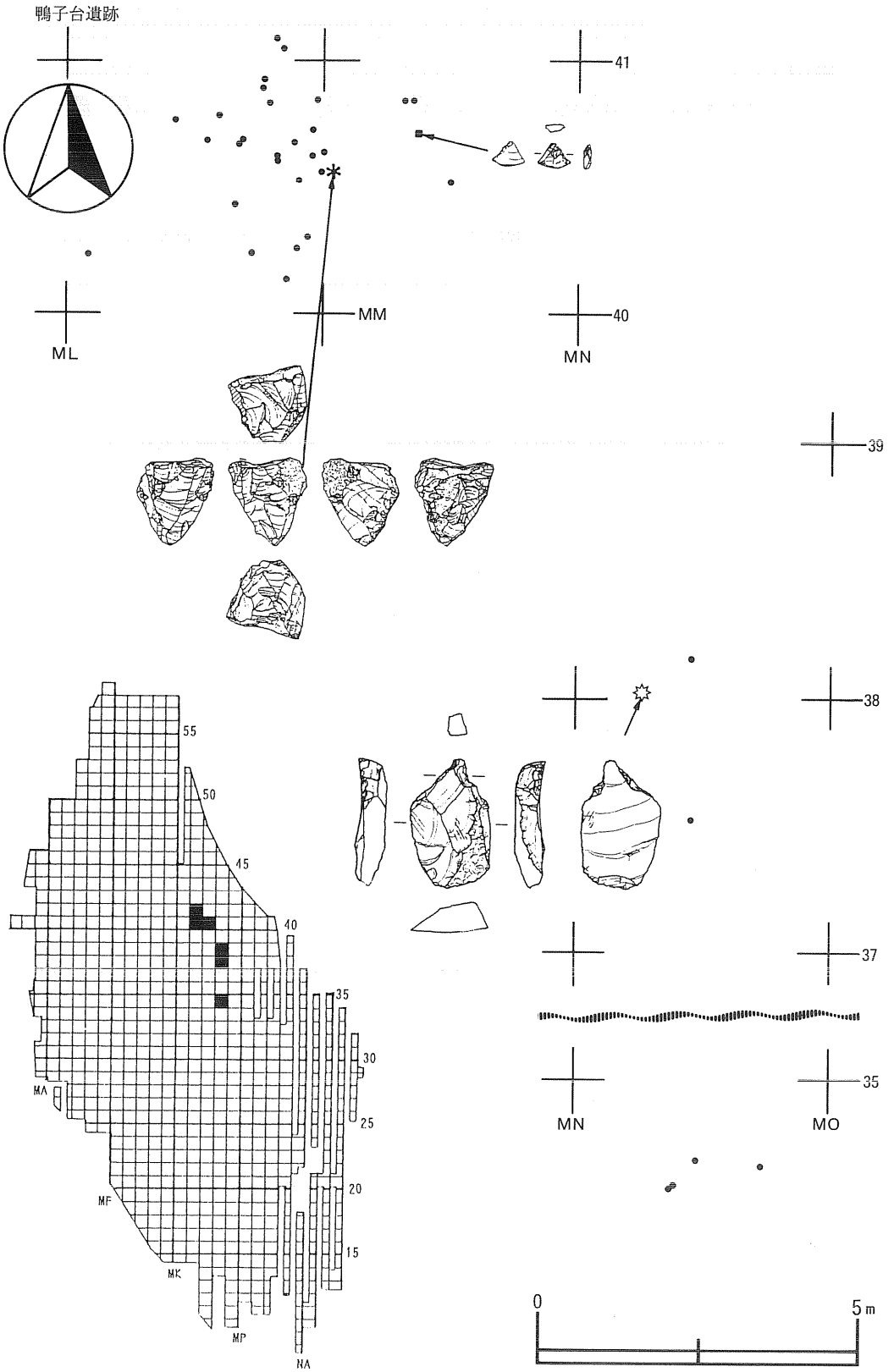


■個体９－３

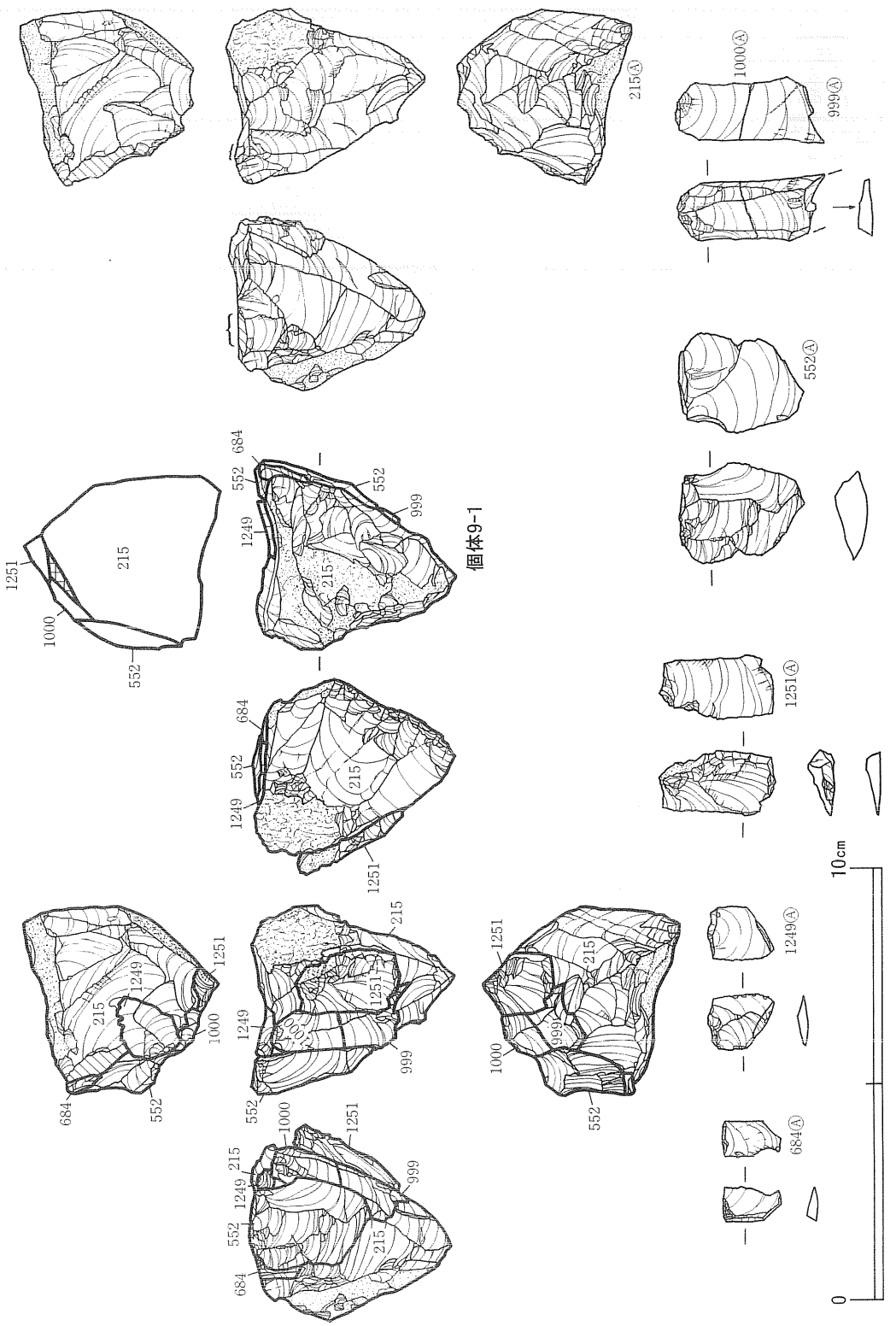
縦長剥片。末端には礫皮面、節離面を残す。打面は調整打面である。

■個体９－４

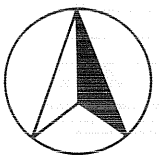
作業面調整剥片。下面には礫皮面が広く残る。節離面で折れている。

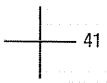

鴨子台遺跡
41
MM
40
ML
MN
39
38
37
35
MN
MO
55
50
45
40
35
30
25
20
15
MA
MF
MK
MP
NA
0
5m

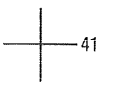
第99図　個体9分布図

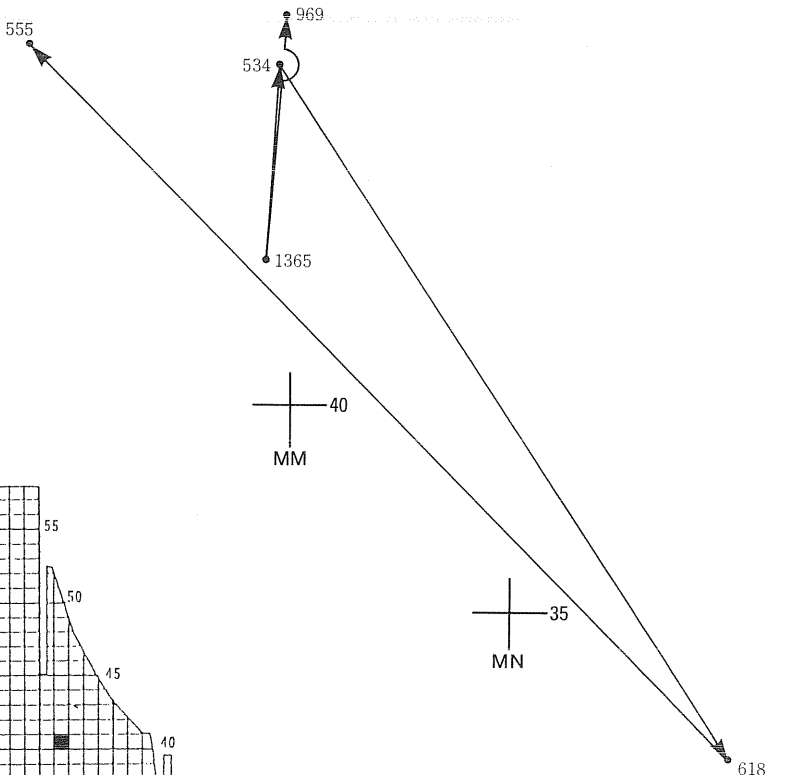


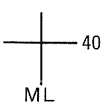
第100図　個体9－1接合図・石器

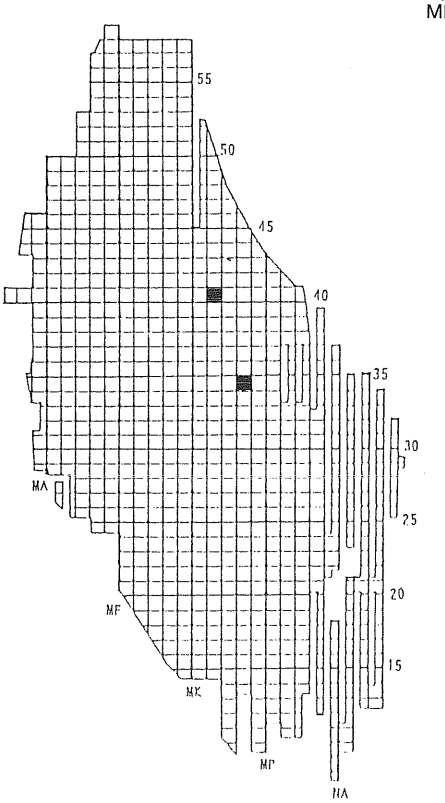


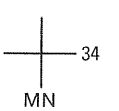




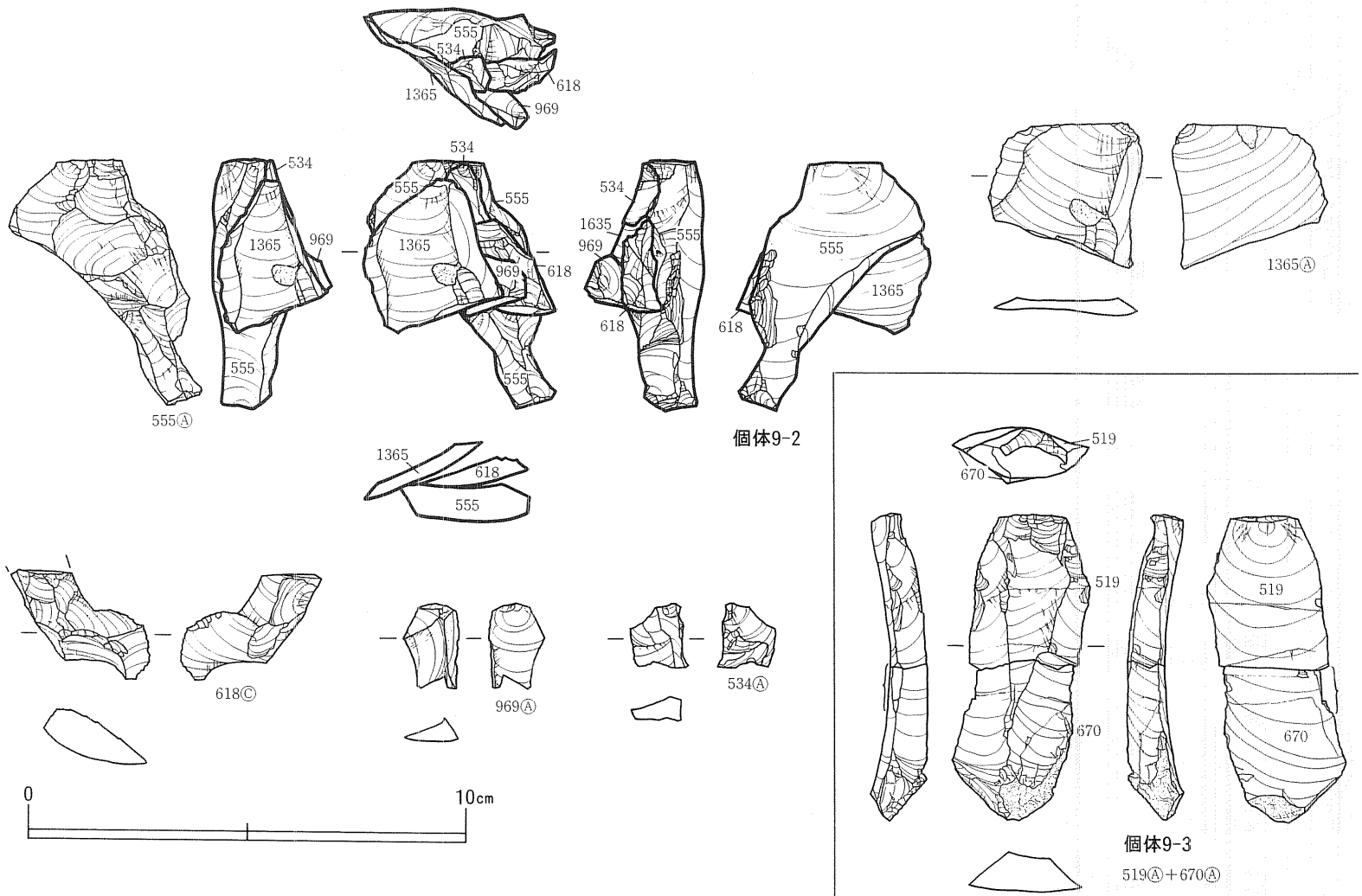




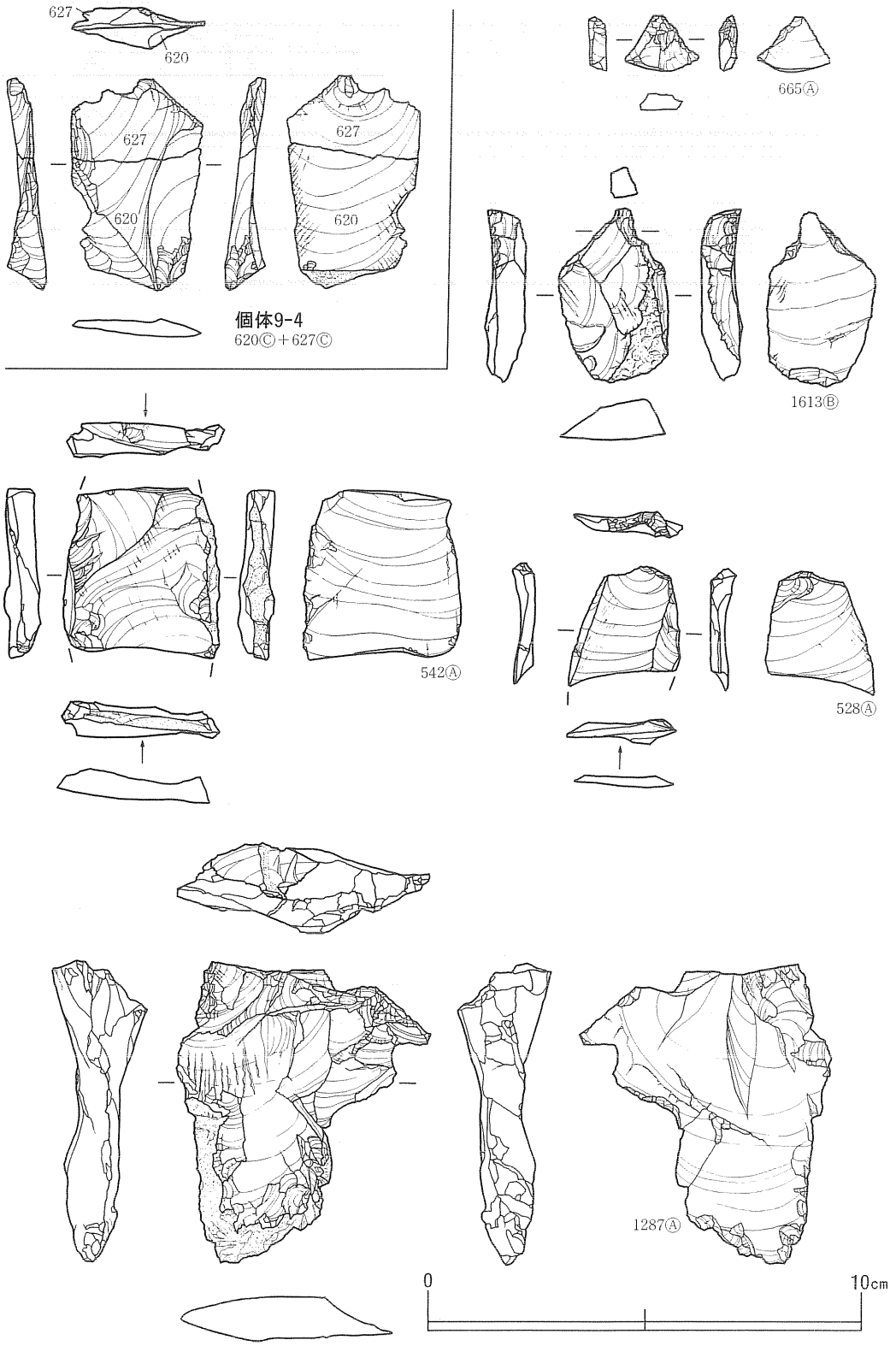




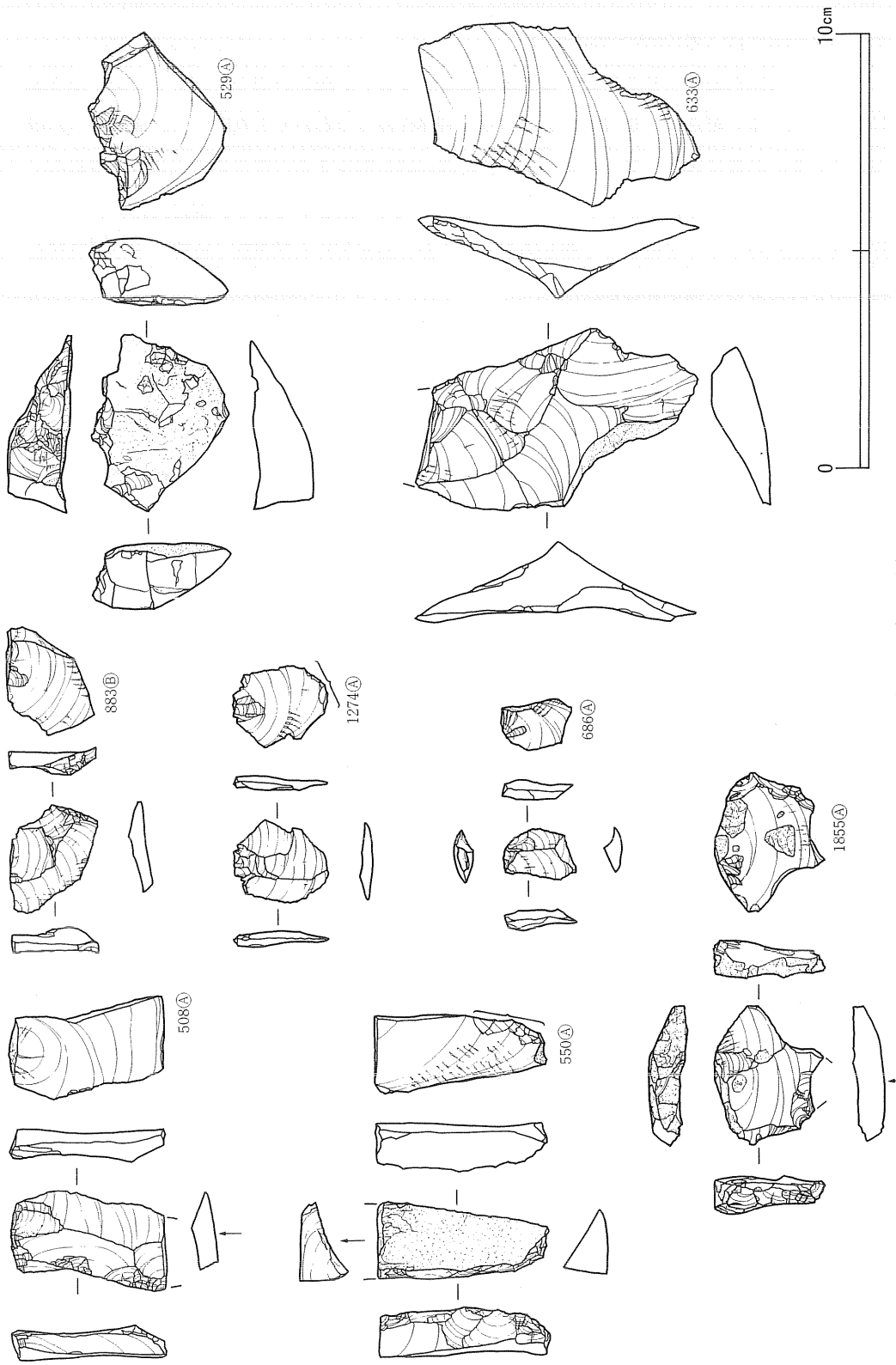
第101図　個体9ー2接合関係図



第102図　個体9－2・9－3接合図



第103図　個体9－4接合図、個体9単独資料（1）



第104図　個体9単独資料（2）

⑩　個体別資料10（第105図～第107図）

礫皮面は暗灰黄色、より芯に近くは黒褐色を呈する頁岩。総数17点の資料からなる。礫皮面は皺状を呈する。縦長剥片を目的としての剥片剥離作業が行われたと判断され、彫器２点が得られている。石核は残されておらず、また、彫器1201に削片３点が接合する以外は、資料内での接合関係もない。しかし、わずかながら不定形の剥片が残されており、遺跡内には初期の剥片剥離工程が終了した石核として持ち込まれ、少数の縦長剥片を剥ぎ取った後、再び遺跡外に持ち出されたものと推定される。

個体10の資料はＡ、Ｂ、Ｃの各ブロックに分布するが、彫器２点および削片３点ともがＢブロックでの出土である。

ブロック間をまたぐ接合関係はない。

■個体10－１

彫器と削片３点の接合資料でる。

⑪　個体別資料11（第108図）

礫皮面は褐色の滑沢な面を呈し、内側ではにぶい黄橙色を呈する珪質頁岩。灰白色の縞が入る。礫皮面を打面として不定形の分厚い剥片が得られており、内１点は側縁に細部加工を施して削器に作り替えられている。遺跡内には原礫状態で持ち込まれ、少数の剥片が剥離された後、石核は遺跡外へもちだされたものと推測される。

個体11の３点の資料はいずれもＤブロック内での出土である。

■個体11－１

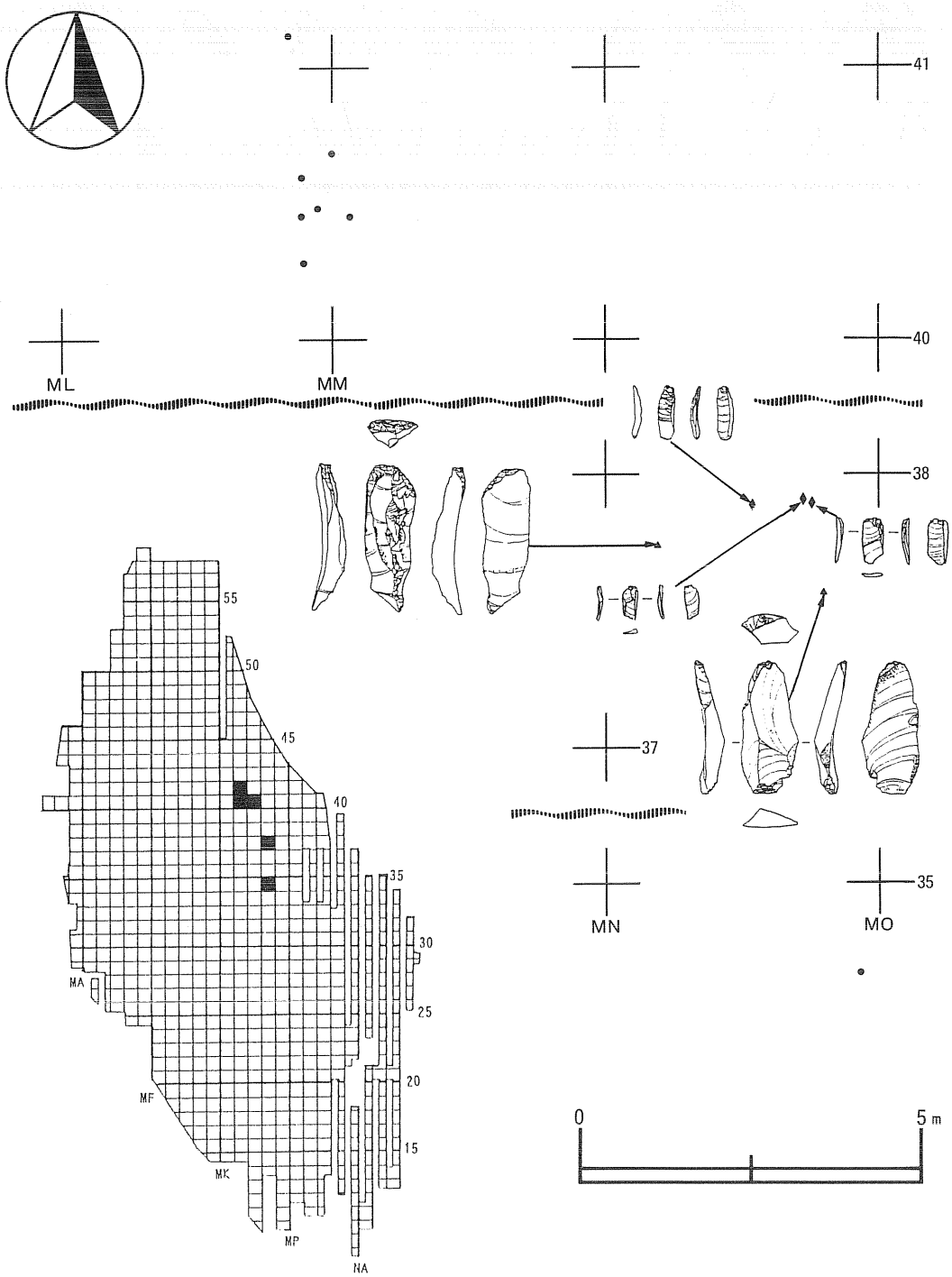
削器１点、剥片１点の接合資料。287と284の打面は90度転位されている。

⑫　個体別資料12（第109図～第120図）

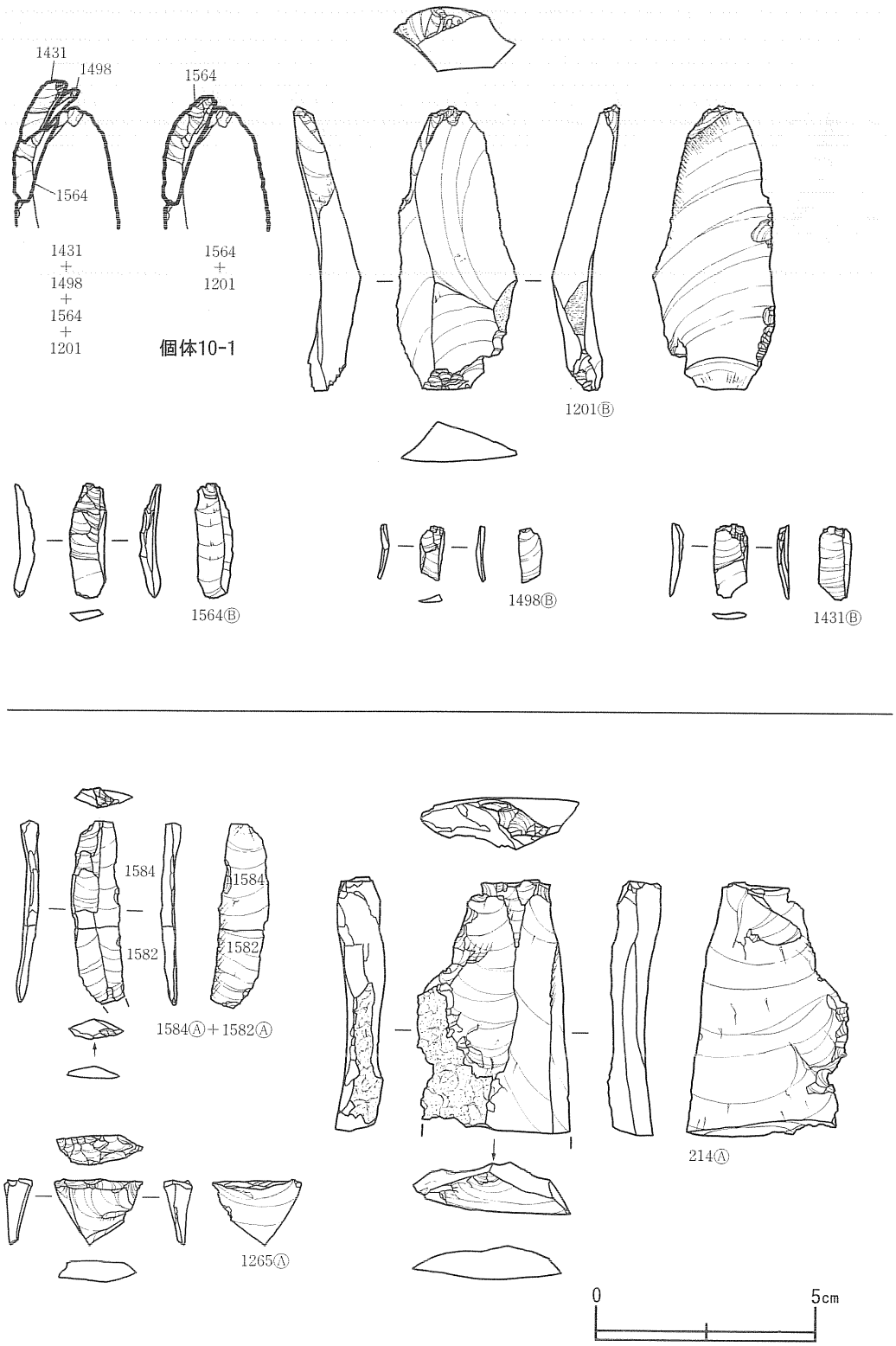
礫皮面は褐色の滑沢な面を呈し、内側はにぶい黄褐色を呈する珪質頁岩。微細な白色粒を含み、光沢が比較的弱いことで個体別資料２と区別される。縦長剥片を目的としての剥片剥離作業がおこなわれている。総数123点の資料がある。

個体12の資料はＡ、Ｂ、Ｃの各ブロックに分布する。Ａブロックでは86点、Ｂブロックでは28点、Ｃブロックでは８点が出土し、Ｃブロックには削器１点が含まれる。

ブロック間をまたぐ接合関係は個体12－１、12－２、12－８で認められる。個体12－１では礫皮面除去の剥片622＋693がＣブロックに、削器230を除く以後の剥離作業による剥片がＡブロックにある。個体12－２では礫皮面除去の剥片1652がＢブロックに、それ以後の剥片がＡブロックから出土している。個体12－８では礫端面除去の194がＣブロックで、それ以後の側面



第105図　個体10分布図

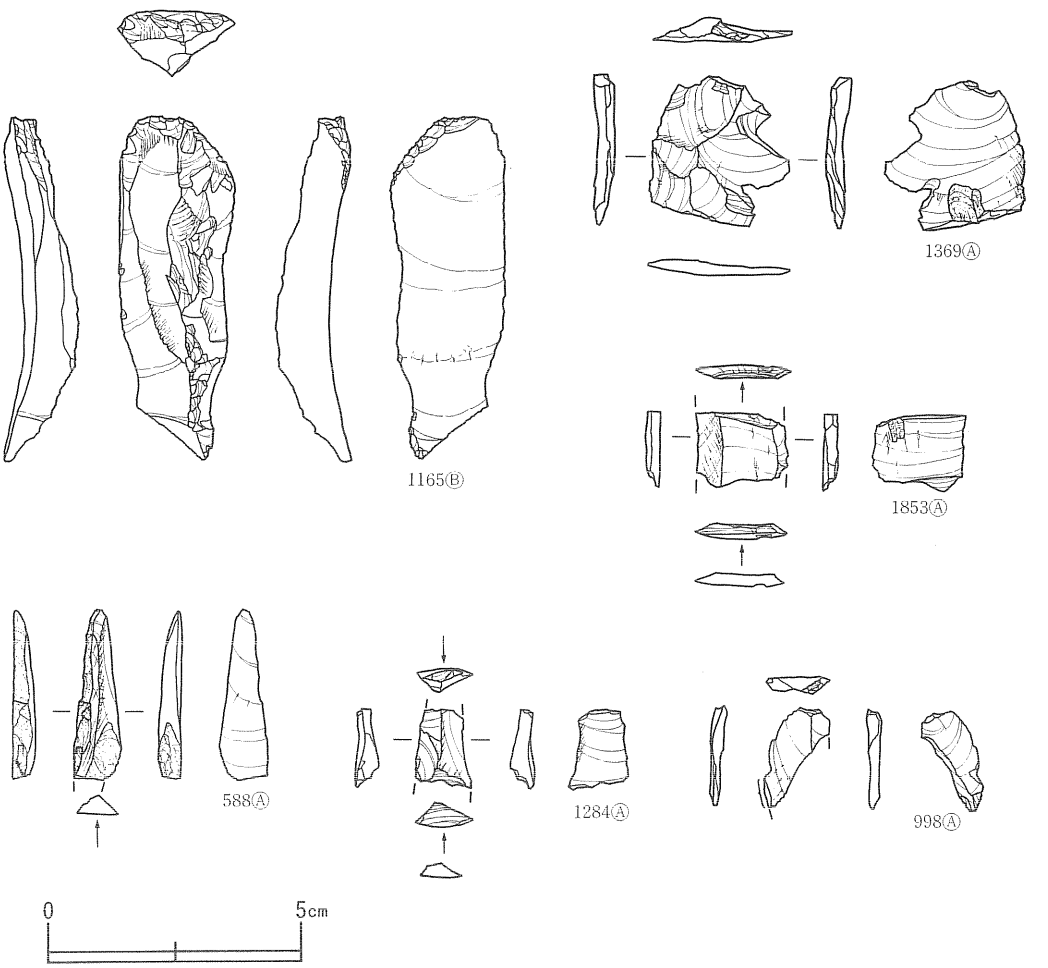


第106図　個体10－1接合図、個体10単独資料（1）

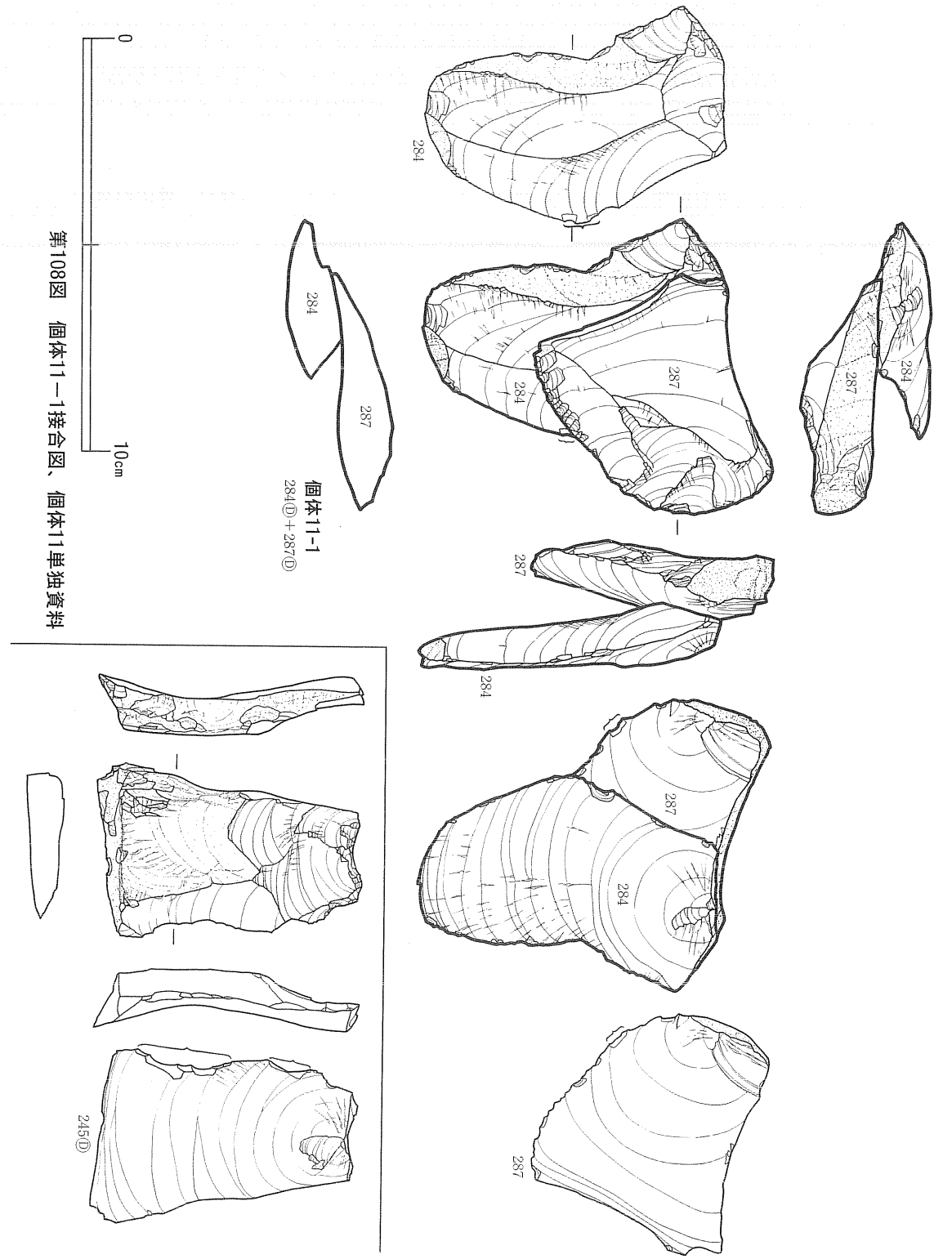
除去の剥片がＡブロックにある。単独資料中の礫皮面を残す比較的大形の剥片604、651、615がＣブロックにあることを考え併せると、個体12の剥片剥離作業はＢあるいはＣブロックからＡブロックへ石核を移動して行われたことが推定され、逆にＡブロックで製作された削器230はＣブロックへ搬出されている。

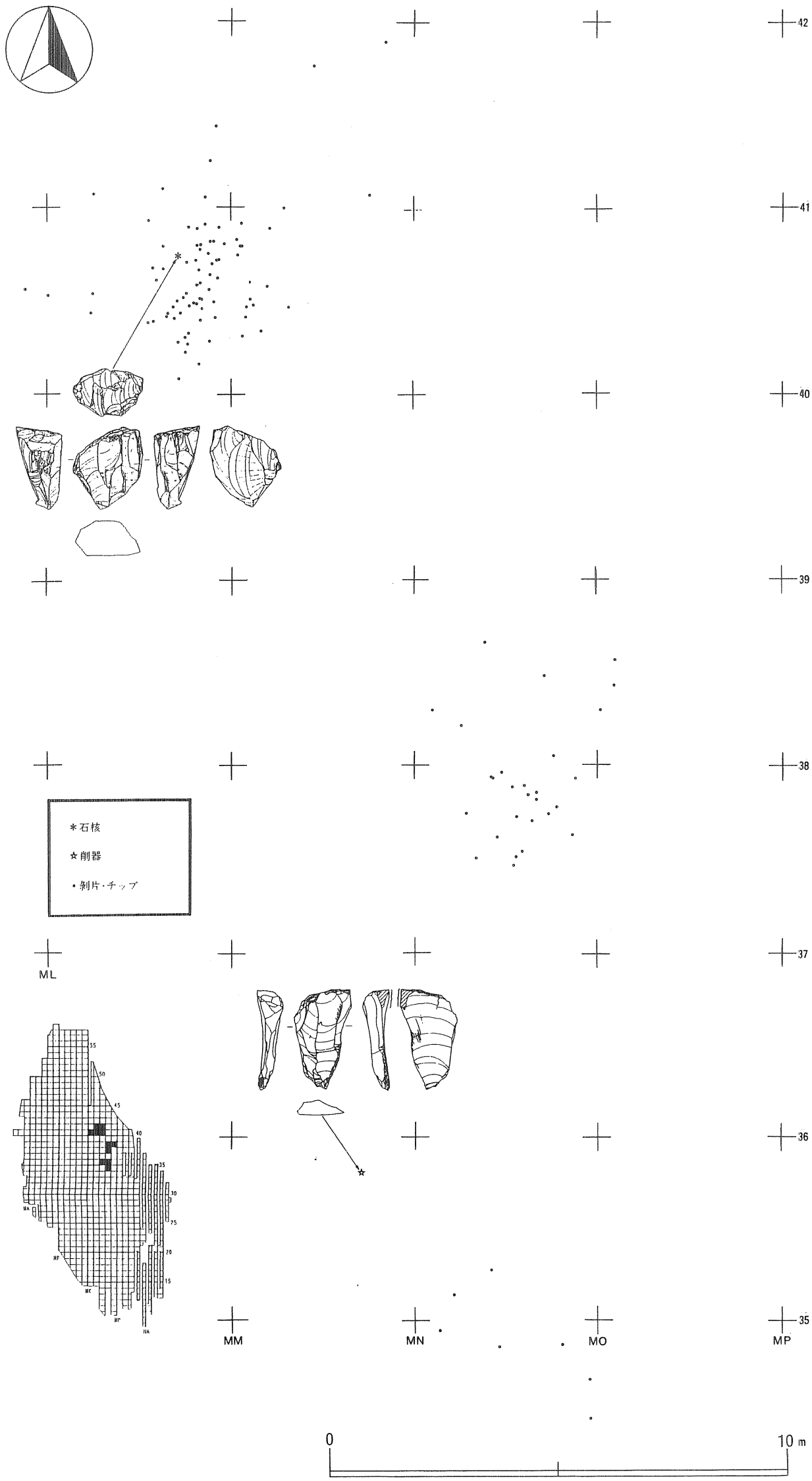
■個体12－１

楔形の残核545とそれに接合する１点の削器（230）、20点の剥片からなる資料。礫皮面は最終段階近くまで残されており、縦長剥片の剥離は基本的に礫皮面を背にした上設打面から行われている。ただし、掻器230の素材とそれに続く628（石核に残された剥離痕からは本来縦長剥片であったことが判別される）の剥離は下設打面から行われている。622＋693、502、1373、731、674、1719、1256、516、1726、1641の下設打面側に接合する一連の小剥片の剥離は、打面調整としての役割を果たしているほか、上設打面側にとっては下端部調整としても働いている。礫皮面の除去は525＋726＋○を剥離した段階で完了するが、同時に石核高は著しく減少し、以後の



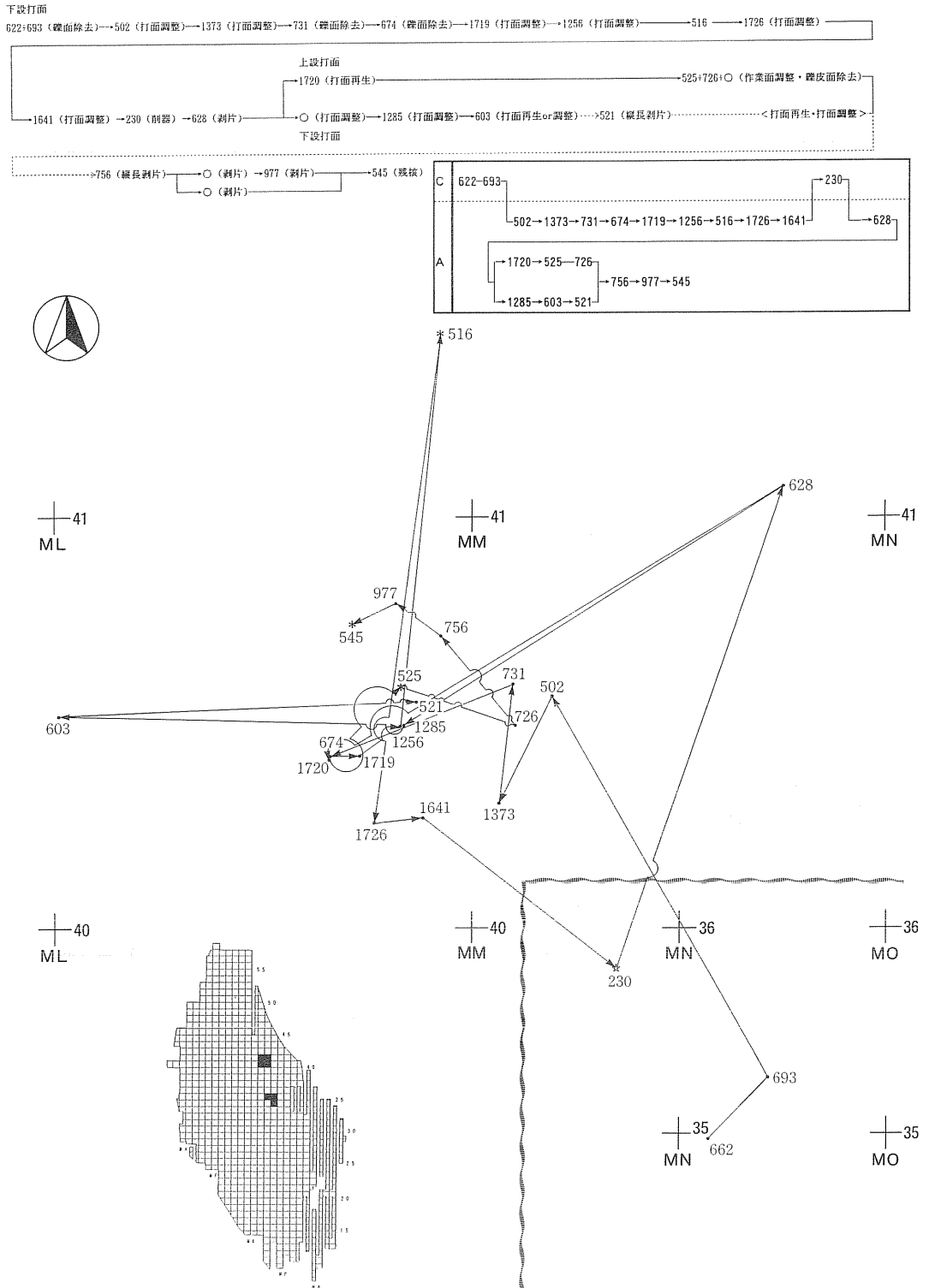
第107図　個体10単独資料（2）


284
287
284
287
284
287



第109図　個体12分布図

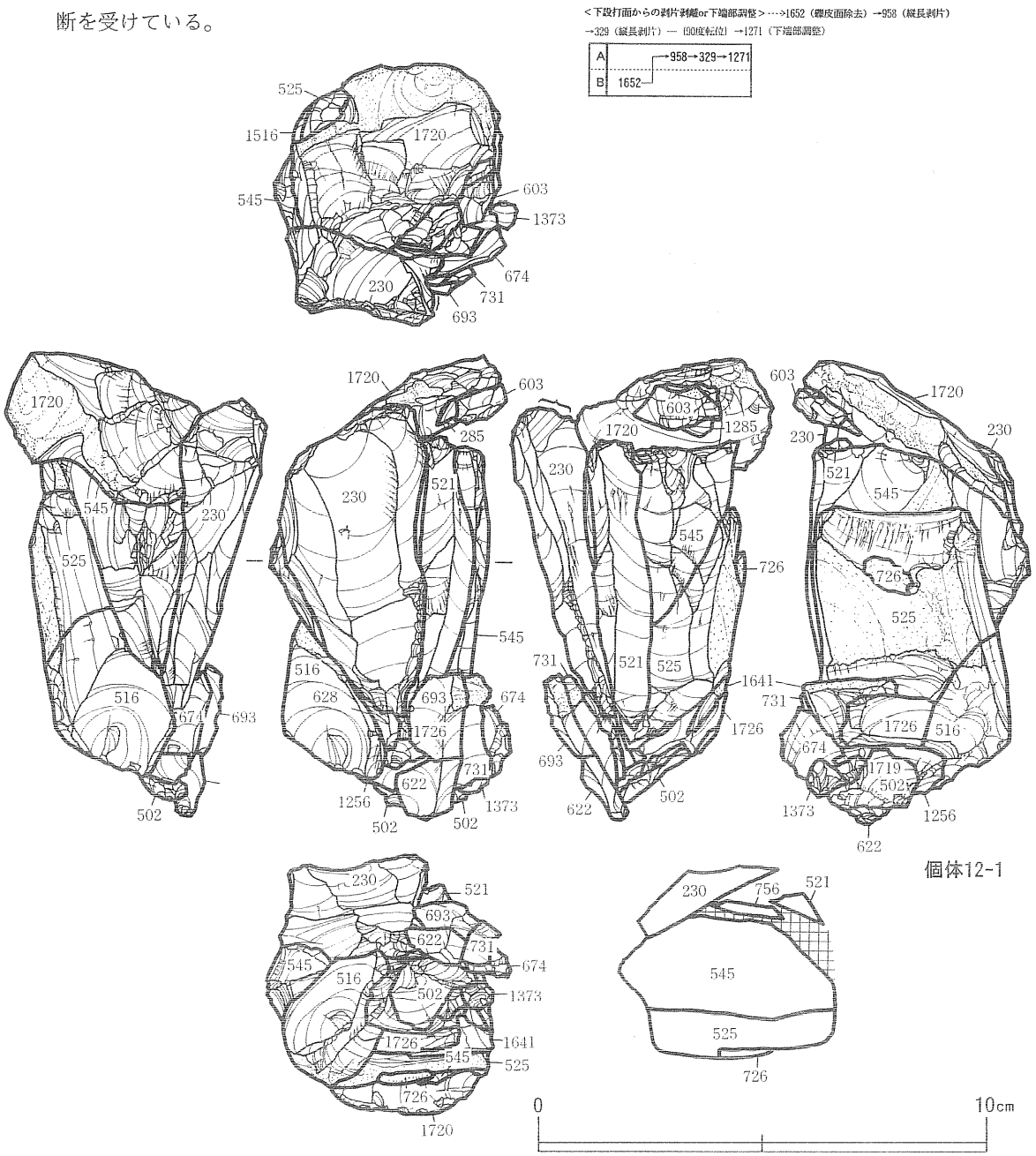
作業では数枚の比較的短い剥片がとられた後、残核として遺跡内に遺棄されている。



第110図　個体12－1接合関係図

■個体12－2

縦長剥片329と、それに接合する３点の剥片からなる。329の打面は調整打面であり、また、背面末端には逆方向からの剥離痕が６面認められるとともに、腹面にも逆方向からの小剥片1271が接合する。丹念に打面調整を行い、また下設打面側からの剥片の剥ぎ取り、あるいは石核下端部調整を顕著に行った資料である。礫皮面除去の剥片1652の後剥離された958は剥離後折断を受けている。



第111図　個体12－1接合図（1）

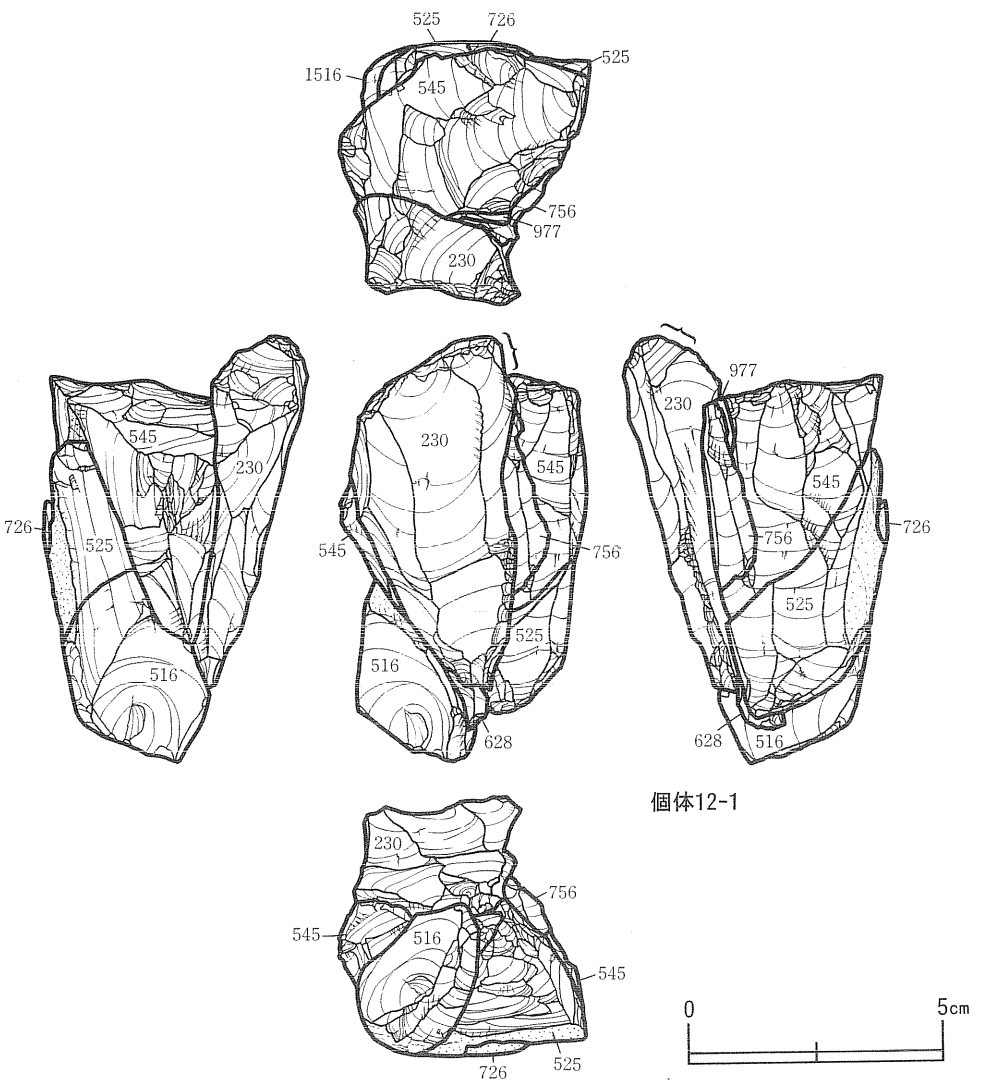
■個体12－８

剥片剥離作業の初期段階、礫皮面除去作業にかかる８点の剥片からなる資料。原礫上端を側方からの加撃によって194を剥離した後、1535、964、975＋947などの原礫側面を剥離している。1535、540、964、975の打面は調整打面であり、剥片剥離作業の初期段階から打面調整が加えられていることは個体１と同様である。

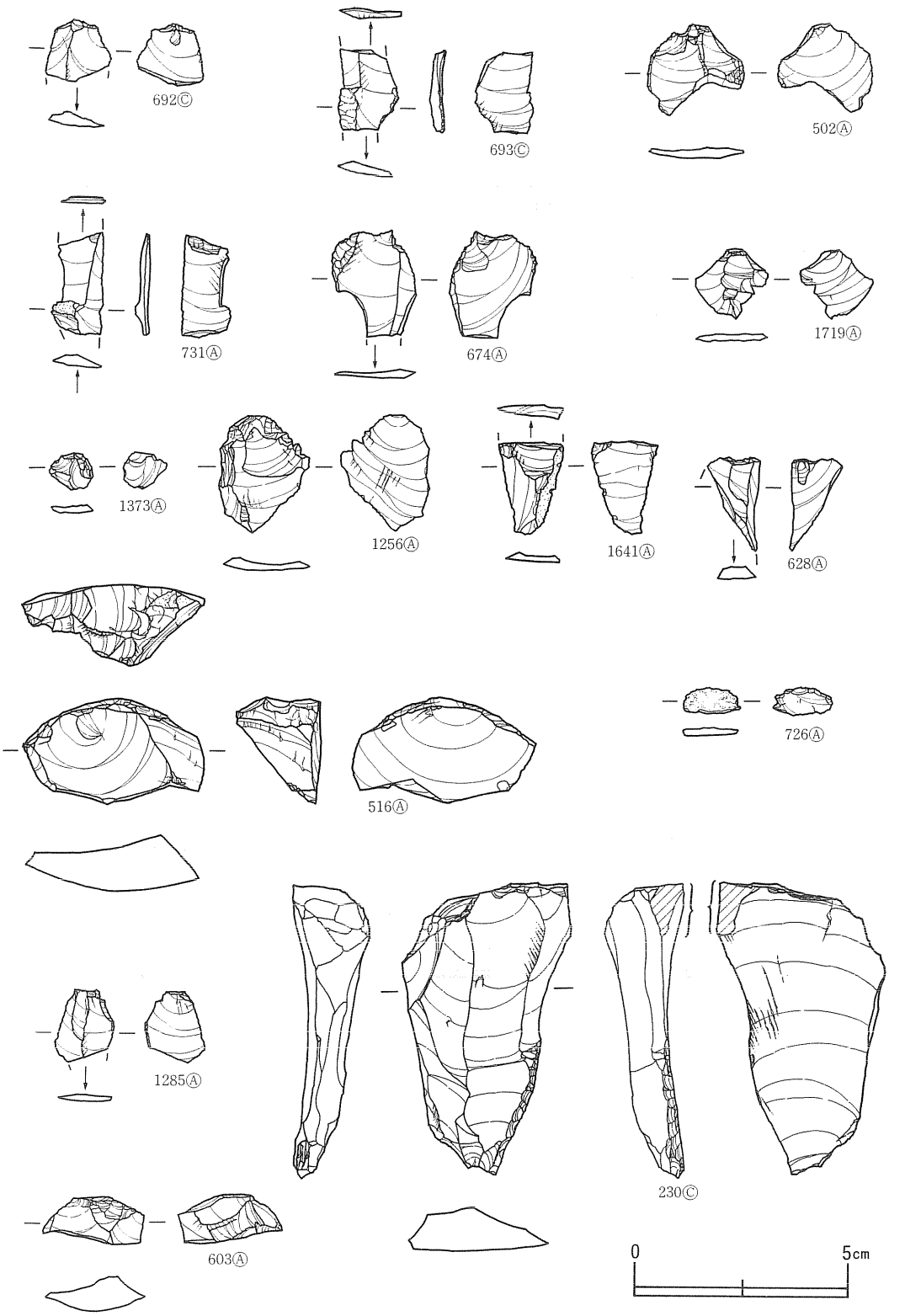
194（礫面除去）

1535（礫面除去）→964（礫面除去）→540（礫面除去）→1281（礫面除去）→975+947（礫面除去）→551（礫面除去）

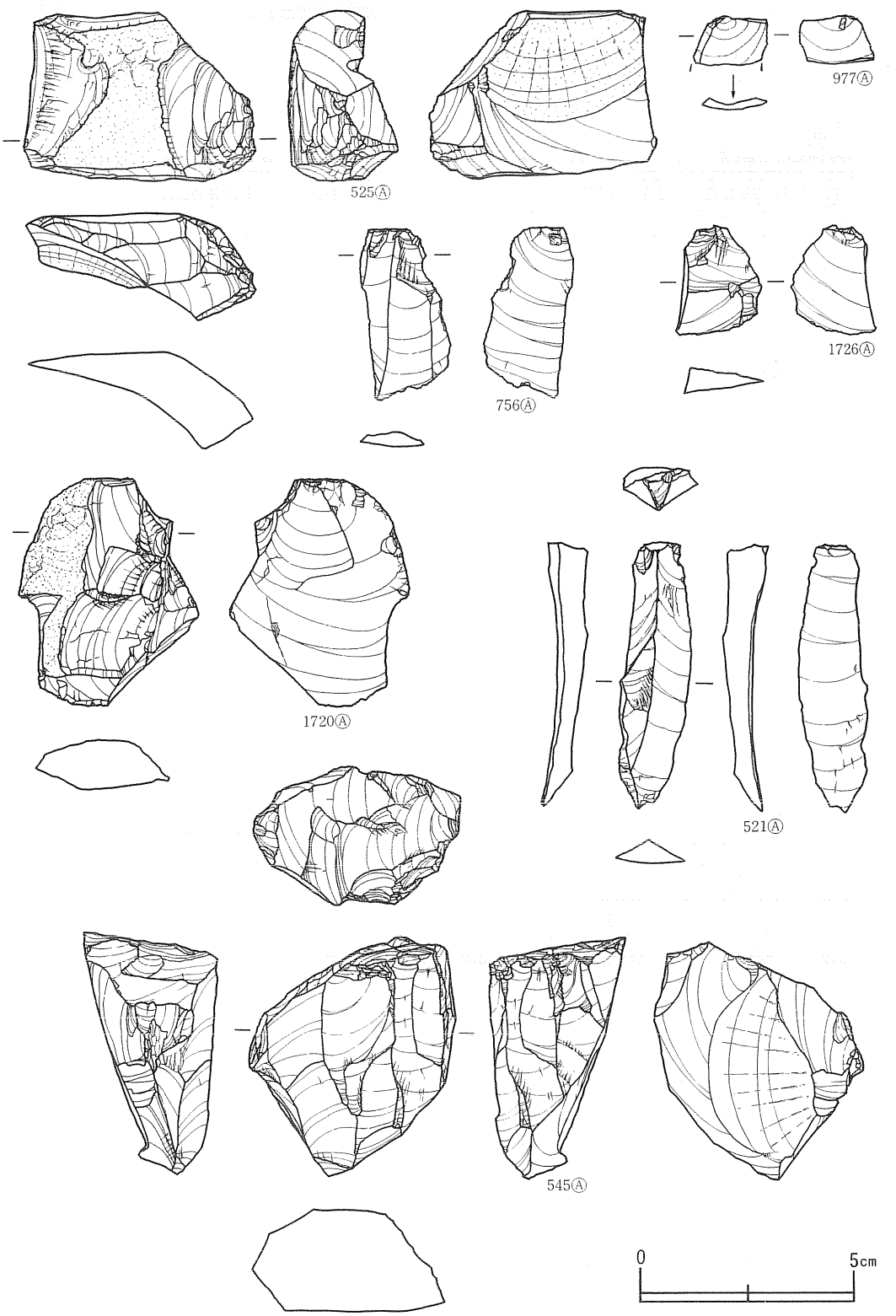
A	1535→964→540→1281→975—947→551
C	194



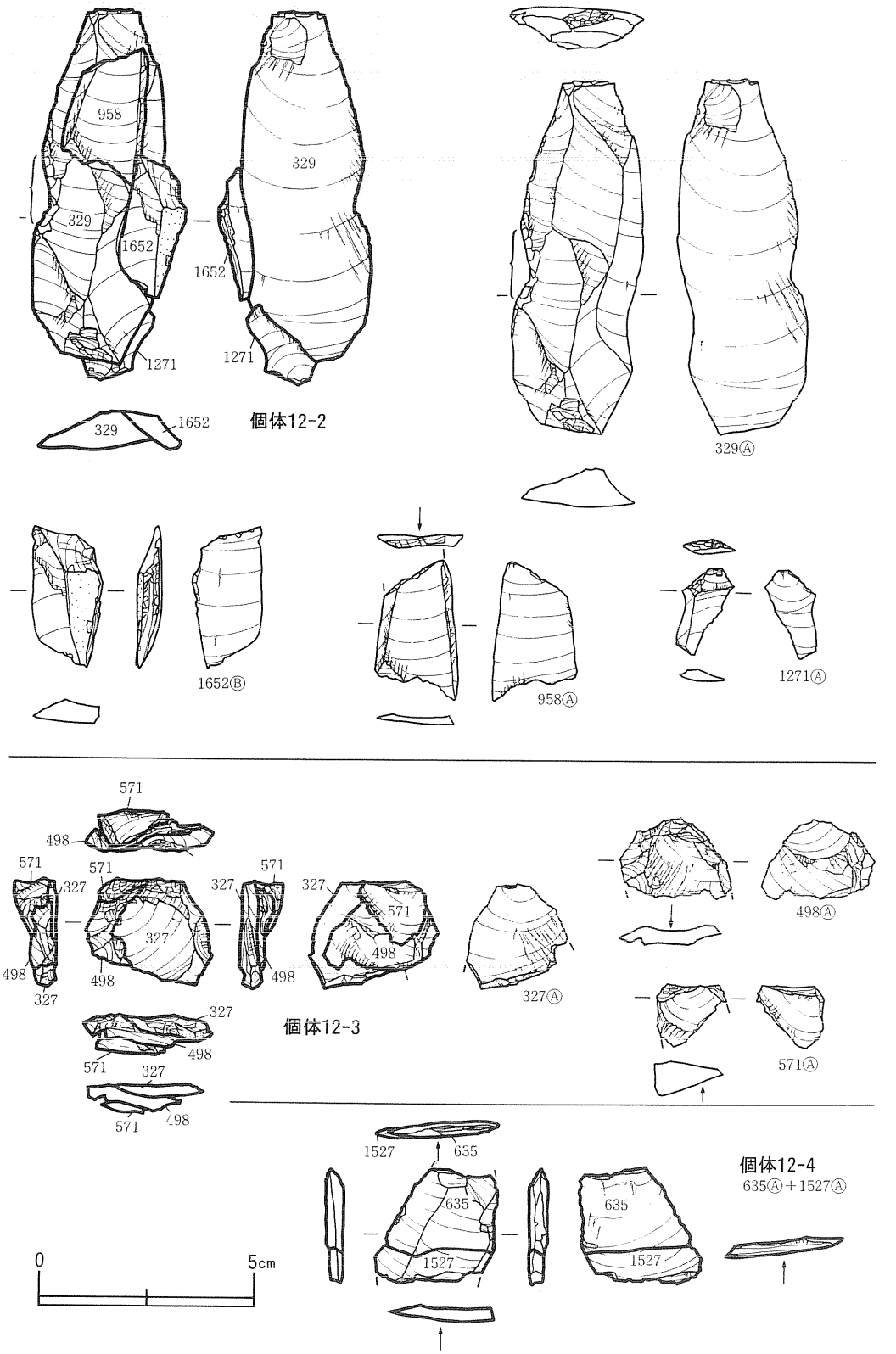
第112図　個体12－1接合図（2）



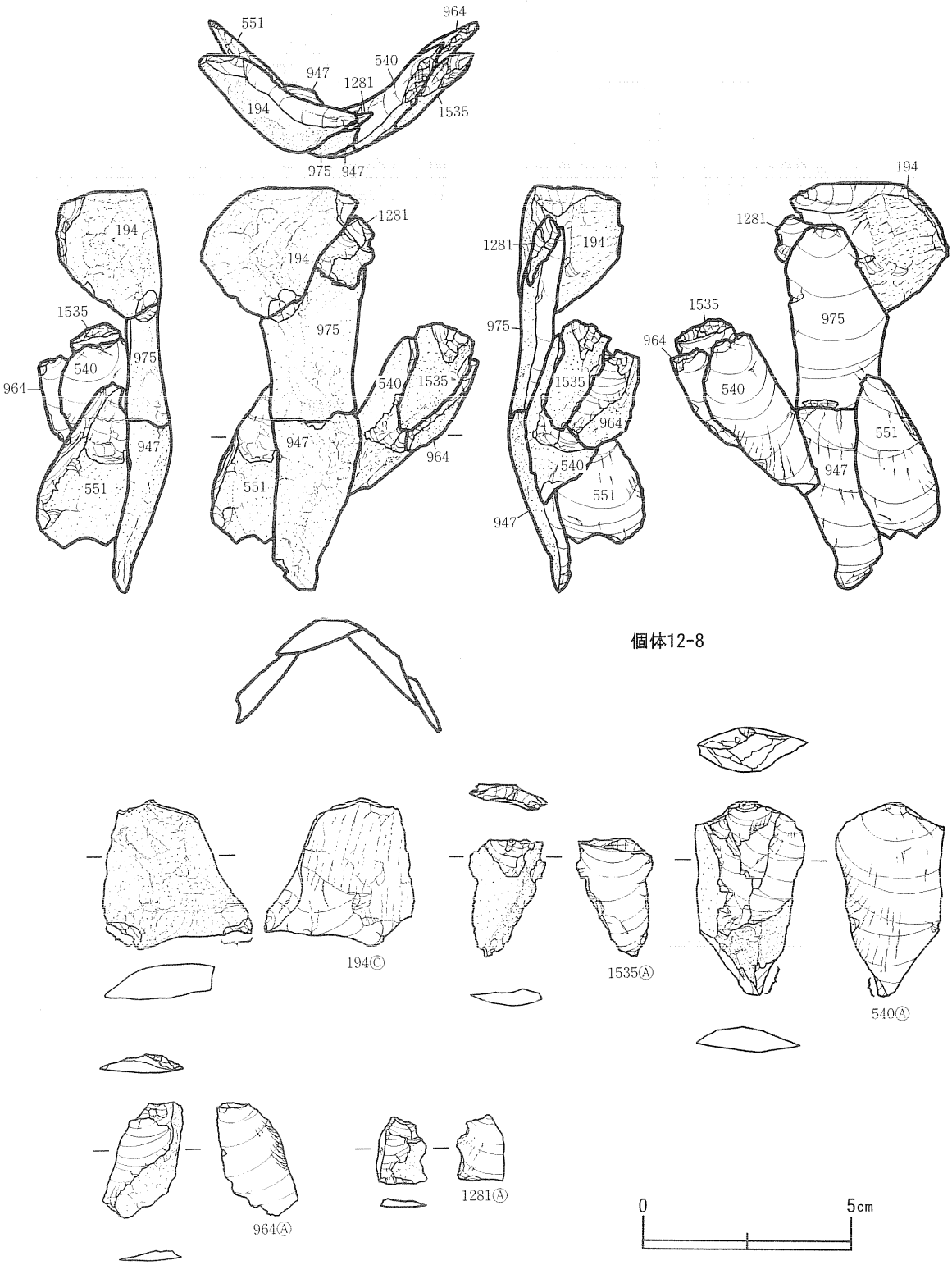
第113図　個体12ー1石器（1）



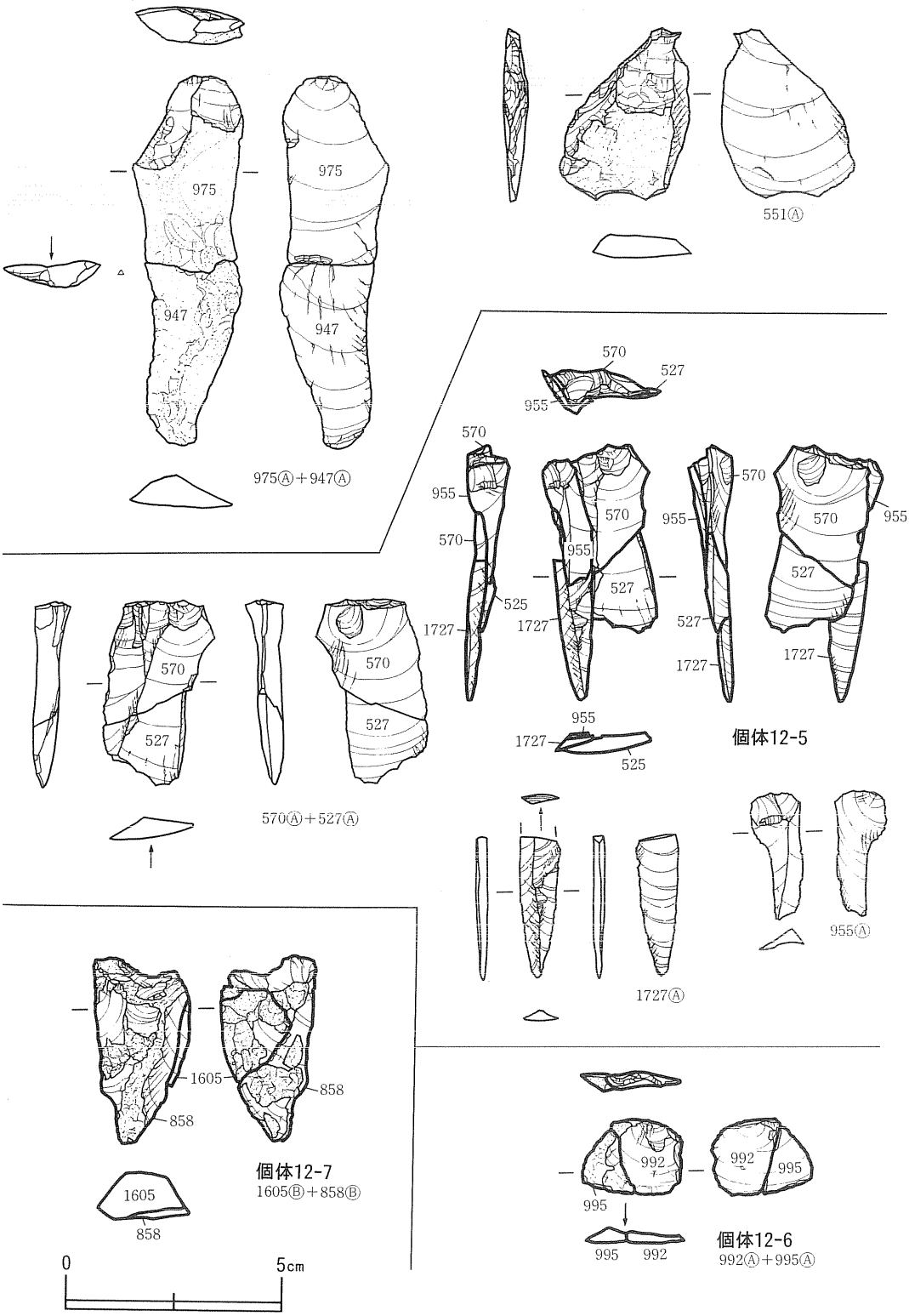
第114図　個体12－1石器（2）



第115図　個体12－2・12－3・12－4接合図・石器



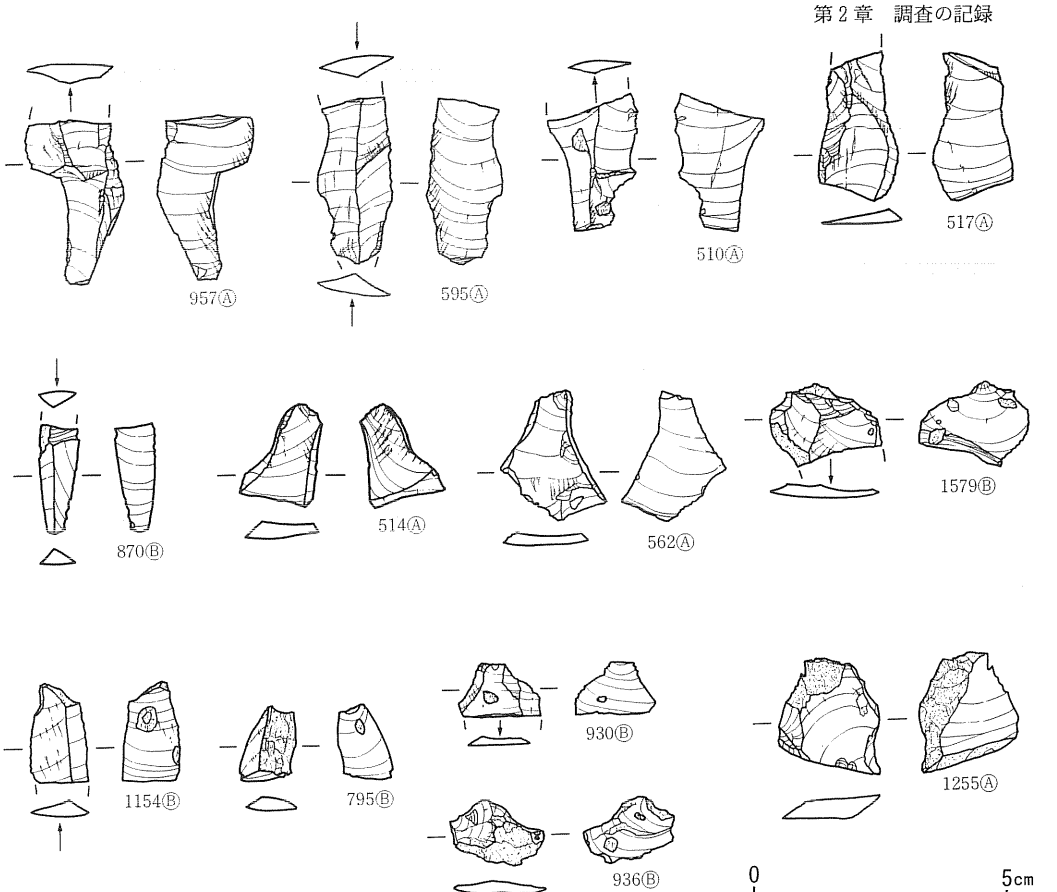
第116図　個体12ー8接合図・石器（1）



第117図　個体12－8石器（2）、個体12－5～12－7

第118図　個体12単独資料（1）

第119図　個体12単独資料（2）



第120図　個体12単独資料（3）

⑬　個体別資料13（第121図～第124図）

礫皮面は明黄褐色の滑沢面を呈し、内側はにぶい黄色から灰黄色を呈する珪質頁岩。接合資料はない。10点の資料があり、不定形の剥片９点と削器１点からなる。10点の資料のうち８点までが礫皮面を残した剥片として母岩から得られている。213、279、238、489、580や削器に加工された283などは不定形の分厚い剥片であり、そのほかの縦長剥片も石器長軸に対しての剥離軸が斜めになるなど、個体別資料４と共通した剥片剥離技術によって得られたものであることが理解される。

個体13の資料はＡ、Ｂ、Ｄの各ブロックとブロック外の３地点（ＭＪ26、ＭＨ32、ＭＫ40）に分布する。Ａブロック１点、Ｂブロック２点、Ｄブロック４点、ブロック外３地点各１点の内訳であり、削器283はＤブロックに含まれる。

⑭　個体別資料14（第125図、第126図）

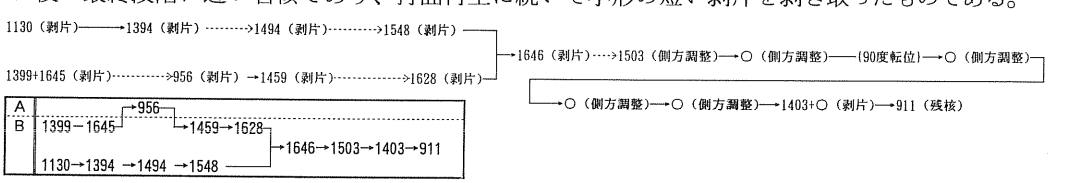
礫皮面は灰黄褐色の皺状を呈し、内部はにぶい黄褐色を呈する珪質頁岩。黒色の微細粒を含むが全体に緻密である。石核１点と接合する剥片12点の13点の資料からなる。遺跡内には分割

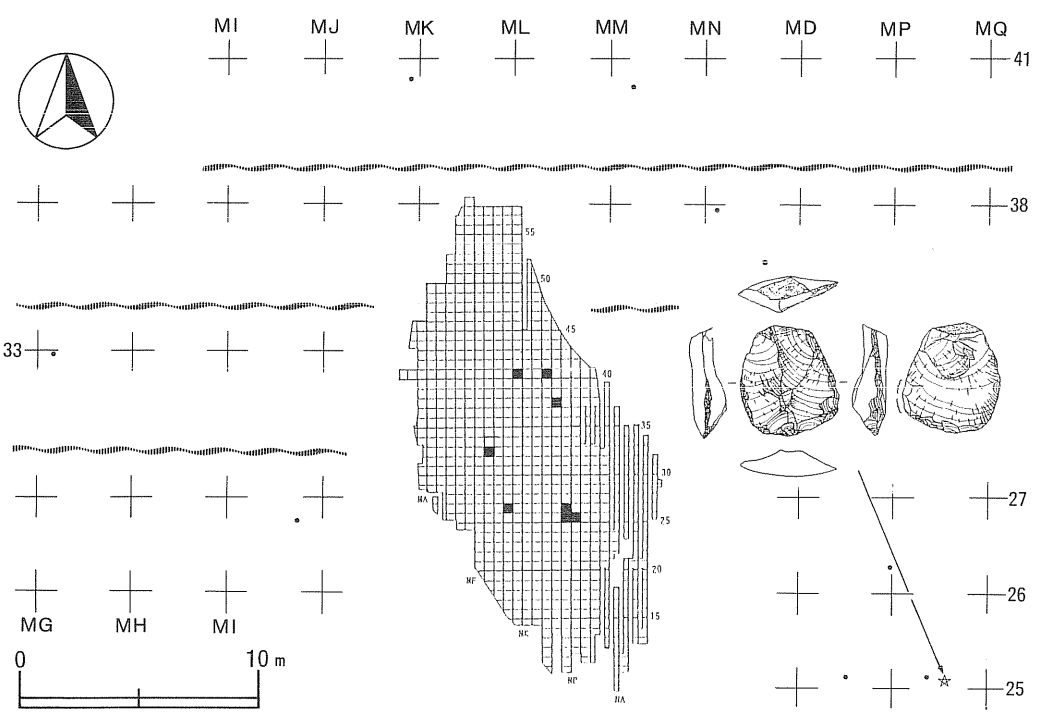
され、縦長剥片をある程度剥ぎ取った段階の石核として持ち込まれ、ごく短い剥片を少量得た後、遺跡内に残置された資料である。

接合はA、Bブロック間で認められるが、剥片剥離作業はBブロックで行われ、Aブロックへは本資料内にあって比較的大形の剥片956が搬出されている。

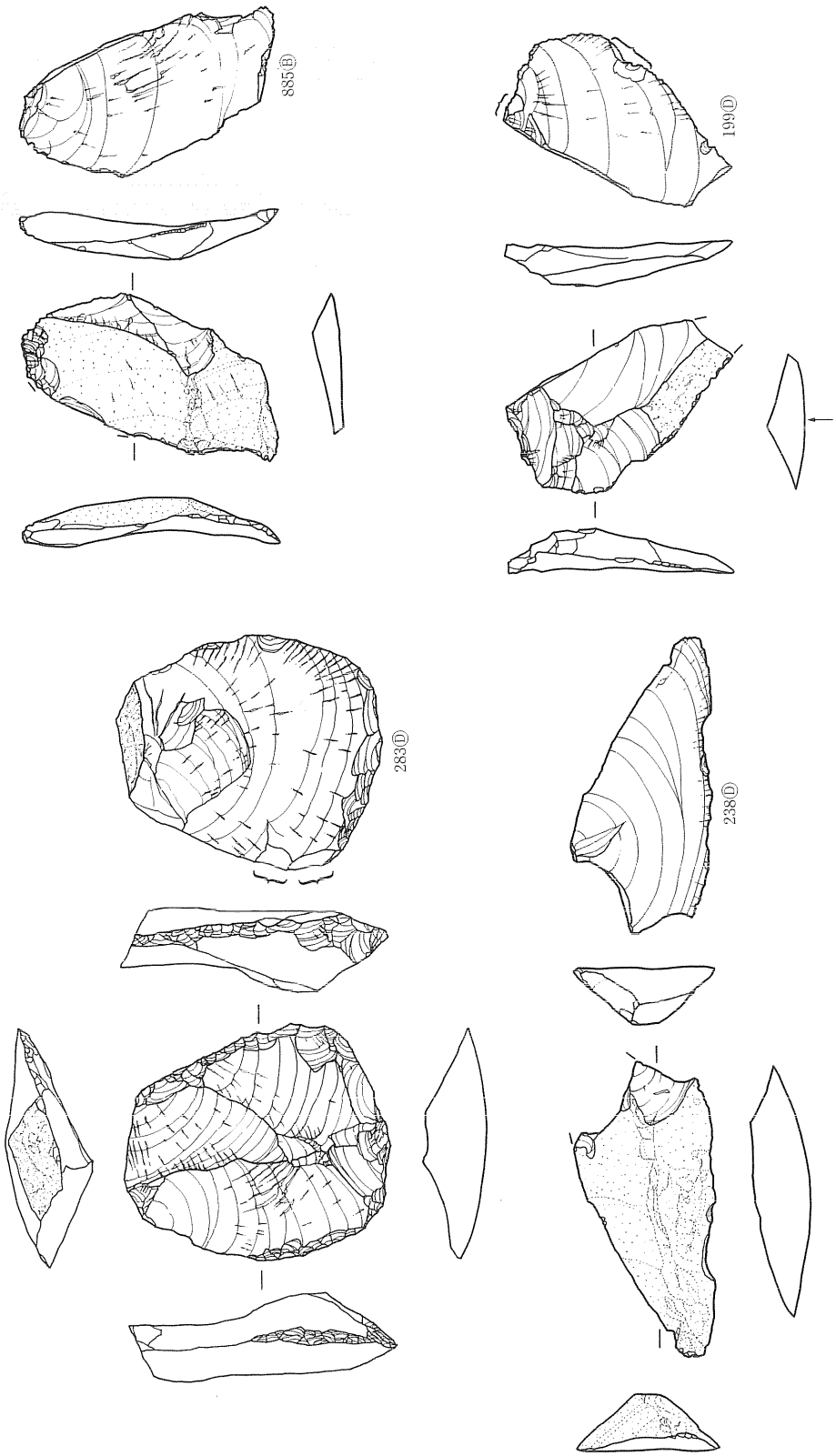
■個体14－1

礫皮面が残る残核911とそれに接合する剥片12点の楔形の石核資料である。剥片の剥離は1503の側方調整およびそれに後続して行われた作業面調整の剥離を除いて、総て上設打面から行われている。打面は平坦打面であり、打面調整は1934の打点周辺で数回行われているのみである。本資料の段階で残核に接合している剥片の長さは最長の956でも石核高の1／2強までしかなく、比較的短い剥片を礫皮面を背にして交互に連続的に剥離している。1399+1645、1130、1628、1494、1459、1646は末端がヒンジフラクチュア気味に終わり、また、1399+1645、1130、1494は折断されている。石核下部に残る剥離痕から、本資料は大～中形の縦長剥片を剥ぎ取った後の最終段階に近い石核であり、打面再生に続いて小形の短い剥片を剥ぎ取ったものである。

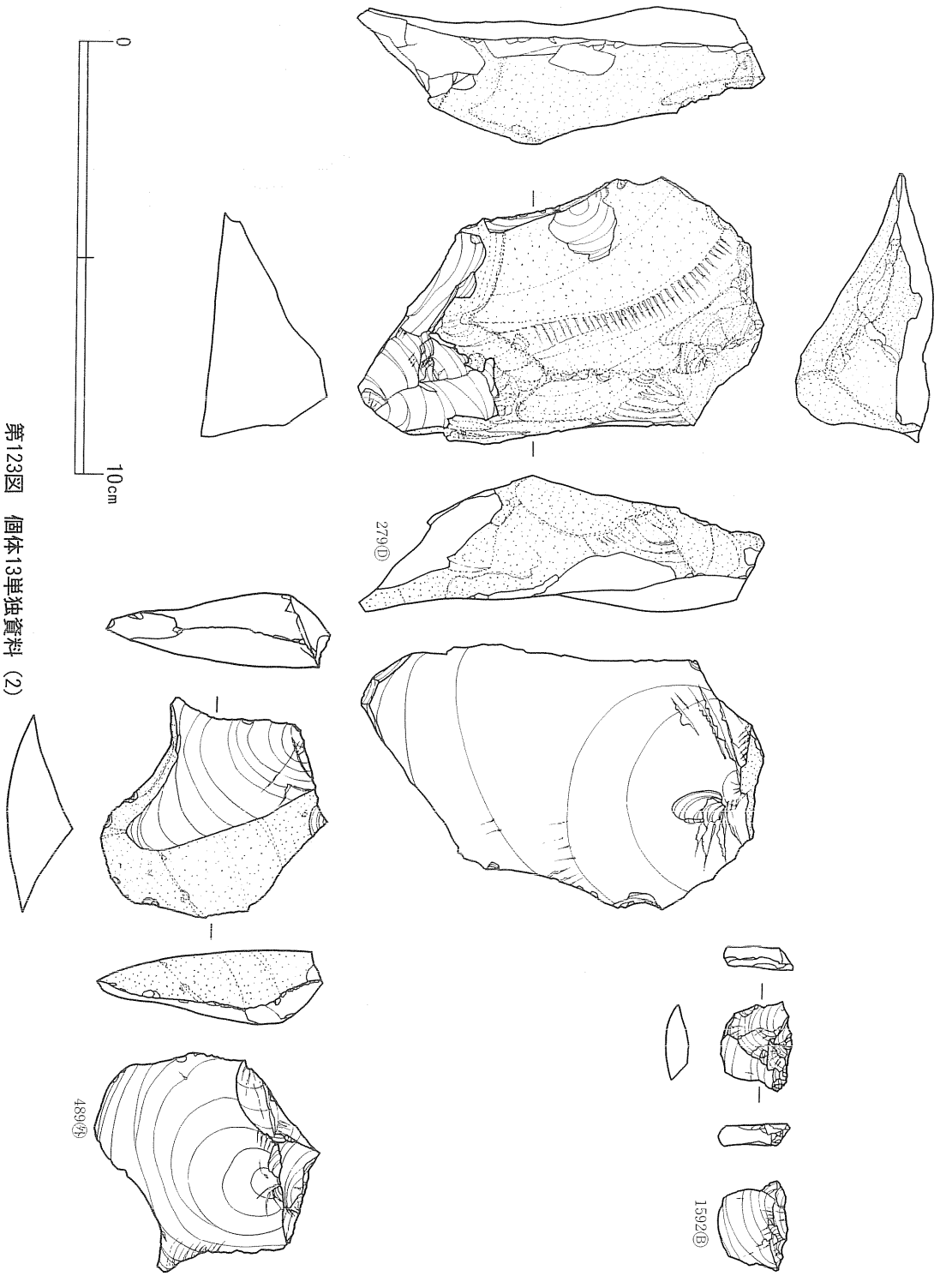




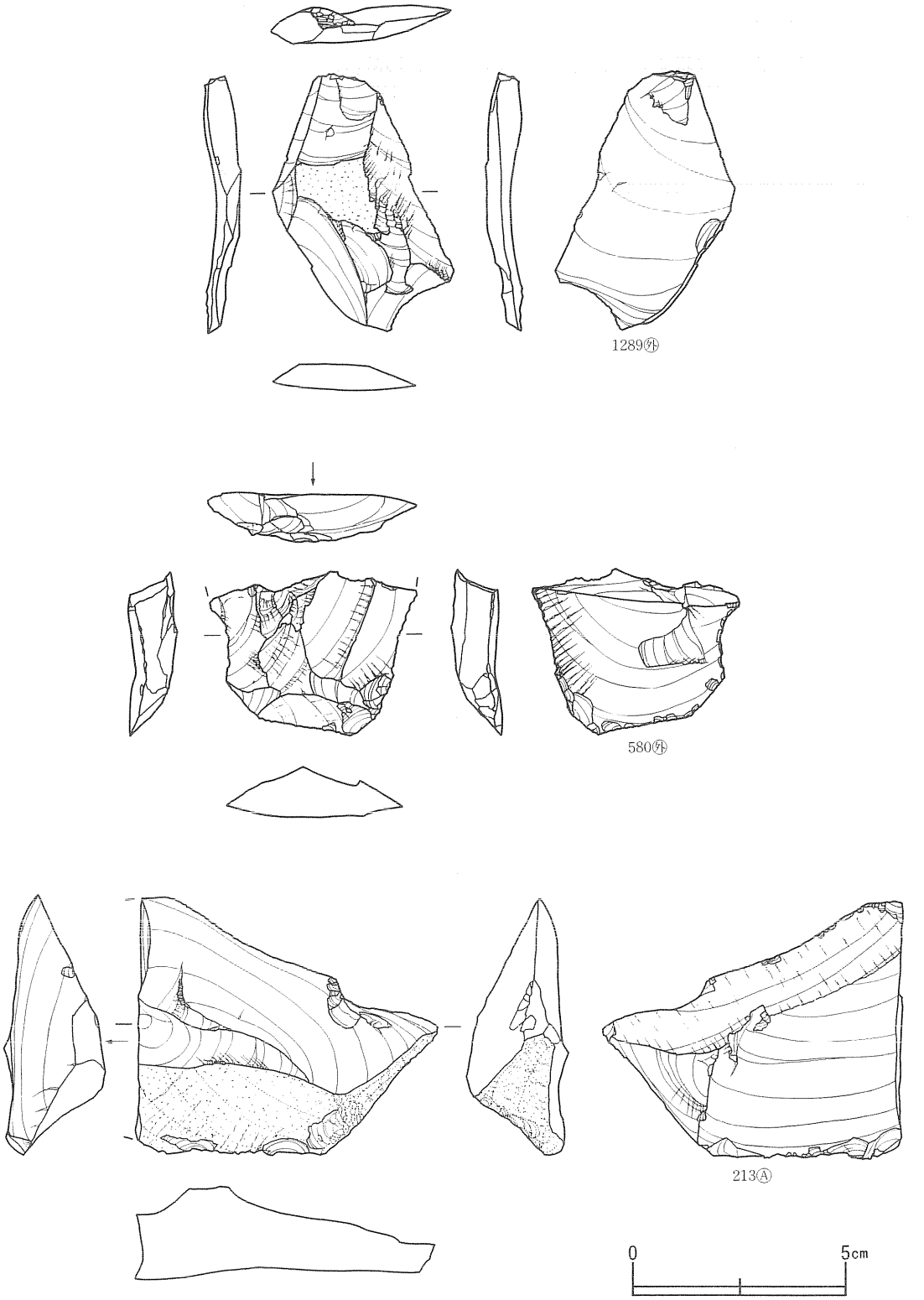
第121図　個体13分布図



第122図　個体13単独資料（1）



第123図　個体13単独資料（2）



第124図　個体13単独資料（3）

⑮　個体別資料15（第127図）

灰白色の緻密で光沢をもつ珪質頁岩。幅広の不定形剥片３点からなる。接合資料は含まれておらず、ブロック外の２地点（ＭＱ28、ＭＫ43）で出土した。

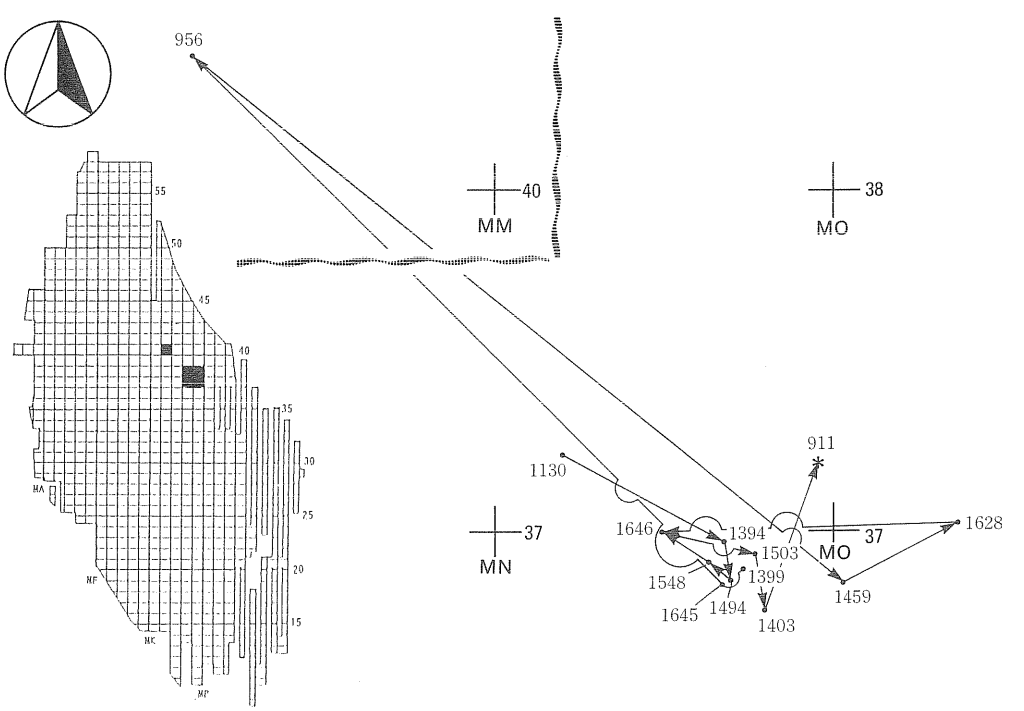
⑯　個体別資料16（第127図）

にぶい黄褐色を呈する緻密な珪質頁岩。縦長剥片を剥ぎ取った円盤状の石核１点である。石核の下端部稜は一線に揃い、またその両面に微細な剥離痕も認められる。Ａブロックで出土。

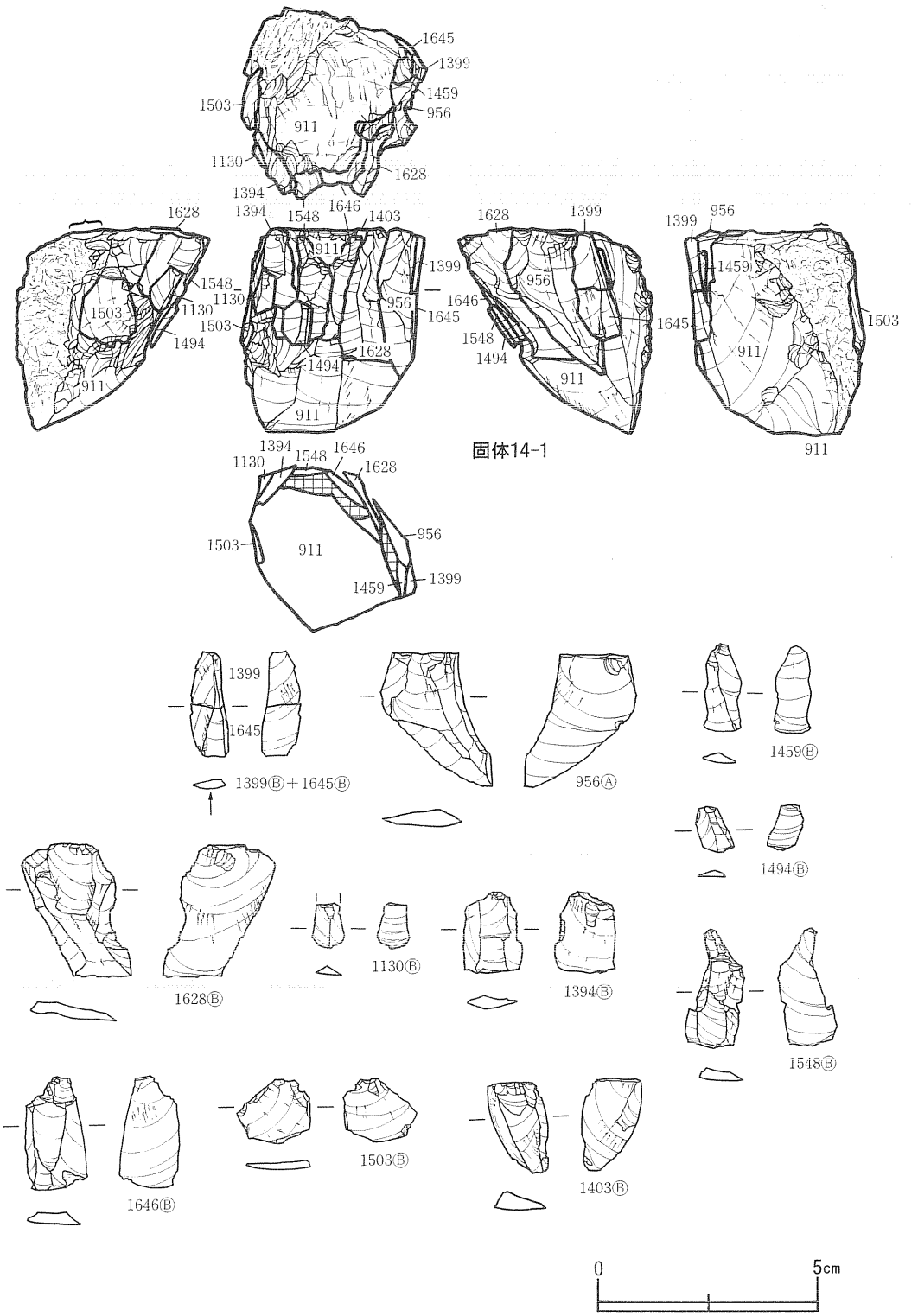
⑰　個体別資料17（第128図～第134図）

礫皮面はにぶい橙色を呈する滑沢面を呈し、芯に近くはにぶい褐色を呈する珪質頁岩である。総数47点の資料がある。白色粒を含み剥離面には放射状裂痕が多く認められるが、概して緻密・均質な素材である。遺跡内には個体17－１から推定されるおよそ10㎝×10㎝×８㎝の亜角礫の状態で持ち込まれ、縦長剥片を目的としての剥片剥離作業が行われているが、折断剥片以外に製作された石器はない。

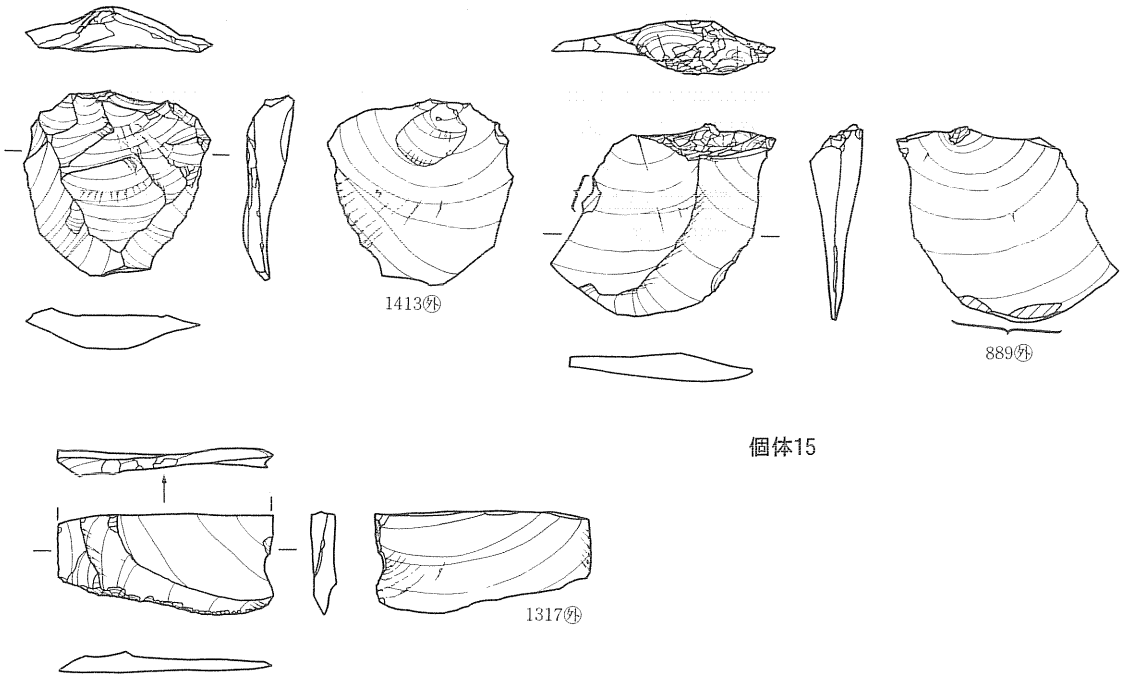
個体17の分布はＡブロック内に限られ、個体17－１の接合関係もＡブロック内で完結するが、大形の縦長剥片483と石核下端部調整剥片234はブロック周縁部であるＭＭ39西側およびＭＮ40東側で出土している。

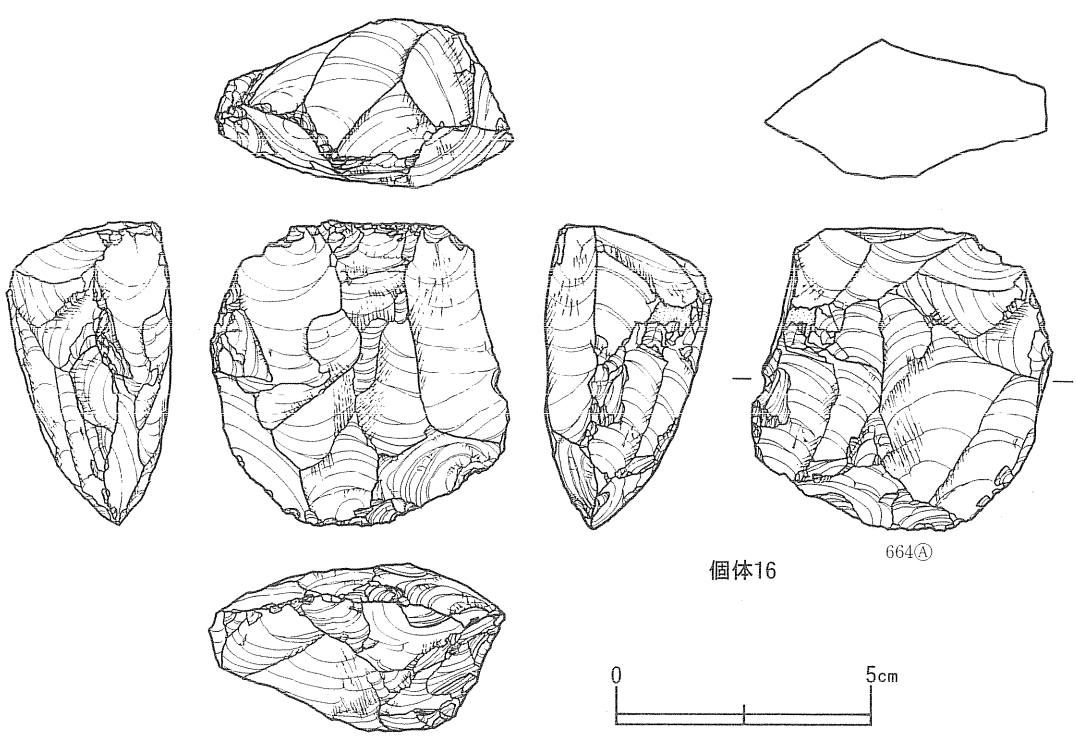


第125図　個体14－1接合関係図



第126図　個体14－1接合図・石器

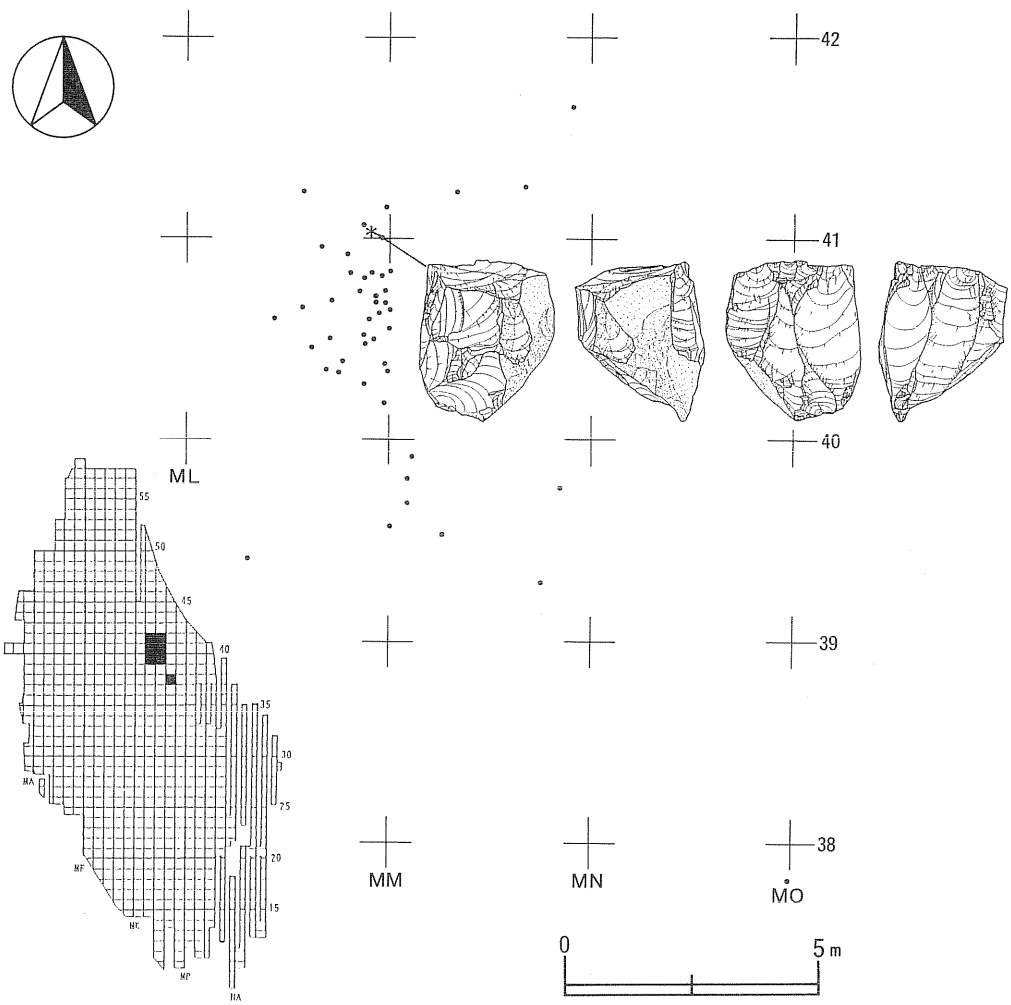




第127図　個体15、個体16

■個体17－１

剝片26点、残核１点からなる資料。原礫の表面は一部を残して除かれ、残った礫皮面を背にし基本的に上設打面から縦長剝片が剝ぎ取られている。1258によって打面を再生し、打面調整を施して上設打面から縦長剝片を数枚取った後、再び打面再生を行ってさらに数枚の縦長剝片を剝ぎ取っている。その後、打面を転位して234、1267、973＋967を剝ぎ取るが、これは次の段階で下設打面から縦長剝片が数枚取られているため、上設側にとっての石核下端部調整であるとともに下設打面では打面調整ともなっている。



第128図　個体17分布図

鴨子台遺跡

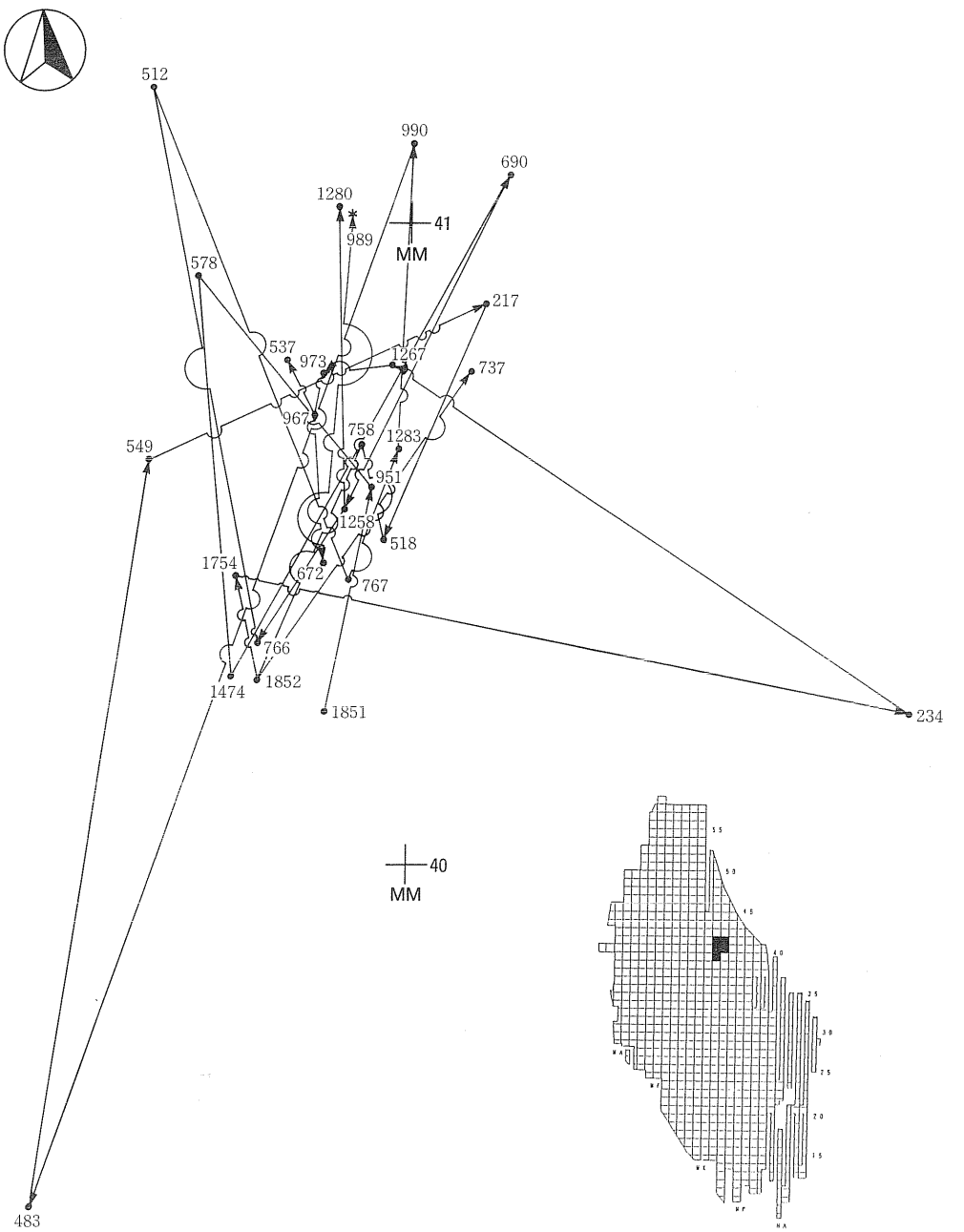
上設打面

1851（礫面除去）→○（礫面除去）→951+578+1474（礫面除去・剥片）→690（打面調整）→1258（打面再生）→1280（礫面除去）
→766+512+767（作業面調整）→○（打面調整）→○（打面調整）→○（縦長剥片）→○（縦長剥片）→○（縦長剥片）→1283（剥片）→990（剥片）→＜打面調整複数回＞→483（作業面調整）→549（打面調整）→＜打面調整複数回＞→217（作業面調整）→518+758+1852（打面再生）→1754（縦長剥片）→＜縦長剥片数枚剥取＞→{180度転位}→
→737（剥片）

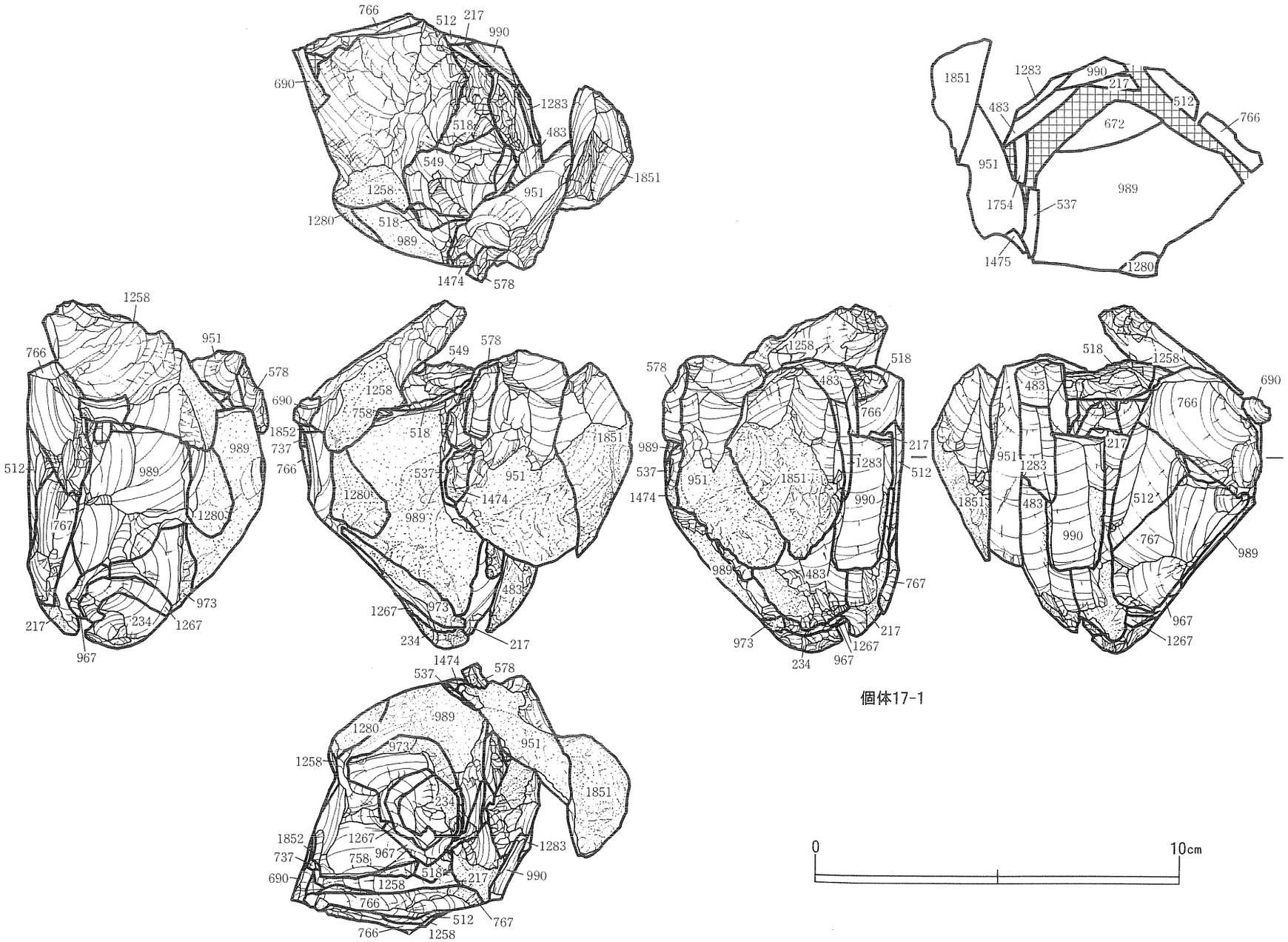
下設打面

→234（下端部調整）→1267（下端部調整）→○（下端部調整）→973+967（下端部調整）→○（縦長剥片）→○（縦長剥片）→○（縦長剥片）→○（剥片）→{180度転位}→672（剥片）
→537（縦長剥片）

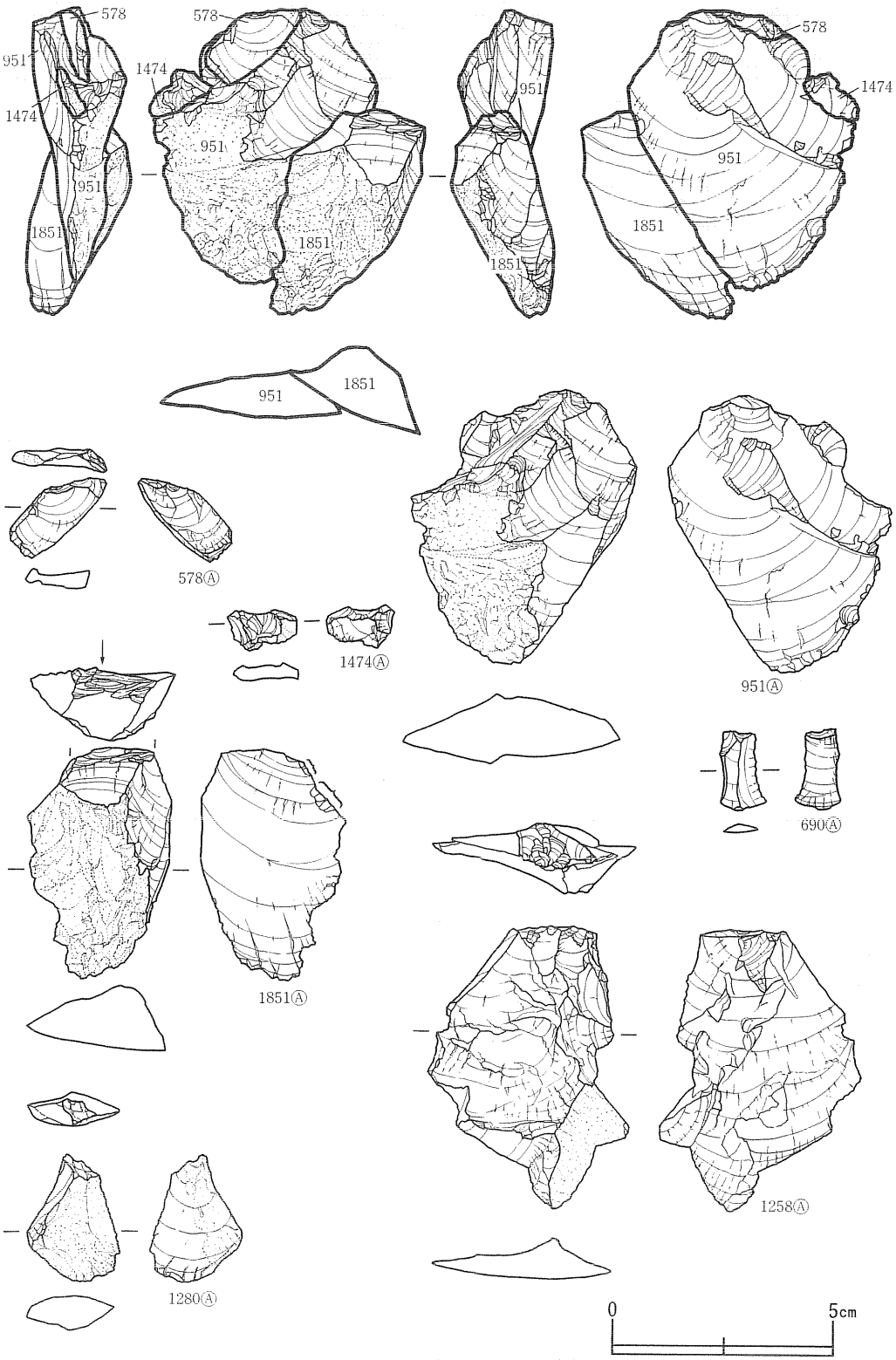
→989（残核）



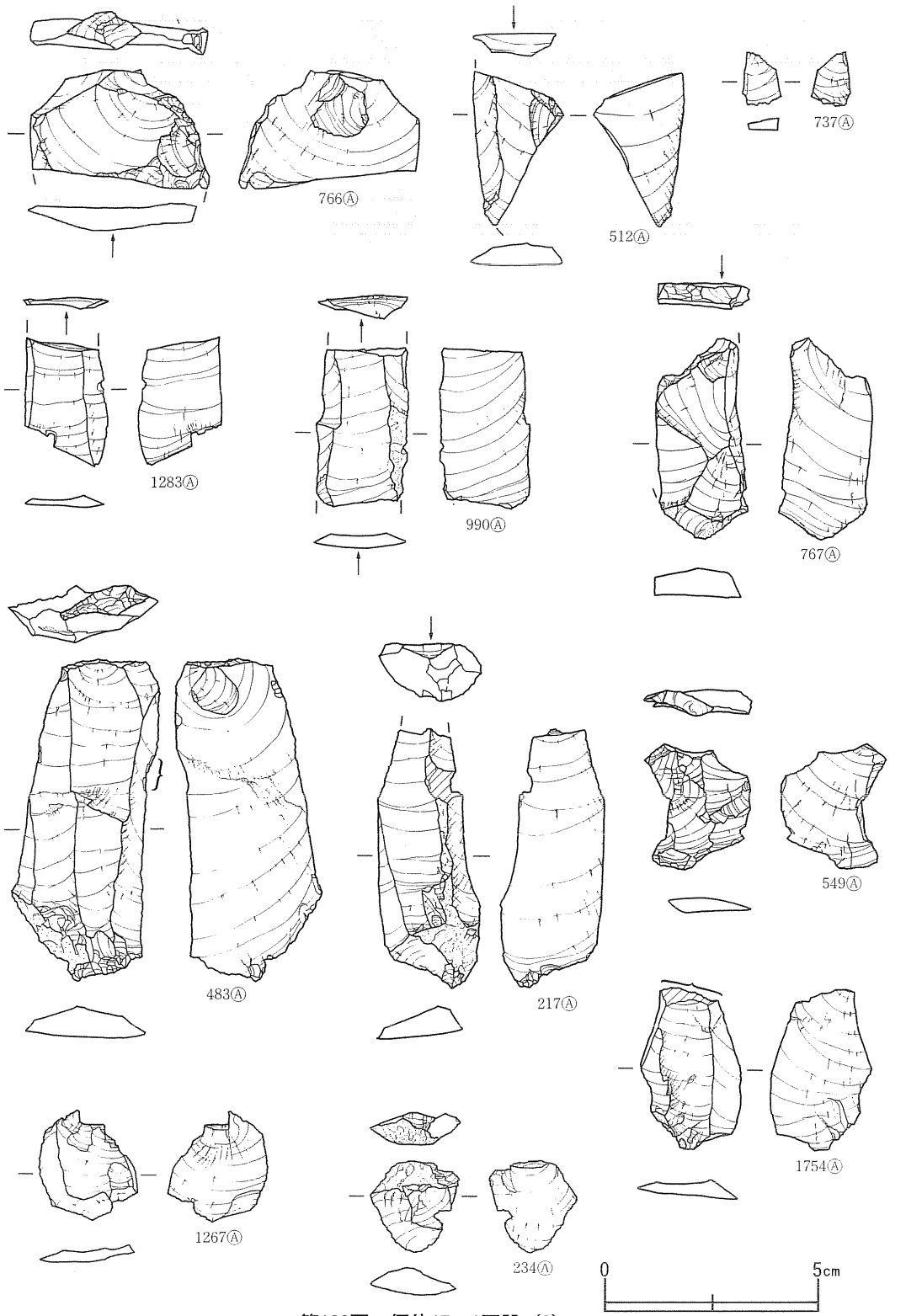
第129図　個体17－1接合関係図



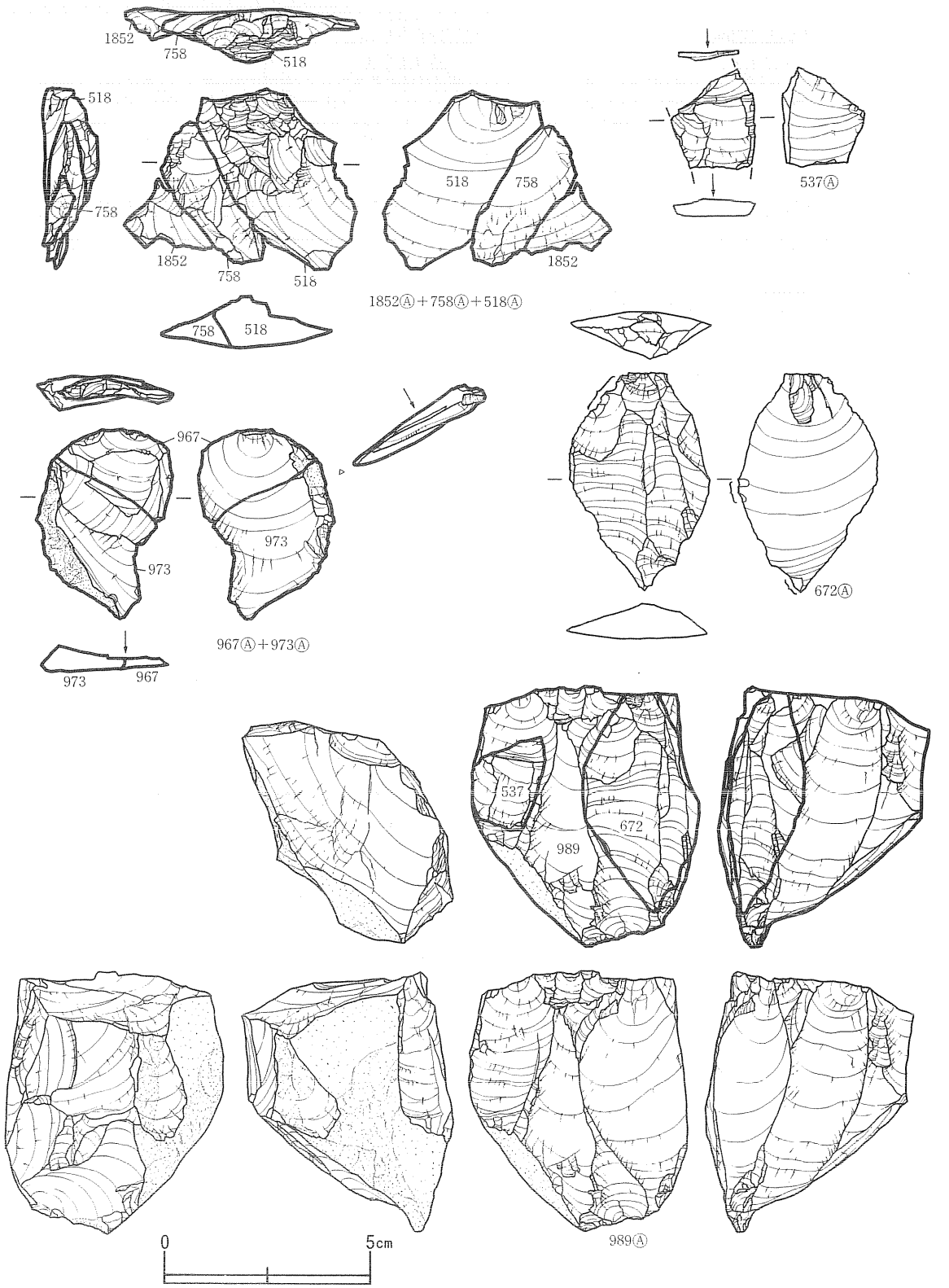
第130図　個体17－1接合図



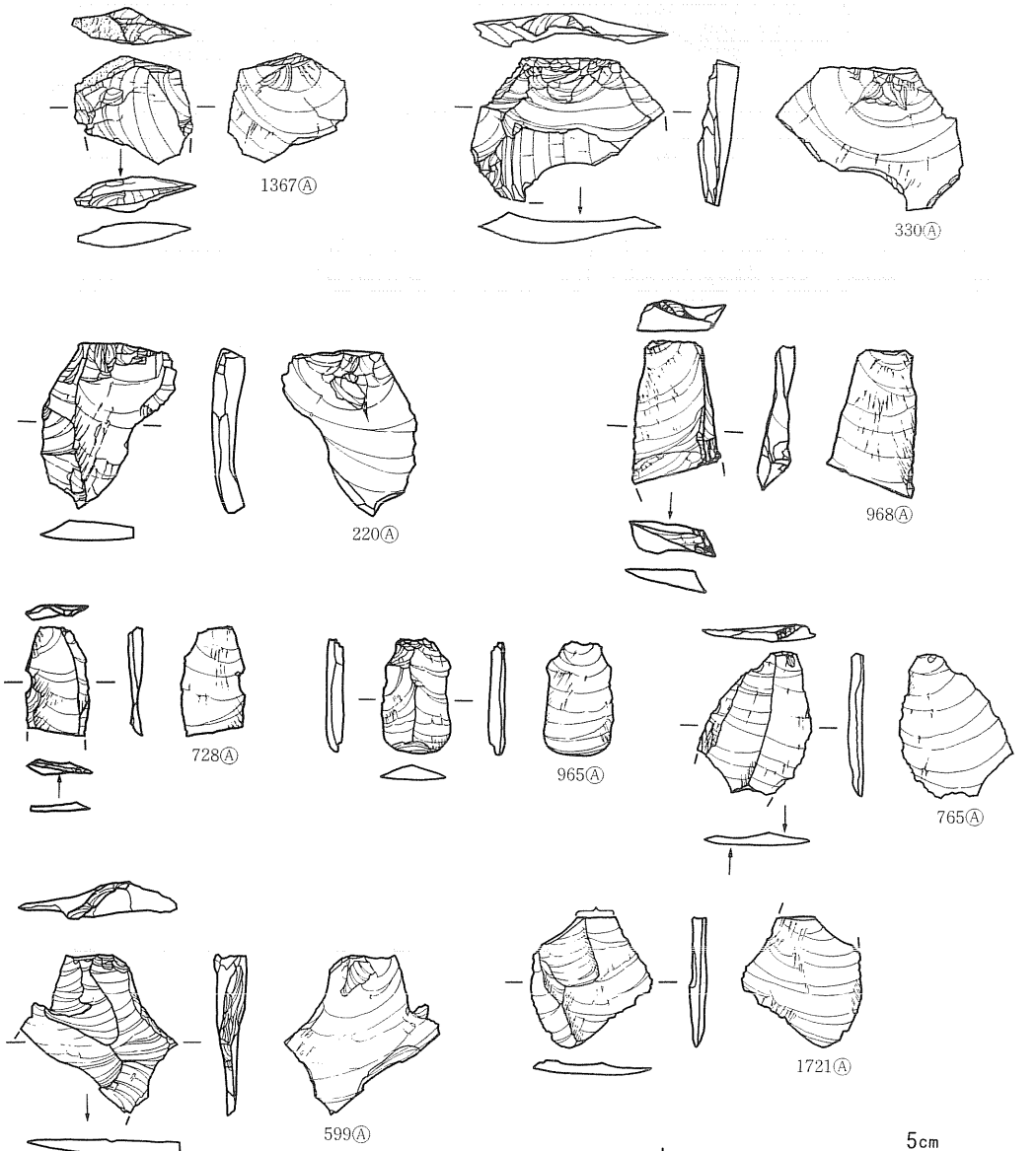
第131図　個体17－1石器（1）



第132図　個体17－1石器（2）



第133図　個体17－1石器（3）



第134図　個体17単独資料

⑱　個体別資料18（第135図）

半透明の中に黒色の斑文をもった黒曜石製の削片１点である。縦割れし、腹面側打点近くにも剝離した凹面が認められる。Ｂブロックからの出土である。

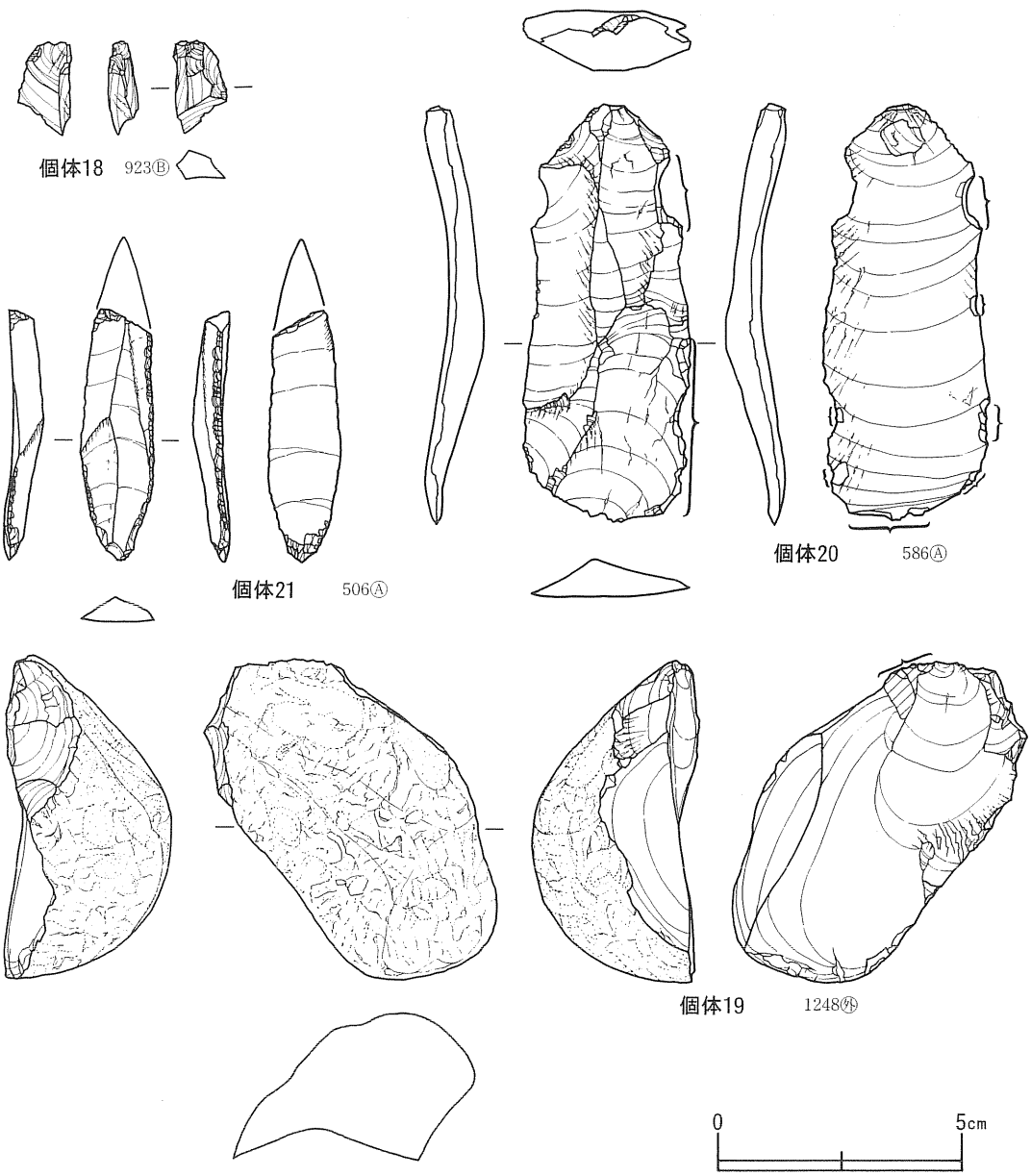
⑲　個体別資料19（第135図）

礫皮面はにぶい黄色の皺状を呈し、内部は暗灰黄色を呈する頁岩である。剝片剝離作業に先だって原礫の頭部を除去した際の礫端片である。遺跡内には本資料からえられた剝片は残され

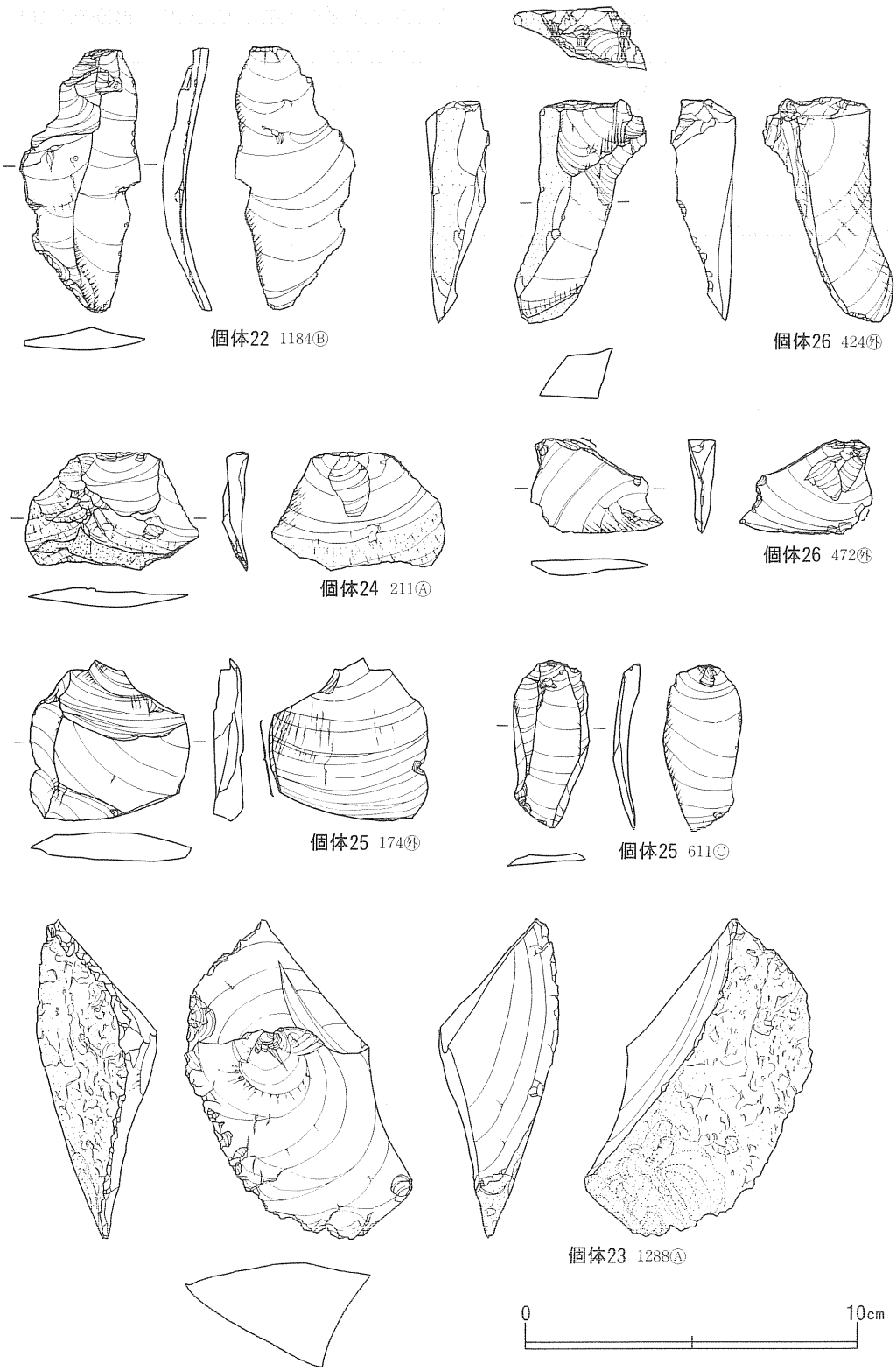
ておらず、遺跡外から単独で持ち込まれたか、あるいは本資料を得た後の石核は遺跡外に持ち出されたものと判断される。Ｂ、Ｃブロックの中間ＭＯ36グリッドから出土した。

⑳　個体別資料20（第135図）

白色粒を含み、黄灰色から灰黄色を呈する頁岩製の縦長剥片。調整打面を残す。遺跡外から持ち込まれた単独資料。Ａブロックで出土。



第135図　個体18～個体21



第136図　個体22～個体26

㉑　個体別資料21（第135図）

白色粒を含む灰黄褐色の頁岩を素材とするナイフ形石器506である。遺跡外から単独でＡブロックへ持ち込まれた資料。

（２）－５　ブロック構成とブロック間関係

先の（２）－２において、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄの各ブロックについてそれぞれの内容を記述した。ここでは、個体別資料毎に復元された剥片剥離作業によってブロック間関係の再構成を試みるが、まずそれに先だって、ブロック別の石器組成、個体別資料保有数、および個体別資料の石器組成を再確認しておきたい（第7表～第9表、第137図～第139図）。

４ブロックの石器数量の比は、Ｃ、Ｄブロックに含まれる石器数を1とした場合、Ａブロック8.5、Ｂブロック13という数で表される。個別の石器の各ブロックでの保有数に着目し石器組成をみると、Ａブロックでは掻器、Ｂブロックでは彫器及び彫器削片、Ｃブロックでは彫器および削器、Ｄブロックでは削器が、それぞれのブロックを特徴づける器種となっている。ナイフ形石器はＤブロックには存在せず、その欠如がＤブロックを他のブロックから差異化する特徴の一つであるともいえるが、他の３ブロックには極端な数の差がなく存在することから、本遺跡における共通の器種と捉えられる。また、これとは別にＡブロックでの石核の数は、他のブロックに比べ目立った多さを示している。特に平面的な規模の等しいＢブロックと比較した場合、石器総数ではおよそ２／３であるのに石核数では2.5倍とこれを凌ぎ、本遺跡での剥片剥離工程におけるＡブロックの特異な位置を表わしている。

個体別資料の保有数を資料数の多い個体毎にみると、個体1は92％がＢブロックに集中し、残りの５％がＡブロックに、また1.5％がＣブロックに存在する。個体2もほぼ似た分布状態を示すがＡ、Ｂブロック間の保有比率はやや異なり、61％がＢブロックに集中し、残りの33％がＡブロックに、５％がＣブロックに存在する。個体１と個体２は、この2つで第Ⅱ群全石器数のほぼ半数を占める主要個体であるが、いずれもＢブロックでの保有率が最高で次いでＡブロックにも高率で保有されることは、Ｂブロックが４ブロック中の主体的存在であることとともに、Ａ、Ｂ両ブロックの密接な関係を示すものである。なお、Ｄブロックの特異性は第Ⅱ群石器の主要個体である個体１、個体２の欠如と、個体４の集中的存在にも示されている。

次に各ブロックに対して、石器の製作－使用－遺棄の一連の流れのなかで、どのような位置づけが可能なのかを、ブロック間の接合関係と個体別資料毎の剥片剥離工程から見てみよう（第140図）。

第Ⅱ群石器の主な石器製作の技術は縦長剥片を得る類型1の技術によっているが、そのうちの主要個体、個体１は原礫状態の石核が遺跡内に持ち込まれて、石核が遺跡外へ持ち出される

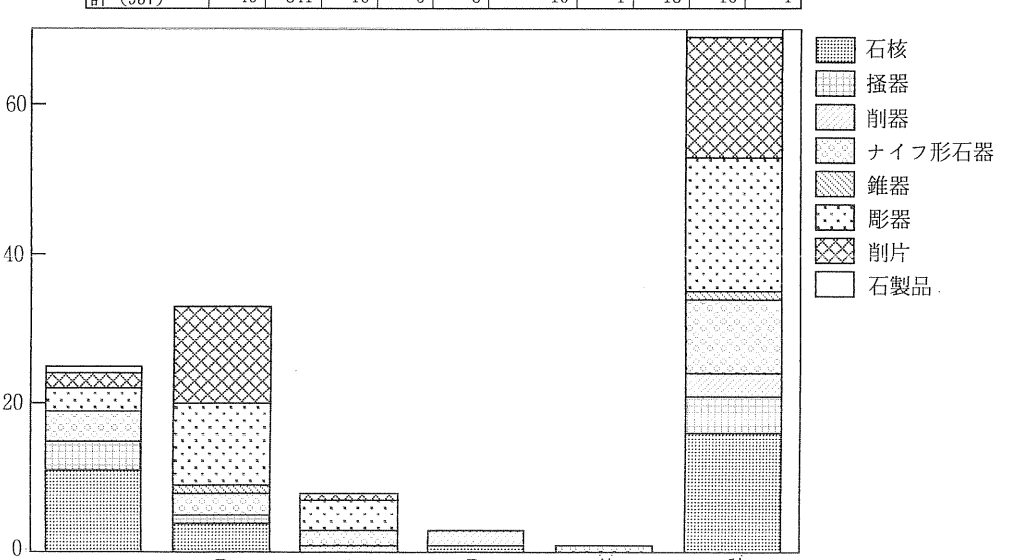
までの剥離作業の全過程をＢブロック内において進行させ、彫器や掻器を加工している。そして、一部石器に加工し得る縦長剥片はＡブロックへ、さらに加工された石器（彫器）はＣブロックへ移動している。すなわち、個体１にあっては、ＢブロックはＡブロック、Ｃブロックに対して石器素材あるいは石器そのものを供給する「場」であったことが知られる。

同じ個体２はどうであろうか。個体２も礫皮面の除去が行われた後の剥離作業の中心をＢブロック内において進行させ、一部の石器や石器素材をＡブロック、Ｃブロックへ（Ａブロックへは掻器および彫器、Ｃブロックへは彫器）移動している。そして大半の石核は遺跡外へ持ち出されている。そのなかで、個体２－２はＢブロックからＡブロックへ剥離作業自体が移動し、そこで剥離作業を終えた唯一の接合資料であるが、この場合であっても、得られた石器がＢブロックも含めた他のブロックへ移動したことは示されていない。

先述したように第Ⅱ群石器の石核保有数はＡブロックが他を抜きんでている。しかし、これを工程とあわせた接合関係でみると、個体５、個体17のようにＡブロック内で工程が完結するか、個体２－２、個体12のように他ブロックでの工程に後続した作業が行われたかの場合が示されているのであって、Ａブロックの作業で得られた石器が他のブロックへ移動している例は、個体９－２、個体12－１の２例に認められるに過ぎない。したがって、Ａブロックの石核保有

第７表　ブロック別石器組成

ブロック	チップ	剥片	石核	掻器	削器	ナイフ形石器	錐器	彫器	削片	石製品
Ａ（338）	25	288	11	4	0	4	0	3	2	1
Ｂ（518）	19	466	4	1	0	3	1	11	13	0
Ｃ（38）	2	28	0	0	1	2	0	4	1	0
Ｄ（45）	0	42	1	0	2	0	0	0	0	0
外（18）	0	17	0	0	0	1	0	0	0	0
計（957）	46	841	16	5	3	10	1	18	16	1



第137図　ブロック別石器組成

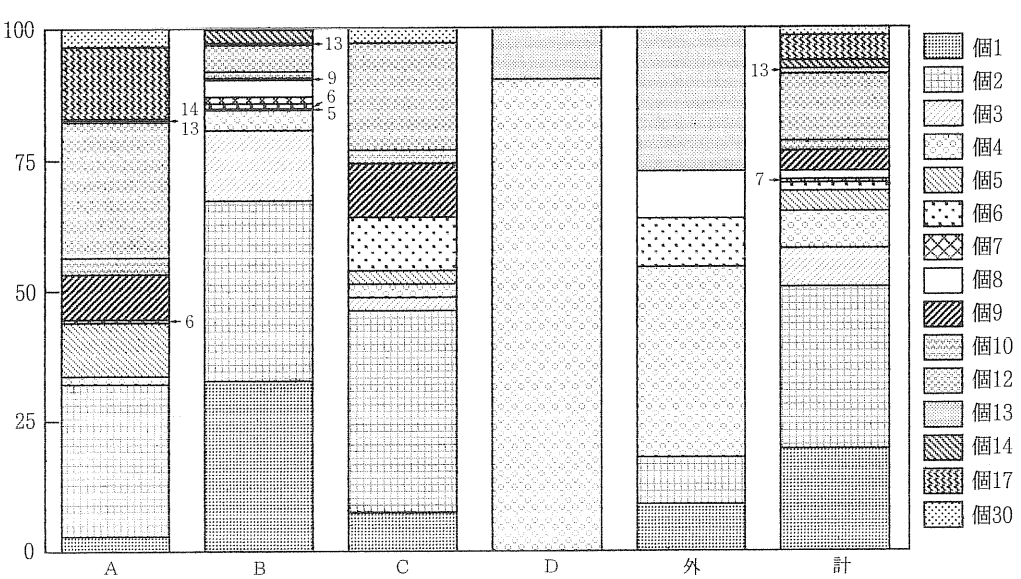
数の顕著な多さは、同じように剥片剥離作業において中心的な「場」であるＢブロックとは対照的に、Ａブロックの「場」の性格が、石器製作が石器使用と結びついて終結するものであったことを示している。すなわち、剥片剥離作業ではＢブロックは供給的、Ａブロックは受給的と評価される。

また、ほかに剥離作業が行われた「場」にＤブロックがある。しかし、これは類型Ⅱの幅広の剥片を得る技術によった個体４、個体11と結びついており、これらの個体はＡ、Ｂブロックでは認めらず、石器製作上Ａブロックに似た性格が想定されるものの、保有した器種の点で他と明らかに異なることは先に述べたとおりであ。

以上が第Ⅱ群石器の製作から遺棄にいたる過程の前半部を評価する要素であるが、後半部についてはどうであろうか。Ａ、Ｂブロックでは第Ⅱ群石器の主要な器種が認められており、これはそれぞれの「場」で製作されて残されたか、あるいは後者から前者へ移動した結果残されたことが示されている。

第８表　ブロック毎の個体別資料保有数

ブロック	個1	個2	個3	個4	個5	個6	個7	個8	個9	個10	個11	個12	個13	個14
A(341)	10	97	0	5	34	3	0	0	28	11	0	86	1	1
B(521)	171	179	69	20	2	5	7	15	3	5	0	28	2	12
C(40)	3	15	1	1	1	4	0	0	4	1	0	8	0	0
D(45)	0	0	0	38	0	0	0	0	0	0	3	0	4	0
外(18)	1	1	0	4	0	1	0	1	0	0	0	0	3	0
計	185	292	70	68	37	13	7	16	35	17	3	122	10	13
ブロック	個15	個16	個17	個18	個19	個20	個21	個22	個23	個24	個25	個26	個27	個30
A	0	1	46	0	0	1	1	0	1	1	0	0	3	11
B	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
D	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	0
計(965)	3	1	47	1	1	1	1	1	1	1	2	2	3	12



第138図　ブロック毎の個体別資料割合

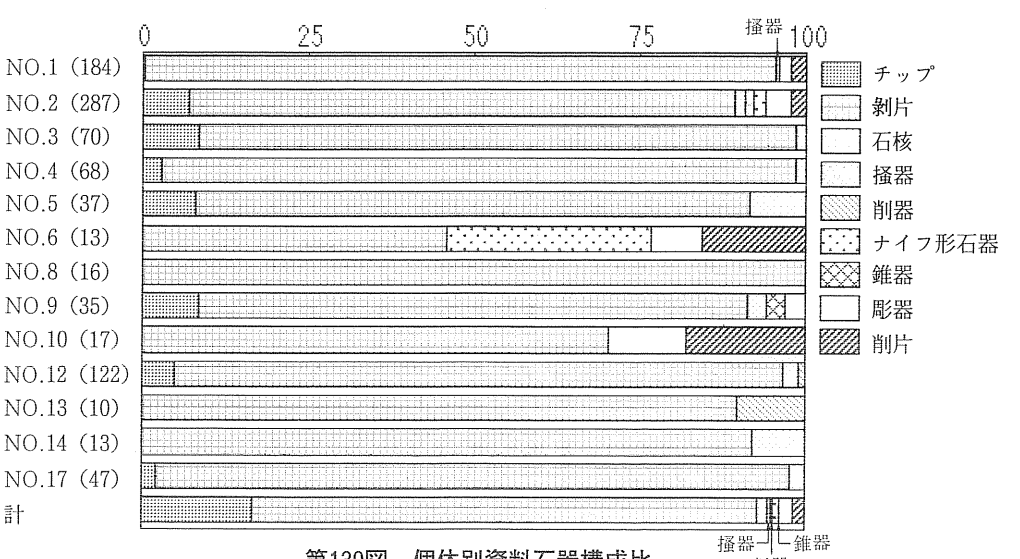
また、Cブロックでは個体NO.1が初期の剥離工程を

おこなっているものの、残された石器の大半は他のブロック、すなわちA、B両ブロックで製作されたものである。このように、石器製作から遺棄にいたる流れのなかでは、その全過程を包括するブロックと後半部に集中するブロックとに分かれ、前者にA、Bブロック、後者にCブロックが当てられる。また、類型2の剥離技術を担ったDブロックは削器が存在することから、前者に当たる。

以上、第Ⅱ群石器のブロックの在り方は、①ナイフ形石器は石器群全体を特徴づける器種であるが、そのほかにも各ブロックを特徴づける特定の器種があり、主体的存在であるA、B両ブロックの間ではそれぞれ掻器、彫器がそれである、②個体別資料毎のブロック間での保有率に比較的明瞭な差が認められる、③剥片剥離技術の2つの類型が、A、Bブロックでは類型1、Dブロックでは類型2と、ブロック毎に排他的に結びつく、④製作から遺棄にいたる過程のなかでは、その全過程を担いそれが独立的あるいは非相互的な需給関係のもとで進行したA、B、Dブロックと、使用から遺棄の後半部のみを担うCブロックとに明瞭に分けられる、と以上4点にわたって要約される。

第9表　個体別資料石器組成

個体番号	チップ	剥片	石核	掻器	削器	ナイフ形石器	錐器	彫器	削片
NO.1（184）	1	175	0	1	0	0	0	3	4
NO.2（287）	20	237	4	4	0	5	0	11	6
NO.3（70）	6	63	1	0	0	0	0	0	0
NO.4（68）	2	65	1	0	0	0	0	0	0
NO.5（37）	3	31	3	0	0	0	0	0	0
NO.6（13）	0	6	0	0	0	4	0	1	2
NO.8（16）	0	16	0	0	0	0	0	0	0
NO.9（35）	3	29	1	0	0	0	1	1	0
NO.10（17）	0	12	0	0	0	0	0	2	3
NO.12（122）	6	112	3	0	1	0	0	0	0
NO.13（10）	0	9	0	0	1	0	0	0	0
NO.14（13）	0	12	1	0	0	0	0	0	0
NO.17（47）	1	45	1	0	0	0	0	0	0
計	153	701	15	5	2	9	1	18	15



第139図　個体別資料石器構成比

個体		Aブロック	Bブロック	Cブロック	Dブロック	ブロック外
1	1	PF (559,954) ←	◎			
	2	PF (984,332) ←	◎ →	G (575)		
2	1		◉			
	3	K — ◉ (1359) ← Es (561) ←	— ◎			
	4	F (541) ← Es (547,689) ←	— ◎	→ G(624)		
	5	Es (1538) ←	◎ — K(1426) →	F (574)		
	7		G — ◎ (808) →	PF (576)		
	23	RF (726) —	PF (882)			
3			◉			
4	1				◉ →	F (95,1419)
	2			F (196) ←	◉ →	F (1821)
5	1	◉				
	2	◉				
7			◎			
8	1		◎			
	2		◎			
	3		◎			
9	1	◉				
	2	◎ →	F (618)			
11					◎	
12	1	◉ ← →		◎ Sc (230)		
	2	◎ ←	◎			
	8	◎ ←		◎		
14		F (956) ←	◉			
17		◉				

凡例

剥片剥離作業
◉残核有
◎残核無

石器
Ｋ；ナイフ形石器
Ｇ；彫器
Ｅｓ；掻器
Ｓｃ；削器
ＲＦ；二次加工ある剥片
ＰＦ；折断剥片
Ｆ；剥片

関係
←，→；石核、石器の移動
—，｜；石器の接合

第140図　剥片剥離作業にみるブロック間関係

第10表　第Ⅱ群石器一覧表（1）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
60	MR21	135	122	34.391	外	4	PF[下:腹背]	16.85	20.5	2.15	
95	MM17	366	219	34.226	外	4	FS	53.5	42.4	19.5	
174	MN26	290	30	33.908	外	25	F	50.1	47	7.25	
190	MP37	318	194	34.486	B	1	F	54.65	38.85	15.75	
191	MP37	262	74	34.388	B	2	PF[上:背腹,右下:背腹]	26.4	42.15	6	
194	MO35	151	202	34.284	C	12	FS´	37.1	35	10.2	
196	MN35	118	69	34.305	C	4	FS´	55.2	84.7	15.15	有り
198	MN37	110	150	34.604	B	1	FS	18.35	25.75	5.75	
199	MQ25	288	27	34.471	D	13	PFS[右下:腹背]	50.2	22.4	8.6	
205	MN37	234	141	35.157	B	2	PF[下:背腹]	22.7	24.15	5.7	
206	MN37	7	242	35.229	B	2	PF[下:背腹]	20	18.35	10.85	
211	MN40	20	116	34.077	A	24	FS	35.8	34.4	5.65	
213	MN40	313	265	34.04	A	13	PFS´[左:背腹]	76.35	59.7	22.1	
214	MN40	368	184	34.057	A	10	PFS[下:背腹]	58.25	34	10.25	
215	MN40	380	227	34.005	A	9	CoS	46	41.7	39.4	
216	MN40	396	368	34.205	A	2	PF[上:腹背]	26.1	15.55	5.5	
217	MN40	353	354	33.999	A	17	PFS[上:腹背]	61	24.05	11.2	
218	MN40	398	206	34.025	A	5	PFS[下:腹背]	11.95	15.47	4.06	
220	MN40	54	229	33.969	A	17	F	33.45	25.25	4.2	有り
221	MN42	117	374	35.236	外	1	PF[上:背腹,下:背腹]	62.7	23.05	5.55	
230	MN35	121	326	34.236	C	12	Sc	66.45	40.35	19.05	
234	MN40	96	98	34.372	A	17	FS	21.5	21.35	8	有り
238	MP25	195	68	34.465	D	13	PFS´[右上:背腹]	66.1	30.3	11.75	
239	MP25	248	58	34.356	D	4	PFS[上:腹背]	52.85	40.6	19.55	
240	MP25	165	323	34.333	D	4	F	26.3	18.35	6.35	
241	MP25	315	356	34.374	D	4	CoS´	81	68	53.55	
242	MP25	348	311	34.055	D	4	FS´	64.85	34.5	14.4	
243	MP25	308	393	34.238	D	4	FS	32.7	21	7.65	
244	MP25	167	11	34.348	D	4	FS´	36.2	34.65	7.1	有り
245	MP25	385	394	34.405	D	11	F	54.75	42.15	11	
246	MP26	45	102	34.403	D	4	F	24.5	40.8	7.05	有り
248	MP26	290	98	34.289	D	4	PFS´[下:腹背]	23.8	15.1	10.45	有り
249	MP26	291	132	34.271	D	4	F	30.15	32.55	9.15	
250	MP26	400	13	34.238	D	4	PCoS	47.55	42.7	24	
251	MP26	396	85	34.304	D	4	PCoS	64	47.45	34	
252	MP26	245	158	34.298	D	4	FS	24.4	19.8	4.4	有り
253	MP26	246	162	34.298	D	4	F	28.75	24	4.4	
254	MP26	50	192	34.432	D	4	FS	14.75	21.4	5	
255	MP26	70	219	34.355	D	4	F	9.2	28.35	9.65	
257	MP26	108	221	34.326	D	4	PFS[下:背腹]	38.6	50.4	12	有り
259	MP26	255	197	34.355	D	4	PFS´[右下:背腹]	59.01	24.2	7.55	
261	MP26	163	226	34.347	D	4	F	22	25.65	5.9	
262	MP26	128	225	34.401	D	4	F	40.75	41	10.25	
263	MP26	137	237	34.381	D	4	PF[上:腹背]	15.3	23.3	10.15	
264	MP26	148	244	34.38	D	4	FS	29.95	39.05	15.5	
265	MP26	228	223	34.319	D	4	PF[下:腹背]	20.4	19.35	5	
267	MP26	298	288	34.236	D	4	F	30.55	44.6	10.14	
268	MP26	200	255	34.38	D	4	F	16	21.6	2.55	
269	MP26	228	293	34.349	D	4	F	25.35	18.35	4.35	
270	MP26	183	294	34.313	D	4	PF[上:腹背]	8.55	24.15	2.45	
271	MP26	155	256	34.45	D	4	PF[下:腹背]	33	34	9.9	
273	MP26	35	318	34.393	D	4	PFS´[右:腹背]	36.8	25.6	9.05	
274	MP26	143	328	34.316	D	4	FS	16.8	12.1	2.6	
275	MP26	200	332	34.351	D	4	F	34.9	22.9	11.1	
276	MP26	313	312	34.305	D	4	FS	12.45	18.9	3.15	
277	MP26	196	355	34.271	D	4	F	10.65	11.1	3.2	
278	MP26	232	376	34.233	D	4	PF[上:背腹,下:腹背]	20.5	24.2	3.9	
279	MP26	0	118	34.491	D	13	FS´	96.85	58.05	30.85	
283	MQ25	190	0	34.631	D	13	Sc	58.45	52.1	16.1	
284	MQ25	332	0	34.525	D	11	F	72.15	50.95	19	
285	MQ26	370	11	34.465	D	4	PF[左上:腹背]	42.3	27.7	9.75	
287	MQ26	275	106	34.449	D	11	Sc	50.55	51.5	13.75	
289	MQ26	388	280	34.511	D	4	FS´	52.05	74.55	18.8	
290	MQ26	381	310	34.429	D	4	F	78.3	41.85	16.6	
327	ML40	47	220	34.354	A	12	PF[下:腹背]	23.2	23.8	3.25	有り

第11表　第Ⅱ群石器一覧表（2）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
329	MN41	63	360	34.332	A	12	F	81.1	29.2	9.55	
330	MN41	45	282	34.31	A	17	PF[下:背腹]	28.9	37.6	5.15	
331	MN41	58	164	34.416	A	1	F	38.9	13.1	4.1	有り
332	MN41	55	148	34.403	A	1	PF[上:腹背.下:腹背]	53.3	29.55	7.5	有り
333	MN41	4	34	34.591	A	2	CF	54.85	15.7	7.75	有り
334	MN41	216	305	34.486	A	12	PFS´[下:背腹]	38	25.15	9.3	有り
424	MM27	85	213	34.154	外	26	FS	73.3	36.5	16.45	
472	MJ30	100	374	34.081	外	26	F	40.4	26.35	7.1	
481	MO37	グリッド一括			B	3	CoS	55	42	46.75	有り
482	MM39	236	182	34.366	A	2	PF[上:腹背]	22.65	22.15	5.15	有り
483	MM39	231	189	34.354	A	17	FS	75.95	35.05	8.25	
484	MM39	249	180	34.345	A	2	PF[下:腹背]	40.2	19.75	5.55	有り
489	MH32	360	376	34.105	外	13	FS´	53.9	52.1	14.85	
496	MM39	3	286	34.244	A	12	FS´	36.8	19.05	4.4	
498	MM39	139	356	34.354	A	12	PF[下:背腹]	25.75	19.4	4.7	有り
499	MM39	211	346	34.437	A	12	F	33.15	26.8	9.15	有り
501	MN40	333	132	34.229	A	12	F	21.75	23.05	1.35	
502	MN40	322	228	34.241	A	12	F	21.7	20.9	4.15	
503	MN40	392	207	34.256	A	17	F	10.45	20.2	2.55	
504	MN40	392	278	34.25	A	2	F[上:腹背]	53	22.2	7.1	
506	MN41	91	259	34.368	A	21	K[先欠]	52	15.05	5.75	
507	MM41	54	39	34.293	A	2	F	14.25	13.9	3.05	
508	MM41	80	36	34.395	A	9	PF[下:腹背]	35.1	18.55	6.45	
509	MM41	135	40	34.43	A	5	Co	37.48	20.73	10.5	
510	MM41	151	28	34.34	A	12	PF[上:背腹]	23.6	18.1	2.4	有り
511	MM41	176	51	34.408	A	2	PF[上:腹背]	32.75	9.85	2.25	
512	MM41	166	86	34.444	A	17	PF[上:腹背.右下:背腹]	36.4	20.6	4.9	有り
513	MM41	301	3	34.262	A	5	PF[右上:腹背]	14.51	12.15	3.52	
514	MM41	299	21	34.331	A	12	F	20.1	15.15	4.2	有り
515	MM41	297	24	34.333	A	2	PF[上:背腹]	21.9	13.2	2.1	有り
516	MM41	28	170	34.416	A	12	F	25.55	38.3	18.8	
517	MM40	35	160	34.327	A	12	PF[上:背腹]	27.85	15.35	2.7	有り
518	MM40	19	210	34.337	A	17	F	44.65	47.8	12	有り
519	MM40	35	217	34.423	A	9	F	35.6	26.3	8.6	
520	MM40	38	222	34.5	A	2	PF[右上:腹背.下:腹背]	22.45	21.55	4.35	有り
521	MM40	52	221	34.345	A	12	F	62.12	16.1	8.88	
522	MM40	70	212	34.319	A	2	PS[下:背腹]	19.7	18.65	4.9	
523	MM40	83	213	34.283	A	5	F	21.85	38.3	6.05	
524	MM40	80	222	34.305	A	1	PFS[上:背腹]	61	25.5	10.6	
525	MM40	67	235	34.305	A	12	FS	38.75	55.8	19.85	
526	MM40	71	255	34.331	A	2	G	74.15	21.5	8.55	有り
527	MM40	43	248	34.373	A	12	PF[上:腹背]	21.3	20.75	3.1	
528	MM40	43	275	34.317	A	9	PF[下:腹背]	30.75	24	2.7	
529	MM40	16	256	34.383	A	9	F	34.65	31.75	13	有り
530	MM40	28	288	34.352	A	6	K	91.2	21.4	6.6	
531	MM40	14	274	34.401	A	2	F	18.7	25.8	5.65	有り
532	MM40	19	276	34.403	A	2	PCF[下:腹背]	31.15	14	4.45	
533	MM40	18	281	34.4	A	5	PF[下:腹背]	8.95	16.1	3	
534	MM40	11	295	34.458	A	9	F	15.05	12.8	5.75	
535	MM40	13	320	34.34	A	12	PF[上:腹背.下:背腹]	11.85	22.2	4.85	
536	MM40	51	347	34.298	A	2	PF[下:腹背]	7.9	17.3	1.4	
537	MM40	80	323	34.326	A	17	PF[上:腹背.下:背腹]	23.85	20.5	3.65	
538	MM40	75	282	34.289	A	12	F	21.35	24	3.8	
539	MM40	93	302	34.368	A	2	G	42.3	19.15	4.05	有り
540	MM40	95	278	34.291	A	12	FS	46.55	26.3	6.25	
541	MM40	110	269	34.326	A	2	F	70.25	24	8.7	有り
542	MM40	122	276	34.304	A	9	PFS[上:腹背.下:腹背]	37.45	36.4	6.3	
543	MM40	127	263	34.256	A	5	PF[下:背腹]	17.35	21.15	7.6	
544	MM40	133	275	34.255	A	5	PF[上:腹背]	18.35	11.25	1.7	
545	MM40	115	296	34.347	A	12	Co	52.6	48.9	32.05	
546	MM40	136	248	34.311	A	2	FS	22.05	7	3.4	
547	MM40	140	250	34.317	A	2	Es	95.45	20.45	9	
549	MM40	163	261	34.298	A	17	F	30.15	23.75	4.8	
550	MM40	172	276	34.38	A	9	CFS´[右上:背腹]	18.5	39.4	10.2	有り
551	MM40	148	317	34.326	A	12	FS´	43.3	22	5.3	

第12表　第Ⅱ群石器一覧表（3）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
552	MM40	158	312	34.381	A	9	F	29.4	21.7	8.4	
553	MM40	172	314	34.284	A	2	PF[下:腹背.左:背腹]	28.35	25.8	9.9	
554	MM40	219	288	34.296	A	2	K(556基部)	28.45	15.95	4.2	有り
555	MM40	226	315	34.354	A	9	F	56.8	41.7	13.5	
556	MM40	261	240	34.367	A	2	K(554先端)	39.85	15.95	6.9	
557	MM40	242	194	34.465	A	2	F	33.7	15.95	4.1	有り
558	MM40	317	185	34.278	A	2	PF[下:背腹]	17.45	9.65	2.35	
559	MM40	321	385	34.317	A	1	PFS[上:腹背]	43.8	27.95	6.8	有り
560	MM40	206	387	34.465	A	4	F	13.7	21.8	4.6	
561	MM40	184	380	34.351	A	2	Es	43	18	6.8	有り
562	MM40	177	370	34.388	A	12	F	24.65	18.95	2.4	有り
563	MM40	149	387	34.465	A	2	FS	26.1	21.85	6.5	
564	MM40	130	377	34.388	A	2	C	9.35	9.55	2.15	
565	MM40	126	373	34.394	A	4	F	32	16.65	2.7	
566	MM40	107	364	34.395	A	27	環状石製品（768,769）	92.3	84.6	27.2	
567	MM40	93	388	34.38	A	6	PF[上:背腹.下:背腹]	60.6	33.25	8.3	
568	MM40	85	121	34.264	A	2	FS	20.5	12.3	9.4	
569	MM40	118	109	34.361	A	5	PF[下:腹背]	39.4	20.2	6.4	
570	MM40	70	60	34.34	A	12	PF[下:腹背]	31.7	23.45	9.75	
571	MM40	114	29	34.289	A	12	PF[下:腹背]	12.75	17.5	8.3	有り
572	MM40	16	294	34.375	A	5	F	39.15	38.8	9.2	
573	MM40	94	275	34.27	A	2	F	16.1	9	2.95	
574	MO34	247	302	34.312	C	2	F	51.5	35.15	7.6	
575	MO34	230	280	34.325	C	1	G	87.85	21.55	8.4	
576	MO34	172	120	34.407	C	2	PF[上:背腹]	49.5	25.5	3.15	有り
577	MO34	313	240	34.316	C	2	PF[下:背腹]	54.85	12.7	10.25	有り
578	MM40	135	376	34.298	A	17	FS	19.35	20.9	3.9	
580	MJ26	90	310	33.896	外	13	PF[上:腹背]	33.75	47.75	11.3	
586	MM40	53	241	34.305	A	20	F	86.2	34.4	7.5	
587	MM40	53	133	34.283	A	2	F	32	12.9	6.75	有り
588	MM40	54	180	34.293	A	10	PF[下:腹背]	33.15	9.25	4.2	
590	MM40	72	224	34.275	A	2	CFS[PF][上:背腹.下:腹背]	49.1	25.1	8.3	
591	MM40	69	279	34.29	A	2	FS	22.6	9.3	5.15	
592	MM40	97	287	34.296	A	2	C	8.8	9.3	3.55	
593	MM40	90	375	34.298	A	9	F	11.4	17.7	4.4	
594	MM40	144	163	34.25	A	2	PF[上:背腹.下:腹背]	16.55	11.55	2.65	
595	MM40	124	183	34.291	A	12	PF[上:腹背.下:腹背]	32.75	15	3.65	有り
596	MM40	122	264	34.284	A	2	F	9.5	10.6	2.4	
597	MM40	117	270	34.29	A	2	PF[下:背腹]	16.35	14.8	3.5	
598	MM40	161	245	34.263	A	12	F	10.05	5.9	0.9	
599	MM40	205	242	34.284	A	17	PF[下:背腹]	23.9	30.6	5.45	
600	MM40	169	269	34.291	A	12	F	9.8	10.8	2.7	
601	MM40	251	380	34.277	A	2	F	14.6	16.3	3.05	
602	MM40	338	325	34.258	A	2	F	8.35	12	1.5	
603	MM40	399	207	34.27	A	12	F	11.1	24.2	8.3	
604	MO34	12	190	34.395	C	12	FS´	29.85	17.35	9.3	
605	MO34	26	265	34.436	C	10	F	6.9	11.45	1.6	
606	MO34	14	275	34.396	C	12	PF[上:腹背]	21.55	22.65	6.6	
607	MO34	105	260	34.284	C	2	G(623,652)	22	15.65	5	有り
608	MO34	108	263	34.249	C	9	C	7.6	9.4	1.7	
609	MO34	105	270	34.305	C	6	K[基部欠]	52.35	16.85	6.1	
610	MO34	94	282	34.376	C	2	F	21.8	18.9	4.3	
611	MO34	118	352	34.284	C	25	F	50.9	22.6	4.04	
612	MO34	130	340	34.31	C	5	C	9	6.35	1.8	
613	MO34	136	340	34.291	C	2	F	46.15	18	3.25	
614	MO34	162	313	34.284	C	30	F	8.9	12.65	5.7	
615	MO34	210	347	34.23	C	12	FS´	48.4	44.9	10.9	有り
616	MO34	252	338	34.2	C	2	PF[下:背腹]	17.75	17.1	3.95	
617	MO34	204	280	34.222	C	2	PF[左下:背腹]	13.45	17.45	4.5	
618	MO34	211	273	34.233	C	9	PF[上:腹背]	22	31.9	9.4	
619	MO34	204	215	34.312	C	2	F	45.4	19	5.6	
620	MO34	243	233	34.227	C	9	F	32.1	30	9.1	
621	MO34	155	65	34.27	C	2	G	34.8	14.15	3.55	
622	MO34	342	383	34.205	C	12	F	23.55	37.2	12.95	
623	MO34	346	115	34.236	C	2	G(607先端,652)	16.7	15.8	7	有り

第13表　第Ⅱ群石器一覧表（4）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
624	MN34	1	350	34.229	C	2	G(689ES)	27	8.6	6.7	有り
627	MO34	244	232	34.222	C	9	F	19.65	30.7	4.05	
628	MN41	99	23	34.255	A	12	PF[下:背腹]	23.25	10.35	4.2	
629	MM41	63	44	34.236	A	10	F	16.7	9.05	3.65	
630	MM40	96	18	34.212	A	30	F	8.15	13.9	4.9	
631	MM40	54	163	34.234	A	2	PF[下:腹背]	16.3	15	4.7	
632	MM40	115	196	34.222	A	12	F	27.95	31.1	6.55	
633	MM40	361	99	34.173	A	9	PF[上:腹背]	59.65	43.55	11.2	
634	MM40	31	293	34.255	A	30	F	12.1	4.8	1.3	
635	MM40	71	353	34.194	A	12	PF[上:背腹.下:腹背]	20.35	24.8	3.9	
636	MM40	177	294	34.215	A	5	F	8.09	13.92	3.5	
637	MN40	352	189	34.212	A	12	PFS[下:腹背]	28	16.15	3.85	
638	MN40	275	183	34.215	A	12	F	20.1	22.5	2.4	
640	MP39	302	243	34.646	外	8	FS	72.1	21	11	有り
648	MO34	270	140	34.185	C	6	F	13.3	14.4	4.05	
649	MO34	219	347	34.206	C	6	Sp	27.6	11.45	2.6	有り
650	MO34	288	208	34.18	C	6	K	61.95	17.1	5.7	有り
651	MO34	74	351	34.236	C	12	FS	44.8	44.35	12.85	
652	MO34	49	393	34.208	C	2	G(607先端,623)	21.8	16.4	6.45	有り
663	MN40	202	295	34.097	A	2	F	33.55	23.65	5.75	
664	MN40	244	243	34.194	A	16	Co	59.55	55.55	31.05	
665	MN40	246	287	34.208	A	9	G[先端]	12.05	15.4	3.85	
666	MN40	254	315	34.175	A	2	PF[下:背腹]	45.35	33.5	7.15	
667	MN40	287	283	34.201	A	30	F	12.25	8.95	4.75	
668	MN40	316	267	34.206	A	2	PF[下:腹背]	12.45	7.2	1.85	
669	MN40	320	287	34.195	A	2	F	28.2	33.65	13.4	有り
670	MN40	395	257	34.222	A	9	FS	37.4	26.15	11.45	
671	MN40	400	382	34.441	A	2	F	12.6	7.7	3.4	
672	MM40	56	195	34.222	A	17	F	53.1	34.1	11.1	
673	MM40	71	195	34.188	A	2	PF[上:腹背.下:腹背]	35.25	43.75	9.6	
674	MM40	136	168	34.2	A	12	PFS[右下:背腹]	25	20.2	2.45	
675	MM40	6	257	34.198	A	2	PF[上:背腹]	41.2	11	3.95	
676	MM40	34	257	34.201	A	30	F	9.25	10.05	2.1	
677	MM40	35	283	34.256	A	5	PF[左下:腹背]	36.02	20.91	6.12	
679	MM40	65	248	34.187	A	9	F	10.1	8	1.35	
680	MM40	66	254	34.234	A	2	C	7.35	9.65	2.3	
681	MM40	132	248	34.202	A	2	C	7.1	7.6	1.1	
682	MM40	133	250	34.209	A	2	PF[上:腹背]	19.35	14.4	5.25	
683	MM40	211	260	34.191	A	1	F	21.85	20.05	2.95	
684	MM40	81	335	34.206	A	9	F	13.5	8.8	2.3	
685	MM40	28	374	34.215	A	2	PF[下:背腹]	40.65	27.2	5.4	
686	MM41	64	10	34.235	A	9	F	15.55	13.5	4.2	
687	MM41	61	14	34.222	A	5	F	10.2	10.95	1.75	
688	MM41	44	91	34.236	A	12	PF[下:背腹]	6.75	16.25	4.85	有り
689	MN41	400	60	34.24	A	2	Es(624G)	52.6	19.1	8	
690	MN41	340	36	34.208	A	17	F	17.95	9.2	2.75	
691	MO35	263	101	34.178	C	2	F	13	3.35	3.85	
692	MO35	241	110	34.179	C	12	PF[下:背腹]	14.25	15.25	4.3	
693	MO35	232	108	34.181	C	12	PFS[上:背腹.下:背腹]	19.15	14.9	3.55	
694	MO34	120	395	34.166	C	2	F	14	7.85	5.85	
724	MN40	365	184	34.152	A	12	F	11.1	5.6	1.25	
725	MN40	355	191	34.173	A	5	RF	32.17	21.59	5.39	
726	MN40	358	200	34.145	A	12	FS	6.6	13.05	1.7	
727	MN40	332	203	34.15	A	5	PF[下:背腹]	15.55	23.4	7.6	
728	MN40	296	190	34.151	A	17	PF[下:腹背]	20.9	13.2	2.05	
729	MN40	294	250	34.171	A	30	C	9.6	8.25	3.5	
730	MN40	319	244	34.143	A	5	F	23.35	14.9	5	
731	MN40	361	240	34.131	A	12	PFS[上:背腹.下:腹背]	24.05	12.3	3.1	
732	MN40	377	249	34.178	A	2	F	10.4	12.6	1.2	
734	MN40	394	318	34.166	A	5	F	11.3	11.45	3.15	
735	MN40	393	336	34.152	A	5	F	20.3	16.55	2.55	
737	MN40	363	312	34.157	A	17	F	12.15	8.7	2.75	
739	MN40	365	367	34.194	A	2	C	7.35	6.3	2.2	
740	MN40	276	301	34.173	A	30	C	9.6	6.55	2	
741	MN40	244	318	34.152	A	1	F	14.15	7.3	1.35	

第14表　第Ⅱ群石器一覧表（5）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
742	MM41	32	31	34.207	A	2	F	15.7	4.6	1.2	
743	MM41	210	42	34.159	A	2	Co	54.9	30	20.6	
744	MM40	88	357	34.205	A	12	PF[下:腹背]	20.45	26.15	7.7	
745	MM40	90	357	34.199	A	17	PF[下:背腹]	17.6	25	4.9	
747	MM40	67	316	34.194	A	12	F	14.2	6.65	0.9	
748	MM40	58	328	34.194	A	5	F	18	8.4	2.6	
749	MM40	44	325	34.152	A	12	PF[上:腹背]	10.55	15.75	3.3	
750	MM40	48	300	34.153	A	12	F	16.35	17.15	1.85	
751	MM40	9	305	34.181	A	30	C	5.05	6.85	1	
752	MM40	12	290	34.194	A	17	F	13.05	10.15	1.55	
753	MM40	2	282	34.166	A	1	F	12.2	10.8	4.95	
754	MM40	10	284	34.16	A	2	PF[下:背腹]	32.75	35.1	8.9	
755	MM40	18	279	34.182	A	2	C	9.4	9.45	1.7	
756	MM40	29	285	34.194	A	12	F	40.75	21.55	4.4	
757	MM40	31	280	34.154	A	2	PF[下:背腹]	17.35	10.95	2.6	
758	MM40	34	270	34.157	A	17	F	36.2	25.45	9.25	
759	MM40	42	265	34.16	A	2	C	5.1	3.3	0.8	
760	MM40	69	265	34.145	A	12	C	7	8.9	1.25	
761	MM40	76	264	34.158	A	2	PFS[上:腹背]	60.75	26.4	8.4	
762	MM40	93	263	34.145	A	2	F	20.5	10	3.6	
765	MM40	114	267	34.166	A	17	PF[下:背腹・腹背]	30.1	19.7	2.35	
766	MM40	97	146	34.131	A	17	PF[下:腹背]	30.05	43.2	8.2	
767	MM40	41	186	34.145	A	17	PFS[左上:腹背]	46.2	22.45	9.25	
768	MM40	159	169	34.138	A	27	環状石製品（769,566）	54.8	54.1	0	
769	MM40	154	167	34.138	A	27	環状石製品（768,566）	24.25	22.25	0	
770	MM40	114	104	34.143	A	12	PF[下:背腹]	11	17.2	3.6	
771	MM40	348	119	34.138	A	6	F	17.9	18.55	2.1	
777	MP34	266	55	34.31	C	3	F	15.25	8.55	2.3	有り
778	MP34	218	322	34.347	C	1	F	10.9	11.65	2.7	
779	MP34	342	363	34.291	C	1	F	14.4	10.45	1.4	
780	MO37	202	99	34.304	B	2	PF[上:背腹.下:腹背]	29.8	18.6	3	
781	MO37	156	376	34.569	B	2	FS	82.9	25.1	7.6	
782	MO37	149	362	34.562	B	8	F	83.8	21.6	13.8	有り
783	MO37	174	367	34.643	B	2	Co	49.4	49.85	22.7	有り
784	MO37	170	350	34.556	B	1	PF[上:背腹]	21.95	17.4	5.05	有り
785	MO37	179	353	34.652	B	2	F	48.65	32.8	3.85	有り
786	MO37	173	346	34.651	B	2	RF	19.3	14.9	6.85	
787	MO37	181	325	34.562	B	1	PF[下:背腹]	20.95	19.05	4.25	
788	MO37	187	323	34.645	B	2	F	31.1	32.2	6.7	
789	MO37	183	323	34.645	B	2	F	13.8	16.05	2.9	
790	MO37	148	325	34.548	B	1	PF[上:背腹.下:腹背]	31.2	26.55	4.3	
792	MO37	140	305	34.548	B	3	F	19.3	8.4	2.95	有り
793	MO37	143	306	34.548	B	2	PF[下:背腹]	26.05	15	2.6	有り
794	MO37	142	282	34.555	B	12	F	18.5	7.25	7.7	有り
795	MO37	174	293	34.608	B	12	FS´	14.7	9.45	2.45	有り
796	MO37	177	293	34.611	B	1	G(1176先)	31.3	20.85	9.25	有り
797	MO37	215	316	34.603	B	3	F	19.55	21.1	15	有り
798	MO37	245	333	34.608	B	2	F	15.95	34.4	3.3	有り
799	MO37	263	344	34.612	B	2	PF[上:腹背.下:背腹]	18.05	15.35	5	
800	MO37	266	347	34.616	B	1	PFS[上:背腹]	12.25	11.85	4.25	有り
801	MO37	224	290	34.59	B	2	F	14.25	12.15	2.65	
802	MO37	224	288	34.59	B	1	Sp	28.95	12.7	3.9	
803	MO37	250	307	34.583	B	6	Sp	23.9	14.85	3.8	
804	MO37	242	287	34.583	B	2	F	19.2	10.2	2.9	
805	MO37	276	303	34.584	B	1	PF[上:腹背]	16	19.2	3.65	有り
806	MO37	347	350	34.616	B	1	G	29.8	23.2	5.25	有り
807	MO37	335	289	34.548	B	2	F	25.95	14.15	3.1	有り
808	MO37	349	290	34.556	B	2	G	38	17.2	5.35	有り
809	MO37	338	255	34.528	B	2	F	10.25	18.8	4.3	
810	MO37	369	274	34.498	B	8	PF[上:背腹]	55.95	22	6.35	有り
811	MO37	310	222	34.539	B	2	F	12.95	14	2.15	
812	MO37	344	222	34.506	B	2	F	15.5	20.45	3.25	
813	MO37	310	187	34.526	B	2	PF[下:背腹]	10.7	13.2	3.2	
814	MO37	269	174	34.512	B	1	PFS´[右下:背腹]	27.4	21.75	7.2	
815	MO37	219	245	34.55	B	12	F	11.65	6.6	1.35	

第15表　第Ⅱ群石器一覧表（6）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
817	MO37	175	246	34.518	B	1	PFS´[下:背腹]	35.05	18.3	7.35	
818	MO37	181	212	34.534	B	3	F	17.45	11.8	6.5	有り
819	MO37	137	220	34.532	B	4	PF[上:背腹.下:腹背]	16.6	12.55	5.7	
820	MO37	208	158	34.561	B	4	F	27.65	18.05	6.7	
821	MO37	288	118	34.451	B	2	G(1191基)	24.05	13.6	4.35	有り
822	MO37	109	175	34.625	B	1	PF[下:背腹]	47.35	26.2	9.35	
823	MO37	95	151	34.499	B	6	G	57.35	39.35	13.3	
824	MO37	63	56	34.534	B	1	FS	25.8	36.1	8.65	
826	MO37	9	285	34.756	B	3	F	22.4	27.1	4	有り
827	MO37	18	256	34.56	B	2	F	36.45	22.4	12.75	有り
828	MO37	73	251	34.568	B	3	FS´	52.3	51.3	35.5	
829	MO37	66	265	34.657	B	1	PFS´[上:背腹.下:腹背]	29.7	20.95	3.7	有り
830	MO37	67	287	34.658	B	1	PF[下:背腹]	21.9	30.4	6.7	有り
831	MO37	32	310	34.708	B	2	FS	12.55	17.8	5.45	
832	MO37	32	306	34.705	B	2	PF[下:腹背]	19	13.95	2.95	
833	MO37	1	285	34.604	B	1	PFS[上:背腹.右下:背腹]	50	27.75	5.8	有り
834	MP37	394	229	34.554	B	3	F	27.1	18.3	4.8	有り
835	MO38	217	48	34.569	B	8	F	12.45	9.35	1.55	
836	MO38	132	74	34.535	B	4	F	12.15	10.95	1.9	
837	MO38	121	75	34.548	B	1	PF[下:背腹]	23.4	18.95	4.55	有り
838	MO38	77	119	34.622	B	2	PF[上:腹背]	16.5	11.85	4.9	
839	MO38	92	182	34.562	B	3	F	11.6	17.1	4.1	有り
840	MP38	397	221	34.637	B	3	F	15.4	10.35	7.3	有り
841	MO38	165	312	34.57	B	2	F	15.65	12.85	2.6	
842	MO38	326	90	34.587	B	1	PFS[上:腹背.下:背腹]	38.15	16.5	4.7	
843	MO38	351	110	34.548	B	3	F	10.8	7.65	2.05	有り
846	MO37	38	382	34.541	B	2	C	7.05	5.1	1.5	
847	MO37	45	372	34.521	B	12	C	7.3	8.05	1.3	
848	MO37	56	373	34.521	B	1	F	11.1	13.4	5	
849	MO37	78	369	34.507	B	1	PFS[上:背腹]	11.45	13.1	2.85	有り
851	MO37	113	360	34.493	B	1	F	12.25	7.75	1.45	
852	MO37	99	348	34.52	B	4	PF[下:背腹]	23.15	27.3	4.5	有り
853	MO37	109	346	34.513	B	8	PFS[上:腹背]	14.75	19.45	3.9	
854	MO37	124	330	34.518	B	3	C	5.1	8.7	3.9	有り
855	MO37	132	327	34.518	B	12	F	18.15	7.1	5.4	有り
856	MO37	129	333	34.497	B	1	F	12.1	10.55	4.7	
857	MO37	142	360	34.511	B	2	F	10.55	10.45	2.55	
858	MO37	157	359	34.527	B	12	FS´	43.4	21.8	11.8	
859	MO37	156	368	34.534	B	3	FS	8.15	12.45	7.4	有り
860	MO37	169	370	34.514	B	4	PF[上:背腹.右下:腹背]	51.4	20.25	5.5	
861	MO37	183	377	34.535	B	2	PF[上:腹背]	17.8	14.3	1.6	
862	MO37	228	377	34.522	B	12	F	7.9	10.25	2.6	
863	MO37	232	381	34.539	B	2	F	14.9	13.45	2.3	
864	MO37	233	378	34.539	B	3	F	13.85	10.6	2.95	有り
865	MO37	235	377	34.54	B	1	F	8.4	21.2	2.3	
866	MO37	226	357	34.463	B	2	F	12	11.3	3.7	
867	MO37	307	356	34.462	B	2	PF[下:背腹]	10.25	18.1	2.7	
868	MO37	324	364	34.471	B	1	PFS[上:背腹.下:背腹]	37.6	18.4	5.75	有り
869	MO37	272	324	34.463	B	1	FS	29.2	20.3	7.15	有り
870	MO37	285	299	34.431	B	12	PF[上:腹背]	21.15	7.65	3.45	有り
871	MO37	322	249	34.442	B	1	PF[上:腹背]	50.45	25	4.6	
872	MO37	378	243	34.486	B	2	F	27.3	19.45	3.55	有り
873	MO37	375	210	34.435	B	3	F	13.65	9.3	1.75	有り
874	MO37	51	305	34.526	B	7	F	35.9	31.14	10.1	
875	MO37	55	314	34.535	B	1	FS	12.7	18.65	6.75	
876	MO37	75	301	34.477	B	2	Co	35.95	57.1	25.2	
877	MO37	95	298	34.485	B	1	PFS´[上:背腹]	52.08	32.08	7.6	
878	MO37	103	299	34.504	B	7	PF[上:腹背]	5.35	22.05	4.95	
879	MO37	128	266	34.491	B	1	PF[下:腹背]	24.75	25.95	6.6	
880	MO37	159	378	34.494	B	4	F	28.75	10.35	4.8	
881	MO37	164	255	34.493	B	1	FS	27.45	17.2	8.55	
882	MO37	157	252	34.472	B	2	PF[下:背腹]	23.2	17.55	6.1	
883	MO37	218	210	34.449	B	9	F	20.8	20.05	4.9	
884	MO37	185	187	34.478	B	12	F	18.6	7.2	2.55	
885	MO37	148	157	34.492	B	13	PF[左上:背腹]	60.1	23.7	7.8	

第16表　第Ⅱ群石器一覧表（7）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
886	MO37	163	159	34.472	B	1	PF[上:腹背]RF	31.85	19.4	2.5	有り
887	MO37	174	142	34.472	B	2	PF[下:腹背]	19	28.55	7.5	
889	MQ28	52	338	34.598	外	15	F	42.25	34.85	9.1	
899	MO38	328	120	34.458	B	1	PFS[上:背腹.下:背腹]	25.15	20	4.95	有り
900	MO38	290	66	34.467	B	2	PF[上:背腹]	28.6	13.25	7.75	有り
901	MO38	247	83	34.451	B	1	PF[上:背腹]	15.35	8.35	2	
902	MO38	228	60	34.472	B	9	F	7.95	11.15	3.05	
903	MO37	139	355	34.367	B	1	FS´	62.25	42.2	15.9	
904	MO38	223	87	34.5	B	1	F	21.1	38.5	5	
905	MO38	198	34	34.43	B	1	PF[上:背腹]	14.85	10.1	1.85	
906	MO38	163	79	34.505	B	6	F	10.65	11.5	2.7	
907	MO38	125	64	34.459	B	3	C	4.6	8	4.35	有り
908	MO38	88	78	34.521	B	1	PF[上:背腹.下:腹背]	30.1	14.4	7.35	
909	MO38	66	32	34.541	B	1	PF[上:背腹.右下:背腹]	31.55	10.8	4.1	有り
910	MO38	28	54	34.438	B	8	FS	10.05	11.15	5.5	
911	MO38	26	79	34.513	B	14	Co	57.3	39.15	29.6	
912	MO38	6	87	34.472	B	2	CF	21.6	27.65	5.4	
913	MO38	26	103	34.404	B	2	PF[下:背腹]	24.4	22.4	5.7	有り
914	MO38	20	123	34.493	B	1	PF[上:背腹.下:背腹]	20.7	14.85	2.5	
915	MO38	113	59	34.319	B	2	F	10.6	11.85	2.55	
916	MO38	95	124	34.501	B	1	FS	9.25	17.75	4.55	有り
917	MO38	105	142	34.49	B	1	PF[下:背腹]	22.7	13.05	2.55	有り
918	MO38	127	128	34.444	B	3	F	10.7	4.8	1.2	有り
919	MO38	160	163	34.429	B	3	F	36.85	17.45	10.2	有り
920	MO38	2	152	34.4	B	4	F	15.2	13.75	2.75	
922	MO38	82	217	34.511	B	2	PF[下:背腹]	35.05	20.35	5.3	有り
923	MO38	105	205	34.532	B	18	Sp	15.55	11.6	5.75	
924	MO38	80	265	34.52	B	2	PF[下:腹背]	13.7	16.1	3.5	有り
925	MO38	96	266	34.472	B	3	F	11.4	9.4	1.05	有り
927	MO38	39	280	34.442	B	3	F	13.55	12	6.9	有り
928	MO38	12	306	34.567	B	1	PFS´[下:背腹]	18.7	14.15	5	有り
929	MO38	160	336	34.5	B	1	FS	53.2	50.25	12.75	
930	MO38	242	265	34.544	B	12	PF[下:背腹]	11.2	16.35	1.55	有り
931	MO38	369	361	34.387	B	3	F	24.95	21.4	15.4	有り
932	MO37	150	347	34.463	B	2	PFS[下:背腹]	36.15	30.75	10.05	
933	MO37	160	361	34.476	B	2	K[先基欠]	27.2	15.5	2.5	
934	MO37	162	372	34.476	B	1	PF[上:背腹]	16.4	15.65	2.95	
935	MO37	179	334	34.451	B	1	PF[上:背腹]	36.9	31.65	6.8	
936	MO37	185	355	34.458	B	12	FS	17.75	11.35	2.25	有り
937	MO37	194	362	34.458	B	3	F	22.3	14.2	8	有り
938	MO37	234	366	34.451	B	1	FS´	39.35	12	7.4	
939	MP38	60	79	34.548	B	3	FS´	29.3	33.5	51	有り
940	MP38	100	101	34.569	B	1	PF[上:腹背.下:腹背]	20.5	14.95	3.75	
945	MM40	10	64	34.062	A	17	PF[下:背腹]	12.1	11.9	1.4	
947	MM40	61	181	34.131	A	12	PFS´[上:腹背]	40	23.1	6.75	
948	MM40	81	190	34.083	A	12	C	9.2	6.25	1.1	
949	MM40	87	205	34.138	A	4	F	14.8	14.85	1.45	
950	MM40	54	219	34.091	A	2	F	15.1	8	1.95	
951	MM40	27	243	34.09	A	17	FS	74.5	49.7	20.4	
952	MM40	49	234	34.095	A	10	F	13.55	7.25	3.35	
953	MM40	74	231	34.062	A	12	F	15.25	6.8	3.15	
954	MM40	138	220	34.124	A	1	F	29.05	14.95	3	
955	MM40	180	149	34.083	A	12	F	28.25	16.05	5.5	
956	MM40	364	158	34.081	A	14	F	34.15	25.25	4.55	
957	MM40	305	171	34.049	A	12	PF[上:背腹]	32.7	19.3	3.75	有り
958	MM40	300	214	34.101	A	12	PF[上:腹背]	31	19.5	1.95	
959	MM40	175	241	34.137	A	2	PF[上:背腹]	21.65	45.9	12.15	有り
960	MM40	147	265	34.138	A	12	PF[上:背腹.下:背腹]	23.35	16.1	6.65	
961	MM40	10	275	34.104	A	2	F	12.95	16.25	5.4	
962	MM40	19	296	34.111	A	2	F	11.3	8.65	2.5	
963	MM40	22	290	34.067	A	2	F	14.65	12.35	3	
964	MM40	30	284	34.069	A	12	FS	30.75	15.7	3.1	
965	MM40	1	251	34.108	A	17	F	22.45	14.05	3.3	
966	MM40	33	282	34.076	A	17	PF[下:背腹]	11.65	16.75	2.75	
967	MM40	62	289	34.09	A	17	PF[下:背腹]	23	28	5.6	

第17表　第Ⅱ群石器一覧表（8）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
968	MM40	2	323	34.138	A	17	PF[下:背腹]	28.9	18.35	4.4	
969	MM40	25	324	34.083	A	9	F	19.9	7.95	5.65	
970	MM40	38	324	34.069	A	17	C	8.2	4.35	2.1	
971	MM40	45	325	34.118	A	5	F	23.1	18.7	2.45	
972	MM40	47	310	34.054	A	5	C	6.1	8.3	0.95	
973	MM40	57	314	34.088	A	17	PFS[上:背腹]	40.6	28.1	5.75	
974	MM40	65	307	34.095	A	12	F	14.75	10.5	3.1	
975	MM40	27	246	34.067	A	12	PFS´[下:腹背]	41.6	24.15	7.4	
976	MM40	64	319	34.097	A	2	PF[上:腹背]	53.6	25.1	6.9	
977	MM40	72	316	34.125	A	12	PF[下:背腹]	11.35	16.75	2.6	
978	MM40	94	331	34.109	A	2	F	14.4	7.2	1	
979	MM40	70	330	34.05	A	2	F	46.4	13.05	4.5	
980	MM40	71	340	34.133	A	2	F	13.15	14.7	1.7	
981	MM40	89	356	34.139	A	9	C	5.25	7.15	2	
982	MM40	76	351	34.05	A	2	F	16.6	14.4	4.75	
983	MM40	53	362	34.08	A	12	F	12.55	13.8	2.65	
984	MM40	48	355	34.075	A	1	PF[上:背腹.下:腹背]	19.3	15.85	4.65	
985	MM40	39	387	34.076	A	2	PF[上:背腹]	16.5	9	2.05	
986	MM40	64	399	34.067	A	5	C	6.45	9.35	1.5	
988	MM41	46	60	34.136	A	30	C	7.9	9.65	2	
989	MM41	45	4	34.117	A	17	CoS	62.45	60.5	51.55	
990	MM41	5	51	34.145	A	17	PF[上:背腹.下:腹背]	26.9	21.3	5.35	
991	MN40	286	397	34.11	A	12	F	12.35	4.35	1.4	
992	MN40	318	356	34.08	A	12	PFS[左下:背腹]	17	16.5	3.5	
993	MN40	362	346	34.131	A	2	F	12.5	16.05	3.8	
994	MN40	380	316	34.136	A	12	PF[下:背腹]	17.75	19.65	5.95	有り
995	MN40	382	316	34.138	A	12	PFS[右上:背腹]	14.1	11.9	3.6	
996	MN40	372	301	34.069	A	2	C	3.2	6.2	1.15	
998	MN40	268	325	34.108	A	10	PF[右下:腹背]	21.2	8.6	2.8	
999	MN40	267	338	34.09	A	9	PF[上:背腹.下:背腹]	20.2	15.9	2.8	
1000	MN40	262	339	34.09	A	9	PF[下:背腹]	17.9	13.45	3.25	
1001	MN41	248	43	34.104	A	5	CoS´	82.25	45.05	22.95	
1002	MN41	270	71	34.131	A	17	F	19.35	16.55	1.5	
1127	MO38	385	52	34.39	B	1	F	7	10.25	3.95	
1128	MO38	359	99	34.387	B	1	PF[下:腹背]	32.95	5.1	1.4	有り
1129	MO38	359	117	34.382	B	12	C	9.9	9.9	9.95	
1130	MO38	326	83	34.384	B	14	PF[上:腹背]	10.6	7.1	2.7	
1131	MO38	288	38	34.449	B	2	F	22.15	16.7	4.05	
1132	MO38	297	81	34.361	B	12	F	7.25	12.45	2.95	
1133	MO38	212	116	34.402	B	3	PF[上:背腹]	12.1	14.4	2.65	有り
1134	MO38	210	110	34.381	B	3	FS	19.05	9.25	14.05	有り
1135	MO38	179	43	34.373	B	3	F	12.45	6	3.2	有り
1136	MO38	175	72	34.395	B	1	FS	43.05	31.5	12.35	
1137	MO38	167	93	34.409	B	3	F	9.5	12.9	10.25	有り
1138	MO38	159	72	34.402	B	2	PF[上:腹背]	18.2	30	5.45	有り
1139	MO38	143	75	34.365	B	1	PF[上:腹背]	28	18.6	3	
1140	MO38	131	116	34.394	B	2	F	20.1	6.2	1.65	有り
1141	MO38	116	124	34.377	B	2	Sp	21.7	9.65	2.15	有り
1142	MO38	136	35	34.361	B	2	F	44.1	27.8	9.95	有り
1143	MO38	61	37	34.403	B	2	PF[上:腹背.下:腹背]	30.65	17	4.1	
1144	MO38	60	49	34.402	B	3	F	13.4	10.2	1.8	有り
1145	MP38	330	51	34.443	B	8	PF[下:背腹]	12.05	15.05	5.25	
1146	MP38	321	52	34.534	B	3	F	23.65	13.7	4.9	有り
1147	MP38	281	38	34.458	B	2	F	45.1	72.7	13.8	
1148	MP38	130	111	34.54	B	1	PF[下:背腹]	26.05	19.85	8.1	
1150	MO37	206	389	34.478	B	2	F	23.25	17.45	4.7	
1151	MO37	165	356	34.452	B	1	PFS´[上:背腹]	14.6	16.85	2.75	
1152	MO37	187	365	34.457	B	2	PF[上:背腹.下:腹背]	16.6	18.05	1.85	
1153	MO37	201	371	34.414	B	2	PF[上:背腹.下:背腹]	36.6	14.1	7.9	
1154	MO37	230	378	34.436	B	12	PF[下:腹背]	19.75	11.35	3.1	有り
1155	MO37	241	356	34.401	B	1	PF[上:腹背.下:腹背]RF	22.9	22.5	3.5	有り
1156	MO37	180	324	34.409	B	2	PF[下:腹背]	22.1	9.35	3.1	
1157	MO37	193	314	34.423	B	1	F	19.05	11.8	1.6	
1158	MO37	245	322	34.432	B	2	F	15.35	11.35	3.9	
1159	MO37	238	298	34.367	B	2	PF[下:腹背]	12.3	17.8	5.25	有り

第18表　第Ⅱ群石器一覧表（9）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1160	MO37	264	323	34.374	B	2	PF[下:腹背]	15.75	18.35	5.4	
1161	MO37	390	266	34.395	B	2	G(1682基)	51.15	20.4	11.75	有り
1162	MO37	373	321	34.375	B	2	F	23.7	25.6	5.9	
1163	MO37	375	370	34.34	B	4	F	17.6	15.75	2.95	
1164	MO37	355	373	34.368	B	1	FS	42.9	31.5	7.2	有り
1165	MO37	324	297	34.361	B	10	G	67.7	22.75	10.5	
1166	MO37	263	281	34.409	B	1	PF[下:背腹]	40.45	26.95	2.95	
1167	MO37	265	202	34.386	B	12	F	8.9	13.6	2.4	
1168	MO37	260	206	34.402	B	3	F	16.75	11.95	3.45	有り
1169	MO37	399	183	34.365	B	1	PF[下:背腹]	18.8	17.45	4.8	有り
1170	MO37	313	152	34.414	B	2	F	41.25	19.5	5.45	有り
1171	MO37	197	246	34.393	B	1	FS	27.6	24.15	8.2	
1172	MO37	197	217	34.403	B	1	FS	29.9	15.2	6.7	
1173	MO37	178	204	34.388	B	12	F	11.65	8.75	2.9	
1174	MO37	170	210	34.436	B	4	PF[上:背腹]	21.5	17.1	3.25	
1175	MO37	176	236	34.458	B	1	F	11.8	10	1.25	
1176	MO37	165	246	34.458	B	1	G(796基部)	51.5	14.65	10.35	有り
1177	MO37	183	259	34.415	B	7	PF[下:腹背]	25.5	31.55	8.95	
1178	MO37	166	256	34.409	B	4	F	21.2	12	27.5	
1179	MO37	163	277	34.448	B	2	PF[上:背腹.下:腹背]	16.9	18.05	2	有り
1180	MO37	155	288	34.425	B	2	F	8.6	15.9	2.8	
1181	MO37	153	295	34.465	B	2	F	14	14.5	3.7	
1182	MO37	142	303	34.424	B	2	F	7.45	14.6	1.4	
1183	MO37	154	335	34.444	B	1	F	16.35	13	4.6	
1184	MO37	150	348	34.416	B	22	F	79.15	36.2	6.65	
1185	MO37	142	368	34.436	B	1	PF[上:腹背]	20.67	19.2	3	
1186	MO37	140	367	34.437	B	3	F	27.55	26.2	5.5	有り
1187	MO37	142	356	34.423	B	7	F	52.75	37.4	18.25	
1188	MO37	133	397	34.49	B	1	PF[下:背腹]	7.9	12.8	3.95	
1189	MO37	119	374	34.455	B	2	RF	7.9	11.75	2.35	有り
1190	MO37	124	361	34.484	B	2	PF[下:背腹]	47.8	19.6	6.2	
1191	MO37	124	320	34.479	B	2	G(821先端)	26.6	14.85	3.9	
1192	MO37	33	395	34.465	B	1	F	14.35	7	3.7	
1193	MO37	90	388	34.444	B	2	F	20.45	10.75	6.55	
1194	MO37	35	134	34.459	B	6	PFS[上:背腹.下:背腹]	28	41	10.45	有り
1195	MO37	4	160	34.389	B	1	PF[上:腹背.下:腹背]	12.7	21	4	
1196	MO37	113	185	34.449	B	2	F	8.3	11	2.7	
1197	MO37	78	187	34.4	B	1	PF[下:腹背]	13.25	9.85	2.9	
1198	MO37	107	195	34.395	B	2	PF[下:背腹]	29.4	23.25	5	
1199	MO37	90	202	34.375	B	3	F	7.1	16.8	6.6	有り
1200	MO37	123	232	34.441	B	1	C	8.95	6.75	3.4	
1201	MO37	84	226	34.458	B	10	G	64.55	27.8	9.35	
1203	MO37	17	206	34.431	B	4	F	21.4	12.2	3.05	
1205	MO37	46	245	34.43	B	1	PF[上:背腹.下:腹背]	31.5	12.35	4.25	
1206	MO37	53	253	34.479	B	12	PFS´[上:背腹]	48.4	29.4	9.55	有り
1207	MO37	71	261	34.465	B	3	F	7.45	10.6	2.8	有り
1208	MO37	95	276	34.472	B	1	PFS´[下:背腹]	42.1	31.1	11.8	
1209	MO37	100	289	34.408	B	1	PF[左上:背腹]	15.9	26.75	5.1	
1210	MO37	112	295	34.422	B	4	PF[上:背腹]	17.55	20.55	3.3	
1211	MO37	121	307	34.432	B	8	F	8.2	18.55	4.8	
1212	MO37	136	330	34.486	B	2	PFS[上:背腹]	15.2	13.55	1.9	
1214	MO37	126	347	34.43	B	5	F	11.4	8.7	2.75	
1215	MO37	118	339	34.431	B	1	F	7.65	10.35	4.55	
1216	MO37	105	347	34.472	B	1	Sp	19.45	7.25	3.65	
1217	MO37	70	314	34.408	B	1	FS´	21.25	12.7	2.6	
1218	MO37	90	320	34.423	B	1	PF[上:背腹.下:背腹]	46.5	38.35	5.05	
1219	MO37	81	335	34.41	B	2	F	24.7	28.9	8	
1221	MO37	14	265	34.43	B	4	PF[下:背腹]	9.85	16.4	3.2	
1222	MO37	13	301	34.43	B	2	F	18.5	8.45	1.65	
1223	MO37	0	333	34.437	B	3	PF[上:腹背.下:背腹]	15.3	16.9	1.85	有り
1224	MO37	10	316	34.451	B	3	F	14.8	17.15	2.95	有り
1225	MO37	38	313	34.455	B	3	F	15.1	17.1	1.85	有り
1226	MO37	14	331	34.448	B	2	F	13.35	13.55	5.15	
1227	MP37	388	359	34.444	B	1	F	24.2	23.1	6.7	有り
1228	MO38	164	30	34.43	B	8	FS	24.05	5.45	2	

第19表　第Ⅱ群石器一覧表（10）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1229	MO38	14	66	34.354	B	2	F	11.9	7.65	2.9	
1230	MO38	33	72	34.362	B	2	PF[上:腹背.下:腹背]	34.25	16.25	2.3	
1231	MO38	155	86	34.337	B	1	F	31.15	26.6	5.95	有り
1232	MO38	143	223	34.422	B	3	F	12.4	15.55	2.25	有り
1233	MP38	390	33	34.415	B	1	F	11.4	4.05	3	
1234	MO37	157	271	34.394	B	1	PF[下:腹背]	13.85	22	4.4	有り
1235	MO37	154	297	34.376	B	3	F	21.35	17.15	5.8	有り
1236	MO37	161	339	34.365	B	1	PF[下:背腹]	23.65	11.1	2.75	
1237	MO37	120	303	34.416	B	2	F	19.1	18.85	3.45	
1238	MO37	141	328	34.43	B	2	PF[上:背腹.下:腹背]	39.75	17.9	3.8	
1239	MO37	145	350	34.373	B	2	F	12.6	1.1	4.6	
1240	MO37	141	358	34.372	B	1	F	14.05	10.95	3.1	
1241	MO37	128	357	34.409	B	2	CoS	53.85	87.65	21.5	
1242	MO37	141	373	34.368	B	2	FS	32.5	66.2	9.65	
1243	MO37	102	341	34.394	B	2	F	15.6	17.35	4.75	
1244	MO37	93	272	34.376	B	1	F	38.1	10.2	2.25	有り
1245	MO37	182	170	34.368	B	4	PFS[下:腹背]	14.65	22.25	4.15	
1246	MO37	153	95	34.369	B	1	PF[下:背腹]	13.8	12.4	3.7	
1247	MO37	372	149	34.333	B	2	PF[上:腹背]	25.45	18.6	4.1	有り
1248	MO36	242	315	34.25	外	19	FS´	69	59.95	32.1	
1249	MM40	38	107	34	A	9	F	15.55	12.85	3.3	
1250	MM40	24	163	34.048	A	5	PF[左:背腹]	16.38	20.22	4.82	
1251	MM40	52	60	34.062	A	9	FS	26.9	15	5.2	
1252	MM40	131	144	33.991	A	2	F	11.8	12.05	1.15	
1255	MM40	96	210	34.041	A	12	FS	21.9	22.1	4.4	有り
1256	MM40	67	197	34.076	A	12	F	27.6	24.25	3.1	
1257	MM40	52	181	34.002	A	17	F	13.65	11.35	2.55	
1258	MM40	43	230	34.067	A	17	FS	64.25	45.8	11.45	
1259	MM40	38	194	34.02	A	12	F	11.4	7.2	2	
1260	MM40	27	205	34.048	A	30	F	17.2	9.35	4.75	
1261	MM40	26	216	34.034	A	30	F	17.5	11.75	3.8	
1262	MM40	14	210	34.054	A	5	PF[上:腹背]	28.65	13.6	3.2	
1263	MM40	41	274	34.012	A	12	PF[上:背腹]	22.75	12.15	4.45	
1264	MM40	16	274	34.032	A	2	C	6.75	5.9	1.4	
1265	MM40	11	270	34.036	A	10	F	15.1	19.65	6	
1266	MM40	39	324	34.067	A	12	PF[上:背腹]	18.4	13	3.5	
1267	MM40	14	320	33.955	A	17	FS	25.9	23.55	3.45	
1268	MM40	26	356	34.006	A	12	F	9.25	12.05	4.15	
1269	MM40	22	392	33.924	A	2	PF[上:腹背.左下:背腹]	29.4	27.2	4.2	
1270	MM40	1	346	33.993	A	4	C	9.2	8.7	0.65	
1271	MN40	390	330	33.941	A	12	F	20.95	10.2	2.95	
1272	MN40	380	364	34.041	A	12	PFS[上:腹背]	31.25	26.85	5.75	
1273	MN40	367	260	34.039	A	17	F	13.45	17.25	2.15	
1274	MN40	396	224	34.062	A	9	F	21.4	17.45	3.6	
1276	MN40	367	163	34.073	A	12	F	11.75	9	2.2	
1277	MN40	394	161	33.993	A	2	CF	34.25	10.95	5.85	
1278	MM41	18	18	34.027	A	2	Co	37.45	38.2	29.8	
1279	MM41	23	23	34.151	A	2	Sp	20.55	6.6	2.35	
1280	MM41	52	13	34.002	A	17	FS´	29.05	21.15	7.4	
1281	MM41	57	13	34.034	A	12	FS	15.8	11.5	2.15	
1282	MM41	4	51	34.111	A	2	F	17.6	9.6	1.75	有り
1283	MM40	10	267	33.997	A	17	PF[上:背腹]	38.9	19.4	2.3	
1284	MM40	30	189	33.979	A	10	PF[上:腹背.下:腹背]	14.7	10.1	4.05	
1285	MM40	64	198	34.011	A	12	PF[下:背腹]	17.4	14.1	2.1	
1286	MM40	79	202	33.985	A	5	F	12.45	14.4	3.15	
1287	MN40	200	210	34.115	A	9	FS	70.1	58.2	18.35	
1288	ML40	310	150	34.178	A	23	FS´	54.3	56	38	
1289	MK40	6	302	34.115	外	13	FS	60.9	33.75	5.6	
1297	MO37	337	380	34.307	B	2	F	5.4	10.95	1.45	
1298	MO37	293	338	34.325	B	3	C	6.25	8	0.7	有り
1299	MO37	295	298	34.311	B	2	C	5.55	8.9	3.5	
1300	MO37	182	329	34.34	B	1	F	30.65	11.65	4	有り
1301	MO37	177	274	34.366	B	1	F	17.05	9.45	2.8	
1302	MO37	198	202	34.33	B	1	F	15.35	12.45	2.1	
1303	MO37	163	218	34.367	B	12	F	7.25	11.9	2.95	

第20表　第Ⅱ群石器一覧表（11）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1304	MO37	153	224	34.348	B	2	F	13.85	11.5	4.25	有り
1305	MO37	130	372	34.359	B	1	PF[上:背腹]	31.85	10.2	2.4	
1306	MO37	120	269	34.347	B	3	F	9.4	12.2	2.8	
1307	MO37	132	312	34.369	B	3	F	16.8	21.35	8.6	
1308	MO37	139	332	34.36	B	2	F	21.6	21.25	4.15	
1309	MO37	129	343	34.367	B	7	PF[下:腹背]	19.2	22	5.25	
1310	MO37	111	341	34.375	B	2	Sp	8.1	15.5	2.95	有り
1311	MO37	58	299	34.382	B	3	F	19.45	14.25	8.1	有り
1312	MO37	34	334	34.381	B	3	F	12.5	18	6.35	有り
1313	MO37	25	395	34.513	B	1	F	11.5	10.25	3.1	
1314	MO37	85	108	34.34	B	1	FS	13.15	13.55	3.9	
1315	MO37	138	185	34.319	B	2	Sp	20.15	8.15	2.15	有り
1317	MK43	163	275	34.27	外	15	PF[上:背腹]	43.8	2.95	3.1	
1359	MM40	151	210	33.916	A	2	K	40.5	14.5	3.3	
1360	MM40	75	190	33.941	A	12	F	7.95	14.35	3.65	
1362	MM40	67	163	33.957	A	2	F	17.2	11.8	1.2	
1363	MM40	64	154	33.965	A	12	F	7.1	10.65	2	
1364	MM40	54	137	33.972	A	5	F	9.7	10.05	1.35	
1365	MM40	24	129	33.99	A	9	F	47.6	40.6	4.4	有り
1366	MM40	9	139	33.958	A	17	F	13.25	13.95	3.3	
1367	MM40	2	125	33.976	A	17	PFS[下:背腹]	21.6	23.75	6.5	
1369	MM40	231	391	33.951	A	10	F	30.75	27.25	3	有り
1372	MM40	134	177	33.956	A	9	C	9.45	6.85	1.2	
1373	MN40	374	122	33.985	A	12	F	9.35	10.15	2.65	
1374	MO37	399	306	34.272	B	3	F	7.2	11.7	1.95	有り
1375	MO37	380	326	34.279	B	3	F	17	11.75	8.5	有り
1376	MO37	299	364	34.269	B	2	PF[下:背腹]	38.2	20.9	7.15	
1377	MO37	310	352	34.247	B	1	F	7.1	12.05	1.9	
1378	MO37	325	332	34.25	B	8	PFS[下:背腹]	29	18.55	3.3	
1379	MO37	310	323	34.277	B	1	F	8.2	15.25	2.5	
1380	MO37	287	302	34.282	B	1	PFS[上:背腹]	14	12.6	4.5	有り
1381	MO37	304	282	34.289	B	3	F	6.25	11.5	2.45	有り
1382	MO37	236	294	34.263	B	2	FS	16.9	27	4.35	有り
1383	MO37	245	146	34.284	B	4	F	24.25	15.25	3.05	
1384	MO37	250	124	34.312	B	1	PF[下:背腹]	14.65	13.55	5.65	
1385	MO37	265	211	34.292	B	2	PF[右:下:腹背]	31.4	38.25	8.45	有り
1386	MO37	212	247	34.298	B	3	F	14.35	18.8	12.65	有り
1387	MO37	158	267	34.029	B	2	PF[右上:腹背]	26.9	14.8	2.55	
1388	MO37	180	316	34.277	B	1	F	12.1	22.15	5	
1389	MO37	186	390	34.326	B	2	PF[下:背腹]	22.1	19.7	2.35	
1390	MO37	166	354	34.033	B	1	PF[右上:背腹.下:背腹]	10.1	19.55	3.65	
1391	MO37	155	370	34.304	B	2	PF[上:背腹]	28.4	29.4	6.35	有り
1392	MO37	154	359	34.32	B	2	PF[上:背腹.下:背腹]	19.55	22.3	2.5	
1393	MO37	146	332	34.365	B	1	F	19.1	6	4.15	
1394	MO37	135	386	34.344	B	14	F	18.3	13.55	3.4	
1395	MO37	140	364	34.352	B	1	PF[上:背腹.下:背腹]	38.55	23.1	5.35	
1396	MO37	140	347	34.361	B	1	PFS[左下:腹背]	31.85	19.85	7.85	
1397	MO37	132	319	34.312	B	2	F	13.55	7.4	3.4	
1398	MO37	115	382	34.334	B	2	F	9.75	13.3	2.3	
1399	MO37	111	354	34.354	B	14	PF[下:腹背]	14.1	7.45	3.3	
1400	MO37	120	346	34.361	B	2	PF[上:背腹]	15.55	16.35	1.7	
1401	MO37	107	340	34.362	B	2	F	37.4	16.1	4.05	
1402	MO37	77	343	34.361	B	2	Sp	29	9	3.65	有り
1403	MO37	87	305	34.344	B	14	F	22	13.45	3.85	
1404	MO37	4	384	34.366	B	2	G	54.75	15.4	6.6	
1405	MO37	13	387	34.359	B	1	PF[下:背腹]	13.2	18.2	3.15	有り
1406	MO37	34	377	34.347	B	2	C	9.45	6.85	1.55	
1407	MO37	42	329	34.344	B	2	F	15.2	12.15	2.65	有り
1408	MO37	41	304	34.352	B	8	PFS[上:背腹]	19.1	20.4	5.5	
1409	MO37	35	259	34.332	B	1	PF[下:背腹]	27.35	17.5	5.45	
1410	MO37	3	264	34.341	B	3	F	14.6	17.45	8.4	有り
1411	MO37	145	202	34.3	B	3	F	24.2	19.9	2.5	有り
1412	MP37	381	375	34.361	B	8	FS	40.7	35.1	13.3	有り
1413	MK43	232	247	34.312	外	15	F	36.2	37.7	6.1	
1414	MI45	111	365	34.444	外	2	PF[右下:腹背]	41.55	31.35	4.9	有り

第21表　第Ⅱ群石器一覧表（12）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1419	MI30	138	160	33.894	外	4	FS´	33.35	31	5.95	
1420	MO37	330	382	34.255	B	4	RF	10.1	9.85	2.8	
1421	MO37	157	380	34.284	B	1	FS´	19.5	11.25	5.75	
1422	MO37	148	360	34.276	B	2	F	32.15	22	5	
1423	MO37	158	349	34.264	B	1	F	23.2	8.1	1.6	
1424	MO37	139	376	34.291	B	2	PF[上:腹背]	10.95	17.45	6.15	
1425	MO37	122	364	34.324	B	1	PFS´[上:背腹]	16.65	15	6.55	
1426	MO37	125	356	34.34	B	2	K[先基欠]	41.3	15.1	5.2	
1427	MO37	134	349	34.319	B	2	F	36.55	40.05	11.25	
1428	MO37	130	342	34.291	B	1	PF[左下:背腹]	19.45	18.65	3.3	
1429	MO37	135	339	34.323	B	1	FS	26.95	18.4	3.45	
1430	MO37	143	333	34.32	B	2	F	41.8	9.6	2.2	
1431	MO37	102	361	34.305	B	10	Sp	16.75	6.95	3.05	
1432	MO37	115	347	34.34	B	1	F	27.1	12.7	2.3	
1433	MO37	123	333	34.299	B	1	PF[上:背腹]	14.3	16.4	2.1	
1434	MO37	119	323	34.319	B	2	PF[上:背腹.下:腹背]	40.35	11.7	6.6	
1435	MO37	110	326	34.31	B	1	F	21.5	12.65	4.7	
1436	MO37	75	327	34.338	B	1	PF[上:背腹]	16.85	8.7	1.5	
1437	MO37	106	299	34.297	B	12	PF[下:背腹]	15.85	9	3.1	
1438	MO37	70	294	34.33	B	1	Es	53.15	25.1	7.95	
1439	MO37	113	377	34.289	B	7	F	19.5	30.15	6.1	
1440	MO37	338	357	34.24	B	1	F	11.35	19.6	2.4	
1441	MO37	352	339	34.243	B	4	F	6.85	14.15	0.95	
1442	MO37	249	365	34.235	B	1	PF[下:背腹]	40.8	18.8	4.05	
1443	MO37	220	374	34.263	B	2	C	9.4	8.4	1.7	
1444	MO37	172	390	34.326	B	1	F	16.1	15.4	2.7	
1445	MO37	152	348	34.258	B	2	PFS[下:腹背]	25.05	21.9	6	
1446	MO37	145	332	34.284	B	1	F	9.15	11.3	2.5	
1447	MO37	140	385	34.277	B	2	F	19.5	13.7	2.3	
1448	MO37	127	378	34.284	B	1	F	14.45	9.8	1.3	
1449	MO37	125	369	34.303	B	2	F	38.1	13.55	5.75	
1450	MO37	131	357	34.282	B	2	PF[上:背腹.下:腹背]	12.75	12	1.6	
1451	MO37	122	355	34.3	B	2	PFS[下:背腹]	47.6	23.35	18.15	
1452	MO37	123	346	34.285	B	1	PF[上:背腹.下:腹背]	33.45	14	4.5	
1453	MO37	115	361	34.291	B	2	PF[上:背腹]	30.7	16.1	2.35	
1454	MO37	105	355	34.304	B	2	C	9.65	8	1.45	
1455	MO37	71	358	34.332	B	1	FS	10.05	13	5.75	
1456	MO37	71	344	34.319	B	2	PF[上:背腹]	27.1	27.8	1.75	有り
1457	MO37	56	323	34.319	B	3	F	20.95	20.65	3.2	有り
1458	MO37	326	324	34.234	B	2	F	15.8	10.05	1.7	
1459	MP37	394	339	34.321	B	14	F	19.9	9	2.4	
1460	MP37	370	384	34.34	B	3	F	15.25	12.7	7.9	有り
1461	MP37	339	383	34.34	B	3	F	12.7	10.85	6.4	有り
1462	MO37	152	390	34.275	B	2	FS	31.8	31.2	7.3	
1463	MO37	160	358	34.272	B	1	PF[上:背腹]	30.65	21.85	6.05	
1464	MM40	38	174	33.909	A	2	PF[下:腹背]	17.8	19.75	5	有り
1465	MM40	75	156	33.915	A	4	F	24.55	15.8	2.6	
1466	MM40	80	153	33.916	A	5	PF[下:背腹]	19.15	18.95	6.95	
1467	MM40	83	170	33.93	A	5	PF[右上:腹背]	42	19.55	4.59	
1468	MM40	94	172	33.916	A	2	PF[上:背腹.下:腹背]	22.6	7	2.7	
1469	MM40	120	174	33.93	A	5	Co	54.94	52.3	43.38	
1470	MM40	140	180	33.937	A	2	F	36.75	21.65	9.25	
1471	MM40	169	151	33.937	A	12	F	12	4.6	1.25	
1473	MM40	49	75	34.018	A	2	F	12.6	5.05	1.55	
1474	MM40	113	125	33.958	A	17	FS	10	14.65	4.9	
1476	MM40	158	120	33.972	A	5	F	18.15	5.95	3.95	
1477	MM40	285	107	33.896	A	1	F	16.4	8.2	4.4	
1479	MO37	332	243	34.256	B	1	PFS´[下:背腹]	18.9	25	4.9	
1480	MO37	330	283	34.251	B	2	PF[上:背腹.下:背腹]	20.9	8.65	2.2	
1481	MO37	288	264	34.236	B	1	F	6.15	11.7	1.7	有り
1482	MO37	217	272	34.221	B	1	PFS´[上:背腹]	33.5	13.55	4.85	
1483	MO37	195	247	34.25	B	1	PFS[左下:背腹]	26.1	17.5	6.95	
1484	MO37	187	210	34.242	B	3	F	17.8	13.45	7.2	有り
1485	MO37	168	254	34.236	B	1	PFS[上:背腹.下:背腹]	17.6	16.55	4.25	
1486	MO37	190	370	34.243	B	1	FS	47.45	36.85	9.7	

第22表　第Ⅱ群石器一覧表（13）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1487	MO37	168	354	34.261	B	3	F	24.85	10.1	5.5	有り
1488	MO37	165	373	34.248	B	1	PFS´[右上:背腹.左下:腹背]	26.35	29.35	5	
1489	MO37	148	358	34.257	B	2	F	15.1	5.55	1.75	
1490	MO37	141	312	34.244	B	2	C	7.4	6.1	4.1	
1491	MO37	132	324	34.258	B	2	PF[下:腹背]	12.4	17.7	4.8	
1492	MO37	139	342	34.236	B	2	F	51.7	54.5	11.6	
1493	MO37	130	343	34.273	B	2	C	5.55	8.4	4.2	
1494	MO37	127	340	34.276	B	14	PF[上:腹背]	11.15	6.6	1.7	
1495	MO37	125	359	34.251	B	2	PF[上:背腹]	28.85	17.5	2.35	
1496	MO37	119	357	34.254	B	2	F	15.8	11	1.85	
1497	MO37	112	346	34.269	B	1	PF[下:腹背]	36.35	21.1	4.3	
1498	MO37	115	365	34.248	B	10	Sp	11.6	5.2	1.3	
1499	MO37	116	372	34.291	B	3	F	10.4	7.65	0.65	有り
1500	MO37	121	382	34.256	B	2	F	8.5	11.5	5.25	
1501	MO37	120	386	34.269	B	2	F	11.5	11.5	2.9	
1502	MO37	116	393	34.276	B	2	K[基部]	6.35	8.1	2.1	
1503	MO37	99	372	34.278	B	14	F	14.3	16.6	2.65	
1504	MO37	102	300	34.27	B	2	C	8.7	5.75	2	
1505	MO37	47	312	34.282	B	1	PF[下:腹背]	6.9	15.8	5.15	
1506	MO37	6	350	34.305	B	3	FS	15.8	10.9	9.45	有り
1507	MO37	53	224	34.278	B	5	F	13.3	9.95	3.2	
1508	MO37	111	249	34.25	B	4	F	15.2	10.5	2.85	
1509	MO38	369	53	34.22	B	1	F	11.6	11.15	4.3	
1510	MO38	130	84	34.247	B	2	F	16.45	17.05	2.1	
1511	MP38	389	113	34.351	B	12	F	11.85	10.2	3.7	
1512	MP38	388	105	34.347	B	2	F	15.6	13.3	1.55	
1513	MP38	363	78	34.351	B	2	F	62.7	36.15	12.15	
1514	MP38	358	171	34.388	B	12	F	10.55	14	3.05	
1515	MP38	356	224	34.429	B	12	F	16.7	6.3	1.55	
1516	MO37	188	391	34.231	B	2	PF[上:腹背]	21	55.23	9.15	
1517	MO37	163	371	34.227	B	1	PF[上:背腹.下:腹背]	15.25	13.1	1.5	
1518	MO37	120	382	34.254	B	2	F	6.6	10.9	2	
1519	MO37	117	359	34.237	B	1	F	6	12.8	2.2	
1520	MO37	131	344	34.222	B	1	F	13.75	4.35	1.3	
1521	MO37	128	333	34.254	B	2	F	12.95	4.4	0.8	
1522	MO37	106	311	34.248	B	3	C	9.6	8.95	1	有り
1524	MO37	98	397	34.354	B	1	PF[上:背腹.下:背腹]	33.75	21.45	1.7	
1525	MO37	95	365	34.247	B	2	F	6.9	11.95	2	
1526	MN40	375	317	33.928	A	2	F	10.1	11	2.25	
1527	MM40	103	200	33.895	A	12	PF[上:腹背.下:腹背]	8.5	27	2.5	
1528	MM40	137	169	33.901	A	2	Es	85.8	19.9	8.6	
1529	MP38	370	49	34.299	B	2	CF[PF下:腹背]	45.6	11.2	8.25	
1530	MO37	114	367	34.228	B	1	PF[下:背腹・腹背]	12.05	7.9	1.9	
1531	MO37	111	356	34.227	B	2	F	6.35	17	5.6	
1532	MO37	151	362	34.215	B	2	PFS[下:腹背]	18.7	12.2	2.7	
1534	MO37	174	396	34.332	B	1	FS´	26.2	21.95	7.1	
1535	MM40	99	86	33.895	A	12	FS´	30.7	18.4	4	
1536	MM40	120	110	33.916	A	5	F	11.35	10.45	1.8	
1537	MM40	154	141	33.888	A	5	F	27.01	30.68	5.98	
1538	MM40	121	160	33.889	A	12	F	14.45	6.25	1.6	
1539	MN40	396	303	33.918	A	2	F	13.15	14.95	2.95	
1546	MO37	185	386	34.201	B	2	PFS[下:背腹]	16.45	29.6	6	
1547	MO37	145	385	34.198	B	2	PF[下:腹背]	12.65	14.4	3.05	
1548	MO37	154	360	34.207	B	14	F	27.2	13.25	3.65	
1549	MO37	162	327	34.201	B	1	PFS[上:背腹]	36.2	41.95	7.05	
1550	MO37	153	327	34.201	B	2	RF	54.65	15.6	4.15	
1551	MO37	147	334	34.215	B	1	PF[上:背腹]	39.15	12	1.9	
1552	MO37	128	336	34.207	B	1	F	13.3	13.2	2.7	
1553	MO37	128	352	34.2	B	2	F	30.7	16.5	3.2	
1554	MO37	140	360	34.201	B	2	PF[上:腹背]	21.2	4.7	2.6	
1555	MO37	117	380	34.198	B	1	PF[上:背腹]	22.3	8.4	3.15	
1556	MO37	119	368	34.222	B	1	PF[上:腹背]	9.75	20	3.6	
1557	MO37	115	364	34.224	B	2	F	6.2	13	1.35	
1558	MO37	106	382	34.209	B	2	G	43	12.7	3.75	
1559	MO37	110	321	34.193	B	2	F	15.6	8.7	1.5	有り

第23表　第Ⅱ群石器一覧表（14）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1560	MO37	60	328	34.213	B	1	PFS´[上:背腹]	12.85	23.5	3.6	
1561	MO37	30	329	34.226	B	2	F	16.6	4.05	1.95	
1562	MO37	9	310	34.236	B	17	F	17.05	8.8	2.6	
1563	MP37	391	278	34.268	B	2	PF[上:腹背]	24.65	18.7	5.35	有り
1564	MO37	190	358	34.191	B	10	Sp	25.95	7.95	3.5	
1565	MO37	206	373	34.197	B	1	"PF[上:背腹.下:腹背]"	29.15	14.15	3.35	
1566	MO37	293	177	34.266	B	2	F	18.8	10.4	5	
1567	MO37	115	376	34.221	B	1	Sp	12.35	7.4	1.6	
1568	MO37	120	370	34.203	B	2	F	4.9	13.95	4.2	
1569	MO37	50	200	34.248	B	8	PF[上:腹背]	10.65	20.4	2.95	
1570	MM40	10	389	34.479	A	2	PFS[上:腹背]	30.9	19.3	4.4	有り
1571	MM40	12	399	34.483	A	2	F	11.9	5.55	2.15	
1572	MM40	14	395	34.483	A	5	CoS	41.72	28.56	10.18	
1573	MO37	210	384	34.171	B	12	PF[上:背腹.下:腹背]	21.35	9.8	2.85	
1574	MO37	182	390	34.192	B	1	FS	9.9	18.55	4.35	
1575	MO37	155	362	34.187	B	1	FS´	9.6	18	3	
1576	MO37	143	351	34.187	B	1	PF[右下:背腹]	13.3	9.95	2.35	
1577	MO37	129	348	34.191	B	2	F	9.15	10.7	0.9	
1578	MP38	327	28	34.297	B	1	PFS[下:背腹]	30.5	28.65	8.5	
1579	MO38	114	190	34.33	B	12	PFS[下:背腹]	15.4	21.85	3.3	有り
1581	MO38	278	374	34.312	B	1	FS	44	39.9	10.1	
1582	MM40	9	400	34.16	A	10	PF[上:背腹.下:腹背]	17.5	10.05	2.8	
1583	MO37	345	298	34.227	B	2	PF[下:背腹]	25.55	20	2.45	
1584	MM40	13	398	34.111	A	10	PF[下:背腹]	23.45	11.25	2.55	
1587	MO37	77	396	34.451	B	3	F	14.8	14.2	6.6	有り
1588	MO37	154	393	34.298	B	1	PF[上:背腹.下:腹背]	32.4	15.9	4.2	
1589	MP37	300	372	34.311	B	2	F	25.05	17.75	4.7	
1590	MO37	196	395	34.23	B	1	F	13.45	11.8	0.9	
1591	MO37	131	393	34.032	B	2	F	19.05	14.1	1.15	
1592	MO37	352	396	34.312	B	13	F	16.45	20.65	4.75	
1604	MP37	299	392	34.31	B	2	PF[下:背腹]	16.6	19	3.15	
1605	MO37	150	338	34.167	B	12	FS´	21.65	17.65	3.7	
1606	MO37	142	360	34.168	B	2	C	9	6.35	1.9	
1607	MO37	138	349	34.166	B	2	F	16.6	18.6	3.7	
1608	MO37	133	350	34.167	B	7	F	16.85	20.05	5.45	
1609	MO37	131	341	34.159	B	12	F	14.55	9.55	2.3	
1610	MO37	110	358	34.173	B	3	F	14.6	10.9	6.6	有り
1611	MO38	220	23	34.681	B	1	PF[下:背腹]	26.1	17.9	5.1	
1612	MO38	185	13	34.673	B	1	FS´	29	29.85	8	
1613	MO38	314	5	34.553	B	9	D	38.4	24.1	7.95	
1614	MO38	300	13	34.512	B	4	CF	27.45	20.65	7.3	
1615	MO38	247	19	34.519	B	1	PFS[上:背腹]	25.35	18.85	7.65	
1616	MO38	214	5	34.55	B	1	PFS[上:腹背]	35.15	38.8	8.1	
1617	MO38	198	8	34.61	B	1	F	13.9	8.9	5.4	
1618	MO38	190	25	34.59	B	2	PF[下:背腹]	10.9	17.5	4.25	
1619	MO38	185	23	34.59	B	3	F	12.95	11	2.7	有り
1620	MO38	150	25	34.562	B	1	PFS[上:腹背.下:腹背]	20.6	21.4	4.3	
1621	MO38	106	10	34.535	B	8	PF[上:腹背]	23.95	21.45	2.65	
1622	MO38	47	7	34.692	B	8	PFS[上:腹背]	8.85	17.1	4.2	
1623	MO38	58	13	34.555	B	2	F	24.35	20	6.4	有り
1624	MO38	69	0	34.512	B	2	PF[左:背腹]	28.7	21.75	8.6	
1625	MO38	106	7	34.494	B	2	PF[上:腹背]	10.1	15.8	3.05	
1626	MP38	334	16	34.43	B	1	PF[上:腹背.下:背腹]	12.1	12.2	1.7	
1627	MP38	282	29	34.43	B	1	FS	75	61.25	15.2	
1628	MP38	256	5	34.445	B	14	F	30.9	21.35	4	
1629	MO37	137	348	34.161	B	1	F	12.15	15.5	3.15	
1630	MO37	134	397	34.448	B	2	PFS[上:背腹.左下:背腹]	34.1	32.3	4.7	
1631	MO37	62	398	34.47	B	2	F	15.1	16.1	2.6	
1632	MO38	238	7	34.395	B	1	F	13.9	13.55	4.6	
1633	MO38	193	6	34.581	B	2	F	11.2	16.25	1.25	
1634	MO38	112	9	34.432	B	2	PF[上:背腹]	20.15	21.9	2.35	
1635	MO38	72	22	34.465	B	3	F	17.4	17	8.2	有り
1637	MO38	44	6	34.583	B	3	F	19.45	12.35	4.5	有り
1638	MO38	68	26	34.43	B	4	C	9.7	7.6	1.7	
1639	MO38	133	24	34.421	B	3	F	10.5	9.45	2.45	有り

第24表　第Ⅱ群石器一覧表（15）

番号	グリッド	E→W	S→N	標高	ブロック	個体番号	器種	長さ	幅	厚さ	被熱
1640	MO37	136	314	34.126	B	1	PFS´[上:背腹]	28.9	28.05	8.65	
1641	MM40	46	107	33.896	A	12	PFS[上:背腹]	22	15.4	2.8	
1642	MM40	42	122	33.889	A	2	F	21.85	11.5	2.45	有り
1643	MP37	397	395	34.508	B	1	PF[下:背腹]	69.7	19.9	5	
1644	MO37	87	311	34.137	B	12	F	5.95	13.05	3.8	
1645	MO37	137	333	34.104	B	14	PF[上:腹背]	12.3	8.65	2.4	
1646	MO37	210	398	34.402	B	14	F	26.1	14	2.8	
1647	MO37	190	397	34.505	B	2	CF	45.1	9.9	7.2	有り
1648	MO37	95	298	34.12	B	6	F	27.6	17.45	4.15	
1650	MO38	130	21	34.354	B	1	F	16.4	9.5	1.25	
1651	MO38	134	10	34.47	B	1	PFS[上:腹背]	66.3	26.75	11.1	
1652	MO38	95	12	34.331	B	12	FS	30.5	16.35	5.5	
1653	MO38	85	4	34.349	B	2	F	14.2	8.35	4	
1654	MO38	75	0	34.338	B	3	C	8.6	7.5	1.3	有り
1655	MO38	73	0	34.34	B	3	F	10.5	5.2	3.85	有り
1656	MO38	193	0	34.401	B	1	PF[上:腹背.下:腹背]	11.95	13.4	1.9	有り
1669	MQ37	284	385	34.715	B	3	FS	26.1	49.65	30.25	有り
1670	MQ38	295	86	34.694	B	3	FS´	42.7	63.6	34.25	有り
1671	MQ38	286	123	34.664	B	3	FS´	25.9	42	22.15	有り
1674	MN40	371	311	33.924	A	2	Sp	20.25	9.65	3.35	
1675	MP38	323	25	34.375	B	1	PF[上:背腹.下:背腹]	51.6	21.2	5.8	
1676	MP38	370	25	34.282	B	3	F	17.4	22.15	2.9	有り
1677	MO38	80	0	34.266	B	2	PF[下:背腹]	15.05	11.25	1.95	
1678	MO38	93	8	34.263	B	1	PF[下:背腹]	10.15	11.45	7.25	
1679	MO38	120	13	34.276	B	1	F	10.75	6	1	
1680	MO38	131	4	34.319	B	2	F	22	4.6	5.5	
1681	MO38	128	18	34.264	B	2	G	41.2	29.05	6.85	
1682	MO38	131	24	34.229	B	2	G(1161)	11.45	12.95	4.5	
1683	MO38	168	3	34.261	B	1	FS	49	28.65	12.4	
1684	MO38	166	24	34.193	B	1	Sp	22.6	7.55	1.65	
1685	MO38	234	16	34.216	B	2	F	11.45	9	4.3	
1693	MO37	111	399	34.075	B	3	C	8.3	4.4	2.15	有り
1694	MP38	235	17	34.355	B	8	PF[上:腹背]	27.55	18.4	4.15	
1719	MM40	107	168	33.831	A	12	F	20	13.7	3	
1720	MM40	138	162	33.729	A	12	FS	54.06	41.95	12.07	
1721	MM40	160	172	33.826	A	17	PF[上:腹背]	25.8	22.7	3.15	
1723	MM40	134	149	33.805	A	2	F	19.1	22.25	4	
1724	MM40	90	186	33.847	A	12	C	3.8	7.15	1.25	
1725	MN40	387	298	33.915	A	12	F	11.15	16.3	5.5	
1726	MM40	94	103	33.854	A	12	F	25.45	20.55	6.35	
1727	MM40	90	127	33.811	A	12	PF[上:背腹]	32.65	9.4	2.35	
1746	MM40	111	95	33.807	A	30	F	16.1	10.3	5.8	
1747	MM40	56	85	33.84	A	2	C	7.75	6.85	2.6	
1748	MM35	380	249	34.198	外	6	K	66.8	19.65	7.65	有り
1754	MM40	111	189	33.816	A	17	FS	38.35	24.1	4	有り
1757	MP26	206	241	34.251	D	4	F	20.4	28.2	6.2	
1759	MP26	333	211	34.173	D	4	FS	23.8	27.9	7.9	有り
1821	MO19	260	92	34.104	外	4	FS´	37.95	45.7	11.3	有り
1850	MM40	97	132	33.756	A	2	C	6.6	8.6	1.4	
1851	MM40	55	105	33.694	A	17	PF[上:腹背]	52.35	32.5	15.6	
1852	MM40	98	123	33.799	A	17	F	19.55	20.5	5.35	
1853	MM40	48	110	33.786	A	10	PF[上:背腹.下:腹背]	14.65	18	2.65	
1854	MM40	99	119	33.623	A	12	C	5.45	8.4	2.65	
1855	MM40	108	105	33.694	A	9	PF[下:腹背]	24.15	31.7	7.75	有り
1856	MM40	70	118	33.657	A	2	F	35.75	7.5	3.5	有り
1857	MM40	68	104	33.582	A	5	PF[上:背腹.下:腹背]	11	16.05	2.35	

器種凡例

K:ナイフ形石器　G:彫器　Es:掻器　Sc:削器　D:錐器　Sp:削片
Co:石核　RF:二次加工ある剥片　F:剥片　CF:稜付剥片　C:チップ

※FおよびCoの前におかれたPは折断を示す。剥片の折断位置について、折断面の角度（左回り）が剥離軸に対して45～135°の範囲にある場合は、[上]あるいは[下]、45°未満の場合は、[左下]あるいは[右上]、135°を越える場合は、[左上]あるいは[右下]と表記する。折断方向については背面から腹面に力を加えたものを[背腹]、腹面から背面へのものを[腹背]と表記する。

※FおよびCoの後におかれたS及びS'は礫皮面の残存を示し、Sは50％以下、S'は50％を越える面積割合で残ることを示す。

※（　）内の番号は接合して完形となる石器の他方の遺物番号。

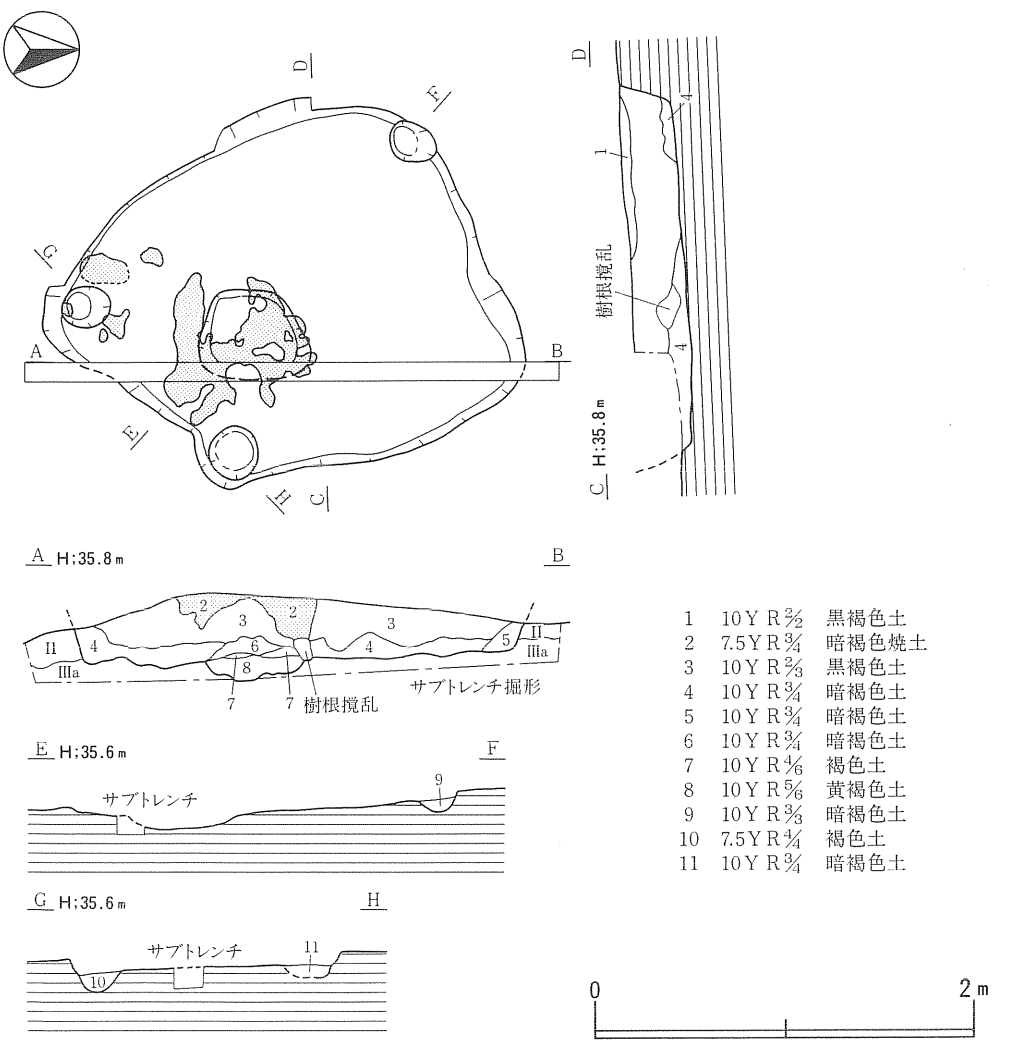
第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

SI52（第141図、図版８）

ＭＨ・ＭＧ56・57グリッドに位置する。Ⅱ層下位で焼土を確認したため、ベルトを十字に設定し、Ⅲa層上面まで掘り下げた段階で、僅かに掘り込みを検出した。後述するように掘り込み内に確実な炉を検出することはできなかったが、その平面形と柱穴等の検出から、ここでは竪穴住居跡と判断した。

平面形は北西－南東長2.3ｍ、北東－南西幅2.0ｍの不整方形をなす。ベルト土層断面の観察では、掘り込みも焼土と同様にⅡ層下位から認められ、壁は比較的急に立ち上がる。焼土確認面から床面までの深さは36㎝前後である。床面は不整で、明瞭な平坦面をなさない。後述するよ



1	10ＹＲ2/2	黒褐色土
2	7.5ＹＲ3/4	暗褐色焼土
3	10ＹＲ2/3	黒褐色土
4	10ＹＲ3/4	暗褐色土
5	10ＹＲ3/4	暗褐色土
6	10ＹＲ3/4	暗褐色土
7	10ＹＲ4/6	褐色土
8	10ＹＲ5/6	黄褐色土
9	10ＹＲ3/3	暗褐色土
10	7.5ＹＲ4/4	褐色土
11	10ＹＲ3/4	暗褐色土

第141図　ＳＩ52竪穴住居跡

うに竪穴内の覆土は一般にしまりが強く、床面と覆土との明瞭なしまりの相違は認識できなかった。

竪穴内の覆土は6層に分かれる。1層は現状でレンズ状堆積を呈するクロボク土で、しまりは弱く、竪穴の大半が埋没した後の周囲からの流入土とみられる。2層は塊状の焼土で、全体に風化している。下位層との境界は凹凸が著しく、この位置で焼土が形成されたものとは想定できない。3層は焼土塊とⅢb層の塊を斑状に含み、4層もⅢb層の塊を斑状に包含する。これらの2～4層はその土性から人為的な埋め戻し土と推定され、いずれもよくしまっている。5層は住居廃絶当初に周囲から壁際に流入した堆積とみられる。6層はⅢb層の粒子を包含し、後述する床面の掘り込み覆土の7層に類似する。

竪穴床面中央やや南東寄りには一辺60×（50）cm、深さ12cmの不整方形の掘り込みがある。その覆土は2層に分かれる（7・8層）。7層は掘り込み上面を覆う層で、比較的よくしまる。8層はやや黒みをおびたⅢb層を主体とする。両層には現状で焼土粒・炭化物は確認できず、明瞭な焼土面も認定することはできなかった。ただし、今村啓爾は縄文時代早期の竪穴住居跡の床面に存在する方形を基調とする掘り込みを、掘り込み内に灰を入れて使用した灰床炉と想定している。炉内の灰や焼土は堆積環境によっては消失するとしており、さらに、掘り込みには木枠がより上方まで設置されていたことを示す堆積例が存在することを指摘している[註1]。本遺跡例においても、掘り込み上方に堆積する6層は掘り込み（灰床炉）に据えられた木枠内に堆積していた層に相当する可能性があろう。本例の掘り込みについては、このように今村のいう灰床炉の可能性が認められるが、発掘時の所見からは断定することはできない。

柱穴は竪穴の北西・南西・南東隅で各1基づつ、計3基確認した。北東隅にも存在したかは床面精査以前に床面確認のためのサブトレンチを既に掘り下げていたため不明である。ただし、サブトレンチの幅からは、北東隅に径20cm以上の柱穴が存在したとは想定できない。柱穴の平面形は径26cm前後の円もしくは楕円形で、床面からの深さは7～10cm前後と浅い。覆土は竪穴覆土の4層と類似し、比較的よくしまっている。竪穴内にはこの他の壁柱穴、周溝等は確認されなかった。

本竪穴からの出土遺物はなく、さらに、周辺にも本遺構と関連するとみられる出土遺物は認められないことから、その時期は特定し難い。あえてその時期を推定すれば、不整ではあるが、方形平面をなし、床面中央付近に灰床炉の可能性がある方形の掘り込みが存在することなどの形態・構造の特徴と、地点は大きく離れるものの本遺跡からは縄文時代早期中葉の貝殻沈線文系土器（第Ⅰ群土器）が検出されていることから、ここでは一応、縄文時代早期中葉前後に属する可能性を想定しておく[註2]。[榮]

（２）　土器埋設遺構

SR04（第142図、図版８）

ＭＭ16グリッドに位置する。Ⅱ層中で口縁部を欠く埋設土器を確認したが、確認面の上位からは埋設土器の口縁部破片を採集していることから、本来の遺構設置面はより上位にあり、土器は完形で埋設されていたものと推定される。確認面での土器埋設のための掘り込みは、推定で長径30㎝、短径22㎝前後の楕円形平面をなし、現状の確認面からの深さは19㎝前後である。土器は正位に据えられており、土器底面は掘り込み底面からおよそ７㎝上位に位置している。

土層断面をみると、１層が埋設土器内の覆土、２層が土器埋設のための裏込め土である。１・２層とも少量の炭化物を包含し、さらに２層中には焼土粒子を含むが、他に顕著な包含物は認められない。

埋設土器は推定高約18㎝、胴部最大径13.5㎝を測る深鉢である。口縁部は微かに外反し、口縁部内面は肥厚している。緩やかな波状口縁を呈する可能性があるが、口縁部は小破片が残存するのみのため、確実ではない。胴部は僅かに膨らみ、若干中央部がくぼむ平底につながっている。外面にはＬＲ縄文が口縁部には横位に、頸部以下には縦位に回転施文される。さらに口縁から２条１単位の結節回転文が５単位垂下されている。底面・内面の調整はナデである。焼成は中程度で、胎土中には長石・石英粒等が存在する。

本土器は縄文時代中期前葉大木７b式に属する[註３]。［榮］

SR69（第142図、図版８）

ＭＣ39グリッドのⅡb層中で確認した。上半部は既に削平され、埋設土器はその底部部分のみの検出である。現状での土器埋設のための掘り込みは、推定で径27㎝前後の不整円形平面を呈する。確認面からの深さは16㎝前後である。土器は正位に埋設された深鉢で、その底面は掘り込み底面から約10㎝上位に位置している。

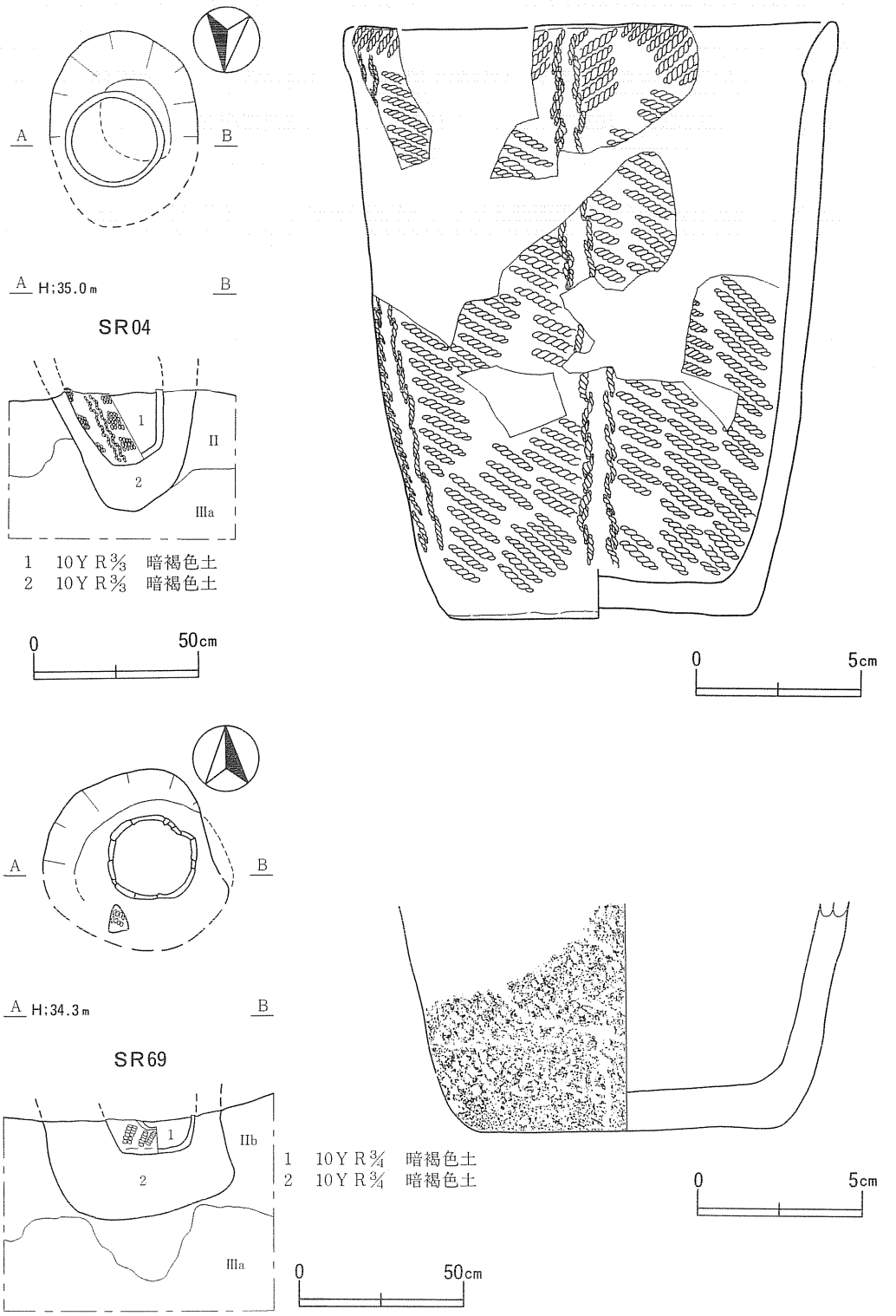
土層断面をみると、１層は土器内の覆土、２層は土器埋設時の裏込め土である。２層中に若干の炭化物が包含される以外に、両層には顕著な包含物は認められない。

埋設土器は底径10㎝の深鉢で、底部のみの検出である。底部側面にはＬＲ縄文が横位回転施文され、さらに部分的にその上位にＲＬ縄文が横位回転施文されるが、整然とした羽状縄文を呈さない。底面および内面の調整はナデである。焼成は中程度で、胎土中には石英・長石等が比較的顕著で、繊維は含まない。

本土器は縄文時代中期円筒上層式に属するとみられるが、より詳細な時期は不明。［榮］

（３）　陥穴

SKT36（第143図、図版９、図版10）



第142図　ＳＲ04、ＳＲ69土器埋設遺構

本遺構は調査区南東側ＭＴ22、ＮＡ22グリッドに位置し、Ⅰ層除去後に検出したものである。本遺構およびSKT42の位置周辺は、耕作によってかなり平坦に整地されているものの、東から西へ緩やかに傾斜する地形にあり、耕作の深度は東側で基盤層（Ⅲ層）にまで及んでいる。しかし、本遺構の検出地点では基盤層上に暗～黒褐色を呈するⅡ層（調査区の東側ではⅡa層、Ⅱb層の細別は不明瞭である）が僅かながら残っており、SKT36、SKT42ともその上面で確認している。両遺構とも構築面はこのⅡ層の上面であろう。

開口部平面形は長さ3.3m、幅0.5mの溝状を呈する。その長軸方向は西北西－東南東にあり、Ⅲ層上面の等高線にほぼ直交する。確認面から底面までの深さは1.0～1.1m前後である。底面平面形は長さ3.5m、幅0.2m前後を測り、長軸両端は末広がりになるが、その傾向は特に西側において著しい。底面は確認面の傾斜と対応して西に向かって僅かに傾斜するが、ほぼ平坦である。横断面の土層は10層に分かれる。１層は陥穴の周囲から流入したクロボク土、２～８層は周囲から流入したクロボク土と壁の崩壊土が混在した堆積である。最下底の９層は厚さ20cm前後で、底面ほぼ全面に堆積するやや軟質の黒色土で、10層の壁崩壊土がブロック状に混在する。１層流入土が占める割合が大きく、その堆積が側壁の屈曲部以上に限定されることは、廃絶後、開口部から側壁上部の崩落土が下部を充填したことを示すと判断され、本遺構の初期埋没が遺構自体の崩壊で短期に進行したことが推定される。また、本来的な遺構の横断面形についても、下部の側壁を直線的に延長した幅の狭いものであったと推定される。[小林]

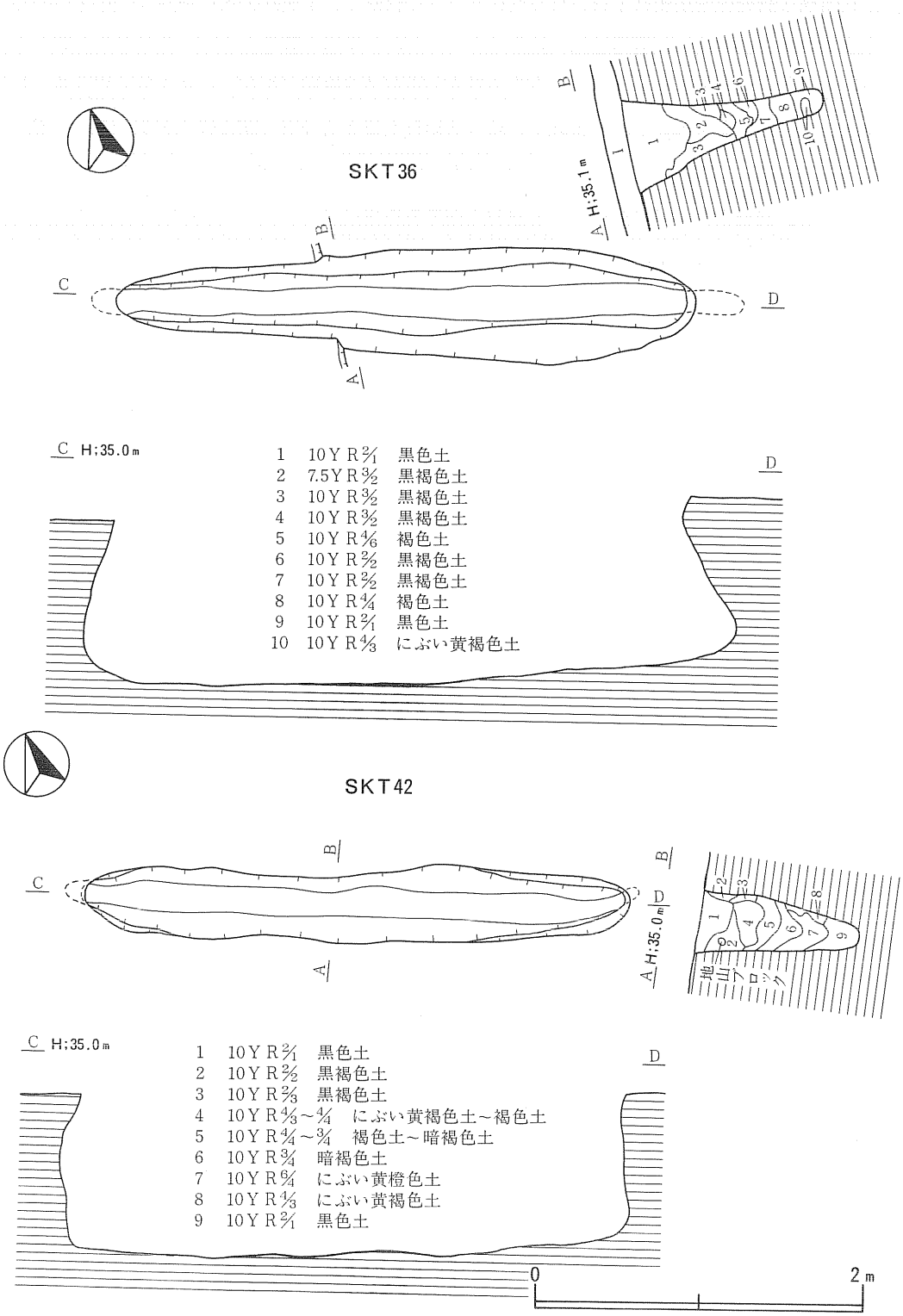
SKT42（第143図、図版９、図版10）

本遺構はSKT36の北側3.5mの地点、ＭＴ・ＮＡ22・23グリッドの接する箇所に位置する。

平面形は長さ3.35m、幅4.5mの溝状を呈する。長軸方向はSKT36に沿って西北西－東南東にあり、やはりⅢ層上面の等高線と直交する。確認面から底面までの深さは１m前後で、底面の平面形は長さ4.1m、幅0.15～0.2mを測る。底面は僅かに西に向かって傾斜するが、ほぼ平坦である。縦断面形は末広がりとなるが、その程度は西北西端で顕著である。横断面形は両壁が直線的に降りるＶ字形を基調としSKT36のように開口部がロート状に開くことはないが、北壁側中段に抉れた部分が認められる。横断面に現れた覆土は９層に分かれる。１層は周囲から流入したクロボク土で、２層から８層までは壁崩落土を含む堆積土である。最下底の９層は軟質の黒色土で遺構のほぼ全体に厚く堆積し、この特徴はSKT36も含め、後述のSKT76で推定するような陥穴の機能的側面に由来すると考えられる。本遺構の埋没は、壁面全体の崩落土がその上部までを充填して進行したと推定される。[小林]

SKT58（第144図）

本遺構は調査区中央最低部の北側ＭＪ28グリッドに位置し、表土除去前の試掘時に確認していたものである。開口部平面形は長軸170cm、短軸55cmのほぼ楕円形を呈し、両端がやや膨ら



第143図　SKT36、SKT42陥穴

む形である。長軸方向は東－西にあり、掘り込み面はⅡa層下位である。掘り込み面から底面までの深さは56～62㎝を測り、長軸方向の断面形はすり鉢形を呈する。底部平面形は長さ35㎝、幅10㎝の溝状で東側に緩く傾斜している。埋土は６層からなり、いずれも締まりに欠けるクロボク土を主体としており、周囲からの流入土が堆積したものと思われる。１～３層には焼土粒が混じり上位ほど多い。６層は厚く、壁ぎわには地山土が混入していた。

本遺構は遺物の出土がなく時期・性格は不明であるが、形態的にはほぼ溝状を呈し、埋土が他の陥穴と類似することからみて、陥穴、もしくはその掘削途中で放棄されたものである可能性が高いと思われる。[小山内]

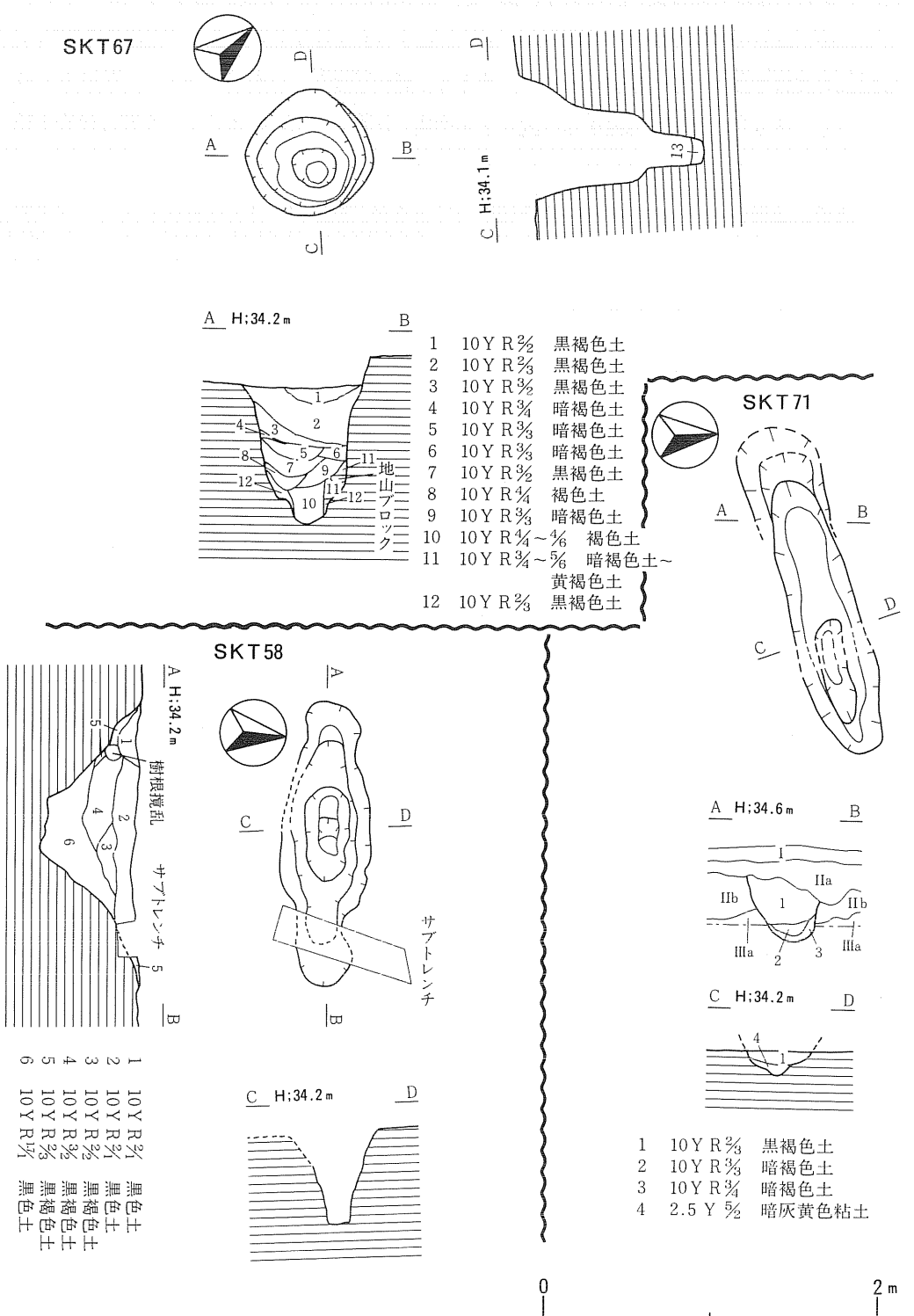
SKT67（第144図、図版８）

本遺構はＳＤ65の精査中にＭＬ25グリッドで検出したものであり、調査区中央最低部の南側に位置する。掘り込み面はⅡb層(黒褐色土)中であるが、北東壁の一部を除き開口部の10㎝ほどがＳＤ65と樹根に破壊されていた。開口部平面形は径約75㎝の円形を呈し、北西壁は一部崩落していた。掘り込み面から坑底面までの深さは約70㎝を測り、断面形は開口部がやや外反するもののほぼ円筒形を呈する。坑底面平面形は径約45㎝の不整円形で底面は中央に向かい緩く傾斜している。坑底面中央には円筒形のピットが１基穿たれ、上部径25㎝前後、底部径12㎝、深さ30㎝を測る。埋土は13層に細分されるが、堆積状況から大きくみると、上位には堅く締まった黒褐色土が厚く堆積し、中位から下位にかけては地山粒子の混じる暗褐色土・褐色土がレンズ状に堆積する。坑底面付近では地山土を多量に混入する壁崩落土が認められる。ピットから坑底面の上位10㎝程にかけては締まりのない地山土混じりの褐色土が円筒状に堆積し、ピット最下層は白色粘土（Ⅲc層）に黒褐色土が混じる。堆積過程としては壁崩落土と周囲からの流入土による自然堆積が進み、裏込めのない逆茂木が朽ちたところにさらに側壁が崩落し、最後には人為的な埋め戻しがなされたものと思われる。遺物はなく時期は不明。[小山内]

SKT71（第144図）

ＭＩ・ＭＪ39グリッドに位置する。推定で長さ2.1ｍ、幅0.5ｍ前後の溝状の平面形をなす。その長軸方向は東北東－西南西である。ベルト土層断面では、Ⅱb層上面から落ち込みを認めることができ、Ⅱb層上面からの深さは0.4ｍ前後である。覆土は４層に分かれる。１～３層はクロボク土に類似し、いずれも周囲からの流入土とみられる。４層は東半部底面のみに分布する。極めてよくしまった粘土層で、その下底には鉄分が厚さ１㎝前後沈着している。

本遺構からの出土遺物はなく、その時期・性格は不明であるが、覆土の特徴からは、本遺構は一定期間開口していたものと推定され、深さが浅いものの、陥穴もしくはその掘削途中で放棄されたものである可能性も想定される。[榮]

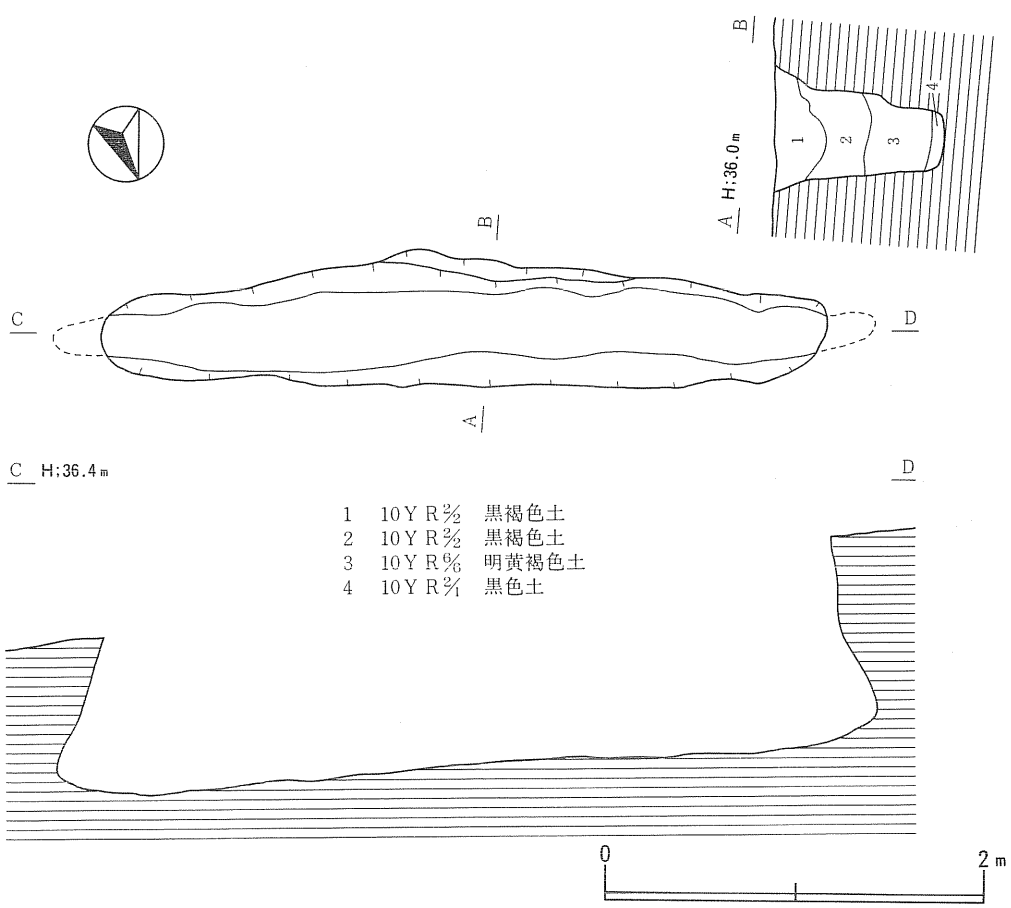


第144図　SKT67、SKT58、SKT71陥穴

SKT76（第145図、図版10）

調査区西端の比較的急斜面となるＭＢ30グリッド周辺に位置する。開口部平面形は長さ3.8ｍ、幅0.7ｍの溝状を呈する。その長軸方向は西北西－東南東を向き、地山面の等高線にほぼ直交する。確認面から底面までの深さは0.9～1.1ｍ前後である。底面平面形は長さ4.3ｍ、幅0.4ｍ前後を測り、長軸両端は大きく末広がりになっている。底面は平坦であり杭痕等の底部施設の痕跡は認められない。横断面の土層は４層に分かれる。１層は陥穴の周囲から流入したクロボク土、２・３層は周囲から流入したクロボク土と壁の崩壊土が混在した堆積である。最下底の４層は厚さ６㎝前後で、底面ほぼ全面に堆積する。やや粘性に富む黒色土で、壁の崩壊土などの混入がほとんど認められない均質な層である。このことからは、本層は陥穴の開口時に周囲から旧表土や壁の崩壊土などが流入したものではなく、陥穴設置時に開口部を被覆するために人為的に盛られた黒色土が流入したものである可能性があろう。

本遺構からの出土遺物はなく、その詳細な時期も不明である。［榮］



第145図　ＳＫＴ76陥穴

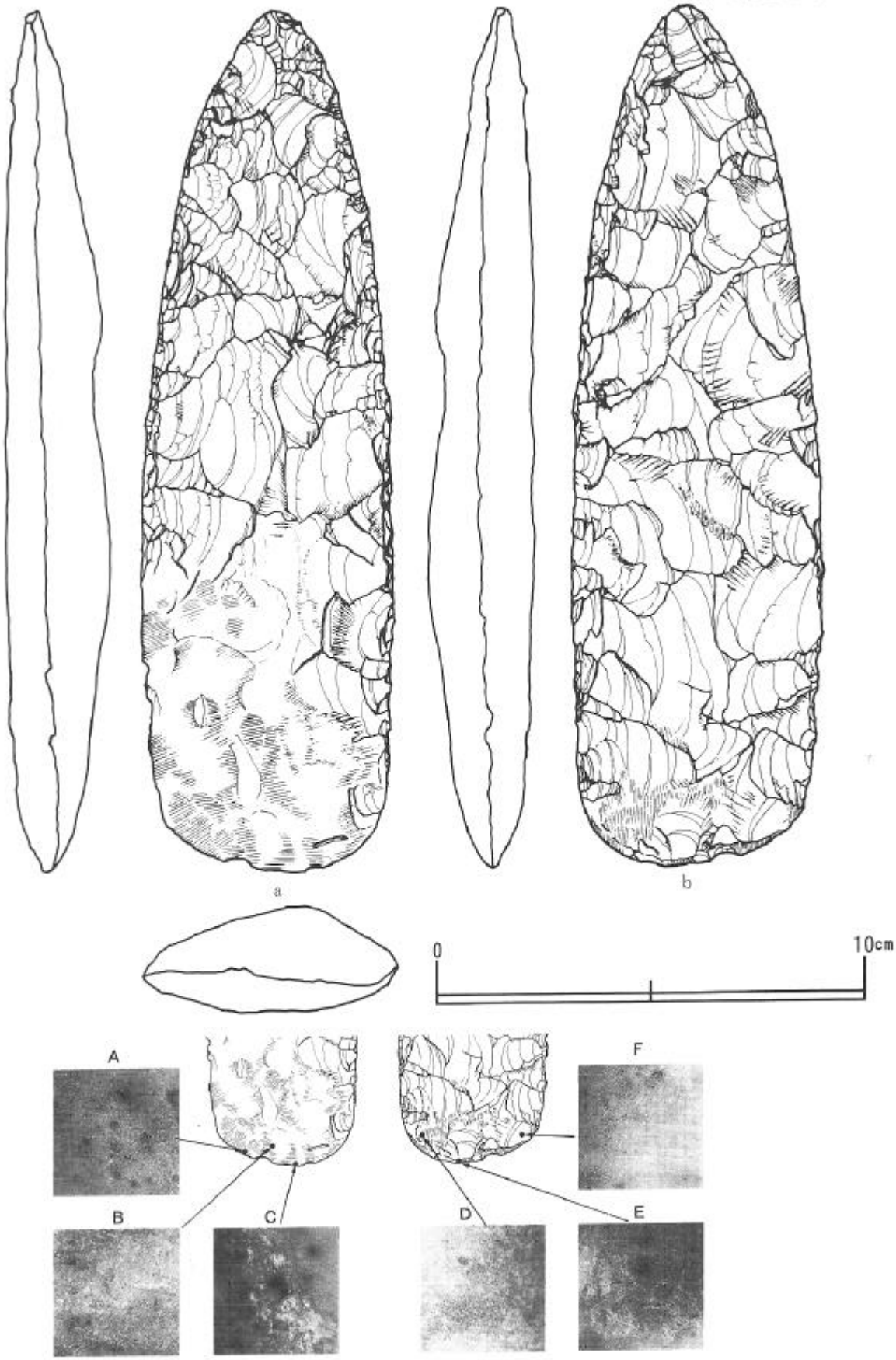
（4）　縄文時代の遺構外出土遺物

刃部磨製石斧（第146図、図版７、図版11）

ＭＩ53グリッドで検出した。出土層準はⅢa層である。当該グリッド周辺の本層は比較的安定した堆積状態を示しており、遺物は大きな二次的移動を受けていないものと想定される。石斧は完形で、表面（a面）を下に、裏面（b面）を上にして、ほぼ水平になった状態で出土した。周辺を精査したが、掘り込み等は確認できず、遺構に伴うものとは認められない。さらに本例と関係するとみられる遺物も確認されなかった。当該時期の遺物出土状況には、完形もしくは完形に近い特定器種の石器が集中して出土し、意図的に埋納されたとされる特異な例があることが指摘されている[註４]が、発掘時の所見からは、本遺物が埋納されたとする痕跡を認めることはできない[註５]。[榮]

石斧は最大長19.8㎝、最大幅5.9㎝、最大厚2.5㎝を測る。灰白色の頁岩を素材とするが現状では表面に酸化鉄が膠着し、赤褐色の被膜に広く覆われている。表裏二つの主面のうち一方が甲高となり（a面）、他方はそれに比べて平坦に近い（b面）。両側縁は刃部から基部中央にかけてはほぼ平行するが、それより先は次第に湾曲し尖基となって終わる。刃部側面観はb面側に加えられた剥離とa面側の研磨とにより両刃となる。製作にあたっては左右両側縁から平坦剥離を加えてb面を形作った後、b面側両側縁からの平坦剥離でa面を形成している。刃部先端は主にb面側で観察される両側縁と直交する方向での粗い剥離で成形された後、a面側では刃縁と平行する方向で、b面側では直交する方向で研ぎあげられているが、a面側での研磨が器長の１／３以上に及び、ことに刃縁に近い部分では剥離面を観察し得ないほど広く丹念に行われるのに対し、b面側での研磨は浅くその範囲も刃縁から20㎜程に限られる、という際だった相違がある。研磨の擦痕は剥離面の内部にも及ぶため、置き砥石のような広い研面の砥石ではなく、手持ちの小形の砥石で行われたことが推定される。刃は凸刃で、a面側から見て右に寄った偏刃となるが、これは刃部再生がなされた結果であろう。研磨以前の毀れが４箇所に認められ、b面側には刃縁に沿って幅２～３㎜で別に角度をもって研磨された痕跡が認められる。刃部下面観はb面の基部中央を水平にした場合、刃縁が右下がりとなる。

刃部縁辺には酸化鉄の被膜はなく、素材頁岩の灰白色の面が露出している。この露出面をエタノールで洗浄後金属顕微鏡によって検鏡すると、a面、b面とも縁辺中央部に比較的広く光沢が認められ（Ｃ、Ｅ）、a面側では刃縁よりやや中に入った部分でも光沢が観察された（Ｂ）。中央をはずれると視野に入る光沢の面積割合は小さくなりまばらとなる（Ａ、Ｄ）が、剥離面の内部では全く観察されなかった（Ｆ）。顕微鏡によって観察されたこれらの光沢は使用によるものと考えられ、刃部のうち先端中央の対象物と接する頻度が高かったことが推測されるが、その対象物の種類および刃部の対象物へ接触方向など詳細は不明である。[小林]



第146図　刃部磨製石斧

縄文土器（第147図～第149図）

第Ⅰ群土器（第147図１～12）

貝殻沈線文の土器を含め、縄文時代早期の土器を一括した。１は波状口縁の深鉢形土器の口縁部破片であり、口縁に沿って同時施文具による浅い沈線が２条施されている。沈線下には器面に斜位に押し当てた貝殻腹縁の連続圧痕が観察される。２～12は無文の土器である。いずれも胎土には繊維を含まず、焼成は堅緻な仕上がりとなっている。貝殻沈線文土器の体下半部～底部にかけての資料であろう。

第Ⅱ群土器（第147図13～24）

円筒下層a式あるいはそれ以前と判断される土器を一括した。いずれも胎土に多量の繊維を含み、各種の縄文が多用される。13は口縁上端が外反する平口縁の深鉢形土器口縁部資料である。口縁以下全面にＲＬ縄文が横位回転施文される。15は器面にＬＲの撚り紐を用いた平行撚糸文が施文される。16・17・19～24は器面にＲ{ℓ/ℓの撚り紐を用いた多軸絡縄体が施文される。24の底部資料は底面外縁が幾分張りだし気味に作られる。

第Ⅲ群土器（第148図25～第149図53）

円筒上層各式の深鉢形土器である。

25～34は円筒上層a式の同一個体の土器である。口縁部はやや開き気味に立ち上がり、体部はほぼ垂直に近く降りる。口縁は頂部が二叉に分かれる４単位の波状口縁となる。波頂部に対応した位置に27の橋状の突起が付けられ、この突起部分も含めてＲ{ℓ/ℓの撚り紐を用いた絡縄体の側面圧痕文が６段以上にわたって施文される。また、口唇部および口縁と体部を画して巡らされた粘土紐隆帯上にも、同じ原体による縦位の圧痕列が施されている。体部にはＬＲ縄文が横位回転施文される。内面は横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられており、第Ⅱ群土器程に目立つことはないが、若干の繊維が胎土中に混入されている。

35～37もまた円筒上層a式の同一個体の破片である。口縁部は短く外反し、Ｌ{r/rの撚り紐を用いた絡縄体の側面圧痕文が３段にわたって施文される。口縁部と体部を画する隆帯上には縦位の刻目が施される。体部はＲＬ縄文が横位回転施文される。胎土には少量の細砂粒を含むが、繊維は含まない。

38・39も同じく円筒上層a式の同一個体の破片である。波状となる口縁部はその上端で外反し、中央で折曲げて２条としたＲ{ℓ/ℓの撚り紐の圧痕文を、「ハ」の字状に連続して施している。口唇部外面および口縁部と体部を画する隆帯上にも同じ原体による圧痕列が施文される。体部はＲＬ縄文が横位回転施文される。35～37と同様、胎土には細砂粒を含むが繊維は含まない。

40～46は円筒上層c式の口縁部破片である。波状となる口縁には波頂部から垂下する２条の粘土紐や、それを横位あるいは斜位に連絡する粘土紐が貼り付けられる。粘土紐間はＲＬ縄文

が施されるが、原体をずらしながら充填的に施文するため、縄文の条は長くかつ弧を描いて表れている。縄文施文後、粘土紐間には先端の割れた工具による連続刺突文が施されている。胎土には比較的量の多い砂粒が混入され、焼成は脆い仕上がりとなっている。

47、48は円筒上層d式の口縁部破片である。いずれも４単位となる波状口縁の土器であろう。47は外反する口縁部から、ほぼ直線的に降りる体上部までが残存している。地文にＲＬ縄文を横位回転施文した後、幅４㎜程の細い粘土紐を貼り付けて文様を表している。体上部に張り付けられた粘土紐は剝落している。47、48とも、円筒上層c式までの他の土器と比べ、器壁はかなり薄手に作られている。胎土には砂粒を含む。

49はＬＲ縄文の横位回転施文後に、３条づつの平行する沈線を２段にわたって施した口縁部破片である。円筒上層d式後の土器であろう。

50～53は体部が丸みを帯びて下降する土器である。50の口縁部資料によれば、口縁は外反し、粘土帯が貼り付けられた波状口縁となるもののようである。体部はＲＬ縄文が密に横位回転施文される。胎土には砂粒を含む。

以上が遺構外から出土した縄文土器であるが、ＳＲ69の埋設土器は、このうち第Ⅲ群土器の円筒上層c式以降の時期に該当するであろう。[小林]

縄文時代剝片石器（第150図～第155図）

石鏃（第150図１～５）

凹基、平基、凸基形態の石鏃が、それぞれ３、１、１点づつ出土している。２は黒曜石製、他は頁岩製である。凹基の石鏃（１～３）と、平基（４）あるいは凸基（５）では、その長さの平均値において前者の幅が3.25㎜後者を上回り、後者の長さが10.25㎜前者を上回る。なお、１は先端部を、２は脚部の一方を、５は先端部と基部を欠損する。また、３の基部にはアスファルトの付着が認められる。

石匙（第150図６～第152図20）

15点の出土があり、全て頁岩製である。縦型と横型があり、それぞれ素材剝片の形態を大きく変更するものと、ほぼそのままに保持するものとがある。前者を１類、後者を２類として記述する。

縦型１類（第150図６～11）

素材に縦長剝片を選び、素材の打面側に撮部を作り出す。素材の背面側全面に丹念な押圧剝離を施して、全体の形状を作り変えているが、撮部の右側縁は直線的に、対する左側縁は湾曲し、末端は斜めに断つように整形される。また、左側縁から末端の腹面側には背面への剝離に先行して細部加工が連続して施されており、背面の稜は右側縁側に寄って形成される。

縦型２類（第151図12～17）

素材に縦長剝片を選ぶことは１類と同様であるが、撮部を作り出す部位は素材の打面側である場合（13、14、17）と末端側である場合（12、15、16）とがあり、一定しない。全体の形状は素材の周縁あるいは縁辺一部に加えられた細部加工によって整形されており、素材の背面は大きく残されている。

このほか、撮部のあることをもって縦型石匙しうる石器に第152図18の資料があるが、本例は撮部、本体部分とも一体の両面加工によって作られ、末端は尖頭器状に作り出される。縄文時代前期の有撮石器に類する石器である。(註６)

横型１類（第152図20）

縦長の剝片を素材とし、素材左側縁側に撮部を作り出す。素材の背面側全面に丹念な押圧剝離を施して全体の形状を三角形に仕上げるが、撮部の両側辺の腹面側には背面への剝離に先行して細部加工が施されている。

横型２類（第152図19）

横長の剝片を素材とし、素材の打面を撮部に作り出す。全体の形状は素材背面の周縁に施された加工によって整形されるが、先行して腹面の周縁にも粗い加工が施されている。

箆状石器（第152図21～第153図30）

10点の出土があり、全て頁岩製である。片面に素材の腹面の一部が残り横長剝片を素材としたことが明確にわかる類（21～24、26）と、両面とも全面が加工され素材形状が大きく変更された類（25、27～30）がある。前者では21のように、刃部に素材の先行剝離面がそのままに残されるトランシェ様石器も含まれる。(註７)一般に前者を古い形態と見ることができるだろう。

削器（第154図31～第155図44）

14点の出土があり、全て頁岩製である。基本的に素材となる剝片の形状を大きく変えることはなく、縁辺の全周あるいは一部に加工を施して刃部を作り出している。[小林]

縄文時代礫石器（第156図～第159図）

磨製石斧（第156図１、２）

２点が出土している。１は頁岩の楕円礫の一端を研ぎ出して刃部を作り出している。刃部の研ぎ出しは石器の両面で行われるが、原礫の輪郭を変えることはない。図右側の面では２面、左側の面では１面の刃部研磨面が認められる。基部側への加工は施されていない。２は安山岩質の礫を用いて製作されている。敲打整形ののち両面および両側縁を磨き全体を仕上げる。側縁には成形時の稜が残される。刃部には毀れが認められる。

礫刃器（第156図３、４）

2点が出土している。安山岩質の楕円礫の一側縁に両面からの剝離を加えて、チョッピング・トッール状に刃部を作り出している。

偏平打製石器（第156図5、6）

半欠品2点が出土している。安山岩質の楕円礫の長軸端を表裏両面から加撃して、抉り部を作り出している。側縁の一方にはこの石器の使用面である大きな擦り面がある。擦り面の両側には、原礫の使用面加工痕である剝離面が両面に残されている。

磨石（第157図7～13）

断面三角形の磨石が欠損品も含め7点出土している。柱状の原礫の稜の一つが擦り面となっているもの（7、8、9、11）と、稜に挟まれる面にも擦り面が残されるもの（10、12、13）とがある。

礫石錘（第158図14～22、第159図23）

偏平な楕円礫の両端に抉り部を設けた石錘が半欠品も含め10点出土している。10点のうち9点までが長軸端に、23のみが短軸端に抉り部を作り出している。

凹石（第159図24）

略円形の偏平礫の両面に、比較的小さな対象物が多数回接触して形成されたと判断される、浅く広い凹面が残されている。

砥石（第159図25）

偏平な砂岩製の礫の表裏面に11条の溝が残されている。溝の方向は表裏面で90°異なる。溝の長さは短いもので40㎜、長いもので75㎜程、幅は6～11㎜程、断面形は深さ5㎜前後の「V」字形を呈する。石器本来の形状は楕円形に近いものであったと思われ、側縁は中央よりも厚く、従って溝の残された表裏面は緩い凹面を呈する。[小林]

註

（1）　今村啓爾「縄文早期の竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代』第80号　1985（昭和60年）　早稲田大学考古学会

（2）　県内においては、現在のところ本例と類似した形態・構造を示す竪穴住居跡は認められない。本例は竪穴内に縄文時代早期に認められる灰床炉が存在する可能性があり、少なくとも屋内に地床炉あるいは石囲い炉が普及する以前の時期に属する可能性が想定される。本遺跡と同一台地上に立地する能代市寒川Ⅰ遺跡の早期末～前期初頭の竪穴住居跡は、竪穴内に灰床炉と推定される掘り込みを有するものもののほかに、地床炉を有するものも存在する。一方、竪穴平面形は円形もしくは楕円形を基調とし、柱穴配置は必ずしも明確ではないが、竪穴壁際に接する例は存在せず、本例とは総体として対応しない。当該時期の竪穴住居跡の形態・構造は必ずしも一様ではないと推定されるが、同一台地上に位置する両者の相違は時

期差による可能性が強いものと想定する。

周辺で類例を探せば、青森県八戸市長七谷地貝塚第2次調査第3号竪穴住居跡が注意される。当該竪穴住居跡は一辺2.3〜3.1m前後の方形平面形を呈し、中央に浅い掘り込みを有し、竪穴の四隅に柱穴が存在する点が本例と比較的類似する。長七谷地貝塚例は早稲田5類土器の時期の竪穴住居跡に切られ、その形態等から貝殻沈線文系土器の時期に属すると推定されている。また、青森県東通村下田代納屋B遺跡の貝殻沈線文系土器を伴う竪穴住居跡は方形平面を基調とする。床面中央には炉と推定される掘り込みを有し、柱穴が存在するものは壁際よりも若干内側に位置する。

このような現状の資料からは、縄文時代早期中葉には方形平面を基調とするものが多く、早期末には円形基調に変化する傾向が看取される。このことから本遺跡例は早期末の早稲田5類期よりも溯り、本文で触れたように早期中葉の貝殻沈線文系土器の時期に属する可能性が高いものと推定する。

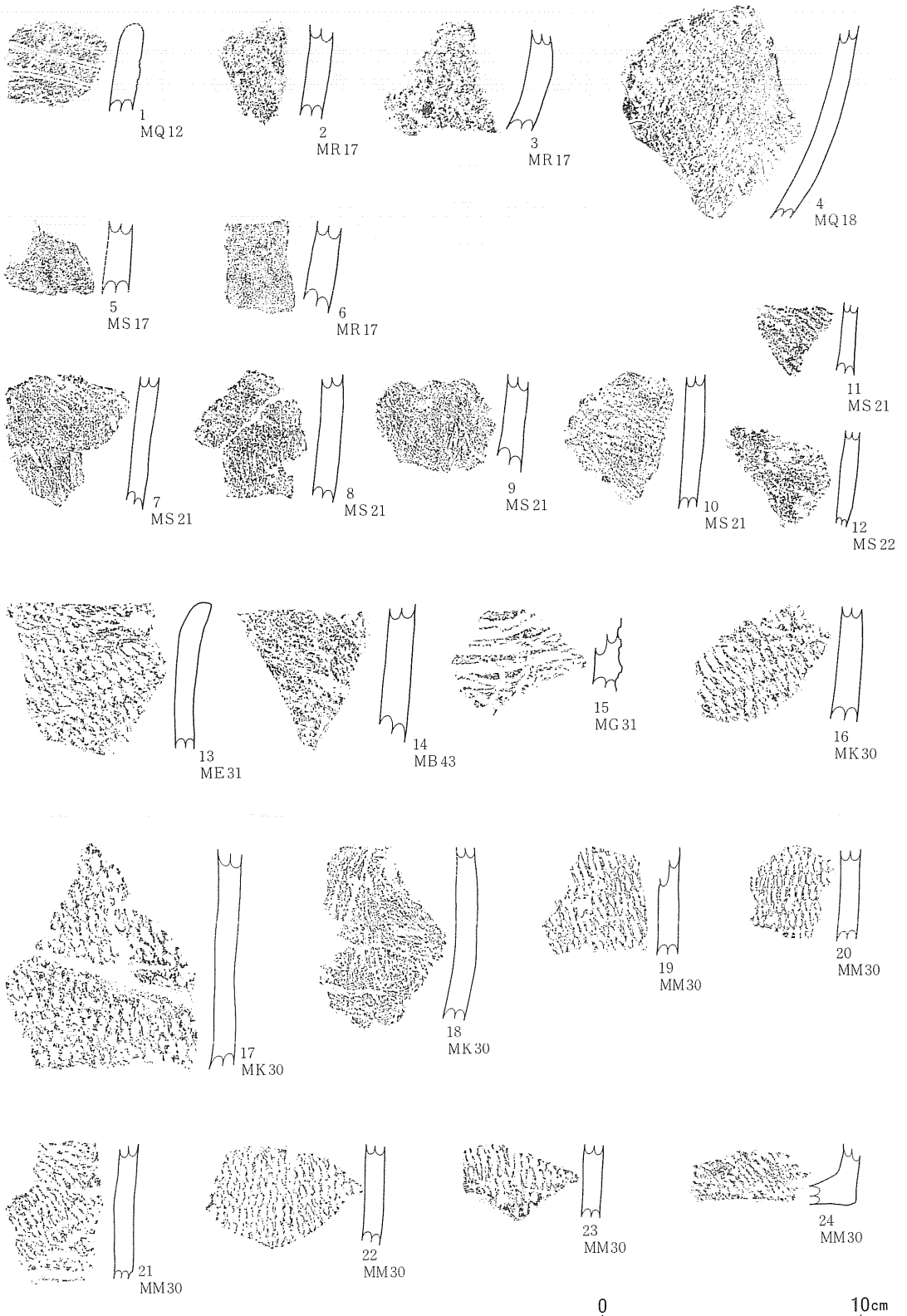
秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第167集　1988（昭和63年）
青森県教育委員会『長七谷地貝塚』　青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集　1980（昭和55年）
青森県立郷土館『小田野沢・下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』　青森県立郷土館調査報告第1集　1976（昭和51年）

（3）本遺構は土壌試料を採取し、その残存脂肪酸分析を委託した。その分析結果は別編第2章に掲載した。それによれば、土器内にはヒトの脳成分のような特殊な動物遺体が入っていた可能性が指摘されている。縄文時代においても、埋葬人骨頭部に赤色顔料が散布された例にみられるように、頭部に対する特別な意識は存在したものと推定されるが、本例の評価については今後の分析例の集積をまって行う必要があろう。

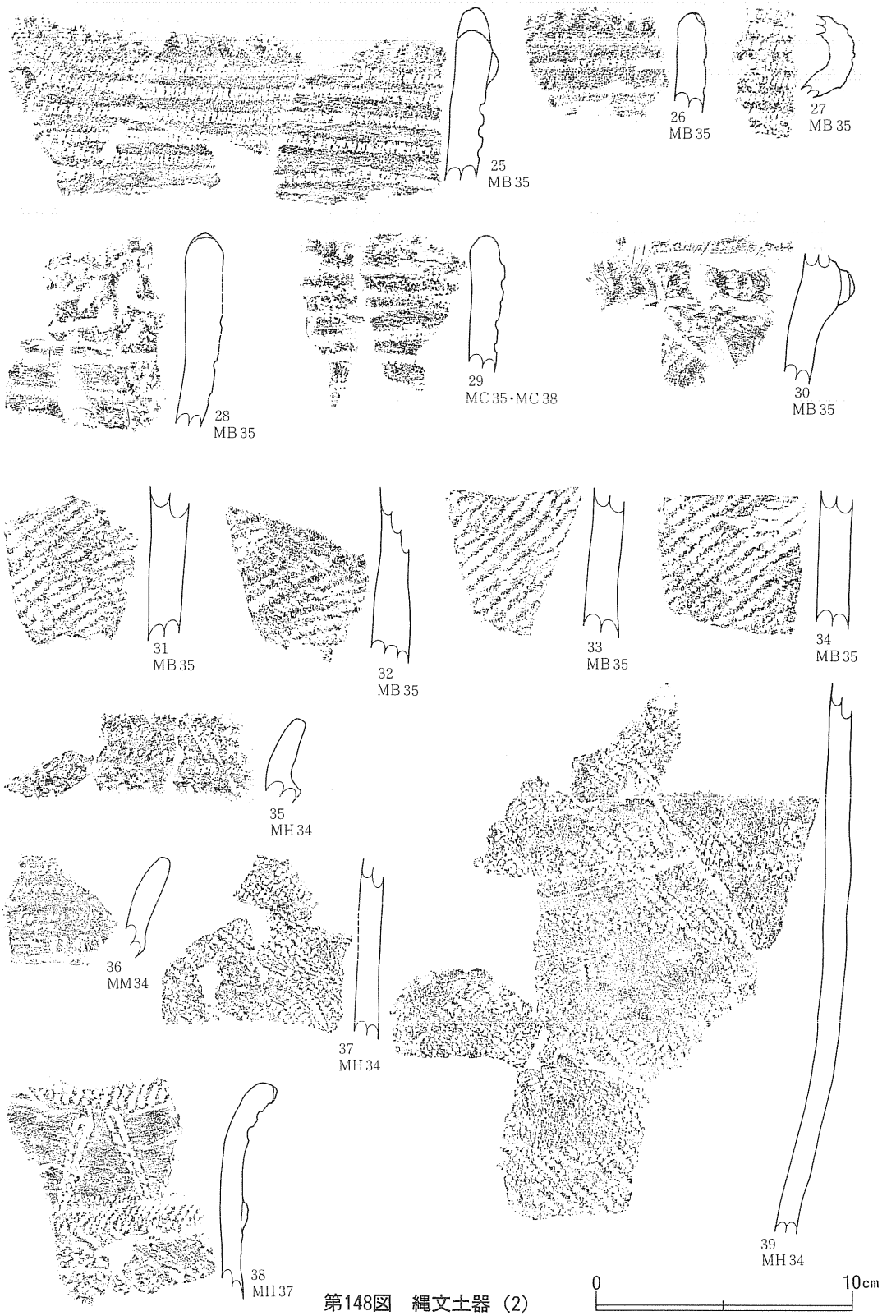
（4）　栗島義明「デポの意義」『研究紀要』第7号(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1990(平成2年)

（5）　本遺跡は既述のように窪地状の地形に占地し、少なくとも更新世においては沼沢地的環境の時期も存在したものと考えられる。上述したように、本遺物が埋納されたものでなく、当該期の生業活動に関係したものとするならば、その性格を考える際にこのような地形の特徴は注目される。当該期の刃部磨製石斧が出土した青森県長者久保などの立地と相通じる点があろう。

山内清男・佐藤達夫「下北の無土器文化－青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告」九学会編『下北』1967（昭和42年）
（6）秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』　1988（昭和63年）
（7）冨樫泰時　1976　「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』寧楽社


1
MQ12
2
MR17
3
MR17
4
MQ18
5
MS17
6
MR17
7
MS21
8
MS21
9
MS21
10
MS21
11
MS21
12
MS22
13
ME31
14
MB43
15
MG31
16
MK30
17
MK30
18
MK30
19
MM30
20
MM30
21
MM30
22
MM30
23
MM30
24
MM30
0
10cm

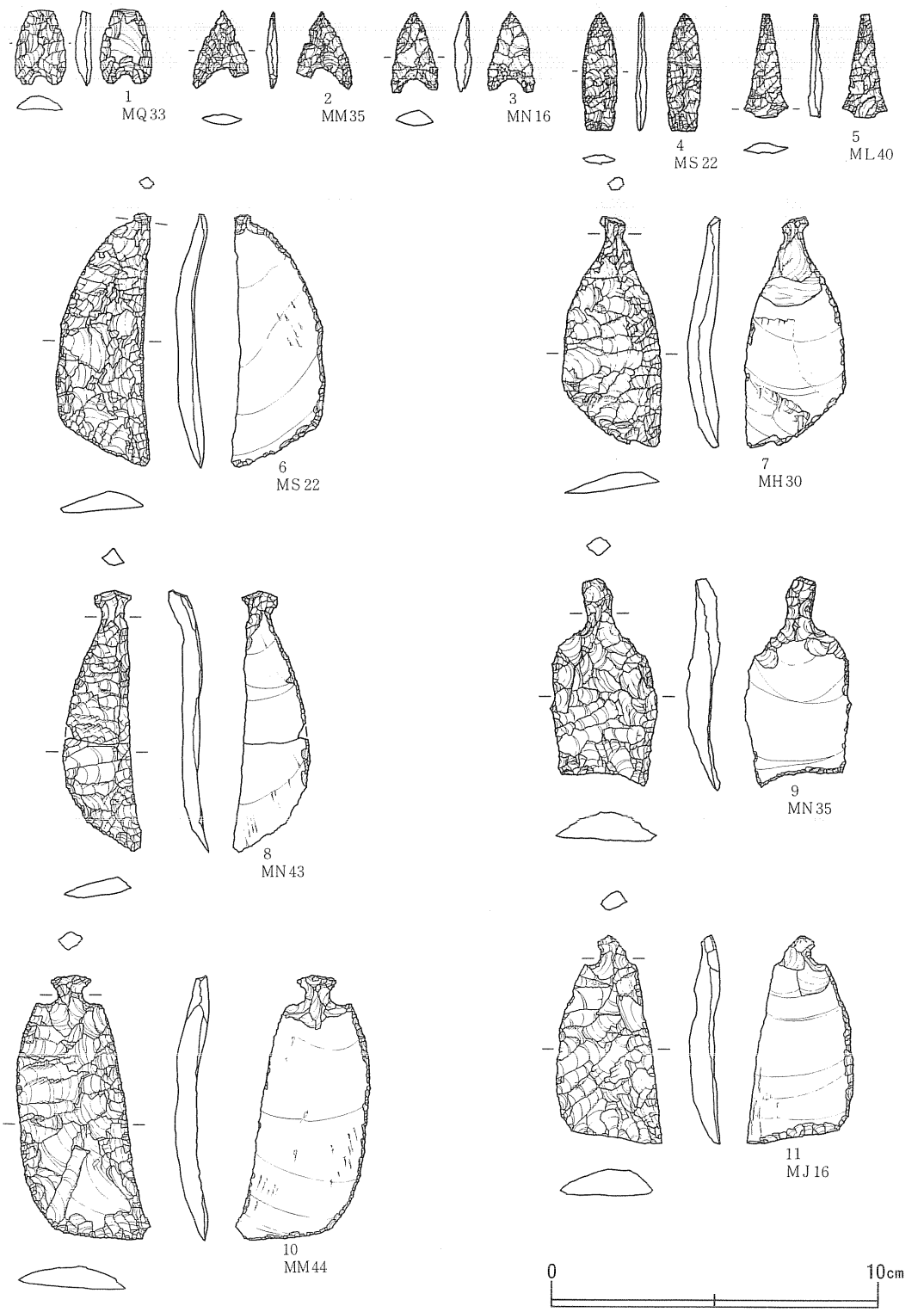
第147図　縄文土器（1）


25
MB 35
26
MB 35
27
MB 35
28
MB 35
29
MC 35・MC 38
30
MB 35
31
MB 35
32
MB 35
33
MB 35
34
MB 35
35
MH 34
36
MM 34
37
MH 34
38
MH 37
39
MH 34
0
10cm

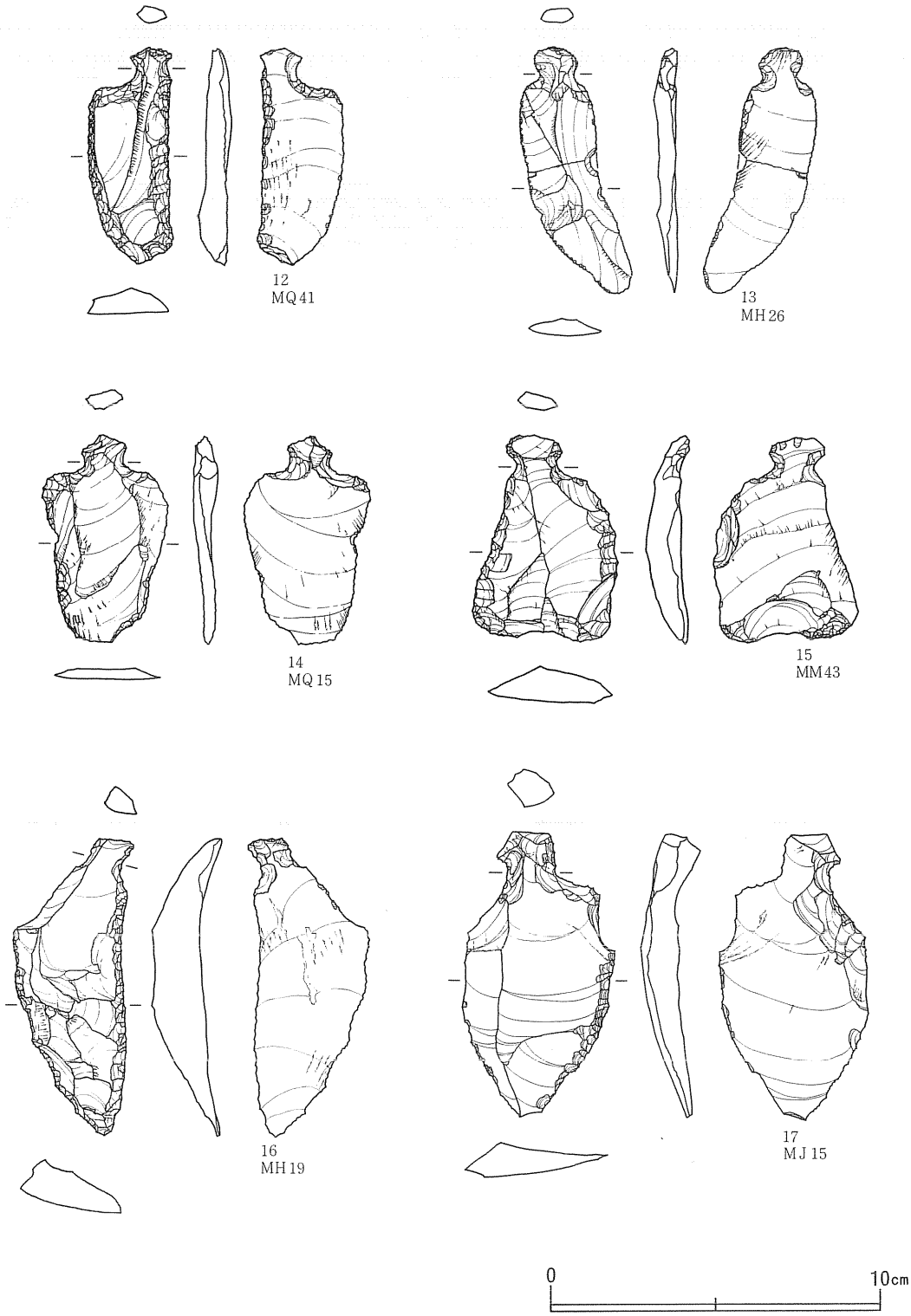
第148図　縄文土器（2）

第149図　縄文土器（3）

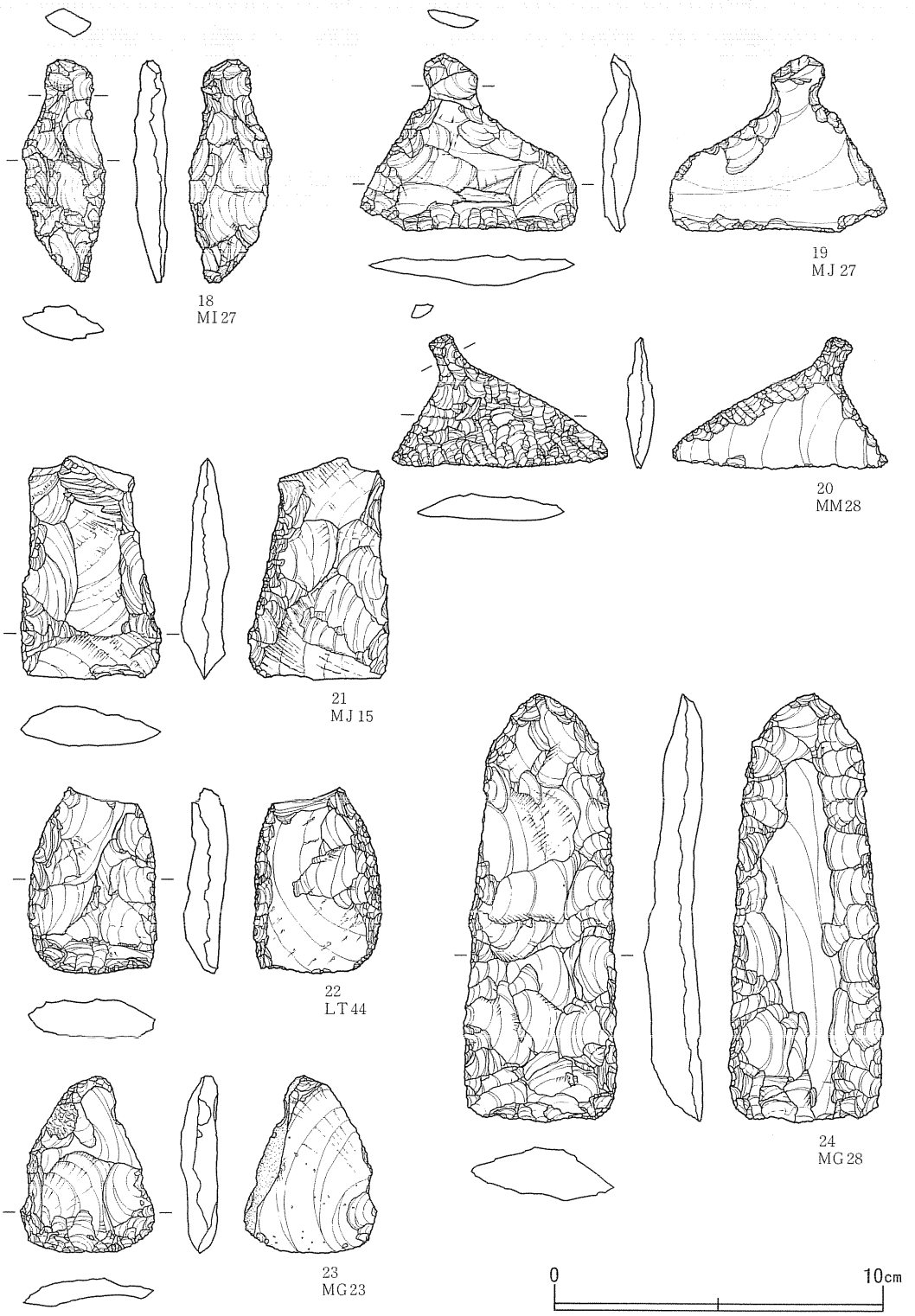
0　10cm



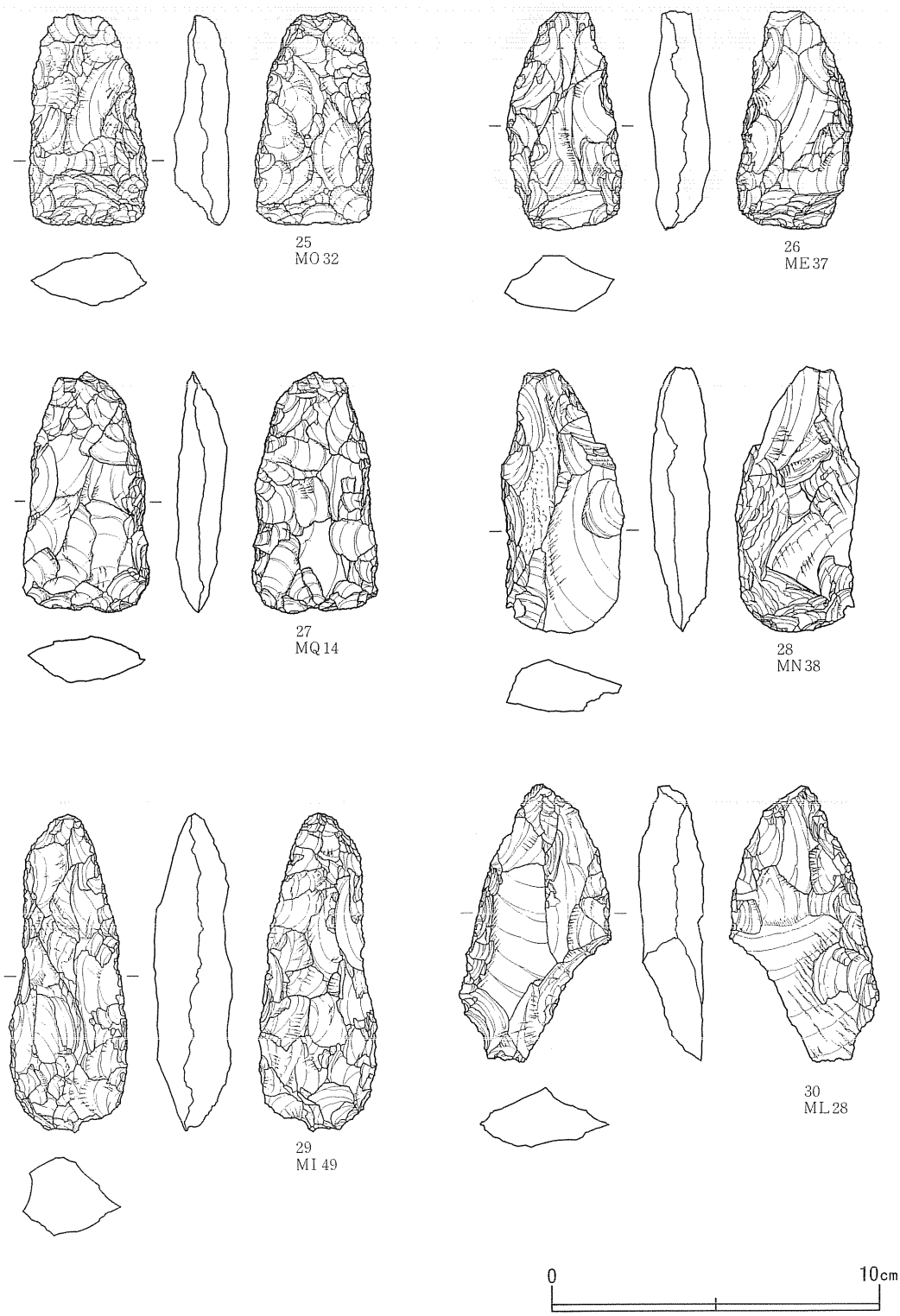
第150図　縄文時代の石器（1）石鏃・石匙



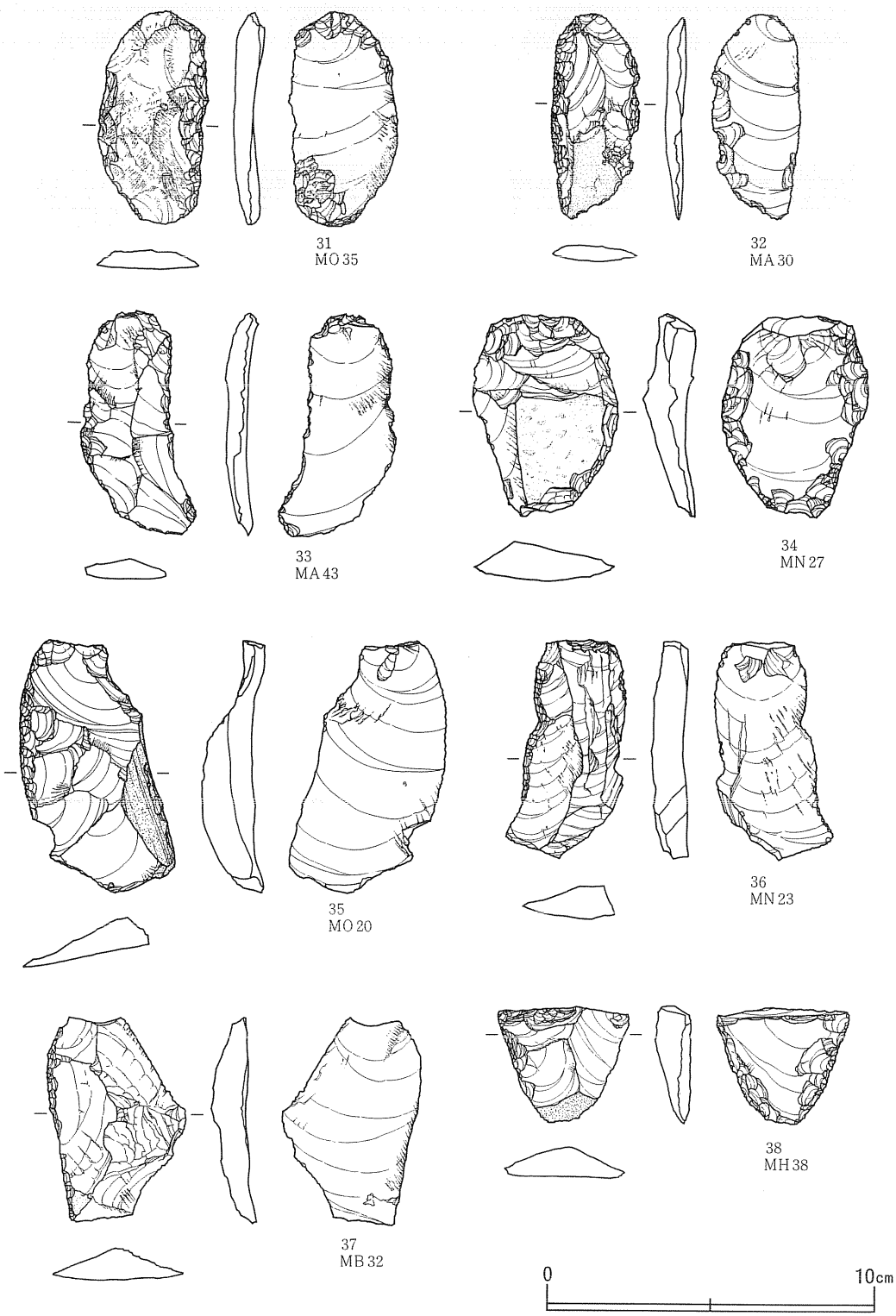
第151図　縄文時代の石器（2）石匙



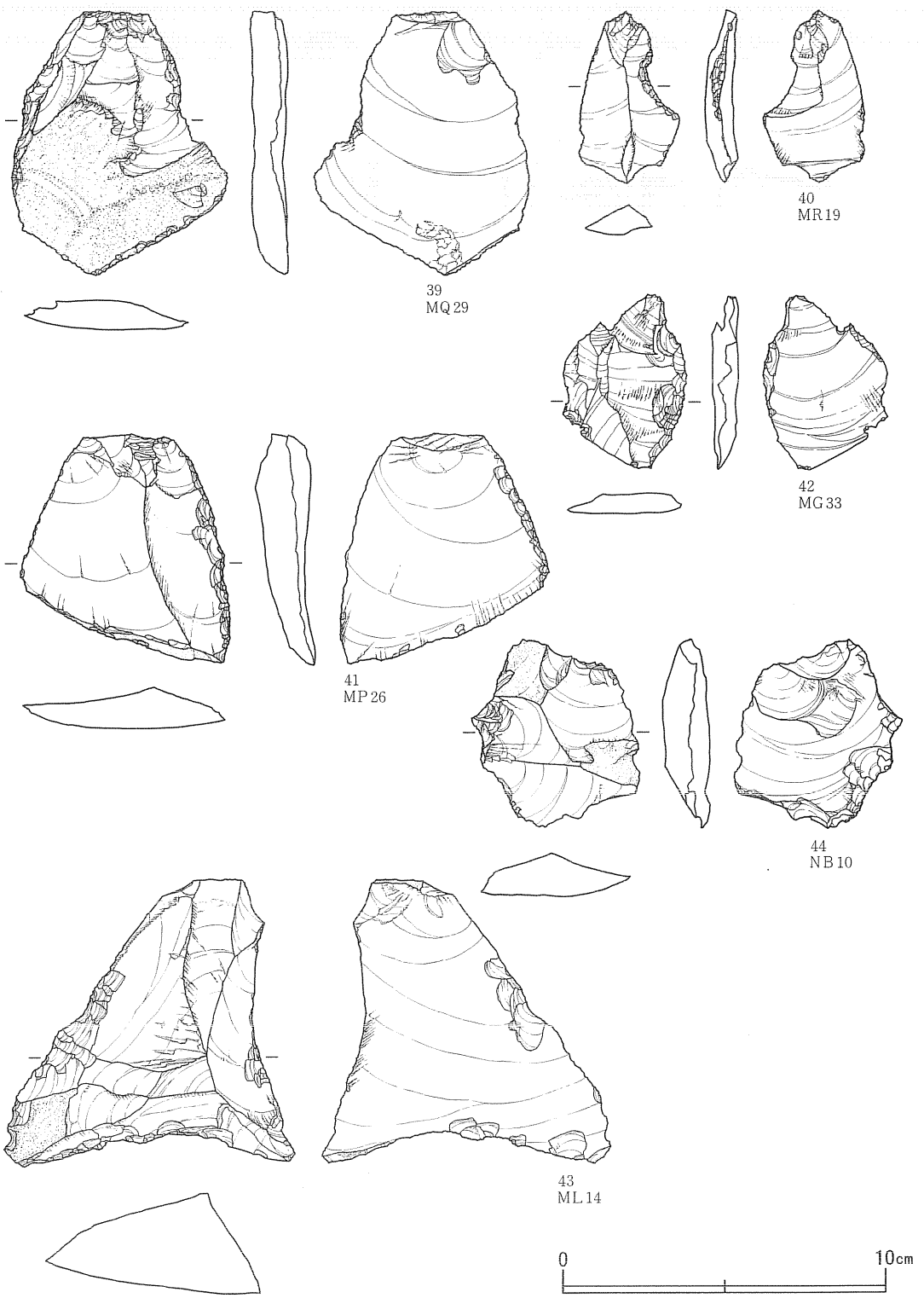
第152図　縄文時代の石器（3）石匙・篦状石器



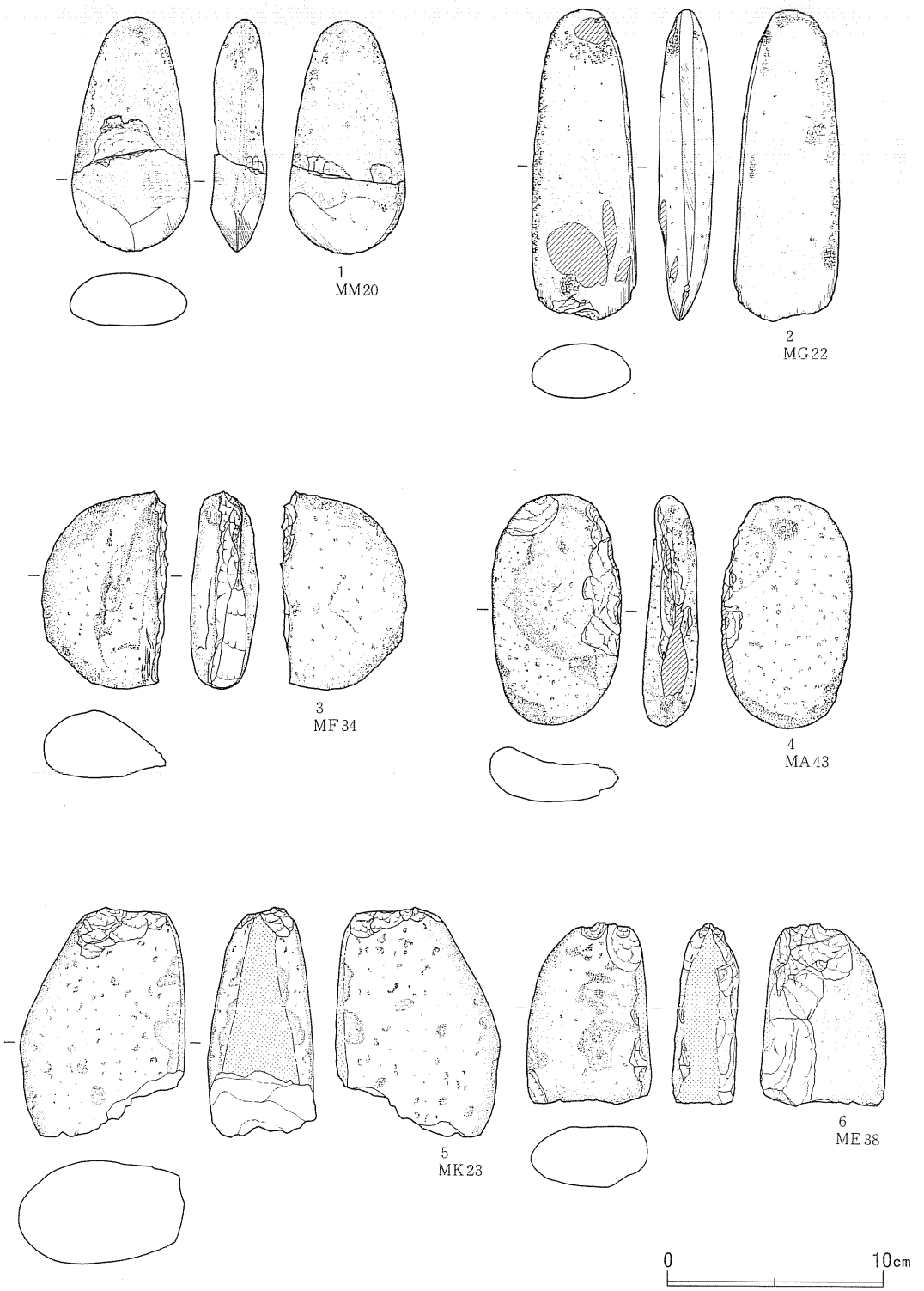
第153図　縄文時代の石器（4）篦状石器



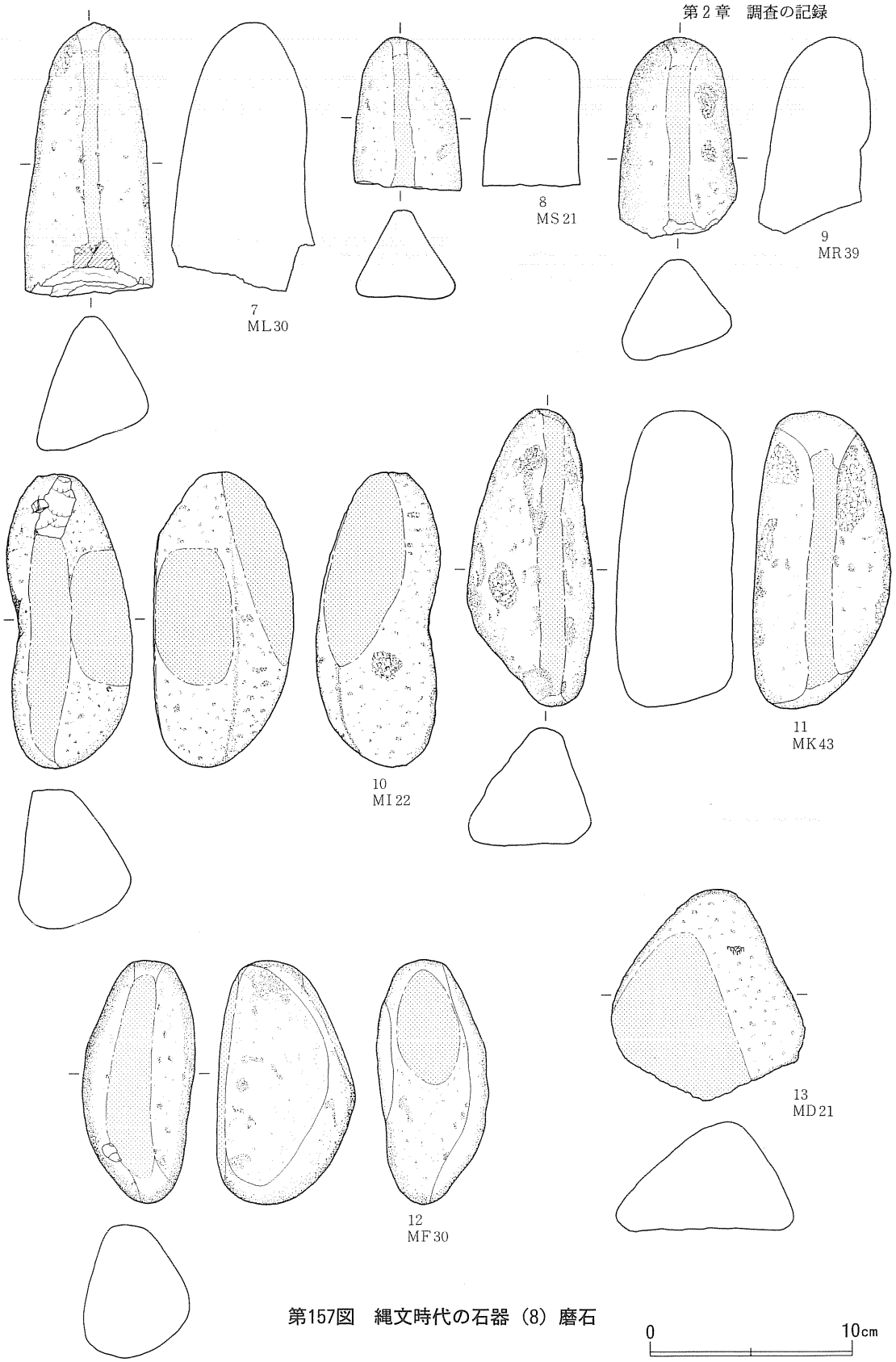
第154図　縄文時代の石器（5）削器



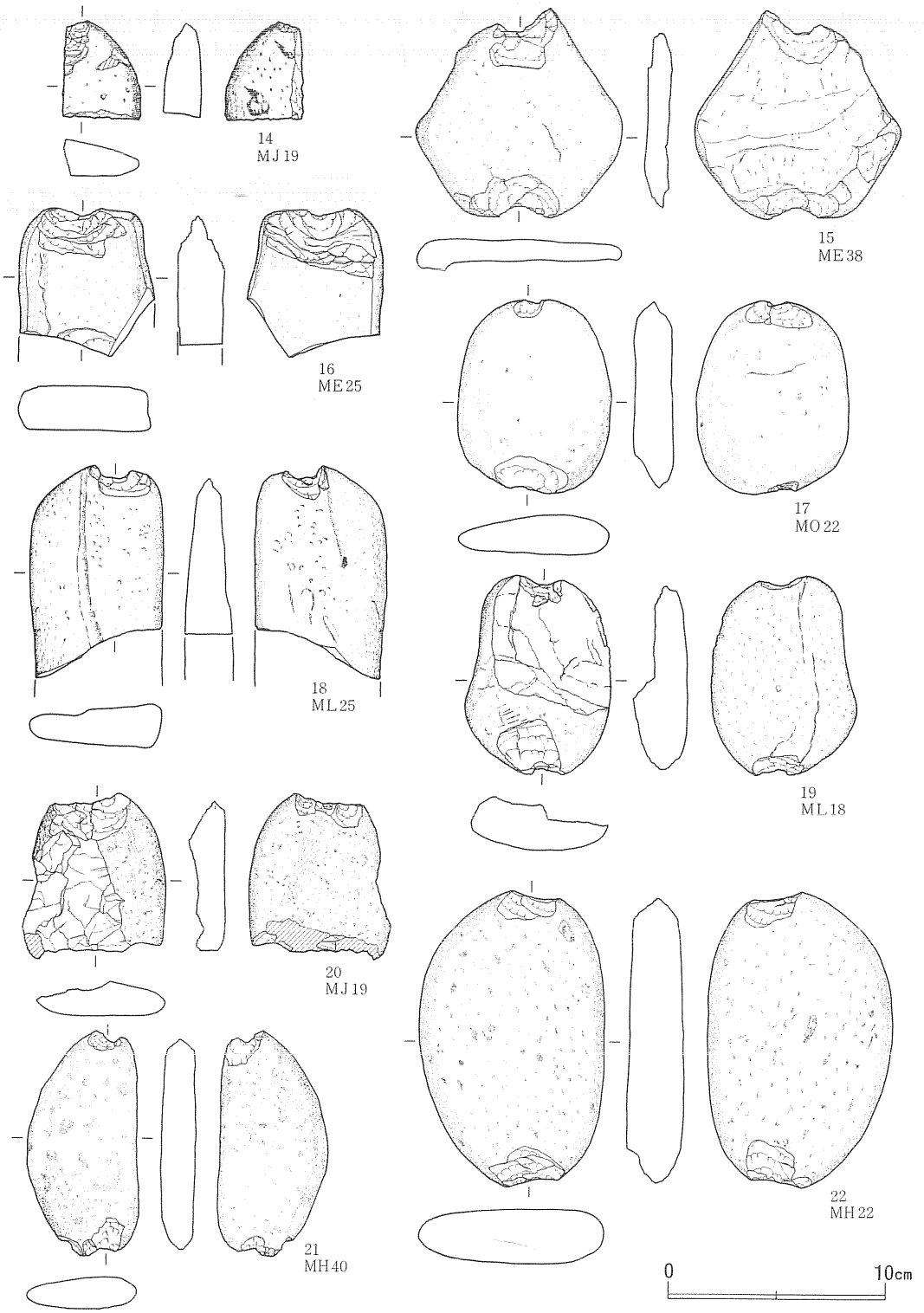
第155図　縄文時代の石器（6）削器



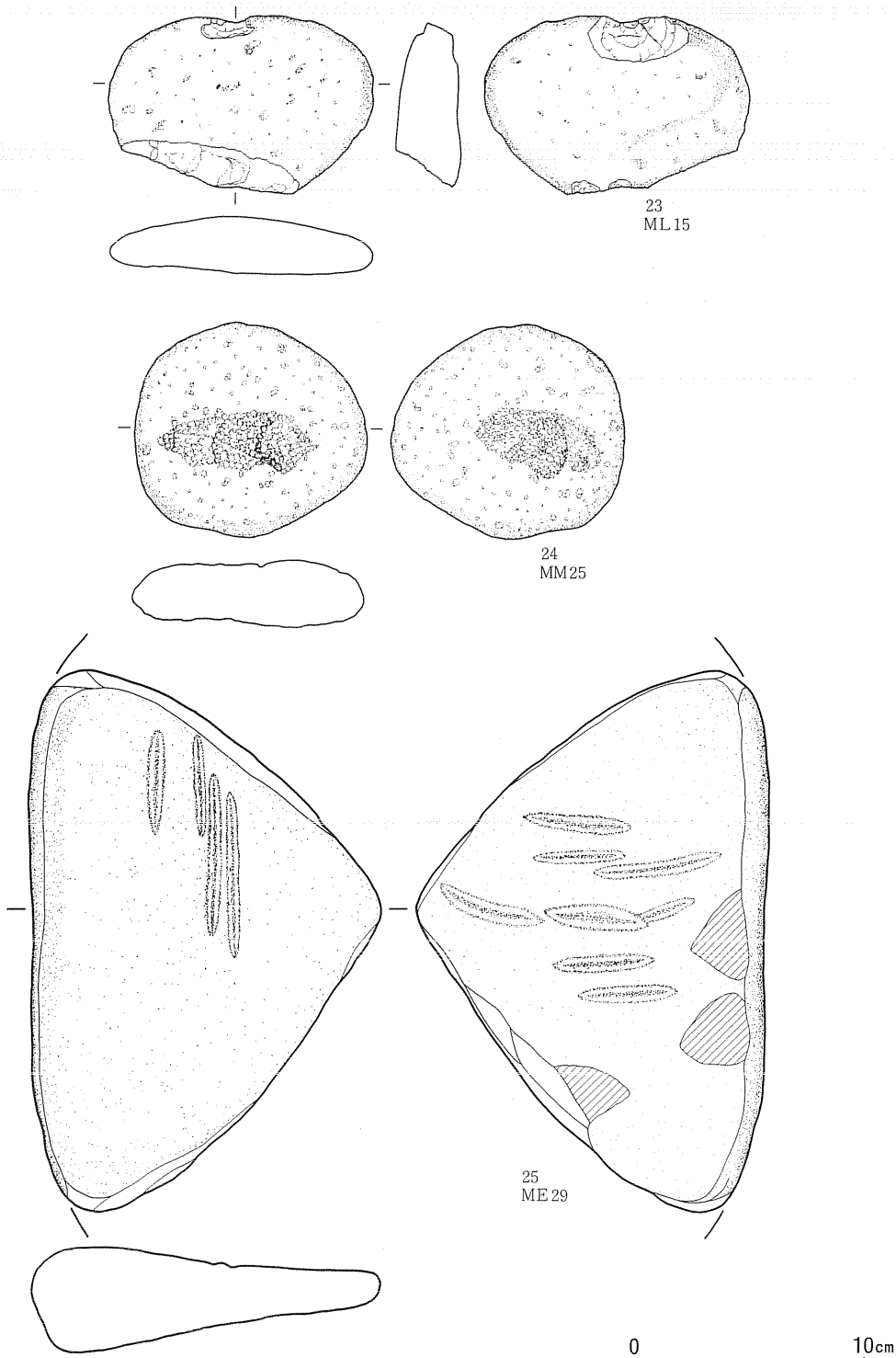
第156図　縄文時代の石器（7）磨製石斧・礫刃器・偏平打製石器



第157図　縄文時代の石器（8）磨石



第158図　縄文時代の石器（9）石錘



第159図　縄文時代の石器（10）石錘・凹石・砥石

第３節　時期不詳の遺構

（１）焼土遺構

SN01（第160図）

調査区南端に近いＭＲ11グリッドに位置する。Ⅱ層上位で径30×７㎝の焼土の広がりを検出し、周囲を精査した結果、下部に径１ｍ前後、深さ８㎝程の円形の掘り込みが存在することを確認した。掘り込み内の覆土は黒色土を主体とし、焼土粒の混入は認められず、また遺物もない。［小林］

SN02（第160図）

調査区南端に近いＭＰ12グリッドに位置する。Ⅱ層上面で径10㎝前後の比較的小さい焼土の広がりを検出した。周囲を精査したが掘り込み等、本焼土遺構に付随しての施設の確認はなく、また遺物も出土していない。［小林］

SN03･06･08（第160図）

ＭＮ16・17、ＭＬ17グリッドのⅡ層上位～中位で３ケ所の焼土面を確認した。これらの焼土面の広がりは長径50～150㎝前後の不整形である。このうちＳＮ06の確認面は他に比べ相対的に下位である。これらの焼土遺構は比較的隣接して存在し、周辺には他の遺構がほとんど認められない。これらのことから、これらの遺構群は相前後して形成されたものと推定するが、その時期や具体的な性格等は不明である。［榮］

SN21･22･28･29･31（第161図）

ＭＰ31・32、ＭＱ32・33グリッドで大きくは計５ケ所の焼土面を確認した。このうちＳＮ31はⅠ層中で、他はⅡ層中で確認した。ＳＮ31は長径40㎝前後の不整楕円形に焼土面が広がり、焼土中には径１㎝前後の炭化物が比較的顕著に含まれている。本遺構はその確認面から近現代の所産の可能性が考えられる。

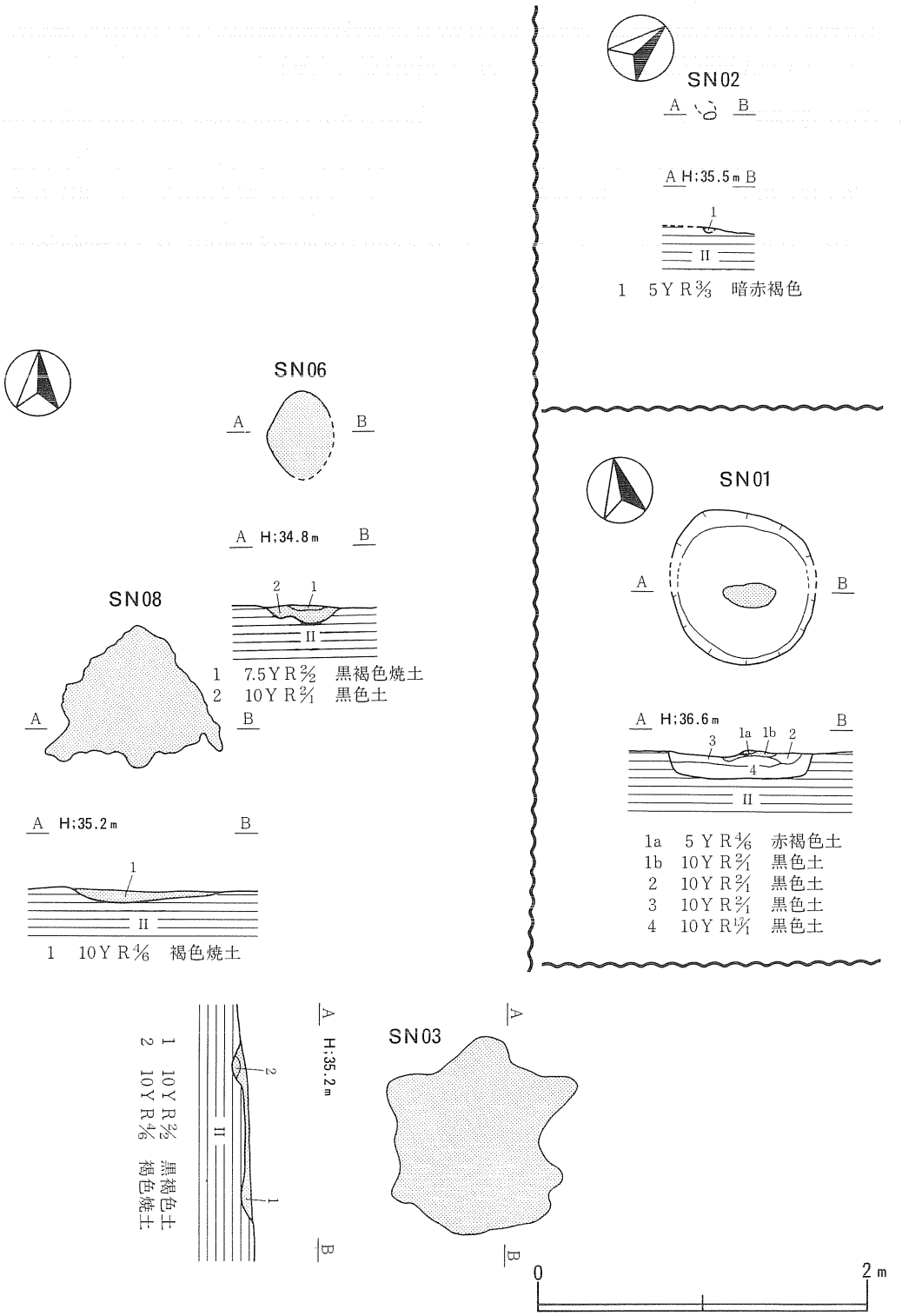
一方、後者の焼土遺構群は、その焼土面の広がりに大小があり、焼土化の程度もＳＮ21・28は相対的に強く、ＳＮ22・29は弱いという相違がある。しかし、比較的狭い範囲に集中して存在することから、基本的に一連の遺構群と考えられるが、時期・性格等は不明。［榮］

SN34（第161図）

ＭＮ38グリッドⅠ層中で確認した。現状で径10㎝程度の極めて小規模な焼土面である。焼土下に掘り込みは認められない。本遺構は確認面から、古代以降の所産とみられるが、詳細な時期、性格等は不明である。［榮］

SN38（第161図）

ＭＭ・ＭＮ38グリッドに位置する。Ⅱ層中で焼土を検出したため、ベルトを設定し、掘り下げを行った。その結果、面的には確認できなかったが、ベルト土層断面の観察で、焼土下に深さ12㎝前後の擂り鉢形の掘り込みが存在することが認められた。掘り込み平面形は推定で長径



第160図　SN01・02・03・06・08焼土遺構

64cm前後の楕円形を呈するものと想定される。覆土は4層に分かれる。1～3層は掘り込み覆土が焼土化した層であるが、全体にしまりは弱い。4層は明瞭に焼土化していないが、僅かに焼土粒子を含んでいる。掘り込み内からの出土遺物はない。[榮]

SN51（第161図）

ＭＨ40グリッドに位置する。遺構形成以前の倒木痕を長径180cm、短径110cm、深さ28cmの不整楕円形に掘り込み、その掘削土を埋め戻した後に、その上面で火が焚かれている。掘り込み内の覆土は5層に分かれる。このうち、1層は倒木痕中の基本層序Ⅲ層に、2～5層は同じくⅡa・Ⅱb層などにそれぞれ由来する埋め戻し土と認められる。そのうち、1・2層が焼土化しており、特に1層上面は極めてよく焼けしまっている。

本掘り込み中からの出土遺物はなく、その時期は不明である。ただし、本遺構が掘り込んでいる倒木痕には、Ⅱa層の流入が認められる。このことから、この倒木痕の生成、さらに本遺構の形成はⅡa層生成以後とみられ、その上限は縄文時代中期まで溯らないと考えられる。[榮]

SN48・49・50・62（第162図）

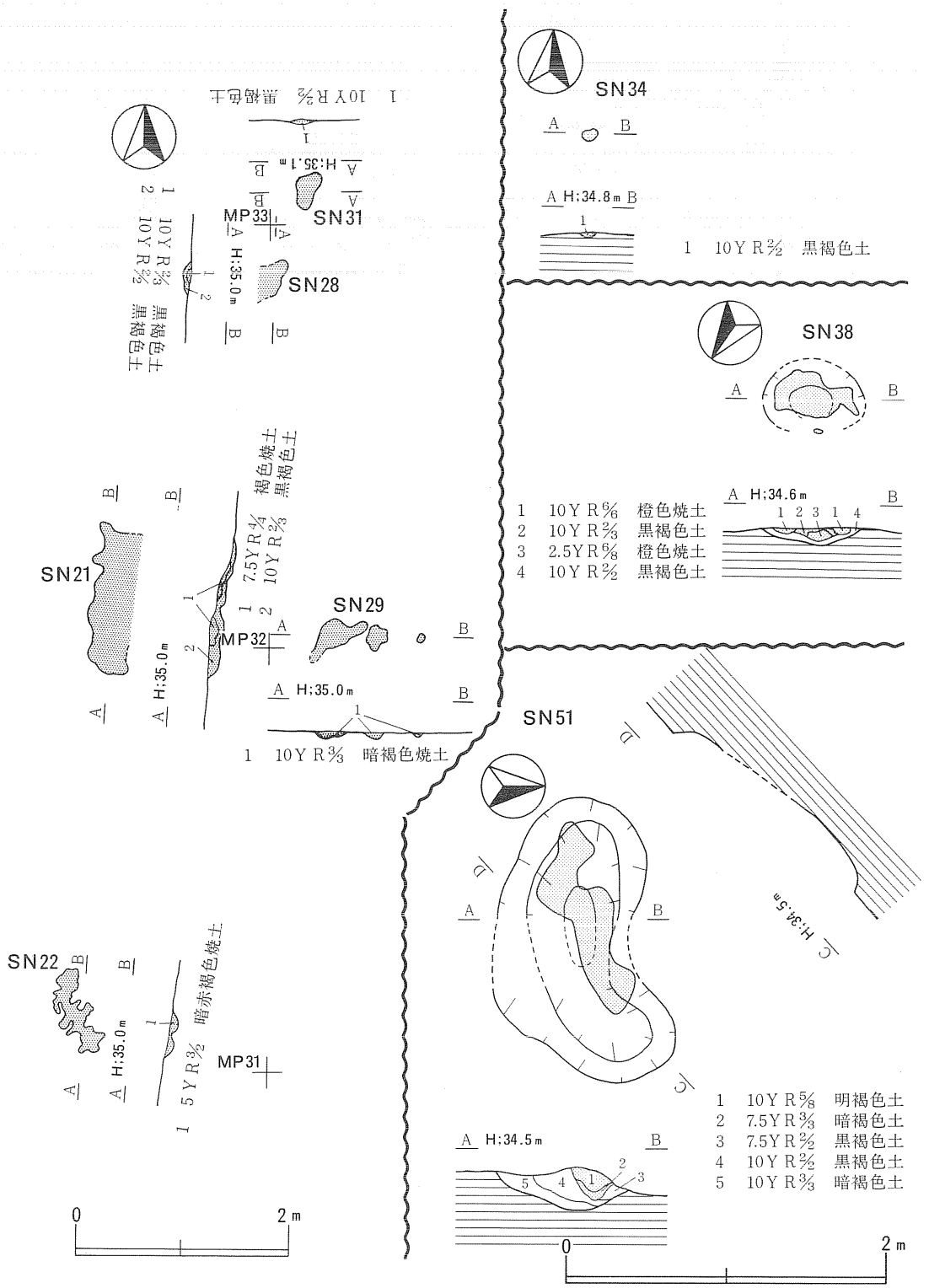
調査区中央南寄り最低位部ＭＪ28グリッドに位置する。計6箇所の焼土がSD65と同じくⅡa層上面で検出されたが、便宜的に4つの遺構群として調査した。SN48は110×20cm、SN49は60×30cm、SN50は50×30cmの大きいもの1箇所と30×10cmの小さいものが2箇所、SN62は30×10cmのいずれも不整形の焼土の広がりである。焼土はSN50を除いてⅡa層にとどまっており、焼土化の程度は弱い。SN50はSKT58の覆土上に形成され、他に比べてやや強く焼土化している。これらの焼土遺構群は確認面が同一で、互いに近接していることから一連の遺構と判断され、南側に延びて検出されたSD65の構築時期と近い時期に置かれるものと推定されるが、出土遺物もなくその性格の詳細は不明である。[小山内]

SN53・54（第162図）

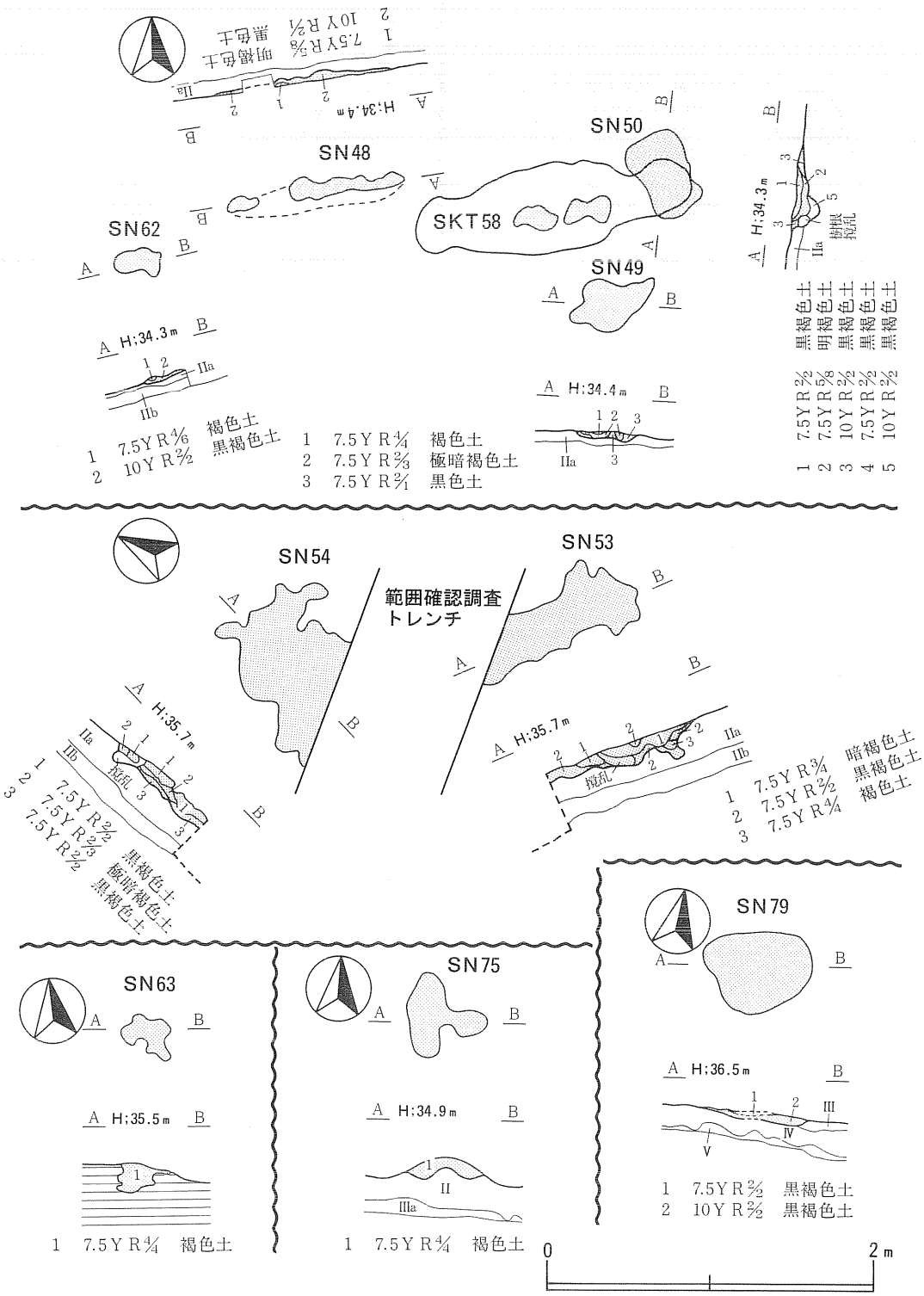
調査区南西縁、ME25グリッドに位置する。検出地点は北東方向に比較的急な傾斜で降りる斜面上である。確認面はⅡa層上面である。SN53は110×40cm、SN54は100×60cmの不整形に広がる焼土であるが、両者の中間を範囲確認調査時のトレンチが切っており、本来一続きの遺構であった可能性もある。焼土化の程度は強いものの、その深度はⅡa層中にとどまっている。本遺構からの出土遺物はなく、その帰属時期および性格等の詳細は不明である。[小山内]

SN63（第162図）

ＭＢ38グリッドⅡb層中で確認した。36×26cmの不整形に焼土が広がっている。焼土は確認面から20cm近く下まで形成されているが、土層断面の観察では明瞭な掘り込みは認められない。焼土は風化が進んでいるが、しまりは強く、現位置で被熱によって形成されたものと考えられる。[榮]



第161図　SN21・22・28・29・31・34・38・51焼土遺構



第162図　SN48・49・50・62・53・54・63・75・79焼土遺構

SN75（第162図）

ＭＦ30グリッドⅡa層中で確認した。現状で52×46㎝の不整形に焼土面が広がる。１層は比較的よく焼土化し、径５㎜前後の炭化物を含んでいる。本焼土面の下位のⅡb層中より第Ⅱ群土器などが出土していることから、本遺構は縄文時代前期よりも後出のものである。[榮]

SN79（第162図）

ＭＡ•ＭＢ31グリッドⅡ層中で確認した。62×54㎝の楕円形に焼土面が広がっている。１層はよく焼けて赤変が著しい焼土層で、２層も被熱によって堅くしまっている。また、２層中には焼土粒子の他に植物根と思われる残りの良い炭化物を包含しており、このことから本遺構は比較的新しい時期の所産である可能性が強い。[榮]

SN59•60•61（第163図）

調査区西端のＭＡ33•34、ＬＴ34グリッドに位置する。西から東へ傾斜する斜面上のⅡa層中において12箇所の焼土の広がりを検出した。焼土は大きく便宜的に３つのブロックに分けられ、南東側から59、60、61と遺構番号を振り当てた。59は20㎝から80㎝の５つの不整形の焼土の広がりからなる。最も東側にある焼土の広がりに対応してその下部には径65×75㎝の掘り込みが検出された。掘り込みはⅡb層上面から行われ、底面はⅢ層中に作られている。断面形は鍋底形を呈し、底面北寄りにさらに凹む部分が確認された。掘り込み覆土は焼土の細粒を混じえた黒褐色土からなり、覆土形成と上位の焼土化が同時になされたことが窺える。59の北西側にある60、61は10㎝から50㎝の焼土が、それぞれ２箇所、５箇所含まれている。いずれもⅡb層の焼土化したものであり、60では一部Ⅲ層まで及んでいる。

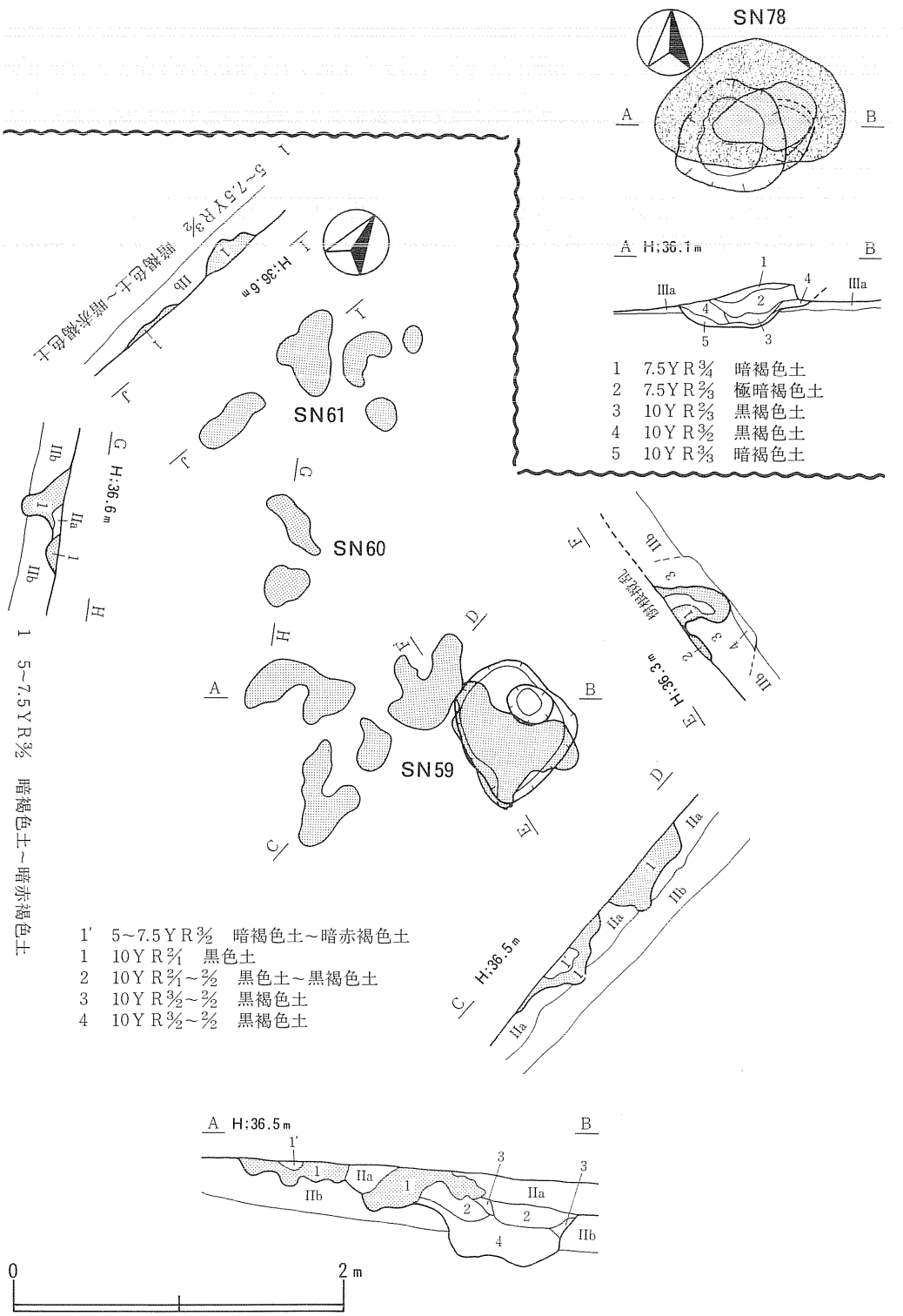
これらの焼土群は焼土化の及ぶ深度等に違いが認められるものの、全体が３ｍほどの範囲内にあって互いに近接していることから、ほぼ一連の遺構群と考えられる。Ⅱa層中での確認であり、おそらくは古代以降の所産と推定されるが、共伴した遺物もなく性格等詳細は不明。[小林]

SN78（第163図）

調査区東端のＭＥ・ＭＦ28グリッドに位置する。調査区東部畑地にトレンチを設定し掘り進んだ結果Ⅱb層上面で焼土を検出した。周囲には木炭粒の散布が認められ、精査の結果、Ⅲa層上面で焼土、木炭粒の広がりに対応した掘り込みのプランも確認された。土層観察から掘り込み面はⅡb層上面であることが判明したが、本遺構の位置する箇所では畑地の深耕がⅡb層にまで及んでおり、本来の構築面はさらに上位にあったと推定される。

下部掘り込みの平面形は東西方向80㎝、南北方向57㎝を測り、東側は幅10～18㎝のテラス状に張り出している。確認面からの掘り込みの深さは10～15㎝、テラス部分では５㎝を測る。断面形は鍋底形を呈するが、径40～45㎝の不整円形となる底面はほぼ平坦である。

埋土は５層からなり、１層が焼土、２層にも焼土粒が混じる。３～５層は堅く締まっており、



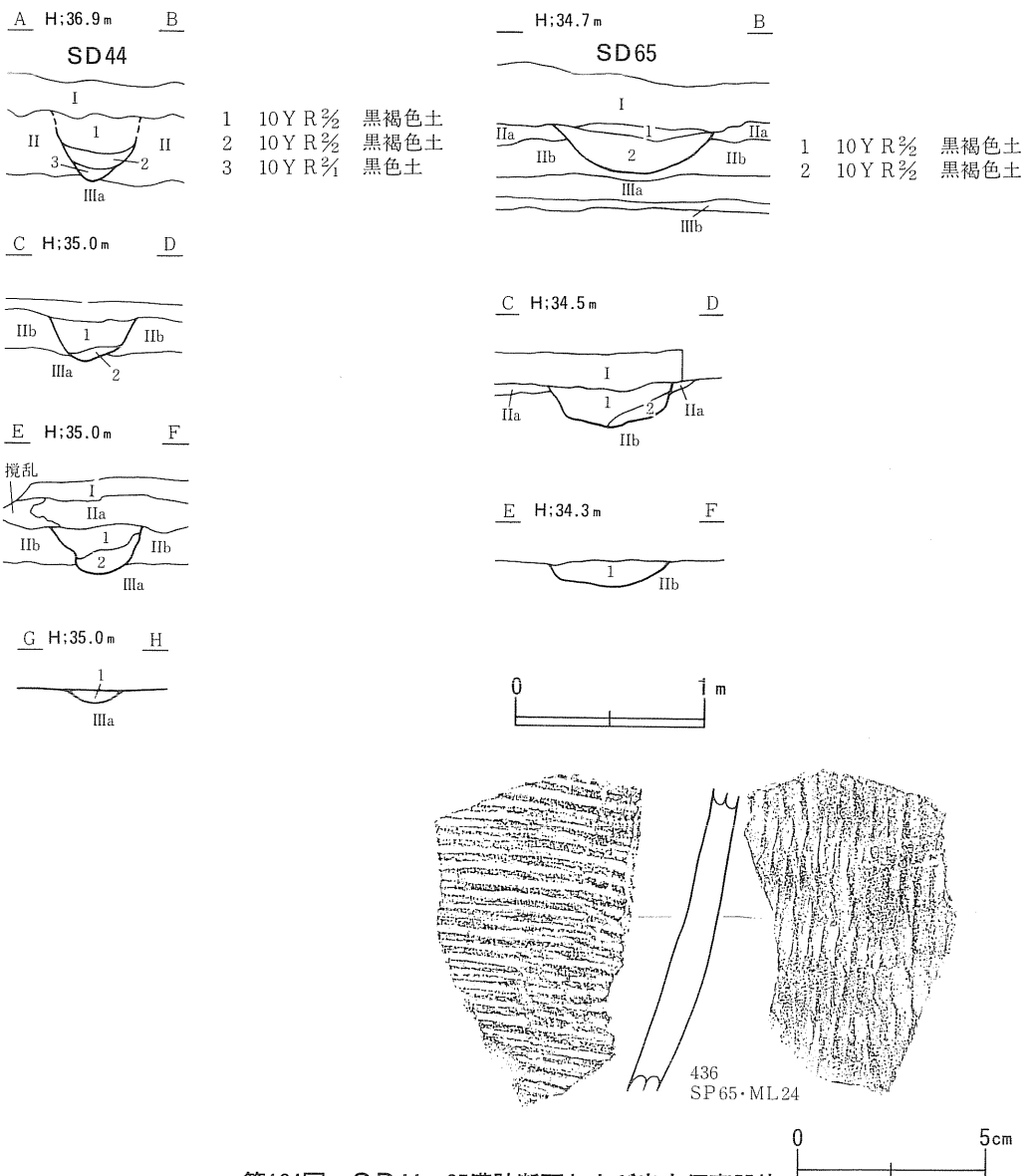
第163図　SN59・60・61・78焼土遺構

人為的な埋め戻しと思われる。本遺構から遺物は出土せず、その正確な帰属時期は不明であるが、構築面がⅡb層より上位に想定されることから、古代以降の時期と認められよう。［小山内］

（２）溝跡

SD44（第５図、第164図）

40ラインから80cm前後北側でほぼ東西方向に調査区を横断する。一部後世の削平・攪乱等によって消失しているが、総延長は現状で80ｍを越える。確認面は主にⅡb層上面である。土層断面の観察においても、Ⅱ層がa･bに細分される地点ではⅡb層上面からの掘り込みが認められる



第164図　ＳＤ44・65溝跡断面および出土須恵器片

が、Ⅱa・b層の生成はほぼ同時に進行したとみられることから、本来の掘り込み面はⅡa層中もしくはその上面と考えられる。確認面での幅は30～50cm、確認面からの深さは30cm前後を測る。溝の底面は丸く、壁は比較的急傾斜で立ち上がっている。底面の標高は、調査区中央部のＭＩ・ＭＫ40グリッド周辺が34ｍ前後で最も低く、東西に向かってしだいに高くなり、調査区西端が現状で最も高く、36ｍ前後を測る。この溝底面の高低は、基本的にⅢ層上面の高低と対応している。なお、底面には柱穴もしくは杭穴状の落ち込みは認められない。

覆土はⅡ層起源とみられるクロボク土を主体とし、部分的にⅡb層の粒子を少量含むが、ほかに顕著な包含物は認められない。また、砂あるいはシルト・粘土の混入も顕著でなく、水の影響を受けた堆積とは認められない。覆土中からの検出遺物はない。

本溝は上述した溝底面の高低および覆土の特徴から水路とは認められず、基本的にある種の区画のための施設と考えられる。本遺跡では、溝の周辺には関連するとみられる遺構・遺物がほとんど存在せず、本溝は集落の区画施設とは認められない。現状では明確な根拠はないが、畑の開墾等に関係する区画施設であった可能性があろう。推定される本来の掘り込み面は古代の溝ＳＤ65とほぼ共通するとみられるが、その時期の特定は困難である。[榮]

SD65（第５図、第164図）

調査区中央から南よりの最低位部付近、ＭＫ28グリッドからＭＬ24グリッドまで南北に延びる延長19.2ｍの溝跡である。確認面は主にⅡa層上面である。調査区最低位部分は土壌化の程度差によるⅡa、Ⅱb層の区別が比較的容易に行える地点であるが、本遺構はこの両層をきっており、遺構の構築はⅡa層上面においてなされたものと判断される。確認面での幅は60～80cm、確認面からの深さは15～25cmを測る。溝の断面形は鍋底状を呈し、なだらかな傾斜で立ち上がる。底面の標高は34ｍ前後とほぼ一定しており、現状では傾斜の方向を特定できるような状況にはない。なお、ＭＬ25グリッドにおいて縄文時代のＳＫＴ67陥穴をきっている。

覆土はＳＤ44同様、Ⅱ層起源のクロボク土を主とする黒褐色土により構成される。全体に幾分シルト～砂質気味で、Ⅱb層の崩落土が混入する部分もある。覆土の由来はＳＤ44と同様であるが、水の影響を受けての堆積状況が想定される。なお、ＭＬ24グリッド内の本遺構覆土中に須恵器片が検出されている。[小山内]

出土した須恵器片は大甕胴部片であり、表面は横走あるいは斜行、内面は縦走する条からなるタタキ目が施されて整形されている。表面、及び破断面での摩滅が認められ、本来的位置を保って遺存したものではなく、損壊後の時間的経過、位置の移動が推定される。

本遺構はその南北延長を確認できなかったが、覆土の性状から推して水路であった可能性が高い。クロボク土が厚く堆積する遺跡最低位部分でそのプランが残ったものと推定される。水路であった場合、検出部分は遺跡最低位部に位置するため、流水は本遺構付近で滞留したもの

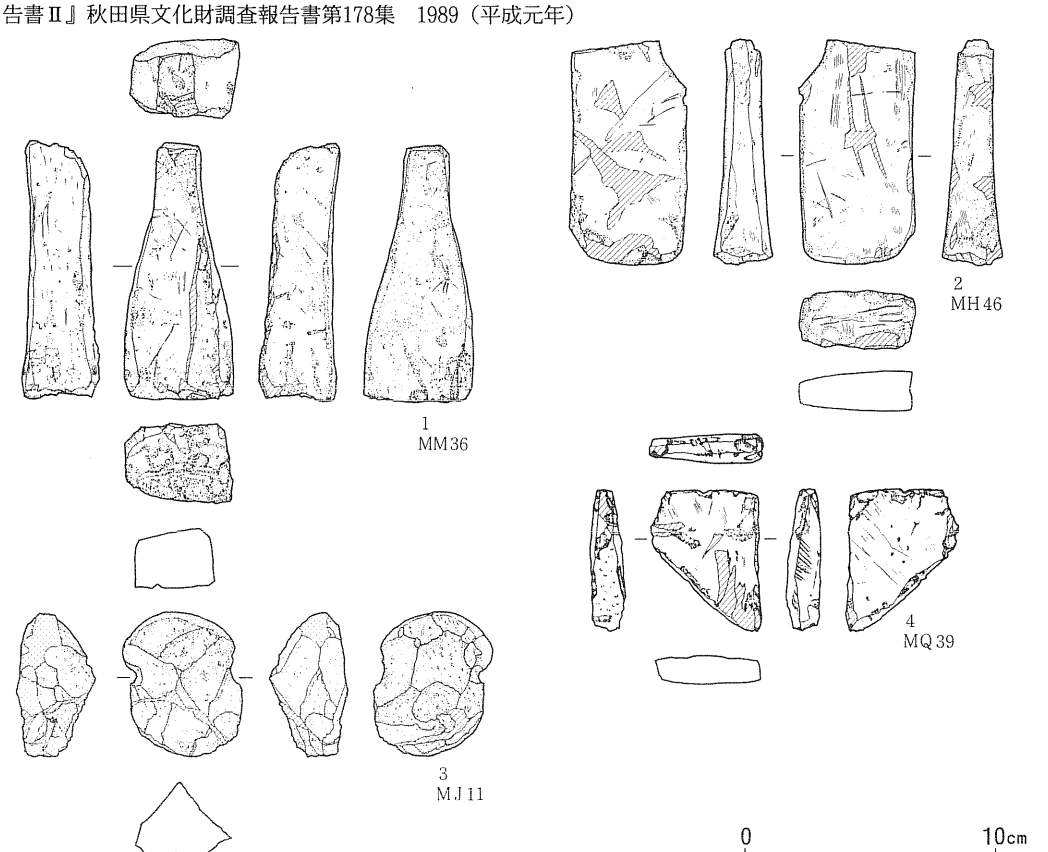
と想定されるが、出土した須恵器片の摩耗もそのような状況下で遺構内に残ったことを指示している。調査区内には出土した須恵器片を残したような古代の活動痕跡は明確には残されていないが、出土位置が南側に寄っていることから、その本来的位置は調査区外南西側の高位部分に求められるのではないかと推定される。[小林]

（３）　遺構外の遺物

時期不詳の遺物として遺構外から砥石３点、および軽石製の浮子１点が出土している。砥石はいずれも表裏面、両側面の四面が砥面として使用されている。浮子は、楕円礫の両側縁を刃物によって大きく削り込んで、結縛のための抉り部を作りだしている。米代川河口域の沖積地には、十和田火砕流によって噴出された軽石が米代川によって運ばれ堆積しているが、本遺跡と同じく成合台地上に立地する平安期の遺跡では、こうした軽石が例えば須恵器窯の焼き台等に利用されていることもある。(註1) 本例もそうした一例であろう。[小林]

註

（１）秋田県教育委員会「十二林遺跡」『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第178集　1989（平成元年）



第165図　時期不詳の遺物ー砥石・浮子

第3章　まとめ

第1節　旧石器時代の遺物群について

（1）　第Ⅰ群石器について

第Ⅰ群石器のうち両面調整石器の削片48は、その形態上の特徴から細石刃を取得した石核の最初の段階の削片と判断され、近接した地点で同一母岩と判断された両面調整石器製作時の剥片も出土している。しかし、本来生産されたであろう細石刃の出土はなく、工程上からは石核整形が行われた後削片48のみが遺跡内に残され、したがって石核自体は他所へ搬出されたものと推定される。また、削片48は甲板面とは逆側から施された樋状剥離、さらにその樋状剥離面を打面として加えた側面への剥離という特徴的な再加工が施され、細石刃の製作工程上に生じた石器以上の存在－具体的には彫器を想定－であることを示している。

一方、同じく近接した地点で2点の周縁加工掻器（49，47）が出土している。(註1) 遺跡内では同一母岩から得られた他の石器を検出できず、これらの掻器は遺跡外から製品として搬入され、出土地点で削片48とともにそれらを用いた何らかの作業が行われた可能性を示している。

ところで、近年の細石刃を主体とする石器群、とりわけ湧別技法をめぐっての調査・研究は、例えば山形県角二山遺跡の石器群分析が、湧別技法に対する評価を「幾つかの器種の素材をも提供する総合的な素材生産を行う技法」(註2)、「トゥールの素材供給における技術構造」に削片や剥片も「きわめて効率的に取り込」んだ技術であり、「（その出現によって）石器組成のみならず、トゥールの素材供給においても大きな変化がもたらされた」(註3) と説くように、当該石器群の製作技術体系が、単一の器種－細石刃－のみを目的としたものではなく、複数の器種製作に有効に働いた複合した技術体系であったことを強く支持する方向へ向かっている。(註4)

東北北部では青森県大平山元遺跡の石器群から三宅徹也氏によって復元された大平山元技法が、「扇形削片」を目的的剥片とする技法として提唱され、「湧別技法の母胎」と評価されて(註5)以来、当該時期の良好な資料の検出はない。しかし、上に引用したような現在の当該時期の石器群に対する評価は、本遺跡の第Ⅰ群石器の属性および組成を考える上でも、また後述するように第Ⅱ群石器との関係を考える上でも示唆的である。いずれ、類例の増加をまって検討すべき課題が多いが、本遺跡第Ⅰ群石器は、東北北部の旧石器文化末期におきた技術体系の変化の中で生じた一例として捉えておきたい。(註6)

（2）　第Ⅱ群石器について

（2）－1　「ナイフ形石器群」としての第Ⅱ群石器

第Ⅱ群石器はナイフ形石器、彫器、彫器削片、掻器、錐器、削器、剥片およびチップ、石核、環状石製品からなる。旧石器時代の中にあっては、ナイフ形石器が特徴的に組成される後期旧石器時代の「ナイフ形石器群」[註7]として評価される石器群である。

本遺跡のナイフ形石器は、東北地方の他の遺跡と比較し、一遺跡の資料としては変化に富む内容をもっている。その特徴は①素材には縦長剥片が用いられ、②側縁整形の加工には2種類の細部加工（二側縁のうち一方はその全辺、他方は基部のみと、基部に限って二側縁、加えて先端部の一側縁を加工）があり、裏面（腹面）にも平坦加工を施すものと無加工のものの2種があり、③その大きさには大形、中形、小形の3種がある、と要約される。

このうち、①については第Ⅱ群石器の剥片剥離技術に関係する特徴であり、先述した。また、③については素材の大きさから石器群の組成にまで関わる特徴であるが、素材の大きさについても（2）－3のg剥片で述べたとおりである。②はいわゆる石器型式に関わる特徴であるが、この点について若干検討したい。

安蒜政雄氏はナイフ形石器の形態を分類するなか、素材への刃潰し加工の部位に着目し、基部加工のものを「第1形態」、二側縁加工を「第3形態」とし、「第1形態」は先端部に直線的な稜がはしり刃先が尖る1a「直線稜形」と、先端部に三叉する稜線がY字状にあり刃先が平たになる1b「三叉稜形」に、「第3形態」は刃部の長さおよび刃部と刃潰し加工縁の角度から3a、3b、3cに細分し、「第3形態」の細分を「茂呂型」、「切出形」、「台形状」の三つのナイフ形石器に当てた[註8]。さらに、岡村道雄氏は安蒜氏分類の「第1形態」を従来の石器型式にあて基部加工1a「直線稜形」を「杉久保型」に、1b「三叉稜形」を「東山型」に対比した[註9]。

以上の分類と従来の石器型式への類比にしたがえば、本遺跡のナイフ形石器には1a「基部加工・直線稜形」の「杉久保型」と3a「茂呂型」の2種類があることとなる。554＋556、530、933が前者にあたり、1748、650、506、1359、609、1426が後者にあたる。

しかし、はたしてこうした分類と従来の石器型式に当てるだけで、本遺跡のナイフ形石器の特徴を有効に表しうるだろうか。確かに、”典型”的といえるような例もある。1748、650は素材の縦長剥片を斜めに使って大きく整形するため、刃潰し部分は急斜度でかつ緩い弧を描き、基部と刃部は明瞭な角度（側刃角）をもって作られる。これらは「茂呂型」に相当させうるかもしれない。だが、形態上これらと近いと思われる1426の刃潰し部分の細部加工は、急斜度でありながら実際には石核の稜形成のための連続した剥離面に重ねられたもので、折り取られたと思われる刃部側の基部以外に素材の形が大きく変えられた形跡はない。また、一側縁全辺に加工を施してはいても加工の角度が浅く、素材の形の大きな変更は先端部あるいは基部に限られるような場合（1359、506）もある。基部側の形状修正が大きい例には「杉久保型」に当て得る530も該当する。また、素材形状の変更が先端で比較的大きい場合であっても、基部に明

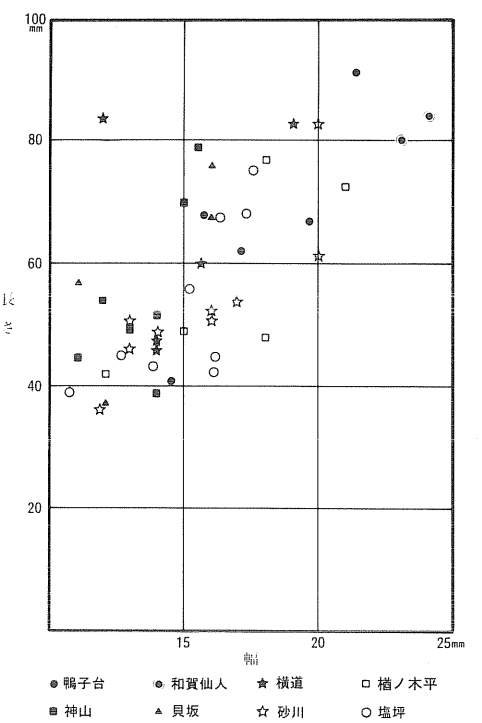
瞭な打面を残す例もある（1359）。すなわち、素材形状の修正という点では「基部加工」の「杉久保型」より、「二側縁加工」の「茂呂型」が顕著であるはずだが、本遺跡のナイフ形石器をみた場合、必ずしもそうした区分は対応しない。「二側縁加工」のナイフ形石器にも素材形状の修正の度合いの大きいものと小さいものとがあり、その変化は「基部加工」のナイフ形石器を含めて漸移的である。

第169図は第Ⅱ群石器と関連するであろう、他遺跡のナイフ形石器の長さと幅をグラフ化したものである。(註10) グラフ化には完存品の実測図からの数値を用いた。これを見るとナイフ形石器の大きさにはいくつか変化があるものの、「茂呂型」「杉久保型」とされるものに、長さと幅の比で極端な相違はない。ただし、山形県横道遺跡の一例が特異な値を示す。おそらく、この横道遺跡の一例に見られるような場合が、「杉久保型」とされるものの典型例であろう。従来「杉久保型」のナイフ形石器の典型とされた神山、貝坂遺跡の例も、幅の狭い形態のものが多い。この種のナイフ形石器は素材自体が極めて細身の縦長剝片であり、基部および先端部の加工とも極めて限られた僅かの部位に施される特徴をもつ。

このように見た場合、本遺跡のナイフ形石器には典型的な「杉久保型」は含まれない。基部加工のナイフ形石器も全体的な傾向でみれば、二側縁加工の加工部位の限定というかたちで捉えられる。本遺跡例の類例には岩手県和賀仙人遺跡例などをあげ得る。(註11) また、ナイフ形石器の型式学的な位置づけを考えれば、554＋556、530のナイフ形石器は秋田県下堤G遺跡、(註12) 山形県金谷原遺跡(註13)などの基部加工ナイフ形石器から発展し、二側縁加工ナイフ形石器の特徴も併せて出現したものと見ることができる。したがって、おそらくは下堤G遺跡、金谷原遺跡よりは後出で、横道遺跡などと並ぶ段階に位置づけられよう。

次にその他の石器についても簡単にみておきたい。

彫器は、1類が「Z字形の刃先」をつくる「神山型」彫器、2類が「小坂型」彫器に当てられる。素材の剝片はナイフ形石器に比べ多様であるが、刃部の作出に関しては規格性が強く、とくに1類の彫器は全て左刃であることも含め、(註14) その傾向が顕著である。「神山型彫器」の標識遺跡である新潟県神山遺跡、またその組成が有名な山形県横道遺跡の資料を実見する機会を得たが、(註15) このどちらの遺跡例に比較



第166図　ナイフ形石器の長幅

してもナイフ形石器とは対照的に本遺跡の彫器の規格性は強いように見受けられる。おそらく、この種の彫器はナイフ形石器の地域的変異を越えて存在したものであろう。(註16)

また、彫器と対応して、本遺跡では縦長剥片を折断した「折断剥片」が特徴的に認められた。石器製作の「折断技術」については、個別資料の認定に不確定な要素が含まれることが、既に指摘されている。(註17) しかし、一群の石器の全体的な傾向を数量的な保証というかたちで捉えることによって、その技術および石器の目的性を積極的に評価し得るだろうことは、先述の通りである。この種の石器が初めて注意されたのは米ヶ森遺跡においてであり、(註18) 福島県塩坪遺跡での(註19) 再確認を経て、編年的指標となる組成項目に加えられている。(註20) 本遺跡では、そうした組成論上の問題に加えて、先述したような彫器との対応を機能論的にも評価できるのではないかと考える。

掻器については若干の変異があるものの、細身の縦長剥片の先端に刃部を加工した例（547, 624＋689, 1528）を定型的な例として摘出できるだろう。素材縦長剥片の大きさの差や刃部の作りの精粗の差はあるが、類例は米ヶ森遺跡（1977『報告書』第31図1, 2）にもある。掻器（エンド・スクレイパー）の組成は「ナイフ形石器群」の中でも時間的に新しい指標であることは早く指摘されており、(註21) 本遺跡の例もその時注意された「先刃式掻器」の範疇にある。(註22)

錐器については本遺跡のような例が、縄文時代の錐器のように錐部の回転運動によって対象物に穿孔し得たかどうかは、錐部先端の観察によっても明確にしえない。むしろ、素材剥片への錐部の作り出しのための特徴的な加工が、刃部をきわめて限定した掻器として機能したことを示しているともいえる。類例としては、和賀仙人遺跡のナイフ形石器とされた一例（『報告書』第9図－5）が近く、また、横道遺跡の「鼻面状掻器」も刃部の大きさや刃部作り出しの抉りの作出に違い（本遺跡例とは逆に素材背面稜からの加撃で作り出す）があるものの、先端に細長い剥離をいれる点でよく似ている。

Aブロックで出土した環状石製品の類例は、宮城県色麻町大原D遺跡、(註23) 東京都武蔵野市御殿山遺跡などにある。(註24) 大原D遺跡例は凝灰岩製の長径5.7cm、最大厚1.6cmの製品で表裏・側面とも研磨、御殿山遺跡例は径6.6×5.65cm、厚さ17.5mmの砂岩製、と報告されている。また、御殿山遺跡例では明確な研磨面は周縁部に限られ、穿孔部は素材の軟質部分を穿孔箇所に選択したため”石の目”に沿って孔が拡張し、結果、表裏面の一方が他方よりも大きく開口する、と記されている。本遺跡例はこの二例と比較して径で20～30mm、厚さでも10mm前後も大きいが、その製作上の特徴は御殿山遺跡例と近似するようである。穿孔ある石製品として類例の範囲を装身具の部類まで広げれば、千葉県鐘塚遺跡の2点の三角形垂飾様製品（安山岩、砂岩製）も数え上げられる。(註25) この資料は関東ローム第2黒色帯の下層であるⅨ層から出土しており、本資料とは時期的な差が大きい。おそらく、国内の旧石器時代の穿孔石製品としては最も古い事例

にあたろう。また、鐘塚遺跡の資料の紹介者である渡辺氏が引用するように旧石器時代の垂飾品、玉類を出土した遺跡として、北海道湯の里4遺跡[註26]、美利河1遺跡[註27]がある。湯の里4遺跡では墓壙と考えられるピットから5点の垂飾、玉が、美利河1遺跡では2箇所の焼土範囲から計7点の玉が出土している。石材はDunite（大陸の蛇文岩帯に産するかんらん岩の一種）製および琥珀製と報告されている。これらは蘭越型類似の石刃石核を含む石器群に伴う資料である。鐘塚遺跡例は除いたとしても、「ナイフ形石器群」変遷の後半に玉類も含めた穿孔石製品が集中的に認められることは注目すべき事実であろう。

（2）－2　剥片剥離技術、および石器組成からみた第Ⅱ群石器の位置

第Ⅱ群石器の剥片剥離技術には先述したように2つの類型がある。主体となるのは類型1の縦長剥片を目的的にはぎ取る技術であり、主要な石器のほとんどがこれによって製作されている。これに対し類型2の幅広の小形剥片を取る技術は、唯一、削器が製作されている石器である。

このような石器製作の技術に2つの異なる技術が存在する点は、ナイフ形石器群の前半期に特徴的な「二極構造[註28]」のrelicとして捉えられるものであろうか。東北地方の諸遺跡の石刃石器群をその技術基盤の変遷によって配列した藤原妃敏氏によれば、Ⅰ群からⅡ－b群までは石刃技法以外の剥片剥離技術が存在するという[註29]。先に本遺跡ナイフ形石器を金谷原遺跡のナイフ形石器に後出するものとして見たが、藤原氏の細別した技術基盤では金谷原遺跡はⅡ－a群にあたり、それに後続するⅡ－b群には米ヶ森、塩坪遺跡があてられている[註30]。したがって、藤原氏の編年枠をそのままに用いるなら、本遺跡の第Ⅱ群石器は米ヶ森、塩坪遺跡のⅡ－b群の周辺に位置することになる。しかし、ここで注意しなければならないのは、藤原氏がこのⅡ－b群を評価するにあたり、「画一的な石刃で、石器群全体の素材が供給できなくなった段階」とし、その具体的な現れを「同一器種の中での形態の分化と典型的なエンド・スクレイパーの定着」に求めていることである。ここで述べられているエンド・スクレイパーとは、次のⅡ－c群との関連から幅広の縦長剥片を素材としての石器であり、本遺跡の第Ⅱ群石器の掻器のような細身の縦長剥片を素材とするもの（「先刃式掻器」）ではないであろう。本遺跡第Ⅱ群石器では、むしろ分厚い幅広の素材を必要とする「削器」がそれにあたる。そして、それは作業面調整剥片を別とすれば、縦長剥片をとるのとは別に用意された技術、すなわち個体4、個体11、個体13などの剥片剥離技術である類型2によっている。このような状況は「石刃技法とまったく無関係な剥片生産技術が特定器種に結合している[註31]」という藤原氏の評価を米ヶ森遺跡などとは別に示したものといえよう。

ところで、藤原氏の細別ではこのⅡ－b群の後、「形態差をもつ（おもに大きさの点）石刃を一個体の剥離過程で生産することができるようになる段階[註32]」としてのⅡ－c群がおかれ、幅

広の掻器が安定的に組成される山形県南野遺跡[註33]がその代表とされる。このⅡ－c群に相当させうる資料が南外村小出Ⅳ遺跡で得られている[註34]。小出Ⅳ遺跡の個体No.1の接合資料は両設打面の石核から幅広の縦長剥片を連続的にはぎ取っていった資料であるが、遺跡内での初期剥離で得られた剥片は掻器および彫器に加工されている。同じ資料中に接合するナイフ形石器はないが、打面調整および再生を繰り返しより小形化した残核に近い部分の縦長剥片は多く遺跡外に持ち出されており、これにナイフ形石器が含まれていた可能性も考えられる。すなわち、この小出Ⅳ遺跡のNo.1接合資料は、藤原氏のいう「石刃技法の工程は画一的なあり方を呈するが、生産される石刃は大きな形態差（主に大きさの点で）をもち、その形態差に基づいて、素材の使い分けがなされた[註35]」という評価が妥当と受け取られる好資料といえる。

以上のように、ナイフ形石器群後半期の大枠として捉えた場合、藤原氏の各段階は一定の蓋然性をもつものとして適用しうるだろう。本遺跡の第Ⅱ群石器はその剥片剥離技術からみた場合、南野遺跡、小出Ⅳ遺跡よりは一段階前の米ヶ森、塩坪遺跡の周辺段階を想定しうるだろう[註36]。

さて、先にナイフ形石器の類例を見る際、岩手県和賀仙人遺跡例をとり上げた。和賀仙人遺跡ではナイフ形石器のほかに、彫器（「神山型彫器」「小坂型彫器」）、掻器（幅広の縦長剥片素材）、楔形石器などのほか、尖頭器2点が伴っている[註37]。和賀仙人の尖頭器、とくにそのうち「入念な押圧剥離を半両面に施」すA型とほぼ同形の尖頭器は、柳田俊雄氏の報告する福島県背戸B遺跡でも二側縁加工のナイフ形石器にともなって認められる[註38]。柳田氏は背戸B遺跡と、関連する福島県内の遺跡、塩坪遺跡、谷地前C遺跡[註39]、三貫地遺跡（原口地区[註40]）の石器群を比較し、掻器（エンド・スクレイパー）、槍先形尖頭器が欠如する三貫地遺跡から、掻器（エンド・スクレイパー）の組成される塩坪遺跡、そして槍先形尖頭器を特徴的に組成する背戸B遺跡、峠下型細石核を含む谷地前C遺跡の流れを設定するのであるが、このような組成論上の見解にしたがえば、本遺跡第Ⅱ群石器はナイフ形石器を指標としては和賀仙人遺跡と並ぶものの、それよりも古い段階に位置づけられることとなる。また、本遺跡を直接に福島県内の遺跡編年に照らすには、本遺跡例に近似の「神山型彫器」を組成する三貫地遺跡の位置づけが参考ともなろうが、これについては「神山型彫器」の時間的、空間的な広がりをどれほどのものか確定しえないため、詳かでない[註41]。

以上、第Ⅱ群石器の位置づけに関して若干の考察を試みた。一応、現段階では東北北部のナイフ形石器を組成する石器群のなかでは、「東山系石器群」と呼ばれる南野遺跡、小出Ⅳ遺跡よりは古く位置づけられるであろうことを確認した。またナイフ形石器の比較では下堤G遺跡、金谷原遺跡に後続する横道遺跡に近い位置を想定したが、最も近似的な和賀仙人遺跡は組成論的には本遺跡よりも新しく位置づけられるであろうことを確認した。